副担任は借金教師

豚 × 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

副担任は借金教師

【Nコード】

N7036I

【作者名】

豚×2

【あらすじ】

ある日ギルドに帰ってみれば借金がついに1億ドラクマを超えてしまった見た目は大人、頭脳は子供な主人公、鳴守 音来。若干の不安も抱えつつ返済の為に降り立ったのは極東の地 日本。新たな任務はこの国の学校で教師兼広域指導の仕事をする事だった…。

2010/04/20 Arcadia様の『チラシ裏』にてテス

ト投稿

2010/08/21 修正機関開始：現在『取立5回目』まで

2011/01/18 47話

11/13 取立5回目 追加修正+分割

11/25 48話

12/6 49話

12/17 50話 05:00 投稿予定

プロローグ〜そして始まる借金生活〜（前書き）

はじめまして、豚×2（トントン）です。

この作品は「魔法先生 ネギま！」のオリジナルの主人公が介入していく二次創作です。

*注意：8月21日から本格的に誤字と話の修正を行っていきます。

内容の主人公は若干最強気味？所々弱体化もしていますがだんだんと強くなるはずです。尚、注意点がいくつか。

- ・二次創作は嫌いだという方
 - ・オリ主の介入
 - ・主人公が最初からある程度強い
 - ・仮契約のパートナーが原作主人公とかぶる
- などが含まれるので苦手な人、や好まれない人はお手数ですがまわれ右で

大丈夫、気にしないという方はどうか温かい目で見守るつもりでご覧下さい。

ブローグ〜そして始まる借金生活〜

丘の上から対象を確認する。

黒龍の番い、繁殖期らしいこの時期にはこうした龍種の目撃例が増えるそうで、当然そうした出現を確認されればしかるべき処置が取られる……のだが、いかんせん場所が悪かった。

「城塞都市も跡形もなく、ってか？間が悪いねホント。」

目の前の光景に溜息しか出てこない。城都市として大戦期から復興した眼下の街も龍達の襲撃を受けてかつての賑いはかけらも見れない。

そもそも龍種の中でも上位種の黒龍が人里まで降りてくるのは稀だ。街の守備隊クラスでは相手が悪すぎたんだろう。

「はー……、今回の依頼って翼竜の討伐って話だったんだけど……」

うん、帰ったらマスターには一発入れないと割に合わない。

俺はため息をつきつつ背中の大刀の柄に手を添える。

ま、文句も何もまずはお仕事ってねっ！

地面を蹴りだし、身体に魔力を通す。

「プラクテ・ピギナル…」

平和。

表を見れば種族差別や奴隷問題 e t c

といつても、大戦期を経験してない世代としてはいまいち実感がわかない。

とりわけ田舎町であるここでは政治の風も緩いというのも加味されるていると思う。

まあ、意外に治安も良いのでこの手の町にしてはなかなかの規模だ。

そんな中にあるギルド「西の夜明け」、もとはかの有名な「赤き翼」のメンバーだったマスターが大戦終了後に作った傭兵ギルドだ。

マスターを含めた創立メンバーの5人から始まったこのギルドも気付けば延べ600人強、支部5つ。護衛、討伐、遺跡の調査・探索と殺生以外なら何でもござれ、種族不問な上にマスターの趣味で孤児院を援助してたら院卒の者や入団希望者が募り今の規模になつていたらしい。

「おお、い、アハトが帰ってきたぞ」

つと、我がギルドのエースのご帰還らしい。

いつもの習慣で出迎えにと入口を向くと…

風が通り過ぎて

後ろからものすごい轟音がした。

「つてえええ、っ！おい、ジジイ！なんだあの依頼の屈折具合はっ」

振り返ってみるとマスターに弾き返されたのだろう我らがエースはマスターに掴みかかって行くところでした。

聞く対象は翼竜どころか黒龍のつがいだったとか、現地のガイドが途中で逃げ出したり、城塞の防衛用の魔方阵が生きているだの帰って早々のこのやり取りはすでにギルド内ではよくあることなので周囲はすでに先ほどの喧騒を取り戻しつつある。

「いや、生き残りだった依頼人ではあの報酬が限界だったみたいでの、相談に乗った結果おまえさんなら死なんし……」

「いや、俺人類だから！痛いよさすがにっ」

そう言っつてさらにマスターの顔を揺すっている。ですがいい加減止めるべき……なのでしょうか？

「今回の件につきましては事前情報から見るに翼竜種と黒龍の成体は情報の違いはマスターのミスだと思われま……」

目の前で「ちどいつ！ 儂泣いちゃう」などと呟いているが……まあ、これは無視していい類の事と判断する。

「お、アイン！ ちょうどいい、もっと言ってやれ！」

「いえ、事実を申し上げただけです。MY Master」

「相変わらず固いしゃべりなの……ま、いつか。腹も減ったし、とりあえずメシだ！」

そう言ってギルド内のカウンターへ走り去るのは私の主でもある、アハト・ジーベンス。

「はぁ？旧世界で教師をしるだ？」

自慢じゃないが俺は物心ついてからこのかた教育機関なんていうものに世話になった事がない。一般常識的なことはある程度詰め込まれた筈だがそれでも常識人と呼べるレベルじゃないことは自他共に認めるところだ。悲しいかな……

「あのな……じいさんが一番知ってるとは思うが俺はきょうい……」

「いや、これもうお前の名前で受理されたから……ホレ、依頼の受理書」

「あのなー、毎度毎度人の話をっ」

「ま、まあ落ち着け。教員といっても実際は指導員。荒事の仲裁などが主じゃって、別に人にものを教えるというわけじゃないんじゃないよ。あとは　　侵入者の迎撃、または捕獲も任務に含まれておるの」

「…んなやべえのか？」

「危険度は低くはないじゃろう。何かと抱えているものがいろいろと多い所だな長期の依頼にもなる。怖いか？」

「おいおい、俺はもう10　　って今生人体だったっけ…あゝ、めんどくさい！　　いいよっ、行けばいいんでしょ…！」

と言つと「おお、行つてくれるか！」などと満面の笑みで言うてるが、どうせあの手この手で既に退路は塞がれているんだらう。前にも何度があつて経験済みだ、憎らしいことに…

「んで、いつなんだその、マホラガクエンに向かうのは？」

「明日じゃ。」

……

……

「ちょっと待て、俺はこれから依頼完了の確認に　　」

「それならアインに行つてもらつから問題ない。どうせ討伐の証拠で折った角を見せるだけじゃ。あ、あと後からお前の補佐にアインも向こうに行くことになつとるから」

「よし、じじい…歯あくいしば　　！？」

と拳を握りしめて振りかぶる俺の目の前に突き付けられた…紙？

が、当然振り上げた拳が止まるはずもなく、じじいの顔に吸い込めるようにあたる。

うん、俺は悪くない。

じじいの飛ばされた先のカウンターが衝撃に耐えきれず粉々に砕けているように見えたが多分今旧世界で話題のテヌキコウジってやつだ。たぶん。

「いえ、この場合は間違いなくmasterの手の速さに非があるかと」

「素で心の声に突っ込むなよ……ん？」

最近妙に突っ込む回数が増えてきたアインに目をやると目の前に紙が降ってくる。状況からしてもさっきじじいが突き付けた紙だろう。

えー………何々？

「ひ、が、い……ほ、う」

「被害報告書ですMaster。どうやら前回の野党討伐時の際にアジトごと山を半壊した件についての請求みたいですね。………破碎した残骸が近くの集落に被害を出したそうでその件も含まれているようです。総額は」

横から見ていたアインが読み上げてくれる……字が読めねえって、これで教師とか笑い話にもならない。

「んで、金額はと……0がいち、にー、さん………」

おかしい、何度見なおしても0が7個あるように見える。俺の眼が

間違っていないければ、えっと、0が三つで桁が上がるんだから…100万ドラクマ？

「1500万ドラクマですね。今回の報酬分である8万ドラクマを差引いても大きく余りますね。ちなみにMasterの借金はこれで1億ドラクマを超えました。」

待て、今何て言ったただこいつは？

「……一億？あの、アインさん失礼ですが桁をお間違いで」

「誠に遺憾ながら……知つての通り数字にかかわるようなミスも欠陥も私にはありませんので……ご愁傷様です」

ガツテムツ！！

ついに神は我を見放したもうた！

「ておい！どんな数字だよ1億って！！」

「単純計算でMasterの年俸が平均120万ドラクマですから約83年と4ヶ月で完済できるかと。」

「いや、いくら俺でもそこまで働けないから」

何が悲しくて90超えても借金まみれとか……違う、断じて違う。

俺の老後は嫁さんと縁側でほのぼのと孫に囲まれながら気ままな年金生活

「ワシが言うのもなんじゃが随分枯れた将来設計じゃの〜」

いつの間にか復活したマスターが横で俺が眺めていた書類を盗み見て呆れた様な視線を向けている。
てか人の心を読むな！

取りあえず覗き込んできたマスターに肘をお見舞いしようとしたのだが今度は空振る。避けた際の表情がこちらをおちよくっている様で非常に癪に障ったが、今の俺は繰り出した肘以上の気力が湧かない。

「終わった…俺の人生……」

本当にどうするべきか？ ギルドの登録は成人体だからいつそ姿をくらますか？ いや、ギルド敵に回すと後々面倒だし……開き直って悪の魔法使いまっしぐら、とか？

おお！ いけそうじゃね？ 従者もいるし、目指せ闇の福音！！

「いや、意気込んだるとこ悪いがの。」

ホレ、と渡してきた羊皮紙には

「け、い「契約書ですね。」「……」

「依頼先の学園側が借金を半分持つ見返りに向こうが指定する期間内の制約を遵守させるものようです……強制転移魔法も編みこまれていますね」

感情表現が乏しいアインの表情にも若干呆れている様に見えるのは気のせいだろうか？

てか強制転移って俺のプライバシーはどこに？

「ってかほとんど奴隷契約と変わらないじゃん！」

いや、待てよ……この手の契約書には本人が立ち会う筈だ。俺にそんな覚えはない。となれば

「いや、そこはほれ。お前が討伐に出かける前日にちよちよいと血を少々とワシの保護者としての印での〜」

こゝこのクソじじい！！

間違いねえ、確信犯だよ。てか子を奴隷同然に売り渡す保護者がどこにいるってんだよ！

「というわけで、がんばってね？」

てね？じゃねえよ！依頼じゃなくてこれ強制じゃねえか！

「訴えてやる〜！〜！」

魔法世界の片田舎セント・ポプラ。

響く叫びは町の端までとどいたとかとどかなかったとか。

が、この叫びが受けられないことは間違いないのだろう。

b y アインの「主の観察日記」フォルダより

プロローグ〜そして始まる借金生活〜（後書き）

以上、「副担任は借金教師」プロローグでした。

次回主人公が麻帆良学園に向かいますがまだ、ネギ先生との絡みはありません。

時間的に言うとネギ先生が赴任してくる3カ月ほど前に2 - Aに赴任することになります。

主人公の設定もキリがいいところ？でちよくちよく出していく予定です。

どうか今後ともよろしく願います。

設定 その1（前書き）

ご指摘をいただきましたので変更を、なお主人公の体重につきましては平均体重を算出して上で+ しています。

その他には書式を変えています。見にくかったらまた、ご指摘ください。

設定 その1

設定 その1

名前（偽名）

アハト・ジーベンス（仕事用の名前）

あだ名

アハトオリジーク（偽名時）

名前（本名）

なるかみ
鳴守 おとや 音来

あだ名

ネコ（音来を読替えて）本人は嫌がっている

「猫じゃねえ！俺は犬派だ！」

年齢

現在 歳

外見

・身長：176？体重：73kg スリーサイズ：本人が拒否「てか興味あるやついんのかよ？」だそうです。

・髪：長めのショート・金髪

・目：赤眼のネコ目・若干つり目

・服装：主に黒を好む傾向にあるが麻帆良については上下紺色のスーツを着用。用意されたので本人があまり服装に無頓着なことから変える気は今のところないようだ。授業以外はネクタイは外す

か緩める。基本ラフな格好が好み。

ギルド：「西の夜明け」に所属

戦闘スタイル：魔法剣士

武器の扱いには大抵の者は扱えるが我流、その中でも長物の剣・刀を使った戦い方を好み、他の武器に比べて使用頻度も高い。素手でも問題なく戦えるとは本人談。

得意属性は雷（複雑すぎなければ他の属性も可）、基本は戦闘の補助や武器への付加、または決め時に中程度の魔法を好んで使用するが、魔力制御を苦手とする為か難しい呪文（“千の雷”の様に広範囲指定の魔法や制御に扱いが複雑なもの）はあまり使用しない。戦闘技法としては瞬動、虚空瞬動、浮遊術を習得。

ステータス

魔力：B+

速度：A+

腕力：B-

魔力制御：C-

アビリティ

・障壁

生来の膨大な魔力保有量の副産物。本人が魔力制御を不得手とする為常時漏れ出る魔力によって自動形成されている。通常生活には邪魔になるため巡回時、警戒時などの魔法関連の接触が少ないと判断したときのみ魔法具によって抑えている。

・変化

外見年齢の変化のみのだが、その実細胞レベルでの成長による変化

な為判別は不可能に近い固有スキル（魔法ではない）

現在

西の夜明け発足時の初期メンバーの一人でマスターを除く中で実力はトップ。（マスター以外には成人の姿を本来のものとしている。）魔力保有量に関してはマスターであり、養父でもあるリヒトを凌ぐほどだが本人が魔力制御を不得手とする為常時魔力が漏れ出ている。現在は魔法具によって魔力の流失を抑えており、見た目一般人より魔力が多い程度に見られる。

基本誰かと組んで戦うことを苦手としていたため、ギルド内では大規模な依頼以外は一人で行うことが多かった。アインとの出会いから彼女の面倒をみる事になり、現在は二人で組むことを基本としているが、アインが成長した今はどちらかという德音来本人が面倒をみられている関係に……。

雷帝、天麟の厄災、過滅の雷など実年齢からくる精神的幼さから仕事でやりすぎるきらいがあり、一般市民から別の意味で恐れられている。

今回マスターの知り合いである近衛近右衛門の依頼で教師兼広域指導員として派遣されることになる。

ご本人様より

「あ？自己紹介？あゝ、めんどっちな…、わあったよ。答えりやいいんだろ。手短にな。名前、アハト・ジーベンス。本名？…鳴守 音来。年齢は…ノーコメント。好きな食べ物は肉だな。嫌いなもの？食えるもんならたいてい好きだけだな。

アインのこと？まあ今じゃ相棒兼家族つてとこだな。 ん？そうじゃない？？他に何があるってんだ？

最後に一言ねえ…んゝ、まあ早く借金返して普通の生活に戻りたいかな？」

名前（偽名）

アイン・リコード（仕事用の名前）

あだ名

アインorリコ（偽名時）

名前（本名）

機体？S O F I - A 1 略称 ソフィー

あだ名

アイン（機体？の下二桁からアハトがなすけた）

年齢

稼働時より現在は5歳

外見

・身長：170？ 体重：80kg（稼働停止すると100？を軽く超えます）

・スリーサイズ：本人が拒否「頭の風通しをよくしてあげましょうか？」銃を向けられました。

・髪 : 腰までのロング・薄茶色

・目 : 薄緑色の瞳孔が稀薄・垂れ目気味

・服装：基本は主と同じくオシャレというものにあまり関心がないがスーツのようなひきしまる印象の服を好む傾向がある。学園では薄緑のレディーススーツを愛用

ギルド：「西の夜明け」に所属

契約者：アハト（音来）

アーティファクト：？？？

戦闘スタイル：剣・銃を使ったオールラウンダー

武器の扱いでは主人である音楽を上回り、搭載されている転送機能に登録されている武器・武具を用いて戦うので音楽と組んで戦う時は基本後方支援に回る。通常時の魔術的要素への耐性は魔法世界製の為、一般人よりかはあるがそれでも魔法使いと比べると弱め。主人からの魔力供給によって補うか貯蔵した魔力により独自の障壁を纏う。

ステータス * () 内は魔力供給時

魔力 : D + (B) A +)

速さ : B (A + +)

腕力 : A (A) S)

魔力制御 : A - (A -)

アビリティ

・転送

ライブラリーという記憶媒体（情報系統とは別で物質類）に圧縮、登録した武器・魔具等を転送する機能。音楽の意向でそれ以外に日用品等も登録されている。

・学習能力

自動記憶学習能力、戦闘時における判断力、対処法から敵の戦術までを驚くべき速さで吸収するスキル。身体機能に支障がないレベルまでは再現可。

現在

西の夜明けメンバーである音楽の従者であるマジックドール。魔法

世界で造られた機体でブラックボックスや魂を有するなど謎な面も多い。

また、記憶媒体に詰め込まれた知識は膨大で大戦期前の記録から現在の魔法世界・旧世界のあらゆる情報、はては古代兵器にいたるまであるが制作当時の制限によりファイルにイン本人にも解除不可なほどの強固プロテクトがかかっているため全容は把握しきれない。

もともと感情表現を苦手としていたが最近では表情からわずかに読み取れるほどに成長した。が、まだ処理しきれないこともあるらしく暴走することもある。以前ギルド内で新人が知らずにナンパした際に暴走したことがあり、その惨劇から以降ギルドの男たちからは“カラミティドール・リコ”という名でひそかに呼ばれている。

今回マスターである音楽と共に麻帆良学園に向かうことになる。担当は数学。

最近では感情学習のため本をよく読むようで、現在読んでいるのは“恋する乙女は シリーズ”。

代表作”恋する乙女は片手で龍をも殺す”。

ご本人様から

「はじめまして機体？S O F I - A 1 略称 ソフィーと申します。Masterが呼称している“アイン”は正式名ではありませんが私としましてはこちらの呼び名の響きが定着していますのでそちらで読んでいただけると助かります。そもそも名前というものは……（以下中略）……ということですよ。以後はアインと及びください）
「気に入っています」

設定 その1（後書き）

いかがでしょうか？

キャラクターの感じはつかめたでしょうか？

もちろんまだ伏せている設定もありますので今後のストーリーに合わせて乗せて行きます。

何かおかしな点等ございましたらご指摘のほどよろしくお願いします。

取立の回目　↳プロローグ2。2と書いてセカンドと読む

ううー……

突然ですがただいま絶賛後悔中の主人公、アハト・ジーベンスことなるかみ おとせ鳴守 音楽です。

昨日、突然の長期任務を言い渡され、その日の内に辺境から都市であるこの街に強行させられたのは記憶に新しい。そのメガロメセンブリアでアインと合流まで時間を潰し、ゲートポートをくぐって旧世界に着いたのが5時間前、ロンドンのヒースロー空港に着いて飛行機に乗ったまでは良いのだが……俺はいつも乗り物というものをなめていたらしい。

「なんだこの機械の鳥は……あゝきもちわるい……」

「Master。鳥ではなく飛行機という乗り物です。」

そう言つて涼しい顔でこちらを見てくるアイン。その対応は少々そっけなく感じるのだが……耳鳴りと吐き気と頭痛の三連コンボに悪戦苦闘している俺にはそれに割く余裕がない。

これがあと9時間ほど続くのかと思うと拷問でしかない。これなら素直に魔法で飛ばせばよかったと思うも既に後の祭り。

そう、全てはあのパンフレットを手にした時から俺の転落は始まっていた

〈回想・ロンドン市内移動中にて〉

それはロンドンでアインと合流後、移動に経費を削減する為指定のポイントまで徒歩 and 空中移動で人目を避けて向かい、途中で休憩中の何気ない疑問と興味から始まった。

「なあ、アイン。このヒコウキってなんだ？」

「飛行機、旧世界の言葉で乗り物と呼ばれる移動手段の一つで空を飛べない彼らが造り出した大陸内の長距離移動及び、大陸間の移動に使われる機械というものだ」と記憶しています。」

「ふ〜ん、不便なんだな…旧世界人は」

アハトもアインも魔法世界で育ち、その世界を出ることのなかった彼らにとって旧世界というのは未知の塊だ。知識の薄いアハトと豊富なアインと対照的ではあるが基本二人とも実際に見聞きしたわけではない。

「なあ、俺たちはゲートをくぐった後はどうするんだ？」

「マスターの配慮で長距離転移魔法符を多めにいただけることになっているので、市内の商人から受け取りの魔法施設を経由しつつ二ホンに向かいます。」

「転移魔法符ってどれだけ魔力を消費させる気だよ…」

「私の計算によると15回ほどの転移となりますがマスターの魔力総量の2/3ほどの消費となります。途中よほどのトラブルに巻き込まれても支障はないかと。」

支障はないというがそれでも15回も転移を繰り返させられることとしては堪ったものではない。確かにそんだけ残れば問題はないと思う、が？

そこで一つ疑問が浮かぶ。

ただ転移魔法符を受け取るだけにしてはやけに時間に余裕がないだろうか？

それというのも転移というものは高等魔法の一つだが移動に関してはほぼ一瞬、長距離となれば多少時間にラグが出るのは無理もないが半日も余裕を持つ必要などどこにもない。

第一転移魔法符は誰でも簡単に扱えるだけに高級品だ。俺自身仕事では扱った時はその便利さに感動を憶えた程であるが、そのご請求された金額にコスト面で割に合わないことから本気で本来苦手な魔法の転移魔法を習得しようとしたものだ。実際は飛んだほうが楽だったので習得は先延ばしのままだが……

とにかく、そんな転移魔法より高度な魔法が編まれた長距離転移魔法符、15回もの転移分の費用をどこから持ってきたというのか、養父にしては気前が善すぎる話で、もともとが借金返済の為の任務なだけに嫌な予感が

「アイン、その魔法符の費用はどこから……」

「請求先はMasterの借金に重なるそうです。」

「つておおい！！ 重ねがけかよ！ こは普通錢別とか言つて気前良く渡すところじゃないのか！？ こで借金増やしてどつするよっ」

「ちなみに今回の費用は契約対象外だそうなので全額Masterの負担になるそうです。」

「もう、いや……」

がっくりと頂垂れる俺、そしてそんな俺の目にヒラリと落ちてきた紙が一枚。

見覚えのあるそれは先程何気なく見ていた旅行パンフレットだった。

「これは、さっきの……ん？ 待てよ。そうだ！ アイン、この飛行機つてやつに乗って行った場合の費用はいくらだ？」

「向こうの通貨で8万弱。 転移魔法符を使うより安いと言えばかなり安いのですが、Masterは乗り物には極端に弱いとのことはこちらに……」

「なに、そこは根性だ！ これ以上借金を増やすよりかは断然ましだね！」

「はあ、ではそのように手配しますが…… 本当によろしいのですね？」

「おう！」

借金がこれ以上増える事無くすむのなら断然そっちのほうがいいのに何を迷うつのだらう？

一人納得がいかなそうに商人へのキャンセルを伝えるために席を離れるアインを見送り、一難去ったことへ安堵する俺だった。

（回想（という名の後悔）終了）

一難が去ったどころか逆に災難を呼び込む結果になった俺、俺が何をしたというんだと神に吠えたくもなるというもの……が、そんなことに割く気力は俺には欠片も無い。

「あー、これなら符で飛んだ方がましだった……」

「確認は申し上げました。それより、いくら認識阻害の魔法を使っているとはいえこの中での発言には注意してください。」

こいつとは付き合いもそれなりになるので無表情に見える顔からも感情が拾えるようになってきている。

今の状態は若干、怒っている。感情面が豊かになってきたのは良いことだがこうして自分に向けられるというのは何とも複雑だ。

まあ、今回は俺に非があるからぐうの音も出ないんだけど……

「ア、アインさん？ さっきのことは反省しているからなんか対処法ない？ マジ辛いんですけど」

自分で言い張っておきながら何とも情けない話だが背に腹は代えられない、このまま後数時間拷問にも近い状態が続くというなら藁にでもすがる。

すると主の意をくんでくれたのか、冷たい視線を遮るように目蓋が閉じられ、こちらに向き直った彼女はそうですねと一言呟き

「……では少々手荒になりますが、失礼します」

と次の瞬間腹部にもすごい衝撃とともに大変耳に心地よい音が伝わってくる。

「おまつ……これは……」

「認識阻害の強度は上げてあるので問題はありません。ごゆっくりと空の旅をお楽しみください。」

そついう問題じゃないだろと思いつつ頭の端で嫌みなんて言えるようになったんだと感心している自分を発見しつつ、先ほどの認識が若干ではなかなり怒っているのだと改め、俺は意識を手放した。

「な、なあ？ 転移魔法符使わね？」

「いえ、経費削減がMasterの方針でしたのでこのままこの“電車”というものに乗って行きましょう。というよりキャンセルを済ませた後ですから既に今更ですよMaster」

いや、だつたらせめて休みませんか？。

飛行機に揺られること12時間強、時間は朝の5時ももちろんこんな時間に外を出歩く人は少ないだろう。

そんな中、俺は空港のロビーを引きずられて行く。快適な空の旅？
ああ、快適だったとも。機内で意識があつたのは実質5時間程、
最初の気絶までが3時間と少しだったから2時間も起きていない。
幾度に及ぶ激痛と引き換えに快適な時間を得る……何故か損した気
分なのは気のせいなんだろう。そう信じたい。

そして目の前にはこれまた“乗り物”と呼ばれるものらしい鉄の箱
……どうやら俺の従者は知らない内にサドっ気というスキルを身に
つけたようだ。今のとこ主な対象が主人である俺というのが悲しい。

「いや、こんな朝早くに着いても迷惑だろうしさ。向こうに連絡し
て夕方に着くようにすれば……」

「仕事は時間を遵守。これもMasterの方針だったと記憶して
いますか？ それに約束の時間は8時です。乗り継ぎが多いですが
事故、トラブル等がなければ2時間はかからないと算出しました。
今出れば十分間に合うでしょう。」

これならと出した案もあっさりと拒否される。どうしても俺を電車
に乗せたいらしい。

趣味か？ そんなに楽しいか？

「なら空を飛んで……」

「いくら認識阻害の魔法を使ってもこれほどの都市の上空を飛
ぶのは規制がかかります。それに今のMasterは魔力こそ消費
していませんがコンディションが万全ではありません。一般人との
遭遇率は25%……けして低くない数値です」

いじける俺、お構いなく引きずっていくアイン。見た目二十歳の男が同年代と思われる女性に引きずられているのはなかなかシユールだろう。気分はドナドナ
こんなことならもつと魔力制御の特訓をしておくべきだった。いまさら遅いんだけどね

「やっぱり乗らなきゃだ」

「ダメです。む？電車が来たようですね。乗り込みますよM a s t e r r o .」

もう勝手にしてくれ……

これが旧世界の都会、そしてこれが噂に聞いていた“満員電車”というものなのか！？

気ツイ、イタイ、クルシイ、アツイ、キツイ……

ダメだ、昔一度修行と称して放り込まれた山で龍種から逃げるために岩山の亀裂に挟まったことがあるが、比べ物にならん。

なんだこの人の量と圧力はっ、明らかに箱の許容量を超えているだろっ！ 身動きが取れまるでとれない。

ふと、こんな状態ではアインと逸れるのではと慌ててあたりをキョロキョロ見渡す。俺は自他共に認める方向音痴だ。こんなところであいつと逸れれば確実に迷える！

と右前方ようやく見覚えのある髪色を見つけ、そちらに視線を向け

ると 　　いつの間にかちゃっかりと座っている我がパートナ
ーが……

（お前俺の従者タロット！）

「後5分ほどで着きます。ファイト？です。Master。」

疑問形になるなら慣れん言葉使うな！　こっちはこの圧力となぜか
多い女性の所為で眠るといふ手段も使えずこの不快感と戦ってる
いづのにお前は……

次は、麻帆良学園中央駅、麻帆良学園中央駅。お降りの際には

長かった地獄もようやく終わるようだ。早くこの扉をに抜ければっ

「っ！？」

突然押し寄せてくる人の波、開く出口は目の前に……ということは

……

「当然こうなるのな……」

「油断しましたね、Master。」

押し出されて下敷きになっていた俺と悠々と降りてくるアイン、今
日一日何回も思っけどこいつ俺の従者だよな？
手を出すどころか塩塗ってんですけど。

「はー……、もういい。んで、この後は？　まさかこれから目的地

探すの？」

目の前に広がるのは文字通り学園都市とてもじゃないが慣れない自分が歩きまわったら迷う自信がある！

「いえ、データは頂いているので問題はないのですが、迎えが来ることになっています。」

「おう、迎えか。で、どんな奴がくるんだ？」

「はあ、確か……」

「すみません、あなたが新しく赴任されてきた教師ですか？」

「竹刀袋と横に結ったお下げが目印の少女だと聞いています」

取立の回目　↳プロローグ2。2と書いてセカンドと読む（後書き）

というわけでこれにてプロローグ？終了。

次回ようやく1話目に入ります。というか原作キャラ登場させるのに少々引っ張りすぎたかも？　長さ的にはプロローグの回とくっつければよかったなと思っている豚×2（トントン）です。

設定を出したのでオリキャラの会話を増やそうとしたらギャグパートに……

まあ、原作キャラを出せたのでとりあえず形になりました。と言いつつ登場したといつても一言だけなんです（汗）

取立1回目　く帳尻合せと修正、鞆寄せはこつしてやてくるく

「はー……、もういい。んで、この後は？　まさかこれから目的地探すの？」

目の前に広がるのは文字通り学園都市とてもじゃないが慣れない自分が歩きまわったら迷う自信がある！

「いえ、データは頂いているので問題はないのですが、迎えが来ることになっています。」

「おう、迎えか。で、どんな奴がくるんだ？」

「はあ、確か……」

「すみません、あなたが新しく赴任されてきた教師ですか？」

「竹刀袋と横に結ったお下げが目印の少女だと聞いています」

そこにはアインの情報通りの少女が立っていた。

ふむ？見た目俺と歳は変わらないようだが……俺達を迎えに来たという事は関係者と見るべきか。

ぱつと見、魔力はあまり感じられないから一般人に見えなくはない、もちろん魔力を隠す方法なんぞ実力が高ければ関係ないし、俺の様に魔法具を使ったりといくらでも方法はある。

だが、佇まいとこのちらの内を探るような目はなかなかどうして、一般人と軽断を許さないものがある。

「あのー…、すみません」

「ん？ああ、すまない。何しろニッポンは初めてでね……こちらでこんな立派な西洋の町並みを見れると思わなかったから、少々驚いていた」

「いえ、確かにこの学園は他にないものが多いですからね。私も初めてここに来た時には驚きました。」

思ったより普通の切り返しに肩透しを食らった気分だったが、考えてみればここで喧嘩を売る必要性なんてまるでない。新任早々ゴタゴタを起こすのも今後の信用にかかわるだろう。何せこっちは初めての旧世界での任務だ。地盤の固まらない内はできる限り面倒事は避けたい。

（ま、降りかかる火の粉は払うだけだけ……）

「あっそうだ、自己紹介が遅れたね。今度麻帆帆良学園中等部に勤務することになった鳴守 音来だ。まだ担当は決まってないけどこの学園ではある意味君達が先輩だ。よろしく、お手柔らかにね。で、

「こつちが」

「同じくアイン・リコードです。見たところあなたは中等部の学生ですね？ 私は数学にを担当する事になっていきますので、もし授業で会うことがあればよろしくお願いします」

「そんなご丁寧につ！ こちらこそ、桜咲 刹那といいます。学園長先生から部屋まで案内するように頼まれているのでどうぞ、こちらになります」

この学園の生徒だという刹那の案内で続く形で学園内を進む俺達。それにしてもここは広い、学園都市何ていう名前を聞いた時は大層な名前だと思ったがこれは名前負けしていない、正直案内がいてくれてホッとしていた。

そんな中を軽く会話を交えながら着いたのは、周りに比べ豪華な木製の扉の前。

歩いている際にも目に付いたがこの学園は西洋に重きを置いているらしく建造物の様式全体が西洋風だ。

桜咲が扉を2回軽く叩く。

「あいておる。入ってきなさい」

「失礼します。学園長、お二人をお連れしました」

向こうから聞こえる重みのある声に桜咲が返事を返し中に入っていく。

この先には東洋の妖怪とも恐れられる関東魔法協会の理事を務めている近衛 近右衛門がいる筈、魔法世界から出た事のない自身でも噂や逸話に事欠かない人物。そして養父でもあるギルドマスター、リヒトの戦友であるという。

緊張を表に出さないよう一拍子間をおいて、入室した。

果たして中にいたのは

「有無ご苦労じゃった。HRも近い、刹那君は下がってよろしい」

「はい。では、失礼します」

扉の前で一礼をし、去っていく刹那を背後で確認し、扉が閉まると同時に我慢が切れた。

いや、我ながらよく耐えた方だが、とうとう堪え切れず口を滑らしてしまう。

「驚いた……、関東支部の長は本当に妖怪だったのか……………」

どう見ても人類の枠を飛び出している人(?)がいる。

街頭アンケートで10人に聞いたら10人が人と認識しないだろう。いや、この際他人が何て関係ない。

頭部が後方に頭3つ分以上伸びている人間の形をした生物を人類だと認めるには自分あまりに押さなかった。

「Master、オブラート……声に出ています。」

「うっそー！ やばッ！？」

「……開口一番にひどい言われようじゃのう」

ワシ泣いちゃうと呟いているその姿に、何やら嫌なものを思い出させるが気のせいだろう。

というか気のせいだと思いたい。

「いや、申し訳ありません。思った以上に道中の疲れが溜まっている様で……失言でした」

「まあ、良いじゃろ。うおっほん！ よく来てくれたなアハト君、アイン君。ワシはこの学園の長を務めている近衛 近右衛門じゃ」

両者共に体裁を繕い終わった所で仕切り直しと大きく咳払いをする学園長、近衛 近右衛門。

こちらもそれに合わせてそれ相応の態度で臨む。仕事の礼儀というやつだ。

「ギルド『西の夜明け』所属、アハト・ジーベン。並びにアイン・リコードです。これを……依頼の受託書とマスターからの追記等の書類になります」

そう言っアインが持っていたカバンの中にあつた書類を渡す。

ギルドの方針で依頼者と交わされるのはいくつか種類がある。この

受託書はギルドマスターに直接依頼が来た際に委託という形で他のギルドメンバーが請負う際に交わされるそれなりに重要な書類で、契約内容を互いに遵守させる強制力を持つ。忌々しい事に俺を奴隷同然に縛る強制力を持っているのがこれだ。

とまあ、そんな具合に強力、重要な手続き故にこの手の仕事は最初が肝心、契約の内容の追加・変更は現地で依頼者、受託者両者の同意が得られれば変更できるとはいえ初めの契約執行までの時間はとても重要だ。

「ふむ……、問題点はなさそうじゃの。こちらの要求も最大限通っておる上に利益もつまいい具合に釣り合っておる。さすがはりっちゃんじゃわい」

付け加えるとりっちゃんとはうちのマスターの事だ。本名、リヒト・バイチエン。

先の通りこの目の前の妖怪、もとい、近右衛門とは戦友にして俺の養父、そして俺達が所属するギルドの総轄をしており、年の功かギルド協会にも結構顔が広いらしい。もつとも、影響力だけなら目の前の翁も負けず劣らず、齡20にも満たない身のこつちとではキャリアが違いすぎる。

「では、契約内容は変更等は無くこのまままで？」

再確認した事によってぶり返した内心の緊張を振り払い、学園長がうなづくのを確認して契約執行に入る

『契約の精よ 血の誓い 鉄の掟 今 終に違える事無き盟約を
我ら契約の杯を交わし 此処に承諾を示す「近衛 近右衛門」「ア
ハト・ジーベンス」「アイン・リコード」』

目の前に光線が描かれ文字が刻まれる。文字がすべて出ると文末に手形の模様が出るのでそこに己の魔力を通すことで契約は完了する。

『『誓いをここに』』

「うむ、契約完了じゃの。では、事前に確認が取れていたアイン君は良いとして……、おぬしは別件の依頼で直前まで確認が取れなかったのこのう……おぬしの担当は……よし面接じゃな」

はい？

ちよつと待て欲しい。

養父の話じゃ俺の仕事は指導員、警備担当のようなものだった筈だ。

「待ってください、俺は指導員で受け持ちがあるわけではないと……」

「ある人材を遊ばせておくわけがなかるうに、このご時世人手は多に越したことはないからのー」

ぐっ、確かに正論だ。正論ではある。

しかも雇用に関しては任務中、急務、または任務続行が可能な場合は可能な限り学園側に従うと明記されている。つまり俺に拒否権はない。

駄菓子菓子！！

「して、得意科目は？」

「……………」

「おお〜い…………聞こえとるかの？」

「申し訳にくいのですが、Masterの実年齢は数えて10歳、さらに教育機関というものに経験がありません」

「うっ」

「なんと!?!」

「見た目は二十歳ですが、彼個人の固有スキルで生体変化をしている状態です。誓って申し上げますがだます気があったという訳ではなく、この姿の方が任務が進めやすいだろうと、マスターリヒトの采配です」

「これはまた…………随分と良くできた変化じゃのーワシも言われるまでまるで気付かんかったぞ」

「はい、詳細は今後の仕事に関わりますので、申し訳ありません。…………一つだけ言いますと直接DNAを鑑定したり一般の判別魔法では本人と照合するのは著しく困難だという事しか…………」

「ふむ…………いや、恐れ入った。まこと面白いものを見せてもらったが、ちつとそれでは面倒な事になるの…………10歳か、さすがに勉学の経験がまるで無いというのは想定がいじやが…………」

それはそうである。何せこちらもこの事態は想定外だ。

おそらく養父であるリヒトが一杯興じたのだろうが、いい迷惑ではない。

「ふむー……………おお！ そうじゃったそうじゃった。むしろ都合がいいかもしれんの。ちょっと待っていなさい」

と、いきなり一人納得したようにデスクの受話器を取りどこかへ連絡する学園長。

「あゝもしもし、わしじゃよわし。わしわし詐欺？ いやわかってやっておるだろうに」

……………こんなのが学園長でここ大丈夫なんだろうか？
なんだか極東の大魔導のイメージが入室当時から絶賛暴落中だ。

いやまあ、このまま契約解除されても後々手続きが面倒だし、移動費に経費降りなくなるから借金増えるだけなんだけが……………もしかしてピンチなのだろうか？

「ふゝ、今担当の者が来る。アイン君は別の担当者が来るので少々待っておくれ」

受話器を置いて溜息を吐いた近右衛門の言葉にとりあえず問答無用に帰還を言い渡される事は無さそうだと一安心する俺。

そして待つ事数分……………

規則正しい扉を叩く音が来訪者の到着を告げた。

「開いておる、入ってくれ」

「失礼します学園長。何か御用ですか？」

「うむ、ちょっとタカミチ君に頼みがあつてのー……ホレ、彼らが今回赴任してきたアハト君とアイン君なんじゃがちょっと訳有りでの、すまないがアハト君を君の2-Aで元で臨時に研修生として指導してもらいたいのじゃよ」

「彼をですが？ 僕としては構いませんが……しかし、いいんですか？ こんな時期に」

「それを考慮してじゃよ。実は彼はこう見えて10歳らしくての、学術に関してはほぼ経験なしじゃそうじゃ」

「それは教師いぜんに「ホレ、受託契約書」」

「彼の活躍はタカミチ君も聞いていると思うから広域指導員としては問題ないのじゃが、それでは今回の意味がないからの、今の内に慣れしてもらおうという事じゃよ。そう考えると3ヶ月前に来てもらったのは正解じゃったのう。」

「……はあー……わかりました。ではアハト君ついて来てくれ。あ、アイン君は後で別の先生が来るからこのまま待ってもらってもいいかな？」

若干いやそうな顔をしたが一応頷いてくれたので大丈夫なのだろう。

「了解……あ、学園長の方には正式書類がいつているので問題は無いのですが、“アハト”は名前前仕事用で、今回は教師という事で本名で勤務する事になっています」

「なるほど……確かに君はどちらかと言うと日系の顔立ちだし面倒な詮索はないか、まあ名が知れてるよりかはいいかな。じゃあ改めて、高畑・T・タカミチだ」

「鳴守 音来です。まあ、本名より偽名の方が呼ばれ慣れているんですが、仕事や魔法関係の依頼時はアハトでお願いします」

「結構。じゃ、タカミチ君そろそろHRじゃかね？」

「そうですね。じゃ行こうか音来君」

「はい。それでは学園長、失礼します」

タカミチに倣って頭を下げ退出する。

タカミチ・T・高畑

情報に疎い俺でも知っている。紅き翼のメンバーで悠久の風に所属。呪文詠唱ができないというハンデもあった中、今ではAA+級の魔法界屈指の実力者。その活躍ぶりは仕事柄よく耳にする。

学園長である近右衛門といい、この高畑といい学園にはかなりの兵^{つわもの}が揃っているのかもしれない。本当にこんな人物達がいて俺が警備に必要なのだろうか？

確かに、ここへ来る途中に見れた“世界樹”と言われているらしい巨木を見た時はそれなりの格の高い霊地なのだろうと思ったがそれだけだ。周囲に張られた学園結界と今確認している職員リストを見る限りではむしろ警戒しすぎなくらいだ。

まあ、こういう事を考えるのは相方の方が得意なのでとりあえずは頭の隅に留めておくが、どうもかなり面倒な任務を押しつけられた気がしてきて気落ちしてくる。こういう時に限って予想が当たるのでへこみ具合に換算されて少々足取りが重くなる。

つと、考え事をしていたら意外と時間が経っていたのだろう。思考に割り込んできた念波^{ノイズ}に気付くのが少し遅れてしまった。

「お？」

“認識阻害の、符ですか？ ずいぶんとまあ仕事熱心ですね”

“なんだ、やっぱり念話は使えたのか。じゃあ”

「これはいらなかったかな？」

ポケットから取出されたのは何やらミミズがの這ったような字が書かれた紙。

割とポピュラーになってきている念話だが盗聴を警戒する者もいるので出来合いのこういった札型の魔法具も重宝されており、それに普及されている。

かくいう俺自身も念話は周波数を絞るのがあまり得意でないので詠えた札にお世話になっていたりする。

「いえ、安くはないでしょうしこっちの方が楽ですから。それに俺は魔力制御が下手でして、こっちの方が助かります」

「へへ、ずいぶんと想像と違うな……もつと砕けた喋り方をすると思っていたんだけど」

こちらこそ想像よりだいぶ柔らかい印象を受ける。とても一組織を壊滅させるようには見えない。

「いえ、もちろん地は高畑さんの言うように砕けた口調なんですけど、今回の長期任務が良い機会だと言葉使いを周囲から強制されてしまつて……自分自身気持ち悪いとは思っています」

「ははっそれは災難だったね」

まったくである。

養父やアイン、他のメンバーも良い機会だと強制的に短期集中の言語矯正、更にアインによって麻帆良に着く前も……あの飛行機等の機械にお世話になる時間以外は全てそれに費やされている。どっちが辛いかと聞かれれば両方と即答できる自信が俺にはあった。

「まあ、僕としてはこれから同僚としてやっていくんだし、案内がてらにちよつと向こうの話とか聞きたかっただけだからね。もつと楽にしてもらえると助かるかな？ それに、君がこれから相手をする生徒たちはかなりパワフルだからね。柔軟にいかないと思が持たないよ」

「はあ、善処してみます」

自分の返事に当分先になりそうかなと苦笑する高畑、ではなくタカミチがてを差し出してくるそれを自然に握り返して答える。

すると黒い長方形の物体、名簿だろうか？　それが渡され、何かと聞こえと顔をあげようとすると彼が横にあつた扉を指さしていた事に気付いた。

「そこが今日から君が教育実習生という肩書で副担任をすることになる教室だよ」

どうやら既に教室には着いていたようだ。

身体を横にして扉を指すタカミチ、先に入れということなんだろう。

先程のタカミチのアドバイスを思い出し、できるだけ砕けた口調と普段なら苦も無くできそうな事を改めて自分に言い聞かす。

だが思いのほか緊張はない、むしろ担当教科がないということになって面倒はアインに比べてほとんどない。中等部と言っていたから生徒たちは俺より年上という事になる。

まあ、うだうだ考えるのは俺の性分じゃない。ちゃちゃっとすませますか。

取っ手にかけてのままになっていた手に力を入れなおし、俺は扉を心持ち勢いよく開けた。

ポフッ

「……………」

足もとに落ちてきたのは黒板消し。
頭にかぶったのはチョークの粉だろう。

目の前には事前に連絡がいつていたのだろう。新たな教師に対する
洗礼が成功したと大笑いする者、実行者と思われる人物を注意する
者、申し訳なさそうな顔をしている者、達観している者、その数3
1もいれば反応も様々というもの。

教師という今回の仕事に多少不満もあったが、どうやら退屈はしな
い任務になりそうだ。

おまけ

side Ain・Recode

……

「……………」

「もしも〜し、聞いたるかの？」

目の前にいるのはこの学園のようかい……失敬、学園長（よしかい）でした。

その学園長が何か仰っている様ですが、どうも先程のやり取りを見ている限りギルドマスターであるリヒトの事を思い出してしまい、つい同じ対応をとってしまいそうになる。

言葉にするなら極力MUSHIするということやっだ。

さて、私は今現在直立不動のままエネルギーをセーブ、先程Masterと退出されたのがタカミチ・T・高畑先生以外に案内をする先生が来るそうなので私はこのまま待機をしています。

が、何やら学園長の方からフェイスセンサーが気まずいと表示されていますが気のせいでしょう。どうやらこちらも長旅でセンサーに支障をきたしたようです。

いけませんね。後で整備しなくては……

「なんかひどい扱われ方されとった気がするんじゃないか……その、な？　いくつか彼について聞きたいのじゃがいいかね？」

「……………」
「答えられる範囲なら」

「うむ、リヒトからの書類には彼の経歴は傭兵以前の記録がないのじゃがこれは「ノーコメントです」……彼の年齢に関して「禁則事項です」……k「データロード、アウト……失礼、お答えできません

ん「まだ、何もいつとらんのじゃが……」

「会話logから類似パターンを検索、パターン20036にヒットしたため回答がロックされました」

……

……

「質問はいじょうで？」

「あゝ、いいじゃろ」

自分から言っておいておかしな人ですね？何やら伏せながら「しずな君、早く来て・・・」とか呟いていますが、私には関係ないと判断します。

取立1回目　く帳尻合せと修正、鞆寄せはこつしてやてくる　（後書き）

はい、毎度お世話になっていきます。トントンです。

1話目どうでしたでしょうか？

えー、今更ですが、ギルドマスター、茶々丸のエヴァの呼称はアインの主人公の呼称とかぶるので『Master』でお送りしています。

前回より修正後は後半をかなり調整・修正しました。まあその分この後の話も修正して行くのですが……連載再開前のここ数話が特に修正が大きいですね（苦笑）

取立2回目　く人生初の面接、受からにゃ強制送還！??

頭上に落ちた黒板消しがモクモクとチョークの粉を撒き散らし、危うく咽そうになるのを手を当てて抑える。

なるほど、これがこれがあの有名な黒板消しトラップかと感心半分怒り半分……いや、少々右肩に上がり気味だがここで怒るのも大人げない。

新任早々なんだ、もつとc o o rに行こう。そう沸々とわき上がるこの感情に折り合いをつけて頭に付着したチョークの粉を払い、務めて平静（仏教面）を維持して落ちた黒板消しを拾う。

「やった　！　大・成・功ッ！！」

「こらそこっ、はしたないですわよ！」

前と後ろで騒がしいが……

教室を見回して思わずその場でを顛こめかみ？を押さえたくなる。

女、女、女　見事に女しかない。まあジョシコウというやつらしいのでこれで当たり前らしいが、こんなかましい連中を相手に最低一年は面と突き合わせなくてはならない……今から頭痛を憶える。

それだけでなくもキナ臭い人間が多いんだ。まったく、どうやったら

こんな面子を一組に集められるのやら……

実力がありそうなのが1、2……6人。皆魔力を垂れ流したりあからさまな挑発をしてくる者はいないが、関わったら面倒そうなのでパス。こちらら任務が無事終わればそれでいいんだ、自分から積極的に関わること無いだろう。

それよりも

「ね　ね　先生はどっから来たの！」

「歳は？　趣味は？　大学はどこ　」

比較的一般人と思われるこの生徒ならぬ人垣ともいえる壁から繰り出される言葉の応酬の方が面倒かもしれない。

「ハイハイっ！　まずは自己紹介からだ、みんな席について　…
…音楽君もごめんよ、悪戯好きがいる事をすっかり忘れていた」

手を叩いて生徒に促すタカミチの姿にあの有名な本人が本当に教師出来ているという事に感心する。彼のクラス内での信用も確かな物の様で騒いでいた生徒も渋々といった感じだったが直ぐに自分の席に戻っていく。

「いえ、いいんじゃないですか元気があって……」

（面は憶えたぞあの三人組……）

そこで俺は何をしているかと言うと……先程のトラップの実行犯と思われる三人組（一人巻添え？）をちゃっかりと目に焼き付け、内

心とは真逆のコメントが口が出る。地が出ないよう抑えられるのもアイン達の矯正の成果なのだが、素直に喜べないのは何故だろう？

「それに気付かなかった自分の落ち度ですし、構いませんよ」

スマイル、スマイル。

何度も言うが初日からの面倒事はごめんだ。

今日何度かになる言葉を自分の中で繰り返してタカミチに促されるままに壇上脇から上がる。

「そうかい？　じゃあ早速だけど初仕事だ音楽先生。自己紹介から頼めるかな」

タカミチと立ち位置を交代する形で教壇に立ち、黒板に名前を書いて振り向く。

過去の任務で旧世界に行った事のあるギルド仲間にも一度教わってか
らどこか気に行ったので文字は間違っ
てはいないはずだ。が、万が一の事が無いとも言えないので横にローマ字を添えておく、いざとなれば外国育ちで漢字はまだ不慣れだと言えはいい……一応魔法世界育ちなので嘘じゃないぞ？

「今日からこの学園に教育実習生として赴任した鳴守 音楽だ。高畑先生のもとで勉強させてもらう事になっている。三ヶ月と短い期間だが、まあ、よろしく」

「……………」

先程の質問の嵐から若干身構えていたのだが、予想に反して訪れた

沈黙に逆にこちらが身を固くしてしまう。

外したか？ とポケットに忍ばせていたアイン作のカンペを握る。
……大丈夫だ。一字一句間違えてないし、こんな短文を読み間違える程俺の頭はスカポントンではない。……あいつも大凡考えられる限りで一番当たり障りのない口頭文だと自信たっぷりに渡してきたのでついそのまま読み上げてしまったのだが

「「きや …… !!! かっこいい …… !!!」」

と思っていたら次の瞬間、堰を切ったようにほぼ全員が雪崩れ込んできた。

いや、心配が杞憂で終わるのありがたいのだがこれも予想外だ。

「何歳なの〜？」

「あー………20歳だ」

「どこから来たの？」

「………ロンドン」

「その髪は地毛〜？」

「間違いなく天然ものだ。」

……訂正、数秒前の焼き増し的な光景でしかなかった。

最初は勢いに圧倒されつつ一人一人対応していたのだが、いい加減止まらない質問の嵐 part 2 に額のあたりに血液が寄って行くのが分かる。

落ち着け、これは任務だ。この一連のやり取りもその内の雑務だと思えば

「ロンドン出身って言ってたけど名前が日本人ぽいのは何ですか？」

「……片親が日本人、生まれはイギリスだ」

「趣味や特技などは？」

「趣味は茶葉集め、古武術少々かじってるから運動には強い方だとは思っ」

「恋人はいますか？」

ごめん、やっぱ無理。

バカ正直に答えていくたびにだんだんと投げやりになっていく気がしたが最後の質問に関しては肩の脱力具合が半端なかった。例えこの年頃の女子連中が色恋の話が好きだとしても答えてやる義理は無い。

だが、これ以上聞くなオーラを出しても意に返さず迫ってくるのだ。もういい加減にして欲しい。

焦れてきた俺は試しにもうお手上げだとタカミチに目線でヘルプを要求すると苦笑でガンバレと応援されてしまった。

一応時間は大丈夫なのかと更に空中戦を繰り広げてみるが、この事態を見越して時間を取ってあるらしい。そんな時間を取るなら初めから言ってくれと人が悪い返しに溜息を吐きつつ、取りあえず先程の質問に戻る事にした　勤めて素っ気なく。

「……………ノーコメント、ご想像にお任せする」

がしかし、予想に反してまたもや異様な興奮に包まれる教室内に、俺は頭を抱えそうになる衝動を必死に抑えつつ迎え撃った…………といふよりそれ以外に選択肢が無かったという方が適切だったかもしれない。

「はあ……………」

終わった……………ようやく。

質問の嵐をタイムリミットまで掻い潜りつつ迎えた行事連絡と勝利チャの鐘、だがその後放課後に持ち越される事になった為に今の俺の気分は一気にブルーだ。

「ははっすごいため息だね」

「あつ、タカミチ、さん。いえ、あの後約束させられた“質問の嵐 part3”の時間が迫ってくると思うとどうにも……」

「質問の嵐？」

「いえ、あまりたいした事じゃ

」

今は2時間目のタカミチの授業、英語に付き合うため一緒に職員室から教材を取りに行った後だ。といってもまあ俺は後ろに立っ
ているだけなのだが……

俺も気持ちを切り替えなければと思っていたところでまだ時間もあ
るしその前に一度休憩しようかという彼の言葉に甘えて喫煙所で休
憩。

おれか？ 別に煙草は吸わないが養父がヘビーな人種だったので
う副流煙だとかそういうのはあきらめている。だからと言って俺自
身が吸う気はないが……一応未成年だし。

「まあ初心者にしては上出来だったと思うよ。納得いかない所があ
れば次に活かせばいいんだしさ。はい、お疲れ様。レモンティーで
よかったかい？」

「あ、ありがとうございます。はあ、最近の学生はパワフルです
ね。はは……」

「まあ、君の方が実は若いんだけどね。」

お互いに苦笑を漏らす。どうやらタカミチにも経験はあるようで当
時の苦労話を聞かせてくれた。新米の頃の彼の苦労姿は想像がしに
くかったが、今のクラスを見る限り最近の中学生、というより麻帆

良生はあの手の騒がしさはまだかわいい方なのか。

……あれで結構な疲労感なのにイベント時は更に凄みが増すらしい。
勘弁してくれ……

そんな感じで授業前の十数分程互いの表の職業話から離れ、裏稼業
ある意味こっちが本業 の話題に切り替え軽く論議していた。
奉仕活動を主にする慈善団体と報酬が無くては仕事をしない傭兵稼
業とでは基本的に考え方が違う。

まあ、その中でもウチは変わり種だったのとタカミチの性格なのか、
衝突する事は無かったが。

「高畑先生、こんな所にいたのか」

「神多羅木先生、どうしたんですか？」

そんな和やかと形容しがたい雰囲気の中いきなり開いた扉に反応し
て視線をやると 何やら学園関係者と言うには少々言葉の詰ま
る容姿の人物が立っていた。

ピッチリとした黒いスーツがやに決まっているサングラスにダンデ
イーなお髭。

教師……なのだろうか？ スーツじゃ用務員と言っ事は無いだろう
し、特別講師か何か……にしては親しすぎる物言いだが、失礼なが
らやのつく職業の方にはしか見えないと思ったのは、幸いにも固い口
から洩れる事は無かった。

「実習生の鳴守という新任の……彼がそうか？」

「ええ、彼が今日『西の夜明け』から来た鳴守 音来君ですよ」

「ちよつ！ 畑先生っ」

「大丈夫。神多羅木先生は魔法こじちの関係者だよ。魔法に関してもかなり実力を持っている」

そ、そうなのか……外見で人を判断してはいけないというやつか。あ、いや、ここは素直に反省しておこう。麻帆良に来てから個性が豊かすぎる人達にあっていた所為か、もう驚かないぞと思っていたが俺もまだまだ先入観が捨てきれないようだ。

「神多羅木だ。担当では会うことはいが、広域指導の場では何回か会うだろう」

「どうも、鳴守 音来です」

「それでどうしたんですか？」

「ああ、学園長から言伝を頼まれてな、彼……鳴守君を広域指導員にあてる前に実力を見ておきたいという先生や生徒たちが多いらしくてな。今晚9時に世界樹の裏にある森の一部でテスト兼ねた模擬戦闘を行うそうだから準備しておいてほしいと」

「そうですか……解りました。あ、アインの方には」

「ああ、もう一人の彼女の方には別の魔法先生が伝えることになっ

ている。じゃ、伝えたからな」

「あっはい、ありがとうございます！」

「いや、こちらこそ彼の“雷帝”の手並み、楽しみにしている」

そういつて片手を上げてきた方とは逆に去っていく神多羅木先生、
というより

「雷帝か、ほんとそんな大した人間じゃないんですけどね……」

「おや、意外だな。君の活躍振りは僕も知っているけどなかなか的
をいている思っていたんだけど　まあ、実際に会った印象は大
分違ったけどね」

「……一体どんな印象を持っていたんですか　」

「ん？　聞きたいかい？」

判る。出会って半日も経っていないがあれは意地の悪い事を考える
人間の笑みだ。今までにこの手の顔は何度か……どころではないが
それなりに経験しているので突くべきではないと警告が鳴る。

なかなかこの人も狸かと溜息を一つ。件の印象とやらもおそらく
自分も聞き及んでいる通りの噂話だろうが、黒歴史的なネタは誠に
遺憾ながら事欠かない……これ以上赤っ恥をかく前にここは引いて
おくべきか。

「………やっぱり、遠慮しておきます」

「そうかい？」

そう言つて尚も笑顔を浮かべているタカミチだったが、可笑しいものを見たとばかりに笑われるのはどうにもう据わりが悪かった。

夜、9時。

既に小中高等部の学舎も締め切られ、寮に住む生徒はそろそろ門限が迫つてきたこの時間。

待ち合わせした場所でタカミチと合流した俺とアインが着いたのは直径3?ほどの円形状に木々がくり抜かれたかのようにできた広場。中央に学園長、その周りに数名の先生と生徒と思わしき人達がいる。

神多羅木先生はやつぱ来てたか……ん? 昼間案内してくれた女子中学生もいた。

試しに軽く手を振ってみるが軽く会釈を返されただけで昼間より幾分か固い感じがする。どうやら警戒させてしまったようだ。

まあ、新人の歓迎なんてどこもこんなものだ。まして良い噂があまりないような人間が来たとなれば尚更、言ってみればこのムードは俺の評判の表れともいえる。悲しきかな……

「うむ、よく来てくれたの二人とも」

“今回はわざわざすまんの、頭の頑固な者には目で見てもらうのが一番じゃからの”

「いえ、こちらこそこんな場所を提供して頂いて、ここにいますので魔法関係者の方は全員ですか？」

“頭の固い人って……そんなに信用ないですかね？ 俺達”

頭に流れたエコーのかかった声、念話に自分の波長を合わせる。

俺は魔力の扱いが苦手な所為か念話の波長を合わせるとい事があまり得意ではない。

流石に目の前で相手がこちらに投げかけてくれるのならその限りではないが、全く知らない人間や距離が離れるとてんで使えない。なので横にいる相方から常々魔力の機敏を感じ取れるようになった方がいいと耳にたこができるほど言われているが……今の所改善の兆しは無い……

「うむ、ここには来ていない魔法先生、生徒もいるが問題はない。おっと、そろそろ時間じゃの」

“いや、傭兵という仕事が思いのほか不人気での、これでもなだめた方なんじゃよ”

“まあ、一般的に傭兵は好かれませんか”

「なるほど、でどんなテストになるんです？ 内容については聞かされなかったもので」

そうなのである。ここに来る途中にタカミチにも聞いたのだが本人も秘密だとか言われてこちらは何も知らない……まさかここにいる魔法先生、生徒全員と戦えとか？

……いや、それはないか。タカミチとか本気で来られたらいくらなんでも面倒だ。

新旧両世界でその名をとどろかせている英雄サマがお相手じゃこちらも手を抜く暇なんて無いだろう。

「それなんじゃが……もともとはタカミチ君と戦うということになっていたんじゃが彼が急に仕事が入ってしまったの。出立前にマンが良い地位があつては困ると立会うくらいのなら問題ないということになったので急遽内容を変更し、制限時間を設けた召喚による計30体の鬼たちと戦ってもらつ事になった」

(本当に戦わせる気だったのか……)

しかし鬼か……西洋で言うインプとかガーゴイルみたいなものだったか確か？

だがその程度の相手なら仕事で幾度も戦っている。むしろ対人じゃない分下手な気遣いも手加減も必要無いので返って楽かもしれない。

それというのも連中の消滅には“死”という概念が無く、ダメージが許容量を超える前に自動的に送還されるのが基本なので血みどろの戦いになる事も無い。むしろ戦闘に使われれば術者の盾となり剣となるので一定域の実力を測るのにこれ程適した手段は無い。もっとも、逆の見方をすると目測を誤ればただの使い捨てだ。

「では召喚を始める。皆は少々離れておれ。」

そう言って詠唱を始める学園長。

はたしてどの程度のレベルが呼ばれるのか……

呪文と同時に現れるのは異形の者達。

あるものは額に角を持つ大きな体躯。またあるものは羽を持ち、またあるものは仮面を着け、装束の後ろから尻尾をはやしている者もいる。各々がその体に見合った武器を持ち、それらが次々に召喚されていく。

皆一様に同じ存在はおらず、共通点と言えばほとんどのものが人の体に近い形をとっている。大きさや形状は似ても似つかないが。

「あゝ、久々の人界か。今宵の用向きはなんだ人間？」

その中のひとときわ大きい一本角の鬼が目の前の召喚者である近右衛門に問いかける。

「うむ、おぬし達にそこにおける二人と戦ってもらいたくての、相手を殺さない限りは特に制限は無い」

「我らに戦えと呼んで殺すなどは……ずいぶん変わった用事じゃの」

「して、もう始めても」

「せっかちな奴じゃの、ちヨイ待っておくれ。あちら側と確認をとるので。」

確認とはいうが、隠す気も無い声の張り具合は余裕でこちらまで届

いている。典型的な直情型、猪突猛進、正面を切った戦いを好むタイプだろう。

この手の類は絡め手に弱いのが常。下手に相手の土俵に上がらず奇策で様子を見て狩れる奴から順々に刈り取るが常套。

「見ての通り今回呼んだのは鬼族、烏族、妖狐といったの三種族で構成する30対2の変則式じゃ。制限時間は30分くらいで……」

「いや、5分でいいですよ」

「は？」

そろってハトが豆鉄砲を食らったような顔をされたがこっちは1%も冗談のつもりはない。

確かに2、3体上等な輩もいるがその程度、仮に敵に例外がいたとしても何の事は無い、これくらい対応できなければ俺はここにいないし、似たような仕事は数えきれないくらいこなしてきた。

「前座に30分も戦ってたら皆さん退屈でしょ？俺もこっちに着いたばかりで疲れてますからさっさと終わらせたいんですね」

「いやしかし、いくらなんでもこの数に5分というのは……」

「があっはっはは。いいではないか召喚士殿、我らを目の前にしてそれだけの啖呵を切るとは、今宵の獲物は活きがよいっ」

「おおー話が早くて助かる」

「Master、口調が変わってきています」

「っと　それは話が早くて助かります」

アインの素早い忠告に崩れかけた口調を慌てて修正する。
どうやら気性の荒い鬼達の雰囲気にてられて崩れたようだが、特に波も立たなかったので問題は無いか。

後は2、3の質問と確認を模範的な回答で返し、互いに開始位置に着く。

「いいんですか？　あんなこと言って……」

「いいのいいの、元々顔合わせと……牽制と面子保つのが目的の形だけみたいなものだよこんなの。それに、考えてみればお前と共闘なんて久しぶりだし、ちょうどいいじゃねえか」

「はあ　わかりました。これ以上はいくら言っても聞いてくれそうにないですし」

「そゆこと　これに相手に乗ってきたら儲けものってね」

後ろでアインが恨みがましく何やら文句を呟いているようだが全く気にしない。

戦いは嫌いじゃない。むしろ戦闘時の高揚感は好きな方だ。この戦闘前の身体を震わす緊張にだってそう、徐々に解れていく筋肉の蟠りの感じも、ただ直向きに相手とぶつかり合う事だけに集中する一時もだ。

……まあその雰囲気に度々やりすぎてしまつのはご愛敬……ってそれが今回の長期任務の原因だし笑うに笑えない。

ま、あいつが言っていることだつて間違いないし、たまにはその注意も聞いてやるか。 いつかきつとだけだな。

「アイン、ギアを回せ」

「……………初めからですか、了解」

・コードXXXX、……………クリア認証

・システム・天の歯車……………スタートアップ起動

・思考回路及び各フレーム…戦闘モードに移行。シフト……………移行完了クリア

・ライブラリー……………アクティベート正常起動を確認クリア

・初期武装 アウトバレル フォワード 転送……………レールガン 電磁砲 コンタクト 接続

「魔力炉、各部・各回路・機能共にオールグリーン、Master
いけます」

「うっし、テストとはいえ久々の共同戦だ。遅れるなよっ！」

「Yes, Master」

「契約執行60秒間!! 音来の従者『アイン・リコード』!!」

「では、始めいっ!!」

抑えつけた逸る心を解き放つように、開幕の合図と共に俺達は互い

に大地を爆ぜた。

取立2回目　く人生初の面接、受からにゃ強制送還！??（後書き）

どうでしたでしょうか？

次回から本格的な戦闘に入ります。今までの成果がいかされるんですかねー……元が元ですし（苦笑）

今回は大分修正しました。それこそ話の大筋以外は丸々変えているのではというほどですが……前回より良くなったと思いたい。でなけりゃ初投稿から半年以上俺は何やってたんだと軽くへこみます。

まあ、私の心情はこの際置いておきましょう。大切なのは読んでいただく方が読みやすかったか、今までの反省点が活かされているのかという事です。その上で面白かったと言っただけならばなお良しですが。

さて、あとがきが長くなるのは私の悪い癖なのでこの辺で、28日に最新話も更新するのでそちらもよろしく願います。では、再見ッ！

取立3回目　く慎重且つ大胆に、従者と主人の思惑く

「では、始めいっ!!」

近右衛門の開始の合図と共に左右に別れる俺とアイン。
向こうでは最近単独任務が多かったこっちとしては久々の共同戦、
そういった意味ではこの試験はちょうどよかった。

大きく弧を描いて距離を窺う。

全体の把握時間と言ってもいい。やるからには速攻が信条だが戦闘
中に考えるのは苦手だ。俺の頭はそれほど出来ちゃいない。

だから敵の数、今回は模擬である為予め30と分かっているがそれ
らの体格、身体的特徴、武装と予想される戦闘パターンや得意とす
る距離を推測する。攻撃に移るのはそれからアインと組む際には
これが必勝パターンだ。

もつとも

“データ照合完了、パターン適合率69%……誤差±0.9%……
右中型体色青の一角10時方向、崩せます”

「　　シッ!　　つとまずは一匹!」

そう言った計算は相棒の仕事だったりする。

“ 挟撃、0.8秒 ”

「オ ライっと」

「な!？」

「ワリーな二人とも退場、だっ!」

後退した体を片腕の力だけで宙に飛ばし、反動を乗せた刃で驚愕の表情を浮かべている二体の首を飛ばす。

敵の上空からの飛来に羽音一つ響かせず気配を絶つ技量は確か、それを俺自身捉えていないわけではないが方向が、把握できる程感覚が温まっていないのも確かだ。

その状態で挟撃にかかった烏族の二体のタイミングを完全に見切ったのも全て偶然や勘ではなく、後方で控えている彼女が割り出したものだ。

アインの一番の武器はその両手に構える50?の弾丸を高速で撃ち放つ砲でも武装を自在に転送できる事でも無い、何よりもその情報量と処理速度にある。

稼働から5年という歳月を全て秒単位で記録している彼女の戦闘記録は優に10万を軽く越す。

もちろん全てが彼女自身という訳ではない。彼女の記録の中には明らかに自身の視視界では無い、つまり別個体の記録も収められているらしい。彼女がどういう目的で造られたのかはマスターである

俺自身知らないし、拾い主でしかない俺はドールである彼女の機能は門外漢だ。

だがしかし、僅か0.2秒でその膨大な量から類似パターンを割り出せる演算速度、何よりただ一人、コンビを任せられる相棒として俺は彼女を信頼している。

“4時方向距離500、速度90？飛来物”

「よつと、あそこか」

「shoot」

回避行動から狙撃者の位置を見収めていると遠慮なく脇すれすれに通り過ぎる銀光、漂う硝煙と耳に残る発砲音の後に滞留させた“魔法の射手”の光球が虚しい……

「まったく、遠距離は出番無しだな俺」

「無駄口は後にしてください。それよりも0.4サイクルの誤差でタイムラグす……少し訛りましたか？」

「はははっ相変わらず手厳しーね、どうも」

まあ銃器というものを扱い始めてからはもっぱらアインが後衛で主人である俺が前衛と主従の関係としては型破りな戦い方をしているが、このように感知・索敵から狙い撃つまでの間隔が人間には不可能なレベルで短いのだからどうしようもない。

せめて火力で勝れているので魔法使いとしての面目は保たれているが、近頃の兵器事情を鑑みるに時間の問題な気もする今日この頃。

「2・5・8時方向数6、内8時方向に」

「薙ぎ払え！ 雷の斧！！」

何やら火球を滞空させていた一体をもまとめて薙ぎ払う、その内の一体が有効範囲から逃れたのを確認して手に持った洋剣を投擲して脳天を吹き飛ばす。

元々スロースタータな俺だったがアインの言うようにそれを込みで何時もより合わせるのが遅かったらしい。どうやら半日以上以上の長旅で身体が思った以上に固かったというのもあるだろうが……いや、しばらく任務も別々で感覚が鈍っていたのは俺の方だったとは何とも恥ずかしい話だ。

「ま、ようやく感覚も戻ってきたし、そう言いなさんな」
『転送』^{フォワード}グレイブ8番^{エント}　こっから挽回して見せるからさ

「　　起ち上がりの遅いのはそのままですか……まあ今はいいでしょう。相手方も待つてはくれないようですよ」

ようやく相棒の指示にも反射で応えられるまで解れてきたのを確認し、左手に持っていた槍を右手に持ち返す。

確かに、振り返らずとも犇めいた熱気と殺気が背中にひしひしと伝わってくる。

（いいねー……暑っ苦しいのもこういうのは大歓迎ってね！）

「ほんじゃま、アクセルかけていきますかっ」

上段から一旋、矛先を蠢く相手の向けて脚力に魔力を上乗せして駆

け抜ける。

「なんともまあ……凄まじいの一言だね」

正に我が目を疑う光景だった。

一刀あるいは一投、彼の一動作は一撃で敵を確実に屠り、瞬く間に数を減らしていく。

その数18。

始めた30から3分足らず、いや、始めのもたつきから彼がエンジンのかかりの悪いタイプだったとしたら2分前後で半数以上を屠った計算だ。

確かに動きは雑だ。僕から見れば隙というより余計な動作が多く見られる。

態とか、全力を見せる気が無いのかは分からないが、それだとしても一介の使い手にしては十分すぎるレベルの動き、或いはそう見せる事が目的なのか、だとしたらこの試験の目的は半分失敗している。

教師陣やこちらの関係者との顔合わせ及び彼の实力を知ってもらおうという事では十分成果を出している。

だが同時に噂が拡大して実体がつかめない彼の实力を知っておきた

いという狙いが無かったわけではない。

「……すごい、今度は二刀で」

横にいた魔法生徒の一人が驚愕の声を上げるのを耳に視線を戻すとそこには先程まで持っていた槍ではなく二対の細身の湾刀を振りかぶる彼の姿。

そう、ある意味彼の實力を測らせない要因の一つがそれだ。

転送系の魔法、または魔法具を使っているのか、彼は一つの武器に執着せず一定の敵を倒すか距離の空いた敵に向かって投擲して一つ一つを使い捨ての様に扱う。

長刀から槍、戦斧、中には投擲用の鉄棒を連続で使用したり、そして今使っている二刀の湾刀。どれも扱いに関しては一流とは言えなすが全て並み以上の實力を見せている。

要は彼の評価はよくて中の上止まり、皆驚きはしているものの脅威とは認識しないその程度。むしろ皆の関心は後方でカバーをしている彼女に移っている。

僕自身彼の實力を測りかねていた。

いたが

「まあ、初めはこんなものか……」

考えてみたら彼の本業は傭兵だ。どちらかと言えば何でも屋近い部類だと聞いているが売りが實力だというのは変わりない。

なら全力など見せないのは定石、言ってみればこれは彼らにとって

も自分達の実力を見せる場で曝す場でもある。警戒するのは当たり前だろう。

出来れば同じ職場で働く者として隠し事無く付き合いたかったが、今日はここまでか。

見れば既に召喚された妖は既に6体、彼の“今の”実力なら1分としてかからないだろう。

いや、もしかしたら

“規定値より6%over……ギアを一段階下げてください”

「へいへい……つたく、やりにくいねー……」

これで何度目か分からない出力ダウンを行う。

俺がいついつい戦闘に熱中しやすいタイプなのは理解している。まあ、理解しててもこうして規定値を超えているのだ。そう言おうもんなら後ろから文句が飛んでくるのは確実、よって大人しく強化と放出量を調整する。が、なんか納得いかないのは気のせいだろうか？

「おっ？ 奴さん思いきってきたな」

戦闘開始から既に予告の半分といったところ、今は戦闘を空中に移していたのだが、飛べない連中の中に術を使える者がいたのだろう。地上からの炎弾による波状攻撃、それに加え残りの全飛行戦力の突貫。

「ま、嫌いじゃないぜそういうの」
「下がってください」

「って、あのなあ……」

「弾頭は私の方で処理します。Masterは飛行戦力の掃討を」

「いや、簡単に言ってくれるけど結構強いよ？あいつら」

「バックパック バックパック コンバート コンバート 多弾頭弾 スプレッドハレット 接続 チャージ システム移 シフト 行……完 コン
「背部装甲 バックパック 換装 コンバート 多弾頭弾 スプレッドハレット 接続 チャージ システム移 シフト 行……完 コン
ブリート」
了……問題ありません。私の解析結果は今の出力で約99.99
98%迎撃可能とでています」

また妙に半端な……残りの0.0002%はなんなんだと問い詰めたいが碌な答えが返らないのは目に見えている。多少なりとも学習しているのだ俺は。

「来ます。迎撃急いでください」

「あ、っ、わったよ！！任せたんだから文句は言つなよ！！」
だというのに尚も急かす敵と身内、正直鬱憤も溜まっている。もういい、そうまで言つなら今の全力でやらせてもらつた。

『瞬け雷光 火の柱よ 豪雨となりて舞躍れ！』

「全弾ロツク、タイミングは合わせます。お先にどうぞ」

こいつは……俺が選んだ手を聞いてまだ涼しい表情 元々無表情で銃口を下に向けたまま応える。

カチンと頭にくるが落ちつけ俺、八つ当たりの的は目の前にいるんだっ！

『百破雷舞！！』

「Burst。」

予告通りに放たれた魔力は術式に従って上昇、虚空に描かれた魔法陣が発光を強めて火花を吹く。

幾百にも瞬く雷光、怨鎖を籠めて放たれた雷は文字通り雨の如く降り注ぎ、敵を容赦なく貫き撃ち落とす。

「目標、沈黙を確認……残敵数6、撃墜コースです」

そんな撃ち落とされて消える敵を眺めて若干すっきりした面持ちでいると横から現実的な数字が飛び込んできて意識を引き戻される。

……少しは余韻に浸るといふ間を知らないのだろうか？

見ればあちらもあれだけあった弾幕を散弾の一発で全て撃ち落としている。相変わらずの精密射撃に舌を巻く思いだが余韻を台無しにされた身としては素直に褒められない。

なので、頭をかきつつ話に上がった時間を確認する事にして自分の中で気持ちを直す事にした。

「時間は？」

「3分41秒……予定より早かったですね」

「ああ、つつても中には一体あたりの持ち時間以上に粘られたのもいたけどな」

「それはMasterが調子に乗って斬り合いを続けるからです」

「ま、まあ、予定overは無いんだし結果オーライってことで」

「57、58、59、4分ジャスト　そろそろ終わらせましょつ」

見事にこちらの主張を無視してくれる相棒に額に皺が寄るのを自覚しつつ剣を虚空から取り出して気持ちを抑える。

そつだ落ち着け、最近のこいつの対応はこんなもんだつたじゃないか。そりゃ最初の頃は反応もつまらなかつたからもつと遠慮なくこないなんて言つた俺だつたが、今思うとあの頃の素直だつたのが懐かし……

「左右の小物は私が押さええます。Masterは中央大型の一体を……行けますか？」

これだ、相変わらず容赦ない、それでいてこちらが余力を残しつつ

スレスレで通れる要求を投げってくる。

まあ、押さえると言ってもこいつがそう言うのは自身が片づけると言っているのと同義語だ。

「はいよ」

だからまあ、たまには主人らしくパツパと片づけて加勢しましょうかね。

何しろ戦闘開始から小難しい所はまかせっきりだ。ここらで一回良いとこ見せないと計画通りとはいえあまりにも不甲斐ない。

心持ち魔力を高めつつギリギリまで放出を抑える。放った後はお小言をもらうだろうがこれくらいの意地ははらしてもらわないと割に合わない。

横を見たアインはまだ気付かない。

長年の付き合いから割り出したラインを超えないように慎重に、かつ普段通りに、俺は最後の先陣を切った。

取立3回目　く慎重且つ大胆に、従者と主人の思惑く（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

今回は短めですが大幅に修正しました。何と言っても当時は初の戦闘場面、それだけにここはひどかった……ま、まあせっかく直して見たので前に一度見た方も初めて読んでくださる方にも楽しんでいただけたら幸いです。

ご意見、感想等がありましたらよろしくお願ひします。誤字脱字等も受け付けますのでその際はよろしくお願ひします。それでは再見ッ！！

取立4回目　〜今日から俺も一教師！　……の前の落とし穴〜

暗闇の中、常人には光が瞬く程度にしか見えない程に離れた特等席、傍らに従順な使用人の如く控えた従者である少女を従え、彼女はようやく終えた演目に溜息をつく。

その胸に到来する思いは単なる落胆か、憤慨か。

だが

その少女の口元は徐々に綺麗な三日月を描いていた。

正直言つて期待外れ　　というのが最初の印象だった。

型に嵌まったお利口な教科書通りのつまらない三文芝居を見せられている気分だった。

無理なく過不足もない安全策。

或いは何重にも猫を被った笑顔に底知れぬ不快感を抱いたような…

…とにかくいい気分じゃなかった。

そこそこに名のある奴が来ると聞き、裏で狸どもが何を企むのやらと思えばその日の内に顔合わせを兼ねたテストを行うという。

学園都市といっても私にとつてはその中の映像は似たような光景を焼き増しされたものだ。キャストが違つても大筋が変わらない、そんなものを5度も見せられれば興味が薄れるのも当然、新鮮さが薄ければ食指も動か無くなる。

そんな時に小さいながらも舞い込んだニュースだったのだ。諸事情により学園圏内から出る事の出来ない私にとつてそれは少なからず期待もあつたわけで、目の前の光景に憤慨したのは致し方ない事だったと言えよう。

例え八つ当たりと分かつていようと、いや、分かっているからこそ脳内でどう学園長シジイにいちやもんをつけようかと考えていたそんな時だった。

「……………つまらん……………が暇を潰す程度の肴にはなつたか」

それは特に大きな変化ではなかった。むしろ想定内の、先程となんら変わらない退屈な光景。

だが、男が瞬かせた雷光を肌で感じた瞬間、正しく雷で撃たれたよ
うな衝撃を受けた。

唐突に訪れた疑問、確実にして確信に近いそれは疑いようもなく、そして久しく感じる事が無かった感覚。

当たり前だ、この世界でそれが存在する事は極稀なケースだ。

だからこそ承服しかねる。小骨が喉に引っかかるような不快感、結論だけ出されて過程を解かされるような不可解さ。

とにかく情報が足りない。

恐らくこれと同じ感覚を憶えたのは都市と名のつくこの麻帆良でも私ぐらいだ。見た所あのタカミチですら気付いていない、それほど微弱で稀有な反応だったのだ。まああの学園長タスキなら何かしら気付いたかもしれないが……奴が奴である以上限りなく零な話だったな。

切り替えた思考、腰を上げ見上げた先には戦闘を終えて何やら騒いでいる一団。

それは私の嫌う、目障りな一場面だった　　なのに口元が愉快につり上がるのは何故か？

思考は一部を除いて正常、むしろこの10数年は錆ついていないかという程退屈だった事を考えれば正常な方だ。

身体の方は熱が湧くような騒がしさを覚えている。

いや、自身に問うでも思考の海に埋没するまでもなく答えは明確だ。何しろ私が戸惑ったのはいきなり答えだけをつきつけられたから、つまりこの高揚感は疑問その物の見方を変えた先にある。

だからコインを返すように、その作業に難しい動作は必要ない。気付けばあまりに単純な理由だったのだから。

「ククク ツ、いいじゃないか！ 鳴守 いや音楽先生か？ ああ、歓迎しよう。私はお前に興味が出てきたよ」

仰ぎ見た月は残念ながら満月を過ぎた十六夜、だが今更機会や時間に焦れる私ではない。せっかく舞い込んだネタだ、じっくり外堀から埋めさせてもらおうか。

耳に残る絶叫に余韻が台無しではあるが……今日は不思議と気分がいい。

「ふん、たまにはジジイの口車に乗ってみるものだな……これなら私が出てみるのも つとそれでは意味が無いか……茶々丸、奴のデータは」

そこでいつもなら即返ってくる返事が不在だった事に気付いた私は横を振り向いて驚いた。

「……………」

視線の先を確認する事など私には造作もない。我が従者、絡繰 茶々丸がその瞳のレンズに収めていたのは件の青年、鳴守臨時教諭の従者である。たしか

「 アイン・リコードとか言ったか？ 珍しいな、お前が興味を持つとは……確かに、あれは私の目から見ても珍しい型をしているみたいだな」

私は長い事こちらの世界に居を構えていた。対して彼、彼女等は魔

法世界出身の活躍の場も知る限りでは魔法世界から出た事が無かった筈だ。規制の厳しいこちらと違って魔法世界むほうせかいの世界はある程度おっぴらに研究ができるだろうが、いずれにしる旧日本の様に鎖国状態に近い世界だ。新技術の一つや二つ出来ておかしくないが…… 仮にも“人形使い”ドールマスターの二つ名冠した私が答えられないのはなんとも釈然としない。

こうして齡2歳の従者が他人(?)に興味を示しているのだ。先達としてはしっかりと答えてやりたいところだが。

「なんだ、あのドールに対抗心でも持ったか？」

「いえ、マスター。彼女の機体性能は目を見張るものがありますが、それだけです。私の感情プログラムに“劣等感”や“嫉妬”といったものはまだ確立されていません。したがってそのような表現は不適切であるかと……」

表情が読み取りにくい茶々丸が眉間に皺を寄せているのを見たときには少々驚いたが、劣等感と言葉に出てくる割には自覚はなしか……

「まあいい、それで……調べは付いたのか？」

「それが……魔法世界のデータバンクにハッキングしたところアハト・ジーベンス、並びに鳴守 音来なる人物の経歴は7年前より以前のものがつかめません」

「何？ どういうことだそれは」

はつきんぐ……、それ自体の詳しいことは解らないが茶々丸の情報収集能力には一目置いている。私の数少ない娯楽でもあるし、何よ

り情報は武器になるといふ事はいつの時代も変わらない。

「秘匿度AAA級……もしくは、その」

「ん？　なんだ、言ってみろ」

こいつがこうも言い淀むとは珍しい。ハカセが設計した学習機能と感情プログラムは大したものらしいが私が魂を吹き込むドールと違ってそれを確立しているわけではない。よってその機能は自己学習、人の様に学び蓄積して行く事で“感情”その物を作り出す。

そこまでいければノーベル賞物だとかなんとかハカセが長々と語っていたが、私にとって興味の範疇外だったので右から左どころか耳を解さなかったのは言うまでもない……が、私達魔法使いの論理の外にある人間が作った“人形”　というのにはいささか抵抗があるが　それがこうも人間らしく困った表情を浮かべるのには感慨を覚える。

「いえ……非科学的なのですが、適切な言葉が見当たらないというか……まるで初めから存在しなかったような、煙のような印象を受けます」

……どうやら、ハカセの腕も大したものらしい。

稼働して2年弱のそれも人に近い成長を見せているようだ。今度何か感情面で学習用に本を読ませるのもいいかもしれないな。

「ふむ……いや、あながち間違いではないかもな……やつのギルドのマスターは？」

「はい、そちらは……『西の夜明け』ギルドマスター、リヒト・バイチエン。もとは『紅き翼』『悠久の風』のメンバーだった彼が戦争孤児の身元引受けにと始めたものらしいですが、今では魔法界屈指の傭兵ギルドです」

「ほう、あのひよろいじいさんがな」

リヒト・バイチエン。

かのサウザントマスターや、千の刃の異名を持つジャック・ラカン程ではないがそれなりに高位の魔法使いだったな……あのバカが麻帆良に私を封じてから『紅き翼』については逐一情報が入るようになっていたんだが……鞍替えしていたとは、道理で聞く筈が無い。

しかし、現れたのが7年前、経歴は不透明、明らか扱いきれていない大量の魔力、それも御しきれない非効率さ、程良く狂気に染まりきっていない精神の不安定さ……面白いじゃないか。

「クツクツクツ、面白い、面白いぞ鳴守 音来……やはり貴様には退屈させられなさそうだ」

この土地に縛られて10数年……すでに飽きなど通りこしていたが……私の運もまだまだ捨てたものじゃないらしい、なかなかのおもちやを見つけられたようだ……

「……………欲しくなってきたぞ、あいつ。」

- 本当に行くのですか、リヒト。

- 止めんなよ、こっちはうるせえジジイがいなくなって清々すらあ。

- ほ、口の悪さは相変わらずじゃの。

- これからどうするつもりなんですか？

- 戦災孤児を受け入れる為の施設でも造って、隠居生活でも送るわい……と行きたいんじゃないがな。収入のために何かしらせんとならんのお。

- 生命保険で一発じゃねえか？ 積んでんだろ？

- まだ死ぬつもりはないわ。この筋肉ダルマめっ！

誰だこいつらは？

これは髪はえてるけど養父さん……だよな。

このガキは……俺？

こんなとこ俺の記憶には……っ！

- ま、元気でやれやボウズ。

- そうですね…… 君、短い間でしたがお元気で。幸運を祈って

ます。

- 神とか信じるくちじゃないだろうつに.....

..... p i p i p i p i p i

- おや、何のことやら

- まったく、おぬしは

..... P i P i P P i P P i P i !

なんだ？ 聞こえねえじゃねえか

P i P i P P i ! P P i P i ! ! !

- A M 6 : 0 0 -

「んー.....夢、か.....」

カチリカチリと規則正しく鳴り響く電子音。横を見ると手に収まる一つとは別に鉄屑が一塊転がっている。脳がそれを理解する前に首がぐるりと上に戻り、瞳が天井を捉える。

そこには

「知らない天井だ……」

「……脳波チエック、反応弱……低血圧と診断……記憶への障害は認められません」

「……おまえ、最近ツツコミがが速くなってないか？ てかそれボケ殺しだし」

朝からよくわからん夢を見て目が覚めたらこれだ。せめて今日は良いことあると願おう。

身体を起こしながら今だに枕元で自己主張している安眠妨害のもとを止める。

「おはようございます、Master。魔されていたようですが、今日は随分夢見の悪かったようですね」

「んーっ、んあ……そうさな、なんか変な夢だったよ。あ、そうそう！ 笑えるぜ？ あの養父オヤジに髪生えてんのっ、今じゃつるっつるなのになっ」

俺の記憶上、養父の頭髪の裸地具合は昔っからのからかいのネタだっただけにこれはツボに入ってしまった。

それというのも昔っから理不尽な要求や訓練を課せられ逆らおうにも力ではまるで勝てなかったのだから子供ながらの反抗心だったのだらう。

「……それは、他には何かありましたか？」

「ん？ お前がそこまで食いつくなんて珍しいな？」

一人思い出し笑いに陥っていた状況にアインのいつもの波の無い口調が割り込んできてようやく落ち着きを取り戻す。

いつもより二割増ほどの表情は無に近かった方な気もするが、聞かれても別に答えに困る様なものではなかったので憶えている限りを順を辿って話していく。

「んー……後は、最後に筋肉ムキムキのむさいオツサンに、魔法使いのローブ羽織ってる笑顔が胡散臭い兄ちゃんが出てきたな」

「それはまた……なんとも妙な夢ですね」

「だろ？ 養父^{オヤジ}以外まったく見覚えなかったしなー……まったく朝っぱらから妙なもんを……どうせならもっと」

「もっと、なんですか？」

「あ、いやそのっ、たらふく飯食ってる夢とかをだなー」

決してエッチな妄想なんぞしていませんっ

あ、いや……もうちょっとオイシイ夢を見られたらな〜とか脳裏に過ぎった気もしなくもなかったりする。

アレだ、最近成人体でいる期間が長かったから精神が肉体に引つ張られたとか、そんな感じな筈で本心ではない筈だ……たぶん。

「いえ、それもある意味Masterらしいですが……回答次第で

は誤解を招く恐れがあるので留意しててください」

あの目は絶対俺の話信じていない目だ……
従者からの不当な扱いにここのところ信頼関係が揺らいでいる錯覚に陥り慌てて話題を変更する。

「ああ、OK OK　　っとそつだアイン」

「はい？　何でしょうか」

「ここ何処だ？」

「……………ここは麻帆良学園内の学生寮、管理人室です。昨夜の事は思い出せませんか？」

「き、昨夜か？　えっと……………」

何を今更という絶対零度もかくやという突き刺さる視線の攻撃になんとか気付かない風を装い昨日の出来事を思い出す。

昨日、確か借金返済の為に旧世界の日本とかいう国に

「……………あ、借金増えたんだ」

「……………いえ、それも間違いなく重要なことですが、今の会話の流れだとこの部屋にいる経緯についての事だと思っております」

「おまえに会話の流れに関してつつこまれるとはな……………まあいいや。えっと？　昨日昨日……………あー……………ダメだ、顔洗ってくる。洗面所は？」

今だはつきりしない頭を抱えてアインに洗面所まで案内をしてもらう。
寮とか何とか言っていていたが意外と広いようだ。

冷たい水で今だ抵抗する半身を無理やり叩き落起こし、傍らに待機していたアインからタオルを受け取る。

「それで、……昨日の事だったよな？」

「はい、広域指導員のテストという名目での模擬戦闘を行った後です」

「んー……………」

「なんじゃ？ツじゃねえだろ！！ テストだから多少は気にせず存分にやれつつたのはそつちだろっ！！」

「いや、そうじゃが……ホレ、受託契約書の欄の「」

「ね？」

そつだ、こんな感じで戦闘後に……何度見てもム力つくな。

アレは昨日の実力テストという名の 際の終盤に俺が使用した

魔法、“百破雷舞”といういわゆる雷を雨の様に降り注がせる技がどうにもまずかつたらしい。

この技、ただ雷を振らせるだけでは下級の雷系呪文と変わりがなく、耐えられればただのスタンで終わってしまうという結論から改良を加えたオリジナル呪文である。雷単体の威力を減らし手数を増やした上で炎系の応用で着弾時に爆発する効果を加えてみたら大当たりだったという次第だ。

まあそれがどうしたのかというと、それは目の前の惨状が物語っていて……

森々と広がっていた所々に荒地が形成され、中には結構な年数と貫禄を誇っていただろう太い妙な切れ口をした切り株などが乱立し、違う意味で騒然たる光景を作り上げていた。

ここまで言えば分かるだろう。

つまり、八つ当たりではなかった俺の一撃、というか数十撃は敵の殲滅に勢い余って周囲の森林を破壊してしまったのだ。

ちなみにここは学校の私有地。学舎から遠く離れ、利用する者が皆無だとしても学園の資産を破壊した罪は変わらないそうなの。

そして今現状、テスト内容による不可抗力だという俺の猛抗議も虚しく契約内容の一部に記載された事項により沈黙を余議されなくされてしまう俺であった。

頭が痛い……

「っ……っことは」

「借金の増量ですね。おめでと〜ございます、Master」

「おめでたじゃねええ!!」

おかしい。

何がおかしいって？

借金返済の為に態々旧世界の、それもゲートから遠い極東くんだりまで来たというのに何故か借金増額というこの悪循環が間違っているんだ!

「落ち込んでいるところすまないんじやがの……」

「正式に採用も決まって職の方は問題ないんじやが、住居の方の

」

「はっ! まさかの野宿しろとっ」

「いや、そこまではゆうとらん。じゃが、今教職員寮の空きがなくでのー、おぬしの場合はどこか仮宿を手配するわけにもいかんし……といこうとで学生寮の管理人室が空いているんじやがいいかの?」

「こちらとしては、場所を提供してくださるだけでもありがたいので構いませんが……」

「待つてください学園長! 彼をあの寮に住まわせる気ですか!」

なにやら講義をしている昼間の少女……、どうでもいいが俺彼女に嫌

われることしただろうか？

「何か問題あるかの？」

「問題も何も、あそこは女子寮で」

「彼は信頼できる、今見た通り実力も十分じゃろう。何かと役に立つだろうて」

「護衛なら私がいいます！ それに龍宮だっていますっ」

話は二人を中心に、周囲は我介せずの態度で進んでいく。が、なるほど。今日の仮宿が学生寮だとは今聞いたばかりだったが、そこが女子寮ともなれば抗議の一つも上がるだろう。

一応この身は成人男性のそれだ。中身は子供とはいえその事實は学園長である近右衛門を除いてタカミチのみ、二人にも他言無用でお願いしたので講義中のサイドポニーの彼女が納得いかないと吠えるのも頷ける。

……しようがない。

長旅と不慣れな乗り物のラッシュで若干ベットが恋しくあるがこれから付き合っていく同僚兼教え子に反感を買うのは不味かるう。

ここは一つ大人の対応というやつで

「ま」

「待ってください学園長」

「む、何かの？」

乱入した従者によって出鼻を挫かれた……

「先程の宿を手配してくれる件に関しては感謝しています。ですがこうして本来の住人である生徒側から抗議が上がるのでは土台無理な話です。折角頂いたお話ですが、今日一日程度なら構いませんので明日までに仮宿を手配しておいていただけますか？」

「いや、しかし……」

「Masterも、それで構いませんよね？」

「……ああ、構わないけど」

不貞腐れている感が前面に出ている気もするが俺が提案しようとした事と概ね違わないのでグーの音も出ない。少々見つとも無いかもしれないが見せ場を奪われて身としてはこれくらいしなないと割に合わないのだ。

「では学園長、申し訳ありませんがそのように、そうですね……不安があるようでしたら地下の用具室でも構いませんよ？」

「……はて、いくらなんでもそれは失礼じゃからの。空き教室に簡単じゃが寝泊り用の道具を用意させておこう」

……一瞬二人の間に黒いものが見えたのは気のせいだと思いたい。というか事を荒立てたくない様な事を言っておいて自分はちゃっかり牽制してるってどうよ？

ハラハラと逆にこっちが不安に駆られる中、学園長とアインの打ち合わせが終わり、この日は学園校舎の一室を間借りする事になった。森の状況も主たる原因はこちらという事で撤収作業を手伝い、目処がついた段階でタカミチから今日はこれでいいと言われて身支度を済ませる。

もっとも手荷物は最初に来た時から鞆一個なので大した手間ではないが。……ちなみに大きな家具、日用品その他はある所に転送管理してもらっている。まったくもって従者様々である。

「それでは、今日はこの辺で失礼します。先生方も本日はご足労いただきありがとうございます」

「うむ、ではまた明日の。授業への参加や仕事の流れはまた明日の朝に簡単に行くから早めにの来るようにしておくれ」

「はい、それでは」

会釈を返して先導する先生の後を追うべく一步を踏み出そうとして

「あ、あのーっ！」

「ん？」

そこには先程、猛抗議していた筈の少女が顔を赤くしながらも何故か引き止める様に頭を下げていた。

ただ思い出したただけなのにすっごい疲れた気がする。

「思い出しましたか？」

「ああ、イロイロと……おかげ様でな」

そうですかと相変わらずそっけない返事を返して渡したタオルを洗濯し始めるアイン。

これでこいつに異性を感じると言われても無理と即答する俺はいたって正常な筈だ。

あの後、紆余曲折があつたが、例のサイドポニーの少女 刹那というらしい が後ろに控える褐色の女性に何か言われたのかたどたどしいながらも先程の問答無用の反対抗議に対して謝罪を述べ、取り合えずという形で管理人室に寝泊る許可を貰えたのだ。

その変わり様には正直驚いたが、後ろの女性が何を吹きこんだのかの方が気になったりもする。

まあでも、ちゃんとした寝床が確保できたのはこちらとしても文句なんぞ言う訳もないのでこうしてお邪魔させてもらっている。

うむ、彼女も何か事情があつたのだろう。結構良い子なんだな。

「Master、朝食ができてますので早めに召し上がってください。現在AM 6:16分、予定時間ではAM 6:45分には出ます」

「早いな？ 始業は 8：45分だろ？」

「…………… 忘れたんですか。昨日の会話Logによれば高畑先生より今日HRを担当してみないかと言われてMasterは了承しています。」

…………… まずい、すっかり忘れてた。

どうする？ どうするよ俺！ そんなの楽勝って引受けたは良いけど何言うのか全然考えてねえ……………

頭を抱えて必死になって内容をひねり出そうとしていると…………… スツと差し出される紙…………… 紙？

「これは？」

「カンペ、カンニングペーパーと呼ばせるものです。Masterの事ですからおそらく忘れているだろうと今朝の内に一般的なスピーチ文を検索し、昨日高畑氏が話していた連絡事項と照らし合わせて作成しておきました」

若干馬鹿にされた感はあるが…………… アイン Good job！！ さっきの異性のカケラも感じねえとか取消す！ 愛してるぜ！！

「でかした。これがあれば今後のHRでも「なお、その紙は自動的に消滅します」…は？」

「マスターの言いつけであまり甘やかすなと言われていきますので。これは今回だけの緊急措置です」

……あのクソオヤジっ

「はあ、もういい。飯食お」

「そうしてください。出発まであと25分です」

「こついうところだけは機械的なんだよな……」

「ハンカチはもちましたか？」

「……持った」

「ティッシュは？」

「持った」

「お弁当は「さつきカバン」に入れた」……お財布h」

「持ったよ！ てかおまえどこの主婦だよ！？」

そう、ギルドにいる頃からしょっちゅうあったのだが朝外出する時にされるお決まりのやり取り……俺は小学生か！！（いいえ、まんま歳は小学生です）

「もう俺も10歳だぜ？　いつまでもそんなガキみたいな」

「数えですけどね」

「……………」

「む？　5分のTime lossですMaster」。急ぎまじゅう

- status 更新

・主人公の欄に「低血圧持ち」が追加されました。

「いや、ないから。そんなstatus……」

HRを終えて今は1時間目までの準備時間だ。

次は……数学だったかな？

今日のHRは鳴守先生が担当していた。

昨日の今日で高畑先生並みにすっかりとした内容でちょっと驚いちやっただけ。あ、それは失礼だよな。

私は今次の時間まで余裕があるので亜子たちとおしゃべりをしていく。

教室には今日までと言われた宿が間に合わなかったのか慌てて机を囲む生徒達がいるが幸い私達のグループにはいなかった。その話でまき絵がやってきてきているという事に皆驚いていたが、内容を見て修正をやりわりと諭してあげた後だったりする。

その横で相変わらず会話を続けるのは酷かもしれないけど回答の具合を見てあげているのでこれくらいは勘弁してもらおうというのが暗黙の了解だ。

ちなみに今話題に上がるのは先ほどまで壇上にいた鳴神先生の話だったりする。

件の彼は次の時間もいるようで今は教室の入り口近くにいる。どうやら先生を待っているようだ。

が、今朝はどうも元気がないように見える。

「どうしたんやるか？ 鳴守先生」

「うん、今朝から元気ないよね」

「あれじゃない？ 今日の運勢最下位だったとか？」

「そんな乙女な…彼女と喧嘩したとかじゃないの？」

「そういえば学生寮から女性と二人揃って出で来るところを見たって桜子達が言っとたね」

それは…また朝倉とかが飛びつきそうなネタだね……ご愁傷様です。

先生。

そしてまき絵、君は早く問題に戻らないと時間が無いと思うんだ。

「え？ 私も一緒に歩いてるも見ただけど喧嘩してるようには見えなかったけどな、でも誰だったんだろあの女のひと？結構きれいな人だったけどな」

「じゃあ聞いてみればいいじゃん。ねえ、鳴守センサー！」

「あ、ちよつとゆるいな！」

「元気ないじゃん先生。何かあったのー？」

「ん？ なんだ明石、達かー……なに、大人の事情（借金）ってやつさ」

（＊主人公の方が年下です。）

「なんだ、占いの話じゃないんだ……」

「恋人と喧嘩したとかじゃないの？」

「今朝の女の人だれ？愛人？まさかの三角関係！？」

いや、まき絵……それはドラマの見過ぎだと思う。

「おまえらっ……人をどういう目で見てるんだ？」

「ジゴロ？」

「助ごまし？」

「どっちも似たようなもんだろ……てかどこでそんな言葉拾ってるんだよ」

最近の漫画とかドラマじゃ普通だよ、とか、まき絵のはどうも偏ってる気もするけど。

まあ、でも私もそういうのを目にするにはあるしでたためではないと思うけど……先生って意外と古風？

「第一おまえらの歳で人の色恋なんてまだ早いんだよ。恋の一つや二つしてから首突っ込め」

「そんな、先生じゃあるまいし経験あるにきまつてるじゃん！」

「ほう、なら明石は恋愛していると？」

「もちろん！」

「『えっ！』」「『えっ！』」

私も裕奈に好きな人がいるなんて話聞いたことないけど。

「えっ、とは何さ！ えっとは！ ちゃんと証拠だつてここに……ホラッ！」

どうだと胸を張って裕奈が取出した写真には

「明石教授？」

「あれ？ 鳴守さん裕奈のお父さんと知り合いなん？」

「はあ！？ 父さん？」

そう、裕奈が見せたのは今現在の年齢の裕奈が父親に抱きついて
いる写真……

……

……

「……でさあ、「ってスルー！？」……いや、おまえ。これを見せら
れても、なあ？ てか俺の話題転換術を速攻でつぶすとは……空気
Yome！」

「ひどっ！」

Heip! と弁護を求めて裕奈がこちらを見てくるんだけど。

あ、思わず目をそらしちゃった……ごめん、裕奈私には何も言えな
いよ。

取立4回目　〜今日から俺も一教師！　……の前の落とし穴〜（後書き）

はい、そんな感じでお送りしました第4回目でした！

内容的には前回の戦闘パートから少々日常寄りへ、3回目より修正度は低いですが増量してしまいました……

うゝむ、向上……しているのだろうか（滝汗）

取立5回目　〜夜の初警備の大立回り　前編〜

目の前の光景が信じられなかった……

次々と鬼たちを屠るその剣技と魔法、縦横無尽の奔放さが現れている立ち回りは、決して理にかなった戦い方ではない、最良の戦いでもない……ましてや最善の戦いでもない。魔を討つために編み出された己を律する私の剣とは対極の戦い方だ。

彼の剣には心が映らない。

何かを守る為でもない、自分の剣にプライドを持っているようには見えない。まるでその手に持つ刃が己が牙の延長であるような。

そう、あれは己の本能に従った戦い方、生きる為にただ目の前の獲物に食らいつく、生物の、捕食者としての原始の戦い方^{ほんのう}。

そして、彼はその行為に喜びを感じてきている。狂気を抱いて腕を振るい、その顔に笑みを貼り付けて舞い狂う。

あれは、人が越えてはいけない領域に片足をかけている状態、私
はあれを知っている。

だから……彼は危険だ。

直に肌で感じ取ったからこそ、理解できない。学園長は何故彼をこの学園に魔法先生として採用したのだろうか。

麻帆良の魔法先生はその実力も然る事ながら、各地から集まる魔法使い見習い、つまり魔法生徒の模範となるべき存在であり、その人格面も高く求められる。

「　　学生寮の管理人室が空いているんじゃないか？」

彼を寮に住まわせる？

「待つてください学園長！」

今管理人が空いていると言えば女子中等部学生寮。つまり、私達の住んでいる寮だ。

学園側が提示した課題をクリアしたのだから実力は一定基準を上げてしまっている。仮に、百歩譲って性格面で問題も低いとしよう。直接の面識が薄い以上、今回の戦闘だけでその内面を量るというには私は未熟すぎる。

だが、彼は何よりもまず男性である。女子寮は男子禁制……一部例外が出来てしまったが、基本的には男子禁制だ。正式に採用された以上教師となるとしても、倫理面でアウトだろうそれは。

まあ、正直言つて、単に管理人となる事だけなら私は異を唱えない。私は他に気を割く余裕はないのだから、そう、彼が中等部の学生寮に来るとというのが問題なのだ。

「彼は信頼できる、あんな戦い方をしていても腕は一流じゃ。何かと役に立つじやろつて」

女子中等部には彼女がいる。私が守ると誓った人で、もっとも大切な女性。

その人間関係に口を挿めるなどと思い上がるつもりはない。良し悪しを見極めつつ、彼女の自由意思を尊重するのも護衛の裁量だ。しかし、その許容できる範囲も見極められなくては判断はできない。先の通り、私は自分が人を見る目があると思っていない。だからこそ、見知らぬ異性が彼女の生活圏内に必要以上に近くにお帰れることをおいそれとは了承できない。

「護衛なら私がいいます！それに龍宮だつて」

「刹那君、おぬしはこの学園の生徒じゃ。確かにその事は感謝しているし助かっておる。しかしそれでおぬしの時間が削られるのは木乃香もうれしくはないじゃろて。どうじゃ、これを機にまた仲よくしてやってくれんかね？」

「っ！……お気持ちだけ受け取っておきます。私の役目はお嬢様を蔭から見守る事です。その領分を出る気はありません。失礼します」

ちがう、言い訳だ。

私が彼女のそばを離れたくないから……嫌われるのが怖いから距離をとる。

彼女から歩み寄ってくれた事もあった。けど、うれしさよりも先に私はそれを拒絶してしまった。

ふと、森を駆けている途中見えない背中に重みを感じ、両肩を掻き抱く。

「……こんなものがなければ　っ！」

人の気配これは

「あんな風に感情的になるなんてらしくないじゃないか、刹那。」

「龍宮か……」

「おまえが人の接近にここまで気付かないなんて珍しいな……そんなに彼の事が気になるか。」

彼女はあの時広場にはいなかった筈だ。おそらく視界に入る距離

で遠くから観察していたのだろう。

龍宮とは仕事柄よく二人で組むことが多い。年齢的近さもあるだろうが、幼い頃より裏を理解していた事、何より戦闘スタイルの相性がよかった。

お互いの性格もある程度理解しているつもりだ。

「龍宮は……彼をどう思う?」

「強いな。そして、これでもかというぐらい危うい。まるで誰かを見ているようだったよ」

「龍宮……私は冗談で聞いているわけでは」

「少なくとも、彼が仕事をする上では信用できるよ……傭兵というのはそういうやつらの集まりだ」

あるいは、彼女なら否定してくれると思ったのかもしれない。

仕事において彼女は妥協という文字は無い。高確率の依頼達成率、彼女を仕事人とまで言わしめすそれは己の力量を理解しているからこそその数値だ。戦いにおいて彼女ほど理性的な戦い方を私は見たことがない。

そんな彼女だからこそ、彼の異常性をよく理解していると思った。私の不安も分かってくれると思っていた。

「お前もなのか」

「刹那……」

「彼は危険だ。お前も見ただろう? 彼の戦い方は人ではなく獣のそれだ。比喻じゃなく精神が破損しかけている。あんな状態の彼を

学園内に置くのは危険すぎる……」

「大切なお嬢様が、だろ？」

「彼の危険性については否定はしないさ。私も少なからず裏を見て来た人間だ。ああいつた手合いにも何度が出会うこともある……」

なおさらその考えが分からなくなる。

あの異常性を理解しながら容認する？　ありえない……それは獣に鎖を着けないのと同じ行為だ。

「それじゃあなぜ？」

「人間ばいから、かな？」

「……………」

「おっと、これでも真面目に答えたつもりさ。彼はその本能的な部分と理性の振り幅が大きい……、確かに危険に見えるが、引き返せる位置を保っている。根っからの狂人とは訳が違う。後は……お前はこういうのはあんまり好きじゃないだろうけど、経験と勘ってやつだ」

「私は……、そんな考え方はできない」

龍宮の言いたいことも理解できた。だけど納得はできない。

私たちはそのまま寮までの道のりの間会話のないまま歩き続けた。

選定テストから1週間後……

その日、私は任せられた警備の準備をし、事前に教えられた集合場所に行った。

今思えばこの時点で気付くべきだったんだろう……なぜ今回のパートナーに関して情報が何も来ていないのか。

そう、学園長の陰謀に気付くべきだった。

今日はお嬢様が占い研究会の会合ということで、いつもより帰宅時間が遅くなる。自然と護衛をする私の帰宅時間も遅くなるが苦ではない。

むしろそのお姿を視界に収める事を許された時間、私にとっては何よりも貴重な時間だ。

それゆえに今日、警備の仕事はあるのは憂鬱だった。警備自体が嫌いなわけではない。むしろその行為は私にとって重要な意味を持つ。

ただ、お嬢様の傍に長く居たいだけという私的な理由である為、ここは我慢だ。それに、学園を守るこの仕事に携われることに私は誇りを持っている。

魔を討つ神鳴流の剣技、血のにじむような努力を重ねてきたのは“あの時の誓い”が果たせるように、自分に強くあるべしと責を科

す為。学園を守るということはそのまま彼女お嬢様を守ることにつながる。彼女の為に努力の末に手に入れた力を正しい形で使うことができる。それは私にとつてとても充実した日々だった。

だが、今現在私は一つの窮地にいる。

まずい。

何が、と言われれば理由は一つ。学生である私も魔法を知る世界に身を置く一人、それは社会で働く者と変わらない最低限守るべきルールがある。魔法生徒などと呼ばれているが、ただお気楽に学生として過ごしてられない。

いや、それではクラスメイト含め、多くの学生に失礼だろう。そもそも、今回の失態は学生云々以前に人として基本的なミス、要は

「くっ、完全に遅れたッ」

待ち合わせに遅刻したのだ。

お嬢様が部屋に帰ったのを確認し、すぐ警備に行くために待ち合わせの場所に向かったつもりだったのだが、思ったより時間が経っていたのだ。

女子寮から待ち合わせ場所であるダビデ広場まで急いで向かうと、案の定そこには今回同じエリアを警備する相方が待っていた。

「すみません！遅れまし、た」

「おう、桜咲……だったよな。んーっと30分の遅刻な。まあ、次から遅刻しなければ」

遅刻はいけないぜ？ などと言って注意してくるこの男は鳴守 音来。

昨日、指導員のテストという名目で行われた戦闘で圧倒的な力を

見せた男。恐らくこの学園の魔法関係者の中で良い意味でも、悪い意味でも一番注目されている男だ。

……ちなみに私は悪い意味での方で警戒している。

「どうした？そんな怖い顔して。さっさと行くぞ？」

遠慮もせず歩きだす先生の背を見ながら後ろをついて行く。

一見してそこらにいる優男風といった体の彼に昨日の戦闘で見たような危うい感じは見られない。むしろ一般人と変わらない、或いは何も考えていないような飄々とした雰囲気は私の考えすぎだったのではと改めさせられそうになる。

「おき」

これがあの時と同一人物？

魔法世界では“雷帝”の異名で呼ばれる彼のイメージとあまりにかけ離れている。一種の破壊神じみた騒動の数々に、失礼だがもつと粗暴な人物像を描いていた。実際、昨日の終始大人しく……最後は派手にやっていたが、昨日のテストではその片鱗も窺えなかった為、逆に警戒していたが、今こうして近くで改めてみると煙を見ているようで余計に困惑するというのが私の感想だった。

「おい！桜咲！」

「っひゃい！」

っ！突然目の前に現れた顔と大きな声に驚いて変な声を出してしまふ。……聞かれては、いなかった筈だ。

「ちゃんとお人の話を聞けよ。あ……俺はまだこの学園の警備方

法に慣れてないんだ。お前の方が先任で詳しいだろ？ この後どうするか判断を聞きたいんだが」

彼が夜の警備に担当が決まってから1週間、毎日が担当というわけではないから慣れないというのも無理はない。無いのだが

「警備マニュアルはちゃんと読まれ

」

「捨てた。」

「……はい？」

「だってあんな小難しいミミズがのたくったのような字読め、ちがった。えくと、なにになに……」

そうやって腰のポケットから紙切れをを取出して読み始める先生。どうでも……よくはないが、この人は学園支給のものを捨てたと言っただらうか？

「あゝ、仕事憶えるのに時間を短縮したくてな？ 今アインにまにゅある(?)をデータ化してもらってるんだほら、ああいうのって妙に小難しい文体とか同じ事何回も書いてあつて遠回しな言い方するだらう？」

……なんだか若干棒読みな気がしたがスルーしよう。ツッコミどころも満載だけど、確かに分からなくもない。なにより、まともに相手をしていたら日が暮れそうなきがした。

「ではまず、場所はこの奥のクラブ棟から世界樹広場までのエリアで、エリア内の侵入者の捕縛、排除が目的です。もちろん理想とし

てはエリア侵入前に撃退することなのですが……この学園の広さからそうもいったられません。失礼ですが先生は魔力や気探知の方は？」

「ん？ 苦手だぞ？ よほど大きな魔力ならともかく隠れられたら面倒だな……殺気とかの察知なら得意なんだけどな」

「どうやら彼が魔力制御を不得手とするのは本当らしい。確かに初めて会った時は私が気を少し高めてみても無反応だった。もちろん、演技じゃなければだが。」

「それではこれを……簡易ですが簡単な念話で連絡をとるくらいはできます。ポジシヨンの方は……先生が外周を回ってください。私は中央で探知に専念しますから。」

「ん……了解。」

そう言っつてそのまま世帯樹入口方面に消える先生を見送る。通常時のスピードにおいて先生の方が早いなら合流しやすいよう私が中央、機動力のある先生を外に置くことは定石だろう。

「ん……速いな。もう世界樹の方まで行っている　っ！」

魔力！？

この感じは召喚によるものか？

くっ！間が悪い。世界樹とは逆方向の森の中か。敵は……いや、断定はまだ早い。とにかく先生に連絡しなければ。

「な！？」

増えた！そんなバカな！！

いや、魔力の反応に微妙にだけど差がある。判断はつきづらいがデコイと考えるのが普通だろう。私も感知系の術を修めているとはいえ、こつも離れていてはターゲットとデコイの判断には窮する。初めに感知した影は一つ、その後爆発的に増えた事から分身等の術を使っていたとしても、そこにもう一人敵が混じっていないという保証はない。敵は一人のみと判断するには早計過ぎる。

“きこえますか？鳴守先生！”

“うお！？ 何だ！！ ってそうか、これ念話用の呪符だったか？ 聞こえてるか？”

“はい、それで問題ありません。時間がないので用件だけ手短かに済ませます”

“おう、なんだ？”

“分かれて早速ですが侵入者です。今、現場に急行してますが反応が複数に増えました。とりあえず先行して探ってみるので、先生の方には道案内用に式神を送っておきます。”

“わかった！ 無茶だけはするなよ！”

念話を切り走るスピードを一段階上げていき、式神の紙型を取出す。

いたっ！ 見たところ一人だ。

視線の先には何やら巨大な亀の上に乗った目深にフードを被った黒いローブを着た者。

二つ目の反応でいきなりの大当たりだ。

何やら、亀が甲羅から木の根のようなものを伸ばしているが……

あれが反応が増えた理由か。

だとしたら他は全て偽物の可能性が高くなる。

くつ、思ったより消されるのが早いな……まだターゲットは見つからないのか。

決まりだ……侵入者にはご退場願おう。

相手の前に出るように瞬動で一気に駆けよる。

「そこのお前、それ以上の行為は学園に不利益を振りまくモノだと判断する。投降して事情を聞かせてもらおうか」

「なっ！女？はっ、だれが……」斬空閃！！「っ！！」

背中に下げていた竹刀袋から一息で夕風を取出し、威嚇に亀の触手を両断する。

「次は本体ごと切り伏せる……もう一度言う。大人しく投降しろ……」

「ちっ、どういふことだ！？今の技は、なんで神鳴流剣士がここに……」

「その言い方、協会所縁の者か。関東と関西のいざござは今に始まったことではないが、西の人間すべてがお前らのような人間だけだと思われるのは私にとっても本意ではない。このまま大人しく掴まってもらおうか」

「クツ、誰が大人しくなど。東の人間は我等の敵だが、そこに組するのなら例え西の人間といえども我らの敵も同じ。来い、炎鬼！」

こちらが一步踏み出すのと同時に、男は懐から一枚の呪符を取出す。

男が呼びだしたのは炎の髪を逆立てた大鬼。足元にいる巨大な大亀も恐らくは同じ、式神と呼ばれる人が呼び出し使役される異形。その姿形は千差万別、扱う者の好み特性等で必然と決まってくるが、陰陽道において基本は修験道の開祖が使役したとされる夫婦鬼、前鬼後鬼からくる様に2体の使役が好まれる。これには前鬼後鬼が阿吽の関係にあつたからとされ、陰陽が深く関わるその術式からする様に、御しやすい、相性、連携も取りやすい為、式神の関係も相生、ないし相克である事が望ましいとされている。そういう意味で、この男は基本に忠実だ。

「……陰陽の五行説、木生火か」

男が使役するのは炎の髪を逆立て身に纏った鬼と木の根を緑の体軀から無数に伸ばす大亀、どちらも一目でその特性が解る。

「木は火を生み出す」

つまりこれは片方が片方を補強する力関係、単一で使用するより強大な力を発揮させられるそれは基本ながらにして強力。そもそも、そうして有効であるからこそ基本というモノは存在する。

「はっ！ 東に墮ちても流石は神鳴流か。なら解るな！ この場合は森、俺の樹鬼^{ジュキキ}も平地より自力が増す。つまり、この場において相生の力は跳ね上がる。想い上がるなよっ裏切り者が！」

轟音と咆哮と共に炎鬼から打ち出される炎弾の嵐を避けながら一気に肉薄する。

「ふっ！ 『奥義・斬魔剣！ ！ ！ ！』」

神鳴流は魔を討つ退魔の剣。

如何に火を操る鬼であろうと、この剣の前では一刀で事足りる相手。男が何を目的でこの学園に侵入したのかなど興味はないが、彼女が過ごすこの学園を守るのは私の使命であり、誇りだ。一步害悪として足を踏み入れ、尚且つ投降の意志がないというのなら多少手荒になるうとも、疾く斬る！

「この程度……麻帆良を甘く見たな。さあ次はどうする？」

「なっ！ 俺の炎鬼が一撃で……っ！ 樹亀！ ！」

あわててもう一体の式神に指示を飛ばし、亀の式神は甲羅の隙間から子供の腕程の太さがある“根”を飛ばして攻撃してくる。

やはり後衛型。

前鬼後鬼とは名前の通り前後に役割を持つ者でない。なのでそこに明確な型は存在しない、二体が術者の前に出て戦う場合もある。もともと符術使いは前に出て戦う者はまずいない。魔法使いにある前衛型の魔法剣士、後衛型である魔法使いの内、彼等は典型的な後衛型だからだ。

先ほどの大鬼が攻めの要であり、この大亀が術者を傍で守り、前衛を補助する後衛という事、だが前衛が消えた今盾だけで守れるほど神鳴流の剣は軽くない。

『斬空閃・散！ ！ ！』

気で強化した剣圧を拡散させて“根”を切り飛ばす。

「これで、終わりか？ 大口をたたく割にあっけないものだな」

例え再度鬼を呼び出そうとも、その手が札を切る前に私の剣が届く方が速い。つまり、この攻防は既に詰んでいる。

「なにをつ、まだこれからだ！！ くらえっ！ 『符術・嵐山灯笼流し！！！！』」

懐から取り出した二枚の符を使い放たれるのは後衛である符術使の真骨頂、攻防を前衛に任せ、自らは後方で強力な術を放って戦局を変革しうる一矢、いや大砲となる。男の符術もその例に従い、手を放れた符が大きな円を描き、大きな水撃が放たれる。

確かに威力、質量共に二枚符にしては大した水量だが、この程度なら神鳴流の技に頼るまでもない。気で強化した斬撃で事足りる。

「はっ！ この程度の術で倒せると思ったのか？」

文字通り一蹴された渾身の一擲、二体の式神を犠牲に放った一撃は私に届かず敗れたというのに、男は怯むどころか顔に笑みを張り付けていた。

「……いや、忘れたのか？」

まるで戦局を見えていないのはお前だと言わんばかりに、嘲笑と共にこちらを見やり、徒手を掲げる。

まさかコイツ、素手で私を相手するつもりか？

一瞬、最も在り得ない愚手が脳裏を過る。が、その考えは即振り

捨てる。この男は典型的な術者であり、接近戦が出来るような人種ではない。体がそういう造りに出来ていない。例えば数回程度の打ち合いだろうと、その身がどちらに傾倒しているのかくらいの判断、私程度でも出来る。

だから私が懸念したのは術者は術者でも符術使いではないという可能性。まだこの男は手を残しているかもしれないという予感。

なんだ？ 周りの根が　　っ！

「よく気づいたな！　だが気付いたところでこの数、貴様に捌ききれるか！？」

背後から襲いかかる根の束を飛び避ける。

『水は木々を育む』、五行説の水生木だ。水生木から森の地力による膂力の増大に木生火、緻密に計算されたそれ等は単純故に脅威だ。一瞬にして視界を埋め尽くす大量の“根”がそれを体現している。いつのまにこれだけの量を……しかし

「それがどうした！　『神鳴流奥義・百烈桜華斬！』」

瞬く間に細切れになっていく“根”、この程度でどうにかなるなど、それにこれは水生木止まり、最初に火の属性を帯びた鬼は討払っている。木生火には届かない。つまり、決め技足り得ないこのままだとしたら、ただ邪魔な壁でしかない。

しかし、解せないのは一度切り払った根がこうして大量に出現した事。あの大亀が複数、それも目の前の様に大量に有していたのなら出し惜しみせず最初から使用すればいい、侵入した事が発覚した時点で向こうに穏行や攪乱に徹する理由はないのだから。

だがその疑問も直ぐに晴れる。目の前で切り飛ばされ、宙を舞っていた根の残骸が大地に着くとまた新たに根が生えてくる。大亀に視線を戻せば切り口から既に再生を終えていた。

「超速度の再生、それに破片からの増殖、か……」

「こいつの“根”は切ったそばから倍々に増えてく、式神を前衛後衛に分けた時点で接近戦の対策は万全なんだよ！」

さっきの大量の根のクラクリはこれか。

使用しなかったのではなく、使用できなかったから。この根は最初一定数しか伸ばせないが、切られ破片をばら撒く事で種子が芽を出すようにその数を増す事が出来る。

確かに、こうまで数が多くては切るといふ行為自体自らの首を絞める様なもの。一見して私との相性は最悪に見える。

だが、神鳴流は魔を調伏する為の剣であり、その為に確立されてきた以上、何もその刃は単純な剣の域を超えている。

そう、際限なく増えるというのなら、欠片が種となるのなら

「なら、二度と増える事も出来ないように、塵も残さず滅せばいい……」

種が芽を出せぬよう、全て焼き尽くせばいい。

刃が纏う気が私の叫びに呼応するように弾ける。

気は纏えば強固な鎧となり、刃ともなる。ひとえに気とは身体の強化が特出されて知られているが、属性を帯びさせるのは何も西洋の魔法使いの特権という訳ではない。

『神鳴流 奥義！ 雷』

『』

「させるかよ……」

「地面からッ、だが」

「」

雷に変性していく私の氣にこちらの狙いに気付いたのだろう。男が前後から伸ばした根に加え、搦め手として地面から奇襲を仕掛けてきた。

だが、相手が根を扱う以上この手の奇襲は読んでいる。そも植物の特性を宿した触手なら考え付かない訳がない。それも、足元の奇襲など典型的な手段では。

隙にならないよう最低限の高度を取り、邪魔な根を切り払って飛び上がる。

「掛かったな！」

だが、ここで一つ私の予測を大きく上回る事態が起こった。

「な！？ 木が ツ」

「ハッ！ 上が疎かになったな！！ ようやく捕らえたぞ」

ただの木である筈の枝が、周りの根と同じように俊敏に私の腕に纏わりついたのだ。肌で感じる氣は微弱だが目の前の男の物、だが根に比べて強度の微弱なこの程度と氣を張る前に、交わした根の群れが瞬時に私を拘束していく。

「言っただろう？ この場、森では樹鬼の自力は増すと。攻撃手段は皆無の Coyts だが、こうして根を寄生させる事で周囲の木々を支配下におけるのさ」

「くっ、不覚……だが、この程度の縛りっ！！」

っ！！氣が霧散していく！？

「どうした？ この程度の縛り……なんだろう？」

私の顔が驚愕に染まるのが嬉しいのだろう。男は自分の玩具を自慢する子供の様に式神の夕ネを明かした。

「こいつは捕縛した対象の気を霧散させ、魔力を吸い取る。俺が編み出した究極の式神だ。……そして、お前に速攻で送り返された炎鬼を再度呼び出せば……この通り、木生火の完成だ」

言葉通り、男が呼び出したのは私が切った炎の髪を持つ赤鬼。先ほどまでは決め手に欠けているといった男の手札。攻撃の手段が欠けていたそこに切り札が加わる事で現状は大きく変化する。

捕らえられた私にはそれを切り捨てる為に刃を振るう事が出来ない。つまり、この次の攻撃を打ち払う事も、回避する事も敵わない。

「焼死か、裏切り者にはお似合いの末路だよ。やれ！ 炎鬼！！」

「クツ！！」

目の前に迫る巨大な炎の塊。

本来、如何に強大な炎と言っても私の身体に致命傷を負わず事は出来ない。気を纏ったこの身体はその威力を大きく削る。だが、私を捕らえている根がその鎧を霧散させる事で盾とする事が出来ない。今の私は運動神経のいいただの人間、一般人に毛が生えた程度のものだ。

よって、異形の炎にを前に突きつけられた死は回避しえないものとなる。

ここで私は死ぬのか？

いやだ……まだ、私は約束を果たしていない！ あの時、助けら

れなかった後悔をバネに必死に鍛えてきたのに、この胸の誓いを果たせないまま朽ちる事を認められるわけがないっ！

だが、私にできる事はない。

ただ、奇跡を信じて、万に一つ、この身が炎に焼かれても尚この敵に立ち向かえると信じて。せめて、屈するものと相手を最後まで視線の先に捉えて

「ウチの生徒を勝手に殺されては困るんだが……」

そんな時に聞こえた声は ああ、彼は……彼を疑っておきながら、こうして助けられる……なんて情けない。

「誰だ!!」

「聞こえなかったのか？ まあいいや。俺はそいつの学校の先生だ!!」

取立5回目　〜夜の初警備の大立回り　前編〜（後書き）

いかがでしょうか？

今回の修正版は大幅に加筆してしまいました。なので二つに分けてみました。

大筋は変わっていないのですが、刹那の態度や音来の対応、特に侵入者さんのやり取りが大きく変わっている……箒です（苦笑　咬ませ犬でしかなかった侵入者さんは大分パワーアップしてカムバツク！（笑

修正なんて大したことないと思っていましたが、これが読み返してみると誤字脱字だらけなんですよね……今更ながらにこっぴどくかしくなる表現とかがありましたし（汗

ともあれ、次話含めて今後も更新は続けていける様にやっていきます。仕事後になるので最高潮だった学生時代の様に週一投稿などは無理ですが、細々と、しぶとくやっていこうと思います。どうか皆様お暇があれば見てやってください。

それでは、再見！

取立5回目(続) 初警備の大立回り 後編

腕の中で指示を出すペーパーゴーレムに案内されて森の中を駆け抜ける。

彼女が言うにはもう桜咲は対象と戦闘を開始したそうだ。意外と無茶をする彼女に内心舌打ちするが

「アインなら、人の事言えるかって言いそうだなオイ……」

現状、こういった事は身に覚えがありすぎるので文句も言えない。恥ずかしながら従者の気持ちがかんな所で分かるとは、できれば一生知らないでいたかったかもしれない。主に気苦勞的なことか、めんどいし。

「まあいい、こっちで合ってるか？」

「はい、本体が戦闘中なため、反応は弱いですが……ゴメンナサイ」

この様に、申し訳ない顔で謝ってくるちっさい桜咲に毒気を抜かれるというのも一役買っている。

「まっ、しゃーないさ。それよりもしっかり掴まってな」

「……はいっ！」

走る速度をさらに上げる。
頼むから着くまで無茶なことしないでくれよ。

「アソコです！」

ちっさい桜咲……もとい、ちびせつな（本人希望）の指した眼下の光景を眺めて少々呆れる。

「おいおい、やばいんじゃない？」

そこにいたのはちょうど敵の使い魔に捕らえられる桜咲の姿が……ため息を一つついて身体に纏う障壁を意識して纏う。

「ちびせつな、少し離れてろ……え？」

本人の返事も聞かず、浮遊した状態から空を蹴って地面に降り立つ。
つ。

そして相手の方を見たとき眼前に迫っていたのは

「ってデカっ！ 何この炎！？」

眼前の障壁にあたって爆炎をおこす炎に啞然とする俺。
うん、やばいかったな。あんなの障壁なしだったらただの丸焼きだったぞ。

まあ……

「ウチの生徒を勝手に殺されては困るんだが……」

「誰だ!!」

わざと大きく聞こえるようにして口を出た声は見事に敵に察知されたようだ。というよりそのお決まりの話し方が三下すぎて脱力しそうになる。

「聞こえなかったのか？ まあいいや。俺はそいつの学校の先生だ!!」

「魔法先生か!?!」

「なんでもいいだろ……とりあえず、ウチの生徒は返してもらおうぜ!!」

「つちい！ こうも増援が速いとは……もう一度だ炎鬼!!」

男の呼びかけに答えたのは炎の様に逆立つ髪を持った赤い鬼。それが繰り出す振り下ろされる炎の拳を大きくよけ

「はっ、かかったな! 樹亀!!」

「先生!!」

「……………」

踏み出した先にあった水溜りから出現した木の“根”に絡めとられる。

「どうだ！ 動けまい。俺の樹亀の縛りは相手の気・魔力を無効化する力がある！」

なるほど……無効化というよりかは魔力の吸収か、よくできている。このままじゃ確かに術を練るのは無理だろう。

「麻帆良の魔法教師も大したことはないな。まあ、お蔭で俺の役割は十分に果たせたわけだ」

「……何？ どういうことだ」

「知ってどうする？ それに……なに、これから死んでいくお前たちには関係ないことだよ……死ねえ！！」

「あつそ、じゃあもういいや……」

内に取り込んだ大量の魔力を一気に放出する。当然、俺を捉える“根”はその定められた役割を果たそうとその事如くを吸収していくが

「ほう、存外に魔力を持っているようじゃないか。だがその程度でん？ どうした樹鬼！？」

男の驚愕は一目瞭然、その視線の先にある自身の式神、緑の大亀の甲羅が破裂寸前の風船のように膨れていた。

恐らく吸収した魔力を伸ばした根の使役に使用していたのだろうが、その使役するコストを上回れば行き場を失った魔力が体内で暴れ出す。

こういった捕縛術の対処法は純粹に力で圧倒するか、その容量をキャパ上まわる魔力を食わせると相場は決まっている。

「なっ！樹亀の縛簀はくみが、そんな！」

よって、耐えきれなくなつた甲羅が弾け飛ぶと同時に大亀は札に戻り、俺と刹那を拘束していた根も消える。種も何も無い、やったことは単純、魔力を吸わせただけなのだから。

むろん、この方法は相手が吸収しきれない程の魔力を有しているのが大前提だが。

「確かに、よくできた式だとは思うけど……向この世界にはもつと上げつない食人植物がいたぜ？俺を喰い切るには役不足だったな」

「貴様っ！言わせておけば、炎鬼！樹亀！」

額に血管を浮かせた敵さんはもう一度と根を飛ばす。伸びた根は今度は絡め捕るのではなく俺の周囲を取り囲む為の物。徐々に狭まる其れはこちらの逃げ道を実に潰しにかかる。

恐らく、捕らえ切れないと分かった男は根ごと焼き払う腹なのだろう。流石に四方八方から熱で攻められたら人間が耐えられるはずもない。更に酸素も奪われるとなれば余計に。

なるほど、激しい戦術をよく考えている。

だが、この手は欠点が残つたままだ。

「火達磨になれ！！」

控えていた鬼が練り終えた特大の火の玉を投げ放つ。一方、根の包圍網も依然として健在。試しに一部切り飛ばしてみたが、切った傍から再生してはつきり言ってキリがない。

「まあ、大人しく焼かれる馬鹿はないわな」

迫る熱の気配に一息に飛び上がる。

根は地面から伸びている以上、唯一その密度が薄いのは頭上のみ、この網を打ち崩すのならそこに穴を開けるのが定石。

だが、超速再生の特性を帯びた根は、ただ穴を開けられても一人を通すような空間を残すほどやわではない。そのままでは切られた穴を即塞ぎにかかるだろう。

そう、ただ切られたのならば。

「悪いな。壊すのは割かし得意なんだ」

手に持った剣はただ魔力を纏わせたそれではなく、光瞬く雷撃を帯ている。

“魔装”

接近戦を主体とする魔法使いにとって割とポピュラーな魔法であり、属性自体を変幻自在の刃に変える。それは熟練したものが振るえば何の変哲もない棒切れが名刀の如き切れ味を持たせることもできる。

「なっ！！ 全部焼き払っただど!?!」

これはそこまで上等な術式ではないが、元が剣である分切れ味を無視して刀身に纏わせたもの。簡易の術式である故に式として編むのは容易く、相性の良い雷の属性は即時に纏わせられる。ただ焼き払うだけなら切れ味はもう十二分にあるのだからこれで事足りるのだ。

「諦めるよ。その亀の触手が効かない時点でそっちの連携は崩れてるんだ」

「何をツ、西洋風情が偉そうに！　まだ、まだ俺の式神は負けてない！！！」

「はぁー……馬鹿の一つ覚えだな」

既に焼け落ちて半減した根は俺を補足するには足りない。真っ向から打ち合えそうな鬼の追撃を躲せばあとは

「ほい、隙だらけっ」

無防備な術者まであと一步となる。

そして、男が懐にあるだろう防衛手段を展開しようにも、速度において戦士に勝る筈も無い。

『白き雷！！』

胸を貫く白い雷光。

人が雷を浴びればただでは済まない。が、“白き雷”はその付加である麻痺に重きを置いた魔法。侵入者を捉えればいいのだから、まあ、こんなもんで上々だろう。

「はい、お仕事終了ってな」

倒れさる敵には目もくれず、根から解放されている刹那のもとに向かう。

うっん、こっつ場合ってなんて声掛けたらいいんだ？

「ふむ……まいったねこりゃ、そんな顔されちゃ助けない方がよかつたのか？」

「いえ、助けていただいた事には感謝しています。ですが、私はあなたを信用しきれていませんでした。だということにこうして助けられるなど……」

「まじめだな。俺とお前は初対面なんだから、それも命掛かるかも知れない仕事なら背中預ける相手を疑うっていうのは当然だろ？俺だって初めての相手に全幅の信頼を寄せるなんて無理だよ」

そうじゃない。

私が疑っていたのは 彼が敵じゃないかという愚考。しかも助けられておいてその考えを拭いきれない自分の疑い深さに、己が小さく見えてしまう。

「あなたでも、ですか？」

「あのな、どういう風に思われていたのか非常に気になるけど……この学園のお気楽な雰囲気の方が異常だと思っぜ、俺は。いきなり警備任されるし、初めの方にお前とか魔法生徒と組ませるってのはなんつうか……信用通り越して放任に近いだろ」

「まあ、それは……そういう風もあります」

「ともかく、俺もいきなり信用してもらおうとは思ってないし。あ、けど依頼内容を違える気はないから。優先順位とか、何を誇りにしてるかは君とは違うかもしれないけど、目の前で事が起こったなら助けるし、助ける自信もある。もちろん呼ばれればすぐに駆け付けるさ。ギルドの誇りに誓って、な」

「あなたは、何を考えてるのかよく解りません」

そう言葉が口をついて出るが、警戒に刀を握っていた手はいつの間にか緩んでいる。

「そう？ 逆はよく言われるけどな。そう言われたのは初めてだ」

などと言って笑っている目の前の男性を見ると、なんだか疑っていた自分が恥ずかしいというよりも、馬鹿馬鹿しくなってくる。

「まあ、改めまして、鳴守 音来だ。仕事の際はアハト・ジーベンスで通ってる。傭兵つてのはこっちの人にはなかなか抵抗あるみたいだけど、まあ、おいおい慣れて下さいって事で一つよろしく」

差し出された手に遠慮がちに手を伸ばしていると、その手を無理やり引っ張られて握手の形をとる。

まだ、判断できない。強引で、どこか掴みどころのない人だけど、少し信用してみようと思った。そんな日でした。

「なんや、あいつやられてもうたんか……ウチの炎鬼貸してやったのにおしゃかにしよってからに」

「学園側の新入りを戦力分析する為と言っても自分がお縄になるんなら世話ない。これだから引き際のわからんオトコはダメダメだ。」

「器じゃなかつたんやろ？なあなあ、次は俺に行かせてくれよ」

横で騒いでるのはこれまたうち等の目的の為に雇った……少年だ。実力は保証できるが、いかんせん考えなしなのが　まあ歳を考えれば相応な性格なのだろうが　困りものだ。今も自分が戦いたくてうずうずしてしょうがないという風を隠しもせず文字通り尻尾を振っている。

あー……これだからガキは。

「あかん。そう何度も仕掛けてもうたらいくら忙しいゆつても長に気付かれるわ！」

そうなのだ。せつかくこのかお嬢様が長のもとを離れたと思ったら今度はそれまでと同等、あるいはそれ以上に強固な守りの中にいる。

このままじゃ心もとないし、いっそこっちも神鳴流でも雇おうかなどと練りに練った計画を鑑みる。
すると

「へえ、何かが麻帆良の結界を抜けたと思ったら、君たちの仲間だったんだ。あの男」

「っ！ 誰やっ！！」

「安心しなよ、僕は君達の味方さ」

懐から猿鬼、熊鬼の符を取出して振り向いた先には、白髪の10代前半の子供がいた。

後にこの出会いがきっかけで彼女の計画は飛躍的に進むのだが、今は誰も知らない。

side:out

取立5回目（続）　　く初警備の大立回り　後編く（後書き）

などと言う感じになりました。

大分丸くなったかな？　って、初めてご覧になってくれた方には分からないですよ（汗

割り込み投稿、と言うのも初めて使いますが、こういう時便利ですね。

取立6回目　く警備、それは昼も欠かせない仕事です。そして先生は最近の出版
おひさしぶりです！
そして更新をチェックしてくれていた片はごめんなさい！

いざ投稿してみたら1週間が経過……申し訳ないです。

今回はお知らせも入れますが前話の5話におまけを少し加筆している
のでそちらも読んでいただければ嬉しいです。

では、前書きが長々となる前に第6話、
どうぞご覧ください。

取立6回目　　警備、それは昼も欠かせない仕事です。そして先生は最近の出勤

2 - A 副担任、鳴守音楽の朝は早い。（比較的）

午前5時、従者であるアインに優しく起こされて起床し。

そのまま洗顔等をすませて朝食につく……

今日も朝から珈琲の香りが俺の鼻孔を……

「約80%嘘ですね。速く朝食を済ませてください。もうすぐ出勤目安の7時になります。」

…俺の従者はAir reading機能が壊滅的だ…ちょっとした逃避的解釈も容認できないの力ネ？チミは……

苦いものが苦手な俺は朝からコーヒー牛乳を飲んでいる。もちろんこいつが優しくなどという上等な起こし方をするはずもなく、どこぞの漫画張りにフライパンを鳴り響かせて起こすしまつ。近所迷惑と思うのはこの際カットだ。

「ん、あれ？早いな、いつもは後30分はあるだろう？」

「はい、昨日の夕方から高畑先生は例のごとく出張の為本日は帰りが不規則になるということでHR等をお願いするよう言伝を頼まれました。」

タカミチのやつ…なぜ俺本人には言わん…

悪態をつきながら朝食のバターロールにジャムをつけて食べる。

ちなみにパンからジャムにいたるまでアインのお手製、これが意外とおいしいのだ。

つと、時間がなくなるな。

時計を確認し、飲み物でパンを流し込んで身支度をする為に席を立つスーツにそでを通し、ネクタイを心持ち緩めに締めて玄関に向かう。

「Master、お弁当になります。…私は簡単に片づけをすませてくださいますので、ハンカチは…持った」…」

おなじみの身だしなみチェックが始まる前にドアを開ける。正直これで結構時間をとられるので笑えない。

「じゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃいませ。Master。」

寮を出て軽く空を見上げる。

まだ日も低い…

麻帆良こすいちに来て一ヶ月と少し、生活習慣がよくなったのは気のせいだろうと思う。

ギルドにいたころのFreedomな生活を懐かしみながらも今日もお仕事な自分である。

side : A k o I z u m i

「先生がが来たよ〜！」

教室の外にいた朝倉の号令でみんな席に戻る。

その際に風香と美空が扉の前でなんかしとるけどあれはみんなスル
ーしとる。

最近の朝の恒例になつとるけどな。

二人が席に着くとしばらくして…

「お〜す、お前らきょうh…（ボスッ）…」

軽めの音は先生の右手に収まる黒板消し。

先生はそれを持ったまま教卓を目指し…

「フツ。甘いな、この俺がそう何度も同じ罠に引つ掛かると…」

上から降ってきたバケツを頭からかぶってコケタ…

……

……

っ！笑つたらアカンツ、先生は被害者なんやから

「……これをやったやつ…前へ、いや…今日は高畑先生が出張でな
代理で実習用にあずかっているプリントを頼まれたんだが………お
前ら全員倍な。」

何事もなかったように立ち上がった先生は笑顔のままプリントの束を突き付ける。

もちろん、次々にあがるブーイング、しかし先生は取り合おう雰囲気は…

「ただし！実行犯を報告したやつには半分の課題で…」

「風香がやりました」「美空がやりました！」「

……

友達を売るクラスメイトが数名。

本人たちのためにウチは名前はださへん。…にしても、迷いないな、一瞬やで？

「よし、二人には出張用にあずかっているこの課題の中からみんなの3倍の量の…」

「おーぼーだ！」「職権乱用だー」

抗議の声を上げる二人…自業自得とも思える。が、先生……いくらなんでも大人げないで…

「ううん、おわったよ〜!」「放課後だ〜!」

今日最後のチャイムを機にそれぞれ行動に出る。
ウチは〜、

「ねえ亜子、この後って空いてる?」

そう言っただけ集まってきたのはゆーな達、ウチらはなにかとこの4人で行動することが多い

「あ〜、ゴメンな。ウチ、この後保健委員の集まりがあるんよ。ゆーなはバスケット部やないの?」

「うう〜!」

「バスケット部は他の部活に体育館取られたみたいだね。今日は活動できないらしいんだ。」

「うちのバスケット部って弱いもんね〜」

「弱いゆーな〜!」

アツハハ、そやったらしょうがないな。

「アキラ達は?」

「アキラもまき絵も部活だつてさ〜」

あららら、何かゆーながいじけとるけど…

「いいもん、帰って録画した通販番組見るもんね!」

そういつて一人走り去るゆーな…
後でフォローしておこう。

「あはは…、行ってもうた。」

「うん、やりすぎたかなー？」

悩むくらいやったらやらなきゃええのにと思っけどそれも「愛敬、
これもスキンシップやからな

「後でなんか持って行ってあげればいいと思っよ。」

「あはは、えずけか〜」

笑いあいながら教室を出たウチら3人はそのまま下と下りる。
まき絵たちは部活やから外やけどウチは委員会やからここでお別れ
や。

「じゃ、また明日ねー」

「うん、ほなな」

玄関口で別れて先生に頼まれた資料をとりに行くために保健室に向
かう。

「うん、うん！今日もがんばらな！」

side:out

side:Akira・Okouti

秋も近くなってくると日の沈みが一気に早くなる。

今日の練習を終えた私は寮への帰りだ。

うん、今日はタイムも調子良かったし、明日は自己ベスト更新できないかな

「あ、…」

帰り道、学園の近くまで来るとちょうど玄関から出てくる亜子を見つけた。

向こうを気付いてようで手を振ってこっちに駆けよってくる。

「はあ、アキラはもう部活終わったん？今日は早いね。」

「うん、最近は日が落ちるのも早いからね。そういう亜子は委員会時間かかったみたいだけど？」

「どうやら、議題の一つがなかなか決まらなくて時間がかかっていたらしい。」

「ふうん、大変だったね」

「そうなんよ、おかげで備品の補充の時間も遅れてももつたし今日
はついとらんな」

保健委員もなかなか大変みたいだ。

それから二人で帰宅中のおしゃべりだ。最近新しく追加された学
食の新メニューとか、最近街まで遊びに行く事がないとか、そう言
えばゆるいなに何買って帰ろうとか

定番的な内容だけど私はこうい時間かけっこうすきだったりする。

朝の鳴守先生の騒動には若干苦笑ものだったけど
うん、今日もいい1日で終われそうだ。

「お？あの子可愛くね？」

「いや、俺はショートの方が…」

だから、目の前の出来事に困惑する。
どうしてこうなったんだろう…

目の前には明らかにガラの悪そうな男が5人
私たちの前に立ちふさがるように立っている。

そう、いわゆるナンパというやつらしい

「いや、けどウチら用事が…」

「そんなの後でいいじゃん。な？ちょっとだけでいいから行くつぜ？」

「いい加減にしてください！人呼びますよ。」

「おお、こわっ。」

「怒った顔も可愛いじゃん？」

亜子が怯えながらも拒絶してもけど意に返さず、私たちがこれだけ嫌がってもまるでこちらの話を聞いてくれない。

第一ここは女子高エリアなのになんでこんな人たちがいるんだろう…

「な、いいだろ？そんはさせねえからさ？」

そう言ったやせ形の背の高い男が亜子の前に出ていた私の手を掴んでくる。

「いやっ！！離してください！！！」

もちろんこんな人たちについて行く気はない。この時の私はいきなり手を掴まれて焦っていたんだと思う。その気持ち悪い感触から逃れたくて手を思いつき振ってしまった。

「つてえ！」

「あっ…」

たまたま男が手をそこまで強く握っていなかった所為もあつたんだと思う。振りほどけたその手はそのまま男の頬に当たり、大きな音を立てた…

「つてんめえ、人が下手に出りゃ調子に乗りやがって。!!」

「つきゃあ!」

髪を掴まれ思いつきり引つ張られる。痛みに涙が出たが相手の顔をキツと睨む。

「あゝあ?ごめんなさいもなしか?このクソアマ!!」

「おいおい、顔はやめるよゝなえるからさ」

「女に手御出すとかよツちゃんマジ鬼畜」

至近距離で怒鳴られて怯んでしまう。

後ろの人たちが男を煽り、男が拳を振り上げる。殴られるっ!

「はあ~~~~~、ラ ダア、キイイイク!!!」

「でゆほらっ!」

「おお、見よう見まねでも飛ぶもんだな割と。記録は5mってか?」

「誰だてめえ!?!」

「なんで男がここに居やがる！」

「おれか？………そうだな、通りすがりの一教師だ。覚えておけ！」

「先生！！」

「よくがんばったな。大河内は友達思いだな……和泉、ちょっと待つてな。今先生があいつらしよつ引いてくつから。」

そう言つて力が抜けてしゃがみ込んでいた私の頭を撫でながら亜子を確認した後先生は男たちに振り返る。

「なんだセンコーかよ。」

「つていうかこいつが先生え？ありえなくね？なにこの着崩したスーツ。」

「おまえら……見たところ私服姿だが、麻帆良の大学生か？」

振り返つたまま立ち上がる先生に男たちは全く意に反さず倒れた男を1人が抱き起こして睨みつけている。

「はっ？んなわけねえし！！」

「俺等の自由人の一般人です！」

「そうか……なら不法侵入、関係者以外の方はご退場願おうか。出口まで意識があるのと無いの選ばせてやる。」

「おい、こいつちよーし乗ってんじゃね？」

「よっちゃんやっちまおうぜー！」

「はあ、男で一人で5人も運ぶのか……こっちの迷惑も考えてくれない？」

「つて、てめえっ!!！」

先生の言葉に倒れた男の脇にいた残りの3人が先生に殴り掛つていく。

それから出来事はまるで漫画の中の出来事のようにだった。

人が殴られてあんなに飛ぶんだとか、教師とかいう以前にあんなイキイキと殴るんはどうだろうとか、事が終わったのは数秒の出来事。

現実感のないその数秒間の出来事は私の嫌いな喧嘩なのにまるで逆の事に見えてまう、そんな時間でした…

side:out

「ありがとうございます！」

二人揃ってお礼を言う和泉と大河内。

どうするか…こっちとしては偶然居合わせただけなので助けたただけだ。

それにこう、なんと言うか…面と向かってお礼を言われるのは…うん、こそばゆい？

「ああ、いいって。」

「そんな、わざわざ助けてくれたのに…」

「はあ、和泉…俺の仕事はなんだ？」

「えっ？なにって、先生やる？」

「んで、学園内の広域指導員だ。これも仕事だから気にすんな。ん、そうだな…どうしてもっていうなら今度なんか頼みごとがあったら手伝ってくれればいいや。」

「そやったら…」

まいったな……

「どうしたんだい、音来君？」

「お？タカミ…高畑先生。じつは…」

俺は事の顛末をタカミチに説明し、指示を仰ぐことにした。

ふむ、とのびている不良達と和泉達を見比べた後…

「そういうことなら音来君、君が彼女たちを寮まで送ってあげて、彼らは僕が連れていくから」

「いや、タカミチ…高畑先生は出張から帰ってきたばかりだろ。学園長に報告があるんじゃない？」

「なに、連絡は入れるから問題ないさ。それに学園の守衛さんのところまでもそんな距離じゃないしね。」

この学園都市の規模の広さでそんな距離ですか、そうですか…

「は、わかりました。じゃ、こいつらよろしくお願いします。ほら、行くぞ。」

「あのわざわざすみません…鳴守先生…「音来」…え？」

「その『鳴守先生』ってのなんかくすぐったいんだよな…この国じ

やファミリィネームで呼び合うのが普通らしいけど、いやじゃなかったら名前で呼んでくれたら助かるかな？和泉もな。」

「えあ、じゃあ、お…お、おと…おとぴゃっ」

なぜか舌を嚙んでしまったらしい和泉…

「っぷっ、はっはっはは、おいおい、もっと気楽でいいんだぜ？和泉。」

「あい、音楽先生…」

口元を押さえながら何とか返してくれた和泉。

うんうん、やっぱこっちの方がいいな。
まあ、

「先生もぬいてくれるともっと助かるんだが…」

「さすがにそれはむりですって！」

むう。まあ、今日はこれが及第点か？

「あ、そやったらウチの事も亜子って名前で呼んでくれませんか…？」

「なんでそこで後込みするかな…：亜子は…これでいいか？」

「ハイッ！」

うん、笑顔で返してくれたのでよしとしよう。

「あ、なら私も名前の方で……」

ん、大河内の名前は……、イカン、この国では名字での呼び方が普通だとアインから聞いていた所為かクラスの奴らの呼称は大体名字だ……

う、ん、ド忘れ？

えっと……

「アキラでよかったよな？」

「憶えていたんだ……」

むっ

「これでも一応……、見習いだけど教師だぞ俺……」

苦笑しながら謝ってくるアキラにうらめしく軽く睨みつける。
まあ、なごんだしいい……のか？

「はあ、まあいい。ほら、急ぐぞ」

今日はため息の数が多い気がする……

気のせいだと全力で自己暗示をかけ、
後から付いてくる二人を確認しながら寮への道に行く。

軽く話しながら帰るいつもの帰路でふと、生徒と帰るのはこれが初めてじゃないだろうかと気づく。

「……なんだかんだで先生やれてんのかな……」

「ん？なんか言った？先生。」

なんでもない、と返しながらまた一步寮へと足を進める。
こつこつ日もたまには悪くない、かな…

- 余談 -

「あゝそう言えば。先生、朝のあれはやり過ぎやったと思うので」

「まじで？」

マジです。

二人に頷き返されてちよっぴり反省な帰路でありましたとさ(まる)

おまけ

side : A k o I z u m i

あれから、時間もたつて今は寮の食堂でゆーなたちと夕食を食べる。

いつもはまき絵と交代で自炊するんやけど今日は昼間のお詫びにまき絵がゆーなに何か一品おごることにしたんや。

まあ、そこで特製パフェを選ぶあたりゆーなは大物というか遠慮がないというか、見ていて気持ちのいい食べっぷりや。

横のまき絵は自分の財布を見て涙しとるけど…

「いやゝ、ただで食べるものはやっぱおいしいねゝ、てあれ？アキラその手のハンカチどうしたの？」

「あ、これは……」

そう言って簡単に帰り道で先生に助けられた事を説明するアキラ。あの後アキラの手に怪我しとるのがわかって血い見て慌ててしまったウチの代わりに先生が巻いとったものや

「へ〜あの唐変木な鳴守先生がね〜」

むっ

「音楽先生はそんな人じゃないと思うけど……」

ん？なんやゆーなニヤニヤして……

「へ〜、音楽先生、ね〜、今朝とは随分違っけどこれはどっいっ事かによ〜まき絵さん？」

「さ〜、どういっことでしょうね〜ゆーなさん」

う、いつの間にか復活したまき絵まで同じような顔で詰め寄ってくる。

このパターンは……

アキラ助けて！とアキラの方を見ると

“ごめん”と意思表示されたような顔で返されてしまった。

ウチ、味方なしっ!？

「さあ、はいちやえ〜!」

「あわあ、ご、ごちそうさま!……!」

「あ、逃げた!」

待てー!と後ろから追ってくる二人を背に寮内を走る。

さっきはちよっとなええかもと思っただけど……

やっぱり今日は厄日や〜!!!

……

その後、偶然寮長に見つかり三人ともお縄になりました。

「なんで、ウチまで!~!」

side:out

side:Akira・Okouti

夜、もうルームメイトはみんな寝ている。起きているのはたぶん私だけだろう。

昼間あの後寮に送ってもらった後、学園に戻っていく先生を見送った私たちはしばらくそのまま立ち尽くしていた。
ふと意識が戻って部屋に戻る途中お互いに話すのは先生の話。

もうびつくりしたとか先生強いんだとか目を輝かせて話している時の亜子は女の私から見ても生き生きとしていてかわいかった。

ふと、布枕元に置いたものに視線を移す。

あの時血を見て動転している亜子に代わり巻いてくれた先生のハンカチ。

もともと傷自体は軽いものだったので今は出血も止まってお風呂から出たときにバンドエイドを張っている。その時亜子がすまなそうな顔をしていたが気にしないように言っておいた。

ほんとにいい子だな亜子は…

うん、あの時男の人に囲まれた時は今日は人生最悪の日だと神様を恨みたくなっただけど、その後の事を考えたら帳消しになった…かな？

もう一度、あの時先生が助けに来てくれた時の姿を思い出す。

背は私よりちっちゃいはずなのにその背中は大大きく見えて…

いけない、なんだか顔が火照ってきた…

だけど不思議とその温かさに嫌悪感はなくて…こころも温かくなる。

うん、今日は良い夢がみられそうだ。

また明日一日、いい日になりますようにとあの時恨んでいた神様に祈って目を瞑る…

「おやすみなさい……」

s
i
d
e
:
o
u
t

取立6回目　く警備、それは昼も欠かせない仕事です。そして先生は最近の出版

はい、ここまで読んでくれた方。本当にありがとうございます。

気づけば早1週間、少しばかり学校行事で2つほどお隣の県に研修に行っていたトントンです。

いや、前回の更新の際に申し上げればよかったです。本当に申し訳ない。

さて、今回あがった第六話、いかがでしたでしょうか？

内容としましては前回に非日常パートの夜警備が入っているので、

今回は主人公が学園にも慣れてきたということでの昼間のお話。

ちよつとべたーな内容かもしれませんが本編合流までには入れたかったのです。

まあ、今回も生徒視点の強い話となりましたが、あれですね。関西弁は難しいとデスネ。（*ー*；グフツ

ネギまのキャラクターは個性が強い人たちが多いので書いてて楽しいのですが逆に表現できているかは……原作キャラのファンの皆様申し訳ありません。

その他では、ちよつとネタに走る行為を覚えてきたトントンです。

主人公のキャラが変わっているように見えますがこれも実は今後に必要な設定です。

まあ、あるキャラクターとの絡みのため考えた設定ですが、主人公実年齢9歳だし問題はないかと？

では最後に、

今後は更新のペースも戻していきます。

休載中も訪れてくれた方に感謝を述べて、今後ともお付き合いいただけるよう。
よろしく願います。

それではまた、再見！

取立7回目 くやっとな俺のターンゼヨ！前編 給料日後の最終試験（前書き）

どうも、トントンです。

今回お送りする7話は大分長くなってしまったので前後編というこ
とで二本立てにしてみました。

後編は時間を空けてから上げようと思います。

では、前書きもこのくらいで本編、どうぞ！

取立7回目 くやっとな俺のターンゼヨ！前編 給料日後の最終試験

給料日…

それは働く者にとっての終着点。

仕事自体が楽しいというやつもいるだろう…
だがしかし！

「俺の人生の楽しみはこの瞬間にあると言っても過言ではない！」

「それはまた、ずいぶんな人生ですね…」

こういうとこだけ人間っぽいのもどうかと思う。

…またどっかの新しい本でも買ったのかとリビングに備え付けている本棚に視線を移す…

『恋する乙女は何チャラシリーズ』…増えとる…

また買って来たのかあれ…

まあ、それよりも今は！

今日は休日！

学園の警備の仕事は無い！

つうことで……

「Let's 銀行！！」

「Masterその用法は少々…」

気にしない〜きにしない〜!

「行くぞ!アイン!!」

「……了解です。Master」

場所は移ってここは麻帆良市内の 銀行

目の前にはATM!

「お給料〜、お給料〜」

周りの視線がイタイ気もしないが、気にしない〜い。気にしない〜い
やっと回ってきた順番に決められた暗証番号を入力していく。

ふっ、この程度の機械の操作等俺にとっては朝飯前!

「さ〜て、今月のお給料は…、はっ?」

……

「総額、10万4千600円です。これは先月分も合わせたもの
はずですから…日給約2000円ですね…ちなみに通常の外働きの
給料は日給8千円。大幅に労働法基準を下回っています。」

…?…

…

…

…!?!?

あのタヌキ爺っ!!

〈所変わって学園長室前〉

学園長室の扉を文字通り蹴り破りかねない勢いで開け放つ。
いや、文字どおりってか実際吹っ飛んだから蹴破ったなのか?

「な、なんじゃ!何の騒ぎじゃ!?!」

何か目の前のギリギリ生物な存在が喚いているが知ったこっちゃねえ！

その長い頭にアイアンクローをかまし、目の前に件の紙を突き付ける…

「いたい、イタイってこれ、老人虐待…「黙れ」…ハイ…」

うるさくて話にならなかったので一度手を離し、再度紙を突き付ける。

「この数値は…君の給料かの？」

「なんか遺言《いう事》は？」

「え〜っと、少ないね…」

「おめえが査定したんだRO!!」

魔力を全身に込めて殴りかかろうとする俺はアインによって止められる…

「まあ…、落ち着きなさい。音楽君…「あゝあ!?!」…すみません」

「ったく、にしてもこれってあれじゃないのか…え〜と、あれだろ…何か法に「労働基準法です。Master」そう、それ！その基準法に違反してんじゃないかねえのか!?!」

「こづいう時は口調変わるんじやの〜。いや、だって10歳の子供

働かせてる事自体違反じゃし。」

……

「は？」

「労働基準法、第6章、第 条。年少者を雇用する場合、使用者は、児童が満15歳に達した日以後の最初の3月31が終了するまで、これを使用してはならない。《改正》平10法112」とあります。

…更に特定の職業においては、児童の健康及び福祉に有害でなく、かつその労働が軽易なものについては、行政官庁の許可を受けて、満13歳以上の児童をその者の修学時間外に使用することができ、映画の製作又は演劇の事業については、満13歳に満たない児童についても、容認されていますが今回のケースはもちろん当てはまりませんので罰則対象です。」

罰則？

「ちなみに今の第 条違反だけで懲役1年以下又は、50万円以下の罰金が華せられることになっています。」

キラーンツ！と閃いた！！

「おい、ジジイ！今の聞いてたよな？通報されなくなかったらきゅう「…」「借金」…は？」

「それだと借金肩代わりの契約は破棄じゃの〜」

「っな！てめっ…」

きたねえ！これが大人のやる事か！（もちろん自分の事は棚上げ…）

「ふむ、しかしこのままでは契約完遂までいつになるかわからんのも事実。（例の計画にも支障をきたすしの）…よし、おぬしもここへ赴任して2ヶ月になる！ここらで正式採用判定の試験を行うとする。」

「は？俺教師で雇われたんだろ？」

そう、それはギルドに回された。それもギルドマスターから直々の委託だ。それは間違いない。

「いや、その筈じゃったんじゃが…例のごとくトラブルがあったじやろっ？」

あゝ、学歴の件か。でもあれは広域指導員兼臨時の副担任ってことで…

「あゝ、扱いは臨時の教育実習生じゃからの。今学期で契約は解除になってしまっくんじゃよ。このままでは…」

はい？

「さらにいうとこの事態は契約書で決まっっていて変更できなくての、おぬしが学園側に採用されんかった場合は借金肩代わりの件はなし

に……」

「ってふざけんなよ！オイッ！！」

ホレと眼前に差し出される毎度おなじみな受託書……

……… 本当だ！

………

「あゝ、落ち込んだるとこ悪いんじやがそろそろ試験の説明に……

「それだよ！！」

「そつだよな！早い話試験に受かつちまえば契約は継続されるんだろ？なんだ？魔獣退治か？学園でバトルロイヤルか？いや、いつそ学園長とマジバトルか！？いいね、そっちの方が断然やりやすい」

今までの鬱憤も込められて一石二鳥だ。ああ、やつべえ……
想像したらゾクゾクきた

「ゝ、盛り上がっているところ悪いんじやが今回の試験は戦闘ものじゃないんじやよ。」

へ？

たたかえないの？

「じゃあ何を……」

「まあ、あわてるなて…おぬしに頼みたいのはこれのある場所まで運んでほしいのじゃ。」

そう言つて虚空から出現したのは一冊の本……つて本？

「め、る、き。d、d、で「メルキセデクの書ですね」…」

「…つてなに！？じゃあこれがあれば！」あ、おい！」

学園長が何か言ってくるが耳に入らない。

勉強嫌いな俺ですら知っている魔導書だ。さぞかしすごい事が書かれて…

書かれて…

…

「まさかよめな…」読めるよ！」「読めないんじゃない（ですね）…」

「こ、こんな魔導書俺にかかれば……つてかこれが課題？マジで？」

「2・A最下位脱出も考えたんじゃないがおぬしは副担任じゃし、学力は学生なみだし」

下ろすぞたこヘッドッ！

…否定できない自分のオツムに泣けてくるが…

「ま、そういうわけで今回の課題じゃ。合格すれば本採用。教師として正式採用の上、そうじゃの。体育あたりの役職についてもらおうかの」

「ほんとに島なのな…てかこれ建てたヤツは何考えてんだろ…」

悪態をつきつつ進むのは本棚の上、
てか通路が棚の上ってどんだだけだよ…

こんな恰好させられた時は？しか浮かばなかったけどこれなら納得か。

さかのぼる事30分ほど前、

課題を言い渡されて3時間ほどしたころ…

…

場所は移って目の前は図書館島前、

アインの案内により着いたそこは想像していたものよりもかなり大きな建物だ。

現在は中に入る前の装備確認中だ

しかし図書館に入るのにこのロープとか安全帯とか何に使うんだろ…
ちなみに今の服装は薄手のジージャンにジーパン、靴はなぜかトレスキングシューズ…

少し変えると水道工事の制服に見えない事もない…

どちらにせよ図書館に行く格好ではないだろう。

「今更だけど本当にこんな恰好で行くのか？」

「はい、図書館探検部なる部活に所属している学生から聞いた情報を元に選択しています」

。まず間違いないかと。」

…まあ、いつか。

「じゃ、行くぞ…」「行ってらっしゃいませ」「おう、行って…?」

「学園長の話聞いていなかったんですか?今回はMasterの試験になりますから私は同行できません。出る際の地下から地上までのナビゲートは許可されていますが」

……めんど…

そうだった、どつりでこいつがスーツで来てるはずだよな…
じゃ今回ナビなし?……チツ…

「は、行ってくる…」

「はい、行ってらっしゃいませ。」

そんなやり取りをしつつ、

見送る従者を背に図書館島に入ったのが30分前…

正直最初は「でけえ!」とか「すげえ!」とか驚いたけど時間が経

てばそれも薄れてくる。

本にそれほど興味が無いのも原因だろうが…

こんな地下構造の図書館なんかぜってー他所にないって。

棚よりはるかに高い天井と広大なフロア、通路が複雑に乱立する棚という事もあってまさにダンジョンといった感じだ。

これでお宝でもあつたらやる気も出るんだが…後ろのショルダーバツクにあるお宝は俺にとっては意味がないものだ。

決して魔法使いなのにラテン語が正確に読めないとかではない、単に俺にこれ以上強さを求める必要がないというだけだ。

うん、そういう事にしておこう。

「はあ、それにしても広いな。今が、えくと…地下…2階？…

…めんどくせえな…」

どっかその辺の本棚にぶち込んででもバレねえんじゃね？

そう思つて手近な本棚から本を置けるとこはないかと手を触れようとすると…

バチンッ…

…バチン？

「……………つつつ！…！」

よし、声をあげなかった自分をほめてやりたい。てかなんだこの漫画にでも出てきそうなネズミ捕りの罠は…地味にイタイ…

空いた手を使って罠を外していったん棚の上に戻る。

「盗難防止の罠か……いや、いくらなんでもチャチ過ぎるだろ……」

まさかこの先こんなばっかかと目線を前に持つていくと、隣の本棚でロープにぶら下がって本を探してる娘が一人……

ん？どっかで見たかな、後ろ姿に見覚えがあるんだけど……

……しかし、なんか見てておっかないもんがあるな……あのロープなんかがズルツととれたりして……

何気なくロープの先を眺めると……金具が……ずれてる？

「つて、オイ！？そこのお前！！」

「！？」

危ないと思って声をかけたのがまずかったのか、見覚えがある少女はビクリと肩を震わせて……
バランスを崩した。

「なっ……！！？」

よろけた反動で外れる金具と重力に従って落ちる少女……

チイツ！！

舌打ちしつつも目の前の出来事に考えるより先に足が動く、空中で速度を合して少女を抱きかかえる。

棚の高さから回り込むには問題ない

問題ないんだけど……

下が水溜りって構造上どうなのさ……

「ふう、なんとか間にあったか……、全身びしょ濡れだけど……」

うーん、どうするか……

俺に比べて比較的濡れていないとはいえこのままじゃ風邪ひくだろうしな……

替えの服は……ないけど……てか俺の服着せてどうすんのよ……

……い……!!!?

うーん、まいったな……さっきは周りに人いなかったから瞬動なんか使えたけど、逆に助けられないんじゃないかね？

……めんどいけど戻るか……

……お……い……!

?上が騒がし……ってロープ?

人の声が聞こえたような気がして上を見ると目の前に降ってきたのはロープ……登れってか？

飛んだ方が速いが、人がいるのは正直助かるしな。

落ちていた先ほどのロープで簡単に少女を背中に縛り、なるべく一般人に見えるくらいのスピードで登る。魔法使いの処世術ってやつだ。

……

登りきった先には身長差にかなり差がある少女が二人、どうやらロープを下ろしてくれたのはこの二人のようで長身のメガネをかけた娘が手を差し出している。

一言助かると言って申し訳程度に手を借りて登りきる。
登ると意外と高いなこの本棚……

「大丈夫ですか？」

「……ん？ああ、気は失ってるけど身体は特に怪我してないと思う。ちよつと水を被ったからなんか拭くもんとか貸してやってもらえる
と助かるんだけど……」

「いえ、どちらかというと先生の方が……」

「ゆえ〜、タオル持ってきたえ〜！」

背負った少女を下ろしていると話しかけてきた少女に対応している

と奥の方から女の子がこつちにタオルを抱えて走ってきている。
ん、と？あれは……近衛嬢？

じゃあこのゆえって娘は……ああ、綾瀬か。
てことはこの触角を生やしてるのは早乙女で……

助けたこの子は……宮崎か。そういえば名簿に4人とも図書館探検部所属ってあったっけ。部活動か…なるほど、こんだけ広げりや『探検部』にもなるか…

「あれ？なんで先生がおるん？」

「ああ、学園長の「くしゅんっ…」…わるい、移動しながらでいいか？先に宮崎をなんとかしないとこのままじゃ風邪ひいちゃう。」

「そやね、この先にタオル持ってきた休憩所に個室があるから、先生そこまでのどかを頼んでええ？」

近衛の申し出に頷いて宮崎を抱えなおす。

先導してくれる彼女達は意外に危なげなく進む。

はあ、最近の学生はたくましいねえ

生人体の俺でも魔力補助なしじゃちよつと面倒なのにな…
幼少体じゃきついだらうしな、

「こつちです。」

おっと、意外と近かったな

「って広っ！何だこれ!？」

「おお、先生いいリアクションだね」

「ここは図書館島に点在する閲覧室です。閲覧室といっても室内というわけではなく、そもそも空間自体室内である図書館島に屋根を有する建造物の必要性は低いのですが、私の見解では……………」

うん、御高説はありがたいがさっぱり理解できん…

綾瀬の解説もそこに奥の小部屋に案内される。

外の机と椅子を置いただけじゃなくて奥にトイレとかも完備してるのか。

ほへー、こんなところもあんのな…うん、この方が休憩所って感じだな

「……………のように開放的な空間の有用性もありますが一概に正しいと言えわけではなく、本を読むという行為においては閉鎖的空間も重要な要素であるとされます。もちろん限度はありますがそれを踏まえても……………」

まだ、続いているのか……………、

「あ、綾瀬、とりあえず宮崎を頼みたいんだが……………こればかりは先生がやるわけにいかんしな。」

「…っと、そうでしたな。出は先生あちらのソファの方へのどかを寝かせておいてください。後は私達でやりますので。」

指示されたソファーに宮崎をおろして俺は退散する。
外に出てそういえば、と用事の途中だったと思ひ出す。

思考する事数秒…

うん。、どうすつか……課題の途中だけどこそのまま行っちゃうのもどうなんだろう？

「あ、よかった！先生まだいた。」

ん？

入口のすぐ横で思案していると例の触角が顔を出す。

うむ、特徴でk…いや、個性的だ…

「早乙女か、どした？」

「はいこれ、タオルです。すみません、先生もずぶ濡れなのに締め出すような形になってしまつて。」

「ああ、サンキユ。いや、替えの着替えは持つてるから問題ないさ。身体を拭けるだけでも助かる」

差し出してくれたタオルを軽く被り髪の毛の湿気を落とす。

実は着替えなど持ってないがこれくらいの湿気なら魔法で飛ばせるので問題ない。

「ところで先生はどうして図書館島に？見たところ装備はかなり本格的ですけど…」

「ああ、学園長に本を戻してもらおうように頼まれてな、装備は知人に相談したら用意してくれたものなんだが……まさか本当にこんなのが必要とは思わなかったよ」

「は、返却ですか……、どんな本なんです？」

「あ、貴重書らしくてな、それはノーコメントだ。場所も地下10階より下らしいしな」

ガシッ

「えっ？」

「先生3階以降に行けるの!？」

三階以降と言えば私達中等部生にとっては文字通り前人未踏の地!

などとのたまいやがるのは結構だが興奮しながらユサユサと揺るのはやめれ……

「……それが新任2ヶ月足らずの先生が行けるなんてどういう事!？」

どうでもいいが口調変わってるぞお前……

「いや、学園長の許可が下りてるから……」

「じゃあ、じゃあ……」

「落ち着くです。」

次の瞬間には頭を押さえてる早乙女と、その後^にいつの間にか居た綾瀬が

ああ、あの分厚い本で殴られたんだろう…イタソ

「ったいよユエ！」

「ドアを開けた先で先生に掴みかかっている所を見たら友人として止めるべきかと…」

いや、本は痛いから！角とか下手したら殺傷ものだよ！？
などと一方的に騒がしくなる目の前。

このまま放っておいてもいいんだが教師としてそれは不味いんだろ
うな…つつことで

「あゝ。綾瀬はなんか用事があつたんじゃないか？」

ぱちくりと止まる早乙女とその抗議（物理的）を本で応戦していた綾瀬。

「そうでした。先ほど上の先輩達に連絡を取ったところ、担当エリアを再分担するそうなので蔵書のチェックは一旦切り上げて一人戻ってきてほしいとのことですよ。」

「んゝ、でのどかは？」

「まだ、目を覚ましません^が外傷等は無いので問題はないと思うです。私^はのどかの替えの服を取りに行つてきますので、ハルナにはかわりに先輩達の所に行つて欲しいのですが…」

「ん、OK。じゃ先生。さっきの件はまた今度ね。」

いや、全力でお断りします…

立ち去る早乙女に片手で答えて綾瀬の方に向き直る。

「では私m…」

「あ、俺も学園長に頼まれて下に行かなくっちゃいけないんだが…、宮崎は大丈夫そうか？」

「はい、先ほど言った通り先生のおかげで怪我はありませんでしたので。」

そっか、と一言軽く答えて思案する。

上にはもう報告したって言うし俺の出番はないか…

さすがに俺が着替えを取りに行くわけにもいかんし、直に宮崎も目を覚ますだろ

「じゃ、悪いが俺も先行くから。宮崎達にも後でよろしく言っといてくれ。」

短く返事を返してくれた綾瀬に手を振ってもと来た道に戻る。

大分ロスしたがまあ、問題ないだろ。

本棚の上を魔力強化した足で駆けていく。

この後、またさらなる厄介事が待ち受けているのだが、今の俺に知

る由は無かった。

はい、というわけで言い渡されました主人公の正式採用試験！

図書館探検部メンバーとの邂逅をすませ、深部へ降りる主人公。
果たしてその先には！

みたいなノリです。

労働基準法…本編で学園長に聞いたとしても「ばれなきゃよくな？」
とか平気でありそうですよね（笑）

今後は予定通り、この前後編が終わったら原作突入です。

ようやく原作主人公登場の兆しが見えてきましたが。長かったの
かなコレ？

まあ、お付き合いくださる皆様に感謝ということのでひとまずまとめ
まして。

また今度早めに更新します。

休みのうちに原作話をUPできるようにしますのでどうぞよろしく
お願いします。

ではまた。再見！（気に入りました（笑））

取立7回目(続) くやっと俺のターンゼヨ!後編 先生は張切り過ぎたよう

はい、時間をあげまして後編の投稿です!

って大分時間が空いてしまいましたが:(苦笑

今回は久々の戦闘シーン、主人公は給料UPがかかっているので大分やる気満々なようですが、果たして結果はいかに...

そんな後編、ではそろそろ本編に...

では、どうぞ!

走る視界に移るのは相変わらずの本棚:

現在地下11階、かなり下まで降りて来たのだがいい加減見飽きてきた。

というのも、地図を読めない俺としてはフロアを片っ端から走り回らないくちはならないのでワンフロアにかかる時間が半端ない…

ここに来たのも地下7階で湖を渡っている最中に底が抜けて落ちたからだ。

「あのジジイめ、よくもこんな面倒な課題を出しやがって…」

いきやあ判るって？

見渡すフロアは地下に降りることに確かに狭くなる。が、それでもなお広大な面積を有する。

これのどこから探せと？

……

魔力でも感知できるのならまだいいんだが感知それ自体が苦手な上、この本達が発しているのか微弱な魔力が多数に出ているのでそれらしい場所は今のところ発見できない…

「……本気で探知系の術習つか…」

いや、まあ…どうなんだろう不便なのは間違いないんだが今まで困

なかつたしなあ

「しかし…、ここを造ったやつは馬鹿か？こんな魔力垂れ流しじゃその手の奴に丸わかりだろうに……」

走りながら思索する。

この階まで来ると人もほとんど見当たらない。

おかげで魔力強化が存分に使えるんだが……

……

……？

「あそこ……認識阻害の呪法か？」

11階もそろそろ半分を回りつくすかという頃、眼下の本棚の下の方の足場に変な魔力を感知した。

誰もいない事を確認して浮遊術でひとつ飛び。

目の前には人がようやく通れるかという横穴、認識阻害の呪法などを使っているところを見るとまずアタリだろう……

「ん〜、やっぱりか。つうことはこの先が本の保管場所か？……しかし深いな……」

“光よ！！”

う〜ん。さすがに奥までは見えないか……

考えても仕方ないという事で奥へ進んでみる。

進めどもただ単調に続く道に飽きも来る。
構造上這って進まなくてはならないのも要因だろう。

一発ぶちかますか？

とか考えながら前方を眺めると暗闇の先に不自然な光源が四角く下りている。

…あれか……

手もとの携帯杖に灯した光を消してペンライトに切り替える。
魔法では光が強すぎる為、場所がかえって分かりずらくなるためだ。

「よつと……」

光が漏れていたのははめ込み式の石板のようだが意外と軽く、片手でも持ち上がった。

そして顔を出したそこに広がる光景には……

「……………何もねえ……………」

そこは10立方ほどの空間、部屋というには広く、先ほどの蔵書スペースに比べれば狭い、何もない灰色の空間は図書館というより牢獄を連想させる。

「ん？……………台座と……………石像？」

ふと振り返ったそこには先ほどまで何もなかったはずの場所に一卓

の石でできた台座、その奥には一体の石像。それは狼の姿を冠した石像、ガーゴイル。

特異な点をあげるのなら3メートルはある巨体とギリシャのそれとは違い、ファンタジーに出てくるような大きな翼を生やしているところだろうか…

「……おまけに認識障害の結界か…、防音は完璧、つてか？」

みるみる高まる魔力の気配に反して外部と隔絶されるこの感覚…ダンジョンのトラップでおなじみの結界だ。

見たところあの台座は課題本来の目的である安置場所で間違いないだろう…

……ま、ぐたぐた考えるのは性に合わないってね…

台座、石像に向かって歩を進める……すると

『待て…小僧…』

……

「小僧と来たか…それで、石の守衛さんは俺に何の用かな？」

『………我はこの部屋に来たものを選定するもの…この部屋から出たくば我が問いに答えよ。』

声と共に後ろでゴトリと重いものが音をたてる。

恐らく入って来た石板が下りたのだろう。学園長もいい演出をする…

『否、…我が主はそのガクエンチヨウなる者ではない…』

「なっ!？」

こいつ、心が読めるのか!？

そんな高度な使い魔…いつたい

『我が問いに偽りは意味も無し……汝、真を持って我が問いに答えよ…』

エジプトのスフィンクスかよ…

また面倒なものを…

『汝、誠実であるか否か…』

あ? 『せいじつ』……たしか正直とか真面目って意味だよな…
嘘は嫌いだけど真面目ってわけじゃねえし…

「ちがうな」

『二つ目…汝、純真にして無垢なるものか…』

?なんだそれ…じゅんしん??

『次の問いだ…「あ、おい!」…』

「まだ答えてねえぞ、」

『…よい、答えは見えた…次の問いだ…』

見えたって…コイツ

気に入くわねえな…、聞くだけ聞いてこっちの内を探りやがって…

『…』
『汝、勇気を持ちて正義を行うものか…欲を抱いて悪を敷くものか…』

正義だ悪だって…さっきから小難しい言葉並べやがって…

『…答えよ…』

だめだ、こういう頭使うのは俺の専門じゃねえ！

「ああ、やめだやめだ！何だってお前の問いに馬鹿正直に答えてやらなきゃならねえ！

『フォワード転送』セミスパタ 二刀！！』

虚空に幅広の短剣を喚び出して相手に突き付ける。

「正義なんだって俺の事試したいんならさっさとかかってこいや！…」

『……愚かな…』

初めに動き出してからそれまで不動だったその巨体を起こして一歩、こちらに踏み出す。

いいねえ、本を運ぶだけの課題に物足りなかったところだ…
誰だか知らねえが遠慮なくストレス発散させてもらっぜ！

「ああ、いっちょ楽しく殺ろっぜっ！..！」

…一合…、二合……

優に百を超える剣戟を討てどもその巨体には傷一つ付かない。

「つつう！かつてえな、おい！」

一撃が弾かれる度に腕に痺れが走る。

外見のままにその巨体はこちらの攻撃をもともしない。

っ！？

そして撃たれる一撃の重さ、

障壁も平気で潰しかねないその腕をいなそうとも剣では弾かれて悪ければ碎かれる。

「つつちい……『^{フォワード}転送』ファルシオン 8^{エイト}番！」

俺たそばから剣を転送して応戦する。

これで3本目、かれこれ10分は討ち合ってるが勝敗を左右するよ
うな決定打は今のところ互いにならない。

いや、体力つつう限界がある以上長引けばこつちが不利か…

「つつらああ！！」

8番刀ではあるが碎ける事も構わず力任せに弾いて距離をとる。

「『^{フォワード}転送』バルディッシュ 5^{ファイブ}番……気にいらねえな…何で追
つてこねえ、舐めてんのか？」

『…我は選定するもの…挑まれた故、手段を替えたにすぎぬ…』

戦いも測るための手段ってか？

言ってくれるじゃねえか…

「言っじゃねえか…デカブツ…これを食らっても文句は、聞かねえぜっ…!」

“魔法の射手 集束・雷の399矢!!”

床を巻き込むほどの大きさを持つ帯状の光弾も翼によってさえぎられるが、

…

煙と光が静まったそこには片翼をおられたガーゴイルの姿があった

「はっ!これでも翼の一本とは丈夫なナリしてるじゃねえか!」

瞬間的に溜められる『魔法の射手』の最大本数による一斉掃射。

その威力はかの試験で鬼共を薙ぎ払ったそのどれよりも上ではあるが、どうやら目の前のコイツはそれより大分上等な代物らしい…

「もういつちようっ!! 『魔法の射手 連弾・雷の399矢!!』

」

狙いもへったくれもない文字通りの乱射

部屋の内壁を巻き込みながら煙を上げていく

視界を奪うのは戦いの常套手段だ

「んでっ、こいつはおまけだ! 『雷の投擲!!』 x5!!」

『雷の投擲』に煽られて晴れたそこには地に縫い付けられた石像の

姿が……

チツ、2本外したか……

「終いだ…釣はいらねえ、とつときな!!」雷の斧!!」

『ぬ、うア……』

「あああああああつ!!!!」

片翼で粘るガーゴイルに魔力にものを言わせてその防御を振り切る

「はっ、これで合格かよ?まあ、聞こえちゃいねえだろうがな……」

……

物言わぬ残骸となった石の像を確認して周りを見渡す……お?

「ははっ、あんだけ暴れまわったのに無事たあよくできた台座だな
あおい……」

そこにあつたのは石像とやり合う前からあつた石の台座。

周りが魔法の余波で荒れ果てているのに対し、その一区画だけきれいに切り取られたかのように残っている。

「余計な手間取ったけど……まあ、これにて課題終了かな?」

台座に本を置くと虚空に『Examination end・I
t is passing.』の文字が浮かび上がる。

前文はよく読めないが、passということは合格ってことだろう。

「うつし……帰るか。』念話!』」

アインのパクティオカードを取出して額にあてる

“おゝすつ、こちら試験終了だ。学園長に確認取ってナビしてくれねえか?”

“お疲れ様です、Master。では学園長の方に連絡を取るののでしばしお待ちを……”

“あいあい〜”

これでよしと、後はアインの連絡待ちだが……

あれまた戻んのか……鬱だ……

……

しゃーない、ナビがあるだけまだましなんだし、さっきの横穴の入り口くらいまでは戻っておくか。

そう思つて瓦礫を適当に吹き飛ばしていると……ズボツ……

「ズボ?」

足もとを見るとひび割れた床に片足が埋まっている状態……
これって……さっきの通路?

やっべえ……埋まっちゃった?

.....

.....

っておい!!どうするよ!?

見た限り入口は一か所だし瓦礫だけ消すなんて器用なマネ俺にはできねえぞ!

“ M a s t e r 。 ”

“ おう、アイン!ちょうどよかったやべえ!いりぐちがうまっちm”

“ 学園長に連絡したところ、直接報告を聞きたいという事で『強制転移』が使われるそうです。 ”

強制転移?

“ 私も先に飛ばされるそうなのでまた後でという事になります。 ”

“ おいつ、アインちよt ”

“ 失礼します、M a s t e r 。 ”

念話が途切れる

つつか人の話聞けよ……

確かにここから出られるのは助かるが、

“あゝ、音Yつと違ったアハト君、アイン君から聞いたとは思つが今から強制転移を行うのでよろしくのゝ”

“あ、学園長ちよt”

“じゃ、後での”

またもやプツリと途切れる念話

そしてこつちの事はお構いなく足もとに出現する魔法陣……

「ドイツもコイツも人の話をなんだと……」

この怒り……どうしてくれよう……

眼の前に迫った光の陣を見詰めながらそんな事を考えていた……

side:Ain・Recode

光が収まったと目の前の空間は学園長室

初めて『転移』した時の違和感はどうもながら不快感を覚えたものだが、

Masterがその機能を好んで使うため既に慣れている……

「……とは思いますが今から強制転移を行うのでよろしくの〜」

そう言った学園長の手前にあるのは例の受託契約書。

「じゃ、後での」

念話を切ったようで早速何やら呪文を唱え始めた学園長。

どうでもよいのですが……これまでのやり取りでこのパターン……I o gで同種のもが複数検索できるので……気のせいでしょうか？

205

詠唱後、室内に満ちる魔力と共に出現する魔法陣には我が、Masterの姿が……

ああ、やつぱり。

フェイスセンサーに表示されるこめかみの動きからして相当怒ってらっしゃいますね……

次に予想される行動は……

「ジジイてめえ……、人の話は聞きやがれっ！……！」

ああ、申し訳ありません。学園長……制止する間もありませんでした……

相変わらずの手の速さ……見事ですMaster。

瞬間により召喚地点から残像を残して消えたMasterは、次の瞬間に見事な鈍い音をたてて学園長に殴りかかっていたところでした…

「てめえ、何が今回の課題に戦闘はねえだ！」とか「あんな役に立たねえ地図よこしやがって」など

久々にギルドにいたころを思い出します。

みなさんは元気でしょうか…

「アイン君たすく」「歯あ食いしばれえ!!」「ひょっ」

目の前で起こる轟音に何か懐かしいものを感じる今日この頃です……

……

……

「け、結論から言っと…合格じゃ…」

「フンッ」

事態が収拾し、報告を終えたところで学園長から試験合格が言い渡される。

当然だとばかりにふんぞり返る我がMaster。対して、少々やつれた様に見える学園長…

非常に対照的です…

「辞令は後日送られる…君が気にしとった給料も上がるじゃろつて。

「
「うっしや！給料UP!!」

よほどうれいのでしょう目の前ではしゃぐ姿はまるで子供のよう
です。

「ただし、予定していた体育教師採用の件は無しになったのでその
つもりで…」

「は？なにそれ？？」

学園長の発言に目を点としていたマスターはみるみる拳に魔力を練
り上げていく…

「ちよっ、話は最後まで聞くもんじゃ！」

ちっ、と舌打ちする我がMasterに冷や汗を浮かべる学園長…
学習してきたようですね、学園長の対応が当初より5・83秒ほど
速くなっています。

「ちよっとした事態での、来期からウェールズの魔法学校より卒業
生が修行に来る事になったんじゃ、そこでおぬしには彼の学園内
のサポートと指導教員の一人として動いてもらいたい…主に魔法関
連側ちについての査定ちじゃな。」

「俺としちゃ、貰うモンちゃんと貰えりゃ文句はねえがな……で、
どんなやつなんだ？」

Masterの言葉に机から取出した用紙を投げよこす学園長。

横から眺めたそこには……

「……ネギ・スプリングフィールド……英雄様のご子息か……よく魔法世界側が容認したな。」

ネギ・スプリングフィールド

大戦期の英雄……『サウザント・マスター』とまで呼ばれた魔法使いの息子。

旧世界育ちでもその噂は魔法世界までとどいていましたが……見る限り書類には大変優秀な成績である事がうかがえます。

……飛び級な上に主席で卒業。歳は数えでわずか10歳……と、これはMasterと同じでしたか……成績の方は真逆ですが……

「そこはいろいろと事情がの……成績優秀といっても彼はまだ若い……裏を知るにはまだ早いという校長の配慮じゃ。」

「ま、そんなところだろ……で、お目付役の一人に俺か？タカミチの方が適任じゃないのか？」

「タカミチ君は何かと空けられない用事が多いので、他の魔法先生も役割上手いっぱいじゃ、もちろん魔法生徒にまかせるつもりはないので……どうじゃ？引き受けてくれるかの？」

「……まあ、いいだろ……たく、課題とはいえ10歳にも満たない子供を雇うMasterも同い年ですね」じゃかしい！……はあ、もういい。その件に関しては承諾する。今回の件では契約続行、来期からは新担任のサポート、これに関しては契約金の上乗せってことで『更新』でいいか？」

よしという学園長の承認を得て呪文の詠唱を始めるMaster。
契約時と同じ手順をふんで契約内容が『更新』されていく

「……これでいいな、用件は以上か？」

「うむ、今日は御苦労じゃった。明日からまたよろしくの。」

学園長の言葉に片手で答えるMasterを追うために私は軽く会
釈をして続く。

……

扉を出るとそこにはこちらに向き直っていたMasterの姿が、
どうやら待っていていたようです……

「お疲れ様でした、Master。」

おう、と返すその姿に魔法世界でなかったゆったりとした雰囲気
それをみて、

平和な日常と胸に温かいものを感じました……

「さ、とつとと帰って飯にしようぜー！」

「では、今日はちょっと豪勢に行きましょうか。お祝いです。」

マジで？

マジです。

「っしやあゝ！じゃ今日はすき焼きな！」

「それは少々時期が…」

気にしない気にしない」と言うMasterにため息を一つついて足取りを帰路から最寄りのスーパーへと向ける。

「ほら、さつさと行くぞ！食材が無くなっちまう！」

はいはい、と“苦笑”が漏れているのを自覚しながら歩を速める。目の前に行くMasterと先ほどのやり取りを思い出して、自分も大分感情面が育ってきたのと、ここでの日々に“楽しさ”を理解してきた自分に驚き、その表情が“笑み”へと変わる。

「ほら、おっせーぞ、アイン！」

平和です…

願わくばこんな日常をあと少し、もう少し長く彼に訪れるよう願いながら彼に駆け寄る。

まあ、ドールが神に願うというのも少々おかしな話ですが…

おまけ

side.....(学園長室)

.....

……

「行ったようですね…」

「何も隠れんでもよかつたろうに…」

いえ、やっぱり謎なままの方がキャラとして長続きしますし、私シヤイなんで（嘘）

「それにしても彼が入った部屋があそこは…複数用意した中でも難易度が高い部屋でしたからねえ…」

「やはりおぬしの仕業か…」

「ええ、部屋を生成している最中に思いついた事でただ安置するだけじゃつまらないと思ひまして。部屋ごとに私のコレクションの中からいくつか置かせてもらいました。楽しんでいただけただけのようなのでよかったです。（ニコツ）」

おかげで面白いものが見れましたし、地下で動けないこちらとしてはたまにはこういうった娯楽が欲しくなるものです。

「こちらが…今回の件で私の意見をまとめた報告書と彼のたどり付いた部屋までの簡易地図です。」

「ふむ、ご苦労じゃなA」「……………」「…なんじゃその無言の圧力は」

「いえ、ただここで名前を出されるのは時期尚早な気がしまして。ほら、謎って雰囲気キャラは序盤では名前が出ないのがお決まり

ではないですか。」

「何の話をしておるんじゃ。なんの……」

「まあ、いいじゃないですか。気にしたら負けですよ学園長。」

「彼にウェールズの子のお守を任せるとは……まあ、今回の試験内容から概ね問題は無いと思われませんが……」

「紆余曲折もあつたが……ま、予定通りじゃしの……」

「しかし、彼にメルキセデクの書を持ってこさせるとは……随分と思いきりましたね」

「なに、彼の性格はこれでも2ヶ月で把握してきとるしの、仕事で手を抜かんのは信頼できるしの……まあ、あのやり過ぎるところがなければなおいいんじゃないが……」

「……おかげで私のコレクションも壊されましたしね。と、そうでした。これは今回の請求書です……」

差し出される請求額にギョツとする学園長。

ふふふつ、やはり人をからかうというのは老若男女問わず最高の娯楽ですね……

「この額は……そうじゃ！壊したのも彼なんじゃし請求は彼に回せば……」学園長「……」

「あまりズルをしていては嫌われますよ……それに、彼は少なからず知っている仲なのであまりいじめないで上げてください。」

「何！？おぬし、それh…」

「おっと、電波が（嘘）…失礼…」

それを聞かれるのは少々面倒なので適当にはぐらかして分身体を消す。

……

意識を本体に戻して振り返るのはまるで昨日の事のように、
思い出すのは懐かしき頃の『紅き翼』にいたころ

同志の一人が少年を連れて来た時のこと

あの少年が大きくなったものです。っと、先ほどまでは『生人体』
というものでしたか…
元気でやっているようでしたが、いかんせん歪んで育ったようですね。

私好みでないのが残念ですが…

まあ、いいでしょう。

私が地上に赴くときも近い…その時にでもお茶会に招待してあげるとしましよう。

はい、いかがでしょうか？

初の前後編ちよつと長めの原作突入前ということなので従者との絡みを少々と

主人公の過去をにおわせるスパイスを少々。そんな7話でした！

伏せ字のキャラもいましたがみなさん丸わかりですよねコレ？(笑)

では、戦闘シーンで主人公が使っていた『転送』について解説をば転送は従者であるアインのものとは違い自分で作り出した空間に物質をストックして任意に取り出す魔法です。

一度収納すればシングルスペル程度のキーワードで呼び出せるので主人公は重宝しています。(プロローグの龍退治の際にそれっぽく出ていますね)

主人公の性格上なところから収納するものは基本刀剣類で槍なども入っていますが銃火器等はストックしないようです。

次に対象を呼び出した後に呼称していた番号ですが、あれは主人公本人のお気に入り、ストックの中でも上位なものが武器毎に分類されていて番号が低い順に上位の装備ということになります。また、番号がない場合は魔法に編まれた術式が下位の装備からランダムに喚び出してくれるというものです。

以上解説でした。

それでは今後、今日中に次の話をUPする予定ですが

今日は予定が入っているので7時前後に上げると思っています。

これまでお付き合いいただき誠にありがとうございます。

ようやくこの『副担任は借金教師』も原作突入です。

原作に入ったら例の番外編なども上げる予定なので機会があったら見てやってください。

では、解説等で長くなったのでここまでにして、
また次回、再見！

取立8回目　〜三学期だよ！ネギ先生！「主役はぼく、俺だ！」「…らしいです

はい、投稿12回目　（ま、内1つは設定ですが…（笑））

やっと本編突入…しかし一話をまとめようとすると厚みがすごいことになりますね…もう1話分使うことになっています。

内容としてははじめは原作からあまりずれないようにしているので最初はそれほど変化はありません。

次話以降にご期待ください。（かしこ

では、少々短くなりましたがそんな8話目

どうぞご覧ください。

取立8回目　〜三学期だよ！ネギ先生！「主役はぼく」俺だ！」「…らしいです

朝、いつものように朝食を食べていた時の事

カレンダーを見ながら印が付いているのが今日だと解り一体何の日だったかと思案する。

が、少々寝ぼけてえいる自分の頭ではそれを思い出すことはできず、自分の思考に降参し

従者に答えを聞くべく顔をあげた。

「なあ、今日って何の日だった？」

「はい、今日は例の少年が教育実習生として麻帆良に赴任する日です。予定通り2-Aの担任になるそうですね。」

調理器具を片づけながら話すその姿は手慣れたもので麻帆良に来てもう7カ月と少し、すっかり日常の風景となっている。

一年を旧世界^{こしよ}出迎えた事はなかったんだが……騒がしい年末だったな…

寮に居残った者がやたらと押しかけてきて…まあ、飯は相変わらずうまいんだが。

「はあ、そう言えばそんな時期か…」

となると今日は朝から忙しいな、新任の先生の引き継ぎでてんやわんやだろうし…

「そういつわけで朝食は早めにすませてください。」

「ハイハイ、」

残ったトーストを頬張り、ミルクで胃に流し込む。

さて、噂のネギ少年はどんな子なんでしょうね〜

職員室で軽くタカミチ達と打ち合わせをし、しずな先生とふたり学園長室前に来たのだが

…なんだこのギャイギャイとうるさい扉の向こう…

一瞬躊躇してしまった俺に対し、そのままノックをした彼女はとても優秀なんだろう。

中から学園長の返事を待つて入室する彼女に続いて軽く会釈をする。

「失礼します、お呼びですか学園長。」

入ってみると中にいたのは学園長の孫娘、近衛 木乃香とそのクラ
スメートである神楽坂 明日菜。

という事はこの目の前で若干ラッキー Ske べ的な事態になっている
少年がネギ少年か……不安だ……

「源 しずな先生と鳴守 音来先生じゃ、今回君の指導教員として
当たる事になっておる。何かあったら彼らに頼るとよい。」

「鳴守 音来だ。指導教員以外では君の担当クラスの副担任をする
事になっている。まあ分からない事があったらその時に、よろしく
ネギ先生。」

「あ、ハイ。ネギ・スプリングフィールドです。よろしく願いま
すす！」

学園長に紹介を促されて自己紹介を済ませる。

先ほどまで委縮しているような印象を受けたがなかなか元気な返事
を返してくれる。

まあ、これが普通の10歳の少年だよな……

ま、がんばりますか……

……

……

「……といった感じですか。わかりましたか？ネギ先生。」

互いの自己紹介を済ませた後は住居の話で一騒動あり、学園長が見合いをネギ少年に進めたりとあったが概ね問題なく進んでいるだろう。

今は神楽坂達とわかれて教師三人で2 - Aの教室に向かっているところですしな先生がネギ少年に教職課程を説明している。

彼も実習生という扱いだろうからまた試験など行っただろうか？

……っと、教室についちまったな

ネギ少年を見ると手元の学籍簿を眺めて何やら緊張した様子……仕方ないか…

「!?!?」

一息にバンツっと少し勢いをつけてその背中をたたいてやる

「肩に力が入り過ぎだぞネギ先生、最初が肝心と言ってもそんなガチガチでどうする。」

あうあうと口を閉じたり開いている様は同い年ながら初々しいものがある…いかん、心が老けてきたな…

「俺もしずな先生もいるんだ、フォローはしっかりしてやるから元気良く行け！」

「ッはい!!」

うん、今のは先輩っぽくできたかな？

しずな先生に目線で確認するとOKサインを出してくれたのでよかったらしい。

と振り返ってみるととも入室では普通ありえない轟音をたてて…
教壇に激突したネギ先生…

その姿は頭から黒板消しトラップを喰らっただろう痕跡とバケツを被り、身体の所々におもちゃの矢が刺さっている…

「増えとる…」

そう言えば新任の先生の事ちゃんと説明してなかったなあ〜っと思
う傍らで、このトラップの強化状況は日々俺と悪戯常習犯共の戦果
なのだろうと思うと申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

申し訳ないネギ君……

シーンとなる教室内を見てとりあえず心の中で平に謝る俺だった…

「あんなかと一緒に暮らすなんてお断りよ!!」

学園長室から出たところで、明日菜さんは僕睨み付けながらはつきりそう言った。

学園長から一通りの説明を受けた後、僕の住み込み先が明日菜さんと木之香さんの部屋にするように言われてその突然の指示に僕のこととが気に入らない明日菜さんからは当然反発され、けんもほろろの答えが返ってきた。

でも、あまり人に指を突きつけるのは良くないと思います。

「じゃあ私先行きますから先生っ!!」

止める間も無く、ドスドスと足音を鳴らしながら明日菜さんは行ってしまった。

このかさんもそれを追いかけて行ってしまい、廊下には僕とせずな先生、それと音楽先生が残る。

なんだか台風が過ぎ去ったような感じた。

しばし呆然としてしまったが、我に返ると先ほどまでの彼女のあんなりな態度に思わず不満が口をついてしまう。

「何ですかあの人は?」

「ウフフ……あの子はいつも元気だからね。でもいい子よ」

「ま、なんか知らんがこれから挽回してきゃいいさ。」

大人な対応をするしずな先生と励ましてくれているだろう音楽先生。

しずな先生は僕の指導教員で、ウェーブした長い髪が綺麗な人で、先ほど挨拶されたときは彼女の大きな胸に頭が埋まってしまった。彼女の落ち着いた雰囲気や物腰は、相手に安心感を与える空気を持っている。

逆に音楽先生は紺のスーツを少し着崩したような格好で少しだしがないように見えるがとても自然体な風。ちよつと乱暴な言い回しがある気もするけれど優しく気遣ってくれている。僕にお兄ちゃんがいたらこんな感じだろうか？

二人を見て改めて思う。僕もこれから先生としてこんな風になれるだろうか…

「それより授業のほうは大丈夫なの？ネギ君」

クラス名簿を渡しつつ、しずな先生が尋ねてきた。

そう言われて、今更ながら緊張がおそってきた。

「あ…う……ちよ、ちよつとキンチョーしてきました」

「ほら、ここがあなたのクラスよ」

僕の様子を微笑ましそうに見ている先生。しずな先生に促されて教室を覗いてみた。

『……………！ うわー』

教室の中は喧騒に満ちていた。

「おはよー」と友達と挨拶を交わし、お喋りする者、読書する者、静かに座る者。思い思いに行動する女子生徒たちが教室の中でひしめいている。

活気に満ちた教室。

その光景にしばし見惚れていた。

これから自分は教師として、彼女たちを受け持つことになるんだ。クラス名簿を開けば一人一人のプロフィールが書かれており、タカミチが書いただろっ注釈が付いていた。

「げっ……………い、いつぱい……………」

31人の顔と名前を見て、改めてその大変さに気後れする。全員自分より年上の人。

彼女たちを相手にきちんと教えることが出来るだろうか。

お姉ちゃん、アーニヤ……………ボク大丈夫かな……………？

バンッ

少し弱気になっていたところに背中に衝撃を受ける。

眼の端に涙を浮かべて振り返るとどうやら音楽先生が僕の背中を叩いたようだ…いったい何で…

「肩に力が入り過ぎだぞネギ先生、最初が肝心と言ってもそんなガチガチでどうする。」

その言葉に少し呆けてしまって言葉が返せない。

そんな僕に視線を合わせてしゃがんできた音楽先生が僕の頭に手を

添えてくる。

「俺もしずな先生もいるんだ、フォローはしっかりしてやるから元
気良く行け！」

その言葉に故郷のウェールズの大切な人たちの言葉を思い出す。

『がんばってね、ネギ』

『しっかりやるのよ』

姉と幼馴染が応援してくれたことを思い出す。

そうだ、こんな弱気じゃ駄目だ。

これからは一人でやっていかなきゃならないんだ。二人にみつとも
ないところを見せる訳にはいかない。

顔を上げて音楽先生に返事を返してドアに向き直る。

小さく深呼吸して、新しい生活の始まりとなる扉に手を添えた……

教室内のざわめきが小さくなる。

「よし………?」

意を決して扉を開いた所で、頭上の違和感に気付いた。

扉の上のほうを見れば、障壁にあたって不自然に止まる黒板消しが
あった。

黒板消しトラップ

その単純な仕掛けは悪戯好きの者たちから広く親しまれ、古典的な悪戯として現代にも伝わっている。

しまった！日本にもあったんだ！

慌てて障壁を解く、時間にして1秒にも満たない出来事……ばれてないよね？

危ない危ない、魔法がばれるところだった。

頭から黒板消しとチョークの粉を被り、ちよつと棒読みになっちゃったかもしれないけど先ほどの障壁を誤魔化すために演技をする。

難が去った事に安心して教室に足を踏み入れたのだが…

ふと足に違和感を感じたと思ったたらいきなり暗くなる視界、その突然な視界の消失に驚いてたたらを踏むと今度は何かに足を取られ転がる自分。途中何かが身体に刺さるのを感じ

ながら何かにぶつかってようやく停止した僕……

……

前略、ウェールズのお姉ちゃんへ

ゴメンナサイ、日本に来て早々挫折そうな僕です…

え、子供……？ どうゆうこと？ と、ざわめきたつ教室内

「すまん！大丈夫かネギ君？みんな席につけ！」

音楽先生に助け起こされて状況を把握し、促されて教壇に立って僕は自己紹介を始めた。

「ええと、あ……あの。僕、今日からこの学校で英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど、よろしく願います」

シン

呆然と視線を向ける生徒達。

その無反応さに何か失敗したかもしれないと不安になり始めたとき、時間が動き出した。

「……キヤアアッ！ かわいいー！」「……」

大歓声。

生徒達は立ち上がり一斉に殺到してきた。

「何歳なの……？」

「えうつ！？ その、10歳で……」

「どっから来たの！？何人！？」

「ウェールズの山奥の」

「ウェールズってどこ？」

「今ここに住んでるの!？」

「いや、まだどこにも……」

矢継ぎ早に告げられる質問の波に、答える端から次の質問を上げられ翻弄される。

「……マジなんですか？」

「ええ、マジなんですよ」

10歳が先生をするという非常識な状況に、生徒の一人がしずな先生に確認する。

その間も生徒達に揉みくちやにされ続けた。

「ねえ、君つてば頭いいの!？」

「い、一応大学卒業程度の語学力は……」

「スゴイ!!」

「あーんカワイー」

「わわーっ」

ギュッと抱きしめられ、かいぐりまわされる。

よ、よかった。なんとか歓迎されてるみたい……

ちよっと行き過ぎな感じがしないでもないけど……

「ネギ君はちゃんと教師の資格を持つてるけど見てのとおりあなた達より年下よ。」

「お手やわらかにね」

「ハーン」「ハーン」

しずな先生の声に元気良く返事する生徒達。
けれど一向に騒ぎが治まる気配は無い。

「うわーん、授業が出来そうも無いよー！」

机を叩く音がした。

「皆さん、席に戻って！先生がお困りになってるでしょう」

丁寧な言葉使いながら、その言葉は力強く響いた。

言葉を発した生徒は流れるような金髪をなびかせ、優雅に微笑んでみせた。

「ネギ先生、先生はオックスフォードをお出になった天才とお聞きしておりますわ。」

「教えるのに年齢は関係ございません。どうぞホームルームをお続けになってください」

「はあ……どうも」

いとも簡単に騒ぎが治まり、ちょっと呆気に取られてしまった。
すると彼女の横合いから明日菜さんが顔を覗かせる。

「委員長何いい子ぶってんのよアンタ！」

委員長と呼ばれた女性の態度が気に入らなかつたらしく、その言葉は刺々しい。

「あら……いい子なんだからいい子に見えてしまうのは当然でしょ」
余裕の態度で受け止める委員長さん。しかし次の言葉でその余裕も崩れる

「何がいい子よ！ このシヨタコン」

「なっ」

先ほどとは打って変わり明日菜さんに掴みかかった。

「言いがかりはおやめなさい！ あんたなんかオヤジ趣味のくせに
いい」

「なっ」

「知ってるのよ、あなた高畑先生のこと……」

「うぎゃー！ その先を言うんじゃねーこの女ーッ」

「あの、やめ……」

今にも取っ組み合いのケンカが始まりそんな雰囲気慌てて仲裁に入るうとするが、回りのあおる様な空気によってまさにケンカが始まるうとしたところで、音楽先生が間に入った。

「はいはい、時間もなし授業だ授業！はいそこ！あからさまにいやそんな声あげない。

っじゃ、後はネギ先生、がんばってな？」

その声に二人のケンカは治まり、周りの人たちも静かになる。

音楽先生が僕の肩に手をのせて交代してくれたことでなんとかボクが授業を出来る流れを取り戻した。

「は、はい」

全員席へと戻る。

フオーローされまくりではあるが、やっと授業が始められる状態になった。

うん、がんばらないと！

決意も新たに生徒達の期待の眼差しを一身に受け、緊張の中授業は始められた……

キーンコーンカーンコーン……

放課後が始まる。

「ふー、やっと一段落だ」

なれない環境と初めての経験で、心身ともにクタクタになりながら校舎を出た。

放課後の麻帆良の町には下校する生徒の姿がちらほらと見える。朝の大混雑とは違い、人影はまばらだ。

歩きなれない町並みに、目に映る景色はどれも目新しく感じられる。やがて、辿り着いた広場の中心に大きな石像を見つけ、その前の段差に腰を下ろした。

「今日は疲れたなー。初めての授業だもんね」

今日の授業を思い出し、小さく笑みを浮かべる。

最初の2-Aの授業では黒板に手が届かなくてちよつと慌てたけど、委員長の雪広さんが踏み台を用意してくれたし、次の授業では落ち着いたクラスと2-Aのギャップに驚いたり、

今日の出来事を一つずつ思い返していく。

「それにしてもなんだよなー、あの子の態度。ひどいよまったくもー」

最初からケンカ腰だった明日菜のことを思い出し、つい文句が口をついた。

クラス名簿を眺め、彼女の顔写真を見つける。

出席番号8番、神楽坂明日菜。

今日はこの子の部屋に泊まる様に言われているが……

「絶対泊めてくれないと思うな……どーしょ……」

先行き暗さに、思わず溜め息が漏れる。

しばらく彼女の写真を眺めていたが、そのうちポケットを探っ
て中からペンを取り出した。

キュツキュツ

『いじわる』と、彼女の写真にラクガキを入れた。生やした2本の
角はオマケだ。

「フーンだ」

一矢報いたことに満足して顔を上げた。

「ん？」

大量の本を持って、階段を下りる少女の姿が在った。

「あれ……あれは27番の宮崎のどかさん……たくさん本持って危
ないなあ」

フラフラ、ヨロヨロしながら歩いている。

手すりの無い階段を歩くには、その姿は酷く危なっかしい。
転びでもしたら真っ逆さまに落ちてしまう。

くきつ

「あっ」

「!!! やっぱり!!」

不安の中。

バランスを崩した彼女は階段の外側に身体が傾き始める。

杖を手取る。

瞬時に構え、意識を集中する。

『風よ!!』

大気が踊る。

杖の先端が輝いたと思うと、地面に向かって落下していた宮崎さんの身体は風に包まれ、

その速度を減衰させる。

急いで駆け出し、ゆっくりと落ちる彼女の身体を、スライディングで下から抱きとめた。

「ぐへっ」

勢いが殺せず地面に擦り付けられた。

「アタタタ。だ、大丈夫？ 宮崎さん……」

宮崎さんに怪我が無いか確認する。

よかった、どうやら怪我はないようだ……

「あ、あなた…」

「え？」

振り返るとそこには明日菜さんがいた…

マズイ、おそらく先程の光景は目撃したんだろう、わなわなとふる

えたその指は僕の事を

しっかりと指さしていた…

取立8回目　〜三学期だよ！ネギ先生！「主役はぼく、俺だ！」「…らしいです

はい、そんな第8話でした！

時間は宣言より遅くなったこと、申し訳ありません。

うーん、これだけだとまだ何とも…（苦笑）

とりあえずネギ先生と主人公との邂逅だ果たせました。

まあ、今回はネギ先生主体になりましたが…

次回は本作主人公の『副担任』にバトンタッチします。

これから変化も付けていきますのでどうかお楽しみに、
では今日はこの辺で。

また次回です。再見！

取立9回目 く初日から魔法バレ!? 指導教員な先生は温かい目で見守っている

はい、少々時間が空きました。9話目の投稿です。
内容は前回の続きとなっています。

さあ、原作通り魔法が明日菜にばれたネギ先生!その頃音来先生は…

そんな9話最後までお付き合いいただけると嬉しいです。
では、どうぞ!

取立9回目　く初日から魔法バレ!?　指導教員な先生は温かい目で見守っている

「あ、あなた…今の…」

「え?」

振り返るとそこには明日菜さんがいた…

マズイ、おそらく先程の光景は目撃したんだろつ、わなわなとふるえたその指は僕の事をしつかりと指さしている

まずいぞネギ・スプリングフィールド!

日本に来て初日に魔法がばれちゃった!?

このままだと魔法世界に強制送還?オコジヨの刑?

「ちよつとこつちに来なさい!」

考える暇もなく引つ張られて近くの藪に突っ込まれる。

うっ、日本の女の子って怖い

「もう、誤魔化されないわよ!なんなの、さっきのアレはなに!」

「あう、あれはその……」

うあ、あ〜どうしよー!

そうだ!魔法がばれてしまった時は記憶を、この場合はしかたありません。明日菜さんごめんなさい!

「見られてからには記憶を消させていただきます……」

「え？」

驚いているようだけどこっちにも余裕はない。

呪文を唱える。

「ラス・テル マ・スキル マギステル……」

だけど、悪い事は続くらしい……

「ちょ、ちよつて……」

「記憶よ消えr……」

「お、いたいた。ネギ君こんなところで何をしてるんだい？」

魔法を解放しようとした次の瞬間……藪の向こうから現れたのは音
来先生だった……

side:Ottoya・Narukami

放課後、LHRを終えて教室を去るネギ君に続こうとすると複数の生徒からストンプがかかる。止めるのが新任のネギ君なら分かるのだが何故に俺？

要約するとこの後歓迎会をするので2時間後にネギ君と教室に連れてきてほしいという事だ。

ふむ、新任早々大変な目に合っていたいな…良いかもしれん。その後簡単な打ち合わせをして職員室に向かう。

が、了承したのはいいのだが…後1時間と30分ほどもある…何をしてると？

職員室に戻ってみればネギ先生は戻っておらず、こうして明日のデスクの前で一人さびしくカリキュラムの整理、タカミチからネギ君に渡されたのと同じものだが今日は授業にならなかったので確認をしていたところだ。…俺だってたまにはまじめに働く。

ん…しかし、さすがタカミチ、あのネギ君の授業状況を予測していたとは…

というわけでカリキュラムに問題もなく今現在は暇である……ものすごい暇だ…

職員室に戻るまでは適当にネギ君と話していればいいと思っていたがないのではどうしようもない。

…

外出るか…
どっちにしてもネギ君を探さなくっちゃいけないしな…

出歩く事1時間ほど……

「まづつたな…」

探せどネギ少年の姿は影も形も見当たらない。
これが探そうと思うと見つからないってやつか？

約束の時間まで30分もない……どうするか…いつそアインを呼んで全方位探知でも…ん？

「『風』の魔法？どこから……」

いつの間にか広場の方に出ていたのか開けた所に出たとたん頬を風が撫でる…のだが流れてくる風に濃い魔力が混ざっている。
発生源をたどろうと視線をめぐらすと…

「あ、いた…ってこんなところで何で魔法!？」

そこにいたのは構えた杖を放り出して反対側の階段へ全力疾走するネギ少年。

その先には……階段から転落中の女子学生……

階段の高さは相当在る。落ちたなら怪我は免れない場所だ。打ち所が悪ければ最悪致命傷になる。

「ほっ、なんとかなったか。」

残念ながら下敷きになあるという結果でキャッチには至っていないがまあ、及第点じゃないだろうか。

終始俺は眺めていただけだったがよく機転がきくものだと感じる。魔法を使うのに躊躇が無いのはどうかと思うが人助けに迷いが無いというのは好感が持てる。

「評価を改めなくっちゃいけないかな……ん？あれは……」

目の前の出来事にネギ君の人柄を知って感心していると視界の端にそのネギ君の元ヘドシドシと効果音も付きそうな勢いで走る……神楽坂？

あいつは何をしてるんだと思ったら……次の瞬間ネギ君をキャッチ&リリース、ではなくそのまま藪の向こうへ消えていった……

……

……拉致？

……いやまだ、状況を整理してみよう……

階段から転落する少女を発見したネギ少年

助ける為に魔法を使用

救出成功

振り返るとそこにいた神楽坂一（一般人）

慌てるネギ君とそのまま藪の向こうへ消える神楽坂

現状

……

…もしかしなくても魔法バレした？

……はあああああ……評価訂正……

魔法の使用はやっぱり注意しましょうだ。ネギ君……

「……しゃあない、一回目だしこれもサービスだ。」

同年年とはいえ彼は魔法学校を卒業したばかり、これくらい多めにみてやらないとな。

さて、お助けに行きますか……

タイミングが悪かった……

そして俺は悪くない……

…悪いのは人助けをしようとした俺にこんな運命をくれやがった神様です…

「お、いたいた。ネギ君こんなところで何をしてるんだい？……と神楽坂もいたのか」

「音来先生！？」

そこには杖を構えていたネギ君が何やら魔力を集中していた。そして注意がこちらにそれた所為か膨れ上がる魔力……まずった？

「あ？」「え？」「へ？」

次の瞬間一陣の風と共に起きた目の前の光景……声が誰なのかは察してくれ…

そこには暴発した魔力によって武装解除されたブレザーを残して半裸な神楽坂…

誓っていう！俺はこの時の光景をはっきりと覚えていない！……なぜなら…

「いやーっ!!」

年の割に重い拳を放った神楽咲によって宙を舞っていた……何で俺……

……

イタイ……

痕にはなっていないだろうが本当にいいもん貰った……本当にあいつは一般人か？

「……っかし、どうしたもんか……」

走り去る明日菜を追ってネギ君は行ってしまったようだし、現状目の前には先ほどの転落少女と周りに散乱した本達……

「とりあえず起こすか……」

んー、氣い失ってるな……てこの娘、宮崎じゃん!?

……なんかこんな事前にもあつたような……

デジャビュにも似た感覚を振り払いとりあえず宮崎を起こす事にする。

「おい、大丈夫か?」

「……えう、……んっ……え?」

呼びかける事数回、パチクリとその目深な髪形の向こうで大きく瞬きをする宮崎。思考が追い付いていないのかそのまま数秒…

「え？あ、な、なる…「落ち着け」…ハイ…」

ようやく現状を理解できたのかいきなり慌て出しそうになる宮崎を寸前で止める。

軽く深呼吸して落ち着いたのでを確認し、ちょっと失礼して怪我がないかをチェックする。

「あわわっ!」

「んし、怪我は…してないみたいだな。一応保健室行つとくか？」

こちらの提案は断られてしまう。まあ見たところ怪我は無いし、触った感じ足をひねったとかもないので大丈夫だろうが

「それにまだ本を…あ!」

周囲を見渡して慌てて集めようとする宮崎に待ったをかける。こつという場合また転んだりするケースが多いのだ。

「あゝ、手伝ってやるからあわてんな。」

「いえ、そんな迷惑…」

「また転ばれる方が迷惑なんだがな…」

そう言つとシユンと肩を落としてしまう。

ちよつと言い過ぎか？
まあ実際助けた後に見てないところで転ばれたってのは何ともいえないしな

「ははっ、そんな顔すんなって、冗談だ。二人で運んだ方が楽だろ？ちやつちやつと終わらそうぜ。」

そう言つて宮崎の頭に軽く手を置き、先に本を集める。
遅れる事数秒で宮崎も拾つて行つたので意外と早く終わる。
んゝ、しかし……

「んっ！意外と重いなこれ？一人で持つてたのか？」

若干俺の方が多めに持つているがそれでも分厚い本を重ねると意外と重い、これを今持つている分と合わせてさっきまで持つていたのだから彼女が転ぶのも無理ない。

「あ、はい……他の人は手が空いてなかったので私が……」

「にしたつて誰かに手伝い頼めばいいだろうに……ま、怪我無かつたからいいけどさ」

終始恐縮する宮崎の案内で図書館まで運ぶ。

意外と近かつたのでそれほど経つてはいないはずだ。

「すみません。わざわざ運んでいただいて……」

「ん？ああ、気にすんなって。それに手伝いはしたけど実際に助けたのはネギ先生だ。その後ちよつと急用が入つて本人はいないが、後で礼言つときな。」

「ネギ先生が？」

うーむ、おかげでネギ先生は見失ってしまったが…
あー、思い出したら痛くなってきた。

しかしまだ痛むってどんだけ威力あるんだあの拳…

……

「うっし、ここでいいんだろ？」

あいにく司書の人がないのか図書館が開いてないので本を返却ポストに入れる。

時間はつと、まずいな

時間を確認しようと時計に目をやると約束の時間まで10分となかった。

さすがにネギ君を今から探している時間は無いか……
しょうがない、ちようど校内だし一旦教室に知らせに行つて…

「あの一、先生。この後時間は大丈夫ですか？」

「ん？まあ予定が去つて行つちまつたし暇っちゃ暇だが…」

「えー、とじゃあちよつとついてきてもらつてもいいーですか？」

「？かまわんけど…」

疑問符を浮かべたまま宮崎の後に続き、校舎へ向けて歩き出した。

宮崎に続いて、校舎の廊下を歩いていく。

しかし大変な目にあつたな今日は……

あれかね？慣れない事はするなつつつことなんですかね？

日本に来てまだ1日だというのに、もう魔法がバレてしまったネギ先生。

それをフォローしようとするれば不可抗力により殴り飛ばされる始末……

魔法使いが世間から魔法を隠すのは、世界に混乱を起こさない為、と明文している。

確かに『魔法』なんていう非現実的な物が存在していると分かれば当然大騒ぎになるだろう。実際誰もが扱えれば悪用する者も増えるし危険も伴う。そういった混乱を起こさないために魔法使いは秘匿を徹底しているのだ。

つとマスター《じつちゃん》が言ってた！

ま、一般人に見られちゃったのは不味いよな……証拠隠滅も虚しく不発したようだし……

神楽坂を追っていったようだけど、どうなったんだらうか？

「そこです。音楽先生」

「あ？つてここは……」

考え事をしている間に目的地に到着していたようだ。

『2 A』と書かれたプレート。自分の担当するクラスだ。

「ん？ネギ君と…神楽坂か？」

「え？」「げ？」

教室の前にいるのは神楽坂とネギ君か？

ちょうどよかった。

しかし神楽坂……いくらなんでも「げ」は無いと思う……軽くへこむ……

まあいい、探す手間が省けたと声をかけようとするときちょうど神楽坂が扉をあけるところだった……

パンツパンツパーンツ！

「「「「「ようこそ！ ネギ先生っ！！音来先生っ！！」「」「」「」

「「へ………？」「」

いきなり起こった炸裂音と共に舞い飛ぶ紙吹雪。

突然の光景に一瞬なにが起こったのかわからなかった。

生徒達の笑顔の歓迎に呆然としてみると、生徒たちが手を引いてくる。

「さあ、主役、sは席についてごゆっくり」

「え？ え？」「え？あ、おい！」

「あ、のどかが音楽先生連れて来たの？」

「本屋ナイス」

「アスナってば先生連れてくるの忘れちゃったからさ」

「うっさい！ 色々大変だったのよ！」

「す、すみません……」

「ああ、本屋ちゃんは別に悪くないんだってばっ」

「なんか話が勝手に進んでないか？」

「状況が全く飲み込めん……」

「驚きましたか？これは二学期にできなかった音楽先生の歓迎会も兼ねているのです。」

「解説ありがと……」

見渡してみると2・Aの生徒以外にタカミチにしずな先生、そしてアインまでいる……

「あのやるー、知ってやがったな……」

ようやく状況を把握して席に着くと、目の前のテーブルの上には料理やジュースが所狭しと並べられている。

「さーさー先生ぐいっと一杯飲みなよ」

「お、サンキュー」

朝倉が早速宴会のノリでお酌してくる。

「で、さっそく何だけどご両人ともいますし、いい機会なので……音来先生とアイン先生の関係は!？」

ついでとばかりに、というよりこつちが本命だろう。今日こそはとオーラでも出ているような勢いだ……が、

「家族、それ以外はノーコメント。てか帰れ朝倉」

「ひどっ!？」

もちろん真面目に答える気は無いのでいつも通り軽くあしらう。

パーティーの席と言えど加減する気はない!てか単純にメンドイ……

「ありがとうございます」

横を見るとネギ君がお酌され、コップに注がれたジュースに口をつけていると数人に囲まれ、朝の続きのように質問や「かわいい」といった声が広がる。

うむむ、モテモテだなネギ君。

勢いに飲まれるまま、さっきまでの泣きそうな顔が嘘のようだ。

困んでいる生徒以外は思い思いに盛り上がり、お喋りにも花が咲く。初めて今日一日生徒達と向き合う。それも周りは自分より年上ばかり。そんな環境で緊張しっぱなしだったのだらう、どうやら歓迎会は大成功っぽい。

しばらくすると皆の輪から、一人の生徒がおずおずと前に出てきた。宮崎だ。

「あのー、ネギせんせい」

「あ、27番の図書委員宮崎さん。よかった、無事だったんですね」

「は、はい。あのーさっきはそのー危、ない所を助けていただいた
そーで、あ、あのー」

つつかえつつかえになりながらも、一生懸命何か言おうとしている
宮崎。

やがて意を決しように、手に持った何かを目の前に差し出した。

「これはお礼です 図書券……」

「えっ!？」

差し出されたのは小さい封筒。

は、初々しいね。

思わぬ出来事に驚いたが、それを受け取りネギ君がお礼を言つと、

「「「「「おお〜っ」「」「」「」」

「本屋がもう先生にアタックしてるぞー！」

「ワイロか!？」

「違います〜、それに私本屋じゃないです〜」

もうクラス中大騒ぎ。

慌てる宮崎と、彼女をからかうクラスメート達。

笑い声が響く中で、一人の生徒が静かに立ち上がる…

「センス、私からもコレを……」

そういつて立ち上がったのは委員長こと雪広 あやか、彼女が対抗するように取り出したのは……銅像!?

「うわー！先生の銅像!？」

「何だそれー！」

どうやって持ってきたのかというかいつの間にか作ったのか。

名前付きの台座に乗せられた胸像が、教室の真ん中に陣取っていた。

これは……いったいどうコメントしたらいいんだろう……?

「あんだバカなんじゃないの!？」

「なっ……アナタに言われたくないですわアスナさん！」

アスナさんにバカ呼ばわりされると、即座に彼女の余裕在る態度は

崩れ去った。

壮絶な取っ組み合いが始まるうとしているが、クラスの人たちは止める気配も無い。

二人はお互いを掴み怒鳴り合い、騒ぎは大きくなる一方。

「ははっ、あいかわらず元気だな。2 - Aのみんなは」

「もとはタカミチの担当だろ？」

そうなんだけどね？とこちらは教員同士で談笑していると目の前に一人の少女が来る。

「あ、あのー、音来先生ー。」

「ん？宮崎かどうした？」

「あのー、先ほどはありがとうございました。これ…同じものなんですけど 図書券です…」

「あゝ、……………」

あー、さっきの事が、気にしないでいって言ったんだけどな……………
どうすつか、実際助けたのはネギ君だから俺が貰うのはお門違いな
気もするんだけど…

「くすっ、音来先生。女性の厚意は受け取るものですよ？」

「はあ、そうですね」

しずな先生の助言（？）に素直に従う事にし、一言お礼を言って受け取る。

「ありがとな、大切にに使わせてもらっよ。」

「本屋が鳴守先生にもアタックしてるぞー！」

「「「「「おお〜っ」「」「」「」

「ワイロなのか!?!」「二股か!?!」

「どつちも違います〜!」

再び笑いが起こる教室内。

ネギ君も楽しんでいるようだし万々歳かな?

その後予定の時間をオーバーした歓迎会は教室を見回っていた新田先生が来るまで続いたという。

.....

.....

……下校……

……

歓迎会も終わり、解散して帰る途中、ネギ君と神楽坂達に合流して帰路につく。

道中で今朝の住居の件で解決したらしくネギ君は歓迎会との事もあいまってかなりご機嫌だ。

木之香が今朝の話を持ち出し、神楽坂が折れたらしい……ご愁傷さま。

「アスナさんも、ありがとうございます。これからお世話になります」

うん、礼儀正しいのはプラスだな。

ま、世の中の子供が全部こんなに礼儀正しかったら正直気持ち悪いが……

「言っとくけど、あんまり邪魔だったらすぐ追い出すからね」

「はい！」

神楽坂の忠告にも元気な返事。

彼女の気苦労を気にも留めていないような笑顔に溜め息をついてい

る。

ま、なんとかやっていけそうかな？この三ヶ月。
今だ騒がしい前の二人を眺めながらゆっくりと帰路についた……

くおまけ・余談く

ネギ「あれ？音来先生もこっちなんですか？」

音来「ん？そうだけど？」

木乃香「鳴守せんせーはな、アインさんと二人で寮の管理人室に住
んどるんよ。」

ネギ「へえ、じゃあ住むところもいっしょですね。改めてよろ
しく願います！」

音来「おう、よろしくな。ネギ君」

アイン「こちらこそよろしく願います。ネギ先生」

明日菜「…て、ああああっ！」

木乃香「なんやおおきー声だして、どうしたん？」

明日菜「どうしたもこうしたもないわよ！コイツ音楽先生の所に預かってもらえばよかったじゃない！！！」

明日菜以外「」「あ、」「」

そんな帰路……

取立9回目 く初日から魔法バレ!?

指導教員な先生は温かい目で見守っている

どうも、トントンです。

どうでしたでしょうか第9話?

ちなみにネギ先生はそのまま明日菜たちの部屋に居候になります。

理由「アインが反対したそうです」...

そんな『副担任は借金教師』もこれからオリジナルありの本編沿いのまだまだ続きます。

さて、今回意見をいただきましたので設定の修正とこれまでにあった呪文・用語等を含めて新たにまとめた設定2を続けてUPしますのでどうぞそちらの方もご覧ください。

更新につきましては年末に近づくにつれ遅くなる恐れが出てきました(汗

誠に申し訳ありません!

それでも何とか続けていくのでどうかお付き合いくださいますよう。更新時に状況も報告していきますのでどうかよろしく願います。

それではこのへんで、再見!

設定 その2（前書き）

はい、設定その2更新です。

能力、呪文、用語等をまとめてみました。

設定 その2

その1

名前

なるかみ
おとや

鳴守 音来

あだ名

ネコ（音来を読替えて） 本人は嫌がっている

年齢

現在10歳（数えで）

ギルド：「西の夜明け」

戦闘スタイル：魔法剣士

武器の扱いに秀でていて長物の剣・刀を使った戦い方を好む。
得意属性は雷（複雑すぎなければ他の属性も可）で武器への付加ま
たは大呪文系の魔法を好んで使うことから性格の大雑把なところが
うかがえる。

ステータス

魔力 : B +

速さ : A +

腕力 : B -

魔力制御 : C -

アビリティ

・障壁

生来の膨大な魔力保有量の副産物。本人が魔力制御を不得手とするため常時漏れ出る魔力によって自動形成されている。通常生活には邪魔になるため巡回時、警戒時などの魔法関連の接触があると判断される時以外は魔法具によって抑えている。

・変化

外見年齢の変化のみの変化で細胞レベルでの成長による変化なため判別は不可能な固有スキル（魔法ではない）

詳細やどういった経緯で習得したのかは相棒であるアインも知らない。現状判明しているのは外見二十歳前後の容姿である『生人体』、実年齢である10歳の『幼年体』と呼ばれる姿になれるという事。

・転送魔法

使用する武器を貯蔵した空間から呼び出す魔法。本人が剣刀類を好んで使うため、銃器類はストックしていない。

空間座標特定等の細かな作業等は本人が不得手な為、魔法具である腕輪で制御している。

某英雄王の様な概念があるわけではないので直接の射出は間違っても不可能。

（本人の素手による投擲は可）

・魔力感知 E

本人が魔法、魔術的なものの感知する能力値、Eとなると一般人よりは高いが魔法使いとしては致命的なレベル。一般の魔法使いはこの作中ではCとされる。

・危険察知 B+

自身、または周囲に向けられる殺気や降りかかる危険等を察知するスキル。Cもあれば魔法使いとしては上々だがB+ともなると獣の域。

・暴走率 C (B++)

特定条件下での自我の消失、つまり『暴走状態』となる確率。音楽は戦闘時にその傾向がみられるが反してCと低いのは普段は理性で抑えられるレベルの感情であるから。また、状況次第ではB++と
いう危険性も秘めてはいる。

・瞬動、虚空瞬動、浮遊術

主人公が有する戦闘技法。卓越した達人のそれとは違い、荒く我流な面も目立つ。

本人も自覚している魔力制御が向上すれば改善されるとみられる。

最近探知や認識阻害等の結果などを習得しようか検討中とのこと。

現在

今回マスターの知り合いである近衛近右衛門の依頼で教師兼広域指導員として派遣されることになる。

三ヶ月の研修期間を終え、学園と契約する正式な教師となる。

現状担当教科は無し、広域指導員兼副担任。三学期より就任してきたネギ少年の補佐役となる。

補足としては最近休日に放送されている「ヒーローもの」というのにご執心の様子。

ご本人様より

「あ？またかよ……………めんどくさ……………、名前……………は言ったしな、年齢はこんなナリだが10歳だ。一応『幼少体』とか外見変えられっけどな。しかし一度変化するとつかれんだよなあ……………うん、めんどくさいのでしばらくこのままだ。

ん？2-Aの生徒？……………一言でいや「規格外」なクラスだな。なんかやたら成長過多なのがいると思えば、学生みたいなのもいるし……………あ、幽霊もいたな。悪戯もエスカレートしてる気がするし……………この間なんか教室に入った瞬間頭から墨汁が降ってくるし……………（苦笑

ん〜、良い意味でも悪い意味でも退屈しないクラスかな？
今後の目標か……そうさな、借金完済も早くしたいけど一度引受け
たんだ、とりあえずはあいつらが卒業するまでは見守ってやりたい
かな？まあ俺の方が年下なんだけどな（笑）」

その2

名前

アイン・リコード

あだ名

アインorリコ

年齢

稼働時より現在は6歳

ギルド：「西の夜明け」

契約者：鳴守 音来 アーティファクト：?????

戦闘スタイル：剣・銃を使ったオールラウンダー

『ライブラリー』から転送する武器・武具を用いて戦うのが基本の
スタイル。

前衛後衛でいえば後方支援の方が得意であるが武器の扱いでは主人
である音来を上まわるほどのので距離を選ばない戦闘も可能。

魔術的要素への耐性が弱いため主人からの魔力供給によって補うか
貯蔵した魔力により独自の障壁を纏う。

ステータス（ ）は魔力供給時

魔力 : D + (B) A +)

速 さ : B (A + +)

腕 力 : A (A) S)

魔力制御 : A - (A -)

アビリティ

・転送

『ライブラリー』という記憶媒体（情報系統とは別で物質類）に圧縮、登録した武器・魔具等を転送する機能。魔術的な要素を含むアインの初期機能の一つだが魔法とは違い、精霊との誓約を必要としないため通常の転送魔法より数段早い換装を可能としている。装備、戦闘を主に考慮した機能と思われるが音楽の意向でそれ以外に日用品なども登録されている。

・学習能力 B

自動記憶学習能力、戦闘時における判断力、対処法から敵の戦術までを驚くべき速さで吸収するスキル。Bとなると視認可能であることと機能に支障がないレベルの物なら瞬時に対応、身体機能に支障がなければ自身で動作等のトレーニングも可能とする。

・感情回路 D

アインが自己学習して構築される感情機構。本来、戦闘や兵器としての機能が求められる人形に感情を持たせるとするのは非効率的ではある。が、これは発見当時に音楽が初期起動させてしまった時には機能していたことから製作者の意向と思われる。

なお、『D』という単位はアインの中で確立されている感情レベルでF〜Aまでである。Dは下から三番目、機能としてはまだ未成熟であると言える。

ちなみにアインが判定する感情Aレベルというのは神楽坂 明日菜、佐々木 まき絵などがあげられる。

・センサー各種

音来考案のもと（主が探知が不得手なため）アインに追加された通常装備にあたる機能。

多数のセンサーを有している事と元々搭載されていない機能なので全機能を使用するには大きな負荷が掛かる。そのため通常時は支障のないレベルで使用種類を制限している。

欠点として、多数の機能開放が必要となる索敵時は稼働効率をセンサーに重きを置いたため隙が多くなってしまふ。

・天の歯車
（フンスキア
アウトバレル）

アインが戦闘機構へシフトするためのギアの一つで複数ある戦闘モードの中でもバランスタイプのシステム。練度も高いため戦闘時ではこのシステムが使用する事が多い。

コード認証においてはMasterである音来の許可が必要であるが、優先事項の大なり小なりで自己解凍も可能。ただし、その際には制限が付く。

・初期装備
（アウトバレル）

『天の歯車』起動時の初期装備である50ミリの弾丸を放つレールガンの主砲とした文字通り長距離支援を目的とした装備。その他にも散弾、貫通、徹甲弾、榴弾等の戦況に合わせた弾丸をバックパツクの換装により使用可能としている。（弾に合わせてバレル等の換装もあり）

ちなみに銃器でよくある40口径が約10ミリ。で50ミリともなるとバズーカの様な大口径になる。もちろん人間が片手で振り回せるような代物ではありません。

・瞬動術・浮遊術・擬似瞬動術・飛行機能

アインが有する戦闘技法。魔力供給時は問題なく記載した初めの二つの技法を行使できるが魔力保有量が少ないため、供給のない通常時や緊急時等は内蔵される廃熱等による光の屈折現象で起こる残像

と運動機能にアクセルをかける事によって可能とする擬似瞬動術、背面と脚部に追加内蔵されたバーニアなどで飛行する。

現在

マスターである音来と共に麻帆良学園で数学の教師をしている。最近の出番は少なめ、日常としては家事、通勤、授業、デスクワーク、帰宅、家事とMasterである音来の世話を含めるとかなりの労働だが本人は麻帆良に来てからの生活に充実感を覚えてきている様子。

感情学習の為の読書は半ば趣味化しているよう。

ご本人様から

「お久しぶりです。機体？COFFEE-A1 略称 ソフィー。今はアインとお呼びください。

自己紹介ですか…私はその手の自主性の強い回答は不得手ですので今回は近況報告でも。

では、最近のフォルダから……Hit…それでは、

今日は街にの家具屋さんにお買い物に来ています。というのもMasterが私の書籍が箱に入らなくなってきたので棚を買って来いと言ったのが始まりです。普段はまた買って来たのかと文句を言いますがあれで私の趣味を後押ししてくれたりと今回も予算を出してくれました。こういうのを“ツンンレ”というのでしょうか？

なんだか微笑ましく感じた休日です

……以上です。む、間違えました。これはプライベートフォルダです。なんとという失態！

ばn……（以下略）……」

〈作中登場の呪文・用語一覧〉

・ 依頼契約の呪文

『血の誓い』は対象者の魔力を意味し、依頼者、受託者を含む者を精霊に『執行者』と認識させて発動する契約呪文。精霊の認識する名前は真名であるかギルドに申請が通った名前のみしか通らないため偽名は通常使えない。

『時の流れ』からの件にあるように長期又はギルドにとって重要度の高い依頼などで行うよう取り決められている儀式でもある。儀式といっても形骸化したものではなくその強制力は凄まじい。制約内容を破れば一定期間魔力が極端に制限されたりと罰がつく。

また、罰則対象はギルト総本部に即、転送されるので信頼が第一の傭兵業ではこの契約を破る者はいない。依頼者にしてもギルド総本部より政府に通達される。悪ければ裁判沙汰。

契約内容については両社の合意のもとで変更、更新が可能。

・ 『戦いの歌』 序曲

『戦いの歌』の亜種、主人公の改良により組み込まれた魔力強化の魔法。車やバイク等にあるギアのような機能で段階をふんで強化のレベル

を上げていく呪文。『序曲』はローギア、スタートキーとなっている。3段階目でようやく一般の『戦いの歌』のレベル。

本来の『戦いの歌』に比べると運用効率が悪く、強化という点では粗悪品ともいえる。そのためローギア程度では強化と言うよりも能力低下にしかならず、主人公が戦いを楽しむために作った枷のようなもの。

・『雷波・武装解除』

『風花』や『氷結』が装備、装飾等に対象を置くのに対し、『雷波』は相手の身体を麻痺させて武装解除に持ち込む呪文。

雷を広範囲に拡散させ人体に障害をきたさないレベルでの範囲で相手を麻痺させるというもので本来は難易度も高い。そのため魔力制御においては不得手とする音楽には高度な呪文となるが自身と雷精との相性がよいためと本人の趣味によつて習得された呪文。

また広範囲呪文であることと発動後の顕現速度においては他の武装解除より速いため扱いに慣れると同じ麻痺でも“雷の矢”より使い勝手がいい。

・『雷網障壁』

読んで字の如く、雷による魔障壁。本人が無自覚に張っているアビリティの物とは別物。

『風花風障壁』と同系統の呪文で10tトラックの衝撃を防ぐ程の防御力を有する。

本編にて妖族の刀を受け止めていたが本来は物理より魔法や気弾等に優れた魔法障壁。

物理においては魔力の強弱により麻痺効果の付加も可能。

電圧の調整で水を曲げる事も出来るので耐水性にも優れている。

・背部装甲
バックパック

背部と記載されるがこれは背部の外部装甲、追加装備の事を指す。

基本武装を腕部・脚部等に転送するに対し、弾薬等のオプションは背部に転送される。また、戦闘時にアインが武器類をマウントする事は無く、状況に応じて転送を使う。固有の転送速度がなせる技。

・『縛簀ひくば』

名無しの侵入者（笑）の使い魔『樹亀じゅき』の造りだす“根”による捕縛術。

本人は魔力を障壁を無効化すると言っていたがそれは未完成で魔力吸収の延長による能力。

魔力・気の吸収に関しては驚異的な速度を誇るため擬似的な障壁の消滅を可能としている。実際捕縛してしまえば魔力等を吸収し続けるので間違いではないが吸収したものの消費策がとられていないため作中の様なキャパ越えによる手段が有効とまだ穴があった。

・『嵐山灯籠流し』

二枚の呪符により水流を放つ呪術。水流と言っても少々荒い津波程度の威力なので原作で天ヶ崎 千草が電車内で使っていた鉄砲水のような勢いは無い。使い魔補助の為に威力よりも水量をとった呪術となっている。

設定 その2（後書き）

という感じですよ。

某ゲームを多分に参考にさせていただきました（笑）
指摘もあつたのでこっちの書式を大分変更しました。見やすくなつていますかね？

特にないようならこの書式で区切りがいいところでまとめてということをお繰り返して更新していく予定です。

順序よく読んでいただければ新規の方でもネタばれがないので
だいたいステータス、アビリティ、現在、ご本人様でストーリー上新しいものに乗せていくといった感じです。それまで出ていた能力等で新しいものが出てきたら更新という形をとります。

また、作中で設定にないものでこれはあつた方がいいというものは解説を載せますので指摘していただくと助かります。

では、ご意見感想等ありましたらよろしく願います。
再見！

取立10回目　く薬って危ないですね。今日は先生にとって厄日だそうです。

はい、土曜日となりましたがとりあえず投稿。トントンです

10日からチェックしてくれる方には申し訳ないです。

何とか更新速度を上げられるようにガンバっていきますので今後ともよろしく願います。

さてさて、やっと区切りのいい10話目、話上はまだまだ始まったばかりですが

どうか最後までお付き合いください。

では『取立10回目』どうぞご覧ください。

取立10回目　く薬って危ないですね。今日は先生にとって厄日だそうです。

なんかいやな予感はしていた……

朝からお気に入りの茶碗は割れるし、靴ひもは切れる。

終いには黒猫がダースで通り過ぎる始末……

ちなみに後でたかられました……俺はネコは嫌いだったの……！

まあいい、そんなこんなで分かると思う。

今日についてない日だと。

めずらしく朝の恒例行事となっているトラップを回避できた時には
運も戻って来たかと思ったが何の事はない。

そう、あれだ「上げて落とした方がいい」とかいうやつだ。

用法が間違ってるのではとかはこの際置いておく。

それよりもこの目の前の状況……

『斬岩剣……！』

「あ　　っ、もう、人の話を聞けっつうのっ……！！」

現在進行形で絶賛逃走中の俺……

何でこっつなるの？

そうだ…

あれは放課後、いつものようにネギ君と明日の打ち合わせをしようかと学内を探し回っていた……

く回想く

「うむ、いないな…」

職員室に戻ってくる途中も下の階も一応探したが本人は見つからない。

同僚の話だと慌てて出て行った言ったが荷物は置いてあるので出たという事は無いと思うんだけど…

仕方がないともう一度教室の方に行ってみるかとの階まで来た時だった

「？」

なんか騒がしいな？？

放課後に校内でもめ事騒ぎとは…どこのクラスかね…

「…さい！……に効くんですよー！」

「……………て言ったでしょ！」

……訂正、おもいつきり明日菜《身内》の声だ。どうやら搜索中の彼と言いあっている様子……

またもめてるのかとか仲が良いなど内心呆れ半分感心半分で騒ぎのもとに向かう。

「おい、何やって……」

「だったらあんたが飲めばいいでしょ!!」

そこで見たのは子供虐待の現場……ではなく、ネギ君の口にフラスコを突っ込んでいる明日菜……フラスコ？

みるみる無くなっていく中身と時間が過ぎ、俺は教室に顔を出した時のまま固まっていた。

「あうえー」

そして中身を飲み干したネギ君が咽たのか咳き込んでいるところで我に返った。

「大丈夫か？ネギ君……何をやっていたんだ？」

ネギ君の背中をさすってやりながらやりながら明日菜に問うてみると

「……ホレ薬が出来たとか何とか言っって持ってきたからそんな胡散臭いもの付き返しただけよ」

……は？ホレ薬???

何でそんなものをと考える間もなく背に人影が差したのに気付いて
振り返る

…近衛？

「ネギ君ってよく見ると…なんかスゴイかわえーな」

「「は？」」

そう言っつてネギ少年に抱きつく近衛に驚きつつ、オイと声をかけて
みるがまともに返事は返らず目も虚ろ……

……………これは本物？

「ひょっとして本物？」

重なった明日菜の声に反応して事情を聞こうかともう一度ネギ君
に振り返るとそこには雪広が……

「ちょ、ちよつと！何をやってるんですかこのかさーん！」

「マズッ」……………先生 どうぞこれを……………」

ああ、やっぱり……………

どこからともなく取出した薔薇の花束を差し出す雪広……………やっぱり
目は虚ろになっている……

そして蔓延するバイオはバード……

見ようによつては災害クラスではないだろうかコレ

「はい。ぬぎぬぎしましょうね」「はい、あーん？」

「ああーやめっ……やめてくださいーっ!」

「本物だったのか(ボソッ)……………ちっ、」

そこ!「ちっ」とか言ってんじゃねえ張本人!

目下強制脱衣中のネギ君に救いの手は伸びず……

「あ、音楽先生助けて　っ」

助けるべきなんだろうな、これは……………めんどいけど

「ちっ!ネギ君こっちだ!」

「あ、ちょっと待ちなさいよ!」

「お前はいいからついてくんな!」

これ以上犠牲者が増えてたまるかと叫ぶも構わずついてくる神楽坂。事情を説明しろとつるさく、こっちが聞きたいわと振り返ってみると…

「…げっ、増えてる……………」

俺の言葉に走りながら振り返る神楽坂と見たその光景…

「ネギ先生　　ッ」「待って　　ッ」

ドドドッと廊下を進軍する軍隊のように帯行をなしてくる生徒の波…

効きすぎだろホレ薬

行く先逃げる先で視界に入ったとたん目が虚ろになり波に加わる生徒……

「……神楽坂……ネギ君を頼む」

「え？鳴守先生」

何をという神楽坂に有無を言わずネギ君を預けて振り返る……

「いや、なんか止めないと収拾付かないだろアレ？」

「あゝ、うん。よろしく」

振り返る先を見た神楽坂もそれを見て納得したのかネギ君を小脇に抱えて走りだす

……

さてと振り返る目の前に迫った生徒……
ま、軽く気絶程度で良いだろ。

……

……

と軽く考えていたのが間違え立った。
怪我が残らないようにと加減しながら生徒の波をかき分けて昏倒させて行く中、最後の一人と気絶させたところ……

「これは…お嬢様！」

たまたま通りかかったんだらう桜咲。

気絶させた連中をどうするか悩んでいたのでちょうどよかったと声をかけると

「お、ちょうどよかった。さく」「貴様……」「はい？」

何やら怒りのオーラを纏ってユラリと立ち上がる桜咲……

「助けていただいたてまえ失礼だろうと様子見程度に留めておけば……とうとう本性を現したな！」

いや、本性って何さ？と問う間もなく背負った袋から抜き放たれる夕風

「ちょ、ちょっとm」「問答無用……！」

悪即斬とばかりに襲い掛かってくる桜咲をいなしながら廊下を後退する

「逃げるな！卑怯者……！」

「逃げるわ普通……！」

冗談じゃない、こちとら恨まれる憶えは全くない。

いや、前に助けた時はちょっとふざけ過ぎたかもしれないが龍宮のフォローもあってその後は比較的良好な関係だったはずだ……

現にこの間の警備の仕事で桜咲、龍宮を含めた三人で行った時も問

題なく終え、通常生活でも世間話ではできるくらいには落ち着いていた。……逆を言えばフォローが入る前はとり付く島もなかったんだが……

そんなわけで先ほど教室前でいきなり桜咲が刀を抜き放つまでこんな事態は想定外だ

ん？教室前？

そこでふと先ほどの光景を客観的角度で思い出す。

階段を上がった先で倒れている生徒達……

生徒達の中央で立っている実行犯と思われる先生、俺

倒れている生徒の中にお嬢様を発見

先生「お嬢様に害をなした」 敵！

……なるほど確かに他所から見たら大量暴行犯だな

っておい！

じゃあ何か？桜咲はさっきの光景を部分的に見て勘違いしたために俺に襲い掛かってきていると？

冗談じゃねえ！すぐに説明をし「斬岩剣！！！」……

……

気のせいかいつか見た剣技より威力があるように見える被害状況

「あ　　っ、もう、人の話を聞けっつうのっ!!!!」

〈回想終了〉

そして今に至ると……

なんかムカつとお頭に来た…
こちらら担当のフォーローで騒動を鎮圧しただけなのになぜこんな目
にあわなくちゃならん

「どうした！逃げるだけか!!」

あ、プチっときた

「てめえこそ人が大人しくしてりゃあ調子に乗りやがって……」

『フォワード 送クレイモア 5 番』
ファイブ

「うつせえ！こちらら朝からイライラしてんだ！」

手に取る洋剣を突き付ける

生徒が相手？契約？

はっ！知ったこっちゃねえ！！
こちらら正当防衛だっ！！

「お望みなら、やっつてやるぜえ！！！！！」

向かってくる桜咲をそれまでとは打って変わり、俺は迎え撃つために身をおどらせた…

side:Ain・Recode

「ふー、いませんね……」

Masterを探して校舎の中、今は放課後です。

今日通勤時に夕食はハンバーグがいいと言うMasterに伝えるため冷蔵庫の中身を検索したのですがひき肉が足りないと気付きたのが先ほど……

本来なら私が帰宅中に購入して帰るのですが、今日はこの後職員室に生徒が授業の事で質問に来るのでMasterに頼んだ方が効率的なのです。

しかし、こうも見つからないと念話機能がないのが不便ですね…
魔法世界にいたころはパクティオーカードがあったので必要に迫られることはなかったのですが今は旧世界の学園内、魔法使いが設立したといっても一般生徒の多く通うここでおいそれと使うこともできず…こうして徒歩で探すことになっています。

いつそ機能追加をするかMasterに通信手段を得てもらおうかないと…？

「げ、何よコレ 鍵がかかってる」

図書館前でドアノブをガチャガチャと壊しかねない勢いで格闘しているのは…

出席番号8番の神楽坂 明日菜さん？

「どうしたのですか？」

「へ？ってアイン先生!？」

聞くところによるとネギ先生を探してここまで来たのだが見つからず、図書室の中から声がしたそうなのだが鍵がかかって開かないと言っ

センサースキャン……ネギ先生の魔力パターンを探知……微弱な魔法薬の反応を感知……状況…パターン、トラブルと断定…

ふむ、確かに鍵がかかっていますね…

中にネギ先生がいるのも間違いないようです…しかし、このままですと彼女がドアを蹴破りかねないですし…

「なるほど……少々待っていてください」

「え？」

指部・第一関節 外皮 プログラム解凍………ピッキング開^{スタート}始

カチャ

「開きました」

「うっそお！！だって先生かぎなんてm「持っています何か？」」

外皮が剥がれて変形している親指を見えないようにしてツールで型をとった鍵を見せる

「見回りを任されましたのでこうして鍵も預かっています。」

もちろん見回りなど嘘ですがこの回答がLog検索にて有用性70%と算出されたので参考にと使用させていただきました。

「それより彼は良いのですか？」

「あ！そうだネギ！」

私の話題転換に見事に乗ってくれた神楽坂さんはそのまま勢い良く扉を開け放つ…

そしてその先にあったものとは……

散乱する本たちの上に倒れているネギ先生とその上に覆いかぶさる

よづにしている出席番号27番の宮崎 のどかさん……む、本の上に乗るのはいけないと思います…

「この ネギ坊主は……何をやっ取るか つー!」

「あ………」

「え?つてわ つ」

止める間もなかった見事なとび蹴りに吹き飛ばされるネギ先生…

「あ!本屋ちゃん……じゃなくて宮崎まで」

当然上にいた宮崎さんも飛ばされて転倒している…が
ネギ先生の心配もしてあげた方がいいのではないのでしょうか?
かなりの音を立てて本棚に激突していたのですが……

「大丈夫ですか、ネギ先生?」

「あ、アイン先生。どうしてここに……」

助け起こすネギ先生の問いに先ほどの扉の前でのやり取りを説明する。

鍵については先ほどと同じですが問題ないでしょう……本人も納得していますし…

「そうなんですか。すみません…助けていただいて……」

「いえ、見たところそれほど大きな怪我もないようなのでよかったです。」

礼儀正しく礼を言いつつ10歳らしくしゅんとする姿に初々しさを覚える

「ところでなぜこのような事態に？」

「え？あ、あの、それは…その…」

「あ！それはあれです！コイト…じゃなかった…ネギ先生が本を探しに来ていたんですけど鍵がかかって出られなくなっただって携帯に連絡を受けて…宮崎さんは図書委員だし！」

オロオロするネギ先生にすかさずフォローに入る神楽坂さん

出席番号8番神楽坂 明日菜さん…報告ではネギ先生のミスで魔法に関することが漏洩したと聞き及んでいましたが…良い協力者を得たようですね…

救出に来たはずがとび蹴りを放ったり、先ほどネギ先生を探していたという証言と食い違ったりと内容はあれですけど…

まあ…及第点というところでしょうか？

「そうですね。それは大変でしたね」

ネギ先生の頭に手を置き周囲を見渡す…Masterはやはりいないようですね

「あの、私 実は音楽先生を探していたのですが…」

「あ！音楽先生！！」

見ませんでしたかと続ける前に二人の声にさえぎられる…

「見かけたのですか？確かネギ先生を探しに出ていると聞いたのですが…」

「あゝそれで……音楽先生がまだいるなら、多分上の階にいると思います。」

？？妙に歯切れの悪い物言いに疑問を抱きつつもとりあえずは情報を得られた

「わかりました。では、私はこれで…」

「待ってください！僕も探すの手伝います！」

その申し出はうれしいですが…

「気持ちだけ受け取っておきます。私の方は個人的用も含まれることなので、それよりもネギ先生は彼女をお願いします。」

そう言って私が指し示した先には先ほどから気絶している宮崎さんが……

まあ外傷は無いようなので大丈夫でしょう

「あ！そつだ本屋ちゃん！！」

「そつです！大丈夫ですか！？」

慌てて彼女に駆け寄る二人にクスリと笑みを漏らす。
どうやらこの短い期間に良好な関係を築けているようですね…評価
+です。

介抱している二人をそのままに軽く会釈をして踵を返す。
うん、今日はいいものが見られました。

二人からMasterが上にいたとの情報を得ましたし、人も待た
せています…早く用事を済ませることとしましょう。

そして上に上がるために階段を駆け上がる途中…放課後の喧騒のな
いそこに違和感を覚えると同時に感じる疎外感…

…これは…認識阻害の法…！Masterツ…！

これまでいくら下の階を探しても見つからなかった事、Master
rが上にいたという証言、そして今しがた感知した認識阻害の術…
…符合する点が多すぎる…この先では戦闘が…

…

駆け上がり結界の境界を越えた私の耳に予想を裏付ける剣戟の音が
響く

そして一気に登りきった私の眼前には……校舎内《この世》のものとは思えない光景が広がっていた……

「くっ！やるな桜咲！！」

「あなたこそ、敵ながら見事です」

敵って何？と思う間もなく再開される剣技の嵐、何やら青春の1ページのように額にいい汗をかいているのはこの際放っておきましょう。…それよりもこの目の前の光景……

眼前にそびえるは拉げた、又は砕けた柱の数々、廊下側のガラスに無事なものはおらず、みな例外なく砕け散っている。そんな光景の今なお半壊していく廊下……
だが、それよりもこの空間を異質にしているもの……それは彼らよりも私側に倒れている大量の生徒達……

はつきり言って状況が全く飲み込めない……いや、一つだけ言える事があります それは…

「はっ！次で終いにするぞ……」

「っ！望むところですっ！！」

視線の先で先ほどまでですさまじい剣劇を演じていた二人が張本人だという事…

そして一旦距離を置き、両者必殺の構えで互いに己のエモノに気と魔力をそれぞれ集中させていく………って

「阿呆ですか………」

「プげらっ!」

「なっ!」

まさに今激突せんとはかりにふみ込もうとする二人の視野の狭い戦いぶりに頭にイタイものを覚え、思わず誤射という強行手段に………もちろん50ミリのゴム弾で対象はMasterですが………

「まったく、あなた達は馬鹿ですか?………周りをよく見てください………」

私の言葉に我に返ったのか周りを見渡す二人………桜咲さんにいたっては顔が青ざめてきていますね………

「いくら認識阻害の結界が張ってあるからといって、内部にいる彼女達が目を覚ましたらどうするつもりだったんですか………」

あ、っと気付いたように反応する二人………というより今更気付くという事に驚きです………

そんな二人の反応に深いため息をついてあたりを見渡す………

その悲惨な状況を今一度眺めてもう一度ため息を吐く

まあ、見た限り彼女達に怪我は無いようですが………とりあえず学園長に報告でしょう………

そう思い内蔵された電子機器ににより、学園長室に連絡をとる傍ら…

「あ、Masterは今夜の夕食は抜きですから」

と、この事態に対する罰を言い渡す。

「そんな！俺のハンバーグッ！！」

つと嘆いていますがいい薬です……桜咲さんの目が点になっていますがこれは置いておくべき事でしょう……

叫んでいるMasterを傍目に現状を見て一つ、また借金が増えるのだろうかと頭をかかえながら連絡を取る私でした…

side:out

・アビリティ 更新・

・アインの項目に『アインの七つ道具』が追加されました

おまけ

「あ　っ、寒………」

時季も冬真っ只中な二月の夜風はつらい…
しかも夕食抜きなのはさすがにこたえる

あの後学園長室に呼ばれた俺と刹那はそれぞれ減俸と近衛嬢の期間
限定の護衛解任、学業に従事せよと言いだされた
もちろん二人とも抗議はしたが…

「一部とはいえワンフロアの半壊……犠牲者がいなかったただけ奇跡
なんじゃそ？」

とまで言われれば大人しくならざるおえない…

こうして完済がまた遠のいていく

…思い出してもため息しか出ない……

そうして今は担当であった警備、今日は学生寮周辺だったのでこう
して寮の屋上から見張っている

……ん？

「桜咲か…どうした？」

ふと気配を感じて振り返った先には先ほど学園長室で一緒だった桜咲、その手には小さな包みがさがっている

「いえ、夜食にと思ってこれを…今日のお詫びです」

いいのかと目で確認する俺にズイッと包みを差し出してくる事で応える桜咲にありがたく受け取ることにした

「おにぎり？」

中に入っていたのは無骨ながら丁寧に握られたおにぎりが三つ。

……

正直見られながらだと食べづらい…が、こうして空腹時に差し入れてくれたのはありがたい

パクツと一口頬張ってみる

「……………うめえ……………」

手に持ったおにぎりに目を向ける

塩をまぶした米におかかを入れただけのシンプルなものだが空腹と言う事を差引いてもうまい…

こぼした感想にホッと息をつく桜咲、なんだ…

「いいやつだなお前……………」

「なっ！」

お詫びと言う事は昼間の事を彼女なりに気にしてたんだろう
まさか生徒の方から謝りに来るとは……まだまだ俺も

「いや、昼間は悪かったな……ちょっと短絡的だった、すまん。」

俺が謝るのがそんなに意外だったのか驚いたままオロオロと慌てる
桜咲

へー、こんな表情もするんだな……

普段は学園でも眉一つ動かさず護衛に徹してる彼女からは想像もで
きないような百面相。コレは貴重ではないだろうか？

「いえ……あの、そ、その……っ！失礼します！」

去っていく桜咲の背中にお礼を言い
包みを片手に屋根に腰を落ち着ける

「……うん、やっぱりうまいや」

再び食べたおにぎりはやっぱりおいしくて、
明日またお礼を言おうと思ったそんな冬の日。

しかし、今日はいろんな事があつたと思いつながら警備を続ける
そんな

深夜の出来事。

気がつけば溜息も止まっていた……

取立10回目　く薬って危ないですね。今日は先生にとって厄日だそうです。

はい、そんな10話でした。

今回は急遽出現させた話です。もともと登場させるか非常に悩んだ話ですね。

主人公にどうやってネギ少年とからませるか…

ホレ薬の件は主人公にも飲ませるかそれとも完全にネギ少年の身代わりにするかが悩みどころでしたが…文才の無い自分としましてはこれがいいかと思ひまして

まあ、刹那とかのからみが書いていて意外と楽しかったのもありますが（笑）

逆にアインとネギとのからみはなかったのもこれは始めの方ですぐ決まりました。

今後図書館島編を入れるにしてもエヴァ戦を入れるにしてもその前に一話はほしかったので今回の内容になりました。

うーん、うまくまとめられたでしょうか？

つと。次に作中にあつた『更新』について

その話中に出る更新内容等は基本的に後日の上げる新しい設定の方に載せます。ですがそれだと説明不足になりそうですので毎回あとがきに簡易説明を入れるといった風にしていこうと思っています。

では今回の『アインの七つ道具』について

アインの右手に追加装備された7つのツール。今回使用したピッキングツールについては親指内に内蔵しています。

とまあこんな感じで短めの説明に設定で詳細を上げていく感じですが。
それでは、なんやかんやと長くなってしまったので今日のあとがき
はこの辺で、
次回またお会いしましょう。 再見！

取立11回目　～期末テスト？何それうまいの？麻帆良に来るまでテストとは無

みなさま、本当に申し訳ありません！

更新速度UPを掲げたてまえなんとか日曜にといっても本当にギリギリ…いや、アウトな時間に投稿…

なにとぞご容赦ください。

さて、本日11話をむかえたこの『副担任は借金教師』、今回は少し内容を飛ばしております。といってもサブタイトルで丸わかりだとは思いますが…

いや、毎回テーマは決めてるんですがサブタイトルは見ての通りノリと勢いでここまで来ています。

うっん猛省。

そんなこんなでむかえた16回目の投稿である11話ですがまた文字数が増えました…(汗

いや、相変わらず本編の表現は削るのが難しいですな…：：：しかもフアンとしては入れたいシーンがあるのにノリで手が勝手に執筆し、そのまま上げてしまうという始末…いや楽しいんですけどね？皆様にうまく伝わるかはまた別問題でして…

そんなわけで作者・トントンのノリと勢いが当社比1.4倍なお話、楽しんでいただけたら幸いです。

では長々と失礼しました。本編へどうぞ！

取立11回目　く期末テスト？何それうまいの？麻帆良に来るまでテストとは無

「　、以上が彼に対する私達の見解です。少々トラブル等を引き寄せやすいように見えますが問題ないかと…」

「ま、生徒にからかわれたりもしますが概ね関係は良好ですし、10歳にしては良くできていると思いますよ。」

「そうですね、指導教員の私としても一応　合格点を出してもいいと思っておりますが……」

場所は麻帆良学園　女子中等部　学園長室、
今俺はアインとしずな先生とともに彼、ネギスプリングフィールドに関する報告を行っている。

アインは指導教員に任命されていないが説明というものが面倒なのでサポートという名目で同伴してもらっている。
… けっして主従関係の乱用ではない…

「フオフオ　そうか　けっこうけっこう。」

こちらの報告に耳を傾けて椅子に腰を下ろしている姿には貫禄がうかがえる。

腐ってもこの東の長ということだろう

だがこのじじ…もとい学園長…自分の部屋を中等部、それも女子の校舎内に造るとはどんな職権乱用なんだろう

「では、4月から正式な教員として採用できるのう」

そう言っって席を立つ学園長…

「じくろつじやった しずん……」

すっと耳にいい音が隣りから聞こえてきたと思ったら次の瞬間には目の前の学園長の髭が数本散っていた…

「セクハラです…学園長」

わずかに聞こえた転送音から推測するにアインが何やら刃物を使っただろう…

距離にしてしずな先生との間は10？ほど……対面するにしても近すぎる距離だ

……やっぱりただの好色爺ではないだろうか…

どうにも認識に困るなこのジジイは

「ウオオツホン！ま、まあともかく彼にはもう一つ課題を受けてはもらはなければの」

「課題…ですか？それはまたどういった」

課題と言うと俺がやったようなものだろうか？

同じ年とはいえむこうはメルディアナ魔法学校を卒業したばかりだいくら主席とは言えそんな難しい課題は出さないだろう

「そうじゃの、最終課題という事で……こんなもんじゃろ」

そういつて一枚の紙にさらさらと筆を走らせ、封筒に封をしてこちらによこす

「…内容の方は？」

「それは開けてのお楽しみじゃ」「ブチかますぞ…」「…まあ魔法使いとしてより教師ということに重きを置いた課題と言っておこうかの」

…ま、そんなもんか。

てかいい歳して『』とか使うな、キメエ…

「という訳で、これを彼に届けるよう頼めるかの音楽君」

「いやだ。…って気分的には断りたいんですけどね。」

目の前の手紙には碌でもない事に巻き込まれるようなオーラを放っている…

この半年以上の経験から学園長の頼みというのは直接的にしる間接的にしる碌な事が無いというのが俺の意見だ

たとえば俺自身に関与する気が無くともこの妖怪のシナリオにはキャストの内に入っているんだろ…

つまりめんどくさい

これがかの子供先生の重要課題でもなければ即ばっさりきっかりしっかり断るところだ

……が まあ、これも仕事だと言い聞かせて受け取るしかない

「ま、単なる通過儀礼程度の意味しか無いでしょう」

「まあ、これから彼がその立派たてな魔法使いを目指すにあたってもこの学園で修業を進めるにはこの程度の試練に躓ついてもらうわけにはいかないしの
これは彼が目指していく道の最初の試練じゃ、立派たてな魔法使い候補マキステル・マキ生としてのう……」

この学園で……ねえ

「あ、それと今回の課題に関しては君たちは関与せんように」

「へ？……意外だな、てつきりまた面倒事を押しつけられるのかと思っただぜ」

「Master、口調が……」

おっと、

「ふむ、それも考えたがの まあ、彼にも少し苦難を味わってもらわねばとな。とりあえずは最初の試練でもあるわけじゃし」

そんなもんか、確かに始めからお助けキャラがいてそれ以降頼り癖がつくのもな……

まあ、ネギ君に限っては見た感じそんな心配はいらないと思うけど

「了解。今回こちらは配達人ということでこれをネギに渡す。以上の話で？」

「うむ、頼んだぞ。しかし信用ないの、そんなに疑り深いと損じゃぞ？」

どの口が言うかこのジジイは……
こちららあんたのおかげで猜疑心の練度が鰻登りだ

「胸に留めておきます……」

顛を押さえたくなる衝動を抑え、その後ろ向きになりながら答える。
なんというか毎度毎度疲れるやり取りだなほんと……

そのまま会釈をする従者を促して退出する
さてお仕事さね

side: Negi・Springfield

「おはようございます」

朝の挨拶を返して教室に向かう。

『日本で教師をする』なんて課題だってわかった時は少し……ううん、かなり驚いたけどこうして大勢の生徒に挨拶していると僕も教師としてうまくやれているのだろうか嬉しくなる

「うん、でももっと頑張らないとっ！」

ただどこかで気は抜けない、まだここに来て約1ヶ月だ。生徒のみんなとは打解けてきたけど全体でみればまだまだだ。早く教師って認められるように頑張らないと！

「お、いたいた。ネギ君ッ！」

「あ、音来さん。アインさんもおはようございます。」

廊下で呼び止められたのは音来先生、それにアイン先生もいる。

？めずらしいな、朝の登校時に二人一緒の姿は見たりするけど学校内、それも朝のHR前に一緒なんて

「そついえば職員室によつた時にはいませんでしたけどどうかしたんですか？」

「ああ、学園長に呼び出されてな。これを…預かった、君にだ」

そつ言つて内ポケットから取り出されたのは一枚の封筒

それを受け取つて書かれている文字を見ると

最終課題？

……ッ！

「えっ！？ 僕への最終課題！？」

「ネギ先生が正式に学園の教員として採用されるための試験のようなものだそうです。内容については私達は特には……」

あわわっ！？ 今頃こんな課題が出るなんて聞いてなかったよ
！？

アインさん達も知らないということは魔法関係？

……まさかドラゴン退治とか？いや、それとも攻撃魔法三百習
得とか

……ど、どうしよ！これをクリアしないと正式な先生にも立派な魔
法使いにもなれなくなっちゃう ！？……
ル・マキ

受け取った封筒を手に考えてみても全く想像ができない
何しろ初めての課題だ、どんな内容なのか……

「ま、とりあえず開けてみなよ」

音楽さんの言葉にそうですなと頷く。確かにここで悩んでいても仕
方ないですし

ゴクリと唾をのみ、封の部分の蠟を慎重にはがしていく……
中に記されていたのは

……

ねぎ君へ

次の期末試験で、

2-Aが最下位脱出できたら

正式な先生にしてあげる。

麻帆良学園 学園長 近衛近右衛門

……

「「……………」」

「な…な　んだ。簡単そうじゃないですか　、もう何か何かつてびっくりしちゃいましたよ　」

「そ、そうか?」「そうですか?」

うん、これなら何とかかなりそうだ

よ　し　がんばるぞ!!

気合も新たに教室へ向かう

この時の僕は事の深刻さを理解できていなかったことを後に知ることになる…

s i d e : o u t

廊下で学生と話しながら教室に向かうネギ君を見つけて封筒を渡す。
が……

「えっ！？ 僕への最終課題！？」

「ネギ先生が正式に学園の教員として採用されるための試験のようなものだそうです。内容については私達は特には……」

とアインの説明もそこに受け取った封筒を手に考え込んでしまっている

悩むのは悪いことではないがこの場合それでは事は進まないわけで……

「ま、とりあえず開けてみなよ」

とうながす俺の言葉に頷いたネギ君はゴクリと唾をのみ、封の部分の蠟を慎重にはがしていく……

そして肝心の内容は

……

ねぎ君へ

次の期末試験で、

2・Aが最下位脱出できたら

正式な先生にしてあげる。

麻帆良学園 学園長 近衛近右衛門

……

「」

「な…な　んだ。簡単そうじゃないですか　、もう何か何かつてびっくりしちゃいましたよ　」

「そ、そうか?」「そうですか?」

思わず重なるアインとの意見

というよりネギ君はうちのクラスの成績事情はちゃんと理解できているんだらうか?

俺が言うのもなんだがかなりひどかったのは覚えている

まあ知らないということでは…いいわけがないよな…

目の前にいるのは先ほどのうるたえぶりが嘘のようにほっとした笑顔を浮かべている子供先生…その表情からは俺やアインが思った不安等が感じられない

…大丈夫だらうか?

一抹の不安を覚える俺の心情とは真逆に足取りの軽いネギ君に続く形で俺はそのまま教室に向かった

「え　と、みなさん聞いてください!今日のHRは大・勉強会にしたいと思います!」

意気込みはいいがそれで大丈夫なのだろうか。ため息が出てしま
そうである。

そんな心中とは別に。賛成の意向を示す2 - Aの面々…
にしてもどうしたものか

正直いうとホントかなり厳しい。

学年最下位という不名誉極まりない順位に変動が無いということは
こいつら全然学年ビリであること恥ずかしくは思っていないという
ことだ…

そして…

「では！お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！」

などとふざけた提案が出る。

しかも内容を理解していないのか子供先生は許可を出す始末…なの
でここは

「却下。ボツ。アウト。椎名、退場」

「ええ　っ、音来先生お　ぼ　だ　っ」

「てか先生なんで野球拳知ってんの!？」

次々にあがるブーイング…

なにか？こいつら本当に英単語野球拳なんぞやる気だったのか…
頭イタイ…

「じゃかしい、横暴結構、乗り悪くて結構。そんなまともに授業に

ならないようなもの却下だ却下」

「ひどっ！……そうだよなー、ネギ君はギリギリかもしれないけど先生が見ちゃったら犯罪だもんねっ」

「先生は変態さんですかー？」

……こいつらっ……

落ち着け……coolになれ鳴守音楽

実年齢においては年下だが人生経験においてはこいつらの何倍も密度の濃い10年を過ごしてきたんだ……この程度いなせなくて傭兵なんて……

「あ、もしかして先生が興奮して困るとか？」

「発情したネコ？」

「まさか先生ロリコン！？」

「委員長のオトコバージョン！？」

「私は関係ないですわっ！そもそも私は……席に着けや……ガキども……」はい？」

ああ、わかった

悟ったよ……天国のマスターじいちゃん（*もちろん死んでいません）
じいちゃんが昔言ってた馬鹿につける薬はないって本当だね
……こいつらいつペンシバかないとだめだわ……

のそりと教壇から一步踏み出す。

…ネギ少年が脅えているように見えるが気のせいだろう

「せんせーっあはは、やだな…じよ、冗談だよ」

「鳴滝 姉……」

「ひゃいっ！」

廊下側に立っていた俺が教壇を降りると室前に目の前の席は俺愛称『鳴滝 姉』が前に来る…そして先ほど調子に乗っていた中にこいつももれなくいたわけで……

「俺がこの世で嫌いなものが二つある……」

「あははは……何かな」

「一つは退屈な日常……もう一つは……あの毛玉な雑食極まりない家畜畜生と同義にされることだッ！……！！……！！……！！」

「ってそつち（かよ）！？」

外野がうるさいが全く意に介さない

そして俺は言いきると共にグワシとアイアンクローをかまし……

「いた、いたたたたたたたたたたたただッ！！」

「ネギ先生っ！？」

ようとしてなぜかネギ少年の頭をギリギリと締めあげていた……

「……………鳴滝 姉……」

「ハ、ハイツ!!」

「次は……ナイからな?」

もち命の保証がという意味を込めての言葉に首がちぎれんばかりの速度で上下に振る鳴滝

この時のクラスの意思は一致したそう……先生の前でネコという言葉はタブーだと……

……

「あ、あの 音来先生?そろそろ話してあげないとネギ先生白目剥きかけてるんだけど……」

……

「あ……、すまない!ネギ君ツ!!」

右隣に座っている椎名の指摘に右手の先を見ると痙攣している子供先生が……

どうやら体格差も相まって「効果は抜群だ!」だったらしいマジでごめん……

心の中で平に土下座をしてネギ君を介抱する

「……良かった、骨は碎けてなかったか……」

「碎けるのっ!?!」

「はっ！おじいちゃん！！」

つておじいちゃん死んでないよとか呟きながらも無事復活したネギ君よかった……課題前に補佐の所為でできなかつたとかなつた日には申し訳なさすぎる

その後、事情を把握しなおしたネギ先生にこっぴどく叱られるという珍稀な出来事を披露する破目になる……猛反省……

「というわけでこのまま最下位脱出ができないと大変なことになるので……皆さんも中学二年の最後になりますから。一回くらいは汚名返上して三年に進級しましょう！」

「さすがネギ先生ですわっ！素晴らしいお言葉です。」

「まあ確かに、このままってのもダメよね……そろそろ自分で良い点取りたいし」

ここぞとばかりにネギ君を褒めたたえる雪広にこれまた珍しく神楽坂が続く

普段はなんだかんだで喧嘩しがちなこの二人も2・Aにとっては中心的な存在なんだろう。そんな二人の言葉にまわりもだんだんやる

気を出していく…

「みなさん……」

「今回のテストはみんなで真面目に勉強だよっ！なんたつて我らが担任は大学飛び級の天才児にして帰国子女の秀才さんなんだし」

おおーと上がるクラスの歓声に感動したのかネギ君が

「その意気ですみなさん！僕達も及ばずながら全面的に協力します
！」

とおっしゃる。が、全面的は危険だ…なぜなら…

「全面的？」「僕達が？」

キュピーンと目の端を光らせるといふ器用なエフェクトを披露しつつにじり寄ってくるパラッチ・s（朝倉&早乙女）

「全面的ってことは先生からご褒美が出るってことかな？」

「僕達ってことは当然音楽先生も含まれるんだよね？」

俺に聞くのではなくネギ君に詰め寄る辺り相当な策士だろうっつて、感心するより前に止めないっ！

「ご褒美ですか？僕達に可能な限りだつたら協力しますが…」

「きいた？」

「聞いたよ朝倉さん」

「音、とつたど　　っ!」

「成績アップのあかつきには先生一人から可能な限りのご褒美付きよ　っ!」

そう言つてテープレコーダーを片手に突き上げる朝倉と拡大解釈を振りまく早乙女…

「いや待て早乙女…金銭的な…」

「「「おおおおお!」」」

!?

一気にヒートアップする教室内

俺の言い分を通す前にかき消されるその熱気は止まらないそして俺がもう一度抗議の声を上げようとしたところで…

「おいお前ら人の話を…『キーンコーンカーンコーン…』…」

上げる前にHR終了の鐘が鳴ってしまった…

「あつれ〜?授業始まつちやうね〜?」

「さっき何故かネギ先生が10分ほど気絶してたからね〜」

くっ!確かにあれは俺が悪かった!反省もしているが、…

「せっかくネギ先生が提案してくれた勉強会だったのにね」

「みんなやるとやる気になったのにな」

……

こちらを振り返る二人の姿がアクマに見えました……

……こいつらさっきのも全部計算ずくだ……

「……好きにしろ……」

俺の諦めの一言に再度盛り上がりを見せる教室内

1時間目のアインの授業中もそれは続いたらしい……

この日、2 - Aは学年始まって以来の集中力を見せたらしい……

……結果が怖いです……

おまけ

side:Ain・Recode

夜遅く明日の朝食の下ごしらえを終え、今日はもう就寝しようかと部屋に向かうとMasterの部屋から明かりがもれていることに気付いた

Masterはその実年齢に逆らわず夜に弱いです。傭兵稼業時の習慣で本人は夜更かしなど何のことはないと言いますが11時を過ぎると糸が切れたように眠ってしまいます
そんなMasterがこんな夜遅くまで起きているのには正直驚きます

中を窺うと何やら机に向かって書き物をしている様子……
この上さらに机に向かっていているという事態に驚きです。明日の天気は大丈夫でしょうか？

「……………？アインか…悪い、邪魔したか…」

そんな非科学的な思考におちいつているとMasterがこちらに気づいて声をかけてくる

「いえ、明日の準備をしていた後なので……………何をなさっていたんですか？」

首をかしげた私にMasterが少々照れながら手元を隠そうとするが慌てた為に端に置いてあった一つが床に落ちる

「あっおい！」

何気なく拾い上げて眺めたものですがすぐに取り上げられます。が、視覚情報に残ったLogから検索……………これは…

「麻帆良学園 女子中等部のテキスト……………お勉強ですか？」

看破されたことにさらに顔を赤らめて「悪いか！」と言わんばかりにこちらを睨みつけてくる様には外見に反して幼く見えてしまうそんな姿につい苦笑を洩らしてしまうとさらに恨めしいと主張する目を向けられてしまった

「いえ、失礼しました……………ただ単純に普段から勉強がお嫌いなMasterには珍しいと思ひまして」

私の言葉にそっぽを向いて照れくさそうに髪をかきあげたMasterがぼそりと言葉を洩らします

「……つたからな……」

「はい？」

「あ、約束しちまったんだよ。勉強に協力するって…生徒のやつらと。」

先生が勉強できないとハズイだろとかおかげでご褒美やらなくつちやならないかもしれないとかいつているがそれだけでMasterは勉強などはしないということは知っている

そもそも勉強にしたって今までのようにごまかせない事はないんだしそのご褒美に関して言えば協力しなければいい話だ。

何の心境の変化かは分からないが…相変わらず不器用な人だ…

「なんだよ……ため息なんかついて……」

「ココ、間違っていますよ」

「えっ！うっそ！？」

しょうがない人ですね…

まあ、そうして頑張っているのですから 今日ぐらいは助けてあげてもいいですよね？

マスターリヒト…

「ちょっと待っていてください……」

「あ、おい。どっか……」

「眠気覚ましにお茶とお夜食を持ってきました。その後勉強の方は見

てあげますから、根をつめてもはかどりません、少し休憩してください」

「……………」

椅子に座りなおしたMasterはどうかやら休憩をするつもりになつたらしく、若干不貞腐れたような照れたように頬を赤くして俯いている

そんな姿を見て私はキッチンに戻るべく踵を返す。すると…

「……………あ、ありがとう…」

本当に小さな呟くような声での感謝の声

そんな言葉にMasterらしさを感じて思わず笑みがこぼれそうになる

「…いえ、どういたしましてです」

また笑つたと勘違いされないよう顔を少し振り返らせて返事を返して退出する

パタン

「さて…」

不器用な彼のためにちよつとした応援をすることにしますか……
抑えたはずの笑みが自然とこぼれるのを自覚しながらキッチンに足を向ける

冷蔵庫の中身から夜食の献立を考え…ふとこれでは本当に母親のよ
うだと苦笑する
いつか言われた『親子』のようだという言葉
あながち間違いではないのかもと自覚してしまった手前否定はでき
ないが、それでも今日のような日々に満足感を覚えたそんな日の終
わりの出来事……

side:out

取立11回目　〜期末テスト？何それうまいの？麻帆良に来るまでテストとは無

はい！そんな11話、図書館島編でしたっ！

うっん、またネタにちよつと走っていますね…（苦笑）
わかりますかね？

あ、今回作中で主人公がネコの事を一部ボロクソ言っただけが、これが設定の一部であり、深くも浅い事情があります。
ちなみに作者は犬よりネコ派のネコ大好き人間です（笑）

話的にはまだ図書館島まで突入していません。というよりおまけで夜中に主人公が勉強をしているようにネギ達と一緒にはいきません。話数的にはあと一話で終わらせる予定なんで…というのも作者が早く主人公の裏設定を早く出したいというのがあるんですが（笑）

でもそれがわかるのは大分先なんですけどね〜
エヴァンジェリン戦では片鱗程度の予定ですし…orz

魔法世界に行くまでにすべてはらすかどうかどうするか検討中…
相変わらず設定を考え出すと寄り道の多いトントンです。

この間なんかまだネギが本作登場していないのにラカン戦をちよいと執筆したり学園祭編を書いたり浮気的な気もしますですハイ…

そんな伏線も回収しつつ進めていくので最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

では、久々に遅くに投稿となりました11話

最後まで読んでくださった皆様に感謝を、

今日まで本作にチェックを入れてくださった方に謝罪の意味を含め

て述べさせていただいて今回はこの辺で失礼させていただきます。

ありがとうございました。

次回またお会いできるよう。再見

取立12回目　く本、それは先生にとって紙の束だそうです。「決して字が読め

申し訳ありません！

なんだかんだと過ぎてみれば2ヶ月近く放置状態になっていた本作

（汗

言い訳はしません！

足を運んでいただいた方々には本当に申し訳ないです。

続ける気があるので今後もお付き合いいただけると嬉しいです

前書きはこの辺で、12話の方どうかよろしく願います

取立12回目　く本、それは先生にとって紙の束だそうです。「決して字が読め

side:Ain・Recode

「　んっ　　、う　　」

時刻は早朝の3時半

つい先ほどまで珍しく『勉強』をしていた我がMasterは机の上
に顔を預けて寝てしまっている。

正直、この体勢では体に負担がかかるのでベットに移動させよう
も思ったのだが…

そつした場合、起こしてしまう可能性が高かったので自粛、毛布を
かけるに止まった次第……が生憎と我が主は寝相がいいとは言い難い

「う　　っん、　　」

このように寝返り等で毛布が落ちたり机から落ちそうになったりと
…こつちの苦勞も知らずに…

「お　　イン　　……メシは　だぞ　　」

……まったく、

我が主人ながらどんな夢を見ていることやら

見た目とは裏腹な幼い寝言に苦笑しながら毛布をかけなおす

出勤までまだだいぶ時間もありますから、夜食を片付けて朝食の準備にでも……

『あ、あ、アイン君、聞こえとるかの？』

……

『もしもし、聞こえとらんのか……もう寝てしまったかの？』

……タイミングの悪さにドールながら『頭痛』というものを覚える……
そもそもドールである自分に睡眠というものは要りませんが

「……何でしょうか……学園長^{「ユウカイ」}……」

『今ルビも含めてものすごいぞんざいな扱いな気がするんじゃないが……』

「気のせいでは……歳じゃないですか？」

『……まあ、いいじやろう……アハト君がおるじやろ　こんな時間に
すまんが起こしてくれんかの？』

アハト君ですか……

最近Masterが学園長に頼まれ事を受けると碌な事が無いとお
っしゃっていましたか……

同感ですね……このタイミングで私の邪魔をするとは……後でどうし
てくれましょう……

「……まことに申し訳ありませんが、Masterは先ほど就寝さ
れたばかりです。できればそっとしておいてあげたいので私がかわ
りに……」

『すまんが…今回の頼み事はアイン君には頼めなくての、どうしてもアハト君に行ってもらいたいのじゃ』

「ですが「ん、どうしたアイン？」…Master」

どうやら会話が進むにつれ語尾が強くなってしまった様子…

目が覚めてしまったMasterはそのまま念話に切り替えたのか学園長と話している模様…

「ん、了解。すぐ行くので30…分はかからないと思います
はい、では」

どうやら承諾したよう

寝ぼけていたとしても仕事となれば頭の切り替えが早いのがMasterの長所

その証拠に珍しく応答に敬語が含まれる

「アインだいたい聞いてるな？今からちよつと出かけてくる
帰りは遅くなるようだったらフォローよろしく」

「……了解しました…お気をつけて、Master」

おつと答えてくれたMasterを送り出す
麻帆良マホウに来てからはこんなことばかりですね…

side:out

コンコン

「開いておる」

「失礼します…」

早朝の4時過ぎ、

日の上がらないうちに依頼をつけてから学園長室まで 正直眠い……

「ふむ、さすが時間どおりじゃの」

「挨拶はいい、名前を出したからには依頼だろ なんだ？」

言葉尻に不機嫌さを混ぜて先を促す、仕事柄深夜に呼び出される事もなくはないが感情面でいいかわれると答えはNOだ

外見上は二十歳とはいえ中身は10代だ、生活に慣れても実際はコンディションも悪くなるし気分も悪くなる。基本良いことはない

「では早速本題から…、先ほどネギ君と2-Aの生徒6名が図書館島で動けなくなってるの」

「は？」

図書館島？あのいつかの課題で行った本のダンジョンか？

「…救出か…しかしなんでまたそんなところに」

「いや、例の課題の演出としてメルキセデクの書を噂として流したんじやがの…見事にシナリオ通りに進んでおるわい」

は？

つまり学園長の差し金でこうなったと、その救出？

…アホらし

「帰る…」

「なっ！どこ行くんじやまだ話は」

「だから帰らせていただきます…学園長のシナリオ通りなら安全性はあるんでしょうし 第一それ俺じゃなくても大丈夫そうじゃないですか」

そう監視にせよ救出にせよ俺であるという必然性が無い

動けないとはいえこうして悠長にしているという事は深刻な怪我等は出ていないということだ

それにこれはもともとネギ君少年の試験課題だ、頼り癖がつかないようにと注意をした手前でもう救出の手はずとはいささか甘やかし過ぎではないだろうか？

「いや、おぬしもそうなんじやがこの段階で彼に必要以上に魔法関係者と接触させるつもりはないんじや。となると彼等にばれないようにフォローをしてもらわねばならん」

「……………」

だったらなおさらだろう

俺なんかよりこの土地勘のある者がが行った方が適任だ

……自分が言うのもなんだが方向感覚が低い自分が行ってもメリツトは……………あ……

「……まさか、それで俺を？」

「うむ、そのまさかじゃ。おぬしには『変化』にて直接接触してもらう……彼らと同じく噂で本を探しに来た男子中等部生、一般人としての」

どんぴしゃ……………しかも予想通りにめんどくさい

『変化』……確かに俺のそれは感知は不可能に近いので今回のオーダーには打ってつけだろう……しかし

「申し訳ありませんが今回は……」ホレ、契約書……契約書 第九章……………」

「ひょ？」

「『契約期間内に追加の依頼があった場合その内容は両者の確認・合意の上、本 契約書において執行が可能となる。』続いて第九章 3項『追加依頼の内容変更は契約に基づき申請者の責を上乘せすることとなる』ってありますよね？」

これでも半年に及ぶ経験から学習はしている
同じ手はそう何度もくらってたまるか

ま、出かける前にアインにもらったカンペ通りなんだけどな

「ぬう…じゃが「5%UP」ぐつ…仕方ない…」

「ほんじゃ『契約変更』つと。毎度」

チャットチャットと契約内容を書き換える

もともとネギ少年の補佐は受けているので断る気はなかったが、思い立ったが吉とばかりに仕返す。こうでもしないと日頃の鬱憤の採算が合わない

「あ、そういえば明日普通に授業あるけど担任も副担任もいなくてどうするんだ？」

「うむ、そちらの方は心配せんでもよい。すでに手は打っているのでは」

ん、代理でも立てたか使い魔でも使うか…ま、用意してくれるって言うてんだ気にする必要はないだろう

「了解、あとさすがにアインまで連れていけないから目的地までの案内が欲しいんだけど」

と問う俺にヒョイとよこされる…指輪？

「ダンジョン攻略に使われるマップピング用の魔法具じゃ 目的地までの道順を入れてあるのでまず間違うことはないじゃろ」

お、そんな便利なものが…これがあれば

「言つとくが、後でちゃんと返すんじゃないぞ?」

……チッ

「わってるよ、さっさと終わらせてくらあ」

返事が返ってくる前に踵を返しさっさと退出することにする

まったく、こっちはろくに寝てないというのに面倒な事ばかりまわってくる…

side: Negi・Springfield

「じゃあ早速授業を……」

「……と その前に 食糧探しだ っ」

意気込みを新たにする前に走り出してしまふ明日菜さん達

それを追おうとすると右腕の封印から魔力が解けるのを感じた

シュッと音と光を放っていく腕を見ると封印の印が2本になっている
この術は朝日とともに解けるから今は土曜日の朝…ここに来てもう
一日が経っている

「あと二日……」

魔法が使えればみんなここで脱出することができる

そもそもこんな事になったのは引率の先生である僕の責任、安易に魔法の本に頼ろうとしたから……あの時とめていればよかつたんだ

後悔の念とともに見上げる天井は遥か高く、落ちて来た穴はなお暗く深い……

ん？

目をこすつてもう一度天井を見上げると……穴の方から小さな影が

一つ……？

いや、あれは……人！？

「は！まずいつ……『ラス・テル マ・スキル マギステル……』」

そうだ、呆けている場合じゃない 助けないと！

突き出す杖に魔力を集中する……魔力を……

……

あ、そうだ……魔法封印してたんだ……

次の瞬間大きな着水音と水飛沫を上げる

……死んでないよね？僕達も助かつたし……

「なに！？今の音」「ネギ 今の……」

「ア、アスナさん…」

「ん〜あ、あれ人じゃないアルか？」

立ち上がる水飛沫に啞然としているとその音を聞きつけてみんなが集まってきたようだ

いまだ揺れる水面に浮かんできたのは確かに人の形をしている…

「つて！ボケつとしてる場合じゃないつて助けないと！」

ばしゃばしゃと音を立てて救助に向かうアスナさん達にはっとして僕も慌てて湖に向かった

引き上げてみるとその人、彼は男子中等部の学生だった…
見た目は制服を着ていなかったら中学生には見えないくらいの童顔、僕より背は大きいけど年の割には低く見える背丈、金色の髪は自然な色から日本人には見えないがここ、麻帆良学園においては別段めずらしくはない

「これ男子中等部の制服よね」

「ここに落ちて来たという事は彼も魔法の本を探してきたのでしょうか？」

引き揚げた彼は幸い目立った外傷もなく呼吸もしつかりしていたが濡れたままで風邪をひくという事で悩んだ結果僕が身体を拭くことになり、替えの服が無いので今はたき火を起こしてその横でタオルを数枚かけている。

「うん、とりあえずこれで大丈夫です」

「あとは僕が見ていますから皆さんは休んでいてください」

「子供が何いつてんのよ 遅くまで動いてたんだからあんたこそ休んで起きなさいよ」

「でも起きた時男の僕の方が何かと対応しやすいと思いますから」

「う、…しょうがないわね」

「じゃあ、食糧探しの方お願いできますか？」

不承不承という感じながらも頷いて歩いていくアスナさん達を見送って男子生徒の方に向き直る

「よし、もう一息 がんばるぞー！」

side:out

ん、あつたかい

……ん？

なんで俺は寝てるんだ？

「あ、気がつきましたか？」

声のした方に顔を向けるとそこには様子を見に来たはずのネギ君が……あれ？

確か俺は学園長の依頼を受けてネギ君達を助けに行つて……

本のある部屋に出たらまるでダンジョンにあるような空間に様変わりして……

いや、これもかなりおかしいけどその後だよな……

中央の像の前に大きな穴があつて崩れた後から調べようと降りて行つたら上から……

……上から黒い球体が落ちてきて……

あれは学園長の計らいだろうか？

「……あのジジイ…いつかひねり殺す（ボソツ）」

「あ、あの〜大丈夫ですか？」

いかん、ぼやいている場合じゃない演技演技

「あ、はい！……えっと、ここは…」

「え〜と、僕も説明しにくいんですけどここは図書館島の地下で君はあそこから落ちて来たんですよ」

そう言つて彼が指差す先には遙か高い天井に開いた穴の内の一つを指す

その他にもざつと周りを見渡してみると地下なのに明るかったり上の階以上に水没している本棚の群れ、むこうに見えるのは滝だろうか…

なんていうか…ハチャメチャな空間だな…

「あ、あんなところから…」

「ええ、身体の方はどこか痛むところはありませんか？」

「ああ、すいません……うん、痛むところはないので大丈夫だと思います」

身体のチェックするふりをしながら再度周りを確認する

…ネギ君だけという事は他のメンバーはどこかで休んでいるんだろうか

こんな地下じゃ食べ物だつてろくにないだろうし脱出は、いざとなつたら学園長が動くだろうし問題はないとは思つけど

「あ、これ乾かしていたんだけど…ズボンの方がまだ乾いてないです
すね」

そう言つて差し出されたのは俺がこの姿になる際に借りた学生服受け取つてみると確かにまだ湿っているが多少の不快感を我慢すれば問題ないレベルだ

「いえ、この程度なら問題ないので あ、ありがとついでいます」
受け取つた制服に着替え、他の人について聞こうとすると…

「ネギくん ご飯できたえ」

「あ、木乃香さん」

「え、ごはん？」

出ばなを挫かれて声の方を向くとそこにいたのはかの近衛嬢
無事だと知つて安堵したのもつかの間そのままどこかへ連れ去られ…

そして食卓についている俺がいた…

「「いただきます！」」

「つてちよつとまてい！」

「え？なんか嫌いなものでもあつたん？」

「そうなんですか？好き嫌いはいけませんよアハトさん」

「じゃあワタシが食べてアゲルね」

古菲の箸はちゃっかりとブロックする

この際箸と箸のつかみ合いが行儀悪いとかは後回しだ

「なんでこんな地下でこんなご飯があるんだよ！」

目の前に並ぶのは白米のご飯に焼き魚に青葉系の和え物さらにはお味噌汁まである

見事に和食な献立だ。

ちなみに俺は朝と夜は和食派だ…つてそうじゃなくて

湖があるのだから魚がいるのは認めよう…が、百歩譲つてご飯があるとしてもこんな地下に葉物野菜や味噌なんかがあるあわけねえだろ！普通食糧をどうするかで悩むところじゃねえの！？

「いや、だつてそこに冷蔵庫があるし」

あるのかよ！

てかキッチンもあるし！あれか？ここは電気とかガスとかはどうなんだよとか当たり前前の疑問もないのか！！

「何ブツブツ言ってるのよ せつかく木乃香があんたの分まで作っ

てくれたんだから残すんじゃないわよ」

……

あゝ、頭痛くなってきた

これホントに救助とかいらさないんじゃないかね？俺消えて帰っても問題ないよね？

早くもやる気だとか依頼に対する使命感だとかそんなものがガラガラと崩れていくのを感じたそんな朝食……

取立12回目　　本、それは先生にとって紙の束だそうです。「決して字が読め
となりました。

はい、短いですね（汗）

ほんと長期あけてしまって申し訳ありません

今回の事で反省とともに学習しましたので今後ストックも貯められ
るように1週間に1回くらいのペースに落ちつけようと思います
連投はできる限り避けると思います。企画等は別になります

今回の事態に平に平に謝罪いたします

本当に申し訳ありませんでした

前書きに記したように続けていく意思はあります。今後とも『副担
任は借金教師』とトントンにお付き合いただけるよう努力してい
きますのでどうかご容赦ください

では今回は短めに

失礼しました！

取立13回目 く大脱出！の前に大ピンチな先生く（前書き）

はい、13話目投稿です。

諸注意としては今回長いです。話が……作者自身びっくりの長さとなっておりませう。

まあ、そんな長い13話、前書きは短めにまたあとがきの方で

では、ごゆっくりとご覧ください。

取立13回目 く大脱出！の前に大ピンチな先生く

まずい…
いきなりだが俺、鳴守音楽は人生でおそらく上位に入る窮地に立た
されている

「 彼は己の としての は 」
なぜこうなったのか？

それは世の中には力ではどうにもならない事があるという事を実感
した今、俺はあまりにも無力だった

「 つまり、 世界を 救う そして 」

必死に目の前の敵を睨みつけて打開策を模索する
が、考えれば考えるほどかなわないという事を思い知らされる

今まで魔獣を討伐するために魔の森に赴いたこともあった、ある時
はダンジョン探索の為に遺跡の守護精霊と三日三晩戦い抜いたこと
もあり、果ては護衛対象を守るために犯罪組織を半壊するに追い込
んだこともあった

今までの経験も練磨の日々も及ばないまさに八方ふさがりの事態…

そう今の俺は…

「じゃあ、この時の主人公の心情をアハトさん わかりますか？」

このようにチユウガクレベルの問題も全く解けないのだ…

朝食後の周りの散策中、話の流れで自分も本を探しに来たという事から何故かそのまま勉強会へ同席することになった俺。もちろん校舎や勉強の進み具合の違いなどからという言葉の防壁を張るも「みんなで勉強した方がはかどるやろ？ 同学年やし」（曇りなき善意）という近衛嬢の提案を皮切りにあっけなく瓦解。文字通り退路もなく今に至ると

「それにしてもヒドイね、もしかしたらアスナよりひどいんじゃない？」

「む、失礼ね 私は」

なんだかんだと明日菜が否定しているがどっちもどっちの似たりよったり、五十歩百歩、つまり俺もバ の子と認定されてしまったのだ

「ならアハトもバカレンジャーの一員アルか？」

「んー、もう五人いるでござるからなー」

「じゃあれじゃない？金髪だからゴールド！」

「あ、ゴールドって後から出てくる6人目強い味方の事ですよ
日曜日にやっている レンジャーにも出てきます」

いや、そんな不名誉な呼び名は菓子折りつけてでも丁寧に返上するわ
それとネギ君、君は論点がずれていると思う…

「うー、いいだろー 勉強なんか出来なくなつて人間生きていける
もんなんだ」

これは俺の7年に及ぶ人生が証明している

たつた7年だがこれまでの生活は決して無駄ではない

……と思いたい

「そう、いい事言つたわ！アハト！ そうよ勉強なんか出来なくなつて
「しかし、一定基準に達していないのは社会的適合性において
も将来性に不安が残るのも事実です」？？……ゆ、夕映ちゃん、そ
うはいつてもね……」

またこのチビすけは小難しい事を…

アスナも何とか反論しようとするがこと論じるといふ行為において
この場のメンバーで綾瀬に敵う者はいないだろう

ちなみに俺もこの姿でここに来て十数時間、すでに体験済みなので
抵抗する気も起きない

そう、すでにこの地下に落ちてかなりの時間が経ち、今は時間を無駄にしないためにここで勉強をすることになったのだ。幸い教科書や筆記用具の類や果ては黒板まであるので教育の場としての環境は十分だった

思うにこれも学園長が謀ったことなのだろう。手出し無用といってこのように最下位脱出の為の糸口を提示しているのだ。なんと余計な……もとい甘い事を…

「あ、アスナー ちょうどよかった 勉強会の方はもう終わったん？」

「木乃香。うん、まあね、今は休憩よ休憩」

「休憩中かー、うーん…」

どうしたと促してみるとどうやら夕飯の材料で魚など足りないものがあるらしい

勉強会には木乃香も参加しているがみんなの食事を作るためにこうして一人早めに切り上げて料理をしてくれている。ほんとに五人＋は頭が上がらない状態である

「じゃあ、次の勉強再開まで時間もあるしみんなで食材探ししない？」

一気に上がる賛成の声

君達明後日はもうテストだとわかっているんだろっね？

いや、近衛だけに苦勞をかけるのも忍びないけどさ

「ネギ君もいいよね？」

「うーん、そうですね……後は夕食前の1時間分だけですからその分を他に分ければ大丈夫です さすがにご飯無しは大変ですから」

「腹が減ってはなんとやらでござるな」

「そんじゃ食材探し、行ってみよー！」

「「お ……！」」

かくして勉強そっちのけで始まる食材探し

こんな調子であと二日……

テスト当日は大丈夫なんだろうか……

翌日 テストまであと1日

「ふあゝ、んゝおわったー！」

「あはは、大きなあくびやねー」

「ほんと、そんなんじゃちゃんと聞いてたんだか怪しいもんね」

「いいだろ、小テストの成績はちゃんと上がってるんだから そう
いう明日菜はどうだったんだよ」

「?っ、そ、それは」

俺が反撃とばかりに明日菜にテストの点数で切り返すと途端にひるんで手に持っていた紙を後ろに隠す まわりこもつとするが明日菜は持ち前のフットワークで後ろをとらせない…どうやら意地でも見せる気はないらしい……が、

「お?6点アルか」

ぐるぐるとしばらく攻防が続くと明日菜の後ろに来た古菲がひょいと手に持つ紙を取り上げる

「あ、こらー!」

「ほ、アスナ殿も成績が上がってるではござらんか」

「いいから、かーえーしーなーさーい!」

小テストとは教科別に毎回の勉強会終わりに行う10点満点のテストの事だ

ちなみに昨日行った最初の小テストで明日菜の点数は2、4点を前後していたから確実に成績は上がっている。が、こつも恥ずかしが

るのはなぜだろう？

「あ、もしかして アハト君より点数低いの気にしてるの？」

「そ、そんなんじゃないわよ！」

してるのな…

なる、確かに俺の今日の成績は8点 初日に少しばかり小馬鹿にしてしまったこともあって少々ばつが悪いのだろう

なんだ、けっこうかわいい所もあるのな

「む、あんたもニヤニヤしてるんじゃないわよ！」

「グへっ!!！」

ぜ、前言撤回っ

突っ込みに手どころか足を出すようなやつに俺は何を血迷ってるんだ…それにしても痛い……

「フンッ」

そう鼻をならして立ち去る明日菜…
やっぱかわいくねえ

「あー、クソっ地味にまだ痛む……」

ぼやきながら手に持ったじゃがいもの皮をむく、あの後佐々木達がどこかへ行ってしまったので俺はこうして近衛と夕食の下拵えをすることに……といっても料理なんぞろくにやらない俺はこうして下準備くらいしか手伝えないのだが

「あはは、アハト君もすっかり明日菜と仲良しやねー」

どこがだ…

蹴られたわき腹がまだ痛む、前にもくらった事があるが身体が縮んでいるのと同年代と言う事もあって前のよりダメージは大きかったようだ

「んなわけあるか、俺は照れ隠しに蹴りいれてくるような女と仲良くなれるとは思えん！……っとホイ」

「はいな、ん〜そうやるか？あれで結構かわいいところあるんやで？」

むき終わったじゃがいもを受け取った木乃香が他の具材と共に手早く切って鍋に入れていくどうやら煮物にするようだが地下空間のサバイバルで煮物が作れるとはこれいかに？

「そんなもんかね〜ん、やっぱり俺にはわからん」

「そうえ？あ、ほらアスナってけっこう面倒見がいいんよ文句は言っても大抵は手伝ってくれるし一度こうって決めたらやり通す行動力もあって…あ、でも恋愛事には一途でちよっつと照れ屋なと

「ころもあるんやで？」

「あゝ、確かに……」

なんだかんだでネギ君の面倒もしつかり見ていて、いつの間にか同居人つてより兄弟つてみたいに仲良くなっていて あゝ、タカミチの事はまゝ、うん 確かに……見ている分には年下ながら微笑ましいと思えるな

「あれ？アハト君アスナが好き人知ってるん？」

「あ、いや ネギ君との見てると面倒見がiiiiってのもわかるなっ……まあ、行動力については若干過剰気味な気がするけどな」

「アハハ、まあ それも含めて明日菜のいいところやから」

確かに、彼女みたいな前向きにひたむきな……悪く言えば考え無しの無鉄砲だけど、ああいう即行動に移せる人が一人いると場の空気が賑やかになる事がある

手が早いのはどうかと思うがやっぱりあれも彼女の長所なんだろうと思いつつも素直に褒めるのも照れくさいのでそんなもんかなとそっけなく返してむき終わった最後のじやがいもを渡す

「ふふ、そういうもんや うん、下準備もOKや ありがとな」

が、その笑顔から見るに近衛にはばればれのように、顔が若干赤くなるのを自覚し 礼を軽く返して鍋を覗き込むようにして顔をそらす 醤油とみりんに砂糖が加わりほのかに甘い香りが鼻腔をくすぐる

この歳でこれだけのものが作れるのだから近衛の料理の腕は大したものだろう

ぐう

「「あ……」」

匂いをかいてみると俺のお腹が空腹だと自己主張してしまい、振り返ると近衛が口元に手を当ててこらえつつもくすくすと笑っていた

「っておい、なにも笑う事ないだろう」

「か、かんにんや あんまりにも食べたそうにしてたらちよつど」
ぐう」なんてかわいくお腹がなるんやもん」

「ったく……」

そんな顔されちゃ怒るに怒れないって……

「さて、まだ時間もあるし もう一品準備しよか」

「へ？まだつく」……「きゃああ ……！！！」

「「！？」」

今のは！？

佐々木の声！！

「近衛！ネギ先生を探して来い！」

「あ、アハト君は！」

「俺は佐々木を見に行ってくる！」

その後は返事も聞かずに走り出す

「っちい！うかつだった！！」

昨日の夜ぐるりとまわりを警戒しただけで少々気が緩んでいた
トラップでも引つかかったか？まさか他に侵入者でもいたのか？
ありえなくもない、見たところこの地下に蔵書されている本は知識
の無い俺でもわかるような魔法書がごろごろしている 学園外の人
間がここを狙ってても不思議じゃない

大事になってくれるなよっ！！

果たして現場で何が起こっていたのかというと……

泉で水浴びをしていたらさう佐々木が石像に捕まっていた

「ってゴーレム！動いてるし！？」

「アハト君 助けて っ」

「 っ、呆けてる場合じゃないか……ちょっと待ってるよ！」

長瀬と古が応戦しているみただけで相手が魔力駆動体じゃきつい極力一般人にばれない程度に魔力の出力を魔具で調整、一気に泉を駆けて拳にいつでも魔力を乗せられるように意識を持っていき…

「セーの、せいっ！！」

拳が佐々木を捕えた右腕の関節を殴打する瞬間に魔力を纏わせる

本来それが生物でなくとも稼働するものであるなら関節という物はどうしても軟くできている。人であってもいくら筋肉が太くならうと骨が丈夫になろうと関節だけは鍛えられない、まして相手は石の塊である魔力駆動体、横転させるにも重心は重く何よりも硬い、一般人を装う上でまぐれに見せるのなら肉質の多い二の腕や腹の狙うのではなく関節を狙うのが常套手段だ

「 っ てえ、硬すぎだろこいつっ！」

が、何事にも例外はある

魔力を纏った拳、魔力パンチ（今命名）は一般の魔法使いのそれでも岩を砕く位の力は持っている もちろん出力を絞っているとはいえ俺の拳も岩を砕く位の力を持っている。その拳をもつてしてものはじかれるという事はコイツの対物理処理の精度が高いという事だ

殴つてもグラつく程度……全開じゃないとはいえシヨックだな……

「まきちゃん　っ！？」「さ、佐々木さん　　っ」

どうやらネギ君達が来たようだ

自分の生徒が捕らわれている姿を見て怒りもあらわに一步前に踏み出し、杖を構えて……

………つて杖？

『光の精霊11柱！　集い来たりて　敵を射て！！』

「つちよ、ちよつと！？」「フォ！？」

慌てて止めようと声をかける俺と何故か声が重なる石像が、制止の声をかける間もなく……

「『魔法の射手！！』くらえ　魔法の矢！！」

………

………

「ま………」

「まほーのや……？」

………どうやら不発に終わったもよう………

あつつつぶねええええ!!

ちよつと先生、いきなり魔法とか危険なカミングアウトやめようよ！心臓に悪すぎるって

たまたま不発だったのと同じにいたのが事情を知ってるメンバーとその他数名（若干アの子）じゃなかったら二人仲良く魔法の国へ強制送還だぞ うおおい!!

『フオフオフオ ここからは出られんぞ もう観念するのじゃ 迷宮を歩いて帰ると三日はかかるしのう』

「ええっ」

「み、三日!？」

「それではテストに間に合わないアル」

石像が話す事実には衝撃を受ける生徒達

しかし、俺は別の事で衝撃を受けている……

先ほどの「魔法の矢」騒ぎから少し冷静になってみるとゴーレムの声が、気のせいかどこかで聞いた覚えが……

「み、みんなあきらめないでっ 僕の魔法の杖で飛んでいけば一瞬だから……ハッ!？」

「「キヤ つ!？」」（神楽坂と俺の悲鳴）

何を口走ってんだこのガキヤーツ!!!!!!

さっきので気付こうよ!もうイエローどころか二枚で退場だよ!強

制送還だよ!!

「こ、こらネギ!?!さっきから何モ口言ってるのよっ!?!」

「ま・・・まほーのつえ・・・?」

神楽咲が慌ててネギ君の口を塞ごうにもすでに重要な単語はで終わ
った後:

古菲の疑問の声に慌てて応えるにもフォローになっていない...いや、
あれでフォローできるってどんだけ臨機応変なんだよ

そして神楽咲の決意の言葉に感動しているネギ君...
うん、君はもつと反省しようね

「と、とにかく みんな逃げながら出口を探すのよっ」

つと、そうだ落ち着け、c o o rになるんだ まえばr...じゃなか
った

今はとにかくこの石像からみんなを守らないと他は一般人...に見え
ないのも交じってるけど俺はこいつらの副担任なんだからっ

『フォフォフォ 無駄じゃよ 出口はない』

.....やつぱり聞き覚えが...

こんなふざけた演出もあの人ならやりそうで否定できないのが怖い...

「あ!! みんな、あの石像の首の所をみます!」

「へ?」

「あ、あれはメル・・・何とかの魔法の書!？」

綾瀬の声に全員が石像へむけるとそこにはいつかの魔法書が…

「本をいただきます! まき絵さん、クーフエさん、楓さん!」

「OK! バカリーダー!」

「中国武術研究会 部長の力 見るアルよ ?」

「あいゝ ハイッ!!」

「ふお・・・!?」

古菲がゴーレムのバランスを崩し…

「よっ」「フォ!？」

連撃によって中に放り出された佐々木を長瀬が悠々とキャッチし離脱…

「やっ」

「あっ・・・」

助けられた佐々木がどこから取り出したのかりボンを伸ばし、ゴーレムの首元に乗っている魔法の本に器用に巻き付け奪う
この間実に5秒足らず
実に息のあった連携だ

そして、俺はと言つと……

「お、 ナイスコンビネーション」

背後に回った俺は死角から石像の頭上に飛び上がり、頭から落下する形で石像の視界を遮る

『なっ…お、おとよ…フオがっ』

おいおい、あんたまで俺の名前口走ってどつする……

危険な言葉が出てくる前にバランスの崩れているゴーレムの頭に両足をそえる

『ダメですよ学園長？学園の長が生徒の覗きなんかし…ちやつ！』

『フオ　　っ』

そえた足を軸に膝をばねにして飛び上がる

哀れ、バランスを崩した学園長もとい、石像は背中から地に倒れる…

とどめを刺したようになった俺はそのまま空中で身体をひねって着地

「んっ　　10点！！っなんちゃって？」

「おお、やるでござるな　アハト殿」

「いや、まぐれまぐれ」

「いやいや、なかなかのモノね　ヨシッ、ワタシと勝負アルよっ！」

「あほっ」
「アイタッ」

爛々としたやる気十分オーラを放出しながら構えを取る古菲の頭を軽くはたく
若干俺も調子に乗った部分はあるがそれでもこの娘は時と場合を考えられんのか…

「ここで戦ってどうする、脱出が先だ脱出が」

「三人とも何やってるですかっ 速く、こっちです！」

頷き返し、一応背後を振り返ると…

「つげえ！？起き上がる！！」

「みんな急いでっ」

若干遅れながらも即合流、
なるほど、バカレンジャーが体力と知力の振り幅がでかいとは聞いていたがこれほどとは…
素で魔力強化中の俺についてくるのだから脱帽物だ

「あ、ほら 魔法の本ゲットっ」

「よしっ 目的の本取ったからにはズラかった方がいいわね」

「ズラかるって……」

「なによっ」

「いや、ぬすつと猛々しいなと……うおっ！あつぶねえな！！」

言いきる前に飛んでくる本を片手でキャッチする

俺が言つのもなんだがもう少しものは大切にされた方がいいと思う

「当たり前でしょ 当てようとしたんだからっ」

「て、てめえ……」

「はいはい、そこまです 今とはかく脱出を、あのゴーレムのあわてよう きつとどこかに地上への近道があります」

『で、出口は見つからんと言つとるじゃろーがっ あきらめて捕まるのじゃ』

「確かに……」 「またなんつう 分かり易い……」

あれだ、墓穴を掘るっていうか「出口は他にもありますよ」と言わんばかりの狼狽っぷり……

「あつ 見つけた 滝の裏に非常口です！！」

「それよ！！」

案の定それは簡単に見つかった……ってか見つけさせられたようないや、それよかなんでこんなあからさま……

見ると石でできた壁にプレートがはめ込まれて扉のようになっている上を見ると確かに緑色に発光している非常口のマークがある

『まっ……待つのじゃ……っ』

「キヤー」

「早く、早く中へ……」

「「あ もう、しつこい（アルっ！）んだよっ！」「
『あだっ』」

偶然重なる蹴りがきれいにヒットし、石像は滝壺へと落ちていく。
あの図体だ、一度落ちたらそうそうあがれまい

「お、やっぱりスゴイね」

コイツ、やっぱりお気楽なだけじゃ？

顔に大きく戦いたいと書いてあるっていうくらいウズウズとしているのがわかる

もちろん無視無視……

「それはいいから、オイ早く……」扉に問題があるのよっ」「ハイ？」

問1 英語問題 read の過去分詞の発音は？

「そんなこといきなり言われても」

「ムムツ……！？ いや……ワタシコレわかるアルよ！」「
「え！？」

「答えは「red」アルね！」「
ピンポーン

「おおっ……！？」

「ひ、開いた〜!？」 「みんな 早く中へ - !」

「うわっ 何これ!？」

通路を超えた先にあるのは縦長：長すぎる縦長な空間に申し訳程度な階段が設置されている

遙か高いそれはまるで旧約聖書創世記で有名なバビルの塔を内側から見たように見える者に登る気力を失わさせる

「と、とにかく登るわよ!」

駆けども駆けどもつづく階段：見上げる頂上は光にかすんでなお遠い

「あっ・・・また石の壁と問題が・・・？」

問2 数学問題 下の図でXの値を求めよ

「わっ・・・今度は数学問題じゃんっ」

ドオオン

『ならぬならぬっ ほ・・・本を返すのじゃ〜っ!』

「うお、 って追って来たよ!？」

「そんな、 滝壺に落ちたのに〜」

「あーっ 水が流れ込んできてるっ!？」

見ると下層の壁をあの手像がブチ壊しながら現れたので穴から大量の水が流れ込んでくる

さらに最悪なのはでかい図体に対し階段が細く、そこを無理やり登ろうとするので壁が半壊してゆき結果その下は水による浸食と壁の破壊でほっておいても死ねる……つまり上に逃げるしかない

「おいおい、退路もなしかよっ」

『さて』

「あや、登ってくるえ……っ」

「あーん、もう、しつこいえーっ」

「早く早くっ」

「うーん、X=46°かな？」

「って、うそ」

最初はミラクルかと思われた古菲、長瀬の解答に続くようにその後も次々と問題を解いていき着々とゴーレムとの間をあけていくバカレンジャーの面々

「す……す……」

「アスナとマキエまで答えられるなんてこの魔法の本ほんものアル……」

「……悪かったわね……」

石像との差も離したり縮んだりと変化の無い攻防を繰り返して1時間余り

その変化は唐突に表れた…

「あつっ」

「夕映ちゃん!？」

そう、綾瀬が通路に延びていた木の根に足も取られて転倒し、足をくじいてしまったのだ

「くっ……こんなところに木の根が……っ!あ……足をくじいたようです」

「ええ〜っ」「大丈夫!？」

心配して駆けよったネギ君が背中を貸すも…

「僕がおぶっていきますから…」

ぺちゅっ

おいおいっ

「たくっ ほら」

さすがに他の女の子にという真似もできないので代わりに俺が背負う事にする

若干恥ずかしがっているようだがこの際細かい事は抜きにする。緊急事態なのだ

「あ、アハトさん?」

「いいから、黙ってる舌噛むぞ」

「はいっ…」

「お願いします アハトさん」

「おう、ネギ君も早く先行きな！」

しばらくネギ君が先導し、綾瀬を背負った俺を古菲と長瀬がサポーターする形で駆けあがる

どれくらいかけのぼっただろうか？

階段を睨みつけながら登っていると不意に段差が途切れ、平坦で小さな広場が視界に入る

「ああっ みんな見てくださいつ！！」

「地上直通のエレベーターですよっ」

「っ、これで地上へ帰れるの！？」

これまたあからさまなエレベーター、
『1F 直通』と書いてある扉にめまいがする…
申し訳程度に『作業用』と書かれたラベルが貼ってあるが、こんな
地下にだれが作業に来るといふんだらうか？
このらせん階段を往復？……………勘弁願いたい……………

「みんな急いでっ 乗って乗ってー！」

外でみんなを誘導しているアスナを追い越しエレベーター内に綾瀬
を下ろす
下ろした際に挫いた足くびを確認してみたがけっこう派手に晴れて
いる…

「下ろすぞ、綾瀬」

「あ、はい……………ありがとうございます、アハトさん」

回復系の魔法は……………さすがにこの場じゃ使えないか…
すまんがもう少し我慢してくれ

「気にすんなって それより早くドアを」 B O O O O O O O O O
O！！ 重量OVERです 『へ？』

「「いつ……………いやあああああーっ」「

（（大混乱））

『フオフオフオ 追いつめたぞよ』

「キヤー」「追いつかれたアルっ」

ここまでかつ

「あ、アハト君!？」

「女子の体重なんて大したことないんだ、俺が降りれば……」

「ちょっと、それじゃ意味が無いじゃない!」

と俺の手をつかんで俺と神楽坂が出たと途端ブザーが鳴り止む…

「「へっ」

……

「……神楽坂……、怒るなよ?」

「な、何よ?」

「お前の体重……ぶぎえらばあっ」

「お、女の子に何聞いてんのよ!」

質問を聞き終わる前に殴り飛ばされエレベーター内に押し戻される
俺……

「今のはアハトが悪いネ」「ニンニン」

「そんなことよりも早く何とかしないとこっち来るよ〜っ!」
ハッ!

「って、ブザーが鳴らない? 神楽坂!」
「なによっ 文句なら…! いいからっ」 ちよ、ちよっ!」

俺一人分の体重がセーフなら神楽咲一人くらい大丈夫なはず、単純な計算だ

「ちよっど、あんたまさか!」

「いいから、さっさと乗れっ!」

「あ、アハトっ!」

手を思いっきり引き、すれ違うように神楽坂が俺の代わりにエレベーターへ入っていく
振り返って手を伸ばしてくるが今度は捕まらないようにバックステップを踏む

もともと学園長が仕組んだ事態だ、後始末はどうとでもなるだろう
それにもし戦闘になっても俺一人なら遠慮なく戦える

「じゃ、また上で会おうぜ」

「ちよ、アハト」 BOOOOOOOO!! 重量OVER
です 『……………」

「『えええええっ!!!!』」

「アスナっ　いくら地下が快適だったってそんな太っちゃうなんて……」

「失礼ねっ　そんな太ってないわよ!!」

「アハトより重いなんて……ご臨終アル、　南無……」

「いや、クーちゃんそれ使い方おかしいからっ」

「アスナ……」

「木乃香く、何とか言っってやってーっ」

「ダイエットには協力するえ？ウチがダイエットメニュー研究するからっ！」

「ああ、木乃香まで……」

哀れ、神楽坂

しかし、体重一つでここまで地獄絵図に……むじい

「……いえ、やっぱりおかしいですっ！」

「夕映ちゃん！分かってくれるのねっ」

「いえ、この場合アスナさんの体重は関係ありません」
「へ？」

「説明は後です！今は……こうですっ！」

そう言っって神楽坂の手にあつたメルキセデクの書を石像めがけてブ
ン投げる綾瀬

一同、文字通り目が点になる……

「」「あ!!」「」「」

「魔法の本が！」

『フオツ!?!?』

『 ピンッ 重量 OK 』

「動いたっ」

動かなかったはずのエレベーターは綾瀬の機転により稼働、脱出は成功したと聞いていいだろう

が、機内は空気が重く、みんな不満顔だった：

無理もないか、あんだだけ苦労した魔法書がパー、だもんな俺でも軽くシヨックだし

「そ、それにしてもさっきのはどういう事？」 「なんで動いたネ？」
「夕映？」

一同がみんな綾瀬に視線を集め、説明してオーラを放つ
一見針のむしろにも見ええない状況ではたして綾瀬は堂々と中央に立っていた

「はい、説明しますと 普通に考えて いくら快適な空間で運動量

も減っていたからといって二日程度では体重はそこまで増えませんが、ましてこのエレベータは満員どころかスペースは十二分に余っている……、加えて今回偶然にも3パターンのケースが検証できました」

「3パターン？」

「アスナとアハト君が出た時、アハト君が乗った時、アスナが乗った時やね」

「そうです」

「「「??????」」」x5

「そうか！」

「ネギ先生はわかったようですね。そうです、アスナさんの身長は160と少し、アハトさんの身長は若干低いとはいえ2、3cm程度のモノ、物理的に考えてアスナさんがアハトさんより重いという事はまずあり得ません。ここでまず振り返るのがなぜあの空間が快適だったのかという事で……」「あゝ、夕映?……」

「もうちょっと簡単にお願ひできない？」

「……………」

うつわ、すごい嫌そうな顔……

いつか俺も綾瀬の解説を止めたらこんな顔をされるのだろうか……

……気をつけよう

「コホンッ……つまりですね重量制限がOKになった時はアスナさ

んが外に出た時、加えてアスナさんがアハトさんより軽いとなると体重以外の要因、つまり持ち物……あの場では制服は皆一緒なのでこれは除外、つまり衣服の類ではアウトにはなりません、貴金属類のアクセサリーも通常特殊なものでない限り誤作動は起きませんので除外、消去法で魔法の書が原因となります」

「「「おお~~~~~!!」「」x5

「多分、盗難防止用のトラップの一つやね、特殊な処理をしない限り持ち出しができませんようになってるんや」

「ってことはつまり？」

「うん、はじめからあの本は図書館島の外には持ち出せん言つことやね」

「ええ　　っ!!」

「つく、苦勞して結局こんな……」

「骨折り損の草臥れ儲け」

「あははっ」

「み、みなさん元氣を出して！ほら、地下で勉強しましたから効果はあるはずですよ」

「そ、そうね……」

「そっじゃなきややってらんないよ〜」

「ま、なんにせよ」

「…そうね」

「なんにせよっ」

「脱出成功だ ツ!!!」

こうして図書館島の2-A+の長いテスト期間が終わった…

がしかし！

いくなればところがどっこい！

あ！テストはまだ終わっていないかった（当たり前）

頑張れ2-A、

頑張れバカレンジャー

先生はきつと教室の外で見守っているっ！

たぶん……

(後半へ続かない)

おまけじゃないおまけ

『 終了ー筆記用具を置いて 』

終わったか…大丈夫だったかなあいつら…

今俺鳴守 音来は中学生ボディから青年体へと変化している まあ、構内をうろつくのにも中学生サイズ、しかも男子中等部の制服では下手したら警察に御用だ…

後はこの身体のが落ち着くし、背も高いので何かと便利だ

「んゝ、いないな…」 『アイン、そっちはどうだ？』 「

『 予定通り上階から降下、現在は職員フロアですが対象の影はありません 』

『 了解、こちらも影も形もなし 今は2階の特別教室の前だ……何が可笑しい…』

『 …っ いえ、別に…皆さん調子の方はどうでしたか？』

ぜってえー勘違いしてる

念話で相手の表情が窺えないとか関係なくあいつがむこうで笑いをこらえている姿が目には浮かぶようだ

そんなんじゃねえってーのっ

「ったく、『あ うん、優秀な新任教師がついてるからなあい つらなら大丈夫さ』」 「

先ほど、試験開始してしばらく教室の前にいた彼とその場に漂う魔力の残滓から何があったかを推測する

「 花卉と風の系譜の魔法か 」

『 リラックス効果のある魔法ですね 彼らしいといえらしいですけど 』

「 確かに……って聞いてたのかよ…… 」

『 リンクがopenのままですから ふふっいい先生になりそうですね彼…… 』

『 前途有望……時々多難……かな？……けど、概ね同感だ 』

クスリつと念話越しに笑い合いながら昨日までの事を思い浮かべる確かにまだ危なっかしいところはあるけど人一倍責任感があって決して投げ出さない他人に素直に手を差し伸べられる素直でいい子だ……

『 まあ、あれだ……、 『 立派な魔法使い 』 の卵としちゃ 上出来だ ったんじゃない？ 』

『 クスツ……素直じゃないですね 』

『 うるせえ ツ 』

ほんと、できるならこの魔法使いの卵をこのまま大人の事情に染まってもらわずまっすぐ育ててほしいものだ

『 そのためにも…… 』

「おお、遅刻組の答えはそれかね？」

「おっと！？学園長」

『腹黒くくてムツツリなおじいさんにはお仕置きが必要だな』

「同感ですね……」

いつの間にか横に来ていたアインと共に目の前のターゲットに接触を計る

「おっと！学園長探しましたよお？この間の件で重要な問題がありました……」

『話は学園長室でだ……何のことは……大方見当がついてるだろ？』

「っおお、音来君。ご苦労、じゃがわしはこれから遅刻組の採点で手が離せなくての……」

『はて、何のことやら？ワシ、ナウンニモワルイコトシテナイヨ』

「いえ、もともと遅刻組の採点は担当教師が採点することになっていましたから問題はないです。それよりもこの案件を放置すると……」

『ネタは上がっています。無駄な抵抗はやめて、Now, the right is turned to and, from now on, we show you to hell.』

「後でそちらもつかうわい、それよりも大事な孫娘のクラスの一

大事じゃ 老い先短いジジイとしては心配で心配で…」

『いや、ワシ英語はさっぱりで……』

「ならばなおのこと、まさか学園長自ら不正などしなれないと思います
が…身内がいるとそういう目もあります。どうか自粛を……」

『訳しますと…』さあ、右を向いて今から私達があなたを地獄にご
案内します。』です。ご理解いただけましたか？』

「ひよっ、そ、そんなことするわけないじゃろっ」

『い、いや、最近耳が遠くなつてのゝっすまんがまた今度に…』

「ですよね、では新田先生。ご苦勞をかけますがウチの遅刻組の
やつらの採点お願いします。」

『じゃあ、俺がむこうで世話になつてた闇医者呼びますから。もち
ろんこちらの予定が終わつてからなので耳どころか傷が何故か増え
てて慰謝料がかさむかもしれません……大丈夫、腕だけは確かで
す。』

『ちよっ！！…』

「言つておくが、採点が甘くなるという事はないからな」

「いえいえ、ほんの気やすめです。あいつらが頑張つて勉強してた
のはよく知つてますから」

「ふむ、……鳴守君もなかなか指導者が板についてきたようだね」

「いえいえ、これも先生方の指導のおかげです」

「ははっ言つようになったな。まあ、私も答案を見れば努力したか

そでないかはわかるつもりだ。結果、楽しみにしていいと思うよ。」

「ありがとうございます！」

普段の眉間に皺を寄せた顔ではなく、温和な表情を浮かべて去っていく新田先生に深く頭を下げる。うん、生徒からは厳しいと嫌われがちけど……生徒思いのいい先生なんだよな

『さてっ』

「あ、ワシ用事を……」

「Please turn to back . . . school length (後ろを向ってください、学園長)」

「あ、いやそのお」

「ほんと、探すのに苦労したんですよ？朝から学園中を探しまわって……居場所を知らないと他の先生達にも迷惑かかるんですよ？全く電話一（念話）も切って」

「いや、ほら……ワシにだって一人になりたいときくらい……」

「あ、そうそう……コレ、学園長室の机、つまり学園長の机の上にあったのを拝借したんですが……なんですコレは？」

スーツの内ポケットから取り出したのは一枚の便箋そこには大変達筆な字でこう書かれていた……

ちょっと外の空気を吸ってくる、探さないでね？ by 学園長
近衛 近右衛門

くしゃっ

「ふざけてんのかっ？」

「ひよあ！ あ、アイン君この手は？」

押しつけるクシャクシャの便箋を避けようと後ろに下がった学園長の両肩をアインががちりホールドする

「……………申し訳ありませんが、今回ばかりはMasterと同意見ですのでさあ、I will go to hell.（学園長室まで行きましょうか）？」

抜け出せない学園長の右肩に手を置き腕をとる、アインが反対を…
ちよつど俺達と学園長が背中合わせになって引っ張りあげられている状態だ

「いや、コレっちよつと、本気で、痛いんじゃないがっ」

「アイン、消音と人払い…」

「了解、カンフアインド『密閉・消音プログラム起 スタートアップ』動』」

「おっい…」

「じゃ、行きましょうか？」

「いや、あの〜」

「いまさら拒否権なんかあると思わない方がいっそ楽になれるですよ」
「？」

「い、いやあじゃ〜〜〜〜〜」

絶叫はどこまでも響き渡るほど大きかったがそれを聞いたものは皆無だったという……
情状酌量の余地もない

「じゃ、罪状を読み上げようか？アイン」

「はい、救出と言いながらの契約外活動の強要と時間延長、学園側の執行者への攻撃……」

「ま、まった！攻撃とはなんじゃそんなもの……」

「地下へ降りる最中、上空からの重力球による強制落下……」
「精霊の判定から学園側の関係者と断定されました……否定要素は？」
「？」

「……………な、ない…続けておくれ……………（あ、あやつ…やりおつて…
っ）」

「e t c . e t c . e t c . e t c . e t c . e t c 救助対象者、内一名の魔力封印についての報告ミス、Masterはこれがかかなり重いと考えてるようですが、……………私個人としてはこちらの方が…学園側が用意した遠隔操作型のゴーレムによる女子生徒への視姦行為及び、猥褻行為です……………精霊が判定した操縦者が……………学園長と出ましたが……………何か反論、弁解、無駄な行為等がありますか？」

「……………」

「おつかつしいいですねえ？『学園長』と言えば学び屋の長、本来教職員、学生等の手本となるべくある人がそんなまさか……………ねええええ、『学園長』？」

「……………」

問いかける学園長は額もとい、その長い頭からだらだらと滝のよう
に汗を垂れ流している

うそ発見機も真偽の魔法も必要ない、誰がどう見ても明らかだ…

「なければこれを肯定とみなし、刑を執行させていただきます」

「ま、まっつてくれ!？」

「……………何か？」

「孫の、木乃香の事が心配でゴーレムを動かしたんじゃない！このお
りやましい思いは……」

「じゃあお孫さんを証人として召喚しますか？」

「え？」

「あ、この手の契約初めてですか？大丈夫ですよ。文字通り召喚さ
れる証人は精霊による記憶の複製で本体には影響ありませんから……
……ただ、こんな事知ったら近衛はひどく軽蔑するでしょうね、お
じいちゃんの事……幻の近衛は何て言うのかな？」

「！？」

「……どうしました？召喚しますか？反論を取り下げますか？」

「……と、取り下げる……」

「……では、判決に移ります……Master」

「あいあい、……ウオツホン……『契約の精霊よ 今ここに 掟の法
を敷け 違反に罰を 逸脱に裁きを 逃走には天の楔を かの者に
罪と慈悲を 判定！』……アイン」

「確かに……読み上げます……『此度の判定・本件については対象の
立場から罪は重いモノと断定、よって借金返済の大幅減額又は執行
者側からの提示する懲罰によって無罪とする。なお、どちらにおい
ても対象者の身の破滅、死に直結するものは不可とする。』以上」

「……のう、ものは提案なんじゃが今回の罰借金返済の方に……ホ
ラ、ワシにも選ぶ権利が……」

「……そうですね、確かに個人の自由は尊重されるべきものです。ええ、同意見です」

「じゃ、じゃろっ?」

そう、確かにそれは正論だ人にはそれぞれ選択の自由や意思、意見の自由などと多くは束縛してはいけないものだ

が、その理屈なら……

ガシャンッ

「え?」

「じゃあ、撃ってもいいですか?」

「ソレモジユウデース」

「ちよっ」

俺の許可を得て遠慮なく発砲するアイン

そう、個人の自由が尊重されるなら……

それはこちらが選ぶ権利も尊重されるという事だ

吐き出される薬莢の数と火を噴く銃弾の雨には手加減の色も見えなかったように思える。(まる)

うむ、悪は滅ぼさなくてはならんとデス

ちなみに、2 - Aの試験結果はというと平均点が81.0点!0.2点の差で何と2 - Aがトップという誰も予想しなかった結果に終わる。

もちろん障害、問題等も何もなかったのでネギ君は無事正式採用されたそうなの

めでたし、めでたし……

追記

その後、学園長室に報告に来た魔法先生が燃え尽きたように真っ白になった学園長を発見して大騒ぎになったそうなの(合掌)

取立13回目　く大脱出！の前に大ピンチな先生く（後書き）

となりました。ええ、お前もつとまとめろよつとか言う声が聞こえてきそうでびくびくしているトントンです。

はい、これでも削った方なんですが…何しろ完成当初は20000字を軽く超えてしまつて…ええ、おまけもおまけと言えない長さに（笑）

まあ、おまけをかなり無理やり削つたので若干しゃべりが多くなつてしまいました。が、仕様ですw

で、今回は主人公とバカレンジャーの絡み等を多くしてみましたが見直すとあれですね古菲とか楓とかかなり出番が…ま、まあ今後は出番も増やす予定です。

で、この後エヴァンジェリン戦に突入する前に3話ほど書き上げているんですがどれも10000字を軽くoverしています（汗小分けにした方がいいですかね？もし10000も一気に読んでらるるかボケナスウツ！！みたいな意見があつたら小分けにしようと思います。が、なにぶんエヴァ編も早く書きたいので悩み中です。ご意見がありましたらよろしくお願いします。

あ、追加連絡です。

申し訳ありません！学園祭編の後編が先に完成してしまいました！

（笑笑）

いや、ほんと　主人公の過去エピソード（修学旅行編で明らかになる予定です）が固まつたらこう『ピキユイン』と浮かんで脱線してしまいました。もう苦笑しか出来ない浮気っぷりです。

それと今回で文字数が105000越え、PVも105000越えまじか、なのでニューヨークが10500超えたらお蔵入りになっていた新年明けましておめでとうように作つてたおまけと一緒に予定の

予告としてちよびつと公開します。ええ、激しくネタばれです（苦笑）そうですね、区切りが良くなるようにエヴァ編前の三話分が投稿し終わったら出しますのでお楽しみに〜！

ではあとがき長々と失礼しました。久しぶりにいつもやっていた言葉で締めをば、

次回またお会いしましょう。再見っ！

取立14回目　く先生の春休み、もとい先生の休日なお話。前日編く（前書き）

はい、14話投稿です。

今回も宣言通り長いです…

エヴァンジェリン戦の繋ぎに書く予定でしたが思いのほか手が進んでしまつて、本当に申し訳ない。

まあ、長いので前書きは少なく、短くこのぐらいでは本編の方をどうぞ！

取立14回目　く先生の春休み、もとい先生の休日なお話。前日編く

ネギ君の正式採用が決まってからしばらく、終了式もそこそこに教室は戦場だった

といつても戦場では少々語弊があるかもしれない、だが騒がしいという意味では間違いではないだろう

中にははっちやけ過ぎてバニーのコスプレで参加している生徒まで出る始末だ…収集に苦労したのは察してほしい

そんな騒がしいクラスも終了式が終われば静かなもので
といつても肝心の生徒がいなければそれも当り前なのだが……

「おや、鳴守先生暇そうだね？」

「瀬流彦先生。あゝ、実際暇かも……」

「あはは、そんなだらけた格好しているとまた新田先生に怒られるよ
この若干つつすいーオーラっていうか目がキツネ目な先生は瀬流彦先生。教師としても魔法使いとしても比較的ベテランが多い麻帆良ではかなり若い先生。年の割には優秀らしいが一緒に警備などであ

った事はないので実力のほどはよくわからん。が、年齢が若いという事もあって先生達の中では一番交流が深い先生でもある。まあ、むこうから見たらこっちは『成人体』なので年齢が近しくて親しみやすいのだろう。実際俺が傭兵という事と実力テストではっちゃけ過ぎた所為か敬遠されがちだった着任当初で話しかけて来たのはタカミチを除くと彼だけだ。

「ん、わかつちやいるんだが…この暇の物量に押し流されている俺がいるわけですよ、ハイ。」

「また訳のわからないことを……」

こうして他愛のない話を投げかけるのもしばしば、彼も手慣れて来たのか出会った当初の緊張はすでにない、というか適当なあしらい方まで心得て来たよう。最近はずまらん…

「今年は補習組がないからな」

「ああ、そういえば今年は2-Aが異例の成績トップだったね。よかったじゃない」

「だからなんだよな、ほら、この間の中間と学期末は補習組がいてんやわんやだったから」

「あ、なるほど……」

「今までだったらこの時期学園に缶詰めでしたからねー、予定が繰り上がって明日明後日に空きができたって……」

「はは、ネギ君様々だね。いいじゃないか、こう教師をやっていると中々余暇はないだろ？いい機会だからゆっくり休めばいいじゃ

ないか」

そう、何よりそこが問題なのだ

「それなんですけどね…瀬流彦先生、真剣な質問です…」

「何だい？改まって」

「じ、実は…」

「実は？」

俺のいつになく真剣な表情に目元に力が入る瀬流彦先生、なんとなくかいつももの曲線的なキツネ目が心持ちキリつとしたような感じがしなくもない…多分

そして瀬流彦先生が目で促したのを（？）を確認して俺は言葉を紡ぐ

「…休日ってどう過ごせばいいんですか？」

「…はい？」

ナニイツテンノコイツ的な顔をされたがこっちはかなり真剣だ

そう、何を隠そう俺は休日をどう過ごすかで悩んでいたのだ

俺は魔法世界で過ごしていたころは幼い頃から修業の日々で自分が拾われてジジイの…認めるのはしやくだが養ってもらっている手前遊ぶという行為に抵抗があった。早くに傭兵稼業に手を出してからはさらに修行に打ち込み、借金が出来てからは返済の為に仕事を増やし、また借金が増えていくというサイクルの日々。

仕事休みといつても強くなるために修業に専念していたので当時の休みの過ごし方は寝るか魔法の鍛錬のみという非常にバリエーションの無い日々を過ごしていた。

「麻帆良に来てから趣味でも探すかと思ってたんですけど教師って意外と暇が無くて、俺は副担任でしたけどほら、高畑先生の時は彼出張が多かったし、ネギ君はまだ書類関係とかまだ不慣れだったし……ん？瀬流彦先生？」

ふと気が付いてみると瀬流彦先生がフルフルと震えている
はて、何か怒らせるような事言ったか？

「……………音来君っ！……」

「ハ、ハイ!？」

「明日はしっかりと休んでいくといいぞっ そうだな街に出てみるのもいい、女性との出会いがあったり、お近づきになったり……………」

「あの……………」

ダメだ

なんか涙腺に触れたのか知らんが涙がきれんばかりに話す顔は少々、いやかなり気味が悪い
声をかけるも何やら自分の世界に没頭してしまったようで……

これが無ければいい先生なんだけど……
しょうがない、他の先生にでも聞いてみるか

CASE 1 葛葉先生の場合

「あら、鳴守先生。………んー、休日の過ごし方……失礼ですけど鳴守先生にはガールフレンドなどは……ってそうですよね。本当は10さ、って10才!? ああ、まずいっじゃなくて……まあ、今のは聞かなかった事にしておきます。プライベートな事を聞いたこちらが悪かったですし。え? 敬語? ああ、私はこれで標準なので気にしないでください。それで、えーと 休みの過ごし方でしたね……私は休日はショッピングなどを……後は先生のクラスに桜咲刹那 という娘がいるでしょう? 彼女の修業を見たりしてあげますね。他の先生も誰かしら面倒を見てあげていると思いますけど、そうですね修業というのもダメではないと思いますよ? ただ誰か他の人で行うだけで全然違いますから、誰か誘ったらどうですか? ……? ……すみません、生徒が呼んでいるようなので、途中でごめんなさいね。今度また刹那の修業を見てあげる予定ですからその時は先生もどうですか? ふふっではまた」

終了

候補1: ショッピングor修業?

CASE 2 神多羅木の場合

「む、鳴守君か、今日はネギ先生と一緒にじゃないのか? ……っとそうだな、いつまでも子供扱いじゃ彼に失礼だな。それでわざわざ喫煙^{こん}所に何の用かな? 確か鳴守君は煙草を吸わなかっただろ? ……: ……ほう、休日の過ごし方か……: そうだな、私も君ほどじゃないが魔

法の鍛錬が余暇の過ごし方だったからあまり知っているわけじゃないが、行きつけのコーヒーショップで本を読んだりしているな。ん？私が本を読むのは意外？ 君はずいぶん正直にものを言うんだな いや、いい意味の方だから気にしなくていい。そうか：まあ、無いなら無いで趣味探して街に出てみたらどうだ？ 麻帆良は広いからな、お気に入りの店で過ごすのもなかなかいいものだぞ？ っと、すまんが時間だ、いや うちの学年は今年で卒業だったからな、来年の業務調整で話し合いがあるんだ。じゃ、また。ま、せっかくの休日だゆっくり休めよ」

終了

候補1：シヨツピングor修業

候補2：趣味探し

- CASE 3 ガンドルフィーニ先生の場合

「鳴守先生？ どうしたんだこんな廊下の真ん中で、何か考え事とか？……………何？休日の過ごし方？ それはまた：変わった悩みを持つな君も…私の場合か？うん、休日は娘がどこかに連れて行ってくれとよくねだってきてね、ほぼ家族サービスで消化されてしまっよ。ははっ ー、だけど君の場合は魔法^{マジック}世界の出身だったからな……………そうだな、家族や友人がいれば話は早いんだが：そうだがイン君とは仲がいいんだろ？日頃の感謝で何か買物に一緒に行ってみては……………何？あいつとは従者と主だから？ ー、私から言うのは無粋というものだろうがそれだと彼女があまりにも……………いや何でも無い、忘れてくれ。そうだな、自分でわからない時はだれか他の人を誘ってみるといい、これを機会に交友を広げるのも

いいだろう。ん？もう行くのか？…そうか、すまないな。あまり力になれなくて。それじゃ、アイン君にもよろしく言っておいてくれ」

終了

候補1：シヨツピングor修業

候補2：趣味探し

候補3：誰かを誘う

CASE 4 高畑先生の場合

「お、音楽君久しぶりだね。え？僕がよく出張するから？ はは、いやー君が副担任だった時はおかげさまで助かったよ。で、何か用があったんじゃないのかい？……………休みをどう過ごすか、か…ん、これは僕もちよつと修業修業で仕事って似たような人生送ってきたからな。はは、それを言われると痛いね。恋人とか結婚とかは考えた事無かったからな、ん？有名人だから引く手はあるだろつて？ いや、機会があるわけでもないしな。それにほら、僕だと仕事でいろいろ飛んでくから中々ね？……………んー、つらいつて考えた事はないかな？ほとんど習慣化してるし。あ、そうだこの間学園都市を歩いていたら卒業生が店を開いていてね。新しい発見もあつたりするし何よりここは広いから散策するのもいいかもしれないよ？一教師の休日くらいじゃまわりきるのも大変だよ。あははっ

その後30分程雑談

終了

候補1：シヨツピングor修業

候補2：趣味探し

候補3：誰かを誘う

候補4：都市散策

調査中断

ん、こうしてみるとみんな休日の過ごし方が似たりよったりだな
アドバイスをもらった中だととりあえず町の方に出るのは確実か？
問題はだれを誘うかだけど………やっぱアインか？

というより俺の場合は交友範囲が極端に低いのが原因なんだが

まあ、それもある意味しょうがない。同僚である先生方は俺から見れば若い人でも2倍の年齢差がある、年配の人なら3、4倍はざらだ。こうなると交友という関係を築くのはかなり苦労する。相手は知らないが実は10歳の身では自分の方から無意識に線を引いてしまう。

その他となると学生だが…教師が自分の生徒と街を歩いてもいいものだろうか？

いや、世間一般的にそこまで生徒のプライベートに介入するのはどうかと思うし、年齢を合わせて…と下の学年に担当はいないがもし一緒に歩いていたら即、警察にご厄介になるだろう……
この年で　コン疑惑で逮捕なんてイヤ過ぎる…

その他で同年齢といえばネギ君だが彼にはなんでこうなったのか、

最近純度100%に近い憧れのまなざしを向けてくるので正直居心地が悪い…俺なんかしただろっか？

書類の処理を肩代わりしたり、慣れない時にアドバイスをやクラス内の喧嘩の仲裁とかしかしてないと思うんだが…

まあそんなわけで知り合いというにはいるがはたしてプライベートに誘える友人はいるのかというとNOと答えるしかない悲しい自分がいる…

「は〜〜、どうすっかなー、ほんと…」

「あ、音来さーんっ」

「ん？」

ため息をつきつつ適当に歩いていたらどうやら学生寮に戻ってきていたらしい、管理人室の前には裕奈+三人のいつもの運動部四人組が立っていた

…というより最近女子寮の中に家があるとはいえ抵抗感が薄れて来たな…無意識で入って行くなんて…考え込んでいた事もあるんだろっがさすがにこう、シヨツクな部分がある

「どうした？部屋の前でそんな大勢？」

「ちょうどよかったー、誰もいないみたいだし、アインさんに連絡もつながらなくてどうしようかと思ってたんだーっと思っただ、えっとな 私達の部屋でみんなで夕食を作ろうとしてただけ水道の調子が悪くて…」

「なるほど…それで困って管理人室に、亜子達の部屋は使えないの

か？」

「そ、そうしようにもウチらの部屋一昨日からガスが使えなくなつてて…」

「そうそう、で 外食ももつたないから私達の部屋で料理しようと思つただけど」

それはまた不運な…

ん、確か昨日アインが生徒の部屋でガスが使えなくなったから業者に連絡取つてたな…確かついでに他の部屋も点検するとかで、今度は水道がと…なんというか、大丈夫なのかこの寮？

「は、それで…：…なんというか大変だな。うし、ちょっと待つてる 今工具一式持つてきてやるから」

「え、ええ？音来さん水道直せるの！？」

ん？そんなに驚く事か？

「これでも前住んでいた所じゃ自給自足つていうか大抵の事は自分でやってたからな、専門的すぎるのは無理だけど点検や応急処置くらいなら問題はないさ。」

「そ、そうなんだ…」

なんか若干顔が引きつっているように見えるがどうしたんだろう？まあ、気にしてもしょうがないか

ガスもそうだが水道が使えないと生活は不便すぎる。ガスなら食事は電子レンジで何とかなるご時世だ、贅沢言わなきゃ何とかなるだろう。風呂もこの学生寮には名物の大浴場もあるので問題はない、逆に水が使えないとなると人間の生活上とても困る。

さっさと見てやるとしますか…

先ほどまでの悩みを頭の端にうつちゃって工具を取りに俺は管理入室に入る

「んつと手袋、工具箱、工具箱、ゴム管、防水テープ、金ブラシ……まあこんなもんか？」

事務用の作業着に身を包み工具一式を確認する。修理といっても俺ができるのは点検と応急処置くらい、本業が来るまでもってくれれば御の字、まあ直せるならそれに越したことはないけど

「おし、おまたせー…あれ？裕奈はとまき絵は？」

またせるのも悪いとさっさと用意を済ませたつもりだったが、そこにいたのは亜子とアキラの二人だけ

「あゝ、えつと…」

「二人はちよつと部屋を片付けてくるって、まき絵はその手伝いで」

「ああ、なるほどね」

男の俺としては何とも理解しがたいが異性が部屋に来るといっのは何かと大変らしい

中学生とはいえプライベートなものもあるだろうしな…と、いくらな

んでもこれは失礼か

「ん、了解。んじゃ俺達も行くところか。まだだったら部屋の外で待つてればいいだろ？」

「そうですね」

「じゃ、先生」

亜子たちが先を歩く形になって廊下を進む。途中この間のネギ君のお祝いの話やテストの結果がどうだったかなどをで軽く雑談しながら歩く。が、亜子が終始固くなっていたのが印象的だった…

ピンポーン

呼び鈴をならししばらく待つと裕奈がドアを開ける

「あつ お、音楽先生、早かったね？」

「ああ、待たせたら悪かったしな。で、入っても大丈夫か？」

「あゝ、それは…「ゆるーなーこれどうやってはめたら…」ああ！まき絵つちよつとストップ、タイムっ！先生っもうちよつと待ってて！！あ、アキラちよつと手伝って！」

「あ、おい…」

なんか立て込んでるようなら慌てなくてもと言う間もなくアキラを

引き連れて扉の向こうへ消えていく裕奈…

「……………なんなんだ？」

「さ、さあ……………」

廊下に立たされた亜子と二人、苦笑いを浮かべながらそのまま立ちすくすしかすべはなかった…

仕方なくそのまま二人で廊下で談笑、最初はぎこちなかった亜子もだんだん慣れて来たのか表情が柔らかくなってきて…

「あははっ そうなんや、そら災難でしたね」

「ああ、ほんと夜中に呼び出しを受けて残業させられて二日間拘束、ほんと割に合わなかったぜ」

「ははっ あ、呼び出しで思い出したんですけど、音楽さんはなんで携帯はもってないんですか？」

「へ？」

「えっと、今日管理人室前で待ってた時話してたんですけど、アイソンさんは連絡知ってるけど音楽さんのは知らんなって」

「ケータイ？」

「……………もしかして音楽先生携帯もった事無いんですか？」

「いや、まさかソナ…ケータイくらい知ってるさあー ほ、ほらあれだろアレ」

ジト目でこちらを見てくる亜子に思わず怯んでしまっ、がこれがま
ずかった
さらに追及の矢は飛び、ついに携帯に触ったこともないと白状した
ところで…

「「キヤアアア　　っ!」「」

「「え?」「」

「おいっ!どうしたっ裕奈、まき絵っアキラ!」

突然の悲鳴、中の様子も分からず声を張りあげて呼びかけるも返事
はなく

「えい、あけるぞっ!」

「あ、ちよ…」

何かあったら一大事とノブに手を伸ばして勢い良く扉を開け、中に
踏み込む

が、思えばこの扉さえ鍵がかかっていればこんな悲劇は起こらなか
ったんだろっ…

そこには…

「「あっ…」「」

廊下中を見るも無残な水浸しになりつつもなお水を吹き上げる水道管…

浸食する水はもう足もとまで来ていて、土足で上がってしまったものの靴から伝わるわずかな冷たさはこの惨劇の恐ろしさにあいまつてか背筋に悪寒を走らせる…

そしてソノ光景を前にかたまってしまった俺達、そう…

そこにあつたのは吹き上がる水を直にくらつたであろうまき絵とその余波をくらつたであろう裕奈とアキラの二人…

三人は先に部屋にあがつていたのだからブレザーを脱いでいたのだろう、なにもおかしくはない・・・だがその選択はこの悲劇を増長させる促進剤にしかならず、結果として俺は3月の寒空の下、水で肌衣服が張り付き透けてしまった自分の生徒の痴態を見るという状況に陥ってしまった…

あえて断言したい！

下心はなかったとっ！

不可抗力であつたとっ！

だが、世の男性諸君は知っていよう！

このような事態に陥つた場合、総じて非が求められるのは男子であるとっ！！

俺、鳴守 音来も間違いなくオトコ、ニューなハーフだったり心は女などでは断じてないっ

そしてこの中身は10才の子供だとしても見た目は大人なのだっ

つまり俺がいくら弁明しようとしてそれは無駄な行為でしかなく、かといってそれをせすにもいられないわけで…

「ちよつとまったつ落ち着け、これは話せば…」

「き　っ」

「きっ？」

「「キヤア

ッー！」「」

大きな悲鳴とともに両頬に盛大な衝撃をいただき大地ろっかに沈む…

ああ、無情……

さすがにあのままでは風邪を引いてしまうので三人には風呂に行くてもらい、俺は破裂したまま水を吹き上げる噴水と化したパイプと格闘。無事だった亜子と二人で管理人室から大掃除用の雑巾を大量に持ち込み、二人で水浸しになった廊下をふき取る。意外と重労働になってしまった…

で、所変わってここは我が家、麻帆良学園女子寮 管理人室。亜子には風呂に行っていた三人にこちらに来てもらうよう伝言を頼み、その間に俺は濡れた作業着と身体を処理して着替える事にし、四人も来たところで事情説明を聞き、今に至ると

「っで……さっきのは、片付け中にまき絵がキッチン下を片していたら水道管がいきなり破裂、今に至ると……」

「そ、そうそうっ いや、ほんとびっくりしたな！いきなり」
嘘だろ？」…ハイ、モウシワケアリマセン」

いくら専門ではないといってもそれが人為的に壊れたのかそうでないかぐらいの見分けはつく、要は破裂した水道管を止めるために応急処置している最中にパイプの一部が不自然に内側にめり込むように穴が開いていたのでカマをかけてみたら案の定だ…

「は、なんであんな事をしたのか知らんが…お前ら、やっていい事とそうじゃないのとはもう分る年だろ…」

「……………」

はーまあ、なんとというか大事が無かったからいいけど…

目の前の四人は正座したまま申し訳なさそうにこうべを垂れている。…最近というかこの前判明した事なのだが、俺はどうやら他人にしゅんとされるのに極端に弱いというか耐性が全くない。いや、得意な人はいないと思うがこう、心を鬼にしてとかいう事を実行できない俺がいるわけで…実際目の前の四人が申し訳ないというような顔をされると二の句が続かず沈黙が降りる…

ま、まあ、あれだな。四人というか実行犯の三人も反省しているよ。うだし今回はこれでいいだろ。

問題は、この後だよな……料理をするために集まったって言ったけどあれじゃ応急処置はいたとはいえさすがにキッチンが使えないだろう。もう一つの部屋もガスが使えないのでこれも同じ、となるとさすがに外食しかないか。ん、だけど学生に外食を強要するのみな、寮暮らしだし……ふう、それっきゃないか……どうやら俺も麻帆良に来てから大分まるくなったというか、なまったというか……

「あ、なんだ、とりあえず反省はしているようだし今回はここまでする。でだ、さすがにあれじゃキッチンも使えないだろ？……しようがないから今日は俺のおごりだ」「おおお！！」「ただし遠慮はしろよ、これでも教師の給料は安いんだからな」
「分かってまーすっ」「」

「ね、ね。どこにする？」

「じゃあじゃあ、この間新装開店したイタリアンは？」

「いいね！あそこの季節の特製 シーフードパスタは一回食べてみたかったんだっ」

「ったく、調子に乗るなっつーのっ」

本当にわかってるのかと疑いたくなるようなはしゃぎっぷりに苦笑しつつ財布の中身と今月の我が家の経済状況を軽く見積もる
うん、この間図書館島の件で臨時収入も入ったし問題ないだろう

そう自己完結すると横から声がかかったのでそちらを向くと……

「ん？亜子か、どうした？」

「あ、あの……それやったらウチ……」

……

……

そして…

俺は今、リビングのおこたでぬくんでいる

「おーい、本当に手伝わなくていいのか？」

「あ、音楽先生はいいから座ってて」

「そうそう、こうしてキッチン貸してもらってるんだし」

「そうはいつでもな……」

そういつて狭いキッチンで料理に勤しんでいるのは運動部4人娘まあ、4人もキッチンに入れば狭くなるのは当たり前だがなぜこうなったのかというと……

『あ、あの…それやったらウチ…ウチが料理作ります。そやからこの台所貸してもらってもええでしょうか？』

と亜子がいきなり頼みこんできたのが始まりだった。言いたい事は

分からなくもないし俺もその方が助かるがさすがに生徒に飯を作ってもらうのは抵抗があったので始めは断ろうとしたが

『あ、それいいね』とか『亜子大胆ー』

などと何やら訳のわからない盛り上がりを見せた生徒。sは家主の意見も放置でトントン拍子で話を進め…つい先ほど食材が運び込まれてこうなった…

しかし……こう、台所を他人に占拠されるというのは意外に落ち着かない。いや、なんといか本来もてなす側の人間がリビングにいて客、それも生徒に料理をしてもらうとはこれいかに？確かに前にも一度こういった機会はあったがそれでもこの料理を待つ間の疎外感がどうにもしがたいというのもあり、落ち着ける場所であるはずの我が家は今非常に居づらい空間になってしまっている。

「くすつ まあ、さっき迷惑をかけたお詫びというのもあるんだから先生はゆっくりしていればいいと思うよ？ほら、これ前菜につまんでて」

「あ、うん」

くすりと笑いながら皿を持ってきたのはアキラで、すつとサラダを置く。

サラダはちぎったレタスに細めのスティック状にした大根とニンジンに乗せただけのシンプルなもの。コトリと横にペースト状のソースも用意されるといふサービスの良さ

はむっ

作ってもらった以上は食べないと失礼に値する………反射的に手を伸ばしたのは空腹に負けたからではない、けっして…

ん、

口に広がるのは見た目以上にシンプルな野菜の苦みと塩の辛みのみ、非常に質素ではあるが塩加減がまさにいい塩梅で逆がいい。切られた大きさも食べやすく、食事前の胃に入り易いまさに前菜次に大根スティックを一つつまんでソースに漬けていただく

「……………これ、このソースって手作りか？」

「うん、作ったのはまき絵だけだね」

ソースは摩り下ろしたゴマをベースに作られただろうもので市販のドレッシングなどと違うのは素人でもわかる。なんとというかしつこくないのだ、ゴマダレのような油の強い感じもせずゴマの風味を残すように加減された調味料の匙加減がいいのだろう。つける与自己主張の強くないこれまた一風変わった味わいを舌に残し、野菜の味を極力消さないようにしたアクセントの意味合いが強いそれは一口で気にいった。

「……………なんていうか、すごいな…料理できない俺が言つのもなんだけど、ソース一つでここまで違うんだな」

「あははっ まだ前菜だからね。楽しみにしててよ」

「まあ、まき絵の数少ない特技だからね」

「ええ、ひどーいっ！！」

「あはははっ」

キッチンとリビングの間に笑いが漏れ、その場の雰囲気は温かくなる。俺はそのまま野菜にぱくつきながらしばらく彼女らの賑やかな調理姿を眺める。

たまにはこういうのもいいか…と思いつつふと浮かんだのはアイン以外とこうして食事の機会につくのは久しぶりじゃないかという事むこうの世界で暮らしていた時は養父であるリヒトは多忙であるためにいつも誰かと一緒に食べていた。傭兵として働くようになってからはほとんど外で食べることが多くなり、他人と仕事が組むのが不得手な俺は自然とアイン以外と食事を取らなくなっていった。まあ、さして困る事でもなかったが、こうして誰かと一緒に賑やかな食卓もあつたなと思いだしながら料理を待つことにする。

そこにはさつきまでの居心地の悪さは消えていて、俺はいつも以上にリラックスできていた

「いや、なんていうか……すごいな」

「あははっ まあ久々にはりきつたからね。さ、早く食べよう」

目の前には四人によって所狭しと並べられた料理がテーブルに広がっていた

八宝菜にサーモンとトマトが盛りつけられたパスタ、アスパラガスのベーコン包み、魚の切り身に大根の煮物にスープまで付いている…どれも温かない匂いを漂わせ空腹感をあおる。前菜を先につめた俺の胃袋も準備はできたとばかりに自己主張し暴れている。

「っと、さすがに5人はやっぱり狭いか」

もともと管理人室は他の部屋より広めに作られているとはいえここに住んでいるのはアインと俺の二人だけだ。何回か学生が訪ねて来た事もあつて食器の類は予備の物をそろえていたので問題ないがテーブルなどの家具類に関してはまだ手が及んでいない、3〜4人なら余裕だが5人では若干手狭に感じる気もする。

「まあ、いいんじゃない？ゴハンは人数いた方がおいしいし」

それもそうかと箸を手に取り両手を合わせる

「いただきます」

正直何から手に取るか迷うほどの豪華さだ、いつもはさして気にせず箸を適当に動かすが今日はこうして生徒がわざわざ作ってくれたのだ。味わって食べないと罰が当たる。

「お、うまいな」

「えへへー」

一つ目に汁ものという事でまず手を伸ばしたスープを一口飲む。どうやらまき絵が作ったものらしい

じゃがいも、キャベツ、たまねぎ、ニンジン、etc、どちらかというと普通のスープというより野菜多めなポトフみたいだ

「このポトフって肉入ってないのな」

「あ、ポトフっていうのはソーセージとか肉類を入れたやつなんだよ。これはそれは野菜たっぷりのコンソメスープだからね、時間があればお肉から出汁もとるんだけどこれは市販スープの素を使ったやつ。で、こっちはサーモンのトマトクリームパスタ、家の弟達っ

てトマト食べないんだけどこれだけは食べるんだよねー」

「おおー、なんかまき絵が頭良く見える」

「余計なお世話っ」

「「あははっ」「」

「おっ？この大根も味染みててうまいのな」

「あ、そのブリ大根、亜子が作ったやつだよ」

次に箸を伸ばしたのは大根と魚の切り身を醤油ベースに砂糖、みりんに酒を加えて煮たもので亜子が作ったものらしい。食卓に並んだ者は洋風3の中華1の和風1と和洋折衷な組み合わせ、その中でも甘い匂いを漂わすこれには気になっていて先ほどのスープとどっちからいただくか迷ったほどだ。

実際このブリとか言った魚を食べるのは初めてだったが煮詰めた身が崩しやすく非常に食べやすい。魚と野菜という組み合わせを考えると料理って面白いものだと思う。

「へー、けっこう料理もうまいんだな」

「そ、そんなっ　う、ウチ寮で暮らしてるから…自然とできるようになっただけで…」

「んな謙遜しなくてもいいと思うけど。俺こっち来てから日本食って気に入ってるし、こっぴつた和風…っていいのか？けっこう好きだけどな」

「「おお　っ」「」」「っ／／／／／／／／／／」

若干の盛り上がりを見せなお賑やかになった晩飯にその後も進めらるままに箸を進めて一つ一つの料理に舌鼓をうつ、どれも本当にお

いしくて自然と会話も弾んでいった……

「え！？音楽先生携帯もった事ないのっ！！」

「お、おおっ。なんだ、そんなにおかしいのか？」

「いや、可笑しいも何も不便じゃない？」

「不便か、考えた事もないな」

こうした話が出て来たのもついさっきの亜子との話がきっかけで目の前の4人には例外なく驚かれてしまった。そんなに変わるのか？

「んー、一応今まで必要にかられなかったからな…、前の仕事でも相方にそういうのまかせてたし、というかあの手のキカイ系はどうも苦手なんだよな…」

「げ、原始人がいる…」

うそだーなどといわれるが顯然たる事実、ってか機械一つでヒドイ言われようだなオイ

そうなのかと横にいるアキラに問いかけてみるも…

「うーん、そういう人がいないわけじゃないのは分かるけどほら、今の時代だと小学生も持つてるよ？」

「なにっ！じゃ、じゃあお前らも持つてるのか？」

うん、といって右からアキラ、亜子、裕奈、まで顔をもっていくと

ホラと言わんばかりに見せてくれる…

「ま、まき絵は…」

「ホラ、私も持つてるよ？」

そう言つて自分のカバンからピンクの可愛らしい四角い物体を見せてくれる。

「か、神も仏もないのかっ！」

「どーゆー意味よッ」

なにやらまき絵が吠えているが耳に入らない、今の俺はそれだけシヨックを受けている。

あの四角い箱だぞ？ひとたび音がなれば顔の見えない相手と会話ができ、板に刻ませた数字その他をなぞればターゲットに手紙が出せたり広告が飛んでくるんだぞっ！何よりあんなちっちゃい物体がいきなり怪奇音を響かせてぶるぶると震えるなんて軽くホラーじゃないか！！（これは主人公の極端に偏った偏見です。そう極端に、大事なところなので二回言いました）

「あの一先生？」

「しかもこのご時世何の策略か小学生等の低年齢層にも手が届いているだっつ これではまるで 「先生！」む、すまん…なんだ？」

「何だも何も…声出てるし」

「何!？」

「先生って時々変になるよねー」
「あうっ」

音楽は精神に500のダメージ

「うん、この間のテスト前の事といい今日の携帯の件といい時々ね」
「ぐぶっ」

追加ダメージ、音楽は200のダメージを受けた

「機械が苦手なのは分かったけどねー、携帯くらい使えないと若い世代の話付いて行くの大変だよ？」

「そうそう、あのネギ君だってパソコン使えるんだから。もしかして先生パソコンもだめとか？」

「?っ」

会心の一撃っ、音楽は1100のダメージを受けた

音楽はもう生きる気力たかがないようだ、音楽の視界がまっしろに……

「って、二人ともっ センサーいじるのもその辺にしとき！」

「おおー、亜子が怒ったー」「ひゅー」

た、たすかった…

「すまん、見苦しいところを見せたな」

「そんな、人間苦手な事なんて誰だってあるんですからそんな気にしないで大丈夫ですよ」

おおーっ 亜子が女神に見える

「あはは、まあ先生をからかうのはこのぐらいにして、実際携帯くらい持ってた方がいいと思うよ？今は何とかなってるかもしれないけどあって損するものじゃないんだから」

「そうなんだが…」

「先生の場合単に苦手なだけじゃなくて覚えようとしただけですよ？」

「む、」

確かにそうなのかもしれないが…

俺の機械おんちはアインも日頃から頭を悩ませているらしく、常々俺に克服させようといういろいろ試すがことごとく失敗に終わっている。魔法で事足りるといのが大きな原因だが俺に機械に慣れようという気が無いのもあるんだろう

「そつえばこの前学園長に連絡がつきにくいとか言われたっけ…」

「ほら、やっぱりあった方がいいって」

うーん、できれば一生お世話にならなくてもいいと思っていたんだが、麻帆良での任務も思ったより長いし…このまま旧世界《こちら側》に居続けるならやっぱり必要なのか？

「…亜子もやつぱり持ってた方がいいと思うか？」

「え！？う、ウチっ？」

こくりとうなずく俺に困惑気味な亜子

「う、うーん、確かになくても困らないかもしれないけどあった方が何かと役に立つじゃないですか？ほら、先生同士の連絡にも困らんし今だと海外でも結構使えるのもありますし」

「そ、そうか…うーん、でも俺そういうの全然詳しくないから…
…アインにでも「はいはーいっ先生に提案」なんだ裕奈？」

キラーンと擬音が聞こえてきそうなほど目を輝かせるのはどうかと思う。が、この件に関する事なら俺は全くの素人なので素直に聞く事にする。

「携帯の事が分からないんだったら明日案内してあげるよ！亜子が」
「そうそう、それやったら…ってウチッ！！」

おおー見事な乗り突っ込み、さすが関西弁をしゃべってる人は違うのな（それも違う）

ふむ、確かに魅力的な話だ。都合上明日はちょうど非番だし裕奈達の言葉を借りるなら『若い』子達…いや、実際は俺の方が若い俺が店に行って説明してもらっても半分も理解できないだろうことはまず間違いない。となると誰か経験、というか持っている人がいると非常に助かるのだが…

「いや、確かに明日は空いてるしそれはありがたいが亜子はそれで

いいのか？なんか都合が合わないっぽいが…」

「いやいや、大丈夫だってっ 明日みんなで買い物行って話してただけどさっき部活で急に呼び出しがあつてさ、おじゃんになっちゃうってなつてたんだよね」

「あ、あー、私も私もー」

「えっ！そんな話…ふえー！！」

「……いいのかあれ？」

「多分…」

なにやら弁解しようとした亜子を部屋の端に引っ張って行った裕奈とまき絵

取り残される形となった俺とアキラはテーブルの上で苦笑いを浮かべるない

「うーん、アキラはいいのか？」

「あ、うん。私も明日はちょっと外せない用事があつたから、それとも先生は亜子と行くのはいやかな？」

「ん？いや、そんなことはないが…亜子って俺の事苦手じゃないか？」

「え？」

「今日もお前らの部屋の前で待つてる時は何とか話してたけど大抵亜子が俺と話するときって表情硬くなったりして話づらそうだったし、俺ってそんな人に怖がられる顔してるか？」

「あ うん、そんなことないと思うよ。ほら、亜子ってけっこう人見知りする子だから」

あー、確かに…初めて2 - Aに来た時は今よりもびくびくした対応だったと思う。最近運動部四人組とは比較的話すようになって忘れがちだがあの時はけっこうシヨックを受けたものだ

「確かに、そうだったな」

「うん、だから明日はちょうどいいんじゃないかな？」

・これを機会に交友を広げるのもいいだろう・

と、そう言えば昼間他の魔法先生達にも言われたっけ、確かにちょうどいいか。趣味探してはないが苦手な事に挑戦するのはいい事だろうし、何より自分の担当する生徒にこうも人見知りされるのでは教師として問題もあるだろう。うん、これを機に両方解決できれば一石二鳥じゃないか。

「…そう、そうだな。いつまでも怖がられてたんじゃ副担任としてしまらないしな」

「お？なんかそっちもまとまったみたいだね」

と元気100倍笑顔満開といった調子で戻ってきた裕奈とまき絵、後ろの亜子は逆にぐったりとしている。
本当に頼んで大丈夫だろうか？

「あー、亜子？」

「は、ひゃいつ！」

思わず笑いが漏れそうになるのを必死にこらえる。

時たま俺が呼びかけると亜子はこつやって舌を噛みそうになるといつか背がのけぞるようにピンと反応する。その時見せる反応が面白くて前はよく意地悪して声をかけまくった事もあったっけ。なんというか見ていて飽きない、可愛らしいというかなんとなく好感が持てるのだ、恥ずかしながら

「その・・・なんだ、明日空いているなら案内を頼めると助かるんだが…いや、もちろんお前がいやなら…」
「だ、大丈夫ですっ！」

思わぬ元気のよい返しに押されたもののその答えに安心する。どうやら一緒に出かけてもいいくらいには思われているらしい。亜子の承諾に安心して俺は明日の案内を頼む事にした

「そ、そうか？じゃあ明日…そうだな、10時くらいに迎えに…」
「あ、先生っ 明日現地で待ち合わせでいいっ？ほら、亜子明日街の方に用事があるって…」

俺は亜子に聞いていたんだが…何かまずかったのだろうか？俺が迎えに行く旨を伝えようとするとまた裕奈から横やりが飛んでくる。

「む、そうなのか？なんか用事があるんなら本当に無理しなくていいんだぞ？」
「大丈夫だって、ね？」

いや、だからどうしてお前が取り仕切ってるんだ……

その後も俺と亜子のやり取りに横やりが飛びかい、時間と待ち合わせ場所も決まった所で今日はおひらきに
時間もけっこう遅くなってきたので洗い物と片付けは俺が引き受け
生徒四人はそれぞれの部屋に帰した。

いざ帰ってくるとさっきまでの賑やかな空気に慣れたせいかとたんに部屋が広く感じる。

それも気のせいだと頭を振って食べ終わった食器達と格闘し、残りをアインの為に取り分けてラップをかけ、完全に片付け終わったころには10時を回っていた。

「もうこんな時間が…遅くなるっていつてたけど」

アインの帰りを待つ間リビングに戻ってテレビのチャンネルを適当に回しつつ今日の出来事から明日の事を思い浮かべる…
まさか勢いもあったとはいえあんな事になるとは…今思ったが生徒に案内してもらってけっこう間抜けな構図なのでは？

……今さらか…

俺自身この姿が長いから忘れそうになるけど俺は十しか歳を取っていない、本来なら10歳って言えば遊びたいざかりのやんちゃな世代だろう。が、どうもそういうのに無縁だったせいも抵抗感というか発想がないというか…

「ほんとに10歳だよな俺…」

バカな考えと思いつつもそれを吹き飛ばせない自分がいて…

「ああっやめだやめっ！」

そうだ、こんなふうに悩んでいるなんてらしくない、今日は賑やかだったかららしくない考えが浮かぶんだと自己完結させこたつから抜けでる。

明日は待ち合わせもあるんださっさと寝ないと…

テーブルに並べといた夕食にカーテンをかけ、その上に明日は出かけることを書き置きしておき、俺は一人自室に戻る。

そんな、らしくもなかった俺の休日の始まりはこうして前日を終えた…

はい、そんな感じで主人公が若干たそがれて終わったそんな14話、いかがだったでしょうか？

個人的には主人公の携帯に対する偏見がやりすぎたかなと（汗もつとも今回一番書くペースが乗った所だったりw

今作はちよつと無理やり感あつたけどアンケートっぽい書き方で先生陣にちよいと登場していただきました。まあ小さな伏線を張りながら回収していくのでそろそろ他の魔法先生とも絡みがほしいなと感じて入れてみたのですが……これだけでは何とも、今後調整を交えながらチャレンジしていこうと思います。

その他には、今回苦労した点なんですが……まあ、あれですね。何が苦労したかというと亜子の台詞です……あの子関西弁と敬語との使い分けの線引きが広くて表現に右往左往してしまいます。なので自己解釈多目な気も……

が、本編の流れでは次話で主人公と強制でーと？に……心理描写がむつちや大変やねんっ！つといつつ書いてる分にはとても楽しいんですけどね。あゝ、原作では結局仮契約しなかったの出番は少なめなのかな？作者的にはもちつと活躍見たかったけど。まあ、あそこで仮契約の流れに入ったらガラリと物語変わるでしょうけどね（笑）今後に期待です。

あとは今回少々料理なるものを表現してみようかとチャレンジしてみました。主人公が料理できないんでそこらへんを踏まえた文章表現に留めるよう考えて書きましたが……思いのほか難しい（苦笑）あれですね、読むだけでおいしそうって思える文が書ける人はすごいなと改めて尊敬しなおしたりする、そんな今日この頃です。

あ、重要連絡です。ちょっと就活の関係で来週関西（滋賀）の方に出張しなくちゃいけなくなつたので更新遅れると思います。通常のペースだと25・26日に投稿するんですけどその出張で4日ばかり時間を拘束されるのでおそらく25・26日には上げられませぬ。15話はおそらく2、3日ずれると思います。その分再来週はペース修正の為に3月の4・5日にはちゃんと16話をあげるのになにとぞご容赦を！

それと例の宣言していたユニーク10500人、なんかもうとつくに超えていますね（汗）

作品の方はもうできてるので4・5日投稿予定の16話を投稿した翌日に投稿します。こっちは予定通りなのでご安心ください。

では長々と失礼しました。次回も本作が読者の目に留まるよう小さくも日々努力していきますのでどうかよろしく願います。それではまた次回、再見！

取立15回目 く先生の休日なお話。 1日目 これってデートなん？ (前書き

はい、ただ今戻りましたトントンです。

正確には今日のお昼ぐらいに帰ってきたのですが、何とか投稿までもちこめましたか非常に眠いです。(笑

とにかく15話目、今回も長いお話となりますが、最後までお付き合いいただけるよう。どうぞご覧ください。

取立15回目　く先生の休日なお話。1日目　これってデートなん？

朝、鏡の前でウチは服装を確認する。

お気に入りのパーカーの上にベストを羽織り、下はあまり派手なのはいややから色が薄めのデニムスカート

昨日必死に選んだのにいざ朝になるとどうしようもなく不安になる。

「あー、何でこんな事になってまったんやろっ」

半分涙目でぼやきながら昨日の事を思い出す。

昨日は迷惑をかけたお詫びにあの人に料理を振舞うことになったんやけど、正直それを自分が言い出したのが今でも信じられへん

「あ、でも…」

おいしいって、言うてくれたんや…音来さん…

「はっ！ちやうちやう！そうじゃないやんウチっ」

そうや、問題はその後に起きたんや

音来さんが携帯を持ってない話から裕奈達がかかって、それで音来さんが携帯買うつてくか迷ってたら裕奈が突然『携帯の事が分からないんだったら明日案内してあげるよ！亜子が』なんていきなり言うたんやっ

そしたら何かトントン拍子で話がとんでって、いつの間にか本当に買い物に行く事になってしまったんや！
それも二人つきりでっ

本当は今日春物の服見に行こう言うてたのに何の気いきかせたんかアキラまで用事があるって言い出して

「ああ、ウチどうしたらいいんやっ！！！」

時刻は7時半

約束の時間まではまだ2時間半も残ってるのに心の準備にはまるでたらず

ウチは頭ん中が真っ白になっていた…

「はあ、あんたもよくそこまで悩めるね…」
「悩めるも何もゆーなの所為やんっ!」

ちよつと本当にわかつとるんかと小一時間ほど問い詰めた、問い詰めた、いやけど時間はそれも許してくれないわけで…

「ま、まあ亜子、落ち着きなつて。」
「あ、アキラっっ」

ゆーなに詰め寄る私をいさめるのは同じ友人の大河内 アキラ。
私とゆーなとまき絵とアキラをまとめてよく運動部4人娘とか何とか言うけど何かちやうと思ふ。ウチサッカー部のマネージャーやしつて今それはどうでもええねん!

「そんなこと言つてもウチあんな年上の人と二人で買い物なんて言つた事ないしっ」

「あー、まあ普通はないよね。」

そう、今日の相手はウチらのクラスの副担任の音楽先生なんや。歳は20でウチらより六つも年上で…
なんでこんな事になってしまったんやろ

「でもね亜子。昨日音楽さんが言つてたけどけっこつ誤解されてるよっ」
「ごかい?」

ウチの返しにこくりと頷いて返してくれるアキラ

「自分が亜子に嫌われてるんじゃないかって」

「えっ!」「ええ!?!」

誤解?ウチが音楽さんを嫌つとる?

「ちよ、ちよつとまつて本当にそんな風に言つてたの音楽先生」

「あ、うん。亜子が自分と話す時によく硬くなつてるから苦手に思われてるんじゃないかって」

ゆーながアキラの発言に慌てて聞き返していたが私も今の言葉に衝撃を受けていてそれどころではなかった

そ、そんな…た、確かに思い当たる節は…あかんっ多すぎてどれがどれだか!?

そもそも始めは本当にただ苦手だったのにいつの間にか違う意味で苦手になっていたんだからウチだって困惑してるのに

「……あの人もけっこう朴念仁だよね…」

「うん、否定できないかな…」

混乱し、慌てている私を見る二人はなにやらウチ以上に深刻な顔のため息をつく

いつもならその言葉に一言いいたい、せやけど…あ、ああかん!余計混乱してきたっ

「あ、もうそろそろ時間だよ亜子」

「えっ?ほんまっ遅れたら大変や!」

まき絵の言葉にはつとなつて時計を確認すると予定時間にあと五分もない、ウチはテーブルに置いたポシエットを取って慌てて玄関に向かう

「ああ、ホラ亜子、忘れ物っ！」

「ふえ？あっ！」

靴をはきかけていたウチにゆーなが持つてきたのはさっきまで相談している最中に付けるかどうかで結局付ける事に決まったプレートタイプのシンプルなシルバーアクセサリー

「ほら、後ろ向いて。全くっ普段がしっかりしてる分こっついう時はおっちょこちょいなんだから…」

「あっっ」

ここは素直に言う事を聞く事にして首にかけてもらう。幸先悪いって…

「はい、OK！うん、似合ってるよ。がんばってね」

「ファイトだよ、亜子っ」

「慌てちゃだめだよ？」

「あっうん！ほな行ってくるっ」

三人からそれぞれ激励をもらって今度こそウチは待ち合わせの場所に向かう

「いったね」

「うん、あんなに慌てなくても30分は余裕持ってるのにね」

亜子から相談を受けて彼女の部屋に集まったのが8時くらい、待ち合わせの場所はここから30分程かかるので1時間前にここを出た事になる。

「まああれはあれで亜子らしいし」

多分時間にルーズだと思われたくないのだろう。最近のドラマで女優が「男を待たせるのは女の特権」なんて言う台詞があったけど、亜子には当てはまらないだろうな。あの子真面目だし

「じゃ、私達はどうする？今日は亜子いないけど……」

「え？追うにきまつてるでしょ？」

「草葉の陰で応援しているだけじゃ親友の名が廃るってもんよっ」

……

まるで当たり前でしょ？と言わんばかりに亜子を追跡するという二人。というより裕奈、だからってストキングをしても親友の名は廃れるんじゃないかな……

「ほら、アキラっグズグズしてると見失っちゃうよ」

このパターンは総じて何をやっても無駄な時だ……

ごめん亜子、私……止められそうにない……

緊張で今も大変だろう親友に謝りながら私は結局前を駆ける悪友を
追いかけることにした…

ほんとにごめんっ、亜子…

Continue side:Ottoya・Narukami

「む、思ったより時間がかかったな…」

空の旅をする事十数分、時刻は10時10分前。予定では30分前
に着く予定だったが…

「さすがに乗り物酔いしたままじゃかつこ付かないからな」

本来は飛んだ方が断然早い、が俺の場合はそうも言ってもらえない。
認識阻害の魔法を俺が使うのには多分な集中が必要になるため通常
の飛行より神経を使うのだ。そのため電車に乗っていく方が神経は
使わないので楽ではあるといえる。精神面ではどうかはわからんが…
乗り物酔いなんていう障害さえなければ間違えなく選ぶが今回はど
うしようもないという訳で電車は選択肢から削除、対応策を検討し
つつ結局は空の上というわけだった。
ちなみに打開策は思いつかなかった…

「まあ、この格好に抵抗があったっていうのもあるんだけど…」

嘆きながら見下ろす俺の格好は上に黒のタートルネックに紺のデニムジャケット、下は黒のレザーパンツ

なんというかあれだ、こう…いかつい、というか威圧感出てるんじゃないかってくらい周りの人間との距離感がある…

俺が出かける前の事だ

いつものようにスーツではまずかろうと適当にラフめの私服を着、上にダウンジャケットを羽織って出ようとしたところでアインから待ったがかかったのだ。

アインいわく「スーツで出なかったのは及第点ですが合格点ではありません。Out、もう一度選びなおしです」とのことです。それから服を選ぶもOKはせず、終いには着せ替え人形のように扱われるはめに…

そして30分程した頃、今現在の格好でようやく許可が降りたのである。

…正直俺の趣味では断じてないと言われていた…

「はぁーっと、それよりも時間だ時間。亜子のやつ真面目だからな、もう待ってんだろっな」

思考を中断し、足を動かす事にする。

急な提案とはいえ俺の用事で今日はつき合ってもらっ事になったのだ、待たせるのは不敬だろう。

「えっと…確か…」

駅の改札をでてすぐ横の像の前で待ち合わせだったはず

その頭の中で昨日の事を反復しながら駅の辺りを見渡していると…

「ん？あれか…？」

二人の男に言い寄られている女性が何やら抵抗している所を発見してしまった

「…なんかデジャブるけど…」

そう、いつかの光景を焼き増したような光景だ。が、その女性が今日の案内役の相手なのだから放っておくわけにもいかないだろう頭を振って足を向けて彼女の方へと歩き出す。

学園内とはいえ人の多い駅前だ、派手な騒ぎは自重しろと言われたばかりだったか、まあいいだろう
何しろ人助けなのだから

「あ、あのっ本当に人を待ってるんで…」

「まあまあ、いいじゃないの」

「こんな時間がたつても来ないんだから俺らと遊びに行っちゃおうぜ？」

……なんというか、思わずあげた手のひらが拳に変わりそうになるのを何とかこらえつつ、ゆっくり手を軟派男の一人の方にのせる

「ああ？何だお前っ？」

こちらの邪魔をするなとばかりに振り返った男が唾を飛ばす

……我慢だ……ここで魔法はご法度、魔法は使うな、耐えろ、たえろよ俺……

「その遅れてくる男が俺だが……その子連れていかれては俺が困る」「え？音来さん……」

降りかかったそれを空いている手で払って

しかし一言物申したくなるのもしょうがないといえよう……
確かこういった時にはふさわしい言葉があったはずだ

そう、確か……

「なんだ、しつこい男は嫌われるって知らないのか？彼女も困ってる」

そう言っつて亜子の手を引きこちらに連れてくる

どうやら遅刻分いやな思いをさせてしまったな……

目の前の二人組を睨みつけながら心の中で猛省する
無論、この件について亜子に後であ詫びを入れるのは言っつまでもなかった

「うん…さ、さすがに早く着きすぎたやろか？」

待ち合わせに場所に着いてから30分ほど時間が経ち、時計を確認
をすると長針がちょうど「10」を指した所やった

せやけどその30分は退屈なんて時間やなくてむしろあつとゆうま
やった。

何しろ事がことで昨日の今日、それも急に決まった事なのだ、緊張
もするし焦りもする。始めは落ち着かないと昨日の事を思い出し
たりしとつたんやけどそれも逆効果で…

結局ウチは心の準備もできずにここにいる

「はあ、大丈夫…だよ、おかしなところはないんやし」

気がつけば無意識に髪をすいたり服の裾をいじってしまう

早く来てくれないかと思う一方でまだ待ってほしいという正反対の
気持ちでしばらく葛藤が続くと…

「ねえ、ちよつといいかな？」

「え？」

顔を上げると知らない男の人が立っていた

「俺達さつきからキミの事見てただけど今暇なの？」

「あ、いや、ウチ…」

「へえ、関西弁しゃべるんだ。あれ？じゃあこっちに一人暮らしなのかな。学園の子？」

「それはどうでもいいってっ それより俺らダチの一人が急に来られなくなっさ、困ってたんだよね 彼女ヒマ？」

「いや、ウチこの後用事あって…」

「え、っ彼女つれないじゃん ね、そんなこと言わないでさ、いっしょ？ちよつと付き合ってくれただけでいいからさ」

「ちょ、困りますっ まちあわせしてるんで」

「へえ、そいつ彼氏なの？」

「か、彼氏とかじゃないですけどっ」

「じゃあいいじゃん、行こうって」

そう言っつて男の一人がウチの手を取ってくる

「あ、あのっ本当に人を待ってるんで…」

「まあまあ、いいじゃないの」

「こんな時間がたっても来ないんだから俺らと遊びに行っちゃおうぜ？」

あかん、全然話聞いてくれへん

握られた手を振りほどこうにもウチの力じゃ全然ほどけなくて

どうしようどうしようって泣きそうになった時、その声が聞こえて来た

「その遅れてくる男が俺だが…その子を連れていかれては俺が困る」

「え？音来さん…」

そこには昨日部屋の前まで送ってっもらって別れた人がいていつもより少し怖い顔をして立っていた

「なんだ、しつこい男は嫌われるって知らないのか？彼女も困ってる」

そう言いながら音来さんが男の人たちとの間に入ってウチの手を取ってくれる

ちようど音来さんの背中にウチが隠れるようになる

「な、なんだよ、ちよつと声かけただけだろ」

「しらけた、行こうぜっ」

「お、おい！」

さっきまであんなしつこかった二人が音来さんが来たただけであっという間に去って行く

「ふむ、拍子抜けだな……っと、その、悪かったな来るのが遅れて…いやな思いしただろ？」

振り返ってこつちを覗き込むその顔はさっきまでの険しい表情でやなくて、いつも時折見せてくれるとても優しい表情やった。その顔を見てつい呆けてしもつて反応が少し遅れてまった

「あ、そんなことないですっ　ウチが早く来すぎただけで…あの、助けてくれてありがとうございました！」

「あ　、そんな礼を言われる事でもないと思うんだが…大したことしてないし」

「それでも、ウチは助けてもらたんですから　やっぱりお礼くらい言わないと……」

「そうか……じゃあそう言う事にしとくか。でもあれだなさすが亜子っていうか、ほんとは俺も30分前には突く予定だったんだけど、どれくらい早く来たんだ？」

「あ、さ…じゃなくて20分前くらい前でしたからそんなにまつてません」

「そうか、まあほんとは男が待てせるってのはなんだしな…その、悪かったな…」

「む、何かおかしかったか？」

その言葉に思わず笑いそうになるのをこらえていたんやけどどうやら見つかってしまったみたいや

「い、いえ　ただ先生もそういうの気にするんやなって」

「まあこれでも成人男性なんで、それなりには…」

少し顔を赤くした音来さんにクスリと一つ笑いを洩らしてしまった
が一つ咳払いをして居ずまいを正す

「じゃ、行きましようか？」

「ん、今日はよろしくな 亜子」

「へー、ケイタイってけっこう種類があるのな…」

「音来さんはどんな携帯がいいんですか？」

「うーん、まずはそこから…：…とりあえず丈夫で扱いやすいなら
特にこだわりはないんだが…」

店に入るといくつかの機種を手にとって開いたりしていじっている
がどれがいいのか分からない様子。ウチはとりあえず最近の機種か
ら比較的操作が簡単な物をいくつか進めていると

「いらっしやいませ、どのような物をお求めですか？」

品の良い感じの女性店員さんが声をかけてくれた。

「あ、あの 新規の購入で探してるんですけど…」

「新規ご契約のですね、ありがとうございます。今のお勧めですと当店にあるものでは最新のものです。コチラの…」

「あ、そうじゃなくて できるだけ操作が簡単で丈夫なやつで…」

「はあ、携帯はやはり精密機械なので確約はできませんが…あ、そういうことですか」

「？」

「ではこちらのラクラク携帯シリーズはどうでしょう？こちらも最新のものでワンタッチ機能から防水昨日まで付いていますのでお年寄りの方にもご好評で…」

…どうやら根本的な誤解が生じたようで、いやこの場合解らなくもないんやけど、しっかり誤解を解かないとラクラクホンを普通に買いたいそうなのがする…

「あの、そうじゃなくて…」

「はい？」

「使うのは彼なんです…」

うん、二人組に絡まれた時は出ていこうとしちゃったけどちょうどいいタイミングで音楽さんが来たので

それにしても…

「それにしても…」

「あの恰好はちょっと…」

「へ、そう？私は結構似合ってると思うけど」

うん、確かに似合っている…けど似合いすぎているというか若干近寄りやすいようなオーラが出ている…あれじゃあ亜子との関係改善には逆効果じゃないのかな、音楽さん…

「でもまあ音楽さん足長いからああゆうの似合っただね」

「それは…確かに」

外国人というのものもあるのだろうけど彼の足は日本人のそれに比べて大分長い、そのためレザー系のぴったりの服装でも違和感なく着こなしているのだが、普段の彼のイメージからは少々かけ離れている

「へー、『男が女を待たせるのも…』か、けっこう言うねー音楽さんも」

「へ？」「何のはなし？」

彼らが移動して携帯ショップに入った時、突然ゆーなが口笛を吹か

ん勢いでそんなことを言い出した。

が、それはおかしい。本当に不本意ながら尾行中は最低でも10m近くは距離を取っていたのだ、そんな聞いたようなことが言えるわけ…

「ほらこれ、盗聴器〜！」

「え！嘘これほんものっ どうしたのこれ!？」

「へへーっこんな事もあるうかと昨日の内に朝倉に頼んでね。本人今日来れないから後日今日の事取材させてっていつてたけど」

……

「……没収」

「へ?」「あっ」

取りあげる私に対して横暴だとかノリが悪いとかいうけどこの際それはどうでもいい、ただでさえ尾行なんていう申し訳ない事になっているのだからコレくらい止めないと亜子に申し訳が立たないまったく、いつの間に仕掛けたのやら

が、ゆるなから取りあげた時にマイクが外れたのか途端に手に持った機械から音声流れだす…

『こちら最新のものでワンタッチ機能から防水昨日まで付いていますのでお年寄りの方にもご好評で…』

『あの、そうやなくて…』

『はい?』

『使うのは彼なんです…』

「「「ぶっ!!」「」」(ふき出した音) x 3

「ちょ、こ、これはタイムリーすぎるっ くっ」

三人とも一斉に口を押さえて笑いをこらえようとする。

結果的に私を含めて3人が現場の状況を盗み聞いてしまったわけだが…

だけど亜子…これはっかりは許してほしい…

side:out

- P i / P P i

「あ、飲み物はウーロン茶と…」アイスティー、レモンで「あはは、
以上で」

- P i / P i

「はい、ではご注文を確認させていただきます。季節の特製 シー
フードパスタが一つ」

今ウチらは音来さんの提案でちょうど昨日話題になったイタリアンでお昼を兼ねて休憩する事になった。若干早めの昼になったこの時間帯、店内は思ったより混んでいたがちょうど窓際の席が空いたらしく、つい先ほどまで数分間メニューとのにらめっこを終えたところだ。

「以上でよろしいでしょうか？」

「あ、はい」

注文を確認し終えた店員がメニューを回収して下がると音来さんがテーブルに頭を突くようにしてため息を漏らす

「はあ、ぜってあの店員笑ってたって…」

「あはは…」

あの後、笑いをこらえる店員さんに眉間に皺を寄せて険悪なオーラを出しかけた音来さんを抑えつつ何とか無事購入に成功。終始私不機嫌ですと言わんばかり表情だったがその顔がなんだか拗ねた子供みたいに見えてしまったのは秘密だ。

「は、それで…もうこれは使えるんだよな？」

そう言っただ目の前に片手で摘むように掲げたのは黒を基調としたベージュシックに折畳み式の携帯電話。リボルバーやスライド式のものも店員は進めていたけど本人がこっちがいいとのこと意外と早く決定、形も丸みや奇抜な装飾といった遊びもない金属質の表面に長方形。最近のはやりでもある薄型の真逆に行くそれはしかし、手に取る本人にはどこか似合っていた。

「そうですね、Webとかは問題なくできますけど電話とかの方は登録しないと」

「ふーん……」

聞いているのが分かりにくい返事を返しながら音楽さんは手に取った携帯を開いたり閉じたりしながら時折キをいじっている。先ほど購入したばかりなのだがその扱いを見るにどうも苦手意識は抜けていないように見える。

「あ、じゃあ試しに亜子の登録させてもらっていいか？」

「へ？」

「いや、俺まだ操作とかよくわかんないから今実践できるとありがたいかなーって」

唐突な申し出にその言葉を自分の中で咀嚼する事数秒、アドレスを聞かれた事によろやく理解が追いついた私は慌てて携帯を取り出す。

「あ、ああっはい」

「じゃあ赤外線で……」

「セキガイセン？」

「ああ、アドレスって直接打つと手間がかかるんでこう、携帯同士を向け合って操作するだけで簡単にできるんです」

「へ〜」

物は試しと実際に目の前で実演する事に、さすがに買ったばかりで

はわからないようなので今回は操作をウチがやりながら

「っと、これであとはこの真ん中のボタンを押してもらえばオツケ
ーです」

「ボタンを押して…と、こっか？」

そう言っつて携帯の先をこちらに向けてくる音来さんに笑いが漏れそ
うになるのをこらえながら待つ事数秒

「…うお！何か来たっ」

「驚き過ぎですって」

「お待ちせしました、季節の特製 シーフードパスタのお客様」

アドレスを交換し終わってしばらく、携帯の操作方法を簡単に教え
ていると料理が来たので一時中断。

次々にテーブルに料理が並べられるが実はこれ、彼のおごりだつた
りする。最初はそれは申し訳ないと断つたのだが本人いわく「女性
に飯代出してもらおうようじゃ器が小さい」などと保護者の教育方
針の一環だつたらしい。なのでここは素直にごちそうになる事に

「うう、あの定員ぜって 笑つてたつて…」

確かに、料理を並べ終えた店員はそれまでのやり取りを聞いていた
のか口元に笑みを浮かべていたがあれは微笑ましいとかその類の笑
みだつたと思う。が、どうにも納得がいかないといった顔で先ほど
と同じように愚痴る音来さんだがフォークでパスタを巻き取る動作
は一定に口に納めていく

「あははは、そんな事言ってるってせつかくの料理がまずくなりますよ?」

「うん、まあそれもそっか。せつかくの飯だしな」

「そうですよ。あ、このパスタこの店の新作だそうで今クラスでも話題なんですよ?」

「へっつとそうだ、それだそれ」「はい?」

件のパスタにフォークを入れたまま固まるウチに唐突な一言、正直いきなりそれといわれても反応に困るのは普通さと思う

「なんだ、その、名前は普通に読んでくれるようになったんだけどいまだに口調が固いというか…もちっと崩したしゃべり方でもいいぞ?ここは学園じゃないんだしな」

その言葉にあ、と気付く、今朝出かける前にアキラから言われた『誤解されてるよ?』といったウチの会話を思い出す。確かに今日一日を振り返ってみると緊張していたのも合わさっていつも以上に口調が固かったかもしれない

「あ、でも、音来さんは先生ですから」

「ん、俺としては全くかまわないんだが…」

「いえ、そういわ…」

「……」

「あ、すみません」

突然なつた携帯、買ったばかりの音楽さんのそれに電話はかからないのでこれは当然ウチの方の携帯。かかってきたのをこれ幸いと一言断つてディスプレイを見るとそこに映っていたのは明石 ゆいな の文字

「はい、え？今携帯は買い終わつてお昼食べとる所やけど…へ？何でそんなこと知つて…：…なつ、そんなんちゃうて！ウチは今日案内で来とるんやから…ああ、もう！からかうのなし、もう切るで！」

目の前に持つてきた携帯の通話を切りテーブルの横に置いてため息をつく、本当にあの友人は突然何を言い出すんだろうか…

「なんかすごかつたんだけど…：どうしたんだ？」

「なんでもないです。ゆーなが突然掛けて来はったと思つたらいきなり変な事言うからちよつと疲れただけで…：はあく、この間もそうだったんですよ？」

「へへ、そいつは大変だなんだな」

そうして友人の電話から始まった愚痴から日頃の学園で友人達とのやり取りでこんな事があつたとか時には笑い話だったり苦労話だったり、饒舌になつていくといつの間にか音楽さんがくすくすと笑っているのに気付いた

「？な、なんで笑つてるんですか？」

「お、戻つちまつたかな？いや、さっきまで大分口調が柔らかくなつてたからな」

「あつ」

その返しに気付いて謝るも「さっきのままでもよかったのに」と返される。

「うーん、いきなりはきついかな、さっきの学校の話とかはいい感じだったんだがな…」

「よし、ついでだ！今日は買い物に行く予定だったんだろ？今日のお礼に俺がおごっちゃるっ」

「ええ！？」

「ん？なんか都合悪いかな？」

「いや、予定はないですけど…」

「なら決定！すいませ〜ん会計お願いしま〜すっ」

「あ、ちょっ」

突然の強引な提案に音来さんはそのまま会計をすますべくレジの方へと先に行ってしまう。ウチはというと呆気にとられて手を伸ばすも反応が遅れてそれは空をつかむ。

「うーん、あれってふつーにデートだよな？」

「多分？」

あの後レストランを出た二人はそのまま音楽さんが亜子を引つ張るような形で近くのショッピングモールへ、もともと今日みんなで来る予定の場所だったけど音楽さんはこの場所を知っていたんだろっか？

「あー、昨日そんなこと言ったっけ。へー意外」

ゆーなが言っているのは昨日の夕食時の会話の事だろう。そう言えばさっきのレストランも昨日の話題になった所だ。

今彼らは店舗の二画に入って亜子の服を選んだりして談笑している。我が友人は赤くなったり全力で首を振ったり、時々横の彼の事を見つめているが…本人は気付いているのだろうか？

「……気付いてないんだろうな」

「ん？どつとの？」

「あ、音楽先生アレ狙ってやってるのかな？って」

アレとは今までのセレクト、食事場所にしても店舗にしてもそうだが何より亜子の視線に気づいているのかどうか、見たところ亜子は待ち合わせ当初に比べれば緊張がうまい具合に抜けてきているだけだ…

「あ、無理っしょ、てか多分あれ天然ぽいところあるし」

「確かに…」

言い方は悪いけど今までが今まででなだけに否定できないところが痛い

「あ、クレープ！あそここの間雑誌に載ってたやつだよ」

いくつかの店舗も周り彼の手に荷物が少々増えたところで彼らの先にあるのはまき絵の言った通り今話題のクレープ屋、何でもプレートで“焼いた”アイスをベースにフルーツをふんだんにトッピングするそれが人気でこの間桜子達が騒いでいた店で私達もその時に雑誌で見せてもらったばかりだ。

「あゝ、そう言えばそんなのあったけ」

あの時の事を思い出しつつスイーツ談議に話を咲かせていると亜子もその店に気付いたのか視線をそちらに向ける

「お、おお??？」

亜子の視線に気づいた音来さんがその先を見ていくつかやり取りをした後、なんとそのままクレープ屋へと歩を進めるではないか。その後ろに慌てて付いていく亜子、どうやら彼女は遠慮したようだけども音来さんが少々強引に提案したようだ。会話は聞き取れないがその場面は容易に想像ができた。

「へ、あれは評価プラスだね 意外だ…」

「うん、解らなくないけど…まあいつもより積極的だね」

「いゝな」

買ったクレープを片手に歩いていく二人の姿は恋人同士みたいだ、はじめこそ微笑ましく見ていたがもはや案内というより普通にデー

トの流れじゃないだろうか？

と思考が若干それて来た所で突然音楽さんが亜子の頬に着いたクリムを指で拭いとり、その指をそのまま自分の口に持っていく。彼は笑顔で笑っているがされた側の亜子は後ろ姿でもわかるくらい耳までを真っ赤にしていて、はたから見ている私達はというと…

「……なんかむなしくなってきた」

「私も…」

そう思うなら始めから尾行などしなければよかったのではと思わなくもないが私も若干思う所があったので伏せておく。なんとというかごちそうさまというか八分目を上回るくらい見せつけられたようにゆーなの言いたいことも分からなくはない

「…帰る？」

「帰ろうか…」

いまさらな気もしなくもないが、このまま尾行を続けるのは悪い。今一度視線の先の親友に心の中でエールを送って三人で帰路に着く事にする。

「うーん、思ったより時間かかったねー。あ、そうだ！亜子が帰って来たときにお祝い何か買って帰らない？」

「お、いいね〜」

帰りながら今日の事を振り返りつつの提案、亜子にとっては緊張と驚きの部分が大きくて今日はお祝いとは違う気もするけど、どんな顔で帰ってくるのだろうか？

その時の親友の顔を思い浮かべつつ歩いているとマナーモードにしていた携帯が振動して着信を知らせてくれる。差出人は部活の先輩からの確認のメールだった

「あっ」

「ん？どうしたの？」

内容を読み進めて思い出した用事はトレーニング用と大会用のジャージを新調するという事で先輩から店に受け取りに行つて欲しいと頼まれていたことだった

その旨を二人に伝えると手伝いを申し出てくれたが丁重に断りを入れる。もともとレギュラーメンバー用のもので個人個人で受け取りに行く事になっていく事になっているものを先輩の分も頼まれただけで数はそれほどない、なので気持ちだけ受け取っておく事にする。

「うーん、アキラはこう言うわけっこう頑固だからねー」

「まあまあ、本人がいいって言ってるんだしいいでしょ、アキラは何かリクエストある？」

どうやら買い物をして帰る事は決定のようなので適当に甘さ控えめな物で頼んでここでわかることにするのだった

「ありがとうございました」

ジャージも4着となると以外とかさばる、お店の人が気を使ってくれて大きめの手提げをくれたのでありがたく使わせてもらいこうして店を後にする。時間的にはもう4時を回っているので大分時間が経ってしまった。

「それにしても…」

今日一日を振り返ってみると最初は抵抗があったけど親友の微笑ましい姿を思い返すに心暖まった気がしなくもない

「ってそれはさすがにダメだよ…ん？」

ふと見上げた先には道路を挟んで反対側の路肩でキョロキョロと辺りを見まわしている子猫が一匹、見たところこちらに渡ろうと窺っているようだ

「いや、まさかね」

この通りは片側2車線のような交通の激しいものではないがそれなりに車を通る、さらに今は夕方前という事もあって抜け道として利用者が多いのだ。

一瞬いやな光景が頭をよぎり頭を振るが、再度顔を上げたそこには

「あ!？」

飛び出した子猫とタイミングが重なるように対面を走るトラックが
一台

私は無意識にガードレールを飛び越えていた…

side:out

side:Ottoya・Narukami

その光景が目に入ったのは偶然だった。

忘れ物を取りに行った彼女を待つ間、ふと視線を投げた先にいた一匹の猫
いやな物を見たとき視線を目を逸らした次の瞬間視界の端で踊る黒い何か

それに目を向けたのも偶然、

目の前でこの後で起こるであろう事態を見て身体が動くのにわずかに
0.3秒

道に飛び出すと同時に身体に強化を施すのに0.2秒

うづくまるそれらを抱きかかえて片手で障壁を斜に構えるまでに0・5秒

わずか1秒のその出来事の後、背後で起こる大きな音、その着地とは言い難い音を耳に思考を再開して…

俺は激しく後悔した…

「やっちまった…」

人通りが少ないとはいえ街中での魔力行使、腕の中で震えるそれらを助けるためだったとはいえ一般人の目に入る可能性は0じゃない

が、目撃者はと周囲を窺うも付近に人影はなく、集まってくる気配は先ほどの轟音を聞き付けた野次馬だろう

「せ、先生…」

と、周囲に気を配っている間に顔を上げた彼女が俺に気付いたようだ俺はその目を受け必死に言い訳を脳内で組み立てる

「あゝ…その、大丈夫だったか、アキラ？」

「あ、その…あの…い、今の」

……ちやつかり気付いていたらしい…

確かに自分達の質量を遥かに超える物体が衝突して無事というのに説明がつかないだろう。実際、トラックは障壁の上を滑りあがっ

ただけで正面衝突という事態はないのだが
俺に目を向けるかたわら背後のトラックに視線を向けるあたり少し
は落ち着いてきたのか、困惑した表情は消えないものの何か非常識
な事態が起こったのは認識し始めたようだ

「どうやら、いよいよ言い逃れができないか…」

「あ、なんだ…その、みた…よな？」

非日常に彼女を巻き込んでしまった俺の不注意、その結果に激しく
後悔しつつ上にどう報告する頭を悩ませる俺だった…

おまけ

「……今なんて言いました？」

目の前で正座しつつ「土下座」というものをしながら報告してきた
主人に頭を押さえつつ事態をもう一度確認する。できれば聞き間違
いであってほしいが今日はエイプリルフルでもないし彼がその手
の冗談を言わない事はよく知っている……よってこれは…

「…アキラに魔法がばれました…」

「Why？」

「ちょ、まつ！」

ガチリと構える銃口に慌てたように弁明しようとするMasterだがその口は震えて用をなさないうた

「落ち着いて、状況説明をお願いしますMaster…いえ、何も“まだ”怒ってなどいませんので。ええ、本当に」

「いや、お前確實におこt…何でもないです…」

突き立てる右手で先を促すとポツリポツリと今日の夕方に起こった事態を説明をしていく

……

……

「……すると、車にひかれそうになった彼女を助けるためにトラックを浮かせてしまったと？」

「Yes」

「…なんとなくか、そのまま道路脇に避けていればまだ言い訳のしようもあつたものの、一歩間違えれば大勢の人に目撃されましたよね？」

「ウー」

「まあ、今回は人助けな面もあつたのでしようし、お説教はほどほ

どにしておきましょう」

「お？」

「ただし」「ひゃいっ」

年相応に首をすくませる姿に不覚にも二の句が喉に詰まりそうになるがここは心を鬼にして告げる事にする。

「今回の件についてはきちんと責任を持っていたいただきます。その後の処理はあなたらしいといえばあなたらしいですが…巻き込んだ以上解っていますね」

コクコクと頷き返すMasterにため息をもらしつつ脳内で学園側への報告を組み立てる。

本当に…手間のかかるMasterです

はい、そんな感じでした15話目。ベッタベタ！ベッタベッタやねん！！（笑笑

すいません私の文才では今はこれがいっぱいいっぱいですっ

もしかしたら今度修正するかも…

うん…読み返せば読み返すほど主人公が性格がかわってる気がする（汗

まあ、精神は身体に引つ張られるという理論のもと若干大人っぽくなっているのは仕様です（笑

そしてとうとう、やっときた主人公の魔法ばれ、いや、連載当初から魔法ばれはどこにしようかと考えていましたたが修学旅行じゃその後の学園祭編で絡みが薄くなりそうだな　という事で急遽考案したこの話、タイトルに先生の休日と銘うつていますがようは主人公とヒロイン候補達との絡みを描くためのはなしいですからね。ですので次話はある先生と魔法生徒との絡みが入ります。まあだれかはまだ伏せておきます例の彼女たちではないかもとだけ言っておきましようか（笑

で、今回からあとがきも少し短めにします、実は友人にあとがき長くない？などという言葉をいただきました…なので今後は1、2日おいて活動報告の方で交えながらあとがきのようなものを混ぜていくと思います。

ではこれ以上長くないように（汗

次回また会いましょう。今日まで足を運んでいただいた方にはご足労をおかけします。今後とも『副担任は借金教師』とトントンをよろしく願います。

では、再見！

取立16回目 く先生の休日なお話。 2日目 ついに起きた魔法バレー (前書き

はい、日をまたぎましたが16話目投稿です。

今回もまた長めのお話となっています。まあ、この先生の休日シリーズのしては比較的短めなのですが(汗

と、そんなこんなで量はあるのでこの辺に、続きはあとがき、活動報告にて

では、

本編をお楽しみください

取立16回目　先生の休日なお話。2日目　ついに起きた魔法パレ

「…来たか」

目の前にいる人は昨日私を救ってくれた人、いつものスーツでなくラフにベストとジーンズといった出で立ちはどう見ても私達と変わらない“一般人”に見える。

「悪かったなこんな早朝に」

「いえ、早起きは部活で慣れているので」

社交辞令のように会話を紡ぐ、はたから見たら教師が生徒を呼び出す、又は逢引…のように見えるのだろうか。が、今回に限ってはそんな甘い話ではない。

「……きたって事は、いいんだな？」

それは昨日の出来事の後、彼が私に述べた事実に対する解答。

「はい、一晩考えましたから。」

その答えを聞いて彼は渋い顔をするがこれは無視をする。

そう、すでにこれは私の中で答えの出た事、昨日一杯時間を使って悩みぬいた。

何しろ今までの世界観が変わる出来事だ、それを聞いて悩まないという方がおかしい

「…わかった、じゃあついてきてくれるか、会わせたい人がいる」
そう言つて一人先に歩きだす彼の後を慌てて追つた。

「……………」

進む中私達の間には会話は無い、正直今までの彼との雰囲気の違いに戸惑いがあったというのもある。あるいは私の中でまだ迷いがあったのかもしれない。

ふと先に行く彼の背中を見て昨日の事を思い浮かべる。あの時こうしていればなんてIfの物語がいくつか頭に浮かんでくるがどれも詮無い事、過ぎた事に「もし」なんて事がないのは分かっているつもりだ。

だけど、昨日の事はどうしようもなく思いだす。

歩きながら思い浮かべるのは、私が非日常へと巻き込まれた突然の出来事

胸に抱えた温かなそのぬくもりを感じながら身を固く、数瞬後に来るであろう衝撃に備える。今日は親友のデートを不本意ながら後を追う形となり、その後には部活の用事で受け取りからの帰りだった。これも親友の恋路に首を出し過ぎた罰かと馬鹿な考えも浮かぶもこうして飛びだした事に後悔の念はなかった。

一つ憂いがあるとしたら、この後死んでしまいかも知れない自分が友人や家族を悲しませてしまうのだろうという事。それだけが心残りで、そんな気持ちを振り払うように少しでも衝撃が無いように身を丸く、小さくする

が、いつまで待ってもそれは私の身体には訪れず、次の瞬間には大きな音と振動が伝わってきた。

いったい何がと思うより先にその時になって自分が誰かに抱きしめられている事に気付く

「やっちまった…」

不意に聞こえた聞き覚えのある声、それは先ほど友人と一緒にいたはずのもので

見上げた先には声の主が顔を歪めていた。がその表情は苦痛に歪んだものではなく何か自分の行為に後悔を抱いている、そんな表情だった

「せ、先生…」

周囲を確認している先生に習ってさつき音のした方向に目をやるとぶつかったはずのトラックが私達の背後で停止していた。それを見て一旦落ち着いてきた頭が思考を開始するも余計に混乱をきたす。

そもそも私達がこうして無事という事は車との衝突はなかった。常識的に考えて相手側が避けてこうなったはずである。そうすると必然的にトラックは対向車線側、もしくはガードレールに衝突していなければおかしい。どうやっても車が何もなかったようにまっすぐと後ろにあるという事態はあり得ない、それこそ車が私達を と通り抜けたり頭上を飛んだりしない限り不可能だ。

つまり、常識的に考えてこの光景は過程の成立しない異常ということになる

まさに非常識。そう、これではまるで……

「あゝ……その、大丈夫だったか、アキラ？」

いつの間にか思考しながら彼を見つめる結果になっていたようだ。その声に今胸に抱いた疑問と不可解な異常について言葉にしようとするも思った以上に混乱しているのか口が思考に追いつかない

「あ、その…あの…い、今の」

「あ、なんだ…その、みた…よな？」

私のそのつぶやきから何かを感じたのか、彼は目を瞑りため息を一つ、再度目を開いた表情には依然と後悔の色が窺えるも何かを決意したような表情で、そして、その目は私に謝っているようなどこか悲しい目をしていた

その後は場所を移して簡単な説明された衝撃の事実、

「そ、それじゃあ…さっきのは」

「…ああ、今言った通り『魔法』をつかってトラックを俺達の上に飛ばした。俺は、俗に言う魔法使ってことなる」

告げられたのはこれまた非現実的な事実、正直魔法なんて話が出てきてもとてじゃないが信じられない、たとえそれで先ほどの事態に説明がつくにしてもだ

「それで、こちら側のルールに従うと魔法に関して知られた場合は対象の記憶を消さなくちゃならん、この場合はお前だアキラ」

「……………」

「さもなければ俺が罰せられて最悪オコジョにされてしまう。いや、アキラからしたらほんと勝手な話だが……」

記憶の消去、又は改竄、これの必要性はわかる。魔法などという非常識な力が存在するのなら私達一般人はなすすべもない。いや、もちろん彼らが私達と敵対すること自体があるのかは考えすぎかもしれないがそういう存在に恐怖、虞を抱く人が少なくない事は知っている。

だからこそそういう事態に懸念しての罰則があるのもわかる。わかるがそれがオコジョにされるとはいかがなものだろう？

試しに自分に置き換えてみる事数分……………確かにいやかも微妙に…

「それで、私の記憶を消すの？」

「いや、俺は正直このルールはあんま好きじゃなくてな…ジジイ養父の教育方針で言うのもあったが無理やりというのがどうも好かん「え？じゃあ」ただな、悪いが俺もあんな齧歯類になるのはごめんなんだ、こうして説明という自己満足で建前を立てている。できれば納得してもらって記憶を消させてもらいたいんだが」

それた思考を切り替える事、これから起こるであろう事実の確認を含めた問いかけは思わぬ解答を返される事となる。それは結局は記憶を消すという事だが一方的な理不尽ではない。

「……そうなんだ」

「してもらいたいんだが、知り合いの記憶を消すというのもいい感じはしないからな…もしお前が今回の事を黙秘できるなら俺が責任を持ってこの件を預かる」

「え？」

今までの話に出て来たルールとは真逆の発言、それは自分が約束を守るなら記憶に関しては関与しないという事、つまり彼らのルールに背くという事だ

「で、でもそれじゃあ先生が」

「言つたる？俺はこのルールが嫌いなんだ。それにその先はお前が気にするような事じゃない」

そういつて笑いかけてくれる彼はいつもの表情で、まるで先ほどまでの非現実な話が嘘のように思える。が、それは紛れもない現実で事実だ。

正直答えはまだ出せていない。事実には頭が追いついていないのとど

こかでこれは夢じゃないかという逃避的な考えがめぐっている所為だ。付け加えるなら今の突然の提案に心が動きかけたという所もある。

「まあ、いきなりだったからそんなすぐには出ないだろ。といてもあまり時間はやれないから……明日の朝、答えを聞かせてほしい」

「それは」

「ほんと急がなくていいからな……まあ、それと……これはやりたくないんだが……『誓約の指輪』っていつてな、対象者が約束事を破った場合、ペアのもう一方の指輪が割れるようになってる。こうでもしなくちゃ他のやつらを納得させられないから……いい気はしないだろうが我慢してくれ、身体に影響するようなものじゃないから」

思わぬ展開にしり込みしていると彼はさらに提案をしてくる。

私は無意識に首を振って肯定表す。振ってから気付くもそれについては納得できる話であつたし、彼が信用できると根拠のない確信も手伝つてか、それは自然ととつていた行動だつた

そして私の手を取つた彼が目を瞑り、呪文のような言葉を唱える。すると一瞬掴まれた右手が強い光を放つたかと思うと光源は輪の形を取り私の中指に収まつた

「…これでよし、悪いなこんな事になつちまつて」

そう言つて謝る彼の右手の中指にも同じ指輪がおさめられている。これが『誓約の指輪』というものなんだろう。精巧な作りでもなくシンプルなりリングだつた

「いえ、私は助けてもらったんですしコレくらい…」

「そう言ってもらえると助かる。」

それにこれに関してはちゃんと納得した事だ、今の話を聞いてもこの程度なら当然だと思う。その旨を先生に伝えるときこちない笑顔で返された

「送ってやりたいところだけど今日は亜子との約束で来てもらったからな、悪いな」

「あ、この事、亜子は…」

そう、すっかり失念してただ彼は今日亜子との約束で街に来ている。私が今日来たのは偶然という事に充ているが、先ほどの話では亜子は携帯を前の前の店に忘れて取りに戻っているらしい、今こうしている間にも戻ってきているのなら彼女に心配させてしまうだろう。

そう、思いたって気付いた。この魔法まじくについて亜子は知っているのかと

「いや、誰にも言っていない。少なくともこっち側の関係者以外にはまだ誰にもばれていないからな」

「……そうなんだ、この事亜子には」「アキラ……」

「頼むから彼女には、いや、誰にも今回の事は言わないでくれ。友人に隠し事はつらいかもしれないがもしお前が話してしまったらお前もその相手も俺にはもう擁護できなくなる」

その思いは彼女には隠し事はしておきたくない、してほしくないという友人としての心配。出過ぎた行為かもしれないが彼女の気持ちを知っている以上つらいものがある

しかし、先生の言い分も理解はできる。私は助けられた側で庇われている。彼にこれ以上負担をかけるのも間違っていた。

「……ごめんなさい」

「いや、いいんだ。頼みごとをしているのはこっちだからな、お前が嘘や人をだますような事が嫌いな事は知ってるし友人を大事にしている事は解ってる」

そう言っただけ私の頭に手を置く彼はまたあの笑みを浮かべる。私はその掌に確かな温かさを感じながら彼の言葉を心の中で反復する。

今思うに、この時の私は確かに迷っていたのだろう。でも、答えは出ていたように思う

その後、寮に帰った私はその日起きた出来事を思い出しながら床に着いた。

私が帰ってしばらくして亜子も帰宅し、ゆーな達が質問攻めしていたがこの時の事はあまり覚えていない。その前の出来事が強烈過ぎたそうして一晩考えて悩んだ結果、私はここにいる。

そう、答えは『魔法に対する黙秘』。

今朝その旨を電話で伝えようとしたのだが本人が直接の方がいいとの事でこうして麻帆良の世界樹広場まで来た。そうして今、彼が会わせたい人がいるという事で世界樹裏の森を進んでいる。

麻帆良は広い面積を有している事から学園都市の名がつく。この広大な森林もその所以だが麻帆良の生徒が普段森の中に入る事は稀だ、何しろ木しかないここには森林浴にしろ散策にしろ広すぎる。もちろん部活動でここを訪れる人たちはいるが警備と安全の都合上本来は学園側への許可が必要になる

「…先生、その、会わせたい人って？」

森の中を淡々と進む私達だがすでにかかなりの距離を歩いているはずだ。

森の中は樹海とまではいかないがかなりの高さの木が立ち並んでいる。こうして同じような風景が続くとどうにも時間の感覚が狂う

「ああ、この学園にいる魔法関係者の一人でな、立ち会いという意味も含めて俺が頼んだんだ」

「なるほど…」

そうなるとこの場所は正解なのかもしれない、その魔法関係者がどういう経緯でかわったのかは解らないがこの場所は学園都市の中でも非常に排他的な場所でもある。そういった面から見て隠匿という事にはまさにうってつけなのだろう

「……………」

そうしてまた訪れる沈黙、ふと見上げた彼は振り返る事なく進む。その後ろ姿はやはりいつもの彼には見えなくてどこか違和感を覚える。

「……………待て」

不意に訪れた制止の声、それは前を行く彼のものだったがこぼれる言葉に緊迫した色がにじんんでいる

「ぎゅっし…」

どうしたのかとたずねる私の口に手をやり一歩後ろに出る彼はいつの間にとりだしたのか右手に短刀を握っていた

「…こんな時間から？ただのバカか策略か…後者は厄介だな…」

小声でつぶやくその声は聞きとりづらかったがそのつぶやきが止ま

ると同時に右手に持った短刀を投擲する
「ッ!？」

驚きの声ははたしてどちらのものだったのか、短刀が飛来したその向こうから異形の、額に角を生やした大きなバケモノが目の前に立っていた

「…てめえだけじゃねえだろ、隠れてないで出てこいよそのちっこいの」

先生の声に反応したのか背後に目の前のそれより二回りほど小さい異形が飛び出す。が、小さいといってもそれは前にいるものと比べの話。どちらも二メートルは優に超える体躯、額の角はさることながら瞳は紅く肌は土砂色、とてもじゃないがこれが現存する生き物なのかと疑いたくなってくる。

「せ、先生・・・」

「アキラ、予定変更だ…走れるか？」

前後に挟まれる形になった私達はそれを脱するために必然的に横に、森の奥へと後ずさる。

じりじりと迫るそれらを前に声をかける私の言葉に覆うように掛けられた彼の声、それはこの異形を前に逃げるといふ事を意味していた

「うん、でも先生は」

「俺は大丈夫だ、というより足止めがないときついからな、幸い他に心配はないからお前は先に逃げろ」

「そんな、それじゃあ」

「心配すんな、俺はこれでも結構つえ」

森の中でこれは静かすぎるのではないのかと

たとえ広大な土地といえどここは間違いなく森の中で、そこには鳥の鳴き声も木ノ葉が風に震える音さえもしない完全な無音

ありえない

『音』とはそこにものがあれば他との摩擦で空気に生じる。ましてやここは屋外の木が乱立する森の中、何も無いというのは本来ありえない

がしかし

そのありえないという現象はつい最近どこかで体験したものではなかったか

そうして思考がループしていく中、ドサリと突然この無音の世界に不協和音が鳴り響いた

振り向く首はまるで油の切れたブリキのそのようにぎこちなく、
しかし確実に背後へと向きを変え
私はその音源を見てしまった

それは日常ではまず見ない量のアカイ何か、白いキャンバスに絵具
をぶちまけたように広がるソレは視覚から脳へ情報を伝えるのに頭
が必死に理解を拒む

「ひっ
」

徐々に認識していくまるで時間の流れが緩やかにすぎるような感覚
にとらわれながら、私はとうとう理解してしまった

「せ、せん、せい あ、ああっ い、イヤ ツ！！
」

叫びながらも私はそれに駆けよる、頭ではそれは無駄だと、もうソ
レは助からないというどこか冷めた声に無理やり蓋をする。
倒れたそれを手が、服が紅く染まるのにも気にせず抱き起こすもい
つか感じた温もりはまるで水に触れるように熱を無くしている

「ウソだ だ、だって先生大丈夫だって 俺は強いからって

」

頭に浮かぶのは先ほどのやり取りと今まで彼が付けてくれた言葉の
数々、こうして触れていてもこれが現実だとは認められなかった

ミツケタ

不意に訪れた音階の外れた人外の声

びくりと肩を震わせて視線を向けたそこには音もなく立つ二つの異形、その内の片方が私の背丈ほどはあるうかという巨大な剣を持ち、その刃にはこの場と同じ、アカく斑に染まっていた

殺される

頭は逃げると身体に命令するも現実を受け止められないこの心がそれを阻害する。一步、また一步とゆっくり近づくとそれらに恐怖が積もるも心がそれを受け止めきれない、これが現実ではなく夢の中の出来事であるように、私はまるで画面の向こうから眺める他人事のようにそれを眺めていた

そして、

それらがあと数歩で私の目の前に来る所で不意に腕に抱えたそれから鼓動おとが聞こえた

「!?!」

生きてる？

顔を向けてみるとソレは先ほどまでの青い顔ではなく徐々に生氣を取り戻すように色づいてきている。心持ち腕に伝わる冷たさもどこか温かさが感じられた

生きている、まだ助かるかもしれない

その考えに何を馬鹿なと冷静な自分が諭そうとするもそれを殴りつけて黙らせる。

生きていた、まだできる事がある。この場を凌げばまだ助かる。不意に訪れた希望の可能性に私の心も伝染するように熱を持ち始める。

そうだ、戦う事は出来なくてもできる事はある。たとえ力が及ばなくても助けることはできる。

身体に力がこもる。

（どうしたらなんてわからない。けど、このまま黙っているなんてできない！）

そう思えば何だというのだろう。幸いこの身はひ弱なそれではない、普段でこそ嘆く事実には感謝し腕の中の彼を抱えなおす。

そこまでできてしかし、

頭上にかかる影を見上げて私は固まってしまった

目を逆光により一層影を増したその肌に二つの深紅の目、先ほどまで離れていたはずのそれらはいつの間にそこまで来ていたのか目の前で仁王に立っていた

失念していたわけではない、認識もしていた。ただ、目の前にふとわいた希望に抜けていた事態があった事を心が意識の向こうに追い遣っていただけだ

希望が一瞬にして絶望にかわる

逃げる？

どうやって？

先ほど必死に走った結果がこれだ、つまり彼らにとって私がいくらがむしゃらに走ろうと大したことではないという事、容易に追いつけるという事だ

ならば逃げるという事は到底不可能、ましてや人一人を抱えてその速度が落ちないわけではない、私の力もそこまで超人の域にはないのだ

「あ
」

力なく声が漏れる、もはや自分ではどうしようもなく抗いようもない現実。

逃げる逃げると煩く警鐘をならすが今度は完全に脚がすくんで動けない、積りに積った恐怖心がここに来て心を決壊させてしまったのだ

直視できない現実に顔を伏せて身を固くする

そしてようやく抱えていたものを私の両目がとらえた

「
」

今までまるで動けなかった彼が顔を歪めながらも両目を開き、震えながらも言葉を発しようとしているではないか

そしてその言葉を理解した瞬間、私に沸いた感情は自分の不甲斐ない弱さに対する怒りだった。

彼はこの状態になっても変わらない、あの時私を助けるためにあの場に残った時から変わらず、今も逃げると私に訴えていたのだ

これでどうして一人で逃げる事が出来ようか

否、力など関係なかった。さっき気付かされたばかりではないか、戦う事は出来なくてもできる事はあると

ああ、だけど

見上げた先には異形のそれが大きく腕を振り上げており、私は今だ脚も動かせない

助かるためにはどうしようもなく時間が足りず、気付くには遅すぎた

でも、

せめて動けるうちにと

私ばかりうじて動く腕に力を振り絞って彼を突き飛ばす

そして私が最後に見るのは驚きに目を見開く先生の顔と眼前に迫る鈍く光る鉄の塊だった

.....

.....

？

おかしい、死ぬというものはここまで何も感じないものなのだろうか？

私は先生を助けるために化け物に切られたはずで、それがこうして痛みも感じないという事はどうにも解せない

恐る恐る目を開くとそこには

私を見下ろしていたのだろう先生の顔が目の前に迫っていた

「！？」

思わず伸びた掌がクリーンヒットし先生の頬に大きな紅葉が浮かび上がっている

……あの場合は不可抗力だったと思う…

「あのく、大丈夫ですか？」

え？と顔を上げる。その声は第三者のものでどこかで聞いたもの
はずで

「桜咲さん？え、何で？？？」

「もう少し寝ていなさい。幻だったとはいえ精神にかかっていた負
荷は相当なものだったんですから」

そう言っただけで起き上がった私を寝かしつけるのは学園教師でもある刀
子先生。

倒されるままに横になるもしかし、いよいよ混乱が頂点に達する。

先ほどの疲労感はずっと残っていたはずなのに身体は依然として正
常だ。何よりあの瞬間文字通り目の前に迫った刃を私は今も覚えて
いる。

「せ、先生、怪物は…」

そうだ、何よりも先ほどの光景が鮮明に脳裏によみがえった今、こ
うして私達は助かったというのは事実だ。しかし、二人ともこうし
て無傷なのはどうにも理解ができない。

「刀子さん」

「は、現実との混同、よくある後遺症です。さほど問題ではな
いですが…やはりやりすぎだったんじゃないですか、音楽先生？」

「あははは、いや まあコレくらいしないと納得してもらえなかったでしょ？」

その声にはっとする。

そうだ、起きがけの出来事の衝撃でつい確認していなかったが彼は怪我をしていたはず、それも重度のだ

慌てて振り返るとそこにはバツが悪いとばかりに頭をかく先生がいた…

その身体は今朝会った時と寸分も変わらず傷に対する手当の後も見受けられない

「え、あの、先生…怪我は…」

震える指の先が彼を指し目の端に涙が滲む

が、次に彼が放った言葉はその喜びに対する感動を一瞬にして吹き飛ばす衝撃だった

「あ、すまん。さっきまでの全部幻覚なんだわ」
「はい？」

まですった…

目の前の彼女の表情に事態が予想の斜め上を言ってしまった事を俺は理解した。理解したがこう、女性に泣かれると弱いのは男として甲斐性とかその他もろもろひっくるめて仕方のない事だと弁明したい。

なので事情を説明するためにとりあえず簡潔に事実を述べて謝る事にしたのだが…俺の選択はどうやら間違いだったらしい…

事情を説明した当初は彼女もまだ理解できていないのか呆けたような顔をしていたが、今現在アキラは目の端を赤くしているが涙は引いている…とりあえずは…

それよりも問題なのは彼女が非常に厳しい表情で俺を睨んでいるという事だ

正直この事態は誠に想定外なので俺は困惑の極みだ。極みなのだがその迫力に押されて現在反射的に土下座で謝っている俺がいる。

その後ろに立つ桜咲達をちらりと見やるが現状手を差し伸べる気はないようだ。

先ほどまでアキラが見ていた幻術を確認していただろう刹那も因果応報とばかりに目で返されてしまった

そもそも何故このような事態になっていうのか、事態は昨日の夜、学園長に件の事件を報告した事から始まる。

。結論からいえば今回の件に関してはお咎め無し、現場の状態から止むを得ないとの事。その後数点の注意を受けてアキラに関する処置はこちらの進言通り彼女の意思を尊重することになった。が、世の中そう思い通りに行くはずもなく、もし彼女が記憶の消去を拒否して黙秘となる場合に条件を設けられた。それが魔法先生同席のもと行われる資質試験というようなもの、要は信用に足るかどうかのテストである。

テストに求められたものは『魔法に関わるといふ事の危険性を認識させる事』、『危機的状況下での判断力』の二点。前者はさすがに素人である一般人に実体験させるわけにはいかないので幻術にての疑似体験、後者は判断力の他にその状況でどのような行動を取るのかという答えにおいて解答の無い問題、その行動が魔法使い、ひいては魔法に関わるといふ事から“立派な魔法使い”という理念に対しての精神面に重きを置いたテストだ

“立派な魔法使い”というごく一般的な魔法使いはまず目指しているだろう目標、正直俺はその理想とやらにあまり共感できるたぢではないが関係者の多くを納得させるためにも必要な事なのだろう。何しろ今回の事はイレギュラー中のイレギュラー、魔力の無い一般人に魔法の存在を認識させたままにいるというのだから

そして今回同席することになったのは神鳴流剣士、葛葉 刀子先生。学園長に相談する前にちょうど魔法生徒を指導していると聞いた事を思い出し事前に打ち明けたからでもあったのだが、その際には非常に怒られました。

閑話休題

そして解散後の打ち合わせの結果、彼女の監視の下麻帆良の世界樹奥の森で行われる事に俺が担当するのは幻術の維持、彼女は人払い

と幻術の最初の導入を担当してもらった事になったのだがこの分量の不均等さに異を唱えた所「刹那を助手として連れていくので問題はない」と言いきられてしまった。俺としてはまだ魔法生徒に知られるのはまずいのではないかと思っただがもし魔法に関わるのなら近くに教師以外の協力は会った方がいいとの事。また実力もあり、クラスメイトという環境の近さから彼女は適任だとこの事で納得する事に

そうして訪れた当日、アキラが魔法の黙秘を望みそのまま移動、本人には全くの説明の無い抜き打ちのテストになってしまったが予定通りこれを実行。結果、俺は右頬に大きな紅葉をいただき、そのまま彼女の無言の重圧に耐える事となっている。

「あ、あの大河内さん」

とここで小さくなる俺を哀れと思ったのか時間が無為に進む事に痺れを切らしたのか桜咲から助け船が入り、葛葉先生もそれに同乗する形でこれまでの経緯が説明される。

一通り話されてアキラも理解はしたようだがやはりどこか納得はできていないようだ。

(そんなにひどい体験だったろうか?)

そんな事を考えつつ自分がイメージさせた幻術を自分の中で反復し膝を折り地につくという姿勢のままの状態で待つ事十数分、ようやくアキラから許しの声がかかった

「まあ彼も悪気があつた話じゃないから許してあげてね。」

「はあ」

「なんとなくか、彼がやり過ぎるのはいつもの事だけど。歳が幼いという事もあるから」

「「イッ！」「え？」」

不意に漏れた俺の実年齢の事実、これは現在学園長、タカミチを除くと学園側では彼女しか知らない事なのだが…

「あ、もしかして説明してなかったの？」

確かにアキラに魔法の事を教える上で俺の実年齢と身体の変化の事は話す予定だった。けどそれはある程度落ち着いてからのつもりであつて、ましてや桜咲という第三者がいる状態で話す事は毛頭なかったのだが、話に出た以上はどうしようもない

謝ってくる葛葉先生にもととの予定だから問題ないと断り、俺は事情を説明する事にする。

「……はあ、まあなんだ、俺本当は10歳だから」

なんだか魔法がばれてから芋蔓式に秘密が吐露されていく気がして頭痛がしてくる。

そう言えばネギ君もそんな状態だったかと頭の隅で思いつつ目の前の二人に説明を続ける俺だった

side:out

「俺本当は10歳だから」

「……………」

告げられた事実的思考が理解に至るまで数秒、私と桜咲さんは同時に驚愕の声をあげていた。

「え　　っ!?!」

軽い、話の流れからとても重要な事なのだと思ったのだが予想に反してその語りは軽い。

（10才といえばネギ先生と同じ年? いや、それよりも先生の姿はどう見ても二十歳過ぎで…あれ? え??）

軽いがその衝撃は意外と大きい、何しろ半年以上担任だった先生が実は10才の少年だというのだ

つい先ほど幻覚という形で魔法を実体験したばかりだとはいえさすがにこれは信じ難かった

「で、では今の姿は魔法で偽装しているのですか? 西洋魔術でもそ

ういうものあるとは聞きましたがここまでの練度のものは見た事がありません」

「ああ、魔法とは違うかな？何ていうか、体質？」

「はい？」

「うーん、こればかりは気付いた時からできたからな。まあ、桜咲が見てもわからないのは無理ないと思うぞ。DNAでも採取しない限り判別は不可能らしいからな」

「なんだか専門的な用語が飛び出しているが知識の浅い今の私にはよくわからない部分が多い、かろうじてその『変化』というものが特異な事はわかったのだが」

「じゃ、じゃあ本当に先生は本当に……」

「おう、なんなら元の姿見せてやろうか？疲れるけど」

「え？」

「とってむんつと力んだ先生の周りに煙が漂い……」

「どうだ？うーん、やっぱり身長が縮むのは……（ボソリ）」

はれたそこには10才くらいのだぼだぼになった服を纏った男の子が言葉通りにどうだと言わんばかりに胸を張っていた

髪は確かに同じ金色でいつも雑に整えていたショートもより短髪と違った長さで瞳もどこか幼く、顔も丸い、先生の子供というよりも普段の先生を知っている側としては先生の子供と言われた方がどこか納得できる。成人の状態は子供がいるような年齢ではないが……

「何か聞きたい事はあるか？」

「あ、うん…煙が出るのはやっぱり仕様なの？」

「ああ、ソレは魔法だな。なんかこういきなり急成長したり退化すると時々スプラッタな絵になる時があるらしくてな、仲間内で苦情があつたからそれ以来こうしてるんだ。なんならそっちも見るか？」

「…………遠慮しておきます…………」

本来緩やかに成長していくものを急激に成長させるのだからそれは多少なり絵がおかしくなるのもわからなくもない、もちろんそれを実際に見たいという好奇心も無いが…

「っと、話が半分それだな。本題は…こればかりは俺じゃ基準は計れないからな…どうでした？」

と話題を急激に転換した音楽先生が尋ねたのは刀子先生、今回の試験は彼女に一任されているそうなのだ。

普段がクールなイメージの強い先生だが凜とした佇まいにこちらを見つめてくる瞳はどこか温度が覚めているようで私の緊張をあおる。「最後の行動は少々驚かされましたが、概ね問題はないと思われませす。刹那から聞いた普段の生活態度にも特に問題は見受けられませんし、合格といつてもいいでしょう。」

「それじゃあ…ただしっ」「」

「最後の行動については“立派な魔法使い”としては立派な心掛けです。ですが少々自己犠牲のきらいが強いですね、良心的にみるのなら美談ですがアレが現実ならあなたは死んでいます」

その言葉に先ほどの光景がよみがえり

「…なにも責めているわけではありませんよ」
「え？」

「今言ったようにそれは立派な事で褒めるべき事です。後半の注意は魔法は関係なく先生としての言葉ね。この刹那にも言える事なんだけど、大河内さんもまだまだ子供なんだからその歳から無理しすぎる事はないのよ？そのために私達先生はいるんだから」

そう言ってほほ笑んでくれるのは普段も見せないような柔らかい表情で

「これからいろいろ大変だろうけど頑張ってね。」
「っはい！」

「ようこそ、夢と魔法の世界へ、ってか？」

「先生……」

刀子先生の激励に合わせて彼も言葉を乗せてくれる。その口調はいつもの言い回しだが声のトーンはいつもより高いテノールで

「……その格好のままだとシニールだねその台詞」
「ぐっ」

私の指摘にオーバーアクションで表情を歪めるその姿もいつも浮かべるシニカルな所が抜けてどこか愛らしい、時たま見せる幼いように感じた行動もこうしてみるとなるほど、実年齢が10歳というのもうなずける

「…はあ、担当は不服だろうが俺だ。まあ、よろしくな」

そう言つてそつぽを向きながら手を差し出す彼にその言い方がまたらしくて苦笑が漏れる。
そうして漏れた笑いに彼が若干顔を赤くして手を引こうとするがそれよりも早くその手を取る

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

今日、彼に会つた時後悔はないかと聞かれてそのまま肯定した。
その後の出来事は驚きと衝撃の連続で、正直つらいと感じた事もあった。

でも、
今聞かれたら、私は笑顔で答えられるのだらうとそう不意に思ったのだ

おまけ

「そう言えばこれから私はどうすればいいんですか？」

一通り話を聞き終えての休憩中、ふと今後どう過ごしていくのか疑問に思ったので先生達に尋ねる事にする。

「ああ、素養を見ながら護身程度の術は学んでもらおうと思ってる。俺じゃ気の方は門外漢だからそういう意味で今日は葛葉先生に見てもらおうと来てもらったんだが……」

「やりすぎですね…、監督役としては今日これ以上負担をかけるのは認められません」

「ですよね〜」

「あははは（苦笑）」

刀子先生に音楽先生が確認を取るもばつさりと切り捨てられる。まあ、今回のアレに関しては私もやり過ぎだと思う

「…まあその件に関しては了承しましょう。あなた一人ではどうも指導には不安ですし」

「さいですか、（失敗したか？どうもアインと同じで小煩そうだなこのおb）」

「今なんて言いました？」

チャキリ

(刀を首筋に持つてくる音)

「い、イエナニモツ」

「いえ、今私の聞き間違いじゃなかったら確かにOBASANと…」

「いやっそんな事言っていないし、第一そんな心の声を……は!？」

ゴゴゴゴ

(聞こえるはずの無い重圧の音と殺気)

「フ、フッフッフッフッフ、どうやら少々お話をする必要がありそうですね」

「いや、そんなちよ、まっ」

「刹那」

「はいっ」

「私達は少々向こうで今後のお話をしていますからあなたは彼女もまだわからない事が多いと思うからその間話してあげなさい。ええ、こちらもすぐにすみますから」

「ウソだ！絶対違うだろ！てかその手にもった抜き身の刀は何!? 真剣構えた話し合いつて何さ!？ねえ、聞いてます?ねえ………」

そうして森の奥へと抗議の声もむなしく引きずられていく音楽先生…一瞬合った目が助けを求めているように見えたが「ゴメン」とこれまた目線で返す

そんな彼に心の中で手を合わせておくのは忘れない

「……行っちゃったね」

「そうですね…」

「何かイメージと大分違う姿が見えた気がする」

「普段はもつと冷静沈着でとてもたよりになるんですよ？」

そう言つて顔は笑っている彼女だけど語尾が疑問形だ。
察するに彼女にとつても意外な光景だったのだろう。

「あ、そうだ。これからよろしくね桜咲さん」

「あ、こちらこそ」

普段から知っている中なのにこうして初めて会つたように挨拶を交わす事にこそばゆさを覚えつつこういうのもいいなと自然と笑顔になる

そうして軽く魔法についてや桜咲さんの話を聞いたりして時間をつぶす。

この日、私には新しい友人と二人の先生ができた。

追記

その後、幻覚で見た光景とまではいかないもののボロボロになって帰ってきた音楽先生を見て、刀子先生だけは怒らせないようにしようと言つた一日の終わりだった。(まる)

はい、そんな感じになりました16話、今回はアキラ視点を中心でお送りしています。それに伴い文章の書き方を少々変えて表現しています。今までにも何度かありましたがなにぶん作者もよりいいものにと模索しながら書いているので、もちろん読んでいただく方々に混乱の無いよう抑えてはいるつもりですが…

と、そんなウチ話はこのくらいにして、今回のお話の内容をば
今回登場していただいたのは神鳴流師弟こと、葛葉 刀子教諭と桜咲 刹那女子でした。作中にて彼女達を選んだ理由は書き込んでいますが伝わったでしょうか？まあ、出番は少ないんですけどね、今回のお話はアキラメインですから、魔法先生と魔法生徒登場という事で登場してもらいましたが同じ魔法生徒なら例の『麻帆良の脱げ女』の名をほしいままにしている彼女の方が有名なんですけどね。彼女の場合今回の事件に関しては否定的になって主人公と衝突しかなさそうなので今回は出番なしで。あ、もちろん彼女も妹分ともに今後登場しますよ？ただ主人公とぶつかるにしても今回の話は主人公が自分の非を理解していますから一方的になりそうで、できれば対等にぶつかりあえる舞台でという作者の希望です。
他にも案は会ったんですけどね、そこは活動報告の方で…てかここまででも十分ながいし（笑

さて、それではこの辺で今回は終わりますがその前に次回もとい、おまけの番外編の連絡をば、時間で言うと明日の朝からお昼辺りに投稿します。個人的に今日は夜遅くまで起きてなくてはいけなくなつたので、ええ、お酒を飲まされる接待的なものなんですけどね。
（泣）という訳で時間は不定期ですが少なくとも1時には投稿していると思います。短めの内容ですがどうかご覧ください。

では、ここらで失礼を

ここまでお読みいただきありがとうございます。次回もまた目に
留まるよう切に願って。それではごきげんよう（笑）再見ッ！

取立休止日 番外編1〜遅れましたな大晦日、予告もあるですよ。〜(前書き)

はい、おまけ、番外編投稿です

少々予定の時間から遅れた事は平に謝罪させていただきます。

誠に申し訳ありません

さて、はじめに注意事項の確認です。これはおまけと称した本編ネタばれ企画です。前半は普通の番外編ですが後半のものは予告した学園祭編での台詞から抽出しています。途中詳しく注意書きをそえましたので一度目を通しておいってください。

本編の方は今までのものと比べると少々密の薄いものとなっておりますが、楽しんでいただけるよう精いっぱい作りました。

では、前書きもこの辺で、どうぞ本編の方、ご覧ください。

取立休止日 番外編1 遅れましたな大晦日、予告もあるですよ。

「あゝ、終わんね っ」

「ぼやく暇があるなら手を動かしてください、本来の作業外のものを引き受けたのはMasterなんですから」

「ハイハイ、」

寮内の倉庫を探索する事1時間ほど、目的のものはすでに見つかっている。

さかのぼる事3時間ほど前、ネギ君の新任祝いに寮の前でパーティーをする事になったのだが生徒の人数分の料理を作る環境はないためどうするかと思案を巡らせていた事から始まる。

当初は超包子の路面電車を持ってくる話になるつかという所、寮付近の線路が大分離れているため断念…一部「そんなものあってないようなモノネ」などという不穩当極まりない話を聞いたがもちろん無視、無許可の工事を容認できるほど責任転換は不可能だった。

よって俺が否定した所、逆に案を提出するように迫られ、いつかの倉庫整理の際炊き出し用のものなのか巨大な釜などを数点発見したのでそれを進言した所トントン拍子でそれを使う事になり、現在俺はこうして埃にまみれつつも掘り出し発掘作業中なのである。

「ケホツコホ…にしても年末に整理したばかりなのにもう埃がすごいな」

「もともとの釜は昔学園内工事に来ていた職人に料理を振舞うた

めにできたものらしいですからね、学園が発展していった今は使われなかったのでしょうか」

長い髪を作業の邪魔にならないよう結びあげたアインは文句を言いつつも結局手伝ってくれる。そのありがたみと安請け合いしてしまった自覚から猛省中な俺である

「…そう言えば年末もこんな事があったな」

「? ああ、ネギ少年が来る前の事でしたか」「そうそう」

アレは確か年末の『大掃除』のイベントが終わった翌日の事、大晦日を前日に控えた30日の話である。

「……………」

平日ながら学園もないその日、俺は何故か内職をやる破目になっている。

何故このような事態になったのかというと、簡単にいえば今日は年末大晦日前との事で「大掃除」なるものなのだそうだ。

日曜のサラリーマンではないが、休日のはんびりとした派の俺としては誠に遺憾である。あるのだが普段この手の事をアインに任せきりな身分としては頼まれた以上断りづらい訳で、結果こうして黙々と作業に勤しんでいるのである。

「アイン、これはどっちだ？」

「それはゴミに出しましょう。備品の数は足りそうですか？」

相方の指示を受けて手に持ったのくすんだ蛍光灯を廃棄用の段ボールに詰めていく。

これらの作業が始まってすでに半日ほど、積まれた箱は数多く部屋の隅に追いやられる。が、これがなかなか終わらない。

作業事態は一昨日から昨日までの二日間を使った学生と共に行うまさに『大掃除』なる大行事だ。もちろん不人気な分類ではある。学生が参加するのはその29日のみでその翌日である今日はその日までにまとめた粗大ごみなどのチェックや管理人室内にある備品の整理などを行う。

始めは備品の確認くらいとタカをくくっていたが…悔るなかれ、何しろ小中高、果ては大学まであるマンモス校。その学生寮の一つなのだ、蛍光灯一つとってもその量たるや半端な数ではない。

「一…二…三………備品分が三つの廃棄が四、全部で七つってずいぶんとまあこんなに溜ってるもんだな…」

「…そうですね、小分けに出して欲しいというのは同意しますが、例年と比べると大分マシになったようです。」

「マジ？」「マジです」

その言葉に嘘か誠かと疑いたくなるもアインのデータに関しては確かなので経験上間違いない。間違いないが信用と信頼は同じではないと思う。目の前の倉庫に広がる備品の山にため息もつきたくなるというものだ

「終わるのかコレ？」

「計算上は日をまたがない程度には終わる予定です」

「……………さいですか……………」

やはりため息しか出てこない…………

「先生、いるー？」

備品整理も終わり、ストックを倉庫から管理人室に運んでそのまま休憩をしていた俺達の部屋に訪れた来訪者は神楽坂だった。

「あ、アインさんもいたんだ、こんにちわ」

とノックもなく入ってくるのは非常に彼女らしくて元気があるのだが、アインにあって俺に挨拶がないのはなぜだろう…………

「あー、どうしたこんな時間に」

「うーん、何か大晦日は里帰りする子が多いみたいだから今いる子で鍋パーティーしようって事になっちゃって」

あははと苦笑を浮かべる事から多分鍋を借りに来たんだろう。管理

入室には常時必要数しかないが時々卒業生が家具や食器類をそのまま寄付していくので残っているのだ。もちろん広いとはいえそんなものを置いておくスペースは限られているのでほとんどは倉庫行きとなっている。

新しく入寮した生徒が家具をそろえたり学費の面で大変な苦学生もいるのでそういった場合にとられる処置用の備品扱いのものだが時たまこうして生徒に貸し出す事がある。

「はあ、何もこんな忙しい時に頼まなくてもいいだろうに…」

「あはは、わるかったって。」

キーロッカーから倉庫の鍵を取り出しながら玄関に向かうもその顔は苦笑を浮かべつつ明るい顔だ。全く本当に悪いと思っているのかどうか

「まったく、ほら、今倉庫から出してきてやるからちよっと待ってる。いくつ必要なんだ？」

そうして必要数を聞き出した後、一階の倉庫から大きめの土鍋を指定の3つを取り出して上の階に戻る。本来休憩中のはずがとんだ仕事になってしまった。

鍋も届け終わり、休憩もそこそこに作業を再開する。

「はあ、年末はこんな忙しいのか…」

向こうの世界にいたところは各地を転々としていたので年末も何もなかった、ギルドに戻るのも成果報告ぐらいでそのまま次の任務へ出てしまうので正直に言うところ言った事とは無縁だ。

「まあ、Masterの場合は仕方ありませんが、魔法世界のギルドでもこういったものはありましたよ？といつても規模が大分違いますが…」

「ギルドか…そう言えばこれだけの長期な任務も初めてだよな…」

傭兵仕事といつても内容は様々、行商・要人の護衛や魔獣退治、他にはダンジョン探索など多岐にわたるが対人の戦争関連においてはいつもジジイが突っぱねていた。こうした長期任務も珍しくはないがここまでの長さで内容が不鮮明なものは更に稀だ

「……………」

「……………ホームシックですか？」

「ぶっ！！」

突然の相方の指摘に驚いて吹き出してしまふ。今はお茶等を含んでいなかったため幸い二次的被害は回避されたが

「っ！てめえ、何いきなりキメエこと言っつてやがるっ！？」

「？違つたのですか？」

「ぐっ」

俺が抗議を上げようとするが純な目で首をかしげながら返すその姿に他意は見受けられず、こちらは牙をそがれてしまう。

「Masterはギルドマスターの方針で長期のもので1ヶ月に及びそうな任務は除外されていましたがこのような任務には他惑いもあるかと思っただのですが」

「…ありゃあジジイが過保護なんだよ…」

矛先を養父に向けてぶつくさと返しながら手は作業を再開させる。アインもこちらを見つつ作業を再開したようだがその顔に浮かんでいる笑みにも納得がいかないものがある。

その後、終始俺が養父への不満がと口連ねアインが相槌を打ちつつ作業を進め作業もようやく全体の1/3を残す所になった所で、窓の外で日がすでに沈みかけている事に気がつく

「そろそろ休憩にして飯にするか。おい、アイン、おっじゃましまーす!」……マジで邪魔したな……」

「おじゃまします」

そう言いつつこれまたノックもなく入ってきたのは明石&アキラの二人組、もちろん問答無用で元気良く入ってきた前者が明石なのはいうまでもない。

「お、二人ともいるねちょうどよかった。ちよつち二人を呼んでくるように頼まれてさ、悪いけど来てもらってもいいかな」

「いや、確かに作業はひと段落したがまだ残って「じゃあOKだよね？はい、いったいつたー」…オイ、人の話を…」

話を聞けと言おうにも聞く耳もたんとはかりに返され背中を押されるままに玄関へと追いやられる。

そうして引きずられるようにして到着した寮の一室前、正直言つてこの時の俺は無理やり連れてこられた事もあつて苛立っていた。

「…で、何なんだ？つまらない用事だったんなら俺はかえり」

「まあまあ、慌てなさんなつて。はい、二名様ごあんない」「お、おいっ」

そうして押しやられるように入ったの先で待っていたのは神楽咲、近衛、古、長瀬、龍宮の五人、何とも節操の無いデコボコな組み合わせでこれが何なのか正直理解が追いつかない。

「ホラ先生。そんな所に突っ立てないで、ささ、座って座って」

促されるまま案内されて気付いたのはテーブルをつき合せた上に置かれた三つの土鍋。そう、昼間神楽坂に頼まれて出したあの品だ。

「これ…」

「うん、日頃お世話になつてるお礼になつて事でみんなで考えたんだ。他のメンバーにも声かけたんだけどさすがに年末は帰郷する人が多くて、あ、でも食材を持ってきてくれた人もいたんだよ？」

指摘されたように所狭しと鍋に入れられた食材達はそれだけではなく机の横に切りそろえられた第二陣も大量に山になっていた

「提案したのはアスナなんやで？」

「べ、別にお礼とかそんなんじゃ・・ただみんなで食べる方が賑やかでいいと思っただけで…」

近衛の指摘に照れたような面を見せる神楽坂に一言お礼を言う。返されたお礼に一層慌てふためく姿が印象的だった

その姿に苦笑を浮かべるもあまり笑いすぎると彼女は激怒してしまつたろうと一旦顔を引き締め、促されるまま俺とアインも席につき、ご相伴にあずかる。

「さ、具は一杯あるからじゃんじゃん食べてな」

「じゃあ！肉々っ」「野菜も食べなあかんえ」

三人集まれば何とやら、集まったメンバーはいつもならあまり見られない組み合わせだが和気藹々と鍋を囲んでいるとそれらはまるで気にならない些細な事だと気付く

「ホームシックになる暇はなさそうですね…」

「ああ、そうだな」

感傷に浸るのもガラではないかと取り皿に盛りつけられたものを一口一口に放り込む。それは普段食べる鍋とそう変わりはないが周りの雰囲気と相まってとても温かくて

「うん、うまいや」

非常においしかった

「……うまかったけどな、あれはいくらなんでも多すぎだったろ」

「確かにいくら九人でも量は不釣り合いなほど多かったですからね。残らなかったのが不思議なくらいでした」

「ああ、最後にうどんを出された時には顔が引きつりかけたからな……」

口に出るのは文句ではあるが顔に出たのは笑みであり、あの時の出来事は麻帆良マホウにきてよかったと思えたとても暖まる体験だった。そうして話しながらも最後の釜を出し、今日の催しも騒がしくも温かな、そして笑いの絶えない時間になるのだらうと思いを巡らせる。あれからもう3カ月、俺も生徒とは大分打解け、始めは不慣れだった仕事にも順応していく。思えば喧騒と笑いの絶えない日々だったが不思議と鬱になる事もなく今日を迎えている。きっとこの充実感とそれに伴う忙しさもこれから彼女らが卒業するまでつき纏う事になる事なのだらう。

最近多くなってきたため息を一つおく、それはいつもの重いものではなくこれからをむかえるためのはんば癖になった動作。

さて、

「今日もがんばりますか」

おまけ

*～注意書き～

本作は学園祭編の後編の一部を書き上げたネタばれ企画です。原作の流れとしては麻帆良武道大会が終わったあたりからです。文字通り激しくネタばれを含んでいますのでもしかしたら読まれないう方がいいかもしれません

今回は予告としての雰囲気伝えるだけのものですので台詞と少量の心理描写のみの投稿となっております。皆様存分に想像ください。また、実際に学園祭編を投稿する際には加筆や調整の為、一部改変する恐れがあります。予めご了承ください。

では、これより学園祭編後編
れが始まりますが……

話

話分より抽出したネタば

よろしいですね？

本当にかまいませんね？

では

はじまりはじまり〜

「い、いやあっ！見ないで！…！」

突然の事態に思考が停止する。俺はたんに案内された控室の扉をあけただけなのだが、どうやらタイミングは最悪だったらしい…

「あ、あの！明日っ わ、私と学園祭まわっていただけないでしょうかっ！」

突然の告白、正直それを告げた時私は頭が真っ白になっていてその時の事をよく覚えていない。ただ返事が肯定だった事がうれしくて舞い上がっていたんだと思う。そして、

「今日は楽しかった ありがとうな」

別れ際の夕方、彼が返してくれた笑顔に左胸の鼓動が一つ跳ね上がるのを自覚しながら赤くなる顔を見られないように私も伏せるように頭を下げる。幸い、今は夕暮れ時というのもあっただろうが私は自分の頬の変化を悟られないように終始必死だった

「フフツ待っていたネ。音来さん」

「断る、あいつらを裏切ってまで」

「へ戻れるとしてもカ？」

その邂逅が必然だったのかはわからないけど、今俺の立ち位置に後悔はない、自身の選択が間違っていると罵られようと成し遂げると俺はあの人に誓った。たとえそれが望まれない事でも、その言葉が現実となるのなら……俺は鬼にも悪魔にもなってみせる

「そんな　　なんであなたが　　」

「ふむ、一応紹介しておこうか　　私達いや、私の協力者の一人、鳴守　音弥先生ネ　　」

彼は　無表情でこちらを見据えたまま、楓と私を前に、超　鈴音を庇う様に立っていた

「驚いたな。まるで別人だ……OK、

そう睨まないでくれ。で、なんて呼べばいいんだい、雷帝さん？」

「……俺は俺の為だけに動いている、誰の為でも無い。俺の邪魔をするなら」

誰だろうと踏み潰す、たとえ元生徒でもだ、例外はない」

返す言葉にはまるで淀みがなく、瞳に迷いは一切見られなかった。死も恐れない、目的の為に手段を選ばない。そう言った人間を私は多く見てきた。そして私はそれらを越えてここにいる。奇しくも立ち位置は同じだが彼の瞳はすべてを敵に回してもやり遂げる。そう、今この場にいる私でさえも、あるいはオーナーである超 鈴音でさえも妨げになるなら容赦はしないと、その瞳は雄弁に語っていた

「ネギ君っ」

「木乃香さん……」

「今は、今はそっとしておいてあげよ？ 気持ちに整理がつかないんや、無理につついたらしたらあかん」

「……そうですね、わかりました」

音弥さん……っ

あなたは何をしているんですかっ

取立休止日 番外編1〜遅れましたな大晦日、予告もあるですよ。〜(後書き)

さて番外編企画、いかがだったでしょうか？

大晦日と銘うちました但实际上は思いつ話の大晦日前夜のお話です。

なので2月に新任してくるネギ先生は登場してきません(笑)

本来は去年のくれように作成したのですが時期が過ぎてしまったのでお蔵入りに、ただ埃をかぶせておくのはどうかという事で今回アクセス感謝と銘うって企画として出させていただきました。

ネタばれに関してはこんな感じですよ。一部文も入りましたがこれくらいで…さすがにラストのやり取りは入れられないんで(汗)これでご容赦ください。

まあ、あれですよ。今まで能天気な部分が目立ってきましたがある出来事を機に主人公が急成長を遂げます(精神的に)それがかなり影響しているのとお仕事モードがこの学園祭で初めてフルに発動するので主人公は超 鈴音よりも悪役っぽい感じになっていきますね。一部台詞からも滲み出ているような気もしますが…本編こんなもんじやないですよ(笑)

それとこの学園祭編では主人公の心理描写がかなり減っています。他のキャラの心情を中心にするので…ああ、また主人公がいじけそうな(笑笑)

そんな学園祭編、まだかなり先という事でつい予告したくなって書いてしまいました (苦笑)

作者こと豚×2は猛烈に反省しています。が後悔はしていません。どうか温かい目で見守ってやってください。

さて、次回はいよいよエヴァンジェリン登場、通称吸血鬼編？です。
ようやく登場する『夜の女王（自称）』に加え、ウルスラの彼女達
も彼女も登場する予定です。

では、本編でまた。お楽しみに、再見！

取立17回目　く久々に警備へ駆り出される先生と桜通りの邂逅。く（前書き）

はい、お時間いただきました17話投稿です。

今回から始まるエヴァ編、最初は今までより少々少なめの分量となつています。まあ、それでも一万弱あるんですけどね（苦笑）

まあ、前書きが長いのもなんなんですいつものごとくまたあとがきの方で、

それでは本日も『副担任は借金教師』、どうぞ最後までご覧ください

取立17回目　く久々に警備へ駆り出される先生と桜通りの邂逅。く

side: Evangeline . A . K . McDowell

「……それで、その後の調査はどうなんだ？茶々丸」

夜、春とはいえまだ冷える寒空の下、私は従者と共に校舎の一角に佇み眼下の光景を眺める。

魔力補充の狩りと共に最近の習慣になった行為を行いながら問う私に傍らに待機している従者は答える。

「はい、残念ながら現状、彼の情報に関しては進展はありません。」

「やはり、か…現状こうして実力の片鱗程度は見られるが…」

警備と名をうったこの作業も自分に宛がわれれば気だるい行為ではない。が、それがこうして対象の観察に使えるのだから世の中わからないものだ。惜しむらくは…

「相手がまるで役に立たない雑魚だという点が問題だな。これでは収集の甲斐もないではないか」

そう、目下のところ我らが副担任が全力で戦う所を見た事はない。西の者か、はたまた要人狙いの外部組織の者かは興味の範疇外だが

「こうも一方的にやられてはあまりにも不甲斐ないというものだ
「マスター、失礼ですが学園の警備上そのような敵が来られても困
るので、仮に実力者が来た場合でも招集されるのはマスターで
はないかと」

「……確かに、あのクソジジイめ」

再度眼下を眺めつつここにいない学園長に悪態をつく

実を言うとあの鳴守などという人間には一度接触を謀ろうとした事がある。その際には魔力をほんの少しちらつかせた程度だが、奴め鈍いのか演技なのかまるで反応を示さなかったのだ。その上その時の事がばれてタカミチ経由で学園長から釘を刺される。本来歯牙にもかける必要はないがヤツの呪いの所為で力と魔力の大部分を失っている今麻帆良の有用性は高い、加えて満月でもない限り学園側を敵に回すのは骨が折れるのだ。忌々しい事に…

いや、付け加えるならこうして強化した肉眼でも確認できる程度の距離で気付かないあの男にここまで慎重になっている自分に情けなくなってくるが、こればかりはどうにもならない。500年を越す歳月を重ねた私の勳が告げるのだ、奴の時より漂わせる血なまぐささとその行動はまるで闇の眷属じゆうくのそれのようであると、そして我が計画を進める上でこの上ない障害になると

そうして思考から視界に意識を置いてしばらく、その戦闘はほどなく終わる。

内容を言えばとても戦いといえるものではなかったが…

「今日もこちらの収穫はなしか…つまらん」

「データは取りました。後程確認されますか？」

後ろに控えた従者がその目に納めた記録を提示する。

確かに茶々丸の記録した映像は高画質だ、魔力を解さない以上逆に騙しにもかかりづらく解析という点では私よりも優れている。もっとも、経験がまだ足りないのが惜しい所だが…機械とはいえ生後二歳の従者にそれはまだ荷が重かろうと頭を振る。

「いらん、どうせ大差ない事だ。それより…今日の獲物が来たよ
うだ」

所はなれて網を張っていた桜通り、夜道を走る少女は一人桃のような色の髪を風にさらされている。

「出席番号16番、佐々木まき絵さんですか…よろしいのですか？
彼等に直接関わりがあるものを対象にして」

「かまわんさ、何せ狩りに撒き餌はつきものだ。」

そう、かかるのあの傭兵だろうがヤツの息子だろうとどちらでもいい。奴がかかれば大量の魔力が手に入り、このような少量の吸血などする必要もなくなる。つまりあの担任の子供を相手にするのによ
り最良の舞台が整う。逆にあの子供先生がかかるならそれはそれだ。従者の確認できない今、よほど不測の事態がない限り遅れを取る事
はないだろう。そうなればこの忌々しい呪いも打ち碎かれる。どち
らにしる大量の魔力が望めるのだから

その瞬間を想像して思わず高揚してしまう身体を冷ますように、眷
属で編まれた外套をひるがえす。

が、口元に浮かぶ笑みはゆるまず私の力の象徴である犬歯は早くも疼き出す。

「それに、緊張感の無い狩りほどつまらんものはないからな、せいぜい楽しませてもらうさ」

そう、これはあくまでも狩りなのだ。目の前に魔力と呪解というこ馳走を得るために兎戯、だが手心を加えるつもりはかけらもない。そのためにも、今はこうして血が必要なのだ。

15年をかけた我が悲願、用意は万全にして優雅に、されど油断は無く華麗に勝利の頂に立って見せよう

そうして今宵の獲物前に降り立つ。

姿は陽炎のように、しかしその存在は確かここにあり
私は告げる

「佐々木まき絵……お前には悪いがその血、頂かせてもらう」

s i d e : o u t

「クシユンッ」

「ずいぶん可愛らしくしゃみだな。何だ、風邪かい？」

時刻は後数刻も経てば深夜になるかという時、俺は最近よく組むメンバーと共に夜の警備を終えた所だ。ちなみに今夜の侵入者は召喚された低級悪魔の30体による編成部隊、上位種がいるわけでもなく召喚者も姿を見せないので適当に戯れた後で瞬殺させてもらった。

「うるせーっ大人だつて風邪くらいひかあ」

春になったとはいえ夜は冷え込む、ましてや戦闘で中途半端に身体が温まったところで今日は終了してしまったので火照りが覚めるのも早い。そのため急激に冷える身体がくしゃみを強要しようと仕方がない事に思う。

なので、女性にしては長身にして実年齢以上に見える相方にそう悪態をつくも身体その事を告げれば戦闘中だろうと誤射と称して流れ弾が飛来しかねないのでそれだけは心にしまっておく。

「はは、すまんすまん。からかうつもりはなかったんだが」

「…お前最近ぜってえ俺の事子供扱いしてるだろ……」

俺のその言動に傍らの刀を携えた少女が苦笑いを浮かべるが彼女にしてみれば俺の実年齢を知っているのだからこの会話も大した茶番だろう。

「龍宮も、先生をからかうのはそのくらいにしておけ」

「おっと、思わぬ所から援護射撃だな。最近仲がいいけど何かい？二人は交際でも始めたのかな？」

「なっなにを！」

「いやなに、最近常々思うんだが…今日の戦闘の連携一つ見ても最初あんなに険悪だった（一方的に）二人があれだけ息の合ったコンビネーションを見せるようになってきたら…さすがに喧嘩の度に仲裁していた私としては気になる所なんだけど」

「ぐっ、そ、それは…単に最近稽古を一緒にするようになっただけ」

「ふむ、つまり二人っきりのプライベートレッスンということか」「な!？」

いろいろ飛躍した龍宮の発言に反論しようとするもしどろもどろになつてしまう刹那。が、その正論も更なるからかいの餌食となる。心持ち龍宮の表情が生き生きとしているのは気のせいではないだろう。

本人にしてみたら疚しい部分はないのだからもつと堂々としていれればいいものだが、彼女からすれば今のような話題には耐性がないのだろう。落ち着いて正論を述べるも顔は赤くなつたままだ

「教師と生徒がそういうのはあまりよろしくはないと思うが…そのところはどうなんだい先生？」

ここで傍観に徹していたこちらに矛先が向かう。龍宮の言にこちらを縋る様に見やる刹那だが…生憎とこの身はからかうのは好きでも

からかわれるのは大の苦手である。というか嫌いだ。つまり俺はMではなくSであると断言させてもらおう。

若干話がおかしな方向へ寄った気もするが、つまり

「ああ、刹那は素直で真直ぐだからな（剣技が）、がさつな俺としては学ぶ面もあって楽しいよ（剣技で）」

「音楽さん!？」「ほう、既に名前を呼び合う関係にあると…」

俺もその行為に便乗したということである。肯定も肯定、聞き方によつては更なる誤解を招きかねない発言だが、龍宮の顔を見る限りこちらの心算は概ね理解できているようだ。俺の発言に驚愕の声をあげる刹那に彼女は更に追撃の言葉を浴びせていく

「龍宮、あれは先生の言い回しが変わるだけで何も私達はそんな関係では…いやそもそもその稽古というのも…」

「ああ、大河内の件だろ？これでも、朝倉ほどじゃないが情報には疎くはないんでね。ん？なんだ刹那？そんなに顔を赤くして」

「……龍宮、お前始めからわかっていただろ…」

「さて、何のことやら…」

そのコメントは言うなれば肯定、あんにYesといっているようなもので、当然それを聞いた刹那は頬を引きつらせて先に進んでしまふ。その後姿たるや「私、怒っています」と字が書いてあるかの如くオーラのようなものが吹き出ている

「あーあ、行っちゃまった…やりすぎじゃないの?」

「そう言う先生もノリノリだった気がするけど?」

「いや、だって…ねえ？」

「ノーコメントだなその辺は」

最近わかってきた刹那の表情の豊さについからかいすぎてしまうのはしょうがないと思う。

龍宮と共に刹那が進む先へ視線をやりながら苦笑し、この後どのようにして機嫌を直してもらうかと思考をめぐらす俺だった。

翌朝、いつも通りに起床し、いつも通りに従者に挨拶を交わし、いつも通りの時間に通勤し、いつもの様に生徒と挨拶を交わす。新学期ながら極々普通の朝。

「先生おっはよ　っ」

「おお、おはよう。っってお前ら、急ぐのは分かるが廊下は走るなよ　っ」

元気よく返事を返されるもそのまま速度を緩めず去る生徒。s
毎日がお祭り騒ぎとはいかないまでも賑やかなここはこの程度の喧騒は序の口だ。

「は　、平和だね　」

一見爺臭い干渉の一言ものどかな朝の雰囲気についこぼれてしまう。魔法世界にいた頃は忙しく流れていた時間もこちらの世界ではほぼ毎日がゆったりと平和に流れる。それも魔法先生等の日々の努力の結果なのだが、それに自分が含まれるという事実はどこか充足感を覚える中

そんな日常に非日常はやってきた…

「まき絵が倒れたって!？」

「音来さん、声っ」

口元に指を立てるジェスチャーをする目の前の子供先生に自分が大声を発したことに気付き、慌てて周りに頭を下げる。

時刻はHRを終えて今の時間は学年毎に身体測定を行っている時間だ。当然職員にして男である教員諸君が教室に居場所などあるはずもなく、HR後はこうして職員室で大気中なのだ。かくいう俺もその待機組み、正確に言えば今日から新学期、ネギが学園に正式採用されてから初の学校となる今日はタカミチ等の先達のアドバイスをもたらった結果、補佐の俺はその役目を休み、こうして暇つぶしと称してクロスワードパズル（隠蔽の為カバーのみ変更）に挑んでいたのだが

「いえ、あの、倒れたというわけではなくて…」

俺の大声に驚いて最初是要領を得なかったが次第に落ち着いてきたのかゆっくりと説明してくれた。要するに昨日の夜帰ってこなかったまき絵が今朝桜通りで寝ていたのを発見されたそうなのだ。寮に

帰っていないのが発覚した当初は何か事件と心配されたが

幸い本人に外傷はなく、事件性も無いとの事だが例の噂も流れる中で桜通りで事が起こった為にクラスではその話でもちきりだそうだ

「あの、音来さんは『桜通りの吸血鬼』ってどう思いますか？」

「ん？」

彼が言う『桜通りの吸血鬼』というのは最近寮で話題になっている噂のことだ。何でも満月の夜になると真黒な布に包まれた吸血鬼が現れるという割りとどこにでもありそうな怪談話ではあるが…ネギは教師になったとはいえ10歳だこの手の話は苦手なのだろう。俺は不安そうな顔でたずねる彼にそう結論付けて頭の上に手を置いてやる

「安心しな、大抵その手の話ってのは噂好きとか悪戯好きがよく流すゴシップだ。」

「え？」

「まあ、寮の近くで寝ていたってのはちょっと問題だからな、俺も見回りとか念をおしとくから安心しとけ」

「音来さん見回りしてるんですか？」

「ああ、最近噂が広まってから強化したんだがな。こういうのが流れると噂好きとか興味本位のやつらがうるつき出すからな。注意してもきりが無いってのホント」

なお聞き返す彼を安心させる為に置いた手で撫でやる。

座っているとはいえ互いの身長差もあってはたから見たその姿は弟をあやす兄にも見えなくもない。なでてる本人は無自覚のなのだがこつした行為が少年を彼へと尊敬させる一因にも思える。音来本人

がそれを自覚しているかは別問題ではあるが

「っと、そろそろ時間じゃないのか？」

「え？あ！本当だ、戻らないとっ」

ネギがあわてて時間を確認したように時計の針はLHRの時間をさしている。

本日は身体測定で授業自体はないため彼はこれから教室に戻らなくてはならない。

立ち去る彼を廊下まで見送り、その慌てように苦笑をもらしてしまっ

「ふ、行ったか…どう思う？」

「そうですね、疲労状態によっては昏倒して道で寝ているということとも考えられますが…」

「ま、見てみなくちゃ分からんか」

傍らに控えた彼女に問うも答えには窮するようだ。

通常生徒が倒れればそれは問題ではあるがそれは対面的なことであり、PTAや親御への対応に追われることもある。が、麻帆良においては意味合いが違ってくる。

昨夜未帰宅の生徒が翌日に外で発見される、それも普通は寝ないであろう場所だ、警備において一般的にも魔法的にも嚴重なことで悟られないとなるとどうもきな臭い話になってくる。

といっても会い方が言いかけたように今の証言だけではまだ結論には至れない。

俺たちはとりあえずは発見されたという彼女の見舞いに行くことにした

「……見た感じ本当に外傷はないけど」

放課後、通常の業務を終えた俺とアインは保健室で休んでいるというまき絵の様子を見に来たのだが彼女は眠ったまま目を覚ます様子はなかった。一見すると保険医が診断したとおりただ眠っているだけで、顔色一つ見ても疲労や病気などの気は見られないのだが

「…そうですね、スキャンにもそのように…」

「アイン？」

横で観察していたアインが急にその雰囲気緊張をまとわせる。そもそもこの場に医療に縁のないがいても大して意味はない。そのため身体をスキャンできるアインを連れてきたのだが

「Master、微弱ながら彼女の体内に魔力の残滓が見られます」「何？」

「ええ、ごく少量な上、反応も微弱なのでMasterが気付かないのも無理はありません。しかし…」

「まあ、そうなりや普通の事件とはいかないだろうな」

確かに一般人の中で生まれつき魔力を有したものが生まれてくると

いうことはありえる。麻帆良の地も霊験あらたかな土地柄上、そういったケースが多いのもわかるが

俺が知っている限りまき絵はごく普通の一般人だ。それが倒れて発見された、しかも魔力の混入形跡があつた上でだ、まず間違いなく魔法がらみの事件といえる。

が、昨日は最近の噂もあつて警備は強まってきた。いくら俺が魔力の探知に劣っていたとしても機能のメンバーは刹那と龍宮もいたのだ、彼女たちがそうそう見逃すとは考えにくいのだが…

「…Masterは『桜通りの吸血鬼』についてどう思っているんですか？」

「確かに吸血鬼といえば魔力の混入があつても不思議じゃないがここは旧世界だぞ？それも魔法使いお抱えの学園だ、そんな厄介なもんが紛れ込んでるなら即効で…なんだそのため息は」

「いえ、ちょっと脳波に異常が…何でもありません」

といつて頭おさえる姿はまるで頭痛に悩まされる際のそのようので俺にはまるで分からない。

「…Masterの担当クラスにエヴァンジェリンという生徒がいますね？」

「ああ、あの後ろの廊下側にいる生徒だろ？いや、初めは驚いたよな、何せあの『闇の福音』と同姓同名のやつがこんな極東の国にいるなんてな」

「……………彼女本物ですよ……………」

「はい？」

俺の発言に心底呆れたというふうなため息をばく我が相棒

「……………エヴァンジェリンってあの『不死の魔法使い』の?」

「はい、『人形使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』のご本人です」

「いや、ちょっとまって」

彼女の言いたい事もわからなくはないが今のエヴァンジェリンはどう見ても一般人と大差ない程度のはずだ。とてもじゃないが魔法界で一種のナマハゲ的な知名度を持つ有名人には見えない。それに『闇の福音』といえばその妖艶な姿も有名でとてもじゃないが中学に通っている彼女からは似ても似つかない

「公式には倒されたと発表されていますが実際はこうして学園にいます。おそらく封印に近い状態なのでしょうがその際の相手は『千の呪文を持つ男』であるネギ先生の父君です。」

「やばいな、だとするとネギが襲われる危険性があるんじゃないか?」

『千の呪文を持つ男』の英雄であるネギの父親は正式な発表で行方不明となっているが実際には死亡説が有力になってきている。もしエヴァンジェリンのその封印とやらが彼よるものでいまだ解かれていないのなら解呪にしろ報復にしろその実子たるネギは狙われている確率が高い

「どうします、保護しますか?」

「…いや、アインはとりあえず学園長に報告に行ってくれ。俺は一応ネギを尾行してみる」

「警護ではないんですね…」

「当たり前だろ？いくらピンチでも頼り癖も助け癖もためにならん」

「…と言いつつ、いざとなれば助けるのでしょうか」

「…時と場合による」

俺の返答になにやら生暖かい視線を返される。時たまこの相棒はこうして俺をからかうのだがやはり数を重ねてもこの手のことには耐性が無く、どうにも居心地が悪い

「いいから、お前はさっさと学園長の所についてこいっ」

傍らで苦笑を返す従者を追いやり俺も仕事につくことにする。なんとも奇妙な出だしになってしまった

「で、夜になっても学園長は見つからないと…本当、何考えてるのかねあの爺さんは」

時刻は夕刻を過ぎ、日も完全に落ちきっている。頭上にはお詠えむきに満月なぞ浮かび、まさに噂通りなシュチエーションとなっている

る。

その後アインに学園長を探してもらってもこの時間まで発見はできないそうだ。

その人外的な容姿に見合わず彼は神隠しよっかいのように姿を消せるのではないかと疑いたくなるこの頃である

閑話休題

そしてそんな中俺は建物の一角を陣取り桜通りを見張っているネギを監視している。彼が一度寮に戻った時からつけているのだがもうかれこれ3時間以上、通りを利用する生徒も噂の所為で少なく、いてもグループで通るものがほとんどだ

「ん？あれは…」

ようやく人が来たと思ったらそれは神楽坂、近衛、早乙女、綾瀬、宮崎の五人組という見知った顔ぶれだった。

(何でこんな時間に帰ってるんだよ)

内心愚痴りたくなるも気を引き締めなおして視線を戻すとそこには宮崎が一人分かれて桜通りに差し掛かる。すると…

「おいおい、本当に出てきたよ」

噂通りに黒い外套を身に纏った黒い小さな影が降り立つ。

その風貌に驚愕の顔を浮かべる宮崎にお構いもせずそれは襲い掛かる。俺はもしもの為にあらかじめ用意していた短刀を手に身構えるも間髪いれずネギがそこへ飛び出し、吸血鬼目掛けて『風の矢』を放つ。

狙いは変わらず、込められた魔力も十歳のそれとは思得ないほどの練度を持つ。さすがはメルディアナ主席卒業生と感心するもしかし、今宵の敵はそのすべてをはじき返して見せた。

あれだけの魔力が込められた『魔法の射手』を抵抗でもなく、相殺でもなく弾いたという事はやはり相当の実力をうかがわせるが、解せない点が一つ、彼女は魔法の発動に触媒を介しているのだ。

「…どうやら、封印されてるっていうのは本当っぽいな」

その確信を裏付けるように数回のやり取りをした後、懐から魔法薬を2つ取り出す。残念ながらこの距離では彼女らの会話は聞き取ることができない。いくら視力を強化しているとはいえ読唇術の心得も無くば周囲の音源を拾う様な魔法も無い、仮にあったとしても『闇の福音』相手では容易く気取られてしまうだろう。といってもこの距離でさえ気付かれていないかは怪しいものだが

再度目を向けると状況が変化しており、宮崎を心配して戻ってきただろう神楽坂と近衛がそこに現れる。何回か話を交わしたネギは逃走したと思われるエヴァを追いかける為に宮崎を預けて去る。

「さて、ぼちぼち俺も移動するとしますかね」

駆けるネギの速さはその速度は風の系譜の魔法が得意だということがかがえる。こちらはばれないように追いかけては行けないので魔力を抑えると共に距離を開ける。職業柄追跡という行為はそれなりに経験しているので同年代とはいえ敵を追う少年に気取られ

る心配は無いがその敵が敵なので用心を重ねるのにこしたことはない。

「精霊召喚の誘導から武装解除か、決め手には欠けるけどいい手だな」

前方で展開される魔法戦を眺めつも状況は佳境に入り、ネギは建物の上へとエヴァを追い詰める。それを確認し、俺も5軒離れた屋根の上に降り立つ。見たところ『武装解除』を食らったエヴァは文字通り下着を残して丸腰だ。ネギは王手とばかりに詰め寄る。なんらおかしくはない、相手は武器も持たない、魔法薬も無ければ魔法も使えない相手なのだ、これで捕らえればネギの勝ちである

そう、

この場にいたのが彼らだけならば…

突然振って現れた第三者、その容姿に見合わぬ音をあげて降り立ったのは出席番号10番、絡繰 茶々丸その人だ。

新手と事態をすばやく認識したネギは早くも攻勢に出ようと魔力を練り上げる。が、こと魔法戦において敵に数で劣るといふのは致命的だ。

俊足といわんばかりの速度でネギに接近した茶々丸はそのままネギの額を弾いて呪文の詠唱を止める。

ようは後から現れた茶々丸がエヴァの従者だったという話だ。魔法

使いは通常詠唱の際にどうしても無防備にならざるおえない、それを補うのがパートナー、つまり『魔法使いの従者』となるわけだ。もちろん麻帆良に来て2ヶ月そこらのネギにはパートナーたる協力者はいない。形勢は一気に逆転し、あつという間にネギの劣勢となり、羽交い絞めという形で捉えられる。

少々その際のやり取りに遠目ながら情けないものを感じたがこれもしょうがない、何しろ彼は魔法学校を卒業して半年も経っていない。いくら主席とはいえそこまでの魔法戦を望むのは酷というものだ。むしろ先ほどまでの追撃を見るならなかなか気概のある攻防であった。

「は、いや、あんなもんだろ……じゃあない、フォワード『転送』パルチザン107番」

転送魔法に所有する武器の中にはギルドの対人無殺生の理念の為、殺傷能力を殺したいわゆる刃引きを施した物がある。今回呼び出した100番代がそれに当たり、当然エヴァンジェリンのような高位の魔法使いともなると刃引いた槍ではいくら強化してもその障壁に遮られ文字通り刃が立たない。が、今回に限っていえば気を逸らす事が目的なのでこれで十分。視力の強化を気持ち強めて腕を振りかぶり、刃に『雷の矢』を補正力として纏わせて投擲の構えを取る。

「必殺（即席）　雷刃そ『あゝ、音来君聞こえるかの？』……何だ学園長……」

何事も興をそがれるというのは気分が悪い、それも出鼻を挫かれるともなると尚悪い。なので聞き返す言葉に棘が含まれそうになっても仕方のないことだろう。一瞬、投げかけた得物をそのまま学園長

室に投げ込んでやろうかと考えるもこれは自重、その後の請求等その他もろもろと名のついた報復が容易に想像がつく。いい加減俺も学んできたということだ。

「いや、アイン君から連絡を受けての、エヴァンジェリンのことなんじゃが」

「今取り込み中だ、これ終わったらそっち行くから後にしてくれ」

“ん、そうしてもよいがほれ、もう終わったようじゃぞ？”

「へ？」

念話に気をとられている間に状況はまたもや変化、どうやってその場に現れたのか先ほど別れた筈の神楽坂が跳び蹴りにて介入し、なんと真祖の障壁を貫通して見せるなどという離れ業をやって見せたではないか

あまりにも非現実的な光景に呆気にとられるも状況に興をそがれたのかエヴァはそのまま逃走、エヴァは空中で茶々丸に抱えられて8階という高さもものともせず着地、そのままネギ達を残して闇夜に消えていった

“じゃ、そういつわけ早くの”

「あ、おいっ…ツチ切りやがった」

状況にいまいち釈然としないものがあるがもともとはこちらが呼んだものなのだから行かないわけには行かない。たとえそれが偶然茶々を入れた相手でも…

今一度なぎたちの様子を確認し、俺もその場を後にした

はい、そんな感じでした！

どうでしたかね？エヴァっぽくなっていきますかね？といても直接の語りは冒頭の部分だけです。エヴァは今後主人公と結構深くかわわっていく予定なので出番は増えていきます。（修学旅行編はしようがないけど（汗））

感じとしてはSっ気の強いエヴァを書きたいんですがいかがでしょう？個人的には主人公にからかわれるエヴァというのも楽しそうなんです。がまだいまいち想像ができないので…こ、これからがんばっていく予定ですっ

さて、本編、コミックで言うと2話分、大体38ページ分とこれまたスローな出だしですがこれからじゃんじゃん進んでいきます。プロットはもう決まっています。後は肉付けだけなので。話数としては今話も入れて4話分で終わらせたいのですがもしかしたら後1話増えて5話になるかも…いや、執筆って楽しいっすよね？（汗）それと大体の今後の文字数としましても右往左往しないように1万前後、または1万を超えたあたりできりがいい所で次話にまわす形をとっていく予定です。もちろんおまけに関しては例外となります。が極力15000は超えないようにしようかと

と、そんな感じとなります。

では、今回も本作品をお読みいただきありがとうございます。

今後とも精進してまいりますのでなにとぞご鼻屑に、よろしく願います。

それでは、再見ッ！

取立18回目　く麻帆良に訪れた侵入者、先生は容赦ねえとです。く（前書き）

はい、少々、というか一日投稿が遅れてしまつて誠に申し訳ない豚
×2です。

さて、とうとうやってきた18話目、原作にしてまだ3巻の内容との
らりくらしときていますがどうか最後までお付き合いいただきたく、
今後投稿の遅れがないようにしたいです（汗

では何時ものごとく前書きはこの辺で本編の方をどうぞ！

取立18回目　く麻帆良に訪れた侵入者、先生は容赦ねえとです。く

「は？不干涉ですか？」

深夜の突然の呼び出し、少々不機嫌といったオーラを噴出させながら訪れた学園長室。

そこで告げられた事はいつかの様に本件に関する不干涉。浮かぶ思いはデジャビュと猜疑心、激しくヤな予感しかない

「うむ、アイン君の報告にあつた推察どおり彼女は確かに『闇の福音』じゃ」

「おい、マジかよ…」Master、口調「つと、本当でありますか？」

「ふむ、疑いたくなる気持ちも分かるが事実じゃ。あれはちよいと訳あつて力を封じられておつての、大して悪さはできんからそう心配することも無いじゃろ」

「大してつて…あのですね」

既に実害は出ているのだ、こうして佐々木　まき絵という近しい人に被害が及んでいる。いや、噂がその前から出ている以上被害者は確実に彼女だけじゃないだろう。それをこちらが知らない事実…

「真祖の吸血鬼において吸血行為というのは愚者ゲイルと違い本能とまた

隔離できるはずの物、生命維持にも支障は無いものはずですが…」

「まさか、学園長は彼女の行為を容認してるんですか？」

「いや、そういうわけではない…ただの、」

「事実上、彼女はこの学園の警備に携わっておる。察する通り彼女の肩書きから異を唱えるものもある。じゃが、彼女の力が必要なのも事実なのじゃ、君達と同様にの」

つまりは、俺たちも彼女と同様に危険視されているのだろう。更に言えばそこそこの実力を持った傭兵と神祖の吸血鬼の衝突、あるいは邂逅は学園側において不利益にしかならないと

学園長であるこの目の前の翁がどういう心積もりでいるのかは理解の外だがそういうものが組織内部で少なくないと注意を促しているのだろう。

「……過大評価だと思えますけどね…」

「そう言わんでくれ、組織の長としては過小評価はできんのだじゃ」

「はい、いいですよ、どうせ毎度のことですから…。わかりました
今回に関しては極力不干渉で行きましょう」

「おお、わかってくれたか」「ただ、」

「こちらの前任である彼の監視、補助の任が最優先と判断します。よって彼に対し不測の事態となればこの限りとなりませんが、よろしいか？」

あんに今回のような邪魔立ては容認しないという警告を込めて、語尾と周囲に纏う雰囲気を張り詰めらせる

しかし、学園長たる本人は柳のようにそれを受け流し飄々と返してその確信には触れさせない。

一般人でも意識は軽く刈れるだろう密度を持った殺気、それを込めた重圧も目の前の翁にはどこ吹く風か

「あんたも十分化物じみてるよ……」

「ホッ、何のことか？」

なおもとぼける爺に付き合いきれないと退室するために踵を返す

収穫とはいえ得た情報はもちろんぼかした物でこの問答にどこまで意味があつたのか

進む足取りは入室時のそれより重く、予想通りな出来事ではなかった

side:Ain・Recode

朝、何時ものように起床し、何時ものようにMasterを起こし、この日、何時もと少々変わって徐々にMasterと共に寮を出る。

何時もと少し流れの変わった朝の陽気は春を迎えるもこの時間はまだ冷える。といってもコートが必要な寒さでもなく、人の不覚醒な意識を引き締めるのにはちょうどいい外気だ。

道すがら行きかう生徒に挨拶を交わしながらのゆったりとした時間。そんな中行く道を進むと大きな通りに差し掛かり、そこには淡く芽吹いた花は力強く儂く咲き誇っている。

訂正、

何時もと少し違ったこの日の朝は何時ものように冷えるも、目に映る景色はどこか暖かだった

……

……

「……更に訂正、何ですかあれは……」

眼前に広がる美しい花舞うこの通りで生徒たちは心持ち余裕を余裕を持って登校するもその足取りは少し速く
そんなほほえましい光景に……

なぜかその一角に生徒に抱えられた子供先生が一人……

「お、おお、おろしてください〜っエヴァンジェリンさん達がいたらどうするんですか　っ」

颯爽と抱えられながら過ぎていった彼は叫び声だけ残して行く、不思議と周りの生徒もそれを笑うことはあってもおかしいと思う生徒はいないようだ。

「……さ、さあな、流行りなんじゃないか彼の？」

何かいろいろ台無しな朝の風景…

「と、そろそろ時間ですね。今日注意した所はテストに出ますからよく復習しておいてください。日直」

「起立　っ、礼っ！」

号令の後に続く質問の波を捌き教室を後にする。最初こそ『教師』という役柄に戸惑いもしたものの慣れてみれば何のことはなく、私自身が元々情報に重きを置いた機体である事もあり、こういったマニユアル的な仕事に不便はなかった。どちらかというと生徒とのコミュニケーションに苦労しており、感情学習という意味ではまさに最適の場ではあるのだが教える側がそれでは生徒も不安だろう。

「ふー、といっても流石に半年もいれば慣れますか」

ついて出たため息を切る。どうも最近Masterの癖がうつって

きたようではない。

私は思考を切り替え今後のスケジュールを確認することにする。

今日この後は受持つ授業はないのでこのまま内職を終えれば早引きも可能、久々に夕食を奮発して…

(?…これは…侵入者?)

思考を停止、結界にかかった反応を探る。

結界といつても一個人が麻帆良のような広大な土地を被えるほどの大規模な結界を張れるケースは稀であり、私が行っている結界も感知のみの簡易なもので範囲も中等部校舎と学生寮周辺程度だ

しかし、改めて探ると探るほど妙な侵入者である。現れたかと思えば極度に微弱な反応であり、また結界突入時ならともかくその後の足取りは隠すような様子もない。麻帆良に進入するにはいささか力不足な小物のようであり、力の隠蔽をしているにしてはあまりにもお粗末だ。

「…一応、Masterに連絡を入れておきますか」

今朝の件で干渉を言い渡されたがこれが吸血鬼事件とかかわりがあるという確証はなく、これなら警備の仕事の範疇だ
そう思い、内部の電子回路から主の携帯端末に連絡を取ろうとするも…

「……………つながりませんね…折角の携帯もこれではまるで意味がないではありませんか」

まさに猫に小判、豚に真珠、Masterに電子機械だと嘆きたく

なる。

この間も連絡がつかないと思ったらバッテリーが切れていたり電源が落ちたままだったりとその扱いは改善の兆しも見えない。機械を手取るようになったというだけでも格段に進歩していますが

とはいっても流石にこの場でカードを使った『念話』は不可能、互いに認識しているわけではないので通常の念話も不可能となれば残る手段は限られてくるわけ…脳内で携帯端末を起動し、メール文を作成、気付くかは定かではないがこの際目標の確認が優先だと結論づけて私はこの場を後にした

搜索開始から校舎を出て移動すること少し、寮前で睨み合いをしている生徒たちを発見してしまった。

…どうみても一方的に険悪な雰囲気ではないので危険度は低く見えるのだが…

両人が話題の「子供先生の保護者」神楽坂 アスナと「桜通りの吸血鬼」エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルとでは話が違ってくる

昨夜、Masterの話では直接退治した二人だ、どう考えても生徒同士の仲睦まじい午後とはいかないだろう。

よって一発触発しそうな警戒態勢の約一名とその場の空気を無視し、私はこの場に一般人を装って入り込むことにした。

「どうされました？神楽坂さん」

「え！？あ、アイン先生」

まるで新手といわんばかりの速度で振り返った彼女は私の姿を捉えてその肩から力を抜く。が、状況を思い出して気を張り詰めさせようにもこの状況を“一般人”である私に説明をするわけにはいかなないと必死に言い訳を考えているようだ。

「あ、その、こ、これは…」

「なに、今度の修学旅行先の話について聞いていただけさ。結局私は参加できなさそうだがな、アイン先生」

まるでわかっているぞと言わんばかりの言動。とても教師に対する言葉遣いではないだろう態度もその口調もなるほど、彼女が噂通りかの500年に及ぶ年月を過しているのなら高圧的な雰囲気も違和感が感じ取れない。容姿はともすれば 学生なれどそれは洗練された冰山を思わせる凍てついた笑みを浮かべる

「そうですか、何やら珍しい組み合わせだったので思わず声をかけてしまいました」

「あ、あの、アイン先生」

「すみません神楽坂さん。実は学園長に頼まれて彼女、エヴァンジエリンさんに用があるのですが、なにか用事がありましたか？」

「あ、いえ…それほどのことでもないのです…」

頭を下げて寮の方へ去っていく神楽坂さんを見送るとそれを待っていたかのように背後の彼女が声をかけてくる

「大した役者ぶりだな、異界の人形が」

「その呼び方、やはりご存知でしたか。ならあなたは『闇の福音』で間違いないですね」

「いかにも、そも『人形使い』たる私が変わり種とはいえ「人形」であるお前の区別するなど造作もない事だ」

『人形使い』、『闇の福音』と同じく数多ある彼女の通り名の内の一つ、いや、彼女の戦闘スタイルを考えるとこちらの方もかなり有名である

「その呼ばれ方はあまり好きではないのですが…」

「ほう？ドールが己の存在を嫌悪するか、これまた変わり種だなお前は」

「さも人を異常呼ばわりするのはあまり褒められた事ではないですよ？エヴァンジェリンさん」

「ふむ、あくまで教師として返すか…」

まるでこの問答が見戯であるかのように笑みを浮かべる彼女、確か

に彼女から見れば稼動して5年かそこらの私程度ではそれに勝つことなどハードルの高いものでしかないが

「…マスター、反応が寮内へと移りましたが、どうされますか？」
「そうか…いや、こうしてこいつがここにいるという事は目的はほぼ同じだろう。ジジイへの義理は十分立てた」

「おい、人形。そう嫌そうな顔をするな…お前、ここにいるという事は侵入者を追ってきたのだろう？」

「…確かに結界内の侵入を感知してここまでできましたが、それが？」
彼女の従者と報告を受けている絡繰 茶々丸、彼女と数点やり取りをした後彼女がこちらに質問を投げてくる。
察するに彼女らもここに来ていたのは侵入者を追ったこと、ならこの邂逅もなんら不思議はないのだが

「なに、見たところこんな大勢で行くような獲物でもなし、お前に譲る」

「……………それは、要は面倒…ということですね？」

「そう受け取ってもらってかまわんさ。しかし、クククッ」
「何ですか？」

事は慎重にと構えてきたが彼女の笑いにらしくもなく聞き返してしまふ私

「いやなに、実に興味深いと思ってな、どうだ、あんな腑抜けた主

は捨て置いて私のものになる気はないか？待遇は約束するぞ、ん？」

「……ご冗談を…それと、今後、私の前で我が主を侮辱するようなことがあるのなら…Masterの指示を待つ必要すらありません、私の全力を持つてあなたを排除させていただきます…」

「クツククツ、アハハハハ…面白い、面白いぞつ。たかが人形がこの私を排除するだど？ククツ、貴様この私を笑い死にさせるきかその笑いにすら寒いものを感じるも瞬時に気を引き締め『ライブラリ』に接続し次の瞬間に備える。」

私の動きに反応したのか彼女の従者である茶々丸が一步前へ出る

「よせ茶々丸」

「ですが…」

「今日は気分がいい、我が物とならんのは残念だがそれもよし、この次の楽しみとしておくさ。帰るぞ」

「逃げるつもりですか…」

「あまり、調子に乗るなよ…興が乗ったからこそあえて今日は見逃してやると言っているんだ。それにこんな真昼から争うものでもないだろう？」

最後にこそ口調を和らげるも返った言葉に込められた殺気は本物、それは私などこの場で狩ることなど容易いと語っている。

思わず身構える私に一瞥をくれた後、彼女はそのまま振り返ることなく従者を連れて去っていく

そして私は彼女達が見えなくなるまでそれを止めることも、その場を動くこともできなかった…

s a i d : o u t

s a i d : ? ? ? ?

「いつつ、オレツチとしたことがしくじっちゃまったぜ」

恩人たるネギのアニキを探してたどり着いたのは大きな土地の建物の一角

中に入り込んだままではよかったんだが若い気配に釣られて風呂場に入ったのがいけなかった。いや、それなりに堪能させてもらったんだがどうも見切りをつけるのが…

と、とにもかくにもアニキの為、パートナー候補を探す為（建前に潜入したらやたらと反応のよかった女に叩き落とされてこの様（自業自得）、何とか一矢報いるも（ブラウスのボタンを弾いただけ）

このままじゃネギのアニキに合わせる顔がねえっ！

「こつしちゃいらんねえっ、もう一度忍び込んで…」

「その前に、さて質問です。そこなオコジヨ妖精」

「イッ！？」

首根っこを掴まれる痛みと突然音もなく背後に立たれたことによる驚きに慌てて振り向こうとするも掴まれた場所が場所で首がうまく回らない。

ようやくオレっちが顔を向けるとそこには長身の人間の女（美人）が立っていた。

本来なら己のセンサーと欲望の赴くままに行動したい所ではあるがこつして話しかけてきた以上間違いなく“こつち側”の人間

（マズイ、まずいぞこりゃっ）

自分が脱獄から密航してまでそれほど時間は立っていないので運が向いているならこれはただの不振人（？）物に対する取調べならまだかわしうがあるが出てきた場所が問題だ。

「あなたが今出てきた配管は学生寮の大浴場からのみ繋がったものなのですが…なぜあなたがそのような場所から出てくるのですか？」

（ピンゴッ！ばれてるしっ）

いや、待つんだオレ、八百長口八丁はオレの18番だ。この程度切り抜けられなければ脱獄なんか考えても起こさねえ

「いや、ほらっネズミって狭い所が好きな所があるじゃないですか、

オコジヨもネズミと親戚みたいなもんでさあ。オレっちも本能的にこう、狭い管に釣られて」

「ほう、本能的に…」

「そうそう、だからオレっちがそこから出てきても何のおかしな所も」

「「ネズミが出た」「 のネズミ水着を脱がすわよ」などなど、録音された音声はまだたくさんありますが…何か弁明はありますか？」

「いや、本当にそんなネズミが出たって事も…」

「私がここを管理している以上そのような下等生物が闊歩できるはずがありません。おっと、そういえばオコジヨもその下等生物と親類だそうですねMr・カモミール？」

「な、何でオレっちの名を…」

「先ほど拝借した毛からDNAを鑑定した所、本国のデータベースに一致するものがありました…それも何故か犯罪者のデータバンクに」

「うっ」
（毛って…あの時つままれたときの物が。オレっちを見てまったく驚かない点といい、今名前を言い当てた事と言い、この人間（美人）ただもんじゃねえ

って、余裕ぶっこいて観察している場合じゃねえ、ばれたんならさっさとトンスラこかないと…）

「まった、これには深い事情があつてっ国に病弱な…」

「Hold up、あなたは運が悪い。今の私は機嫌が悪い…加えてこのようなイライラする事態について手元が狂ってしまうなんてことも…」

「ヒイツ！た、たんまつ！」

向けられる銃口は自分の胴と同じくらいの幅、抵抗の術がなかったことは察してほしい…

その後、何とか銃を収めさせるもそのまま連れて行かれる俺は先ほどの建物内の一室で今だその銃口を向けられている。

「あの…いつになったらその物騒なもん下ろしてくれるんでしょうか？」

「愚問、我が主が来るまでです。先程連絡がつかましたので程なく来るでしょう」

「あのいくらなんでもその口径じゃオレごと床を貫通すると思うんですが…」

「なるほど…」
バレル・レシーバー
コンバート
ネイルパレット
銃口・弾倉
換装…
捻転弾頭弾
接
チャージ
続…
これで問題ないですね？」

そういつて向けられる銃は確かにその口径を縮めている。が以前として向けられている事に変わりはなく、無表情から繰り出される重圧はとても耐えられたものじゃない

ガチャン

と、そこで後方から扉の開く音が部屋に響く

「そいつか？例の侵入者」

そこに来たのは見た目20前半といった金髪の人間（男）。

（しめたっ！）

なんだか知らないが目の前の人間（美人）は取り付く島もない、というかオレつちの言葉を聴く気がないように思える。目の前に新たに現れた人間（男）が話を聞くかはわからないがこのままにもしないで強制送還よりましだ。

「だ、ダンナ！「ダンナ？」へい、そう呼ばせてくださいえ、実は今回のことには語るも涙、聞くも涙な事情がありまして…」

オレの脳細胞をフルに稼働させて活路言い訳を導き出す！

例えば歳の離れた病弱な妹がいる、妹を助ける為に捕まる事になったうんぬん、仕送りができないから極東の地に密航してきたかんぬんなどなど、正直後半に差し掛かってからは何を言ったのかは全く覚えていないがこの状況を打開するだけの言葉は語れたはずだ

「へ、妹さんの為だねー」

「そう！そんなすよっ、だから今回のことは「知らん、突っ返す」
即答ッ!？」

「…あのな、養父から言わせれば傭兵が仕事をする上で一番重要な
のは情に絆されないことだ。相手の内情は必要以上に知らない、聞
かない、調べない。要はお前のお涙頂戴な身内話なんかどうでもい
い。お前は下着ドロをした前科持ちの逃亡犯で侵入者、以上。Un
derstand?」

食いついたと思っいたらいきなりの叩き落とし…だが、オレっちはこ
の程度であきらめやしねえっ

「いや、その、それでその情報に誤りがあつたら…」

「アインのデータベースは毎日更新もするし日常的なことにミスは
ねえ。てか、状況を聞くに風呂場に入り込んだ時点で現行犯だゴラ」

ハイ、アウト！送り返す気満々ですよー

「つう訳でだ、アイン・箱」

「はい」

「ちよ、何を…」

「何って、生ものを郵送する為の小包の用意」

他に何かあるといわんばかりの顔でおれっちを箱に押し詰める人間
(男)

もちろん俺も抵抗はするもあいにく縛られているこの身ではどうしようもなく、間に新聞紙を詰められて蓋を閉じられる。

ご丁寧に口にガムテープ、箱に防音用の魔法処理まで施してあるおまけ付だぜこん畜生っ！

「もがつむももが、む　　っ(くそっこの程度でオレツチが諦めると思ったら　)」

「アイン、Shake」

「Yes, Master」

突如起こった前後不覚に陥るほどの衝撃

あまりの振動にオレの意識は数秒と持たず、フェードアウトしていった…

S a i d : o u t

朝からやな予感はしていた

従者の「昨日の侵入者が逃げました」という発言から気分最悪の目覚めをむかえ、朝食後学園に向かう俺
今日に至ってはネギも普通(?)に登校していたので幾分かは吹っ切れたんだろう。

かくいう俺も登校はしたものの彼が正式採用されてからここ最近、暇でしようがない

いや、正直言うと机上に積まれていく事務処理の書類を直視したくないという現実逃避に他ならないのだが
とまあ、それは置いて、ここ最近の俺は学園警備と内職が主な仕事になってしまい時間をもてあましているのだ。

「アキラの修行を見てやるのにはちょうどいいんだがな」

いかんせんこうも体を動かさない日が続くというのは身体に違和感が積もってしようがない。ただでさえ外仕事中心の人生を歩んできた俺としては真逆の生活はどうも…

(いつそのこと襲撃でもあってくれないかな…合法的に暴れられるし…)

まあ、こういった問題発言が口に出そうになるのを抑えつつ今日も学園内を見回る。

「ん？」

前方の橋で何やら騒がしく人だかりができています。何か揉め事かと駆けつけてみると…

子猫がダンボールごと川に流されていた…

なんてベタな…いや

「ざまa「茶々丸 っ」「へ？」

正直子猫が川下りしていようと俺にとつちや何の関心もないが今聞いた単語は聞き逃せなかった。

声の方に振り向くと野次馬に混じっていた子供が後ろにいる茶々丸を引つ張っていた

そこまでならなんでもない。なんでもないのだが、彼女はあろう事か子猫を一瞥した後、何の躊躇もなく手摺を越えようとするではないか

「って、ちょっと待って茶々丸」

「……なんですか鳴守先生」

振り返る言葉に込められたそれはまるで氷の様に温度が感じられない。いや、かろうじて邪魔をするなどといった感情は感じ取れるがやはり刺々しい返しなのは間違いもない。

「お前、こんな時期に川に飛び込む気か」

「そうですが…離してください、子猫が流されていってしまいます」

なおも頑なに飛び降りようとする彼女を腕一本で止めようとするも徐々に力が上がっていき、強化なしではそろそろきつくなってくる。

(えーい、どうしてうちのクラスはこう頑固な奴等が多いんだっ)

手に込める魔力を瞬間的に強化して彼女を強く引き寄せ代わりに自分を手摺に足をかけて飛び降りる。

「先生っ!?!」「おおー、にいちゃんか飛び込んだぞ!」

背に声を受けて水底に着地する。幸い腰につからない程度の深さしかない。底の苔に気をつければ大して問題はない。

足の裏に集中した魔力で底と吸着を図り、流れて来るダンボールに身構える。

(あれはダンボール、あれはダンボール、あれはダンボール…)

「ふう」

「おお!?!」「とつたぞっ」

構えたときと同じ要領で流れに注意しながら端に移動し、護岸に足をかけてゆっくりと登る。

幸い…だと思いが子猫に衰弱した様子はなく、ダンボールが浸水していたという事もなかった。大事には至らなかったようだ。

「で…こいつはどうするんだ…」

野次馬を適当に散らした後、俺は額に浮き上がりかけた血管と共に眉がひくつくのを必死に抑えている
それというのも…

「どうといわれても…そんなに懐かれていますから飼われては

いかがですか？」

「誰が飼つか！てか俺は猫は嫌いなやつ」

そう、この足元をぐるぐるとまわりついてくる先程助けた子猫に
対してだ。

「一応捨て猫だろ？保健所に任せれば…ジョウダンデス」

言い切る前に細まる彼女の視線の迫力におされて黙る俺、何か最近
こんなのばかりな気がする…

「ふうー、しょうがないですね。何時もの所に行きましょう」

「いつもの？」

俺の質問には答えず先に進む茶々丸。どうしたもんかと悩むも数歩
進んだ所で彼女が振り返る。

なんだと思うもその視線を追えば一目瞭然で、先程の子猫が俺の靴
の上にお手をするように前足を乗っけて尻尾を振りながらこっちを
見ている。

きつとこのままではこいつはいつまでも付きまといそうなので茶々
丸に従うことにして蹴り飛ばさないように注意しながら足をどけて
歩む。

すると子猫も1歩ほど後ろに下がった所についてきており、俺が止
まると顔を上げながらそれも止まる…どうやらとんだ拾い物になっ
てしまったらしい

こちらを確認して先に行く茶々丸の提案した場所とやらに一縷の希
望を託す事にした。

「ここです。ちょっと待っていてください」

そういつて彼女についていくこと数分、ついたのは協会横の広場になっっている小休憩スペース。

こちらに断った彼女が数歩前でしゃがむとあちらこちらから気配がし……大量の猫が出現してしまった…

「ちゃ、茶々丸？これはなんなんだ？」

声が震えるのを自覚しながらも必死にそれを押さえ込んで言葉に出す。できるなら今すぐこの場を逃げ出したいがそれでは当初の問題子ネコの解決にはならない

「はい、近所の野良猫を私が定期的に餌などをあげていたのでありますがいつの間にかこのようなコミュニティができたようです」

そういつていつの間にか持っていたのかコンビニのビニール袋から猫缶など数点のペット用の餌を取り出す。集まってきた猫たちも待っていましたとばかりに茶々丸の周囲に集まりだして行儀良く待てをしている

「はい、喧嘩しないでね……」

彼女の言葉を聴いていたのかどうか、盛り分けられた皿が置かれた瞬間勢い良く、元気いっぱいといった様子で皿に挑む猫達
それを眺める彼女はとても優しそうな目をしている

「はら、新人さんだから優しくね」

いつの間にか俺の足元にいた子猫もエサの匂いに釣られたのか茶々丸のそばをうろうろしている。どうやらエサをねだっている様だが周りが知らない猫たちばかりで少し緊張しているのだろう。

すると彼女はその子を抱え上げてエサを食べている猫たちの間に入れてあげる。他の猫たちも食事を邪魔されたと不機嫌になることなく茶々丸の言葉を理解しているように譲っている。

(なんていうか、こんな風に笑うんだな…)

「何か？」

「へ？あ、いや…猫、好きなんだなって」

いまさらながらに彼女が“笑っていた”と気づき、その新鮮味から彼女に指摘されて見とれていたことにはっとする。

我ながら馬鹿な返しだとは思うが話題の振りは悪くなかったと思う。

「はい、…逆に聞きたいのですが、先生はどうして猫が嫌いなんですか？」

「が、こればかりは返されても困るネタだったのを聞かれて思い出
す。」

「なんていうか本能的に受け付けなくてな…どうも小さい頃か

らだめなんだ」

「小さい頃からというと、アレルギーか何かですか？」

そもそも気付いたときには猫に触れることができなくなっていたのだから俺自身良くわかっていない。昔の記録を養父にみせてもらった時には近所の友人と猫を追い回しているものがあつたので少なくともその頃は平気だつたはずなのだが

「いや、鳥肌が立つたことはあるけどあれるぎーとかじゃないらしい。それに、嫌いなら嫌いでいいんだが…」

会話最中しばらくは耐えていたのだが食事を終えた野良猫の一匹が座っている俺の膝に乗ってくる。中にはよじ登ろうとするものまで出る始末、茶々丸の手前ということもあり、あまり邪険には扱えないが精神的につらいものがある

「この通り何故か猫には好かれる体質でな、苦労してる」

苦笑を顔に貼り付けながら背中に爪を立てながら登る三毛の一匹をやんわりと下ろすことに成功。

その腕はプルプルと震えるのを隠すので精一杯だ

「なるほど、通りで…」

「へ？」

「あ、実はこの子達まだ私以外の人達には警戒していて、先程も呼ぶ前に出てきてしまったので珍しいとは思っていたのですが…」

先程ここに来たときはそれほど違和感はなかったのだが彼女の話に

よると結構珍しいことなのだそう。前にクラスメイトの一人がここで猫が集まっているという噂を聞きつけて訪れたそうなのだが現れなかったという

「ま、嫌いだけどほっとけるほど嫌って訳じゃないからな、こいつのことよろしく頼むわ」

「はい、」

新しく仲間に混じってご飯にありつく子猫に一度視線を投げて今日はこのまま帰宅することにする。

「ん？何だお前か…」

茶々丸と協会で見送られてから少し、警備を再会した俺もどこかやる気がおきずのんびりと歩いていた。

ゆっくりと歩を進める中足が後ろに引つ張られるのを感じて立ち止まる。

果たしてそこにいたのは先ほど流されていたのを助けた子猫、誠に遺憾ながら好かれてしまったようである。

「あのな？俺は気まぐれでお前を助けたんであってあれは偶然なの、わかる？」

しゃがみこんで猫に話しかけるといふ傍から見たら頭を疑われそう

だ。

が、どうやらこの御仁はオレを単に呼び止めようとした訳ではない
様で、今度は届くようになったからか腕の裾を銜えて引っ張ってくる

「なんだ？なんかあるのか？」

こうなると気になりだすのが人というもので、俺は確認するように
振り替える子猫の後を追い元来た道を引き返すことにした

猫に先導されてすぐに俺でもわかるほどの魔力を感知し、子猫を抱
えて速度を上げる。

魔力の先は依然として教会の方から漂ってきており、今もなお展開
している。

この学園にはエヴァンジェリンを快く思っていないという輩がいる
ことは聞いていた。もちろん茶々丸という従者がいることは周知の
事実だろう。更に言えば彼女は今一人、茶々丸に何かあったのでは
と嫌な予感がよぎる。

「オイオイ、何なんだこりゃ……」

駆けつけた瞬間身を隠してしまうという職業柄の癖が出てしまった
が今はそれに感謝しもう一度様子を伺う

そこにはネギと神楽坂が二人がかりで茶々丸に攻撃していた所だった

(神楽坂は契約したのか？いや、そもそも何でネギが…)

いや、恐らく昨日のことだろう。しかし今朝の感じではこんなことをする雰囲気はなかったんだが

戦況は前衛後衛のオーソドックスな攻め、エヴァがいないから昨夜ほど切れのない動きの茶々丸に強化された神楽坂が疾風怒濤とばかりに攻め込む

「なあ〜」

「…わかってるって、このまま静観はしてないから大人しくしてろって」

と状況の観察に集中している俺に下から抗議の声(？)があがる。実際には猫が何を言っているのかは知ったことではないがここへ連れて来たのだから助けを呼びにきた、と言う所だろう

「やれやれ、『プラ・クテ ビギナル…』」

ため息をつきながら隠れていた建物に対して垂直に飛び上がる。眼下の光景は茶々丸が追い詰められ、ネギが『魔法の射手』を放った所

「…つちい、あせりやがって！『雷の投擲！！×10』(最弱)」

内半数を茶々丸の眼前に、残りをネギ達の正面を塞ぐ様に投げつける。

練りこんだ魔力をできる限り絞り込んだのは威力共に『魔法の射手』を防ぐのには申し分ない『雷の投擲』ではあるがその貫通力や余波

を考えると助けるつもりが二次災害になりかねない。なので威力は弱めにしたのだが…

「へ？」

飛来する『魔法の射手』は『雷の投擲』に打ち落とされる前に向きを変え、なんと術者本人に返っていくではないか

そして方向転換した矢はネギ達への威嚇用に飛ばしたはずの槍達によつて消滅、ネギはいきなり飛んできた槍に腰を抜かし、神楽坂はネギに駆けつけるといふもはや戦いどころではなくなった様子。

そしてその状況を作り出した張本人たる俺は魔力封じの魔具により気配遮断を行い身を潜める。

「しかし、ネギがあんなことするとはなー、いや、この場合誰かに助言されたか？神楽坂はそんなこと言わんだらうし…」

思い返すのはつい今しがたおきた出来事、戦いなんてまるで不向き、むしろ戦わないで済むならそれが最良といった印象を受けていただけに驚きは大きい。

十中八九誰かに助言されたのだろうが昨日の事件は戒厳令が布かれたようだし、いくら麻帆良の先生方と溝があるといつてもこうも好戦的に仕向けたりしないだろう。となると思いつくのは外部の仕業になるのだが…

「鳴守先生…」

「…茶々丸か」

背後に降り立ったのは先程追い詰められていた茶々丸。どうやら律

儀にも礼を言いに着たそうなのだ。

「気にすんな、あれでネギは本気で攻撃してきたわけじゃないみた
いだったからな、余計なお世話になっちまっただけさ」

「ですが…」

「ん〜、じゃあ今回のことエヴァンジェリンに黙っておいてくれな
いか？」

「それは…確約はできませんが…」

「ああ、わかってるってエヴァンジェリンはお前のご主人だからな、
聞かれたらそりゃ言わん訳にはいかないだろうさ」

「だったら…」

「それを承知で頼む。今回はこんなことになっちまったが根は優し
いやつなんだ。俺の顔を立てると思って、な？」

「……わかりました。今回の事はできるだけ、私の内にとどめてお
きます。」

「本当か！？あ、いや、ありがとな」

意外とあっさり了承の返事が返ってきたことには驚くもそれより
嬉しいという感情が勝ったので俺は茶々丸の手をとって礼を言う

ドール故にどうしても冷たい印象を受けてしまいが今日の猫の世話をしている時の笑顔しかり、今の俺の礼に戸惑っている姿もしかり、こうして見るとちよっと感情表現が苦手なだけでほぼ人と変わらないうという印象を受ける

「せ、先生。あの、手を…」

「っと、わりい」

彼女の抗議に慌てて手を離して一応家まで送るむねを伝えるもそれはやっぱりと断られる。

自分のマスターと俺が接触するのは世間的に今はあまり好ましくないとの事、俺はそんなこと気にしないと主張する彼女も頑なに断るのでこれ以上はかえって迷惑かと言を収める。

そうして屋上から降り、今日の所はそこで別れる

「さて、これからどう動きますかね」

予想ではネギが攻勢に出るのはもっと後かと思っていたのだがこうも外れるのでは対策を改めなくてはならない。

別れた彼女が進む方とは反対に歩き出し、頭の中で相方への報告内容をまとめていく

状況次第では正体の露見もやむなしと考えて

はい、そんな感じとなりました18話、いかがだったでしょうか？

今回は主と従者とがそれぞれの邂逅を果たすという目的で作成しましたのでそこらへんに雰囲気が出ていればなと思います。

久々のアインの登場ですから何時もより熱を入れて執筆しましたが…空回りしていないことを切に願います。

さてさて、本編にてようやく仮契約メーカーのオコジヨ妖精、カモミール・アルベール、通称「カモ君」が登場したわけですが…扱いひでえ（笑

えてして他の作品でも同様の扱いを受ける彼ですが本作品でも救いの手は伸べる事はないのではと、今後の展開もそんな感じですね彼の扱いは

後は17話でも申し上げたエヴァ様のSっぷりが表現できたかどうか…これがデレるのかどうかはまだ未定、しかしギャップがあるほうがいいかとはばらくはこんな感じですよ。

さて、長くなりそうなのでここまでで、続きはまたあとがき（続）の方へあげておきます。それと、今回のようなことが無いよう前にも言ったような気がしますますが投稿が遅れそうときには前日までに活動報告にて連絡しようかと思えます。今回はまったくの事前連絡無しだったので深く反省申し上げます。

それではまた、次回でお会いしましょう

再見ッ！

取立19回目　く弟子の素直さに悩む先生は夜の女王とまみえる。く（前書き）

ども、19話投稿です！

せ、セーフですかね？

何とか前回の二の舞にはなっていないと一応一安心しているトン
トンです。

しかし、午前からお越しになられた方には申し訳ありません！意外
と時間が経ってしまいました。

さて、いよいよエヴァンジェリン編も残す所後一話、後日談のよう
なものを入れてもう一話ありますがようやくここまでできました。

今回までお付き合いしてくださる方に感謝を述べさせていただきます、
お送りします

と、今回所注意をば、本作品は作者の自己解釈的な考えを文中に含
んでおります。“気”や“魔力”等の考えなど今話で書かせていた
だいてますが原作からの流用と自己解釈が入っておりますのでご了承
承ください。

それでは本編の方へどうぞ

取立19回目　く弟子の素直さに悩む先生は夜の女王とまみえる。く

「っこっこ！」

放たれる拳は人の身にして疾くしなやかに、かつ力強い

こちらの手刀の捌きから反撃に転じる返しのタイミングも良し

がしかし

「あまい……」

いかんせん愚直過ぎるのが問題だった

「っ
っ」

「っ」と悪い、飛ばしすぎた」

アキラが放った反撃を更に返す為そのまま投げ技で返したのだが
思ったよりも力が強く、かえって予想より飛ばしすぎる結果となっ
てしまった。

「いえ、これくらい大丈夫です」

「そう言うなって。ほら、見せてみる」

「っ！」

屈んだまま彼女の足に触れてみると痛みからその表情を歪める。
見た目腫れるというほどでもなく幸い骨に異常はない、この位の怪
我なら手持ちの治癒呪文で十分治せる

「…ごめんなさい」

「ん　？何だいきなり」

魔力を纏った掌を患部に当てていると彼女は突然謝りだした。
正直誤られてもこちらに身に覚えは無く、どちらかという今しが
た投げ飛ばした俺の方が謝罪すべき場面のはずだが

「その、教えてもらっているのに…」

聞く所、こうして彼女を指導すること既に半月ほど、今だ呪文は撃
てず、肝心の護身に関してもこの有様では申し訳ないと

「あのな〜」

本当に溜息が出てくる。この場合は良い意味でだ

アキラはとにかく真面目だ。いや、そんなもの普段の生活態度でも
わかりきったことだがこうして半月とはいえ今まで以上に接する時
間も増えればその人柄もより深く知ることになる。

当然人付き合いが親密になれば互いに悪い所など『粗』が出るものなのだが彼女にはいまだその片鱗すら見受けられない。

呼び方に関しては毎回しつこく要望した結果名前でさん付けと大分軟化した。が、ここまでくると教師以前に人としてしつかりと関係を築けているのか不安にもなってくる

「そんなもんでできなくて当然だ。てかむしろ贅沢だぞお前？」

が、この際人柄の事は置いておく。

彼女は魔法の習得に関して一向に進まないことに謝っている。

といつてもそれまで魔法の魔の字も知らなかった一般人がいきなりそれを使いこなせないのは道理であり、なんらおかしな所はない。

むしろ半月でそこまでものにできるのならこの学園の魔法生徒の半数以上が卒倒するだろう。

現に今の彼女の状態でも十分注目されている。

物珍しいという話題性ではなく実力的な意味でだ

そう、結果的に見て彼女は魔術の才能が無いというわけではない。

あれは修行開始当初の時の事だった

魔力の認識までは1日も経たずに到達するという異例の結果をはじめ出すも彼女は呪文の発現を苦手とする変り種な壁にぶち当たっていた。

通常魔力を認識できれば質はどうあれ初級の呪文程度は形をなす事ができる。むしろその魔力というものを認識するまでが普通は困難だ。

そもそも魔力とは魔法使いが使用する力の源の総称で自然界に存在するエネルギーの事を言う。

俗に言われる西洋魔術の基本はこの外気ともいえる自己以外の力を取り込むことが前提なのでその力自体を認識できなければ呪文はおろか強化すらままならない。が、この認識というのもなかなか容易なものではなく、魔法が誰でも使えるといいながらその習得に時間がかかるのはこれもその要因に一役かっている。

これが発覚した当初は俺も頭を悩ませた。

何しろ今まで生きてきた中で人に教えるという事柄に無縁だったのだから無理もない。そも日常の教師としての役職すら苦労していたのだから改めて教えるということの大変さを思い知らされる。

幸い魔力は認識している事から身体にそれを纏う簡易強化は可能なので護身としては十分だ。

が、いかんせん応用が利きづらく、巻き込んでしまった以上せめて“武装解除”や障壁の類は使えるようになってもらわなくては心許ない。

それから四苦八苦する事3日、この件に関しては自分で解決しようと思っていたのだが、事は俺個人だけの問題ではないのでプライドは捨て、アインと葛葉先生に相談した所

『ごつも呪文が行えないとなると…単純に相性の問題では？』

との御言葉。

そして翌日、葛葉先生の監督の下“気”についての特訓が始まった。内容は気についての原理等を講義した後、実際に感じてもらうという事で組み手を行ったのだが驚くことに彼女はたった一回の組み手の最中で気の発現に成功させてしまったのだ。

できてしまえば何のことは無い。要はいままで呪文がうまく形をなさなかったのは生来の資質が“気”に傾いていた事と無意識下で魔力と気が互いに反発し合っていただけなのだ

となれば修行内容は大幅修正、本人は魔法を習いたいとの事だったがまずその無意識に流れ出てしまう気を制御しなくてはどうにもならないと説得し、了承してもらった。

それからというものの、彼女の成長は目を見張るものがあつた。

まず、気の総量。

気は術者の生命エネルギー、つまるところ本人の精神的な面による所が大きく、こればかりは昨日今日“気”を知った人間が大量の気を有することはまず無い。が、彼女はその例外の一人だったのである。

生来の精神の頑強さゆえか、はたまた日々のトレーニングの賜物なのか、いずれにせよ彼女は気を自覚した当初から一般人を遙かに凌駕する量をほこっていた。

次にその習得速度。

もともとアキラは物覚えがいい方だ。身体能力も申し分なく、動き

一つにしても教えれば大抵は難なくこなし、初心者には難易度の高いものも次の修行までにはほぼマスターしていた。それまで魔術に挫折を感じていたのが嘘のようであり、まさに今までの遅れを取り戻すかのような速さでだ。

そして何よりその意欲

正直これが一番意外だった。クラスの中で比較的交友のあるアキラの人柄はある程度は知っているつもりだ、彼女が人を傷つける事をひどく嫌うということも

ある時俺は聴いてみる事にした『こんな事に巻き込まれて後悔はしていないのか』と、いまさらな質問であるとはいえ俺からすれば隠匿の為に修行を強要しているようなものだ。その修行も彼女が望んだ事だがそれも透徹すれば選択肢の無い選択だ、当然の結果だったように思う。要は俺はこれまでの日々はどこか罪悪感を感じていた、その感情を塞ぎ止めきれず思わずついて出た言葉、それを彼女は

『だって自分を守る為に教わってるんです。将来的には自分だけじゃなく他の人も守れるような、友達とか家族とか…あ、あと先生とか』

曇りの無い笑顔で俺の不安を一蹴してくれた

彼女はこれまでの日々をただ“力”を望むのでなく“守る手段”として捕らえていた。傭兵として、ひたすらに力を求めて過ごしてきた自分には考えもつかないような、暖かくとても彼女らしい考え

正直に言おう。俺は彼女の言葉にそれは綺麗事だと思った。夢見がちな、世間を知らない考えだと。

だけど、同時にとても尊いように思えた。彼女の笑顔がまぶしくて

直視できなかったことも原因だろう。

だから、

俺はその彼女の考えを折ってはいけない、折らせてはいけない。少なくとも俺や第三者の意見出などもつてのほかだ。

だから俺は教える。これまで学んできたことを
魔力と気では分野は違えど多くの戦いに身を置いてきた、教えられることは数多い。

自分の言葉に照れくさそうに笑う彼女はそのまま立ち上がって修行の続きを促す。

この日、俺は大河内 アキラという一人の人間を認めた

「　　、音来さんっ！」

「　　、悪いっ考え事してて聞いてなかった」

数日前の出来事に思い耽っていた俺は目の前で呼ばれて我に返る。
あてている傷の治り具合から時間はそれほど経っていないと分かる
が彼女の話まるつきり無視してしまう形となってしまった、半目で
拗ねる様に睨む姿は情けなくもここ最近で見慣れたものになって
しまっている

「もう、音来さんって実は結構抜けてる所ありますよね」

「アハハ、面目ない」

湯いた笑いと共に謝り先程の話の内容を聞く。

彼女の場合、拗ねているといってもこの程度なら形式的なものなので実際はそれ程気にしていないと知っている。こちらの返しに彼女もため息をつくがすぐに気を取り直したように話してくれる。

既に勝手知ったる旧知の仲、とはいかないものこのういったところは素直に嬉しい物がある。

「で、『桜通りの吸血鬼』について、先生の話を知りたいんだけど……」

つまるどころ、一昨日倒れているのを発見されたまき絵を心配しての話だった。アキラ自身は魔力の感知はできるもののそれがどういうものなのか、又は誰のものによるものなのかといった域には達していない、というより短期間でそこまでいかれたら俺の立場がないのだが……

閑話休題

さて、『桜通りの吸血鬼』については大筋の話は知っている。犯人が誰かということも、恐らくまき絵が間違いなく事件に遭遇してしまったことも

が、それをありのままに彼女に話していいのかというと悩み所だ。

アキラは普段大人し目だが意外と行動力があるのはここ最近でわかってきたことではあるが、こと本件に関しては悪い面しか出てこない。

彼女は人を助けるということに関しては躊躇がないのだ。

悪い事は悪い、困っている人がいたら手を差し伸べる。他人の不遇を見て見ぬ振りができない、要は自分の中の“正義”がはつきりしている。

それ自体は良い事だ。が、それも度を超えていなければの話である。いつかのテストの際にもその片鱗は窺うことができた。否、正確に言うなら彼女が“助ける”という行為に熱を入りだしたのはそのテストが一因している。己を助けるより他人を、結果的にそれが合格の決め手であったとはいえ今件のような友人が危険にされされてしまったと知れば彼女は間違いなく動く。

「ああ、その事か」

恐らく俺にろくに相談もなく行動に出るだろう事も想像に難くない。だからこそ慎重になつてしまふ

「大丈夫だ、あれはただの噂だよ。前に他の子にも聞かれたけど噂好きが流したデマかなんかだろ？」

だから彼女が納得のいかない回答になつてしまつても仕方ない

「でも、もし魔法が関わっているなら…「アキラ。」」

「大丈夫だつて、一応魔法先生達で危険性はチェックした。本当にただの都市伝説的なものだつて」

なおも詰め寄る彼女の頭に手を乗せて落ち着かせる。もちろん今言ったことは嘘だ。全部が嘘ではないが都市伝説やデマ

という話はない、何しろ『桜通りの吸血鬼は実在するのだから

「なんだ、意外と怖がりなんだな…結構可愛い所あるじゃん」

「な、音来さんっ!」

「照れるな照れるな、よしっそんなアキラちゃんにいい物をあげよう」

「ついいつもの調子でからかってしまったので顔を赤くする彼女をいさめる為に当初の目的だった物を懐から取り出して彼女に渡す

「これは…?」

その手に収まるのはいつかの“誓約の指輪”に似た指輪。手製な為、デザインは無骨だが一応見られるよう植物の蔦をイメージした装飾を施してある。8時間の大作である。

「魔除けとか抵抗とか交通安全とか家内安全とかいろいろとご利益のある…先生…」…後半は嘘だけど…いつか渡そうと思って作っていたものでな、簡単な退魔効果を編込んだ指輪だ。下手なお守りよりご利益あるぞ?」

「あ、ありがとう…」

受け取ったそれを指にはめてくれた事を確認し、肌身離さずつけておくよう注意をする。

折角のお守りもつけてないのでは意味が無いのだ

「うし、じゃあ修行再開っ!と、いきたい所だけど流石に今日はこ

「こまでかな、怪我は治ったけど疲れが溜まってるだろ？」

「そんなこと」「おんやあ〜？」「」

「修行方針に関してはしっかりと従ってもらって約束だったはずだけだなー？」

彼女はこれで結構無茶をすることが多い、もっと自分を大切にしろと常々言っているのだが、自覚がある分やめることはないのだから性質が悪い。

目の前の彼女も俺が言わんとしている事がわかっているようではつが悪そうに少々うつむき加減だ

「…冗談だ、これ以上やってたら夕方になっちまうからな。流石にルームメイトに言い訳が大変だろ」

「うっ」

「んじゃ、何か食ってから帰りますか。おごるよ」

「いや、それは遠慮しとこうかな」

何でと問うと彼女はため息を一つつき

「そっちの方が見つかった時の言い訳が大変だよ」

と返されてしまった。

「おはよーございます！今日も元気に行きましょう！」

「…何があつたんだ彼は」

あいにく、過ぎ去る光景に対してこぼれた言葉にコメントしてくれる相方はいない

その件の光景とやらは後方をやたらと元気よく挨拶をしながら走っているネギのことだ。

元気なのはいい、普段明るい事は自分にも周りにもプラスになる。そういつた意味では問題ないのだが

(いや、一昨日と今日で変わりすぎだろ…時間が解決するとは言ったがそんな短時間で立ち直るとは思ってなかったんだが)

「あ、音楽さん。おはよーございます！」

「あ、ああ、おはよう」

若干引きつりかけた声に何とか平静を保ち、自分の横に行く彼に挨拶を返す。

「今日はいいい天気ですねーあ、今日はアインさんと一緒じゃないんですか？」

「まあな、普段からそんな一緒にいるわけじゃないさ」

言葉にただの同期だと付け加えておく。

「それよりも、今日は何時よりも早いな。ネギ君こそ神楽坂達と一緒じゃないのか？」

「ええ、今日はちょっと…っていけないっ すいません音楽さん、僕この後用事があつて…」

まあ、そうだろう。大方エヴァンジェリン関係の用事だろうがこれだけ顔の陰が晴れているのだからある程度は好転したのか、はたまた吹っ切れただけなのか、どちらにせよ良い傾向だ。

一つ頭を下げる彼を片手で制して先を促す。律儀な彼はそれでも一礼を返してから走去る。

しかし、

「10才の子供があれだけ速いってのに誰も疑問に思わないのかな？」

彼が走去った後にはそれに沿って魔力の残滓が漂う。心なしか彼の変調に合わせるかのようにそれもやわらかくて良い練具合の魔力だ、滞留する魔力の残り具合から彼の心も伺えるようである。

「ま、もう少し傍観に徹するとしますかね」

玄関からそのまま教室に向かう彼を見送り、俺は反対に職員室へ向かうべく歩を進める。

「それはまた、いささか放任主義過ぎる気がします…」

「またいきなりだな、オイ」

朝の職員室、非番の俺とアインは伴って休憩中、話題は先程のネギ君についてだ。

今朝の彼の状態を伝え、今後の方針についての考えをそのまま伝えたのだが

「いくら同年代とはいえ彼はメルディアナ魔法学校を卒業したばかりですよ？」

彼女の主張はもつともだろう。俺自身ネギには少なくとも好感は抱いている。があくまで他人が人に対する評価で魔法使いとしての評価ではない。

彼はまだ何においても経験が浅い、ウェールズでどのような過ごし方をしてきたのかは知らないが俗世にあまりにも疎いのは悩みの種だった。といってもそれは彼の美德の一つではあるだろう。

少なくとも無知であろうとしているわけではないのだから

「まあ、いささか危なげな所があるのは認めるが」

「だったら…」

「それとこれとは話が別だ」

彼が無知であろうとせず、なおかつ目指すものが“立派な魔法使い”ならここですぐに手を貸すのは愚でしかない。

(ま、アインの言いたいことは分かるんだけどな)

「音来先生ーっあ、邪魔しちゃった？」

とここで突然聞き覚えのある声。そう、彼のパラッチ娘だ…

俺は周囲に張っていた会話を誤認させる結界をアインに解かせてそちらへ向き直る

「じゃかしい、ガキが余計な気を遣うんじゃないねえ」

「まあ、朝倉さんが期待しているような内容などこれっぽっちも無かったと進言しておきましょう」

「……………何か？」

いや、事実なのだが…こう、全力で否定されるのに悲しいものを覚えるのはなぜだろう…

「それで、今はHRの時間だと思えますが、どうしたのですか？」

「あ、うん。そうそう、そっちだった、実は…」

そして俺を完全スルーで進む会話…

(あれだよな？朝倉が探しに来たのは俺のはずなのにこの扱いは何さ…)

どよどよとしたオーラを漂わせるもなおも進む会話、いい加減最近の扱いに泣きたくなくなる

「それで、ネギ先生が突然教室を飛び出していった為に困っている」と

「では、鳴守先生。あとはお任せしました」

「何故にWhy!？」

「そのような意味不明な文法を使わなくても…あなたは2-Aの副担任です。クラス担任不在の事態で真っ先に立つのは当然かと…どうせ手は空いているのでしょうか?」

(一言余計なんだYo!)

こうして俺はこの日、結局帰ってこなかったネギの代わりに教壇に立つことに

この事態には理解はしたものの納得がいかない俺だった

翌日の夜、いつものごとく…とはいかず、この日は大規模な警戒態勢が布かれている

それもそのはず、本日は学園都市年に2回の停電がある日なのだ。もちろんその程度ではこれほどの魔法関係者が駆り出されることは無い、つまりは当然それなりの理由があるわけだ。

学園都市は図書館島の蔵書ばかり、在学の要人ばかり、聖地としての霊核しかりといる外部にとっておいしい要素を多分に含んでいる。そういった者からの進入を防ぐ為に学園には大規模な結界を張り巡らせている。

しかしそれが停電とどうつながるのかというと驚く無かれ、結界の動力になんと電気を使っているのだ。幻想の象徴ともいえる“魔法”もついには時代の流れには逆らえず、こうして“ハイテク”とやらに侵食されていくのだ

「ふむ、げに恐ろしきは科学の力か…ああ、こうして俺が住みにくい世界になっていくのだろうか…」

いつその事魔法世界に引きこもるかと誠情けない考えも浮かぶがこれもしょうがない、何せこの俺はかの“ハイテク”の代名詞(?)、携帯すらもまともに扱えないしまつ。正直見た目大人で通っている為周りの目が痛い、ついでに従者のスパルタぶりも痛い…

気持ちが無理やり切り換え見下ろす眼下の光景、既に停電まで10分も無いこの時間に人の気配は無く、はつきり言っただけである。まあ何しろ停電時間中の為の布陣であるので末端に手が空いてしまうのはしょうがないことだろう。

さて、いい加減暇なのところもつろちよろされると正直気になって仕方ない。

本人は何のつもりか知らないがこの時間にいると言うことは少なくとも一般人ではないだろう

「あ、面倒はごめんなんだわ…さっさと出てきてくれないかな、お二人さん？」

「……………」

無言のの圧力とあまりにも交友的でない態度を示しながら現れたのは2人組みの女子。

片や中等部の制服を着ており、もう片方は聖ウルスラの黒を基調とした制服に身を包んだ金髪、どちらも集会で何度か見かけたことがあるので魔法生徒なのは間違いない

名前は確か…

「え〜と、確か…高音・D・グレイトマン？」

(あ、こけた)

「何ですかそのふざけた間違え方はっ！」

「いや、まじめに答えたつもりなんだが「なお更性質が悪いですっ」そうか？」

そんな怒ることだろうかと首を傾げるもなおも詰め寄る彼女、はて？何故このような事態に…

「つけられる覚えはないんだけど…んで、その魔法生徒が何のようなんだ？」

「コホンッ…こうやって見つかった以上、正直に話します。私は貴方達傭兵などという野蛮な方がこの学園にいる事に納得をしていますが…」

(つまり彼女は俺達の否定派だと、てかあれでばれてないと思ってたんかねえ…)

「で？納得してないんだったら何だっただ？」

えらくストレートな物言いに感心してしまうがこの場合単に真つ正直なだけな気もしてしまう。

「：貴方達には失礼ですかここ最近監視させていただきました。不真面目な勤務態度、過剰な警備方針。学園長先生は容認しているようですが“立派な魔法使い”を目指す者の一人としては見過ごせませんっ」

ふむ、どれも身に覚えがあるが：はたして監視されていると知ってボロを出す人間がいるだろうあか？

いや、彼女の物言いからすればあまりな勤務態度に聞こえるが実際は担当教科がない今は他の教員より暇があるだけであり、警備の際には比較的難易度の高い敵の所に回されるために多少反撃が過剰になるだけだ。

事実魔法先生方からも苦情は減っている。一部このように俺の役職が気に食わないといった連中がたまに突っかかってくるが：

「まじめだね〜」

「真面目な話をしているんですっ！」

彼女も例に漏れずまじめな人間らしい。

その物言いからすれば自堕落とは言わないだろうが多少不真面目だという主張は認めよう。この際だ、俺がめんどくさがりな所は自覚する所でもある。

が、彼女の主張を聞いている限り勤務態度が今回の原因じゃないの

は明らかで…

「…おたく等、もしかして正義の味方とか目指しちゃったりしてるわけ？今時？」

「っ、だったらどつだと言っんですか？」

(うつわ、ビンゴかよ…)

総じてこのような人種、“立派な魔法使い”至上主義とか英雄願望が強かったり正義感が強かったりと、まあ簡単に言つとそついった輩は相手をするのがめんどくさい。

というよりまず己が目指すべきもの、考えが真逆なのだから意見がかみ合わないのも道理ではある

「正直、俺は“立派な魔法使い”なんか知ったこつちやねえ、正義？大いに結構。けどな、お前の価値観を俺に押し付けるなや、いい迷惑だ」

「なっ！？あなた本気で言っているんですか？ 仮にも魔法使いなら…」

「あ、悪い。知ってると思うけど俺、魔法使いの前に一傭兵なのよ、分かる？ようはそんなものに興味はねえんだわ」

そもそも“西の夜明けは”今でこそ有名だが元が貧乏ギルドだった。戦災孤児の受け入れ、地域援助、はたまた依頼人の貧によつては無料で引受けたりなんぞをしていたのだからギルド自体が貧困するのは当然だ。

そんな中で幼少期を過ごしていれば多少守銭奴的な性格にもなるだろうし、借金が溜まるのなら返済の為に仕事を選ぶ余裕もなくなっ

てくる。

もともと日陰者なのだ、傭兵という仕事は

「きよ、興味ですってっ」

「あ、気に障ったんなら謝る。けど今時正義の味方もどうか思うぜ？戦争は終わったんだ、そんな慈善事業、腹の足しにもなりやしない」

「っ！！」

「…何のつもりだ」

右手に黒い棒状の塊を掴んで握りつぶす

つぶしたそれは砕けた先から不確かな存在となり、するするとウルスラの彼女の背後からへ戻っていく

使用したのは“操影術”の類だろう。が、問題はその種類などではなく、狙いが間違いなく当てる攻撃だったということだ。

「言ったはずです。私は貴方のような野蛮な方は大嫌いですっ」

(…大嫌いときたか、言い方をまずったか?)

「興味？慈善事業？その何が悪いって言うんですかっ！貴方のような守銭奴に比べれば遥かにマシですっ」

今の言い方には俺も非があったので俺はその誤解を解こうと歩を進めようとした

「は、言い方がまずかったな、俺は…っ!？」

進む足が地面を踏む瞬間指に微弱な痛みが走る。

それは昨日渡した魔除けの指輪の使用に対する反応、対象に危険が迫ったときに発動するそれは同時に俺にシグナルが送られるように設定を施してある。つまり

(この反応…アキラっ)

事態をすばやく理解し、優先順位を組み立てる。

ここは警備でもなく、目の前の誤解を解くところでもなく、まず巻き込んでしまった彼女を助けに行くのが最優先である。

踵を返し、飛び上がろうとする俺の前に今度は影の従者を引提げた彼女が回り込む

「待ちなさいっ！逃げるんですか！！」

「今それどころじゃねえんだよっ、どけっ邪魔だ！」

「きゃっ」「お姉様っ」

説明をしている暇はないと力任せに影ごと吹き飛ばす
あまり手加減ができなかったが今はそれに割く時間もないと考えを振り切る

(この場所は…学生寮か？クソっ、何でこんな時に限って警備が寮
近辺じゃねえんだよっ)

場所は寮からそれ程離れていないとはいえ、今はその一分一秒が惜しい。

再度反応点を確認し、俺は速度を上げた

S a i d : A k i r a ・ O k o u t i

「キヤッ」

「あちゃ、消えちゃったよー」

突然の停電…ではなくもともと決まっていた停電なのだが、こっぴも混乱するのには訳がある

「まだおフロ入つとるのに」

そう、いつもの4人で私達は大浴場に来ていたのだ。当然今日この時間に他の利用者の姿はなく私達だけ、そも停電すると分かっているのだからいるほうが珍しい。

まあこうしてここにいる私もその珍客な一人なんだろう

「?どうしたの、まき絵?」

目の前にいる友人の一人である彼女の案でこうして大浴場に来ているのだが、本人は停電した浴槽に立ち尽くしたまま動かない、普段の彼女からしたら何らかの行動を起こしてもおかしくはないのだが…

少々不審にも思ったが私は彼女を心配してその片に手を置こうとすると

「っ！」

伸ばした右手が片に触れるか触れないかの距離で突然腕が何かに弾かれる。

慌てて手のひらを確認するもそこに外傷はなく、先程の衝撃がなければこうしてみることもない。

「「キヤ　ッ！」」

「！？　亜子っゆーなっ！」

突然暗闇に響いた悲鳴、それは間違いなく先程まで一緒にいた友人たち二人のもので

周囲を窺うも可視可能な範囲にその姿は見受けられず、背筋に冷たいものを感じて後ろを振り向くも今度はまき絵までもがいなくなっている

「…まき絵、　亜子、　ゆーな！」

いくら視界が利かないとはいえ風呂場で友人を呼ぶなどおかしな話だが、いくら読んでも声がむなしく反響するだけ…気のせいかな視界の端の黒がより一層濃さを増したようで余計に不安感を煽る。

最初は彼女らが停電にかこつけた悪戯で私をからかっているのだと思っただ。しかし、こつても時間が経つとそれも冗談に思えなくなってくる。

ピチャ

「!？」

いつの間にか縁に寄っていた私の背後で水の滴る音が一つ、また一つここは大浴場という大きなお風呂で天井から水滴が落ちてきても不思議ではない、不思議ではないのだがその音に伴う質量と気配に無意識に足がすくみ、背後を振り返ることを身体が拒絶する。

普段の、魔法を知る前の私なら何の事は思わなかったかもしれない。だが今の私はそれを知り、なおかつあの噂を耳にした彼はそれはただの噂だといっていたが私にはやはりそうは思えなかった。だから今日も夜中に外を見回ってみようかと思っていた矢先にこれだ

(しつかりしろ私っ！)

たかが音でこれだけおびえては何にもならないと心を捕らえるその感情を振りはらうように勢いよく振り返る

そこには…

「…なんだそこにいたのか、もうっ脅かすのは…っ！」

背筋に冷たいものを感じて慌てて横に飛びのく、足元のタイルに滑りかけて体制を崩しかけるも再度見やるそこには…口元に異様に長い犬歯を光らせる友人だったもの達がいた…

「なんでにげるのアキラ？」

クスクスと笑いながらこちらに近寄るその姿は紛う事無き友人達、しかしその内は既に変容している。

一般人であるはずの彼女らが待とう魔の気配、先程まで何にも感じなかったはずなのに今は私ですら感じ取れるほど濃密なそれを漂わせている。

(にげなきゃっ)

今の彼女達が正気じゃないのは一目瞭然だ。しかし今の私の手持ちでは助ける手段もなく文字通り丸裸な状態では何もできない。

「むっ！」

「わっぷっ」

私は今できる手として内にある気を発散する。

狙い通り波紋を描くように円状に湧き上がるお湯に気を取られた彼女達を尻目に一気に脱衣所までかける。

目指す場所までは5メートルもない、身体に強化を駆ける今はもとの身体能力と合わさって3秒もかからない距離だ

その距離で

なぜかその先にたっているまき絵

「どうしたの？おいかけてっここかな？」

ゾクリと悪寒が走る。

(いつの間にか…いや、それよりもどうやって回り込んで…)

音も無く立っていた彼女に気をとられ、気付くと左右に亜子とゆー

なが立っており、私は背後に後ずさるしかなくなる

「あれ？どうしたのもうおしまい？」

ドンと背中が壁を感じて追い詰められてことに気付く。ここに来てこの迂闊、退路も無い、手段も無い

「はい、っーかまえたーっ！」

迫る彼女達にどうすることもできず身をすくめる

何も変わってない、これでも少しは強くなっていると思っていた。力よりも心がだ

だがいざこうして直面するところもすくんでしまっ

何も変わっていない

「先生っ」

「呼んだか？」

「え？」

不意にかかる声に顔を上げる

「よっ わるい、待たせたな」

軽い感じで謝る彼にそこに来て私は彼に抱えられていることに気付く

ああ、どうしようもなく私は変わっていない

その助けられた事による安心感と共にどうしようもない情けなさを私は抱いてしまった

s a i d : o u t

「さて、いつくらなんでもいじめの現場…手分けじゃないだろうしな」

軽く冗談を交えつつタイルに着地し、アキラをおろす

駆けつけてみれば反応は大浴場の中、風呂ということとは倫理的にどうなのかとかこの停電時に何をやっているんだとかいろいろ突っ込みたくなっただが緊急事態とそれらを追いやり中へと飛び込む

入ってみれば壁際にアキラを追い詰めるいつもの仲良し4人組の3人
魔力の気配がしたから咄嗟に抱えて離脱したものの、正直この事態はあまり理解できていない

「ふむ、いささかお早い登場だったが、仮にも男性教師が女子寮の風呂場に飛び込んでくるのはどうなんだろうな？」

「!？」

(なんだこの魔力!?)

背後から突然声がかかることよりもその存在から放たれる魔力の密度に驚愕する

そして考えうる限りあまりよくない状況

「ダーク、エヴァンジェル……」

「ここに囚われてからその名を聞くのも久しいが……」

月夜の光を背に降り立つ妖艶な姿はいつか話に聞いた吸血鬼の真祖そのもの

「こんばんはだな、鳴守先生？」

大きく裂けんばかりな笑みを顔に貼り付けた吸血鬼と

一人の傭兵とがここに邂逅をなした

……いかがだったでしょうか？

あれですかね、高音の登場が微妙にひどい扱いとなってますが一回目の登場なのでご容赦を！

彼女、主人公の境遇を表に出す上で非常に扱いやすかったのでは非にと思つてこのような形と相成りました。そのため初回は対立しています。その後は…秘密です（汗

まあそれよりも愛衣の空気具合の方が読み直してて可哀想になりました（泣でも修正はしていません！

さて、今回はエヴァンジェリンとの直接邂逅までもつて行きました。がそのためつなぎがえらいことに…

重要部分は入れましたがいくつかカットしています。ネギのいない授業風景とか、停電前のエヴァの saidとか高音&愛衣と少々ガチバトルをやらせてみたり…　とにかくどこでできるのかに困りましたねいつそのこと次回に回そうかと何度思ったか…

まあ、その割りには最後まで中途半端に終わっています。これは漫画的な“強敵登場！”みたいな終わり方がよかったです。短いですけどいいれました！

てなわけで次回はエヴァンジェリンVS音来となります。久々にバトルものとなりますが今までが避けてきた為に非常に難航しました。そんな次回20話、どうかお楽しみ！

ではあとがきの方はこの辺で、次回またお会いしましょう

それでは、再見ッ！

取立20回目　く月夜の戦い、副担任は吸血鬼と闇夜に踊る。く（前書き）

はい、遅れまして申し訳ありません！

20話投稿です。

いろいろと挑戦した20話ですがどうか最後まで読んでいただけると嬉しいです。

それではどうぞ！

取立20回目　　月夜の戦い、副担任は吸血鬼と闇夜に踊る。　　

下弦の月に照らされて輝く金色

背後の光に黒く陰る表情に蒼く光る二つ瞳

本来宝石にも例えられる月と女性、だがそれも彼女が纏う雰囲気
美しさだけにとどまらせない

その身に闇を象徴するかの様に黒い外套を羽織り

口元には彼女の通り名を象徴するかのよう的一对の牙が光る

そのどれもが噂に名高い吸血鬼の特徴なのだから

そう、彼女は…

「『ダークエヴァンジェル闇の福音』……」

月夜に現れた妙齡の女性は闇の魔法使いの名を恣にする彼女

「ここに囚われてからその名を聞くのも久しいが……」

外套を棚引かせ舞い降りる彼女、纏う艶姿えんしにうつすらと浮かべる笑
みすら妖艶に見える。しかし、その表情は背筋が凍るほど大きく口
を裂けるようなもの

「こんばんはだな、鳴守先生？」

ふわりと音も無く水面に降立つ彼女はその表情を崩すことなく、より一層濃い笑みを浮かべて開演を告げた

「…これはこれは、彼の御高名な大魔道にこうして合見えるとは…
光栄の極みだな」

「なに、そちらも似たようなものだろ？ 『雷帝』 『天の厄災』 『破滅の足音』、たかが人間がこれだけの呼び名を持つのも稀だ」

表面上は互いに笑みを浮かべた会話、だがその内はとても穏やかなものではなく、むしろ周囲の雰囲気通りに張り詰めたものを漂わせる

(と言っても…向こうはどこ吹く風って感じだろうな)

「ふむ、こういう時はあれか？ やっぱり『何の用だ』とでも聞くべきかな、先生？」

「この状況でそんなお決まりのやり取りは必要ないでしょ」

然りとそれに返す彼女

後ろに庇うアキラと前にふらりと立つ亜子達、彼女達だけでは喧嘩におふざけ、外部犯等々…考えられる限りでも13通りのシナリオ

があるがこうして目の前に実行犯様がいるのなら話は簡単だ。

何せそこに立つだけでこの空間を圧倒するほどの魔力、こうして視認できる距離にいればいくら感知が苦手な己でも吸血鬼化した生徒達に纏う魔力とを見間違はずも無い

「さて、せっかく来てもらった所なのだが…そこをどいてもらおうか、お前の相手と言うのも興味をそそられるが今はその後ろの彼女に用がある。人目につくのはまずかろう?」

「悪いがそれはできない相談だ…知っていると思うがアキラは俺が指導にあたっている。彼女は関係者だ、その監督責任は俺にある。訳もわからず譲れるわけ無いだろ」

「ふう、この通り子供先生から果し合いを受けてな、その為の舞台演出に協力してもらおうと思ったただだよ」

そういつてどこから取り出したのか『果たし状』と書かれた紙を見せ付ける。

確かにその筆跡は子供が書いたように丸い字体をしているがそれでネギのものだと判断するのは早計かだが…

「舞台演出にしちゃ、ちよつと悪趣味だな…」

「いい具合だろう? 何せ私は『悪い魔法使い』だからな、これ以上のものはないだろう」

突き上げた指に従いこちらを向く亜子達、考えられるのは最低な展開。

なるほど、たしかにこれは『悪の魔法使い』の所業にふさわしい

「さて、主役登場までのお遊戯といこうか…演目は、『教師と生徒の人形劇』でどうだ？」

「うっわ、悪趣味っ」

「クックク、お気に召してもらえた所で開演だ。お前達、先生と遊んであげな」

主人の命を受けてどこか嬉々とした様子で立ちはだかる生徒達

「センセイ、あそぼ？」

「クスクス」

「センセイ……」

「ダイテ、センセイ」

言葉の内容はともかく正気じゃないのは十分分かる。

吸血鬼化した際の対抗呪文は存在する。が、生憎と音来の使える呪文にその手の治癒系の呪文は少なく、目的の解呪魔法はない。となるとおのずと手段は限られてくる

「…やっぱ気絶させるしかないか」

「でも先生……」

「分かってる。加減はするさ、っと…」

待ったをかけるアキラをいさめている間に襲い掛かってきた裕奈を片手でいなし昏倒させ、倒れた彼女を骨に異常が残らない様に間接を極めて動きを止める。

「ざつとこんなもんか？アキラ、裕奈を…！？」

押さえておいてくれないかと頼もうとした瞬間、間接を極めているはずの腕に力が入りだす。

慌てて自身に強化をかけるか迷うも予想以上に強い力に断念し離脱する

（オイオイ、吸血鬼化っていうのはここまでやっかいなのかよ）

「先生っ」

「アキラ予定変更だ、お前息はどれくらい止められるっ？」

「え？3分ぐらいなら…」

「つと、十分っ！」

返事を返す間に襲いかかる生徒たちを捌き、大きく距離をとる。

いくら強化すれば対抗できるといってもあの腕力に拮抗させた場合、下手をつてば彼女たちに怪我をさせてしまう恐れがある。それはアキラも、あまいとは理解してても音来自身も望むところではない

「今からあいつ等を眠らせる、俺が合図したら息止めてる」

「っ、わかった！」

（とは言ったものの…手持ちの捕縛呪文じゃうまくいくかどうか）

人に得て不得手があるように魔法にもそれがある。属性というのはその最たるものだ。

魔法使いはその呪文に属性を帯びさせる事ができる。しかし、全て

の属性を満遍なく使いこなせるかと言うとはたしてそうはいかないものだ。これには諸説あるが共通として己の基となるもの、つまり生れつき得意不得意が決まっている。すれば炎が水に弱いと言うように陰陽の木火土金水、西洋の精霊火水土風、その他闇と光などにあるとおりこの関係は人にも適用され、逆属性は習得が困難とされている。

「っち、水との相性は悪いんだけどな…っ　ぼやいてる場合じゃないか…」

音来の得意な属性は雷系。

雷系の呪文は対象に少なからずダメージを負わすもの、加えてこう動きが速いと誘導性が低い『魔法の射手』を使うより初めっから捕縛形の呪文を使った方がいいのだが…

『プラクテ・ビギ・ナル…』

生憎と手持ちで使える系統の捕縛系魔法は雷系を除くと炎と水のみ、しかも水分の多いこの環境では相性の悪い炎霊を従えるのには心もとなく、炎を除くとなると水しかない。が、本来雷精と反発しあう水精と音来とでは相性は最悪、職業上環境適合の為に属性はできうる限りそろえたが水系の呪文は一番出来が悪い

『目醒め現れよ　浪立つる水妖　水床に敵を沈めん』

そこで一手間加える。あたりに満ちた水気、つまりはこの己にとつての悪環境を逆手に取る。

水精との相性が悪いなら水そのものを媒介にしまえばいいのだ

『流水の縛り手！！』

詠唱の終わりと共に足元の湯に満ちた魔力はその量をもって強引に精霊を従える。

苦手な精霊の使役を属性に合うよう風呂の湯を媒介に練り上げた魔力はそのまま水分を練り上げ、本来の『縛り手』としての形をなすべく目標を呑む込む為に襲い掛かる

裕奈達も常人離れた動きで回避していくが生憎ここは水場、水系魔法の操作には平地よりも容易い

渦巻く水の奔流を二つに分けて囲うように大きく弧を描かせ、左右から徐々に上下と覆い、最後にその面積を圧縮する

「よしっ！」

「え！？先生！これじゃ亜子達がッ」

「大丈夫だッ」
「大気よ 水よ 白霧となれ 彼の者らに一時の安息を」
『アキラッ！』

合図とともにアキラが大きく息を吸ったのを確認し、水球の中の空気に魔力を流し込むようにして溜めた魔力を解放する

『眠りの霧ッ！！』

やはり若干外に流出してしまっただが中にいる三人には十分効果が合ったようで早くも眠りにについている。後は周囲に漂った霧を払えば…

「…………ふ　っ」
『風よ！』
「…………アキラ、もういいぞ」

「先生、亜子達は…」

彼女が見る先には水球から開放されてタイルの上で寝息を立てている友人達

「ふふっアウエーでここまで戦えるとは、思ったよりやるじゃないか」

「……俺としちゃあ極力面倒ごとは勘弁してもらいたいんだが……ちよっとやり過ぎだよおたく」

本来、音楽は性格的には戦いを好むが基本は面倒事が嫌いだ。

だが、流石にこうして見知った、それも比較的友好のある人間と戦わされるといふ事態には少々血が頭に上る

「ん？どうした、そうピリピリと……貴様ももしや正義だ何だという輩か？」

「さてね、そう見えるんなら眼科に行くことをお勧めするよ。今の俺はちよっと私情で頭に来てる一傭兵だ」

「そう張り切っている所悪いが……生憎と今日の舞台にお前の役は無い。早々にご退場願おうか」

「席なら無理やり空けてもらうさ。こうなった以上、観客でいるつもりは無いんでね」

口は皮肉に遠まわしな敵対宣言、纏う魔力は密度を増して確かに敵

意を飛ばす。

だがしかし、相手は幾数百の年月を生きた魔人、彼女は音来の魔力を柳に風をあてる様に、いや、むしろ心地よいというほどに口元を吊り上げる

「なら、噛ませ犬Aの役でもくれてやる。後は舞台の袖で伏してライトの先でも眺めているがいいさ」

「上等だ、その余裕の表情崩して反省文書かしちやる」

「ほう、活きがいいな。そういうのは……嫌いじゃないぞっ!」

アキラにアインの元へ行くように耳打ちし、迫る真紅の爪を懐に備えていた剣を抜き出し受け止める

受ける剣は衝撃に火花を散らし、欠ける刃が舞う中エヴァンジェリンはその顔に笑みを浮かべる。

俺は腰からもう一つの剣を抜いて反撃を図る

こうして舞台は開演を前に前座を迎え、役者は火花を散らしながら月夜を舞った

『魔法の射手 連弾・氷の101矢!!』
『魔法の射手 連弾・雷の101矢!!』

放たれた矢の群れは互いに衝突し、夜の空に大輪の花を咲かせる。ともすれば季節はずれながら美しい光景が、その渦中に飛びかう本人らにとって美しさと言うのは二の次の話だ

「…ずいぶん激しく戦うじゃないか、ええ？傭兵が、生徒に危害を加えたら罰則じゃなかったのか？」

「ッ！？アホが、これだけ暴れてるやつが何言いやがるっお前は、対象外…だッ！！」

雷の残光と氷のダストが舞う中で切り結んでくるエヴァンジェリンを再度剣を“転送”して切り返す。

既に最初の2刀は砕け、これで五本目。爪だけなら問題は無いのだが彼女がその手に纏う冷気の剣は数多もつ自慢の剣でさえ強化無しでは一瞬で蒸発してしまう。音楽は既に“数無し”での抵抗はあきらめていた。

「ふむ、花と女性は優しく扱うものだぞ？」

「はっ！よく言うぜ、真祖の吸血鬼様が」

「然り然り、我こそは『闇の福音』！幾百の時を過ごした…」

言葉の途切れを感じた刹那、エヴァンジェリンの姿がブレて高速歩法の類だと気付いた時には背後にひやりとした気配が突如現れる

「悪の魔法使いだよ、ボーヤ」

「っ!？」

まさに後手、込められた魔力と力に驚く間もなく音来は衝撃を背に受けた。

「っ　あ、クソツ…！こたま魔力込めやがって、普通の人間なら死ぬぞゴラッ」

（この俺が気付くどころか反応できなかった？オイオイ、どんな速度だよ…）

走る痛みに悪態をつくも改めてその実力を思い知らされる。

「よくぞもった。さあ次だ、蛙の様に潰れてはくれるなよ？」

「イゝ!？」

声に籠る嘲笑に冷たいものを感じて上空を見上げればそこにはまるで湖をまるまる一つ凍らせて作り出したように巨大な氷塊を片手にキレイな笑顔を浮かべる真祖の吸血鬼の姿が

『氷神の戦鎚!』

「クソが！受け止めるこつちの身になれってんだっ『宿れ雷精、神の使いよ、猛き翼広げて舞い降りろ、』雷鳥召喚!!」

『迎え撃て!』

精霊達は音来の命を受けて眼前の氷塊を砕かんと己が身を弾丸とする。

降り注ぐ氷塊に迎え撃つは神の使いにして空の王と名高い荒鷲を模った高位精霊達、雷の如く速度を上げたそれらは目標を前にして縦横無尽に飛び掛り、次々と獲物を穴あきに貫き砕く

数秒と経たずに氷塊は跡形も無く蒸発する。

そして鳥達は新たな獲物を貫かんとその目標を更に上空へと定め、勇猛果敢に羽ばたく

がしかし…

「綺麗に砕くな、あれは『精霊召喚』の亜種か?なかなか面白い魔法だったぞ」

「そりゃどーもっ!」

(その『雷鳥』を片手で掻き消しといてよく言う)

『雷鳥』の衝突に大きな雷光を瞬かせた刹那、その雷光すら置き去りにして眼前に舞い降りたエヴァンジェリン。いくら『氷神の戦鎚』の蒸発にエネルギーを使ったとはいえ仮にも高位精霊だ、その威力を前にして無傷で立たれるというのには流石に落胆を禁じえない

「フンッ!」

「ほう、先程に比べると大分見れる剣だな。が、その程度ではまだまだもろい」

距離を話されては分が悪いかここで攻勢に出るため渾身の力を込めて切りかかる
しかし、いくら力のこめられた斬撃といえど受け止められては意味がない

「つち！『フォワード転送』クレイモア 3番！」

「これまた、ずいぶんといい物を持っているじゃないか。折るのもつたいたないくらいだ」

「アホ、そう何度も折られてたまるかよっ！」

久々に転送した上位5番代の中の3番刀、確かに業物ではあるがそうやすやすと折られてしまっただけは金銭的にもストック的にも精神的にも悪い

より練度の高い魔力を込めて下段に構えたそれは飛行術中のすれ違いざまに切りつけることを目的とした構え、片や相対するエヴァンジェリンはというと両手を下げて一見脱力しただけの完全に“待ち”な構え、いや、構えといえるかどうかもあやしい

相手の対応に少々血が上るのを抑えるため深呼吸を一つ、姿勢は低く、面を減らして狙うは一撃離脱。

風吹く空の上で大気を裂き、両者は衝突する。

side: Negi・Springfield

少年は光なき街を歩んでいる。

「いつてもそこはすたれたゴーストタウンなどではなく“学園都市”という大きな街が年に2回行っ定期点検の為の大停電によるものだ。」

「結局動かなかったね、エヴァンジェリンさん」

暗闇を進む中ひとり呟く子供というのは絵的にも世間的にもあまりよろしいものではない。だが誤解しないでほしい、実はこの少年は一人というわけではなく、肩に乗った己の相方に話しかけていただけである。

「でもまだ油断はできないぜアニキ、吸血鬼と言えば満月の夜だがこんな停電なんて日にゃ闇討ちなんてことも…」

オコジョ妖精カモミール・アルベール

ネギのパートナーとなるべくはるばるイギリスという遠方からこの極東の日本へ追いかけてきた妖精。

本人はケットシーに並ぶ由緒正しい精霊などと言っが、普段の行いとヤのつく職業の下っ端のような喋り口調からその威厳は皆無である。

「いくらなんでもそんな事…」

こうして人が良いネギ少年は相方の物騒な意見に意を唱える。一見おひとよしとも取れなくないがそこは経験の浅い為、十歳といえど真っ直ぐで真面目な性格をしている。

話題となるエヴァンジェリンには一度襲われかけ、反撃、正当防衛という相方の言に乗って彼女の従者である茶々丸を襲撃してしまったこともある。が、今は考えを改め、自分の意志で真っ向からぶつかべく果し合いを申し込んだのだが、こうして翌日になっても返事はなく夜を迎えてしまった

「…こんばんは、ネギ先生」

「…!？」

突然の呼び声

ここは街中といえど毎年恒例の停電の時期は物騒なためか基本一般人は外出を控える。学園都市ということから夜遊びをする生徒もいると聞くがこうも何も光のない町ではすることが限られるのだろう。

だからこそその驚き、そしてその声がここ最近聞き覚えがある人物のものという二重の意味での驚き

「ちや、茶々丸さん…」

思わず背に構えた杖に手をかけてしまう。

それは魔法使いの彼としては自然な構え、愛用の身の丈を超すほどの杖をやすやすと構える。

「…」
「安心を、今ここで戦う意思はこちらにはありません。我がマス

ター、エヴァンジェリン・A・K・マルダウエル様より言伝を預かってきました」

「エヴァンジェリンさんの？」

「はい、今より一時間後、ダビデ像の広場にて待つ、相応の準備をもつてのぞめと」

彼の従者の伝言とはまさに果たし合いの答え、今宵ついに決着をつけるために彼女をよこしたのだ。

「…わかりました、それでは一時間後、必ず向かうと伝えてください」

少年の言葉にうなずいて答えた従者は再度夜の闇に消え、後には一人と一匹が残される。

「アニキ、まさか本当にやる気ですかい？相手はあの…「カモ君」…」

「これはもう決めたことなんだ。それに、ここで逃げたら“立派な魔法使い”を目指すことなんてできないと思うんだ」

ネギの夢、心の原風景に残るノイズとアカい世界。そして、ヒーローの登場、彼の心には黒と白の混色が渦巻いている。人なら誰しも暗い感情は持つだろうそれ、しかし、若くして教師という大役をこなす彼も10歳の少年、己の闇を見据えることはいまだかなわぬ

「アニキ…」

傍らで見守る従者の視線をよそに、少年は今一度自分が憧れた正義

の味方、“立派な魔法使い”という姿を思い浮かべ、その後お待ち受ける強敵との戦いに備えるべく歩きだした。

side:out

「フツ存外に持つな。ふむ、久々に力を出すのはやっぱりいいものだ。やはり何事も慣らしは必要という事かな？」

「クツ、化け物か！どんな構造してやがるっ」

抗戦を開始して1時間は経ったか、いやもしかしたら半刻も立っていないのかもしれない。

音楽はすでに時間の感覚がなくなっている。片や全力の全開で挑んでいるのに対し、片や余裕の表情で空に君臨する闇の女王、もはや戦いと呼べるかも怪しい中、音楽は必死に耐えきっていた

「化け物か、よもや貴様がそれを言つとわな…実に、ククッ」

「何だっ何が言いたい？」

「ククック、解らないのか？」

「……………」

己の愚痴に來た思わぬ返しに少なからず動揺する音來。
その姿を眺めてエヴァンジェリンはまたあの笑みを浮かべる

「貴様は矛盾している…、己の欲望のままに振る舞おうとしながら人であることを望み。他人を遠ざけながら孤独を嫌う…ああ、まさに人間臭くて、中途半端に獣なのはおまえらしいよ」

「……………だから…何が言いたい？」

そも傭兵であるのなら任務に余計な私情は挟まない、獣というほどでないにしろ求められるのは機械の如く冷徹なまでに冷静な思考だ。それは彼女の言うことも間違いいではない。人との境界を確固たるものにするのは当然なのだから

「いい加減人の殻を破るのはやめたらどうだ、アハト・ジーベンス…随分と皮肉った名前だな？…まるで囚人のような呼び名だ」

「何を躊躇う、なぜ躊躇う。一度味わったのだろう？その手で、す快感を…」

ドクンッ

「まだしらを切るか、それとも認めたくない口か？」

「ならあえて聞かせてもらおうか。」

人..を..殺..し..て..ど..う..だ..つ..た..と..聞..い..て..い..る..の..だ..よ..。

ええ？『大量殺人者』？」

「なにいつ、て？…ぐっ、あ」

- うだ？ 番の ? -

- な！ っ！！ -

！？

なんだ？頭が…

「どうした？動きが鈍くなってるぞ…」

「！？」

突然の動悸の乱れに気を取られた音楽はエヴァンジェリンの接近に

気付かずまた後方へ蹴り飛ばされる。

しかし蹴り飛ばされた当の本人は痛みどころではなかった。

（奴はなんて言っていた？人を、した？俺が？）

思考にノイズが入って邪魔をする。

今の一撃がいいところに入ったのか視界もどこかおぼろげになる。しかし意識は薄れることなく敵をとらえている、不思議な感覚に音来はとらえられていた。

「！？」

（……やばい… ちょっとしたお節介のつまりがとんだ……っ！また）

- んだぜアレ？

？

- また壊したのか？

あいつはこんな事じゃやられない！

- お前が連れてこなければこんなことにもならなかったろうに

ちがう！あいつはっ

- 違う、あの時と同じだ…あいつはお前のせい、お前が…

やめろ！言っなっ！

聞きたくない、知らない、アレは違う、俺はっ

- お前が…

言っな 言っな 言っな いうな いうな いうな いうな いうな
ナ いうナ イウナ いうな 言っな 言っな 言っな いうな いうな
いうな キキタクナイ いうな イウな イウナ いうナ イウナ
いうな 言っな いうな いうな いうな いうな いうな いうな シ
ラナイ いうナ イウナ いうな……

- 殺した…

「言っなあああああ あ！！！！！」

「…がつ、ああ a r、u …… a a、 g g a …… G a a a a a a a a A
A A！！！！」

次の瞬間俺は強制的に意識を手放していた……
耳障りな獣の咆哮を聞きながら……

……

……

side: Evangeline . A . K . McDowell

「はあ…、はあっはあ…まさか、やつの正体があればとはな…なかなかどうして、藪について蛇が出るとはよく言ったものだな…」

見下ろした先には先ほどまで死闘を演じていた氷漬けになっている副担任。

（全開ではないとはいえ、この私にここまでやらせるとは、ボーヤを相手にする前に大分魔力を消費してしまったな…）

「茶々丸、学園結界の方は？」

「はい、ただいまプログラムを妨害していますが時間のロスによりもって後30分もないかと」

「うち！ジジイ達か、余計な事をつ」

悪態をつきながら茶々丸がよこしたビンから血を飲み、魔力を回復する。

血による回復は吸血鬼特有のスキルだ。が、それで全快するにはこの程度の血では到底及ばない。

「…フン、まだ魔力は回復したとは言えないがボーヤを相手にするには十分…」

いるではないか、それも極上のが目の前に

目の前には先ほどの吸血鬼の真祖たるエヴァンジェリンを苦戦させた程の者

その魔力には特質する部分がある、戦闘後で消費しているとはいえ、かなりの良質まじよくな血を保有しているだろう。

(ふむ、そう考えると先ほどの戦闘も損ではないな、何せかのげん
s……)

「エヴァンジェリンさん！」

(来たか…まったくもって間が悪いな、人のディナーに邪魔を入れるとは…と、私が場所を指定したんだっただな。)

「先ほどの魔力はなんだっただんですかって何ですかこれ!？」

着地するやいなやエヴァンジェリンの後方にある氷塊を見て驚いている子供先生。

己に残った魔力は確かに減ったものの依然として枯渇には程遠い、
つまりあと一戦タイムリミットあるとと停電復旧まで余裕の時がある

「なに、気にするな。ほんの余興に戯れていただけさ…さて、
もそろったことだ。開宴といこうじゃないか、ネギ先生…」

メインディッシュ

吸血鬼らしく、悪役らしく

眷属の外套をひるがえして笑みを浮かべるエヴァンジェリンは悠然

と構える

時は停電から一時を置いて主役は夜の舞台上がり、正義を目指す少年と悪の魔法使いの戦いが始まった。

取立20回目　く月夜の戦い、副担任は吸血鬼と闇夜に踊る。く（後書き）

と、そんな感じとなりました。

今回は久々に戦闘パートにチャレンジ、それに伴って文体を少々変更しております。

よりシリアスというか、戦闘独特の緊張感が伝わればと執筆しました。

分量的には今までより少々少ないですがいつも以上に試行錯誤した回です。その分読んでくれる方に伝わればなと思っています。

では今回は短いですがこのくらいで、というより前回と合わせると書きたいことが多すぎてえらいことになるので…（汗

ではまた次回、次はようやくエヴァンジェリン編完結です。

皆様こんな作品がお越しいただきありがとうございます。

それではまた、再見ッ！

取立21回目　く戦いの後に。見据える過去と決意と、先生は……（前書き）

はい、21話投稿です。

まず、予定を大幅に超えてしまつて本当に申し訳ありません。

次回以降に向けて加えた今回のお話ですがうまく表現できたのか…

と、なにやら語ってしましそうなのでこの辺で、

それでは本編の方、どうぞ！

取立21回目　く戦いの後に。見据える過去と決意と、先生は…く

闇夜の中彼女は駆ける。

心中は己の不甲斐なさと状況判断の甘さからの自責の念。

彼はやはり助けに出ていた。

同時に自分に何の相談もなかった事が腹ただしいとも感じた。

だが、

今は全てにおいて優先順位が一変する。

あれが起きてしまった。

この世界に訪れる際に厳命された事、それは任務よりも優先されるべき最優先事項、なのに己はそこにいない

彼女は駆ける、闇夜の中を

心中は自責と焦り

しかし、今ここにおいて嘆くよりも

事に憤怒するよりも

後悔するよりも

この身は何よりも速く彼の元に駆けつける

己の存在意義にかけて

S a i d : E v a n g e l i n e · A · K · M c D o w e l l

「ふん、…ぼーやにかまっていたせいで時間をとったな……なんだ
」？」

「いえ…その割にはいつもより楽しそうでした」

傍らを3歩下がって追随する彼女は従者としては完璧だ。完璧なのだが、どうもこうした感情面での捉え方に難があるようだ。

「……どの眼で見ている。まったく、お前は従者としては優秀だがそうだったところがたまにキズだ」

主の指摘に申し訳ないと謝る従者であるがエヴァンジェリンにしてみれば先ほどの出来事は失態でしかなく、恥ずべきところが大きい、つまりは恥ずかしいのである。

そういった機敏を若干2歳の人形に期待するのは酷というものではあるがどうにかならないものかと考えさせられてしまう。

結果的に見てエヴァンジェリンがネギに負けたのは本人の油断に対するところが大きい。

終始少年の奮闘具合に加虐心をくすぐられるように出かたを窺う彼女だったが決めに放った一撃に彼の底力を測り間違え、今度こそ油断無く攻めると意気込むや否やまるで謀ったかのように彼女を解き放っていた停電が復旧してしまう。

否、まず間違いなく学園側、ひいては学園長 近右衛門の策略によるところだろう。そこが彼女を苛立たせるところである。しかし、今回の事はエヴァンジェリンの独断、おそらく利用された面も大きいがおいそれと文句を言える立場ではない。

「第一あれはあの復旧がなければ私が勝っていたんだ…結果的には負けてしまったが…」

「でも最後には助けられましたよね？」

「ぐっ」

そう、吸血鬼であるが故かエヴァンジェリンは泳ぐ事が出来ない。そして停電の復旧にて魔力の大半を再度封じられた彼女は空を飛ぶことすらできず真下の湖へと落下、周囲に緊張が走る中そんな彼女を救ったのは何と先ほどまで敵対していたはずの子供先生だった。

「た、確かにあれは結果的に借りを作る事になってしまったが…ヤツのてなぞ借りなくても私は…」

「でもマスターは泳げませんよね？」

従者が告げる現実に反論をふさがれるエヴァンジェリン。

総じて認めたくない事実を前に凶星をつかれれば言葉に詰まるのは人としてよくある事だ。彼女とて例外ではない。

また、そういった後に起こるであろう反応は沈黙か…俗に言う逆ギレというものである

「こ、このつさつきからなんなんだお前は、私の従者だろ！それともなにか？あの小僧のかたでも持つのかっ」

「いえ、そう言うわけでは…」

「えい、言い訳は聞かんっ」

そうしてどこから取り出したのか大きなゼンマイを茶々丸の後頭部に差し込んで捲き始めるエヴァンジェリン、はたから見れば見た目どおりなのだがされる本人である茶々丸には効果あるお仕置きらしい…見た目はともかく

「はあ、はあ　っはあ、どうだっこれで、懲りたる」

仕置きを終えてしばらく肩を怒らせているエヴァンジェリン、これではどちらが仕置きをしたのかわからないがそれはそれ、魔力のおちた彼女は体力的に見た目どおりになるのだから仕方ない

「…なんだ、まだ何か言い足りないか」

「い、いえ、そんなことは…ただ」

「あの、先ほどから戻られる様子がなかったので進言しますが鳴守先生はあのままにしておくのですか？」

「…あ　、すっかり忘れてた…」

従者が指摘するのは今度の計画において予想通りに障害となった担当教師が一人にして魔法関係者の一人、最終的に苦戦を強いられかけた結果全身冷凍にて学園の教会前の広場にて氷像となっているのだ。

「いや、あのままにしておいても他の奴らの目についてしまうだろう。私もそこまで鬼ではないしな」

さすがに十数mを超える氷塊を置いておけばいやでも目立つだろう。その場合言い訳も聞かない。

彼女は女子供は殺さない主義だ、対象は成人の男ではあるが今回に

限って言えば己の悪のりが招いた結果でもあるので放って置くのは少々忍びない。

といってもあの凍結では死んでいるにしろ生きているにしろ定かではないので関心は薄いが

「やつにここで貸しを作っておくのも悪くはないだろうしな？」

気を改めて調子が戻ったように笑みを浮かべるエヴァンジェリンは従者をひきつれて広場へと足を進めた。

「…なんだこれは」

事の起こりはそれほど時も経たず、広場で巨大な氷塊を溶いてすぐの事だ。

そも闇と氷の魔法を得意とするエヴァンジェリンにとって己の魔法でなくともこの程度の氷塊を溶かすことなど造作もない、むしろ自身のことを考えなければ一瞬で終わるが生モノを内包したものを急速に解凍すれば生存確率など皆無だ、そうした場合傍らの従者がまたなんと言うか

なので彼女は氷を前にして溶かす前に術式に一行程加えている。その際には生きてはいるだろうが指の一本や二本は壊死しているかと考えていた、だがこの事態はあまりに想定外だった…

「子供…ですね。体型的におそらくは10歳前後かと思われませんが…」

冷気が急速に失われて水が広がる中、横たわっていたのは確かに人である。が、その容姿が問題だった

髪はつやがあるが同色であろう金色、顔は丸みを帯びているがどこか見たことのある輪郭、何より服装がダボダボのスーツに包まれているというのが状況をより絵的に不可解にさせている。

彼女が死闘の末に凍らせたのは2-Aの副担任である鳴守 音来その人である。

目の前の子供とは似ても似つかないや、本当にそうか？

「…幻術による虚映、ということですか？」

「いや…どちらが本来の姿だろうと私の眼をごまかす様なレベルの幻術などそうそう…」

仮にも幾百の時を過ごした吸血鬼の真祖たる彼女いまでこそ絶大な力を誇るがもともとが強かったわけではない。当然元は見た目どおりどこにでもいる普通の少女だったのだから世間の迫害から逃れるために苦労をした。なので彼女は隠蔽術にも精通している、そんな彼女を半年もだまし続けるなど並みの術者では不可能だ

「あれといい、この姿といい、つくづく不可解な男だ。いや？この場合は不可解な子供というのか？…まあどちらにしろ調べれば済む話だな、茶々丸……そこで何をしている」

突然の言葉、傍らの従者には少なくともその言葉の意味する第三者の存在などは感じていない。だが己が主の言葉なら疑うよりもまず行動に移すべきだ。

施行処理は高速にして迅速に、茶々丸は主であるエヴァンジェリンの視線の先へと半身を滑り込ませる。

「……………」

果たしてそこにいたのは誰であろう渦中の男の従者、アイン リコード。

その身をいつか見たように戦闘用であろう装束に身を包んで大口径の銃を両手にふらりと現れる

銃口がエヴァンジェリン達へと向かわないのは主である彼を案じてなのか、彼女は現われてから無言に状況を見据える。

「失態、センサーに反応はありませんでしたが…」

「いや、お前の性能うんぬんよりも単純に向こうが経験豊富なだけだ、年期か仕事ゆえかはしらんがな。うまく隠れるものだな」

「……………」

「今のは一応褒めたつもりなんだがな、そう黙っていても状況は変わらんぞ？ほら、どうするんだ？」

エヴァンジェリンが指す先の彼の身体がゆっくりと宙に浮く。が、これは彼が起きたのではなく”人形使い”たる彼女の固有スキル、

極細の糸による傀儡状態のようなもの、明らかな挑発だ

「っ！彼をどうする気ですか…」

澄まさずとも聞こえそうなほどに奥歯を噛み締めるアイン、その姿を見てなお笑みを深くするエヴァンジェリン、彼女の口はその流れは止まることなく言葉を紡ぐ

「そうだな…このまま持ち帰って調べるのも面白いが…貴様の前で解体ショーでもするのも一興か？どうかな？」

「ッ！！」

今度こそは歯止めが利かないとその挑発に足をかけるアイン。がしかし、その距離があと数歩で肉薄するということとところで彼女は己の身体に急制動をかける。

「ほう、激してもなかなか冷静じゃないか。あとちょっとでバラバラ人形の完成だったんだがな」

より一層険を強くして空を睨むアイン。そう、その両目は何も無い空間を見ているのではなく、確かにそこにある障害物を捉えていた。

「そう怖い顔をするな、冗談だ。こいつに手は加えないさ」

安全は保障するという彼女の言葉、しかしアインにしてみればとてもじゃないが今の状況から鵜呑みにできる言葉ではない。

依然として武器は手放さず、なおかつ相手を刺激しないように銃を下に構える彼女、当然と言えば当然の行動だ。

「まあそうだな、私としても聞きたいことはたくさんあるが、尋問

なんぞ面倒な事をする主義じゃないんでな。よかつたな、この場に
もう一人の従者がいたら喜んでこいつを切り刻んでいただろうよ」

この場にいないエヴァンジェリンの従者、好戦的な彼女がいれば主
の発言に異を唱えたらうがいない者をとやかく言うのは無益でし
かない

エヴァンジェリンはそのままゆっくりと浮いた彼をその従者のもと
へと運ぶ、アインはその状況を一足一挙とて見逃さんと身構えるも
変化はなく彼はその足元へそつと横たえられる。

「……どういっつもりですか」

「なに、気になることはではあるが長く生きているとこれがいり
るな物を見てな、ある程度は推察できる。それに…私はそこの
やつよりそいつを理解してやれるぞ？」

「…一応、止めてくれたことに関しては礼を言います。ですが今回
の事は…」

「それ以上は無粋だぞ？いくら警戒中で散っているといえいつこの
場に他の連中が来るとは限らないのだからな、っと私が騒がしくし
てしまったのだがな」

かんらかんらと笑う彼女を前にやはり無言で立ち去ろうとするアイ
ン。

だがここでその背に待ったの声がかかる。

「先達からの伝言だ、そのボーヤが目を覚ましたら伝える。」

「……………」

「隠し事はそれが奇麗に隠れれば隠れるほど綻んだ時はもろい、一度解けたものはいつまでも隠し通せるものじゃないぞとな」

敵の言葉に本来耳を貸すべきではないのかもしれない、だがこの時アインはその言葉が妙に引っかかってしまった。

それが相手の経験からくる凄味なのか、己の身に覚えがあることなのか理解はできず、そのまま立ち去る。

不可解なわだかまりを残して

どこから見ても立派な扉、その建造物の中でひとときわ大きい扉を前にエヴァンジェリンはまるで道場破りのように遠慮なく、なおかつ堂々と開け放つ。

「邪魔するぞジジイ」

「また、突然じゃなおぬしは。もちつと静かに入ってこれんかの」

彼女が進む扉の先にいるのはこの学園の学園長にして関東魔法教会の長を務める近衛 近右衛門。

見た目はこの吸血鬼たる少女以上に奇怪な頭をしているがれっきとした人間である。

「こんな部屋にどう入ろうと私の勝手だ。それに来ることはわかっていただろうに、この狸が」

「また、乱暴なものいいじゃのう、仮にも女子なのじゃからもう少しおしとやかな物言いを…」

「私はそんな下らんやり取りをするつもりなど毛程もないぞ…」

「ふう、やはり彼の事かの」

「やはり見ていたか…、どこまで知っている…」

無言の圧力をかけてくるエヴァンジェリン。魔法使いといえこの彼女を前にしたら文字通り卒倒するであろう程のプレッシャー、しかし仮にも東の長であるこの翁はそれを受け流して話を続ける

「おぬしとさして変わらんよ……彼のギルドマスターの話では、やつが暴走したらおぬしかわしが駆り出されるだろうと忠告は受けておったがの。」

「なるほど…、どつりで……」

「なにか問題があったのかの？」

「いや、何でもなし。それよりこの件は他の奴らには？」

「知らんよ。あの区域魔力が増大してからわしの指示があるまで近寄らんようにしたからの…」

近右衛門がいう指示はこのケースにおいて正しい。戦闘開始からしばらく途中から監視の目が消えたのは感知していたがもし目撃者がいるのなら多少面倒な事態が予測される。だからこそその確認だったが

「では、貴様を消せば今回の事を知るのはボーヤとあの小娘だけになるな？」

「オイオイ…」

冗談だ、といって断罪の剣を収めるエヴァンジェリン。思わず身構えそうになる近右衛門だったが冗談と何とか受け流す。といっても並みのもでは冗談と受け取る前に逃げ出すほどの殺気を含んだ言葉だったが

「まあいい、くれぐれも他の奴らにはばらすなよ？なにせこの学園も頭のお堅い連中が多いからな…」

「忠告かの？」

「やて、な…」

そう言って去っていくエヴァンジェリンの笑みに翁はそら寒いものを感じてしまう。

彼を雇った事に一抹の不安を覚えるも時すでに遅し、今解雇すれば目の前の彼女が何を言うか、言葉で済めば御の字といった具合だ。まさに悔先に立たずである。

ため息をつきながら窓の外を眺める近右衛門を放置してその場を退出するエヴァンジェリン。やるべき事を終え、彼女は今度こそ帰路についた。

side : Ain・Recode

背に感じる温もりに安堵するも気を引き締めて彼女は走る。

といつてもその足取りは背負う主を思っただけか駆けつけた時に比べて大分ゆっくりとしている。

外傷は予想していたよりも酷くはない、むしろ枯渴しかけている魔力の方が問題だ。

主である音楽の魔力は一般の魔法使いより遙かに膨大だ。通常、一回の戦闘でここまで消費することはない。逆を言えばエヴァンジェリンがそれほどの相手だったと言えるがむしろこの事態だけは彼女

の予想通りのことが原因だろう。何より彼女がここまで焦っているのはそれがもとのだから

「んっ」

「気がつきましたか？」

わずかな身動きを感じていったん近くの休めそうな芝生の上に彼を横たえる。

起きたといつてもその眼はどこか虚ろで普段の彼をそばで見ている所為もあってとても信じられない姿だった。

「アイン？……そうか、じゃあさっきのは……」

「Master？」

「……なあ……お前は……知ってたのか？」

「……………」

できれば夢か幻か、忘れていてくれればと願いもしたがやはり現実はその理想通りにいかない。

彼は間違いなく先ほどの光景を思い出している。

そして覚えているということとは当然、彼は……

「そっか、そうだよな……こんだけ長く付き合ってるんだから知っててもおかしくないよな……」

「ですがMaster、あれは…」

「わるい…俺頭悪いから、今頭ん中がグチャグチャになって、あーっ、なんかだめだ。うん、ちよつと疲れた。疲れたから、この話はあとでいいか？」

まるで彼らしくない怯えたような、いや、実際怯えているのだろう。理解はしても今はその姿のように年相応に、彼は成人体であることが長い所為か言動が大人びる時がある。だが彼はまだ子供だ。いくら一般のそれと異なる黒い世界に身をおいていたとはいえ心の傷は早々受け入れられるものじゃない。

そういったものは現実に大人でさえも直視できないことが大半なのだから

『いつまでも隠し通せるものじゃないぞ』

別れ際にあの人が言った言葉、落ち着いてみれば思うことがある言葉だった、だが今のアインには音楽にそれを告げることははばかられた。

再び目を閉じてまるで死んだように動かなくなる彼、こうして触れていなければ本当に生きていないようで、彼の心境を少なからず理解できてしまうが故に彼女の口は重くなる。

いずれわかる事ならせめて今だけでも、こうして夢の中だけでも心安らかな時を過ごして欲しいと切に願う。

だが、時はその時間さえも許してくれないのだろうと、非科学的な確信が彼女にはあった

s i d e : o u t

s i d e : A k i r a ・ O k o u t i

あくる日の朝、喧噪のやまない放課後の廊下を彼女は早足に行く。
本来なら彼女もこの喧噪にもれず今日は部活に参加し輪の中に加わる人間のはずだ。

しかし、彼女はこうして廊下に行く。

何故か？

彼女は今人を探しているからだ。

あの晩から姿を見せなくなった己の恩人たる人物に会うために

「え、HRに入る前に連絡があります。このクラスの副担任の鳴守先生が本日からしばらく学校に来れなくなったと連絡を受けました、つきましては…」

それは彼女にとってあまりにも衝撃的な事実、クラス内にはいろいろな憶測が飛び交うがネギ先生は怪我をしたということと安静のためには面会は控えるようにとしか言わなかった。

話を聞き終えるやいなや彼女は教室を飛び出した、彼の容体について身に覚えがありすぎたからだ。

クラスメイトが制止の声をかけたがそれも耳に入らないという勢いで飛び出した彼女はそのままあっという間に廊下の向こうに走り去って行ってしまった。

彼が怪我をしたというのならあの晩の出来事でまず間違いない。

アキラの内に自分を助けたからか、私が弱いから、あの場にとどまっていればなど自責の念が次々と浮かぶもすでに今は翌朝、後悔しても何にもならない。だが、頭で理解はできても心が納得するかは別だ。

己の中で不安は募り、それがアキラの足を速める。

いつの間にか周囲に人はいなくなり授業が始まったのかと頭の端で理解するもそれ以上割く思考を彼女は持ち合わせていなかった。

そうして今に戻り放課後、いまだ問題の彼には会えないでいる。もちろん彼の家である寮には既に行った。だがインターフォンを押しても返事は返らず、気配を窺うも人がいるような気配は感じ取れなかった。

それから学園中を探し回った、心当たりのある場所すべてをだ。

行く先で会う人には常に訪ねた。途中あった先生達も学園長先生からネギ先生と同じ連絡しか受けていないようでその話を聞いてから学園長室に直接伺いもした。だが昨日の警備の最中にちよつと怪我をおったので学園長の権限で無理やり休ませているといったように伝えられやんわりとかえされてしまう。

正直に言うとは完全に手詰りだった。

だけど彼女の足は止まらない。

もしかしたらともう一度、もう一度と探すも一向に会うことも連絡がつくこともなくこうして寮の前にまた戻ってきてしまった

「アキラさんっ」

ふいにかかった声に振り返った先にいたのはここ最近で親しくなった桜咲 刹那。彼女とは修行の関係で一緒にいる機会が多くなり、同年代の関係者ということでアキラは日常的にもお世話になっている。

「刹那さん…あの、音来さんのことなんだけど」

彼女は近衛 木乃香の護衛の任務があり姿を見るに折をつけて様子を見に来てくれたのだろう。

「心配なのはわかりますが教室を飛び出したままなのは軽率です。
…一声かけてくれれば私も協力しましたよ」

そう言つて彼女が差し出したのは『大河内 アキラ』と書かれた紙型、以前修行の際に試しに借りたものだ。
察するに教室を抜け出したアキラをフォローするために使用したのだろう彼女には本当に頭が上がらない

「は、一応授業の方は誤魔化しておきましたが今度はもう少し考えてから行動した方がいいですよ」

刹那の指摘に俯くアキラ、その姿は彼の事を心配していることがうかがえる。刹那は今朝の段階で昨日の出来事をアキラから直接聞いている。その時はまさかこんなことになるとは思わなかったが、彼女の性格を考えれば当然だったかもしれない。
それを思えば無理にとはいえないが友人としては止めるべきころ合いだらう。

「この後も探すつもりでしょうか…今日はここまでです。朝から探していたのでしょうか？何もいなくなつたというわけではないんですから今日はもう休んだ方がいいですよ」

「そうだけど、彼は私の所為で…」

「……ほんと、音楽さんの言つとおり。二ついつ時のアキラさんはちょっと頑固ですね」

言葉だけなら険のある言い方だが実際には彼女の顔は口調と違いくだけている。おそらく魔法にかかわる以前なら決して見られなかったであろう彼女の表情、あの時のことがなければこうして話すこともなかったかもしれない

「ま、冗談はさておき、今日は警備の仕事もないので後は私の方で心当たりを探しておきます。刀子さんにも話しておきますから今日は休んでください」

そう言つて刹那は彼女を寮の中へと押しやり部屋の方へと連れて行く。
する気はないが実力的にも振り払うことはできないのでおとなしくそれに従うアキラ、心配する心はそのままだがこうしてほかの人に心配をかけるのではだめだ。それではまた彼にも怒られてしまうだろう。

自分を責める気持ちは今もある。だけど今日はここまでだ。

彼女も言っていたけどいなくなつたわけではない以上彼の性格から怪我をしたとしてもそう長時間じっとはしていないと思う。

彼に会つたらまず昨日の事を謝ろう。そうしてまた修行をして、心も体も強くなる。今度は足手まといになりたくない。

いつか、いつかは彼のように誰かを助けられるようになりたいから

side:out

翌日の夕刻

1日が経っているいろいろ考えた

この地を去ることも考えた

だがどれもこれも投げ出す前に己はこの地に長くいすぎた

立ち去るには重く

無責任に放り出すにも既に抱えているものは手放すことができないほど大切なものになっていた。

だから音楽はここに来た

代償は大きいだろう。

向き合うべきは己自身、過去も過ちもすべてに目を背けるわけにはいかない。

「よく、来たな。その顔は…なんだ、決ったようだな…」

「ああ、無理を承知で頼みにきた。こっちでこれらやっていくのに今はあんた以上に教えを乞えるやつを俺はしらねえ」

目の前に立つのは先日と戦ったばかりの人物、昨日の敵は今日の友なんて言葉があるらしいがはたしてそれがこの両者に当てはまるのかは少々疑問が残る。

だが、そうだとしても音楽は決意をしてここに来た。決めた以上曲げるつもりもない。

「ふむ、なんならお前の記憶ごと封印してやることもできなくはないが、それでいいのか？」

「正直魅力的な話だけど、たぶんこうして思い出したからにはもう無理なんだと思う。だから今回ののはいい機会だと思ってあきらめるな」

「…いい機会と思ってか、つくづく…お前も馬鹿な奴だよ」

「ははっ、認めたくないけどよく言われるなそれ」

自嘲気味に返す音楽の言葉に不意に思い出しかけた忘却の彼方にあつたはずの風景、それをかぶりを振って振りきり彼女は気を引き締めて目の前の少年に気を当てる

「まあいい、やるからには私は一切加減しない、覚悟しろっ！」「す、よろしく願いますっ！」

両者の声は周囲に響き、少年は投げられた気に決意を胸にはっきり

と打ち返す

こうして音楽はおそらく人生二度目にして2人目の師となる人物に
教えを乞うことになる。

取立21回目　く戦いの後に。見据える過去と決意と、先生は…く（後書き）

はい、正直詰め込みすぎて少々ごちゃごちゃしてしまった今話ですがこれも必要なところなんです。はい、

まあ、うまく表現できているかは少々自信がないのですが…

アキラの心理描写はちよつと抜きすぎたかもしれませんが次回の内容に合わせて修正します。

今回は主人公が自分の過去に向き合うつてところを出したかったんですけどこの後の展開を考えると過去話は出すわけにはいかず、結果的に登場人物を増やして何とかこうにか、過去話は予定通り修学旅行編のラストで出しますからもうすぐなんですけどね

さて、今日はこの辺にしておきます。

今回はストックしてある分の回になりますので手直しも少ないですがからもう少しマシな話になっています。時間は今度こそ厳守しますので、今回は昨日から来ていただいた皆様には本当に申し訳ないです。

肝心の時間におきましては木曜日深夜12時金曜の0時ですね。

どうか、次回もよろしく願います。

取立22回目　く少女の葛藤、友への思い。先生の出番はまた……（前書き）

さてはて久々に通常通りに投稿となりました22話目！

いや、有言実行って素晴らしい言葉ですけど難しい言葉ですね。

あ、なんか非難の声が聞こえてきそうなんでこの辺で（苦笑
では本編の方へどうぞ！

取立22回目　く少女の葛藤、友への思い。先生の出番はまた…く

眼前に広がるは異形の者達と異形な技の応酬

そも人は何をもってそれを異形とするのか

種族が違えば異なのか？

形が違えば異なのか？

言葉が違えば？

それとも理解すら出来なければ？

共通点と言えはソレを容認できるか否か、人はそれを認められず畏怖を抱いた時、恐怖で退くか迫害するか2通りのみ、数で淘汰する生き物だ。

なら己はどうなのか

少女は間違いなく目の前の化け物を虞ている。

紅い人ならざる眼を光らせてこの身を両断せんとひたすらに大太刀を振う姿はまるで暴風のようにだ。

だが、少女の「おそれ」と人の「おそれ」は一般のそれとは異なる。

右手に持った白木の独特の冷たさが己に戦う者であると教えてくれる。

振れば人の命など容易く刈取れる程の術を宿したこの身体

少女は何よりも慮た、己の技が人を殺せる事に

少女は何よりも恐怖する、己の力が守るべきものを守れないという可能性を

そして何よりも身体を廻る血が、その象徴が目の中のそれと変わらないのではと恐れられた

「っ！」

思考は瞬時に閉ざし、腕は既に意識の向こう

宙に描かれた白銀の残線が途切れ、刹那の時を後にアカい飛沫が舞う

ここは戦場、

物思いにふける暇など塵ほどにもなく、意思の外れた刃は目の前の異形すら容易く刈取る。

己の腕は経験に基づき軌跡を追いつくように、そして本能がそれを求めるように乱舞する。

ここは戦場、されど己の戦場はここに在らず。

意思なき刃を良しとしないのなら、まず相対すべきは己自身。

それは剣の基本にして右の手が有す相棒に掲げた誓い

気を引き締め心に己を、瞳に異形を敵として捉え正眼に構える。

時をおかずに雪崩れ込む異形の群れを前に少女は物怖じなく今度こそ己の振るべき刃を持って迎え撃つ

鳴り響く銃声を耳に刹那は最後となった敵を見据える。

任務は侵入者の排除、当初侵入者を発見するまでは問題なかったのだが取り押さえる寸前に彼奴は低級の餓鬼の連続召喚を行ったのだ。通常序列的に見ても餓鬼は下位の鬼、むしろ扱いは低級の妖怪といった所だがその数が問題だった。モノのランクが低ければ呼び出すコストは比例して低くなる。要は低級霊の大量召喚、物量に任せただ目暗ました。

だがいくら場所が視界の悪い森の中とはいえ刹那と今宵の相方の前にはまさに子供を相手にするようなもの、事実上障害とは足りえない。そう、相手がそれだけならばの話だ。

「…さすがにこれは、追加料金でも貰わなければ割に合わないな」
「こんな大鬼のが侵入してくるなんて、いったい…」

突如現れたるは身の丈6尺を超える大鬼、次々と視界に還っていく
餓鬼に目もくれずに刹那達を見やるや大きくため息を一つ

「噂に名高い神鳴流と戦えると聞いて来たはいいが…正直こんなお
譲ちゃんたちだったとわ…萎えるのう」

「っ、戯れ事を…その口、首ごとたたき切る」

「がははったたき切る言うか、面白い！ようてみいつ小娘が！」

豪快に森そのものを揺らさんばかりに笑う大鬼はどこから取り出したのかその巨軀をゆうに超える大太刀を手に片手で薙ぐ
後に残るは切り崩されて拓けた森の跡、ともすれば斬馬刀のごとき
刀身のそれは見た目に反して鋭い切れ味を見せつけた。

だが、相手が如何に力を持つと退くことはこの少女の選択肢には
含まれていない。

迫る剣圧と殺気をしっかりと受け止め、刹那は片手に持った夕凧を
両手に持ち、正眼にて構える。

「京都 神鳴流、桜咲 刹那 参るっ！！」

「おう！多々良鬼餓衆、鬼が一つ生憎と名乗る名すら持ち合わせん
が…いざ、尋常にっ」

空を駆ける一人は疾風、
烈火の如く繰り出される技の連撃に反してその精度たるや澄みきつ
た流水の如く淀みが無い
型でこそ王道ではないがまず間違いなく人の剣、正道の剣である。

大地を削る一つは暴風、
噴火する山々の様に荒々しく振りかざす大太刀は豪快にして乱雑、
しかしてその剛腕は剣風さえ暴風に変えて獲物を喰らわんと襲いか
かる。
まさに触れるもの全てを砕く邪刀。

両者の剣はその性質の逆をいけど今この場で確かに拮抗していた。

「っ！はああ！！」

「フツ、ぬんっ！」

速度では刹那が上回り、力では鬼が上回る。技術でこそ刹那が上を
いくが鬼の剣風がそのこと如くを蹂躪するのではらちが明かない。
しかし、単純に力が劣るなら技術が上である以上ではある。搦め手、
俗に言う畏というやつだ。捕縛、弱体など種類は幾多に及ぶも刹那
はこういう事態に備えていくつかを習得している。

だが、相手が誘いに乗らないのでは畏というものは用をなさない。

つまりこの目の前の大鬼は一見しゃむしゃらに大太刀をふるうよう
に見えるがその実、戦闘においては余念がない、とても鬼らしくな
い理性的な戦い方をするのだ。

鬼というものは低級の妖魔と比べていくらか知識を有する。高位になればなるほどその度合いは顕著になってくるが目の前の鬼は大鬼といえども霊格は並、とてもじゃないが利口な方でない。なのにこ奴は刹那が張り巡らすその罾の数々を不発に終わらせる。ある時は追いつめたはずのその立場さえあっさり手放すほどに、しかし、それは単に臆病というものでもなくそれは危険感知能力が高いからなのだろう、何せその時鬼があと一息間をおけば首と胴体を分かつほどの一撃が見舞われたのだから…

「く、いつまでそうしているつもりだっ！」

「くははっ急くな急くな、仮にも呼ばれた身だ。召喚者の意向にはできる限り沿わんといけんからの」

そうして続く一進一退

鬼が振れば刹那はその尽くをしのぎきり
刹那が攻めれば鬼はその全てを弾き返す

どちらが不利かといえば体格的にも体力的にも劣る刹那だ。戦いにおいて両者の実力が拮抗した場合、身体的アドバンテージの優位性は大きい。戦術においても敵の上をとるのは常套手段である。これを個にあてた場合も相手より上を制する事ができれば攻め手の幅も広がり、単純な力の水増しも加わる。

刹那と大鬼の身長差は軽く見積もっても5mはある。通常、剣においては絶望的とも言える差だ。

しかし刹那とて末端とはいえ魔を調服せし神鳴流の使い手、その相手が魔物である以上己を超える相手を想定した戦い方などいくらで

もある。

故に実力が同等であるなら相性的に優は刹那にあるはずである。いや、仮に身体的アドバンテージを入れたとしても±0といったところ。加えて大立ち回りの読みやすい太刀筋を描くの太刀を使う相手に後れをとるはずはないのである。

だからこそ彼女は焦る、敵対した鬼の実力が想定以上だったこと。そして鬼は狂喜する、目の前の獲物が存外に強者であることに

いくなれば両者の大きな違いはそこにあった。互いに直面したのは想定外の事態なれど受け方は全くの別物。

片や想定以上の相手に油断を排除し今まで以上に慎重に事を運ぶのに対し
方や想定以上の相手の実力に興を見出しあまつさえ大胆かつ、より豪快に突き進む

つまり少女は己の役割に忠実であったのに対して鬼は己が領分を逸脱していた。

鬼の真の優位はその鬼らしからぬ理性的な攻めだったのだから

「私を忘れてもらっては困るな？」

「!？」

鬼にしてみれば突然の闖入者。

否、視界に納めずとも、その気配は立たれようともその存在だけは認識していた。この鬼は見た目に反して臆病な性格をしていたからである。

だから失念しているということはない。そもそもこの戦場で3人目である彼女の攻撃はその全てを弾いてきていたはずである。その数一万飛んで三百四十九発、目の前の小さき娘子を相手にそれら全てを捌くのは骨だったが鬼は己の獲物を活かして弾幕すら跳ね除けて見せたのだ。

故に虚を狙ったであろう狙撃種の視認距離出現による奇襲も油断なく捌く事ができる

「この程度の策で…なっ！」

油断はないはずだった。だが、己の防御が命取りになるなどだれが思おう？

己の周囲を取り巻く光の網は確かに捕縛の呪術、だがいつどうやってと疑問が募る。

戦う以上この手の罫は常に警戒していた。そもそも位は低いが仮にも大鬼のこの身を止めるとなると急ごしらえの術では紙切れにも等しい、仮に今弾いた銃弾に術式が編まれていたとしても弾に感じた呪力は微弱だ、第一それまでの無駄弾の意味が不明だ。銃弾というのは基本的に消耗品だ、使えば無くなる。ならなぜ初めからこの捕縛弾を使わないのか？

「これは…」

疑問に答えをとわずかに動く首をめぐらせた先にあつたのは六亡星を基準とした捕縛陣、頂点には見覚えのある弾頭が六つ大地に突き立っていた。

「まさかつ！」

「10320発、流石にそれだけあれば兆弾の方向操作など造作もないよ」

そう、この狙撃手は放った捕縛弾以外の弾全てを使って鬼の迎撃パターンを全て看破して見せたのだ。

そして嵐の如き戦場に大きな落とし穴を仕掛けて最後のトリガーを引かせるために自らに注意を向けるべく現れた。

しかし一言にパターンといってもその世界は数万数億の世界、剣の角度に銃痕刻まれる弾頭の角度、射撃制度、風向き、それらだけでも状況によって何万通りもあるだろうものをたった二万足らずで披露して見せた。

あまりに人間離れした業だ。

「クツ、だがこの程度の術で俺を完全に捕らえられるなどと」

「いいえ、あなたの負けです」

ひやりと背にかかる冷たい感触に冷めた声

思い出せ、己が闘っていた相手は何に苦戦していたのか？

「あなたが厄介なのは認めましょう。悔しいですが私の力不足です。けど、この距離ならそれも関係ありません」

その距離は近距離どころか零距离、剣を振るうのには本来適さない距離だ

なのに鬼の心中に浮かぶは悪寒のみ

そう、少女は己の一撃一撃が全て鬼の力技でねじ伏せられることによつて攻めあぐねていた。なら今の状況は？

「神鳴流奥義…」

振り返る先には大量の気を剣に練り上げて上段に構えている神鳴流剣士の少女、片や妖魔である大鬼は捕縛術によつて動きは半減、自慢の怪力もこの場を回避すべき手段も今この時は用をなさない。

「く、くっそおおおおお！！」

『斬魔剣！！』

怨を込めた絶叫は轟といわんばかりの旋風を巻き起こす剣士の一撃にかき消え、やがてあたりに静寂をもたらす。

後には大太刀が突き刺さっていただろっ大地をえぐった跡と大鬼倒れ伏した巨躯の跡を残して、戦いの後にそこはあまりにも静かだった。

「ふむ、御苦労じゃった。」

時と場所は移ってここは麻帆良学園 女子中等部が一室にしてこの学園の長の間、学園長室。

その部屋の主たる近衛 近右衛門、見た目まず異様に長い後頭部と副耳と呼べるのかどうか迷うほどのたれ耳、顔の8割は覆っているのではというほどの眉と髭、だがこれでもかろうじて人類なのである。

いや、誠この世は摩訶不思議に溢れているといえよう。

閑話休題

して、件の学園長は学園警備に当たっていた魔法生徒2人からの報告を受けていた。

桜咲 刹那、龍宮 真名の両名である。

本来、魔法生徒というものは修行ないし成長という観点からみてもまだまだたまごとされている。そのため修行の一環として実技に警備に出ることもあるがこれは実力者たる魔法先生の監督のもとで行われるのが通例である。

ならこの二人はどうなのかというと実は特例に当たる処置の結果なのだ。

この二人は学園内の魔法生徒に比べ実力が頭一分以上に飛びぬけている。むしろ年齢や精神面等の問題さえなければ指導側に欲しいくらいだと近右衛門は常々思っている。特に龍宮 真名においては経

歴に黒い部分が何かとうかがえるが実力は折り紙つき、あの“紅き翼”の高畑・T・タカミチとも勝ち、とはいかないにしろ状況によつてはいい勝負になるのではと噂されるほどだ。

さて、そんな二人からの報告。内容は侵入者撃退時に別の召喚魔による襲撃、当初の侵入者は逃走し、鬼の召喚者においては把握すらできなかったという結果だった。

しかしこの報告に対して近右衛門は「御苦労」の労いの言葉のみでそれ以上の言及はない。

二人、特に真面目な性格の刹那からしてみれば意外な返しでしかなかった。

「あの、侵入者を取り逃がした件については…」

「む？そんなもんあるわけないじゃろ？お主たちが苦戦するような相手じゃ、それに不測の事態とはいえお主達だけに任せていたワシの責任でもある。今回の件にとやかく言ってくる輩はおらんじゃろ」

言葉尻からそんな輩はいてもさばらせる気はないという考えがうかがえる。こと組織というものにおいて経験のある真名からすればあまい考えとしか映らないが事態が不問になるのならこの件には何の不満もなかった。

「ま、たいした怪我もなく何よりじゃ。報告もこれで終わりじゃし今日はもう遅い、そろそろ…」

「っと、忘れるところだった。学園長」

そう言つてさも今思い出した風な様を装って真名が懐より取り出し

たるは縦8？程度、横12？程の紙、人それを“請求書”という。

「こ、これはいくらなんでも高すぎやせんかのう？」

突きつけられた紙を前に額に汗を浮かべる学園長。

刹那の位置からは紙の詳細は見えないが真名が懐から取り出した時に少なくとも0が6つ見えた気がする。こういう金銭的な面に疎いとはいかないまでもあまり執着のない刹那はあえて口出しをしないいや、彼女とは付き合いの長い分言っても無駄な事だと悟っているのかもしれない。

「ふむ、先ほどの言葉を借りるのなら『不測の事態とはいえお主達だけに任せていたワシの責任』なんだろう？」

「いや、あ、あれはその、ワシにも責任の一端があるというだけで…」

「私は高価な弾を学園を守る対価として払ったんだ、苦学生である身としてはこのくらい援助してもらわないとわりにあわないんだが…」

なおも詰め寄る真名、すでに警備後によく見なれた光景であるが故に刹那は苦笑を浮かべつつそのまま眺めやる。

考えてみればこの学園に訪れてからすでに2年の月日が流れている。振り返れば不便も多かったが今になれば笑い話でもあり、苦い話でもある。だが不思議と今は充実している。一番大きいのは信用できる人間が増えたことだろう。

学園に訪れたばかりのころから刹那は周りに距離を置いていた。それも自分から望んだことであり、苦ではなかったが大切なお嬢様を

守るためにと距離を置くことも、たとえ彼女がづらい顔をしようとしてそれが彼女のためなんだと自分を言い聞かせていた。

そして1年もしないうちに刹那は人付き合いというものを己から絶っていた。正確にいえば必要最低限の付き合いと処世術程度には行っていたので厳密にはそうとも言えないが、今日日、この3年に上がるまで麻帆良でも剣の師匠である葛葉 刀子教諭以外にはほとんど内面を見せなかった。

だが、そんな刹那にも友ができた。

初めは互いの師の紹介からギクシャクとした感じが抜けなかったが彼女の師匠の気質と本人の性格の良さからいつの間にか友人と呼べる間柄になっていた。

京を離れて第二の地でできた大切な友人それが彼女の位置づけだ。

「っと、そうだ」

そしてその友人の事を考えてふと思いつく。

そう、彼女はここ最近とある事情で気落ちしていた。おそらく事情を知っているのは彼女を除くと刹那くらいだろう。もちろん今目の前で言い合いをしている相手も知っていないことだろうが彼女はこういう類の話を風潮するような人ではないとわかっている。人付き合いと疎遠だった刹那もここ最近で周りに目が行くようになっていた証拠だった。

「あ、あの…学園長、少々聞きたいことが」

「む、なんじゃっ」

あまりの食いつきように若干引きかけたもののこれも友人のためかと踏みとどまる。

ちなみに友人：なのだろうか、目の前の相棒はいい具合に傾いているのだろう交渉に横やりが入って顔に険が浮かんでいるように見える。それでも刹那の話にちゃちゃを入れずに黙ってみているのは彼女らしいが

「あの、おとや：鳴守先生の事で、最近全く学園の方に顔を見せなくなりましたが本当にただの謹慎なんですか？」

刹那の質問に間を置いても近右衛門の顔からはその意図がうかがえない。

やがて刹那が痺れを切らしかけ、もう一度問いただそうかと考えた所で老人は重い口をあけた

「：刹那くんは：アキラくんとは友人じゃったかの？」

「え？あ、はい…」

しかして話されたのは問題の先生の話ではなく刹那の友人について近右衛門は質問に戸惑いててもしっかりと答える刹那にそうかと一言どこか安心したようにつぶやくもその顔を険しくする。

「本来なら彼本人から口止めされているのじゃが彼女の状態を聞くに少々酷じゃからの：しかし」

再度押し黙る近右衛門は腕を組みながら思案する。はたして彼女、刹那に託していいものかと

対して刹那の心中は穏やかではなかった。彼女も音楽に関しては心配

をしていた人間だ、もしアキラの件がなかったとしても自分から探しに出てはいただろう。彼女にとって彼は歳は違えどこの地で知り合った大切な友人なのだから

「お願いしますっ学園長！どうかっ！」

「あいわかった、彼の居場所について教えよう。「本当ですか!？」ただし…アキラクンを連れていくのは許可できん、それは彼から固く約束されておるからの…」

そうして告げられた彼の居場所に刹那は驚くもすぐさま飛び出していく。

近右衛門からしてみれば刹那は我が子のようであり、孫の木乃香のように可愛い孫のような存在だ。それがクラス担任になった高畑からクラス内での様子を聞いた時は心配であの手この手と考えたがすべて高畑の手で止められている。かえって逆効果だと

そういった思い出もあってああも懸命に走り去る彼女の姿というのはうれしいものであるが同時に爺としてはさみしいものでもある。

「いいですか？言ってしまった？」

「さての、ワシはアキラ君に教えないようには言われたが刹那君に教えるなどは言われておらんからの？」

部屋に残った形となった真名と二人、笑みを浮かべて少女が飛び出した扉を見つめる。

彼女も刹那とは付き合いの長い人間だ、何かと思うところはあるの
だろう。

「お主は行かんのかの？」

「そこまで無粋じゃありませんよ」

近右衛門の探るような問いかけにも真名はのらりくらりとかわして
しまう。

彼女がそういう事をなかなか表に出さないのはよく知るところだが
もう少し年相応に恋愛事に踏みいってみてもいいのではと思う近右
衛門だった

「ところで学園長」

話題を変えられる事に照れ隠しか何かかと顔をにやけさせながら振
り向いた翁であったがその顔が彼女の方へ向いたまま固まること
になる。

「じ、これは…」

「請求書、まだOK貰ってませんでしたよね？」

OKも何も了承する気などさらさらないのだがこのままではまたい
つもの如く押し切られるのではと頭の隅で一抹の不安を覚える近右
衛門だった。

こうして学園長の奮闘は深夜遅くまで続く…

取立22回目　く少女の葛藤、友への思い。先生の出番はまた…く（後書き）

ども！12時頃投稿すると言ったのに大物作品の次ということにビビって時間を空けたトントンです。

いや、こういうのって普通は時間あけるもんなんですかね？

まあ、こういう細かいのはあとがき（続）
では今回のお話く

てな具合にまたまた挑戦してみました戦闘シーン！

実際には前々回のエヴァの時ほど動きはないように見えますが結構がんばって書きました。意味的にはもともとあったものなので手を加えた所と言えば戦闘シーンを前に合わせた事と2実はこの話の冒頭を21話の基盤に使った事ですかね？

基盤といってもテロップ？的なものだったので大した差はないんですがどうなんでしょう？

まあ戦闘シーンの練習と修学旅行編に向けてで刹那の登場を増やすためにもともと考えた原作と違った話ですね。

あと1話出す予定なので楽しんでいただけたら嬉しいです。

さて、では今日はこの辺で

次回の更新でまたお会いしましょう。

それでは、再見ッ！

取立23回目　〜終。先生発見（UMA発見ではありません以下略）　（前書き）

どうも、長らく空けてしまいました、トントンです。この度は宣言した日から大分空けてしまって…本当に申し訳ありません。

謝罪等はあとがきの方で、とりあえず続いでいきますが本編の方、どうかご覧ください。

取立23回目　〜終。先生発見（UMA発見ではありません以下略）〜

ひたすらに森をかけ抜けた刹那は一つの建物の前に佇む。

ここまで来る途中、友人に彼の無事を伝えようかと迷ったがそれは約束を反故することになると思いとどまった。そもそも彼の無事自体はまだ確認していない。

だが、同じ学園内で住むだけで無事というのもおかしい話かもしれない。しかし、それもこの家の主を思えば仕方のないことだ。

何しろ噂の渦中であつた吸血鬼の住み家なのだから

緊張に脈拍が上がるのを感じながら刹那はドアに備え付けられたベルを鳴らす。

見在目山奥の別荘にでもありそうな立派な造りのログハウス、学園から離れてひっそりと建つそれは壮観であり、同時に異様でもある。といつても彼女が学生寮で住んでいる姿はどうにも想像できないが…

「う、ごめんくださいっ」

3度目のベルを鳴らした時点で痺れを切らした刹那は戸を控えめに

叩いて呼びかける。そもそもここに来た目的が目的なので帰るわけにもいかない。が、以前として答えに応じる様子はなく、森の静けさに虚しく鐘の音が響くだけだ。

留守という可能性もなくはないが、ここ以外に彼女の行き先など刹那に見当がつくはずもないし、探しに行つてすれ違いにでもなるのは論外だ。

必然と待つか強制的に踏み込むかしか手段は無くなる。

(いや待て、いくらなんでも無断で踏み込むのは失礼じゃないか?)

この家の主たるエヴァンジェリンに刹那は良い印象を持っていない。とはいえ、仮にも相手はクラスメートで女性だ、いくら緊急とはいえ押入るといふのに抵抗がある。

事態を己の秤に乗せるも良心の呵責に葛藤を余儀なくされる刹那、しかし、時はごく当たり前に流れていき、彼女の長考が数分の時を刻むかという所でそれは起きた。

「っ!？」

予兆もなく起きたのは周囲一帯を一気に焼き尽くしたかと錯覚するほどの熱を伴った魔力の膨張。

反応は件の家の中、家主の名を知る刹那にとってその膨れ上がる魔力は誰の物かは想像に難しくない、だか、真昼から何故と疑問が浮かぶ前にこうして気をしっかり保たなければ己でさえ片膝をつきそうな程、この場から離れるべきだと本能の訴えに体は縫い付けられたように動けない。

そうしていたのが一時のことだったのか、はたまた一秒にも満たない時だったのか、突如起こった魔力の増大は現れた時と同じく急速に熱を失うように消えてしまった。

「…い、今のはいったい…はっ！」

何が起こきたと思うより先に気付く、自分は人を探してここに来た、ならその相手はどこに？

問うまでもなくこの建物の中だ、ならこんな所で呆けている場合ではない。

先ほどまでの葛藤はどこへという程の勢いで扉を開け放った刹那はそのまま奥へ進む。

反応はその強大さから判別しずらかったが中心点が地上より低かったことくらいはわかる。つまり事が起こったのは地下、彼女は飛び降りるように階段の手すりを飛び越えて素早くその場を確認すると同時に己の得物をいつでも抜き放てるように腰に帯刀する。

そこには…

「音来さんっ」

探し人である人物と

「なんだ…桜咲 刹那、お前か…、何用だ？」

この家の主であるエヴァンジェリンがいた。

音来は床に伏したまま動かず、その様子は所々に凍りついた跡が目立ち、まるで今しがた死闘を繰り広げた後のよう。そしてその横に仁王に立つのは真祖の吸血鬼たるエヴァンジェリン、表情に不敵な笑みを浮かべるその姿はなかなか道に入ったものがある。

状況的に見て彼女と音来の間に一戦があつたのは間違いないだろう。だが部屋自体に損傷がないのが気にかかる。

「……音来さん、鳴守先生は無事なんですか」

低く、それでも正確に事態を理解しよう事の優先順位から出た言葉飛び出しかねない身体を必死に抑えている刹那にとってそれ以上陰を払う事は難しく、また、相対する人物を知っていればこそその対応だった。

「ふむ、私は何用かと聞いたんだがな…まあいい、大方ジジイあたりが口を滑らせたんだろう」

エヴァンジェリンはさしたる問題ではないというように結論付けて問いに答えた。

「結論からいえば生きてはいる。だが、極度の衰弱状態だ。下手を打てばこのまま死ぬるかもな」

生きている。

その定義を今ここで論議する気は刹那には無いが目の前に横たわる音楽の様子はどう見ても死に体だ。

エヴァンジェリンの言葉を鵜呑みにするならかろうじて、虫の息というやつだろう。だとすれば刹那はこの場を逸早く離脱しなくてはいけない。

どうやって？

即、彼を回収して距離をとるか？

降着状態のまま様子をつかがうか？

あるいは一撃離脱で注意をそらしてみるか。

どれにしても実力差のある相手に対して刹那には切れる手札が少ない。

そもそもここに来るのも着のみ着のまま、唯一肌身離さず持っている夕凧がその手にあるが今はそれすら心もとない。

(いや、自分の獲物にあたるのは筋違いだ)

今日まで連れ添った相刀に心の中で侘び、刹那は帯刀の構えのからゆっくりと利き手を白木の柄に添える。

「まあ待て、それこそ今は私に飛びかかっている場合じゃないだろうっ」

「っ」

いざ抜かんと右手に込めた力、その解放を前にしてかかる待ったの
声。

失念はしていない、これは優先順位の話だ。その言葉が助けること
事態を止めるものでないのなら今は迷うよりも先に彼を安静させら
れる場所に移すことこそ第一。

勘違いするな、己はここに戦いに来たのではない。

思考を組み立て終えた刹那は最低限の警戒をしながら全力でその場
を離脱した。

「くっ」

腕に抱えた青年。いや、実際には少年だが彼は見た目に反して軽い、
そしてその肌は恐ろしく冷たかった。

実際音来は相当に衰弱している。表面的に見ればただの魔力の枯渇
による昏睡に見えなくもないが心肺機能の反応が極端に低いのが引
つかる。

こうして触れていなければ生きているかどうかさえもわからない。
逆にこの状態で生きているという方が不思議なくらいだ。

そもそも彼は何故エヴァンジェリンの家に行ったのか。

あの場所である時間に自分が駆け付けけるまでに何があったのか。

疑問は尽きないが今はその考える時間すら惜しいとそれらを振り切り軸を安定させつつ速度を上げる。

治療するにも安静にさせるにも今はどこか休める場所に運ぶのが重要だ。

そしてそれがどこと考える前に刹那はふとある人が脳裏に浮かぶ。

悩む前に即決即行動、進路を確認し、刹那はその場所へと飛ぶ。

side:Ain・Recode

「ええ、本人は大丈夫と言っていますが放っておくとまた無茶をしかねないので」

「あの、本人には」

「申し訳ありませんが医者より安静の為、極力面会を控えるように言われているので、何か言伝でも承りましょうか？」

「そうですねか…いえ、では今日はこれで失礼します。」

そう言って去っていく彼女を見送るのはこれで何度目か。

職員室にいたアインを彼女が訪ねてきたのは寮で同室の住人である音来の様子を聞きに来たのからだ。

だが、アインにとって主である音来の命令は絶対、いくらその弟子となつていても表向きの事情以外の説明はできない。

あの晩、音来がエヴァンジェリンに敗れてからというものの音来は塞ぎ込むように人との接触を絶つた。いや、彼の心境を考えればそれもアインには理解できることだがその後の行動には驚かされた。なんと直接戦つたエヴァンジェリンに師事を乞うと言い出したのだ。

この話を受けてアインは主の正気を疑いかけた。

何しろ彼女は自他ともに認める悪の魔法使い。傭兵の性質上、善悪は問わないとはいえ進んでその道の師事を受けるメリットはない。いつそ先日の負傷で脳に異常をきたしたという方が納得に難くないくらいだ。

ならば何故と、その日アインは疑問をそのままに主へ問うた。

『考えなしで訳じゃないんだ。ただ、俺が俺であるために今必要なことなんだと思う』

そう影を窺わせるも決意は揺るがないとその表情は言葉以上に物語

っていた。

アインにとってそれは依然として納得はできなかった。だが主の心傷を少なからず知る身としておいそれと止めるのも躊躇われた。

そして今現在、アインは自宅である管理人室と職場である学園を往復する傍ら今まで通りの生活を続けている。

唯一違うとしたらその日常に音楽が不在なことか。

彼は話をつけに行つたその日からエヴァンジェリンの家に泊まり込みで今日まで帰ってきていない。つまりは無事なのかどうか、元気でやっているのかどうかすら分からない。彼の力量からしてそうそう死ぬということはないだろうが、便りがないのはなんとやら……でも言うのだろうか。

「……いけませんね、どうも最近思考が降下気味です。」

ふと気がつけばそこはもう寮の管理人室前、アインの家だ。

溜息をつきそうになりつつもそれを飲み込み、日常となる家事を繰り返す。

(と言っても食べる人も世話をする人もいないんですけどね)

一人暮らしを始めたころ部屋が急に広く感じることはないだろうか。まさしくアインの今の心境がそれで彼女は基本食事という行為とは無縁だ。形式上“食べる”という行為は可能だがそこからエネルギーがとれるわけでもないので無為である。また、洗顔や入浴という行為も必要ない。よって洗濯や簡単な掃除で手持ち無沙汰となってしまう。

余暇と言えば聞こえはいいが趣味も特にない彼女からすれば単に暇なだけだ。

とすればそういう時間は思考が止まったりループするだけである。

普段ならこれらの思考的停滞を無駄な行為とするアインだが、今日に限って埋められそうな残業は手元にはない。

したがって日課である記憶の整理をすることにした。

「……………」

人と違って忘れるという事がないアインの記憶量というのは膨大だ。それこそ秒単位で記憶しているのだから一日ともなれば少なくとも一画面で8640枚、これに日常の会話や音、匂い、触感等もろもろの情報加われば1ヶ月と経たずにパンクしてしまう。

いや、最近のパソコンなら一週間と経たずに容量オーバーだろうが。ともかく、そうした事態で己がフリーズすることがないよう1日おきにそれらを整理する。

人でいえば写真をアルバムに整理する感覚だろうか？

アルバムというのがまた言い得て妙でアインの中にはお気に入りの物をふるい分けする、それらを反復するのも最近の日課だ。

起動してから早5年、5年といっても人に見れば密度の濃い日々だったと思う。

もともとコミュニケーション能力に自信がなかったアインだが、こうして麻帆良の地で教師としてやっていけるまでになってきている。従者として長い間、主である音楽と共に過ごしてきた歲月。

初めは予期せぬ起動から妙に顔を赤くしていたMaster、外見は大人の姿だけどやっぱり中身は子供、そのくせ大人ぶった口調を好んで、お調子者で、おまけに守銭奴だ。

並べてみると良いところより悪いところの方が浮かんでしまう。

それでもアインにとっては初めての主人であり、家族で、長年共に過ごしたパートナーだ。

たぶん大事な人でもあると思う。

おそらくこうして離れていなければこうして振り返る事もなかっただろう。

「Master……………?」

思考の溝にはまっていたアインは窓の音にそれを中断される。

とはいえ1階や2階程度の高さは優に超えるこの部屋に、それも窓にモノが当たる事などまずない、必然的に故意に、人為的な行為の結果というのが第一要因として思い浮かぶのだが…

音を辿って行きついた部屋の窓には…

音来を背負った刹那の姿があった。

s i d e : o u t

「そうですね、そんな事が…」

運び込まれた音来の容態を確認しながらアインは刹那の説明に短く言葉を返す。

事の次第を話した刹那はアインの言葉にコクリと頷いて返し、一つ間を置いて今日までの疑問を切り出した。

「…その、アインさんはこの事は知っていたんですか？」

この場合刹那が聞いたのは彼がエヴァンジェリンの家に行った事。また、こうして傷だらけになって帰ってきたのに訪ねた当初から彼女が然程驚きはしなかった事からの疑問だった。

「事の経緯を私から話すのは憚られますが、Masterが彼女の元へ行っていたことなら知っていました。事前に相談を受けていましたので」

淡々と話すその表情からは感情は読み取れない。

といってもアインが嘘をつくような性格ではないことはここ最近理解してきている刹那はそれ以上追及せず問いを終わりにする。

とうのアインは音来の左手で脈をとりながら相変わらず眺める、もとい診察を行っている。

一見、見ているだけに見えるが実際は内蔵する各種センサー等内部までフルスキャンを行っている。その精度と速さは表の医療技術が及ぶべくもないだろう。

と、しばらくして診察が終わったのかアインは音来の手を下して布団をかける。

「……とりあえずこの程度ならばらく安静にさせておけば治ります」

「この程度って…彼は死にかけてたんじゃ」

確かに刹那は治癒形に関しては門外漢だがここまで消耗している人というものは見たことがない。

発見当初から比べれば幾分か顔色は良くなったように見える。しかし、それは死人に死化粧をして色を取り戻したようなものでその希薄な呼吸はとてじやないが安静で済ませられるレベルに見えない。

「特殊なケースですがこの人の場合、単に魔力が枯渇したため、身体機能を極限まで削っているだけです。問題はありません」

そう言いつつも彼の横に控えたまま立とうとしないのはやはり心配しているからだろうか？

再び降りた沈黙にこれ以上の長居は失礼かと刹那はお暇することに
する。

立ち上がる刹那に倣って玄関まで送るアインに会釈で軽く礼を返す。

「今日はMasterがご迷惑をおかけしました」

ふと、そこにいたって彼に問おうとしていた言葉が浮かぶ。

彼は何でアキラさんと会わないんですか？

それはここ最近の友人の様子を知っているからの疑問だった。彼は今の彼女がどれだけ心配しているのか知っているのだろうか？

(いや、そこまで踏み込むのは余計なお世話か)

「……………それじゃ」

言葉を飲み込み、刹那は表情に硬さが出ないように努めて部屋を後にする。

アキラの事も気がかりだが音楽本人が何の事情もなく自分達を避けることはないだろう。だいいち仕事、と言うには抵抗があるが彼がアキラの事を監督を無責任に放棄するとも思えなかった。

誰にだって言いたくない事や知られたくない、踏み込んでほしくない境界線というものはある。

己自身も友人にも、大切な人にも知られたくない事はある。

それでも

せめて彼女には話してあげてほしいと思いつつ、刹那はその場を去った。

side: Akira・Okouti

その日、教室を訪れるまでは概ねいつも通りの朝だった。いや、訂正するなら珍しく寝坊をしてしまったアキラはHRギリギリに駆け

込んだので普段通りとは言えなくもないが、クラスメイトにとってここ最近のアキラの遅刻というのは珍しくないものになってきているのでそれは“いつも通り”なのだろう。

大きく変化があったのはその後のHRだったのだから。

「えっ？」

彼女はギリギリに教室へ駆け込んだままの体勢で固まっている。

正確に言うなら教室に入って申し訳なく、教壇に立っているだろう子供先生に詫びを入れようと顔を向けたのだが…

「アキラさん？HRを始めますから席に」

アキラはネギの呼びかけを受けるもそのまま立ち尽くしたままでいる。

そのネギの隣に立っている…

「おお、大河内。ネギ先生はお咎めナシみたいだからありがたくさつさと席に着きな」

左手に不自然なほど大きめのギプスをつけた金髪の青年に視線を向けたままで

どうも、長らくふてるなどという愚かなことをしていました豚x2
です。

え、実は前回の更新から4日くらいあとにArcadia様の方
で宣伝と称して『テスト版』なる方でこの作品を投稿させていただ
きました。

もともとどんなものだろうと試してみたのですが、誤字の修正がほ
とんど手つかずのままだったのでお恥ずかしい事態が…

いや、考えてみなくても最低限あたりまえですね。そりゃ指摘は受
けます。

そしていざ読み直すかと作者自身が見たところ…

自分で自分の作品の無駄な分量に挫折：はい、とつてもヘタレでした

そしてのらりくらりときていた今日この頃。実際に読んでもらって
いる友人の一人に当たり前のことを指摘されたんだし一度やって先
を考えてみたんなら最後まで読ませるとお怒りを受けました。

まあその時の罵倒云々かんぬんを書くところまたよくあんなに言葉
が続くと唾然としましたがその最後に一言励ましてもらい、もう一
度こうして筆をとりました。

今まで碌に更新もしない作品に足を運んでくださった方々には本当
に申し訳ありません。これからまた再開していこうと思います。
少々更新日時の方は変更していきませんがなんとか週1前後でやって

いろいろ思っているのですがどうか今後ともお付き合いいただけるよう、
なにとぞよろしくお願いいたします。

取立24回目　　主の心と従者の矜持、久々に先生出番多いです（前書き）

ども、豚×2ことトントンです。

さてなんだかんだやってきた24話目ですがいつの間にか前回以上に長くなってしまったのでとりあえず途中を25話に回してお送りいたします。

久々に主人公が登場しましたが今はまだ影が薄めです。

ああ、早く主人公の過去話をしたい！

…だったら早く書けて話なんですけどね（苦笑）

ま、その他もろもろの話は置いて

24話目となりました『副担任は借金教師』どうか最後までお付き合ってください。

取立24回目　主の心と従者の矜持、久々に先生出番多いです

「あゝ、心配掛けたな。なんとというか、この通り左手を不自由してるが概ね健康だ。まっまたよろしくな。」

久々に訪れた教室で音楽は現在視線を集めた状態、本人からすれば非常に居心地が悪いことこの上ない。

所在なさげに開いている右手が後頭部に伸びて髪を掻いているがクラス側の反応も仕方のないこと、ここ数日顔を見せなかつたクラス担任の一人がその手を包帯グルグルで登場すれば気になつてしまうというものだ。特にこの3・Aにおいて話題を提供できるものに関する食いつきのよさは異常だと常々音楽は思っている。

705

「って、その腕どうしたの!？」

「事故かッ?」

「喧嘩?」

「あ!アインさんと夫婦喧嘩!」

「いや、勝手な妄想繰り広げるのは構わんがさっきのはちょっと待て...」

ただの腕の怪我程度でこの盛り上がりよう、HRだというのに席を立ててわらわらと包围してくる生徒に囲まれながらの質問にげんなりしていた。

「あ、あの音楽、先生……」

そんな音楽の心境を知ってか知らずかある程度捌いたところで見知った人物が声をかけてきたことに気づく。

「ん？お、おお、亜子か。どうした？そんなあらたまって」

目の前の子は和泉亜子、このクラスの保健委員にして音楽と比較的交友のある生徒の一人である。

話してみると遠慮がちに聞いてきたのは当然ながら腕のこと、彼女は保健委員であるのだがどうもトラウマ的なものでもあるのか血が苦手らしく、実際に血を見ると手当てする側が倒れるという珍しい光景が見れる。といっても血が苦手というだけでその他の手当ては完璧にこなすし、そこら辺の知識は豊富だ、その為かマネージャーをしているサッカー部では結構人気があるらしい。

音楽は彼女が他人の怪我を見ておどしているのは珍しいと思うもおそらく年上の、それも先生という役職人間が怪我をしているという事自体に免疫がないのだろうと結論付けて少々緊張をほぐそうかとおどけてみることにした。

「そっか、まあ丈夫なのが取り柄だからな、この通りピンピンしてる」

「そ、そんなギプス叩いたらいけんてっ」

まるで痛がる様子もなく左手を叩く音楽に慌ててとめに入る亜子を見て音楽は笑いが漏れそうになってしまう。

実際この包帯の下は怪我などしていない。正確には数時間前までは全治3ヶ月ものの複雑骨折だったのだがとある事情から完全に治っている。もう叩こうが振り回そうが支障はないのだ。

「ははは、まあ見た目程ひどくないって事だよ。医者が大げさでさ、俺が早く外に出させろって言うっても全然聞きやしねーの」

「あははは……」

「ま、この通り、てか見た目以上に平気だからこれからもよろしくつてことで……」

苦笑をもらす生徒の頭にポンと手を置きざつと教室を見回す。

「……HRを始めようか」

「」「あ！」「」

そう、心配してくれていたということがわかって非常にうれしいのだがこの時間はあくまでHR、時計を確認すれば一時間目開始まであと3分もない。

視界の端で何度も声をかけたのが無駄に終わってしまったんだろう少年を見て、音楽は心の中で誤っておくのだった。

(すまん、ネギ……)

「いや、すまなかった！復帰後で気が抜けてたっ」

「いえ、あれは皆さん音楽さんを心配してのことでしたし、HRも要点は伝えられたので」

その後なんとかHRを終え、一時間目の教師に日誌を渡した後に廊下で子供に平平謝る大人という構図、見た目は本と情けないというか珍景である。

「そう言ってもらえると助かる。が…はあ」

「あははっすごいため息ですね」

「あ、改めてあいつらのパワフルさに圧倒された…」

復帰早々生徒に囲まれて心配される分には悪い気はしないのだが、怪我をしたくらいであのように騒がれたのでは少々居心地が悪い。何かとお祭り好きというか感受性が豊かというか、とにかくにぎやかなクラスだが未だその雰囲気には時々圧倒される。

「そんな、音楽さんもまだ若いんですから」

（いや、同い年なんだけどね？君と）

目の前で励まそうと？してくれている子供先生、しかしこの音楽自身中は10才、見た目は二十歳過ぎに見えるが任期も長いはずの自分とネギとの違いは何かと本気で頭を悩ませる音楽。歳なら十分若いはずなのだがこれいかに？

「そうだったこの後僕は時間が空いてるんですけど、よかったらお茶でもしませんか？」

「おっいいね。ちょうど懐も余裕あるし俺が奢って…あ、俺この後見回り担当だった」

「え！？怪我してるのにですか！！」

「あはは、まあ片手使いりや問題ないし、それに動いとらんとどうも落ち着かないからな、ちょうどいいんだ」

「そ、そうですか？」

若干ひきつったような笑みを浮かべるネギだったが音楽は気づいた様子もなくそのまま片手をあげて踵を返す。

「んまあ、そんな訳で悪いけど今度な」

「あ、はい。お疲れ様です」

実際には警備から今は外された身の音楽が見回る必要はない。それを理由に断ったのは別に理由があり、彼は今朝のことを思い出した。

朝、いつもと違う場所で目覚めた彼はそこが自分の部屋だということに驚いた。

自分は修行のためエヴァンジェリンの家にはたはずだ。確かに修行後の記憶はないが家に戻った記憶もない、己が師事している彼女からすればまずこんなことをするとは考えられない。あれは着いて来れない者がいれば平気でおいていく性質だ。彼女の容赦の一字もないスパルタぶりはこの身をもって味わっていたのだから。

ならばなぜと未覚醒の頭を抱えていた彼の元を訪れたのは彼の従者であるアイン・リコード、どうやら主が目を覚ました気配を察して駆けつけた様だ。

音楽は訊ねるよりも先に寝かしつけられそのまま彼女に診察されている。

「なあ、何で俺はここにいるんだ？」

「…桜咲さんが、昨日の夕刻にここへ」

「そっか…見られたのかな」

「その場にいた時は倒れていたそうですから、おそらくは問題ないかと」

問いかける音楽にアインはそれすら作業の一つであるようにただ淡々と、簡潔に答える。

彼の事を思うなら気休めは必要ないからだ。そこには事実だけあればいい。

ただアイン個人の“感情”としては一言声をかけたかった。

『帰ろう』

そのたった一言が重い。

現状、契約で縛られてるとはいえ、それは相互契約であって一方通行ではない。互いにデメリットが表示するのならその逃げに取れる行為も正道だ。何も恥ずべき事はないし彼女の主も考えはしたはず、それでも彼は残る事を選んだ。ならどうして己が止められるのだろうか。

アインは自分の従者としての立場を呪う。

己が人形でなく人であつたら、従者でなく互いを支えられるパートナーだったのならまず自分は彼を引きずってでも連れ帰るだろう。だが、今の自分は、人形である自分は何よりも主の意思を優先する。それが彼が望む従者のあるべき姿だからだ。

そしてそれは己の根源、自己意思より他を優先するという根底に元付く。疑うべきではないし迷うべきでもない、ただ、己の心だけが否定する。今日日までアインが育んできた“心”だけがだ。

そして彼女が従つたのは心よりも己の従者としての矜持だった。

「先ほど、学園長から連絡があつて、起きたら学園長室に来るようにと」

アインの報告に対して音楽もただ一言、そうかと答えるだけでそこにはそれ以上会話はなかった。

「鳴守です」

麻帆良学園女子中等部学園長室、高質な扉を前に音来はノックをして返事を待ち、やがて中から返ってきた声にしたがい入室する。

ここにくるのも久方ぶりの感覚だった。

目覚めた瞬間が自室だったこともそうだが、音来にとっては学園自体も懐かしいと感じる。

修行中の時差が感覚を奪った結果だ、音来の精神感覚ではすでに半年近くが過ぎていた。

「失礼します。…学園長、何の用事で…って何だ、エヴァもいたのか」

「なんだとは挨拶だな、というかその呼び方はやめろ。マスターと呼べ、マスターと」

入った先にまず目に入ったのは学園長が座る席ではなく、応接用のソファーに我が物顔でふんぞり返っている師匠、その違和感のなさ過ぎるさまに思わず軽口をたたいてしまう音来だった。

若干、険の見える物言いだったがこの程度のことでは起こる彼女ではないのはよく知っている。といっても調子に乗ればその日の修行は地獄を見ることになるが…

「ふむ、経過は順調そうじゃの…して、肝心のアレのほうは」

「…ああ、一応時間いっぱい、ギリギリだったが及第点にまでは仕上げた」

「音楽君自身はどうかの、調子はどうじゃ？」

急な休暇届けだったとはいえ一応には学園長に事情を話してある。あの夜にあった事も、だから“アレ”という抽象的な言い方でもこの場の3人においては言わずとも通じるのだ。

「はい、実際こうして普通に過ごせるようにはなりましたので…ただ」

「ただ？」

「…その「戦闘面では絶望的だと、そういうことだ」…」

「どういふことかの？」

言い籠る音楽に焦れるようにまたエヴァが代弁する。

修行において彼女は徹底的に音楽を扱きぬいた、一見やりすぎに見える彼女の修行はその実無駄がない。

最初の初日で音楽の欠点を指摘して徹底させてきた今においては本人よりも彼自身を知っているといっても過言ではない。そういう意味では彼女から報告する内容の方が実があるが、その中身はどうも簡潔にまとめ過ぎな上に遠慮がない。

「通常生活ではまず問題はない。だが、戦闘で魔力を使い続けた場合ドカン、だ。その制御も、もって5分…とてもじゃないが護衛向

きではないな」

そういつて手のひらで破裂する様を表現するエヴァ。

対面する近右衛門は顎鬚に手を当てて思考して数秒、言葉の裏を吟味するように間を空けた彼はそこでやっと口を開いた。

「…なるほどの、では修学旅行の件は無理か…」

「修学旅行？」

思わぬ単語に戸惑いながら復唱する音楽。もちろん修学旅行がという意味ではない、今の会話から修学旅行につながる意味が飲み込めなかったからだ。

彼が担当する3-Aのクラスが修学旅行を控えているということは知っていた。確かに麻帆良の外に出るということは少々危険も及ぶ、だがそれも魔法使いが学園を出て方々に行く場合であって一般生徒の旅行行事に危害が及ぶということはずまない。そこら辺は様々な対外的要素を踏まえて麻帆良は慎重だ。

そんな疑問を浮かべる音楽に近右衛門は隠すことなく語る。

修学先の京都、その裏に従事し、古くから日本の地に腰をすえていた組織“関西呪術協会”、そしてここ麻帆良ので学園長を務める翁は“関東魔法協会”なる組織の理事をしている。その二つの組織が対立し、長くいがみ合っている事も。

近右衛門としてはもうそのような仲たがいをやめたいとネギを特使として新書を届けさせるように命じたことも。

「くだらん」

「エヴァ」

「過去の争いを許さず何代も怨み辛みを重ねる、実に無駄な行為さ。その特使に10歳のガキを使うあたりも救いようがない。ま、私には関係のない話だがな」

「なに、彼女は自分が外に出れないから羨ましいだけじゃ、きにせんでも…」

「って何を言うとするか!!このジジイは!」

ソファーから飛び上がった手に持っていた湯飲みを投げつけるエヴァ、大リーグも真つ青な投球(?)だったが近右衛門はそれをひらりとかわしてのける。

避けるなだとかだつて痛いしなどと言い合いを始める二人、先ほどの深刻な雰囲気など既にどこにもない…

音楽が二人の様子を眺めること数分、非常に無為な争いがそこに終結したが後には何も残らない。あるのは伏した老人と無残に荒れ果てた部屋があるだけだった。

「何だ、まったく反応しないとは…いつからお前はそんなつまらない人間になつたんだ?」

倒れたソファーを乱暴に投げ置いてその上に座るエヴァは終始入り口で動かなかつた音楽に視線を投げる。

「別に、ただ手を出すことでもないと思っただけだ」

エヴァの言うとおりこうして久しぶりに会った音楽の印象を一言で言うのなら“冷めている”だ。師匠にあたるエヴァに対して砕けた口調になっているのは良しとしてもその立居振舞いから口調、何よりも目が死んでいる。

近右衛門はその職業と肩書き上多くの人を見てきた。もちろん彼のような目をしているものを見たことはある。大戦を経験し、生きてきた人間には別段珍しくもない。だが、戦争も終わった今、身近なものでついこの間まで明るくトラブルメーカーでもあった人間がこうも変わってしまうというのは知り合いとしても上司としても衝撃を禁じえなかった。

「ふむ…精神面ではまだ立直りきつとらんようじゃな」

「フン、そんなものは私の関知するところじゃないさ。大体、半年近くウジウジと悩んで結局これでは先がおもいやられるよ」

「なるほどの、なら…ものは相談なんじゃが、代わりにアイン君を借りてもよいかの？」

「っ…」

近右衛門の提案に対して、ここにきて漸く表情を変えるほどの反応を見せた音楽、今まで無言で答えるか必要最低限の応答しかしたかった彼がここにきて自らその言葉に異を唱えた。

「…それなんです、当日…半日ほど時間を頂けませんか」

「行くと、そういうのかね？いや、それよりもそれは言葉通りの半日かの？」

従者を思っただけに思惑があるのか、しかし彼の案はただの時間を引き伸ばしただけで問題を先送りしているだけだ。エヴァの協力により時間を多く確保できるとはいえ今日までの日々に比べれば微々たるもの、その程度の時間で事が解決するとは思えなかった。

「いえ、もちろんエヴァが力を貸してくれるならの話ですが…」

「…あのな、いまさら投げ出すほど白状ではないつもりだったんだがな私は」

「盛り上がっているところ悪いんじゃないが、行ってくれるのはありがたい。が、君の状態を聞く限りではとてもじゃないが許可は出せん…そのあたりエヴァはどう見る？期日までに仕上げられそうか」

「誰にものを言ってるんだ。と、言いたい所だが…正直わからん、今回のようなケースは見たことがないからな」

五百年の時を生きてきた彼女ですら見たことがない、聞いたこともない。正確に言えば自分の症例に似ていなくもないが中身はまったくの別物、一言で言うなら門外漢だ。だが、この学園においてエヴァ以上に音来の元始を理解できるものもないのも事実、その彼女がわからないと旗を振るのならお手上げでしかない。

しかし、今回の修学旅行において人手が足りないのも事実。ネギは新書の件もあるがおそらく全体をカバーしろというのは酷だろう。同じ魔法先生で瀬流彦がいるが京都は歴史に古く、その町も広く人も多い、さらに言うなら班別に行動する生徒全体を任せるのにはどうしても二人では手が届かない。

いざとなれば刹那や真名といった裏の仕事に経験のあるものもいるが学園の面子としても生徒に協力を頼むのもいただけない、そうすると彼が行ってくれるのはメリツトが大きくなる。

問題は、いざというときに抑えるものがいないことなのだが。

しばしの長考を終え、近右衛門は決断する。

「…よからう。ならば当日の正午、こちらが指定する魔法先生3人の立会いのもとで試験を行う。わしとエヴァを含めれば5人、半数の許可が下りればOKじゃ」

その答えは彼に機会を与えるというもの。部下の何人かは恐らく反対するだろうがそれを踏み倒す用意もある。

近右衛門自身あまい考えだと思うが、彼の今を見ているとほうつておけないのだ。年長者の性が、大戦期の重圧からの負い目か、彼に必要なのは支えてくれる人、そして何よりも向き直る機会が必要だ。そして時にそういうものは止まっていたは見つけることはできない。立ち止まる事も時には重要だと思う。だがそれよりも歩み続けることこそ大切なことだと近右衛門は知っている。

だいいち立ち止まって振り返るのは年寄りの特権だ。まだ二十歳も超えていない若造が座り込んでいるなど十年早い。そう、悔やむ事はいつでもできる。なら今この少年の背中を押してやるのは自分の

役目だと彼はささやかながら手を差し伸べるのだ。

「ふむ…では、瀬流彦君にはワシからそう伝えておこう」

「ありがとうございます。エヴァもすまない…」

「はあ…それこそ今さらだな、気にしてるのなら安心しろ、私はしつかりと対価を求める性質だ。親切心なんていうあやふやな偽善で安請け合いをしているわけじゃない、安心しておけ……何をニヤニヤしているんだこのクソジジイは」

「いや、ただずいぶんと珍しいものを見たなと……子の背中を押す母親の心境かの？」

「っだれが母親かッ!!」

最後の言葉がなければ非常にいい形にまとまっていただろうに、どうもこの翁は遊びが好きな様子。

まあ音来自身すべてではないにしる近衛門の心遣いは受け取れたようにその表情は幾分か軽く見える。

といっても投げられたソファアの下敷きになる姿を見せられては感謝も霞みかかるが…

「たくつ、碌な事を言わん口だなあの爺は…つと、今後だったな。じゃあ…そうだな、今日は学校に顔を出したから放課後また私の家に来い。何しろ時間がないからな」

そう言って立ち去るエヴァにそつと礼をとって見送る音来、当分の二人には頭が上がりそうにないと今日はじめて口元が自然と緩むのを実感して自分も退出するのだった。

放課後、一人はある男を捜していた。正確には追いかけているといったほうが正しい。

その後ろを3歩遅れる形で追いかける少女は目の前を行く友人を心配して。

廊下をかける傍ら出会う知り合いに片っ端からその人を見なかったかと聞いて回った。そして二人は先ほど職員玄関に向かっているのを見たと言いたばかり、そこから一目散に目指した後、目の先に見えた見慣れた背広姿に少女は思わず上履きのまま外へ飛び出した。

「音来さん！」

振り返ってくれるか不安になった中でかけた言葉。朝彼を見たときは何もなかったように声をかけられた。いや、あれは当たり前障りのない教師と生徒間での会話、アキラが聞きたいのはそんなことでは

ない。だが、その時は驚きに足が止まり声をかけることができなかった。多分あの時は意図して彼が避けていたんだろう。そのくらいはアキラにもわかる。彼は基本的に嘘がうまくないのだから。

だからこそ不安だった。彼は振り返らずそのまま去っていくのではないかと…

そして時が止まったような錯覚に自身が陥る中、ゆっくりと前に進んでいた彼の足がそこで止まり、2歩目のその足でこちらに振り返った。

「…どこに行くんですか」

声を続けたのは後から追いかけてきた刹那だ。アキラは問いかけた姿勢のまま固まっている。

そんな彼女たちを見て音楽は答ええない。

「またエヴァンジェリンさんの所ですか？」

恐らくあたっているだろう。だがそれにも答えず彼はただ立っている。

その顔はまるで親に攻め立てられる子供の様で、見たくないものを直視できない大人のように様々な感情を緋交ぜにゆがんでいた。

「……………」

「なんで答えてくれないんですか…」

「せめてっせめて彼女に一言断つてからでも「桜咲」……」

そこで漸く聞こえた彼の言葉。ただポツリと、ともすれば聞き漏らしそうな大きさの声でもれたそれ、しかし二人は聞き逃すことなく彼の言葉を待つ。

「悪いが今回の事に関してはまだ言えない。いや、言いたくないんだ」

だが、その言葉は拒絶の色しかなく、結局は今までと変わらない。いや、こうして面といわれる分これまでよりショックは大きかった。

「個人的事情だ。学園とか表も裏も関係ない……もちろんお前たちを避けたくて避けてるわけじゃない。ただ……今は時間を置いてほしい、それだけだ」

あの日、停電の夜に何があったのか、今まで何をしていたのか、聞きたいのはそれだけのはずなのに一層に辛そうな表情を浮かべる彼を前にして二人は二の句が出てこなかった。

二人の反応がないままに時間が過ぎていく。

音楽はそんな二人と目を合わせずそのまま踵を返す。

「さすがにそれは突き放しすぎじゃないかな？」

「……!？」

「タカミチか…今回の出張はずいぶん長かったな」

「まあいろいろとね。それより、これはどういうことかな？」

突然の音もなく現れたタカミチに刹那達は驚くも音来は相変わらず反応がない。

向き合った二人はそのまま視線を交え、やがて音来がポツリポツリと事の経緯を話す。

エヴァンジェリンと交戦した夜から姿を消した事、その間彼女の所にいた事、そして何故いたのか、何をしていたのかは話せない。

タカミチは終始黙って音来の話を聞き、時々確認をすように目線で刹那に確認をしていた。

「なるほど、確かに肝心のところは話せませんが彼女たちは納得できないだろうね。それにしても指導者として、大河内君に何もないのはちょっと冷たいんじゃないかな」

「…それはわかってる。けど、言えないんだ。言ったら楽になるとか悩みは打明けべきだとか、そういう類の次元じゃないんだ」

音来は相手がタカミチであろうと拒絶の色を収めることはなかった。一見話に応じているように見えるがむしろタカミチが話上手な分口調は固い。

「うーん、弱ったな。あの日その場にいなかった僕じゃなんとも言えないし…この話は学園長には？」

タカミチは一応ある程度の事情を学園長から報告を受けている。もちろん学園長も核心に触れるような事を言うことはないしタカミチも仕事とはいえ個人の過去を詮索するような事はあまり好きではない。だからこの言葉はしらを切っているわけでもなく純粹に友人としての言葉だった。

何かと学園にいないことが多いタカミチだがネギ同様、音来のことも気にかけていた。それは単にネギと同じ年ということもあるしほかの先生より近い立場にいたという事もある。

しかし、それ以上に魔法や仕事とかを抜きにしてタカミチは彼のことを友人だと思っている。少なくとも彼と初めて会ったときから不思議と突っかかりはなかった。もしかしたら戦争孤児という彼の境遇からくる同情や罪悪感というものもあつたかもしれない。力が及ばなかったあの時の歯がゆさを思い出したというのも確かにある。だが、それはタカミチ自身が背負うものであつて彼の価値ではない。今は純粹に友人として接している。だからこそこの拒絶は胸に痛かった。

「一応全部じゃないけど話してはある。だけど、もし俺にしる誰かにしる無理やりにも聞き出そうって言うなら……俺は麻帆良を出ていく」

「!?!」

「冗談、って目じゃないねそれは。」

音来の答え、タカミチが問いかける前に告げられたそれは猶予も何

もない完全な拒絶。

この時タカミチは少し彼というものを理解した。少なくとも今の彼は両手にいっぱいこれ以上抱えきれない。今にもく崩れそうなほど危ういと。

本来なら年上として手を差し伸べるべき状態だ。だがそれよりも男として、何よりも挫折を多く味わってきた己だからこそ理解する。

今彼を支えられるのは自分じゃないと。

時間にしろこの場にいる彼の生徒たち、あるいは第三者的な存在や出来事だろうと今僕にできることはないとわかった。

なら自分がすることは一つしかない。

「ふう…わかった、僕からこの話をするのは止そう。さ、刹那君達も今日はこの辺にしておいてあげなさい」

「先生!？」

溜息を一つついて降参というようにあげた手を生徒の肩においてクルリとターンさせる。

今は間をおいてあげるべき時だ。

下手につついたらそれこそ暴発しかねない。

戸惑う刹那達だが意外としっかりと軸を押さえられた手はなかなか

にはずれず、かといって無理やり振りほどこうにもそこで何を言うべきか整理のつかない彼女達はなすがままだった。

そして数歩歩いたところで立ち止まったタカミチは姿勢はそのままに、顔を音楽の方に向けた。

「そのかわりいつか話してもいいって思えたら僕にも聞かせてほしい。こう見えても、って見た目はこんなだけど結構相談事には慣れているつもりだから」

返事は聞かずそのまま去っていく背中を見て音楽は立ち尽くすだけだった。

やがてその姿も見えなくなるころ、うつむいていた彼はただ一言、
「すまないとだけ謝罪をもらす。」

その声は誰も聞くことがないままに…

彼らが去ってから少し、一時的に無気力に陥った彼はふと玄関先に気配を感じて視線を投げる。

「ずいぶんと、口数が減りましたね。いいんですか？」

「見てたのか。のぞき見はあまりいい趣味とは言えないと思うがな」

「あんな玄関先で立ち話をしていたらいやでも耳に入ります」

職員玄関から現れたアインはそのまま己が主のそばまで歩み、すれ違う一歩手前で立ち止まり、視線を交わすことなく話しかけてきた。

両者に降りる沈黙。が、どこか先ほどまでの険はない、相変わらず音楽は俯いたままだがその瞳が少しだけ前を向いている。

「お前は反対か？」

「いえ、私はMasterの方針に従うだけです。何があるうと」

不安を言葉にした音楽にやはりアインは淡々と従者としての答えを告げる。

らしくない、こんな弱音を吐くような奴だったかと自分を張り倒したい気分だったがそれをぐっと堪え、音楽はアインに謝罪した。

「すまん、迷惑をかける……」

「それこそ今さらですね。そう思うならこれからはもう少し考えてから行動してください」

「ああ」

「あとエヴァンジェリンさんの所に行くのなら失礼のないようにしてください。従者の恥は主の恥ですが、主の恥もまた従者の恥ですから」

「ああ」

「傷も増えてました。また無茶をして、それでは彼女たちが心配するのも当たり前です」

「ああ、そうだな」

「背、少し伸びましたね……」

「…そうか」

「そうです。シャツの肩がはってるじゃないですか…髪も伸びましたね、手もカサカサです」

「そう…そうかもな」

淡々としたやり取りはいつの間にかアインが音楽に向き直って彼の
手を取る形になっている。

握る手のひらがかすかに温かいのを感じて安心すると共に変わって
いく彼に焦燥感を抱くアイン。

予感を決してないがしろにできるレベルではなく、既に歯車は回り
始めているのだと思い知らされる。

そう、回った歯車は止める以外には壊れない限りその役目を終える
ことができない。

そして自分にはこうして手を握るように僅かながらも支えることは
できない、できるのはただ彼が帰ってくる場所を守ることだけだ。

アインは彼がギルドに帰りたいと一言でも言えば周りの制止も振り
切って連れ帰る覚悟があった。だが、彼がそれを願う事がないのは
だれよりも知っている。

「すまん、俺行かないといけないから、わるい」

「いえ…っ、と、止めても無駄なのはわかっていますから。Mas
terは遠慮なんかすることありません。細々としたことを処理す
るのは私の仕事ですから」

「ああ、行ってくる」

ほんの少しの活力を得て、音楽は今度こそ歩き出す。

今度は止まることはない、諦めるにはまだ自分はスタートラインに
も立てていないことを思い出したから

取立24回目　く主の心と従者の矜持、久々に先生出番多いです（後書き）

はい、そんな感じでやっと修学旅行に入りました。

もとは前回の23話の続きを少しやる予定でしたが主人公の出番を増やしたらいつの間にもやらこんなことに…

うーん、まとめる能力がほしい！あ、文才もほしい！

って、無いものねだりしててもしょうがないんですけどね。

今回は久々に主人公が出ましたが相変わらず暗いです。てか最初の反動が強すぎて「大丈夫かよこれ」と思わず自分で言った始末。もちろんこの後に頑張ってつなげていきますしこの修学旅行編で主人公もだいぶ変わるはず…たぶん…おそらく…いやきつと

うん、変わるはずなので楽しみにしてください！

と、今日はこの辺にしておきます。

明日も休みを利用してちよっと就活に遠出してくるので…何やってんだとか俺にいてやりたいですが、まあ楽しい方がいいんです。よね？

では今日はこの辺で失礼を、次回の更新でまた会いましょう。
それでは、

再見ッ！

設定 その3（前書き）

ども、今回は設定の投稿です。

もちろんこの後25話目を投稿しますが連投は避けたいので明日の朝まで時間を空けます。

ただ今回は久々だったのでもしかしたら拾い落としがあるかも知れませんが、もしそうだったものを見かけたらご指摘していただけると助かります。

では初めによくある注意事項から

この設定は作者の独自解釈を含みます。作中の魔法自体に対する解釈や設定が原作とかみ合わない所があるかもしれませんがどうかご理解ください。

設定 その3

設定 その3

名前

鳴守なるかみ 音来おしや

あだ名

ネコ（音来を読替えて） 本人は嫌がっている

年齢

現在10歳（数えで）

ギルド：「西の夜明け」

戦闘スタイル：魔法剣士

ステータス

魔力：B+

速さ：A+

腕力：B

魔力制御：C+

アビリティ

・障壁

音来から無意識流れ出ている魔力が形成する障壁、物理防御ではさすがに『風障壁』程頑丈ではないが『魔法の射手』程度ではびくともしない。

・変化

一定年齢間の姿に自在に変化できる音来固有のスキル。細胞単位の変化なため見ただけで看破されることはまずない。潜入や偽装に非常に重宝しているようだが一度変化すると体力を大きく消費するという難もある。

・転送魔法

愛用の武器を専用の異空間を通して手元に転送する魔法。

・魔力感知 C -

・危険察知 B ++

・暴走率 B (A A +)

魔力感知、危険察知共に麻帆良に来たところに比べ僅かに上がっている。が、それよりも暴走率のワンランクアップはかなり危険なレベル。

第15部以降追加アビリティ

・眠り耐性 D -

眠りの魔法とかに対する毒性とかそういう難しい話ではなく単に夜に強いかという話。要はOKOSAMAということですね。

・学力 E -

学力と言えはいろいろありますがここでは学問、学校に対する学力ということになります。この小説内では通常の中等部3年レベルなら平均でCランクはありと設定していますがE - では小学生以下というレベルです（笑）

13話以降

・学力 E +

テスト期間のアインの努力、地下空間でのネギの講義の下確かに上がりましたが未だ小学生レベルなのは本人の性能がどうしようもないからだ、ちなみにネギ君の学力は文句なしのAランクですw

・属性相性

光、闇、火、水、氷、雷、土、風の属性の内、

雷>風>火>土||光||闇>水

といった順の相性となっています。ちなみに雷の次が風となつていますが2ランクほど差があります。その後は1ランクづつ下がるので水は雷に比べて5もランクが違います。

現在

借金返済の為に麻帆良学園に訪れた傭兵ギルドの青年、ではなく中身は10歳の少年。新学期が始まったある晩のこと、自分が担当する魔法生徒を助けに出たはよかったが、対峙した真祖の吸血鬼エヴァンジェリンとの戦いで敗れる。その際に何かトラブルがあったよ
うだが…

その翌日から音楽はエヴァンジェリンの元で住み込みで修行、世間

的には怪我の為入院扱いだったが後日学園に顔を見せるようになる。
最近の出番はどうも少なめだが、今後の活躍はたして？

ご本人様より

ただいま不在中につき未回答。

その2

名前

アイン・リコード

あだ名

アインorリコ

年齢

稼働時より現在は5歳

ギルド：「西の夜明け」

契約者：鳴守 音楽 アーティファクト：????

戦闘スタイル：剣・銃を使ったオールラウンダー

ステータス（）は魔力供給時

魔力：D+（B）A+
速さ：B（A++）

腕力：A（A～S）

魔力制御：A -（A -）

アビリティ

・転送

『ライブラリー』という記憶媒体に登録した武器・魔具等を転送する機能。音来の意向でそれ以外に日用品なども登録されている。

・学習能力 B

自動記憶学習能力、戦闘時における判断力、対処法から敵の戦術までを驚くべき速さで吸収するスキル。

・感情回路 C

アインが自己学習して構築される感情機構。なお、『D』という単位はアインの中で確立されている感情レベルでF～Aまでである。

・センサー各種

主が探知が不得手なためアインに追加された通常装備にあたる機能。

・天の歯車
ヘブンズギア

アインが戦闘機構へシフトするための戦闘モードの中でもバランスタイプのシステム。

・初期装備
アウトバレル

50? レールガンを主砲とした文字通り長距離支援を目的とした装備。散弾、貫通、徹甲弾、榴弾等の戦況に合わせた弾丸の使用可能。

・戦闘技法（瞬動術、浮遊術、擬似瞬動術、飛行機能）

アインが有する戦闘技法。魔力供給のない通常時や緊急時等は内蔵

される廃熱等による残像や擬似瞬動術、バーニアなどで飛行などを可能としている。

第15部以降追加アビリティ

・アインの七つ道具

右手の各指に内蔵された『耳かき』『栓抜き』『ニッパー』『半田ごて』『マイクロピンセット』『ピッキングツール』『電子機器用インターフェース』と若干無駄もあるような追加装備（音来考案）。装備個所は親指にピッキングツール・インターフェース、人差し指にピンセット、中指にせん抜き・ニッパー、薬指に半田ごて、小指に耳かき。

ちなみにピッキングツールは同部に内蔵されるインターフェースと組み合わせることで電子系統の解錠も可能としている。

・密閉・消音プログラム

カンファインド

認識疎外の法などを転用した技法。半径10mまでという効果範囲を持つがその維持にかかる魔力が自前の為契約執行時以外の稼働は稀、音来が近くにいた際は供給の手があるのでアインの判断でも使える。

・捻転弾頭弾

ネイルバレット

炸裂弾等の特殊な弾や通常弾で口径の大きいもの比べて小さい。その名の通り弾頭が釘のビスのように捻じれている特殊弾。そのためバレルや銃身といったストック以外のパーツを変えなくてはいけない。

発射機構上、動力はエアプレスだがかかる圧力は相当なものである。また、通常の火薬を使ったものより衝撃が少なく、連射性が高いの

も特徴。ちなみにアインの精密射撃と合わさって50m先のリングも打ち抜く。もちろん部屋で動き回る小動物など問題なく打ち付けることが可能。ただしその場合は圧力調整とバレル交換が必要がある。長距離射撃用では銃身が長大となるので取り回しが困難。

現在

Masterである音楽に付き従って麻帆良にやってきた従者、家事から教職に書類雑事をこなす器用さを併せ持つが実は彼女は魔法世界で音楽が発見いた魔法駆動体である人形。前記の通り非常に器用な彼女だが反面、感情面の解釈が苦手でどこかずれたところがある。

現在は行方不明になった主の帰りをけなげに待ちつつ日常を消化していたが、ある時彼のクラスの新徒である刹那に背負われて戻ってくる。その際特に事情を聴かずに送り出したアインだが内心は心配で仕方のなかつた様子。麻帆良に来てから感情面の学修がいい塩梅で進んでいるようだ。どうやら麻帆良に来る際にギルドマスターのリヒトから何か任務を受けていたようだが…

ご本人様から

「どうも、皆さんお久しぶりです。アイン・リコードです。最近ですか？……そうですね、特に何もなく、逆に変化のなさすぎるほど静かな日常を送っています。これもトラブルを起こす人がいないからでしょう。え？Masterの心配ですか？……それは一応、従者として主を心配するくらいには……む、何ですかその目は、疑ってるんですか？信じられませんか？そうですね……撃ちますよ？

<彼女が落ち着くまでしばしお待ちください>

まったく貴方がくだらない事を聞くからいけないんです。……ですが……そうですね、Masterが抱えている事を代わりに

背負ってあげたいくらいには思っています。私はその時その場にい
なかつたですから…はっ！何を言っているんでしょうっ い、いい
ですか？今のことは忘れなさい、さもなければ撃ちます、力の限り
撃ちます。いいですか？忘れましたか？……よろしい、なら私はこ
の辺で失礼させていただきます。それでは！」

〈 作中登場の呪文・用語一覧 〉

「契約の精霊よ 今ここに 掟の法を敷け 違反に罰を 逸脱に裁
きを 逃走には天の楔を かの者に罪と慈悲を 判定！」

誓約の儀式の延長、追加機能でもある。契約期間中、罰則行為、あ
まりにも魔法使いとしてふさわしくない行為などを審議にかけて契
約の精霊が法を布く、発動すればそこは簡易法廷と化し、その場に
関係者以外の入室は認められない。

なお、ここでの審議の結果である判定書はしかるべき場所に提出す
れば正式裁判の結果としても受理されるのでよほどひどい行為が行

われれば魔法世界へ強制送還という事態もあり得る…。

音来のお守り（魔除けの指輪）

音来がアキラを心配して彼女に贈ったお守りの指輪。ベースは制約の指輪の魔法だが危険を感知した場合は瞬間的に魔法障壁を展開するのでちよつとした事態でもびくともしない。ただし、障壁等に使われているのは音来が込めた魔力であつて何回も使用されれば当然枯渇する。再度魔力を補充すれば使い続けることが可能だが障壁の強度は込められた魔力にひれするのでアキラ自身が込めたとしても音来が込めたものとはそこに差ができてしまう。

「宿れ雷精、神の使いよ、猛き翼広げて舞い降りろ、『雷鳥召喚』」
召喚した雷精を鷲として形作らせ相手に叩きつける精霊召喚の上級呪文。特筆すべきは形を固定する『魔法の射手』や一定の命令を実行する通常の『精霊召喚』と違い、精霊が自身の意思を保つという事で程度によつては高度な自我を持つ事もある。つまり精霊独自の命令に対する自己解釈が発生する。その為精霊の制御または意思疎通という観点ではかなり高度な呪文。

音来が『精霊召喚』を自ら改良したものが本質は変わらず、精霊に形を持たせたものなので『式神』や高音の『影』に近いもの。誘導性に関しては『魔法の射手』を上まわり、誘導というより追尾の域、速度威力共に申し分ない中距離、遠距離用魔法。

神とは北欧のオーディンの事ではなく、ここではギリシア神話の雷を司るゼウスの事を指す。神の子等と言うのはゼウスの聖獣とされ

た鷲の事を指し、鷲はその姿から鳥の王者とされ、多くの国で信仰の対象にもなり古くは皇帝の紋章や軍服や建築物の随所に鷲の意匠を施したりしていたとても信仰のある生物である。日本にも生息している雷鳥ではなく鷲の姿にしたのは雷鳥が雷難避けとしての信仰がある事から

この呪文で雷精を鷲に形どらせたのもこうした雷との関連性が高い為である。『空を切裂き 舞降りろ』の件もより鷲をイメージしやすくするためのスペル。

アーティファクト候補

今回は形状のみの発表

主人公（鳴守 音来）

候補1：籠手

□ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ □

能力

- ・ 魔力充填
- ・ 魔力の属性変換

籠手にしてはすらりとした赤銅色の指先から肘、二の腕までを覆う大きな一体型の籠手。

本能力による予備タンクの機能に加え、補充した無変換の魔力をブーストの代わりに使うこともできる。

作者コメント

アーティファクトのそれぞれが主人公の心境の変化で使いますがその中でも一番最初に現れるアーティファクトです。まだ作中に出せていないので多くは語れませんがかなり使い勝手のいいアーティファクトです。

候補2：ショーテル

『*****』

能力

・障壁突破

・*****

刀身が鏡のように磨き上げられた反りが内側に大きい湾刀^{ショーテル}。刀身の煌びやかさは鋼より銀のそれに近い光沢を持ち、長さは日本刀（一般的に70〜80程の物と比較）に比べ50cmと短く長めの脇差ほどで長剣の一種でもあるショーテルにしては短め。

ショーテルの実用性としては『盾の向うの敵を切りつける』と言うことでこれに沿った概念として魔力の強化や障壁突破を可能とした魔術兵装。ただし、障壁・強化を貫通した際には切れ味が魔力強化していない刃物と同程度に落ちる。

作者コメント

これも主人公の能力を現した武器なんですが第二の能力が若干チートが入っています。主人公TUEEEEが7好きな方には是非お勧めですね。

候補3：補助系

『*****の*』

能力

・危険回避能力UP

・*****

・**の譲渡

とある英雄の遺品から作られたアーティファクト。

能力は生前の英雄の偉業にそうように戦闘時に補助的な効果を発揮する。

また能力は劣るが輪の複製が可能であり第三者に譲渡することも可能。(能力の3番目のものは別)複製できる数は3つまでで複製するたびに「回避能力」等の能力が等分される。

作者コメント

主人公にとってはおそらく一番思い入れの強いアーティファクトになります。その部分は激しくネタばれ。個人的には3部作目に登場させたいが気力が持つかどうか…

能力的には補助だけかと落胆しそうですが伏字の2番目は物語のキーパーソンになるので出てきたら期待しててください。

主人公 指導キー候補

音楽 始動キー

『レグ・ニス リ・ライト ブライトネス』それっぽいイメージ重視

『レビン(レ・ビニス) ブリッツ トニトルス』各語の『雷』関係の言葉

『フルグル ヌーベス トニトルス』ラテン語オンリー(どこで区切ればよいのやら(汗))

アキラ

候補1: 竖琴

『***の***』

・特性

・固有技能

**

青と水色を基調としたハープのアーティファクト。

特性や技能はそのほとんどが守ることや敵を退ける事に特化した魔法具。

使用法は基本的に弦に魔力、又は気を吸わせてやる事が重要なので形式的に弦を引く形をとるが演奏自体が上手くなくても術は形を成す。その為術者が精神的不安定だったり他の事に気を取られていて使用すると途端にその力が弱体化する。

候補2：トライデント

『*****』

・特製

・固有技能

白をベースに青い刀身とサファイヤが石突に納まっている先が三つに枝分かれしている槍。

形が武器の形状をしているが通常時は刃引きがされている、戦闘用というよりも儀礼用の面が強いアーティファクト。

使用者が望めば刃が立つようになっていたが本人があまり望まない為に使用されることは稀、もっぱら特製2の能力で敵を翻弄するといった使用法を取る。

あやか

空間型アーティファクト

ロイヤルガーデン
『藍薔薇の花園』

・特性

高速再生

高速成長

・固有技能

妖花

蒼華の壁

無限抱擁

一帯を薔薇の園で蔽う空間系のアーティファクト。

アキラの『碧海の豎琴』のように攻撃に転換することはできないがこと捕縛に関しては他の追隨を許さないほど協力。花園、一説にガーデンのdenはEden、つまり楽園という意味からきているとされ古くはヨーロッパ、中世にはその傾向が強い園が好まれた。また、園という字にも逸話があり、堀や囲といった守護的な意味があつてこれはわが国日本でも使われていたが城が発達して来てからはお堀として石垣や城下町などが発達したためあまり見られない、経済発展や戦争の影響がこれらの跡地が現代にあまり残っていないのも残念ではある。

さて、その楽園と守護を内包したこのアーティファクトは基本的に術者が認識した敵を茨で絡め捕る事で捕獲するのだが、茨自体に『高速再生・成長』が含まれているために切ったり焼いたぐらいで回避することはできず、一度とらえた場合術者が止めない限り何重にも縛りあげ、茨の刺が捕獲対象の血液から魔力・気を吸い上げてそれを栄養に花を咲かせる。えてして残忍な能力だが本人的に血を吸い上げる行為はあまり好きになれず対象が行動不能になる程度にとどめている。ちなみのこの時の技名を『無限抱擁』と呼んでいる。『妖花』、無数のバラを咲かせる事でその花から回復、麻痺、毒、神経毒、幻覚作用と様々な効果を発揮させることができる。ただし花の開花には栄養となる魔力、又は気が必要なので日々、荊に術者が栄養を与えるか獲物を捕らえた際にストックしておくほかない。

汎用性は非常に高いアーティファクトだが燃費が悪いのが欠点。

設定 その3（後書き）

さて、そんな感じでした今回の設定、気づけば30部も投稿と…数だけは一丁前になってきましたなこの作品も（苦笑）

さて今回は主人公やその他もろもろのアーティファクト等を発表させていただきました。主人公が3つと多いのは前に言ったかもしれませんがこの作品はヒロインに合わせてストーリーを分けたいと言ったことからそれぞれのストーリー毎にアーティファクトを考えました結果です。なので一作品に全部登場することはないと思います。

そんでアキラのアーティファクトですが…考えた結果2つになっていますがこの作品では2つとも登場します。というのもアキラの性格を考えるとあまり人を傷つけるような能力は出てこんだろうなと考えたのですがそれだとヒロインとしての見せ場を作る時に薄いのではと考え真反対の攻勢用のアーティファクトを考え、二つのアーティファクトが用途によって入れ替えられるというものを考えました。実際にどんな使い方をするのは作品をお待ちください。

え〜、続きましてあやかのアーティファクトなんですけど…ごめんなさい、一番設定を載せていますが半分冗談です。いや、書いてある説明はちゃんと考えましたが本編であやかが主として絡む予定はだいぶ先、というか3部作中の3作品目なんですよ！

つまりこのアーティファクトはあやかなら薔薇のイメージ？と何とも安直に、試しに作ったのであつて登場予定が限りなく未定なんです。皆様ほんごめんなさい。

それと、っと長くなってしまつのでここら辺にしておきます。
続きは25話のあとがきかあとがき（続）で！

25話の方は前書きにあるとおり連投を避けるために時間を空けません。だいたい9時くらいだと思えますが、もし起きなかつたらごめんなさい。最低でも午前中を過ぎることはないと思えますので9時に上がっていなければならそのまま放っておいてお昼頃にまたお越しいただく事をお勧めいたします。

では長々と失礼しました。

ではまた今日の朝日が昇つた後に、再見ッ！

取立25回目　く旅の道ずれ世は情け、先生に与えられた出番は……（前書き）

はい、25話投稿です。

まずは申し訳ない、宣言通り寝坊でした…いや、この曜日は授業が午後なのでゆっくりできるのでいいんですがこれも問題ですね、猛省中です。

今回でやっとそれらしく突入した修学旅行編、今だ出番の少ない先生は活躍できるのか、そして3-Aの、ネギの活躍はどうなるのか！

そんな修学旅行編、まだまだ出だしですがどうぞご覧ください。

取立25回目　く旅の道ずれ世は情け、先生に与えられた出番は…く

鳴守　音来が学校に現れるようになってきて3日目の朝。今日は待ちに待った修学旅行：の筈が、駅のホームで端を陣取って密談している二人の雰囲気からは周りの生徒のような和やかなムードは一片もなかった。

「…やっぱり来なかったね」

気落ちしながら改札から続く階段の方を眺めるのは大河内　アキラ、麻帆良学園女子中等部3年A組の生徒であり、水泳部に所属する少女。

「そう落ち込まなくても…何も突然いなくなるわけじゃないんですから」

その落ち込むように表情に影が差しているアキラを励ましている少女は桜咲　刹那、同じく3年A組の生徒で剣道部に所属している。

一見仲の良い二人に見えるが実はこの二人、周囲のクラスメイトからすれば趣味も接点もなかった二人が最近仲良くなったといい話題になっているのだ。

そんな二人の意外な接点、それは超常のものにしてファンタジー極まりない“魔法”という現象が二人を引き合わせた。正確に言うな

ら彼女らが師事する教師たちの引き合わせなのだが根底としては間違っているのではないだろう。違いがあるとすれば先天的に関わつていたものと偶発的に魔法に関わつたということだけだ。

そして今彼女らの話題に上がる“来なかつた”人物、名を『鳴守音来』。

彼は大河内 アキラを魔法という彼女の常識を覆すような世界に巻き込んだ張本人であり、同時に今現在彼女の魔法面での指導を担当する“魔法先生”でもある。

そんな彼がある日アキラに何も告げずに行方知れずになる。これが発覚した当初の学園側の回答は事故による入院、あくまで表向き名理由だ。本当の理由は別にある。

彼が行方知れずになる前日、アキラはその日、彼にもう一度助けられた。その時の相手がエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、魔法界にて表裏の世界問わずに名の知れた悪の魔法使い、その彼女に襲われたからだ。

アキラはその時戦う彼らと比べて非力でしかなく、自分が手助けに入るどころか足手まといにしかならないと自覚していた。そして彼女は助けを呼ぶことを選択した。自分にできないから他人に縋るしかない、彼女はこの時ほど自分の力不足を呪つたことはない。アキラは一般生徒に比べて力も体力もある方だった。しかし、彼女は女性、力持ちだと思われるのは好きではないし、女子にしては高い身長もあまり好きではなかつた。だけどその時だけは後悔した。走り行く中必死に奥歯を噛みしめて走つた。誰に助けを求めるか、そう考える前に向かつた足は寮のとある一室で止まり、彼女はそこではつと気づくも優先事項を切り替え中の人を呼んだ。

部屋の住人、アイン・リコード。

彼女は鳴守 音采の同僚にして彼のパートナー、事情を聴いた彼女は一目散に空を飛んで行った。

そしてアキラが知るのはここまで、その後あわてて追いかけた彼女が現場に着いたころにはもう全てが終わっていたのだから…

刹那もその彼が居なくなつた時の理由を知っているわけではない。彼女はアキラから相談を受けて毎日彼を探す彼女を心配して協力していた。

搜索開始から2、3日経つて、偶然、本当に偶然彼を見つけることができた。それは彼がまた学園に姿を現した前日の話だった。

見つけた彼は意識もなく、体は大小様々な傷だらけで生命力ともいえる魔力と気を極端に消耗していたまさに瀕死の重体。

その日は従者の許へ送り届けて安静させることになつたが肝心の彼の失踪理由については聞けずじまい、この事を今日まで黙っていた事を彼女はアキラに謝罪する。

「ううん、むしろ、話してくれてうれしかった」

「すみません。でも彼についてはあまり心配することはないと思いますよ？ギプスを腕に巻いてましたがあれはおそらくフェイクでしょうから」

「え？」

彼の傷はどう見ても一日で治りきるものではなかったこと、いくら体外的に傷跡だけ消すに事ができてもそれが比較的怪我の少なかった左腕一本というのは明らかに話し合わせのブラフだ。

「ですから、そうアキラさんが心配しなくても大丈夫です。仮に本当に怪我が残っているとしても、一日であれだけ感知したんですから修学旅行が終わって戻る頃には元気な姿で出迎えてくれますよ」

「そう、かな…ううん、そうだよね」

「はい」

「アキラー、ネギ君着たよー」

そこでアキラの友人の一人である佐々木まき絵がこちらに呼びに駆けてくる。

「じゃあ刹那さん、この話はまた後で」

「はい」

「え？何々？なんか最近二人ともなかいいよねー。何の話だったの？」

「いえ、普通に雑談していただけですよ」

「え〜！」

「はいはい、ネギ先生が来たんでしょ。ほら、さっさと行かないと」

そうやってまき絵の背中を押すアキラを見て刹那は決意を固くする。たった一度の修学旅行、歳は同じでも彼女は魔法を知って日も浅い、これから向かう先は京都、関西呪術教会のお膝元にして今回まず間違ひなく妨害が出ると話を受けている。

もちろん学園長の杞憂に終わる事態も想定される。だからそんな事に彼女を巻き込むのは躊躇われたし、何より常に警戒させざるほどでもない。その分は自分が背負えばいいのだから。

「ほら、刹那さんも早くっ」

「あ、ハイッ」

友人をこの先で待ち受けているかもしれないざこざ巻き込むわけにはいかない。せめて敵にある程度の動きがあるまでは黙っておこう、そう心に決めた刹那は先に行く彼女たちをあわてて追いかけた。

さて、アキラ達に続いて集合しているクラスの皆に合流したのはいいのだが…さしあたって、まず困った事態が陥っている。

「ね、ねえ。刹那さんは京都の自由行動でどこを回る予定だったの？」

「いえ、私は京都いた事があったので場所はエヴァンジェリンさん達に任せていたので」

「へえー…って刹那さん京都出身だったの？すごいじゃん！じゃあ案内とか結構任せてもOK？」

「まあ、一般知識程度には、でも私は京都の外れに住んでいましたし家の都合でもあまり町の方には出なかつたものですから」

「へえー、あ！そういえば木乃香も実家が京都よね。もしかして二人とも知り合いだったとか？」

「あ…いえ、その…」

弱った。まさしく刹那の心境を表すならその一言に尽くす。

今現在、本来修学旅行班で6班である彼女は、5班の面々に親睦を深めるためという名目の元に質問攻めにあっている。

別の班である彼女が何故ここにいるのかという答えは単純、彼女の班員であるエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと絡繰 茶々丸の二人が欠席、人数調節の為に他の班へ吸収されたからだ。

しかし、班が変わったといってもいってもそれは別段問題ではない、当たり障りのない範囲で受け答えしていればいい話だからだ。なら

何故この状況に刹那は参っているのか：

「あ…あの、せっちゃんとは小さい時親同士の紹介で顔合わした事があるんよ」

「え？じゃあ二人つて幼馴染？」

そう、護衛対象である近衛 木乃香お嬢様と同じ班ということが問題だったのだ。

目下のところこの二人の醸し出す雰囲気は一带に重い何かを漂わせている。皆にしてみればせっかくの修学旅行にこの沈黙は何だと問いただしたい所だが、えてして他人の事情、それも本人達が話さない事に首を突っ込むというのは抵抗感を抱くのは仕方のない。だが、3-Aというクラスは良くも悪くも外向的にオープンで明るいクラスだ。同じクラスメイトが気まずそうにしているじっとしていられるほど薄情ではない。

なので切り口として明日菜達が刹那に質問をするという形で切り込んでいたのだが刹那の対応は段々と重くなるばかりであった。

(どうする、どうする私！さすがに同じ班になるのは想定外だ)

何も木乃香が嫌いというわけではない、だが已むに已まれぬ事情から今日まで避けてきたのだ、護衛するなら傍にいた方がいいと言いかもしれないが刹那自身は陰ながら支えることを望んでいる。そんな中こんな逃げ道のない事態は全く想定していなかった。

何しろこの修学旅行中を同じ班で過ごすということは3泊4日の殆どで同じ時間を過ごすということだ、避けようにも出会わない確率の方が低いのは当たり前だし、そこまで避けていればさすがに周り

の追及も黙っていないだろう。うっかりこの事態に陥れた先生に殺意を湧きそうになるも自制する、それは完全な八つ当たりだ。

と、ふるふると自身の内面と葛藤していた刹那だったがここで周囲の異変に気付く。

(！?…この気配…)

気：それも陰陽のもの。仕事柄刹那も補助程度に習得している慣れ親しんだものだ。

もちろんこの場で陰陽道に通ずる力を使うのは刹那をおいて他にいない、つまり敵側の妨害工作の可能性は大だ。

迂闊だった、いや、この場合まだ関東を出ないこの列車内で襲ってくるというは思わなかった、完全に自分の配慮ミスだ。

乗り込む前の決意が早々に破らなくてはならない事態に心が痛むが手を出されてからでは遅い、幸いこの場にはネギ先生も含めて魔法先生が二人いる。裏に疎くない生徒もいるのでこの場で襲われようとも被害は出るとは考えにくい、なら自分は術者を探すべきであり、同時にまだ気付いていないだろう彼女に注意を促さなくてはならない。

前方車両にはネギ先生や教員が待機している。となるとカバーすべきは後部車両。

刹那は苦虫を噛み潰したようになる表情を押さえて平静を装い席を立つ、その際にアキラにそれとなくアイコンタクトを取って後ろの車両に移る。

つい先ほど決意したばかりだったが敵が実際に手を出してくるのなら用心に超しておくことはない。

聞くところによると、アキラの習熟度は格技にこそ高いものの師に似たのか感知系は弱いと聞く、なら心構えとして敵の嫌がらせがあるという前情報程度なら支障はない、今件については万が一という旨を伝えた上で自衛に徹してもらえばいいのだから。

「どうしたの、刹那さん？」

「実は…」

刹那が待つこと数秒、静かに扉をくぐってきたことを確認した刹那は認識を誤認させるための呪を張って間を置く、近くに敵がいないか確認するためだ。

そうして安全を確認したのちに今回の修学旅行先の難点を掻い摘んで説明していく。もちろん危険であるということは極力伏せてある。今回の依頼の主はネギに渡された親書に対する妨害、それに伴って生徒側にも被害が出る可能性があるという事を伝える。

「…なるほど、でも本当にこんな学園関係者も多い車内で襲ってくるのかな？ここに来る途中の車両にも私達以外での利用者は結構多かったけど」

「いえ、プロからすればそういった人が多い場所というのはカモフラージュがし易いという事でもあります。先ほど微弱ですが式神の

気配を感知したので：まず、間違いなくこの列車内に潜んでいるとみていいでしょう」

そして刹那はいつ仕掛けてくるかはわからないと付け加えておく。

「…うん、わかった。私もそれとなく注意してみる」

「すみません。本当ならアキラさんをこんな事に巻き込みたくないのですが…」

そんな頭を下げる刹那の頭上にゆっくりと影が落ちる。

何と思つて顔をあげた刹那の頭部に次の瞬間コツリと握り拳が落ちた。

「まったく、一応これでも修行は欠かさなかつたんだから、刹那さんも知ってるでしょう？毎日付き合ってくれたんだし」

何でといった風に頭を押さえる刹那にアキラはもつと自分にも頼つてほしいと言つ。

その心づかいだけでも気が楽になつたように刹那の表情は和らぐ。

そして次の瞬間、アキラにも感じ取れるほどの気がこちらに向かつてくるのを二人は感知した。

「「!？」」

「！」

「この声は……」

「ネギ先生？」

気配とともにこちらへ駆けてくる声の一つ、その一方に聞き覚えのあった二人は一瞬身構えた緊張を解きかけるが事態を把握しなおし、再度探査の域を広げる。

「……アキラさん、下がってください。低級ですが式神です」

いつの間にか背負った竹刀袋から鏢無しの白木の一刀を腰だめに帯刀している刹那。彼女の雰囲気からここは素直に従おうとアキラは車両の端に身を隠すように寄った。

……

静寂の時、風切り音が耳に届いたと感じた瞬間、反対に待機していた刹那が音もなく通路を遮るように身を滑らせていた。

そして鳴る鞘鳴音、木と木がぶつかる音。それはつまり刀は抜かれた後で刀は鞘に納めた後だということ。

ゆっくりと構えを解く彼女の背後には燕の型をとっていた式神が紙へと戻り、それは見事に一文字へ断たれていた。

「すごい……」

「いえ、この程度の相手ならアキラさんでも問題はないですよ。何

か銜えていたようですが…」

確認するように左右に気を巡らせた後、刀を竹刀袋にしまった彼女は式神とともに落ちた長方形の物体を拾い上げる。

「手紙？」

「おそらくネギ先生のものでしょね。学園長から依頼を受けていたようなので、それとなく気にかけてやってくれと頼まれましたが」
アキラが横から見たそれには確かに麻帆良の焼印が施してある。裏返した表には何も書かれてはいないがこれが親書だとしたら先ほどの式神は間違いなく敵の手の者の仕業だ。

「待て　　っ！」

「ネギ先生…」

威圧感はなかったはずだが駆け付けたネギはその場に誰かいるとは思わなかったのだらう。知り合い、それも生徒と鉢合わせした事態にたたらを踏んだ彼に刹那はとりあえず落し物を見つけたという風を装って親書を手渡す。

「あ　　っ、コレは僕の大切な親書！！あ、ありがとうございます、助かりました！！」

大声で親書と言うのはいかなものかと思った刹那であったが今行った手が妨害されたばかりの敵が続けて襲ってくるとは考えにくかった。そんな事をしてはこちら側に術者を捕らえる機会を与えるだ

けだ。自分ならこんな時速300?を越すスピードで疾走する密閉空間で二度も襲撃は行わない、あるとしたら向こうに着いてから、十中八九、向こうに着いてから仕掛けてくるだろう。

「じゃあ私はこれで、アキラさん」

そう敵の手を読んで刹那は生徒達がいる車両に戻るべく踵を返す。自身もあまり追及されたくない立場だからだ。

が、一つ、今回のような事態にならないよう気を引き締めてもらう意味を含めて彼女は助言を一つ残していく。

「気を付けた方がいいですね。先生。特に、向こうに着いてからはね」

side・Negi・Springfield

「気を付けた方がいいですね。先生。特に、向こうに着いてからはね……それでは」

(うーん、カモ君は怪しいって言うけど、こうして親書も返してくれたし…でもエヴァンジェリンさんみたいにまたクラスに敵がいたのかも)

「なんだよ兄貴、まだ悩んでるのか？」

「カモ君…うん、ちょっとね」

京都についてバスに揺られること少し、現在3-Aは京都観光名所の一つである清水寺に寄っている。

ネギの肩に乗る小動物、カモが指摘するネギが悩むことというのは彼のクラス、出席番号15番の桜咲 刹那が西のスパイではないかということだ。

時は遡ること少し、京都に着く前の車両の中でネギは大切な親書を西側の妨害により奪われかけるといふ失態をおかした。といつてもこうして取り戻すことはできたのでその点に関しては今後警戒を強めればいいだけの話だ。問題はその取り戻した場所に刹那がいて彼女が親書を手渡してくれたということ、そしてそこに縦に割れた式符があったことだ。

もちろんそれだけで彼女が犯人だと疑うネギではない。が、状況が状況であったためにカモのいう怪しいという事も理解できる。それゆえに彼はいまだ頭を悩ませていたのだ。

「何言っただよ兄貴、式神がいた現場にあいつがいた、状況証拠としては十分じゃねえか」

「うーん、でもこうして親書は返してくれたし…」

「あまい！あんみつにチョコレートかけるより甘いっ！そうやって油断させるのは悪党の常套手段でさあ」

「うー…だけど…」

「キヤ　！？」

「「！？」」

「兄貴っ」

「わかつてる！」

突然の悲鳴に両者は思考を切り上げてネギは石段を一気に駆け上がる。

そこにあっただのは…

「って落とし穴？」

大人一人分はあろうかという幅の落とし穴、道のと真ん中に空いたそれは明らかに故意にやったものだ。まさか地元民が観光客を狙っていたはずだとは言うまい、間違いなく麻帆良の生徒を狙った妨害だ。

「ネギ君たすけてー」

「あ、大丈夫ですが、まき絵さん、いいんちよさん」

慌てて手を差し出して落ちた生徒を引き揚げるネギ。

「カモ君、これってやつぱり」
「ああ、敵の妨害とみて間違いないな。それにしてもカタギの連中を巻き込むたあ不逞野郎だ」

落とし穴に落ちた二人は見たところ特に怪我もない、その事実に一安心するもふつつつと怒りがわいてくる。カモの言うとおりこれは一般人が巻き込むことを考慮した手口だ。怪我がなかった、ならよしとするかと言われればそうはいかない。

魔法使いの使命は世の為人の為に陰ながら助けることにある、つまり善行だ。ネギも“立派な魔法使い”を目指す一人の人間としてこの事態は看過できるものではなかった。

そうして一人使命に燃えるネギ少年。

しかし、事態はそうしている間にも刻一刻と進む、関西呪術教会側の刺客は狡猾にして姑息、そしてやることがいまいち小さかった。

「はあ、何とかごまかせたけど…」

「まあ、あんな手で来るとはまさか思わねえしな、やつぱりあの刹那って奴の仕業じゃねえか？」

「うーん、そうかな…確かにちょっと怪しいとは思っけど…」

二人が話すのは日中にあつた妨害工作の数々、新幹線内でのカエル騒ぎから親書強奪、恋占いの石近くでの落とし穴に羽音の滝では酒が混ざつて生徒達が酔いつぶれてしまった。問題はその全てに確認できる位置に刹那がいた事だ。

二度あることは三度ある、さすがのネギもこつも妨害が続けば疑わずにはいらなかった。

「ちよつとネギ！」

「あ、アスナさん」

そこに現れたのは出席番号8番の神楽坂 明日菜、彼女は新学期初めの吸血鬼事件の際に協力してもらったことがある。もっとも、その前から魔法自体はバれてしまっていたし、寮では同室なのでそういう意味ならネギはかなりお世話になっている。

そんな彼女がネギを訪ねてきたのは昼間のおかしな出来事が続いたことを疑問に思つてだ。

「えう…そ、その、実は……………」

「え　　つ　　私達3-Aが関西の変な魔法団体に狙われてる!？」

「はい、関西呪術教会という…」

彼女は少なからず魔法にかかわっている。それは自分の不遜ゆえに、

だから彼女は知る権利がある。いや、魔法を知っているからこそ話しておくべきかもしれない、いざ目の当たりにした際に事態を知っているのと知らないのでは雲泥の差がある。

「どつりでおかしい事ばかり続く訳よね…でも、また魔法の厄介事かー」

「その、すみません…僕が至らないばかりに」

「……コラ、落ち込んでる場合じゃないでしょ、あんた先生じゃない。」

「あう、すみません」

「…しょうがないから、私も手を貸してあげるわよ。ちょっとだけね」

「あ、アスネさん…」

ポンとネギの頭に手を置いた後に視線を合わせて指を立てる彼女、これではどちらが教師かわかったものじゃない。

頼る事を知ったネギは協力を頼めることの有難みを知っている。でも、だからこそ自分ももつとしっかりしなくてはと自信を奮い立たせる。そう、自分は彼女の教師なのだから。

「あ、ネギ先生、職員は早めにお風呂を済ませてくださいね」

「ひゃ、ハイっ」

「あ、しずな先生っ」

と決意したまではよかったが、突然現れたしずな先生に驚いて肩をすくませる姿は年相応な姿だったそうなの…

side:out

「……急がなくては、もうすぐうちの班の入浴時間だ」

一人大浴場の脱衣所にこっそりと入ってきたのは刹那だ。
何故まだ入浴時間ではないのに彼女がいるのかというところ…

「しかし、いつまでもお嬢様を避けているわけにもいかない…くっ、明日の自由行動、どうすれば…」

ということである。要は木乃香のさびしげな表情に耐えられず部屋から逃げてきたわけだ。

といっても木乃香が何故そのような視線を向けてくるのかはわかっている。たぶん彼女は昔のようにまた友人としてありたいのに自分がそれを今まで袖に振ってきたからだ。

自分も昔のように仲良くしたい気持ちがないのかと問えば帰ってくる答えは決まっている。しかし今は立場も違えば環境も違う、自分は護衛で彼女はお嬢様、そして何より己の血が許さない。

「いや、結局は私が怖がっているだけか…」

結局いつもの答えに帰結する自問自答を終えた刹那はそれと同時に脱いだ衣類を籠に入れ、タオルを手にドアをくぐる。

外気に触れる肌の感触が少し心地良い、今の時間は教職員の入浴時間の終わりギリギリだ。つまりこの時間に入っている人はいないので刹那の貸し切り状態である。が、今は修学旅行とはいえ場所が場所だ、護衛するお嬢様に今のところ危害は及んでいないが気は抜けない。早々に風呂を終えるために今はのんびりとはしていられない。

「ふう、しかし、ああも続いて妨害に合うとは」

昼間の新幹線内の接触から始まり、清水での落とし穴に音羽の滝でのお酒の混入。

旅館への移動中はなかったとはいえ陰湿なほどの妨害の連続には驚いた、相手は機を窺うというより手当たり次第に仕掛けて来ている感じだ。

がしかし、何と行ってよいのやら妨害の手が回りくどいことこの上ない、あれでは妨害というより単なる悪戯のレベルだ。もしかや陽動では？と勘ぐってしまうが、思考が深くなって周りが見えなくなるのは自分の悪い癖だ。東に来て指示してもらっている師匠にもよく言われた事でもある、もっと柔軟に視野を広く持たなくてはいけない。

「それにしても…困ったな、魔法使いであるネギ先生なら何とかしてくれると思っただが……」

そういつて思い返すのは今日の子供先生の対応だ。学園長には親書のことはネギの自主性を促すために陰ながらのサポート程度にしてほしいと頼まれている。もちろん刹那自身は木乃香を守る事が最優先なのでできる限りでいいとは言われているが、流石にしょっぱなから親書を奪われかけているのでは心もとなさすぎる。おまけに京都に着いてからの妨害いたずらの連続にはまるで後手に回っていた。これではいくらなんでも先が不安になってしまうのも仕方ないだろう。

「！（殺気！？）誰だっ！」

と思案にふけていたところで背後から気配を感じた刹那は脇に控えていた夕凧を手に取り構える。すると敵はこの場での交戦をよしとしなかったのか、慌てたように湯船を反対方向に退散しようとする。

「逃がさん！神鳴流 奥義……」

湯気の向こうに視界は悪く、障害物も多い上に足場も悪い。が、そんなものは刹那を前にあつてないようなものだ。

『斬岩剣！…！』

イメージ通りに刃が描いた斬線は大岩に対して根菜を輪切りにするように断ち、敵の頭上すれすれを通る。

もとよりこの場で打ち取るつもりはない、敵の規模にその狙い、聞

きたいことは山ほどある。気絶とはいかなくともここで捕らえられれば御の字だ。

『風花・武装解除!!』

「っ！」

(これはっ西洋魔術!? 敵は関西のものではないのか?)

てつきり敵は逃げるだけと思ったが反転した敵はその手に持った杖と思わしきもので反撃に出る。その攻撃はピンポイントで刹那の獲物を弾く、もし迫る彼女に対して初めからこれを狙っての逃走だったのなら大したものである。

(が、相手が悪かったな)

神鳴流は武器を選ばず、もともと退魔を目的とした戦闘手段として確立された神鳴流は確かに身の丈ほどの長刀を使うのが主流だ。が、魔物や妖怪といったモノを相手にするのに常に一定の手で相手にするというのは愚というもの、よって多種多様な武器を扱えるように、または無手だろうと戦えるように訓練されている。つまりこの己を前に武器を弾いた程度で安心して気を抜くのは未熟としか言いようがなかった。

「ふぎっ!ぎゃぴっ!?!」

「何者だ! 答ええねばひねり潰すぞ?」

勢いを殺さず相手を浴槽の石に押し付けた刹那はそのまま人体の急

所、首と男性の急所であるソコを躊躇なく掴む。

そして脅しの言葉とともに手に籠める力を若干強める。殺すつもりはない、このまま聞けるだけ吐かせたらしかるべき処置をとって……

「……ってアレ？」

霧がはれてきた視界によく見れば目の前の敵は非常に小柄な、それも華奢な体つきをしている。いや、それも赤髪に高等部付近が焦げ茶色の独特の髪色というのはどこか見覚えがなかったか……

「ネ……ネギ先生？」

「あ、あわ、あわわわ」

恐怖と痛みで震え上がる少年をしっかりと確認し、飛んでもない勘違いをしてしまったと後悔の念を抱く刹那だったがすでに後の祭り……まずはこの事態をどうするべきか……

目の前で吠えたてる小動物と震える子供という妙な組み合わせに自身も戸惑う刹那だった。

取立25回目　く旅の道ずれ世は情け、先生に与えられた出番は……（後書き）

さて、そんな感じの25話でした。

なんていうか…主人公は相変わらずの空気でした…、ここまで主人公が出てこないのも珍しいんですかね？といっても本来は今週話で登場させる予定でした、最後にチョロっと。それが思ったよりまとめ切れなかったので次回に回すことに、なので確実に登場するのですがおそらくその登場で終わっているか少し活躍してって感じですね次回は…うむ、私が言うのもなんですが哀れ主人公（笑）

さて、肝心の今週話、とうとう入った修学旅行編。最初は今回までに作者の都合で投稿期間を空けてしまったので、宣言通り今までの回想的な雰囲気から入りました。まあ初めの回なので導入部は大まかに原作と同じ流れです。ただやっぱり主人公介入とその弟子という形でアキラがかかわってくるので物語の方向性は段々と変わっていきます。その為、この修学旅行編も中盤はかなりオリジナル展開が入ると思われれます。あらかじめご了承ください。

では今回はこの辺にしておきます。

後はあとがき（続）の方で…って最近やってないですな、ネタはいっぱいあるのに

ま、まあそれはさておき、今回は『副担任は借金教師』をお読みいただきありがとうございます。次回もまた目に留まるよう日々努力していきますのでどうか今後ともよろしく願います。

それでは次回、再見ッ！

取立26回目　く襲撃者と乱入者、遅れてやって来た先生は乱入者く（前書き）

ども、少々遅れましたが26話投稿です。

え、今回は何かまとめ切れたか怪しいんですが……一応カットしたんですけどね？それでもだいぶ多くなってしまいました（苦笑）

まあこの作品がこうなるのはいつものことなんで前置きは短く生きますしょう。

それでは26話をどうぞ！

取立26回目　↳襲撃者と乱入者、遅れてやって来た先生は乱入者

一言でその空間を表わすなら「混沌」^{カオス}その一言に尽きる。

具体的にどんな？と問われれば…

「あ、あのこれは…仕事上、急所を狙うのがセオリーでして…」

「あ、あわ、あわわわわ」

「やい！てめえ、桜咲っ」

オトコの急所をつかんでいた手を慌てて後ろに回し弁解する女生徒。突然襲われたという事態と今日一日の重圧から壊れた玩具のように震えることしかできない子供、先生。

その横で女生徒に向かってドスの効いた？声で吠える小動物。

まったくをもつて第三者視点からこの場面に遭遇したなら静かにドアを閉めて全力で回れ右だろう…
いや、そもそもこのまま放置したとしても子供先生の再起動が望み薄なこの状態、正直言ってどう收拾を付けるのかは見ものかもしれない。

が、物語はいつも急な展開を迎える。そう、困惑の極みだった二人（一匹は除外）の元に突如、絹を裂くような悲鳴が届いたのだ。

「お嬢様っ！」

悲鳴を聞いてから刹那の行動は迅速だった。弾かれた己の獲物を回収し、一直線に悲鳴の元、脱衣所へと急行した。果たしてそこにあつたのは…

「何よこれ　っ」

「やん、この猿下着を脱がしよるっ」

お猿と戯れる少女達、と言えば聞こえはいいのかが、事態はそんなメルヘンな展開では決してなく、入浴にきた少女二人の衣類を剥ごうと猿達が襲いかかっているのだ。

後からきたネギからすれば若干気の抜けるようなものだった。昼間に散々妨害という悪戯にあつていいいた彼にとっては本当に猿がイタズラをしているだけに見えた。だからこそ彼は気を抜いた。

「…の小猿ども……………」
「え？」

そんな彼に対し先に脱衣所に駆け付けた刹那は肩をプルプルと震わしている。若干その後ろ姿に黒い炎が見えたとか見えなかったとか…それもそのはず、彼女は現状に怒りの沸点など優に振りきり、すでに刀を抜き放っていたのだから。

「お嬢様に……………このかお嬢様に何をするか　　ッ！！」

刹那の手に持つ刀が真剣だとわかると慌てて止めにかかるネギ。当然だろう、誰だって小動物の惨殺現場なんて見たくもない。必死に抱きついて止めようとするがネギが剣士である刹那に力で勝てるはずもない。が、自分より年下のネギを無理やり引きはがすこともできず、刹那は足を取られて転んでしまう。

「げ……………」

傍から見えていたアスナでも問いただしたい、いったいどう転べばそんな体制になるのかと…

下敷きになっているネギの上に尻もちをつく形になっている刹那、ここが外で互いに服を着ていれば…いや、どちらにしても問題だろう。脱衣所で互いにタオルも付けていない状態は絵的に、確実にアウトだ。

停止していた頭が思考を開始し、途端に羞恥に頬といわず耳まで赤く染める刹那、そしてその事態に子供とはいえ男子であるネギ少年も湯気が出るのではないかというほど朱に染まる顔で謝罪をする。
…数秒前の焼増しのような光景である。

「ちよ、ちよつと待って二人とも！このかがおサルに攫われてるわよ！」

その騒ぎにあきれたのか、アスナが同意を求めて振り向いた先には寮で同室の友人の姿はない。いったい何処にと視線を巡らせるまでもなく、戻るその先に友人の姿はあった、何故か小猿の集団に抱えられている姿ではあったが。

「お嬢様っ！…神鳴流奥義……」

アスナの言葉に素早く反応したのは刹那だった。

取落した抜き身の刀を手に飛び出し、全身に巡らした気を刀身からそれを振るう腕に集中させ、後続の小猿を斬り掃うと同時に技をなす。

『百烈桜華斬！！』

名は体を表わす。

幾重にも描かれる無数の斬線は敵を一つとして逃さず斬りつけ細切れにする。斬られ紙に戻る式のその様は幾百の花弁が舞う桜吹雪の如く散り行く。故に百の名を、故に桜華と名付けられたこの技。彼女が得意とする奥義の一つである。

事はまさに一瞬、されど油断なく気を巡らす刹那はしっかりとその腕に木乃香を抱きとめている。

さながら姫を守る騎士といった風、いや、彼女の場合武士にも似た

凜とした張り詰めるような雰囲気を彷彿とさせる。

(チツ逃がしたか……)

「せ、せつちゃん」

抱えたままでは礼に欠く、されど主君の身を守るべく上での処置と思考を切り替え、主の呼び掛けに応じる。

「なんかよ わからんけど、助けてくれたん？……あ、ありがとう」

「えっ、あ……いや……」

と、ここで騎士、もとい武士の仮面が破顔する。

敵が去って緊張の糸が緩んだということもあるが、それ以上に木乃香の突然の礼と笑いかげようとするその顔に刹那は停止を余儀なくされ、結果として彼女はこの場を去るという戦略的撤退を選ぶ。

突然湯船に落とされた大切な人の呼び声を振り切って…

「……………はあ……………鬱だ……………」

溜息をつくのはこれで何度目か。彼女、桜咲 刹那は先ほどの光景を思い出してその都度溜息をもらすしつつも手に取った札を柱に張り付ける続けるという器用な事を行っていた。見ようによっては内職に嫌気がさしている主婦に見えなくもない…年齢以外は…

「あ、刹那さん！」

「アキラさん？」

そんな彼女に声をかける少女、アキラに驚いて問い返した刹那。どうやら彼女は先ほどの騒ぎの気配を感知して刹那を探していたらしい。これには刹那も反省した、いくら敵の襲撃があつたとはいえその後の事後処理を子供先生に丸投げしてしまったのだ。その時の反省を胸に刻みつつ、刹那は先ほどの襲撃について掻い摘んで説明をした。

「そつか、生徒に手を出してくるなんて…やり方がどんどんエスカレートしてきてるね」

「ええ、幸いその場には私もネギ先生もいたので問題はありませんでしたが…」

「…？刹那さん、それは？」

「ああ、これは式神返しの結界です。新幹線の時といい、先程の時といい、敵の中に呪符使いがいるのは間違いありませんので」

そう言いつつ札を2枚、束から抜き取って見せる刹那。生憎とアキ

ラに陰陽術の心得はなかったがもう一枚の方は修行で馴染みの認識を逸らす符に字体似ていたので類似したものだわかる。

刹那の手に持つ束を見るとまだだいぶ数が残っている。入り口だけとはいえそこに進入路を含めると建物というのは意外と穴が多い。ましてやここは旅館、その数を一人でカバーするとなれば一仕事だ。

「それじゃあ私も手伝うよ」

「えっそんな…」

「あのね、クラスメイトが襲われたのにまさか手伝うな、とか言わないよね？…それに、二人でやった方が早いじゃない」

普段もの優しい彼女が凄むと迫力があると刹那は常々思っている。だが、今回に限って言えばそれは刹那の事を思いやっつての冗談めかした発言だということにはわかってる。彼女が困っている人を見捨てておけないのもよく知っている。

だから刹那は素直にアキラの厚意に感謝して手伝ってもらうことにする。

もしこの場に彼女の事をよく知る人がいれば啞然とするだろう。依然と比べて表情も物腰も柔らかくなった。皆口々に同じ言葉を呟くだろう。

そんな刹那は脚立を取りに行ったアキラを待つかたわら一息入れるようにその場で緊張をほぐす。勘違いではなく確実に彼女は変わってきているのだろう。

「そういえば……刹那さんって近衛さんの昔から知り合いなの？」

その言葉は作業を続けてしばらくした時、何か会話がほしいなとアキラがふと聞いた言葉だった。

アキラは刹那が木乃香の護衛だということは自身の師匠から紹介されたときに聞いている。それから紆余曲折も特になく徐々に親しくなった二人だったがまだそういった過去のことやプライベートに深い話はそこまでしていない。基本的に話す方でない二人だったがお互いの友人として話すべき事、聞くべき事の線引きはしっかりしていたからだ。

だからこそこのアキラの発言は双方にとって今まで嫌厭していた領域の事柄でもある。それを今なぜ問うのかといえばアキラも要領をえなかったが、あえて言うなら先程の彼女を見つけた時の溜息をつく姿が気になったからというのが原因だろう。

「……幼馴染というのでしょうか、私は幼少の頃にお嬢様とあっているんです。」

少しの間を置いて刹那は結局語ることにした。

もちろん話せる範囲でのことだ。それでも友人として、信頼できる人だからという事もあった。

「師範の先生の紹介で近衛家にお世話になり、その時にあったのが今の木乃香お嬢様です。そして、人付き合いに慣れていなかった私に初めに歩み寄ってくれたのも、お嬢様でした」

その頃を思い返す刹那の表情は一言で言うと幸せそうだった。

普通の子供のように手毬をついて遊んだり、紛れ込んでこのかに襲

いかかる野良犬を懲らしめたらいつの間にかな曲なったり、ぎこちないながらも次第に仲良くなっていく二人の話は微笑ましく聞いているアキラも暖かい気持ちになれた。

「でも、一緒に遊んでいたある日、誤って川に落ちてしまったお嬢様を助けようとして…私は助けるどころか駆けつけてくれた大人達に助けられました。そんな時です、もっと強くなると決意したのは……そして小学生になったお嬢様は麻帆良へ、私は修行に励み、一昨年に護衛として麻帆良に来ました」

「そうだったんだ……あれ？でも刹那さんが近衛さんと一緒にいるところはあまり見たことないけど」

「それは…いえ、確かに、私は麻帆良に来てからお嬢様とはほとんど話していません…」

「え？なんで」

「…それが護衛のあるべき姿ですし、私は陰で支えていられるだけで幸せですから」

そう言った刹那の表情は確かに笑っていた。だが、その表情はどこか希薄で、見る側に引っかかる印象を与える儚げな笑顔だった。

「…刹那さん、それは本当に…」

「あ、いたいた、刹那さん」

突然の声に振り替える刹那とアキラ、それは背にかかった声が二人

にとつて聞き覚えのある声であり、こちら側の話を交えた会話を聞かれてはまずい人間だと即座に会話を切り替えるためだ。

が、振り返る先にはもう一人、彼女らの担任である子供先生、ネギ先生と最近その保護者としてクラス内ではんば公認化している神楽坂 アスナだ。ちなみに先ほどまでの会話を聞かれてはまずいのは後者であるアスナの方だ。

「神楽坂さん、ネギ先生も…何かあつたんですか？」

先に返したのは刹那だがその返しは白々しい、彼が刹那を探しに来たということは先ほどの風呂場の出来事に関することだろうことは明白だ。なら何故、と思うかもしれないが彼、もしくは彼等はアキラが関係者だとは知らないはず。そういう意味合いでの返答であり、またカマをかけたということでもある。

「つとアキラさも、こんばんわ」

「こんばんわ、ネギ先生」

「つてそうじゃないでしょ！……」

そう言つて二人、正確には二人と一匹で話し合う姿は何とも、隠す気があるのかないのかわからないが、概ね刹那達にはその内容が理解できていた。

チラチラとアキラを伺うその様子はとてもじゃないが腹の探り合いに向いているようには見えない。いや、若干10歳にして教師という役職に就いているとはいえそれを求めるのは酷というものかもしれない。

刹那は視線でアキラに確認を取るとネギに向き直る。

「あの、ネギ先生。あの時の……神楽坂さんには話しても？」

「え？あ、ハイ大丈夫ですけど、あの、アキラさんは……」

「……こちらの事を知ったはアキラさんも最近ですが関係者です。彼女が同席しても問題はないと思います」

「そ、そうなんですか」

納得をした、というわけではないだろうが先にソファアに座る刹那達にならって向いに座るネギ達。その視線は刹那の手に持つ呪符に集中していたが、刹那としては手早く要件を済ませたかったので単刀直入に要件を聞きことにした。

「……それで、お話というのは」

「あの、こんなこと面と向かって聞くのはおかしいかもしれないですけど……刹那さんが僕の味方というのはどう……」

ネギの少し遠回しな言い方になるほどと刹那は理解した。確かに「お前は敵か」など面と向かって聞くのは聞きづらい事柄だ。まあ、語尾が弱くなつていくのは彼らしいといえるが、あまりそういう態度でいられるとまた敵が調子に乗る危険性がある。すでに木乃香に被害が出ている現状、刹那としてはもう少し緊張感を持ってほしいところだ。

「まあ、ある程度は察しているとは思いますが。私はこのかお嬢様の護衛としてお嬢様の父君から依頼を受けて麻帆良に来ていました。ですからお嬢様に危害を加えない限り私がネギ先生と敵対すること

はありません」

「そ、そんなつかのさんは僕の生徒で大事な友達で…」

刹那の物言いに慌てるネギを見てわかっていると一言で納める。

そんな彼女の言い方に羞恥からか、萎縮してしまったネギ達を見かねてアキラがそこへフオローを入れる。アキラのフオローによって落ち着いたネギ達は三者三様に謝ってきたが、これも刹那は慣れない土地で襲われたのだから警戒するのは当然、むしろ無条件に信頼して気を抜かれるよっぽど良いと言う。ただ、その後にもそれでも対応が不甲斐なかったと上げたところで落とすあたり彼女も人が悪いと言えるのか。

そんなこんなで誤解も解けた一同は事情を知っているだろう刹那に先程襲ってきた敵は何なのかときくことにする。

「敵はおそらく関西呪術協会、その一派の者でしょう。先ほど襲ってきた式神から『呪符使い』がいるのは間違いありませんから、おそらく後数人の共犯がいると思われます」

「ちょ、ちょっと待って敵はそのなんちゃら協会じゃないの？それに呪符使いつてなに??？」

「いえ、組織といってもいろいろな考えを持った人間がいるということです。その中でも東と西との和睦をよく思わない者たちの仕業でしょう。呪符つというのは陰陽道、ネギ先生から見たら日本独自の魔法になりますね。その中の一つの呪術なんですが……このように紙に呪力を込めて式神を呼ぶ式符にしたり、呪術発動の媒介したりする方法です」

そう言つて脇に置いていた札の束を差し出す刹那、物珍しげに手に取るアスナが掲げるそれには見慣れない漢字を崩したような字と記号が描かれていた。

「へ、じゃあこの紙であのお猿みたいのを呼び出せるの？」

「ああ、それは式返しの結界用の呪符と札の認識を逸らすための呪符です。私も剣術の補助程度に納めてはいますからこの程度は…まあ、私が使えたとしても式神というのは術者によつて式にする容姿や力も様々ですから、あの小猿は術者独自の物ですね」

「ほうほう、じゃあアキラの姐さんもなんかそのオンミョウドウの技つてやつを使えるのか？」

「あ、私もどちらかといえは魔法より気に向いているらしいんだけど、残念ながらお札を使った呪術はまだ習つてないんだ」

「まあ、敵が呪符使いやそこらの剣士なら問題はないのですが…神鳴流が付いているとしたら厄介ですね」

「え？刹那さんも神鳴流ですよね？」

「確かに私も神鳴流の技を使いますが、神鳴流というのは元々京を守り、魔を討つために戦闘集団です。それに神鳴流は関西呪術協会とも古くから密接に関わっていますから呪符使い等の前衛に加わることが多いんです。もし彼らが今回の敵側に着いているのなら非常に厄介と言わざる終えません」

「じゃ、じゃあやっぱり神鳴流は敵じゃないですかっ」

「はい……私は西から東に移った私は彼等からみたらただの裏切り者です。…麻帆良に移ったのは確かに長からの任務です。ですが私の望みはこのかお嬢様をお守りすること、後悔はありません。私は…お嬢様をお守りできれば満足なんです」

「よし、わかったよ桜咲さん！」

「え？」

刹那の話に感動したのかどうかは知らないがバシバシと背を叩く明日菜、それに分譲するように敵の襲撃の阻止に燃えるネギ。結局その後はネギが外を回り、明日菜達生徒が旅館内を警戒することになった。

「ではアキラさんには…」

「私だけ除け者ってのはなしだよ」

一人班の違うアキラにさきに部屋に戻るよう促す刹那の先を制する彼女に一同笑いが漏れつつもその場は解散となった。

刹那達と別れて少し、自室に戻ったアキラは浴衣の懷にしまった形紙を取り出す。

長方形の札、神社であるような札より厚めにできているそれは念話を使えないアキラに刹那が緊急時の連絡用に持たせてくれた物だ。

「……………（結局、聞けなかったな）」

アキラが今思い浮かべているのは先ほどロビーで刹那と話している時に聞いた幼馴染の木乃香との事だ。

あの時はネギ達が来て途切れてしまった。だけど今思えば彼女は話しづらいような表情をしていた。いや、その前の昔話ですら話すか迷っていたのだからその先の話が詰まるのは理解できる。

アキラは自分がそこまで聞きたがりではないと思っている。聞かれたくないこと、話したくないことがあるのは人として当たり前だ。それはわかっている。わかっているが、友人として知りたいと、力になってあげたいという気持ちに歯止めが利かなかった。

溜息をつきつつベランダから振り返った室内は静かだ。

それもそのはず、彼女の班員である友人たちは真名を除いて皆酔いつぶれている。その真名は一応に床には就いているがおそらく起こそうとすれば起きるだろう。だが、特に用事がない今それは忍ばれる。

結局、ロビーでの一件が頭をよぎって寝るに寝れない彼女は手持無沙汰に札を片手に物憂げに景色を眺める以外にすることがなかった。

そんなふうには時間を持って余したアキラはふとものは試しにこの符を使ってみようかと考えた。それは暇に託けたおしゃべりであり、先程の事をそれとなく謝っておきたいという彼女の心の現れだった。もちろん緊急用にもらったもので刹那は何故今念話などしてくるのか聞いてくるだろうがもしもの為に試しに使い方を実践しておきたかったと言えば彼女も起こりはしないだろうと言いつつ自己完結をする。

「これは…確かこう…」

取り出した符を額に当てて会話すべき相手の事を思い浮かべる。慣れないうちは相手の事をイメージした方が念波が届きやすいのだそうだ。

そうして声をかけようと一瞬間をおいた次の瞬間、自身の声以外の者が思ったよりもクリアになって頭に響いた。

『アキラさん！緊急事態ですっお嬢様が攫われました！！』
「え！？」

その声の内容に理解が追い付いて驚くアキラ。
木乃香が襲われたのは班別のお風呂の時間、あれから何時間も経たないうちにもう仕掛けてくるのなんて思わなかった。

（いや、今は反省なんて後回しだっ）

後悔の念にとらわれるもそれは一瞬で振り払う、今は一刻の猶予もないのだ。

アキラは玄関までかけて靴を取り出した後、履きかけた足を止めて

部屋の中へと引き返す。

「今どこにいるのっ?」

『説明は後です!今旅館を出るところですが、アキラさんは後から追ってきてください、今式を飛ばして…』

「わかった!ちょっと待ってて、今降りるから!」

『いえ、今はあまり時間は…』

おそらく時間がないと言おうとしたのだろうそれはすでにアキラの耳には入っていない。

なぜならその手に持った札は右手に固く握られており、彼女の体は軽い浮遊感の後に重力落下を始めていたのだから…

「……っっ!」

「聞こえていますかアキラさんっ……ってえ?」

視界の端で驚いている刹那達の表情がうかがえる。

だがそれはそうだろう、普通人間が自分の上から降ってくるなど想像もしない。

「っ!…お、お待たせ」

強化した身体は修業の成果か、二階以上の高さから落ちた衝撃を見

事に相殺していた。が、やはり実際に降りてみると緊張が違う。鼓動が速くなるのを隠して立ったアキラはそのまま後ろにいる二人のクラスメートに向きなおる。

「な、な、なな」「

「な?」

思わず聞き返すアキラに明日菜は声も出ない様子だったがその前に刹那が割り込むことで事態を無理やり終結させ、今は早く追わなくてはと促す。

どうやら襲撃者の向う先はわからないが木乃香の気を辿れるということでは刹那を先頭に一同は駆け出した。

道行く途中、小猿に襲われていたネギを回収して先ほど大きな猿の着ぐるみを着た女の人が木乃香を抱えて去って行ったと情報を得た彼女らは再度追跡を開始する。

途中、アキラとネギに事の経緯を説明する刹那と明日菜。

要約するところだ。刹那はその時間館内を見回っていた。が、敵はすでに部屋の中に侵入していてトイレに入った木乃香を人知れずさらっていったのだという。

「油断しましたっまさか修学旅行中に攫うなどという暴挙に出るなんて」

「じゃあまさか向こうははじめから近衛さんを？」

「おそらくは……あわよくば親書と両方を、ということも考えられますが」

「って、ちょっと二人とも！なんか事情は知ってますみたいな雰囲気です話してないで私にも説明してよっ」

アキラは木乃香が関西呪術協会の中で重要視されていることを知っている。むろん、彼女が強大な魔力を秘めていて高い潜在能力を有していることも、

「じゃあなに？このかはその協会同士のいがみ合いの為に襲われたってこと？」

「そういうことです。」

「あっ！いました！あそこ、駅に逃げ込むみたいですよっ」

「っ！逃がすか！！」

「あ、刹那さんっ」

駅に逃げ込む巨大な猿の着ぐるみの後ろ姿を見て一人速度を上げる刹那を明日菜たちは慌てて追う。

しかし、駆け込んだ駅は騒動の割に物静か。それもそのはずで駅には人払いの呪符が所々に貼ってあって一般人は近づけない、つまりこれは計画的犯行ということだ。

「ほんま、しつこいやっちゃな」

「さて、電車の中じゃもう逃げ場はないぞ！」

明日菜たちが刹那に追い付いて電車に駆け込んでみればそこには木乃香を抱えている敵と刹那が対峙している。

確かに狭い電車内は他の左右からの挟撃や後ろからの挟撃がない分前面に注意を払えば事足りる。だが、見方を変えれば動き出した列車は動く監獄だ、この場で退路のない今不利なのは戦力的に相手の方だ。

「そう言っんを思慮が浅い言っんよ…おふださんおふださん、ウチを逃がしておくれやす」

そういつて笑みを浮かべる敵は懐から一枚の札を取り出す。

それを見てあわてたように飛びかかる刹那、だが、あと一歩でその剣が届くかという距離で敵の女は既に術をなしていた。

「なっ！」

札から流れ出る大量の水。さながら鉄砲水というほどの水量を吐き出し続け、辺りは一瞬にして水に覆われてしまった。

(くっ、いきなりこんな大量の水を…はっ！ネギ君！！)

前方から押し流されるネギをアキラは空いていた手で掴みあげる。

それは偶然の出来事だった。駆け込んだ皆に対して比較的後方に位

置いていたアキラは迫る水に僅かに思考する時間を得ていた、だからそここうして皆より早く手近な手摺りにつかまって流されるのを避けることができた。

（この水量じゃネギ先生の魔法は無理、刹那さんの剣も…たぶん無理か）

後ろを確認すると流されたパニックからまだ脱し切れていない明日菜と刹那、水を正面から直撃したはずの刹那だったが幸い怪我などはしていないようだ。しかし、このままでは溺死する。早急にこの状態を打破しなくてはならない。

アキラは右手で支えていたネギの手を手すりにもっていき、しっかりと握らせる。

いまだ流水は続いているようだが最初のころに比べればそれに勢いはない、もともと泳ぐことに関して言えばこの中で誰よりも得意とする彼女にとってあと数mもない距離を泳ぐのはわけなかった。

（札は……だめだ、私じゃ破れない）

そもそもどういう原理か、この水の中でも変わらず放出を続けているそれは高度な術式で編まれているのだろう。当然ながら呪術の心得がないアキラにとってそれをどうこうするにも手段がない。

ならと彼女は次の行動に出る。

水中に固定されたように浮かぶ札はそのままだが後方にスペースがある。彼女が向かったのはそこで、この場においてもっとも流水の影響を受けない位置だ。

もちろん手で開けようにも水圧で重みの増した扉は引こうにもびくともしない。

(ごめん、緊急事態だから…)

心の中で謝ったアキラはそのまま水泳選手が水中でターンをするようにドアに両足をそろえ、両手を床に添える。

水中でいくらかもがこうと人というのは水の抵抗の前に本来の力が発揮できないのは常識だ。が例外として、競泳などで選手はターンで加速を得るために壁を蹴る。これは水を介さず接地面を得る事で純粹な力を加えることができる。アキラがとる体制はまさにそれだ。が、いくらアキラが水泳部エースだったとしてもステンレスのドアをけりぬけるかと言われれば心もとない。

水中で壁やガラスなどを割ることは物理的に困難だ。

だが、忘れてはいいないだろうか？

それは海中などの完全に水に浸った状態であり、ドアの向こうには空気がある。

そして何より…

(せ のっ)

気の強化が可能となったアキラの脚力は常人のそれをはるかに凌駕している。

「あれ
」

瞬間的に脚部に集中された気は弾頭が着弾したかと思わせるほど衝撃を与え、ドアはただひしゃげるのみだ。
中に詰まっていた水は空いている隣の車両へと猛烈な勢いでなだれ込み、敵ごと押し流す。

「アキラさん…」

「さ！刹那さん、追いかけるよっ」

見ればいつの間についた駅へと到着したのか、敵はすでに外へ出るべく行動をおこしていた。

呆ける刹那を促し彼女たちは到着した駅へと逃げる敵を追いかける。

S i d e : N e g i ・ S p r i n g f i e l d

『契約執行180秒間、ネギの従者』神楽坂 明日菜』！！』

追い詰めた敵は長く続く階段の上にネギ達を見下ろすように立っている。

カモのアドバイスで従者である明日菜のアーティファクトを呼び出したネギはそのまま彼女に強化をかけた。

「桜咲さん、大河内さん、行くよっ！」

「はいっ！」

一人勢いよく先に駆けだした明日菜に続くようにその斜め後ろを刹那とアキラが駆ける。

ネギは後ろに下がって機会を窺う。もともと魔術師であるネギに接近戦は向かない、エヴァンジェリンとの戦いでそれが身にしてみている。彼は自然と魔法使いとしての役割を果たすべく後衛に努めたのだ。

「そのバカ猿女

ッ！このかを返しなさ

い！！！」

「くっ、しつこい人は嫌われますよって、『猿鬼！熊鬼！』」

三人がかりでは前衛のいない今は不利、女は懐から取り出した一枚の符と傍らに脱ぎ捨てた猿の着ぐるみに呪力を通して投げつける。

「な！？これ着ぐるみじゃなかったのっ」

「式神だよ、たぶんあいつの前鬼後鬼だ！」

いきなり現れた熊野巨大なぬいぐるみ、猿の着ぐるみとともにそれが突然動きだしたら流石に気味が悪いだろう。しかしこの式神、打ち込んでみれば意外に手強い、見た目と反するその力に歯噛みする。

その姿に笑みを深くする女術師、だが彼女は失念していた。

己の式が押さえているのは少女二人でしかなかったことに。

「このかお嬢様を返せ　　っ！！」
「な！抜けられてたやとっ」

笑みが驚愕に染まるその表情で振り向くそこには既に刀を振りかぶった刹那の姿があった。

女は知らない、事前に打ち合わせをしていた刹那達は変わり身の式符で模った刹那を明日菜たちとともに突撃させ、気を取られているすきに彼女は背後に回り込んでいたのだ。

そしてうまい具合に術者が式神を呼び出したタイミングも完璧に見事に隙をついて見せた。距離もタイミングもすでに気付こうにも術者には絶望的な距離、そう、ネギ達の作戦勝ちだ

次の瞬間までは……

「え〜い」
「な！？くっ！」

背後から忍び寄った刹那に対して突然の襲撃者は隠すことなくその

気を全開に突っ込んでくる。
その手に持った刀が敵を捕らえる前に刹那は突然の乱入者に弾かれてしまったのだ。

慌てて受け身を取る彼女には焦りの表情が窺えた。それもそはず、

「どうも〜、神鳴流です〜。おはつに〜」

「お…お前が神鳴流剣士…?」

「はい〜?月詠います〜」

間延びした喋り方からはまるで想像もつかない、だがその相手は紛うこと無き神鳴流の剣士だったのだから。

物腰も一見ふざけているのかというほど鈍い、が、一度剣を交えれば烈火の如く攻め立てる。皮肉にも刹那さえ苦戦させるその姿は彼女が神鳴流が厄介であることを証明していた。

「ざーんがーんけーん」

「くっ」

「刹那さん!」

「兄貴、姐さんたちを助ける前にこのか姉さんだ!」

「うん、わかってる!」

自分の後衛、その役目は補助と確実に技を決めて戦況を好転させること。悔しいがこの状況では機を窺うことしかできない。

「桜咲さん！っこのお！！」

受ける、責める、避ける、受け流す。そんな攻防を繰り返す刹那を心配した明日菜たちだったが自分達も戦況的には目の前の敵に苦戦している。一層歯がゆい思いにとらわれるにも目の前の相手をどうにかしなくてはならない、見た目可愛らしくも憎たらしいそれを睨む明日菜。

が、次の瞬間信じられない光景が起こる。

何と再度魔力をこめた明日菜のアーティファクトが猿に当たるや否や途端に紙に戻されたのだ。

「な！ウチの猿鬼が送りい返された！？」

「よしっ！これで……」

「しまったっ………な　んてな」

大猿を消し飛ばして振り返った明日菜の目に映ったのは驚き慌てる敵の姿ではなく、余裕の表情で小猿を差し向ける姿だった。

「な！何よこれ　っ」

「ホホホっ所詮は素人、この程度も対応できへんようじゃ底がしれますなあ」

高笑いして余裕に笑みを浮かべる女術者、確かに刹那の襲撃には驚いて見せたが、さすがに明日菜が責めるには荷が重かった。

だが、こうして笑い続けて見下す姿、人これを何とというか？
辞書を引くまでもないだろう。

『ラ・ステル マ・スキル マギステル』

人これを隙だらけと呼ぶ。

『風の精霊11人！！縛鎖となりて敵を捕まえる！！』
「ああっ、しまった！？ガキを忘れてた！」

「もう遅いです！『魔法の射手 戒めの風矢！！』」

「あひいっ！お助け」

慌てて身をかがめる術者、だが魔法の射手は誘導機能付きだ。そこに屈んだところで意味はない。

「なんや、やつぱ俺が来た方がよかったやんか」

「え？」

何度番狂わせがある夜か、ネギの放った一撃ははたして黒い影の襲撃に撃ち落とされ、隙をついたその攻撃は不発に終わる。

「なっ！風矢が…それに今の黒い犬は」

そして女の前に降り立つ二人目の乱入者、背丈はネギと同じ程度、だがあふれる雰囲気は戦士のそれだ。

黒髪に一对の縦耳を風に揺らせてネギを見下ろす目は非常に挑発的だった。

（あ、新手！不味い…刹那さんも手一杯だしここで敵が増えたら逃げられちゃう！）

「やっぱり西洋魔術師は大したことないな」

「なっ、小太郎！どうしてっ」

「あー、説教なら勘弁なー千草ねえちゃん。札の回収ならあの新入りがむこうてるし、こうして助かったんやから結果オーライやる？人払いだけさせられてじっとしてるゆうんはどうも性に合わんねん」

（どうする…味方は全員手があかない、この状況で二人も相手にできるのか、僕が？）

「ま、女殴るんはもつと性に合わんから俺はあのチビの相手でも…」

（いや、やるんだっ“立派な魔法使い”なら、父さんならこんな状況でも全体にあきらめない！）

「っしやあ！いくでチビスケっ！」

「くっ、来い！」

杖を構えなおして迎え撃つネギ、駆け降りる敵の少年はやはり前衛タイプなのか小細工無しに拳を振りかぶる。術者が拳士と戦う際は拳士を近づけないよう戦うのがセオリーだ。だが、首席卒業とはいえネギにそれをなすのは少々荷が重い、握る手のひらに汗を感じつつも少年はそれを振り払うように高く杖を掲げた

side:out

「ホ　　ホホホホ！所詮ガキ小娘じゃこの程度おすな」

女は眼下の光景を見下ろす。

思わぬ誤算で小太郎が加勢に来たのは予定外だったがそれはうれしい誤算という部類だ。神鳴流剣士は同門の相手に身動きができず、その他女子中学生は自身の式神がうまく足止めをしている。つまりは今彼女は完全にフリーな状態。ここまで誤算続きだったが最後に計通りに軌道修正できてみれば何のことはない。

「…ほな、ウチはのんびりとお暇させてもらいやす…」

木乃香を抱えなおし一人立ち去れべく踵を返す。その足取りは軽く、すでに先ほどまでの邪魔に怒っていたのはまるでうかがえない。

「つとなんやこれ？こんな所に邪魔やな、ゴミか…」

いざいかんと階段に行く先にその足が何かにつまずきかける。見てみると大きな黒い物体が寝そべっている。

気が緩んでいた彼女は特に気にせず邪魔だとそれを蹴りやる。が、ここで彼女はギョツと目をむく、黒いそれがいきなりうめき声を上げたのだ。

「ぎもじわるい…」

「はっ？」

（一般人！？なんでこんな処に！）

「あ、お姉さん売店の人？ちょ　どよかった…駅の中この時間なのに売店に人いなくて…」

彼女が考える前に顔を上げたのは小さな少年だった。顔を真っ青にしていたその表情は本当に苦しそうで一瞬手を貸してしまいそうになるも肩に抱えたその重みが踏みとどまらせた。

「ようしらがかにんな、見られたからには仕方ありません、眠って…」

「お前がな……」

「へ？」

ともすれば結局彼女は気が抜けていた、油断していたということだ。

駅にいた人間「一般人

この図式は普段ならまちがいない、今も後ろで戦闘を繰り広げているその他大勢は確かに厄介だったがもう応援がないと思うには早計だったのだ。

「ったく……こっちは乗り物酔いで気分最悪だったのに、何でこういうのに縁があるかね」

「っ！誰やつ、あんた何者や！！」

顔に似合わず乱暴な物言いの少年を蹴られた衝撃に痛む腕を背に隠して呪符を構える女。
何ともお決まりなやり取りではある。

「は ……誰かって聞かれたらそりゃ答える主義だが…っど、今は肩書が違ったっけ？」

油断なく構える女に対し少年は顎に手を当てて思案顔、一瞬ふざけているのかとも思ったがにじむ雰囲気が己の身を固くしている。

「あえて言うならあれだ、学生…かな？」

返す回答ににやりと年相応の笑みを浮かべる少年。
女はその表情に空ざむいものを感じつつも相對したままだった。

取立26回目　〜襲撃者と乱入者、遅れてやって来た先生は乱入者〜（後書き）

はい、そんな感じでやっと主人公？が登場しました！出番はまさにワンカット！漫画で言うならおそろく1、2ページというところでしょうか？いや、ほんと出番のない…

駄菓子菓子！次回は大活躍…させるはずなので、どうぞご期待ください（笑）

さてはて、そんな26話でしたが、うーん、戦闘シーンも久々に書く描写が統一しにくいですね、どうも自分はまだなれませんが（苦笑）その他今回は出番の多かった？ネギ先生ですが…エヴァ編に比べれば出番は増えますね。しかし、小太郎まで登場させてこの先どうなるのか…

まあこの先はあとがき（続）か本篇の次のお話をお待ちください。

では今週のあとがきもこの辺で、それでは再見ッ！

取立27回目　く救出と成功の後に。彼と彼等の溝と壁　（前書き）

はい、間をあけてまして投稿してみました27話。

今回もちよつと多めなボリュームですがご容赦を（汗

ああ、もっと編集力がほしい…ってこれ前にやったような…

まあともかく本編優先で続きはあとがきに、それではおまたせしました？

『副担任は借金教師』27話、どうか最後までお付き合いください。

取立27回目　く救出と成功の後に。彼と彼等の溝と壁

場所は変わってここは麻帆良学園女子中等部校舎の学園長室。

その場には部屋の主である近右衛門、学園長である彼に背を向けたまま窓辺で煙草を吹かすタカミチの姿があった。

「……いいんですか、本当に……って、もう行ったしまった後ですけどね」

「さての、それは君も、いや、君達も納得して送り出したのではないのかの？」

確かに彼は試験をパスした。

まあそんな中でガンドルフィーニが最後まで反対だったのが印象的だったか。そういえば以外にも葛葉が賛成派だったのも驚きだった。

「……まあ、そうなんですけどね。彼が行ってくれるのは心強いですし、良い悪いを含めてあの子の手本になると思います」

思い返すその時の出来事、彼は試験が終わるなりそのまま出て行った。合格するのが当たり前のように用意していた荷物を背負って。

合格にという事実にはタカミチは不満はない、だがそれでも言葉を切る前に「だが」と、その決断に待ったをかけたくなるのも事実だ。彼の試験結果は1人を除いて賛成、結果だけ見れば慎重派か、あるいは反対派の一人が反対しただけ。だがもし、ガンドルフィーニが反対していなければ待ったをかけたのは自分かもしれない、そう今でも疑問が残るのだ。

あの去り際に交差することのなかった瞳、すれ違うまで己に一瞥もくれなかった彼の眼を見た時の印象は今思い出してもぞつとする。

「彼も……いえ、今頃京都に着く頃ですか」

彼も変わった

そう言いたかった言葉を飲み込んで話題を逸らす。彼が何に悩んで決意したのはタカミチは知らない。あの夜の事は学園長と当事者を含め一部の者達だけの出来事、事が事だと判断した学園長の配慮である。それは暗黙の了解として関係者間に伝わっているし自身も例外ではない。

それに数か月職場を共にしたとはいえそれで彼の内面まで知っているというほどおこがましくもない。

思えば、彼は自身の事を話す方ではなかった。それを気にするタカミチでもないし、仮に話そうと話すまいと友人でいたいと思っている。

しかし、実際に彼の事について全く知らなかったというのは思ったよりもショックが大きかったらしい。自分自身驚いている感覚にこれでは元担当教員として失格だなと苦笑気味に乾いた笑いが漏れそうになる。

「ここはどうも辛気臭いな、こんな所で爺と二人で話し込んでいるとその内中身まで老けるぞ？ええ、タカミチ」

「エヴァ…」

いつの間に入ってきたのか学園長室の重厚なドアを背に立つ童女の姿、彼女が真祖の吸血鬼にして、彼の名高い悪の魔法使いなどそれが思おうか。

そんな彼の心音を知ってか知らずか不敵な笑みを向けてこちらに近づいてきた彼女は応接用のソファーにどっかりとふんぞり返る。

「彼に何を仕込んだんだい？」

「む、仕込んだとは人聞きが悪いな。“アレ”はあいつ自身が自分で選んだんだよ。実際その方が効率的だったしな」

「それにしても意外な選択だったと思うけど。まさかあの期間で戦闘スタイルまで変えてくるとは思わなかったからね」

「時間などどうとでもなるさ、それはお前が一番知っているだろう」

「まあ、確かにね……」

確かにタカミチは修行の為、同級生でもあったことからエヴァンジェリンの別荘の事を知っている。件の彼の失踪も大方予想はついていたしエヴァの所にいると知ってはどこか安心もしていた。だが今はそんな自分を殴り飛ばしたい気持ちだった。

戻ってきた彼に以前の面影がまるでなかった。何を決意したのか、何を思つてその場に来たのか、あるいはあれが彼の仕事の顔なのかもしれない。いずれにしろ友人である筈の自分は何もできなかったと暗に示されているようである。あの時の記憶はあまりいい印象がない。

「ま、確かにいきなり変えると言つたときはついに馬鹿が極まつたかと思つたが、ああして仕上がつたんだ、問題はなかるう。それにいざという時の備えはいくつか授けてある。流石に行つてすぐ重体で帰つてこられては私の面子にかかわるからな」

「……彼に何があつたか、君は当事者だつたよね」

「それに関しては幾らお前でも言えんな。いや、たとえ誰であろうとあやつ自身が良しとしない限り語る事はない。もつとも、そうなる前に奴の口から語られるか、抵抗の末に奴がこの学園を去るかのどちらかだろつがな」

彼が抱えているのはそう言う業のものだと彼女は物語る。

決して安いものではなく自身が語るべきではないと。

「ずいぶん肩を入れるの……面倒をみているうちに情でも移つたかの？」

「さてな、少なくとも私は奴の味方でも敵でもない、ただの理解者
な」

珍しく近右衛門の物言いに食いかからない彼女に男二人は肩透かしを食らったように心の中で顔をゆがめる。

そんな彼らを特に気にした風でもなく、エヴァンジェリンはただ何も無い空間を見つめる。それはまるでこの部屋に見えない第三者がいるようで、彼女はその人物と対面している。そう錯覚してしまうほどに彼女の瞳は真剣だった。

「……悩んでいようが何をしようが時間は無情だ……いずれ、答えを迫られさ」

呟いた言葉や残念ながらタカミチ達の耳には届かない、だがきき返せもしない雰囲気に出ずただそのまま時が過ぎる。

そんな中でタカミチは彼女の顔に悲しげな表情を見た、そんな気がした。

「まったく……こっちは乗り物酔いで気分最悪だったのに、何でこういうのに縁があるかね」

「っ！誰やっ、あんた何者やー！」

少年は起き上った拍子に落ちたのだから帽子をその黒髪を覆い隠すように目深に被る。

黒で統一された服装に僅かに見える白い素肌、一見すると烏をイメージさせるような出で立ち。

その姿に呪符使いの女、千草が感じたような幼い印象はかけらもなく、背格好を除けば熟練の戦士のように蹴り飛ばした彼女を油断なく見据えている。

「は……誰かって聞かれたらそりゃ答える主義だが……っと、今は肩書が違ったっけ？」

口調こそふざけたようにとれる。だが、背に伝う嫌な汗の冷たさが己に油断は許されないと本能が告げている。

態勢を立て直すべくゆっくりと立ち上がる彼女に何をしてもなく結局眺めるだけに終わった少年は顎に手を当てて考え込むように口元をゆがめた後、簡潔にただ事実を確認するように告げた。

「あえて言うならあれだ、学生……かな？」

答えを言えた事に得意顔になる年相応の子供のように笑みを浮かべる少年。

その、あまりにこの場とかけ離れている笑みに女は動くことができずにただ一歩後ずさった。

「…学生？子供はもうお家に帰る時間ですよって」

「そうなの？何か面白い事をやってるみたいじゃない。関東の下町じゃ喧嘩は華だなんていうみたいだけど、いいよね雑ざつても？」

「はっ！調子のつてると怪我しはりますよって！来なはれっ」えん…」

次の瞬間の光景を誰もが予想せずその音の意味に皆停止する。

818

ネギ達は突然現れた少年をいぶかしむも味方だと認識していた。見慣れない風貌の少年は確かに誰とて覚えはないがこうして敵である千草を足止めしてくれる事は何より助かっていた。だから彼等は再度力を振り絞って目の前の明確な敵を倒すべく構えなおした。

対して千草達は新たに現れた乱入者に撤退を考えるも計画を強行する。

現れた人物は少年でまったくの非武装、何か隠し持っているかもしれないが仮にも千草とて術者として高位の身だ。皆それなりに信用しているし役割をこなすべく今は目の前の相手に集中するべきだと思った。

そんな誰もが現れた乱入者を視界の外に追いやった瞬間、その場に一つの“銃声”が響き渡ったのだ…

「……………」

皆が一様に振り返った先には倒れ伏す千草の姿とそれを冷淡に見下ろす少年。

何があったと理解を追いつこうとして思考が停止するネギ達、一方、狗族である小太郎や戦場を経験している刹那や月詠はその場に硝煙に血の臭いが混ざっていない事にいち早く状況を把握する。

そして少年はすでに女ではなく視線を眼下の戦場へと移していた。

「…学生？子供はもうお家に帰る時間ですよって」

「そうなの？何か面白い事をやってるみたいじゃない。関東の下町じゃ喧嘩は華だなんていうみたいだけど、いいよね雑ざつても？」

つい、いつもの調子で口を出る軽愚痴に苦笑しそうになるも少年はそれを億尾も出さない。

元々この口調も緩い構えも自分のスタンスであってパフォーマンスではない。そこに必要以上に遊びは混ぜていないし、思考は既に別の事を捕らえている。

戦場において彼は思考を常に冷やすように心掛けている。それは学んだ結果であるし自身の中でそれが最優先事項だということも理解している。

挑発、嘲り、罵倒もしかり、探る言葉の選択肢を経験によって選択するそれは反射の域に近い。

つまりはそこに思考を介さない。言葉を拾い、思考を広げるのは頭の役目だが、

「はっ！調子のつてると怪我しはりますよって！来なはれっ」えん

…」

故に敵が懐に手を入れた時には既に自身は後手にして第一工程を完了しており、両手が握る冷たい感触の得物は既に撃鉄を下ろした後だった。

事の始まりから皆が目を向けたその瞬間までに要した時間はその実たったの4秒。

そのわずかな時間にして彼は敵の一角を落として見せた。

敵の構えを感知すると同時に相手の懐に飛び込み、叫ぶ相手が見失った己に言葉を詰まらせかけたのを確認して得物の安全装置を解除して構えるまでに一秒。

左のそれが相手の取り出す札を撃ち落とし、呆ける彼女の口に右の銃身を捻じ込むまでに二秒。

あまりの勢いに転倒する女に馬乗りになり、撃鉄をゆっくりと上げる。当然抵抗しようとする女に対し少年は冷徹に見下ろし引き金に指をかける。ここまでで三秒。

「じゃあね、お姉さん」

そして告げる言葉とともに引き金を引き、失神した女を尻目に立ち上がるまでに四秒。

立ち上がる少年に敵を倒したという達成感もなければ勝利の優越すらない、素早く場を見渡した後、その目は倒れた呪符使いの式神と戦う女子学生二人に向けられる。

式神とは紙等の媒体に動物や人を模ったものに力を吹き込み操ったり、鬼等の妖怪を呼び出す術の事を言う。目の前の式神を見る限り明らかに前者であることは間違いない。

だが、えてしてそういう類は術者が死亡、または気絶してしまえば元の式符に戻る。それが戻らないという事はそれなりの術式を編まれた式神ということであり、伏している女術者も実力が無いわけではない。この場合は単に少年がそれ以上の力を持っていた、あるいは間の取り方がうまくいったと言うだけの話。

「ちっ、自律型か…その女」

「あ、アタシ！？って、キヤアッ！」

舌打ちした彼はかける言葉のように投げやり手に持つ得物を上げた後、狙いをつけたのかという程の速度で連射する。

「…邪魔な小猿共はどかした」って言うってから撃ちなさいよ！！当

たつたら危ないじゃないっ」…そこで倒れてる娘を連れてさっさとここから避難しろ」

「む、無視…無視なのね……」

確かに小猿は皆例外なく紙に戻っている。だが、あんな風に躊躇無く撃たれては明日菜が文句を言うのも無理はない。

もともと、少年にとってそれらの雑音はどこ吹く風、すでに次の手順を模索する彼の眼は眼下の光景しか見ておらず、明日菜の主張は右から左だ。

「……って呆けてる場合じゃないわ！このかつ」

切り替えが早いのは明日菜の長所である。皆から馬鹿などと言われることもあるが彼女は物事全てに疎いわけではなく、むしろ決断という事に関しては歳以上のものがある。そして何より迷いが無い。

いきなりの乱入者の指図に従うというのは癪ではあるが、確かにこの場で友人を放っておくのはよくない。考えるよりも即実行と彼女は身を翻して木乃香の元へと走り出す。

そんな彼女の背後へと迫る小柄な影。

俊足の速攻、文字通り音もなく現れたのは先ほどまでネギを足止めしていたはずの少年だった。

ネギから木乃香に駆け寄ろうとした明日菜目標を変更した彼の選択は正解だ。計画の要が彼女の奪取である以上おめおめと奪い返され

るのは間抜けでしかない。

そして一瞬で距離を詰めた彼の速度は本物だ。一息に意識の外へかき消えて現れるそれに目の前で苦戦を強いられていたネギでさえ対応できなかつた。

そして木乃香へ駆けだしていた明日菜は気配に気付こうにも既に動き始めた身体は翻すこともかなわない。

獲った、そう確信した小太郎の一振り。

だが、彼は明日菜を止める事を優先したために失念していた。

その踊り場にもう一人の敵がいた事に…

「悪いけど、通行止めだから…」

「ッ!!」

とっさにガードをと腕を振り上げる。

が、上げたはずの腕は固いものに押さえられてビクともしない、そして首が目標を捕らえる角度まで回る刹那、彼は階段の上に叩きつけられていた。

次の瞬間に響いたのは一つの銃声。

小太郎がその音を耳にしてまず感じたのは肩を中心に身を引き裂くほどの熱、そして意識を刈り取らんとする強烈にして鮮明な痛みだった。

「が、あ　あ　あつ　クソが！！」

本来気で強化したはずの小太郎が銃で負傷することはまずない、だが相手は千草の式神を消し去った以上それは何かしら呪術・魔術を織り込んだ特製なのだろう。

しかし、小太郎本人はこの程度の痛みで挫かれるほどやわなつもりもない。

素早く撃たれた方とは逆の腕で振り払おうと腕を回す。

が、その先には既に敵は見当たらず、無理な体勢からの攻勢にバランスを崩した小太郎は踏鞴を踏む。

そんなバランスを崩した小太郎に黒髪の少年は躊躇無く背後からその両足に鉛玉を打ち込む。

バランスを崩した上での足への激痛、痛みに臆んだ彼の足はもつれ倒れ伏す。

「意外と丈夫だな、まあ急所は外して撃ったけど」

「へっそんななまっちょろいもんでやられるかい　グッ」

「そうか　だったらこれでご希望どおりかな」

そして響いた乾いた不快音。

普段ならそうそう聞かないだろう音、それは肉が切られたわけでもなく再度銃弾を穿たれたわけでもない。

骨が砕けた音だった。

「あ、あああああああつ

」

砕けた骨の破片がのたうつ度に中の肉に突き刺さる。

斬られるたなら止血すればいい、撃たれたならこらえず貫通させればいい、穿たれたなら塞げばいい。

だが、骨は折れたのではなく砕けたのだ。一度砕かれた骨は容易には再生せず、その細かい破片が神経を断ち切るかというほどの痛みを伝える。

そんな小太郎を見て、砕いた当の本人は無感情に見続けるだけ、そして蹲り動きを止めたのを確認した彼は小太郎に歩み寄り、もう一度足を振り上げる。

その顔に表情は窺えない。いや、目深に被った帽子に影になってはいるがその眼光は怖ろしいまでに光がない。

「まっ

」

彼の次に取った行動に待ったをかけようとしたのは誰だったか、し

かし声が届く前に動き出した足は止まらず振り下ろされ、見るに堪えない光景を想像してネギや明日菜達は目を背ける。

だが、変わって聞こえたのは金属のぶつかる甲高い音。飛来した小太刀を彼がその手に持つ銃で弾いた為だ。

「……………何の真似だ？」

「いや、ウチとしてはもう少し同門同士で楽しみたいとこやったんやけど…さすがにそれは止めなあかんやろ？」

不機嫌とわかる声で妨害を図った少女、月詠を睨みつける彼の表情は初めてそれらしい感情をうかがわせた。

「それで、一人でこの場をどうにかできるとでも？」

「いえ、いくらなんでも分が悪すぎますから、この場はお暇させていただけようかと」

状況は一对ではなく数だけなら5人、それも味方の内二人を無力化した目の前の人間を相手に挑もうなどと思う気は月詠とて更々ない。

「逃がすと思っているのか」

ゆっくりと遠回りに踊り場へ上がる月詠に対して彼は銃口を決して外さず一定距離を保つ。

状況的に見て彼女が不利なのは明らか、なのに彼が踏み出さないのは『神鳴流に飛道具は効かない』という事実を知っているが故だ。

「さあ、一対一やったら逃がしてくれへんやろっけど……しんがりはこの子たちにお任せします」

背に回した彼女の手に握られたそれらに気づいた彼が銃の照準を変えて打ち抜くよりも多く、それは次々と姿を現す。

階段を埋め尽くさんばかりの数の小妖怪の群れ、一体一体の力はたいた事がないとしてもその数は少々手間がかかる。

「ついでにお嬢様も……っと欲張りすぎはあきまへん」

妖怪の群れの壁に立ち往生する少年に月詠は木乃香を助け起こそうと傍に寄った明日菜の元へと足を向ける。

が、その場に降り立つ刹那が手に持つ刀でその場を牽制する。

さすがに今度こそ引き際かとターゲットを諦めた彼女は手近の妖怪二体に千草と小太郎を抱えさせて身を翻す。

「ほな、次の機会があったら今度はウチと死合いましょか。会えるんを楽しみにしとりますえ」

振り返ったまま手を振り飛び上がる彼女の顔は気安くまるでこの場の緊張感にそぐわないものだった。

そして彼女が立ち去ろうとするのを追おうとする妖怪たちを前に対応を余儀なくされた彼等は木乃香を取り戻すも襲撃者たちを逃がしてしまうのだった。

こちらに歩いてくる人を見て思わずネギは後ずさってしまった。

見た目体格は自分と総程度、日本人らしい黒い髪と顔を隠すためか帽子を目深に被り、その身なりは黒一色で統一されたレザースーツにジャンパーを羽織っている。正直背格好とあまりに合わない服装、だが目の前で起こった光景を後にするとそんなことは些細な事だと思いが知らされた。

助けられたら味方？

そんなものは結果論でしかない、敵の敵は味方なんていう都合のいい話は現実には早々ない。

「……あなたは何者なんですか……」

「ん？ああ、そっかこの姿じゃな。まあ、一度会ってるんだけどね」

歩み寄る足を止めて帽子をとったその顔は先ほどまでとうって変わって普通に笑顔を浮かべている。とても目の前で敵を殲滅して見せ

たように見えない、何処にでもいるような子供の表情。

そして警戒するこちらを気にせず君に手を伸ばしたその手に一瞬緊張が走るも次の瞬間髪色が脱色していく光景を見せられて啞然とする。

黒からブラウン、さらにどんどん薄くなっていき、砂色のそれに落ち着くとようやくその手をどける。腕に遮られて見えなかったその姿は先ほどより引き締まった頬、若干緩めだった目元がつまり上がった。そんな顔のパーツが少し変化しただけなのにまるで別人のようになつた彼の顔、それはネギ達にとって見覚えのある者で…

「あ、アハト君!？」

「音楽さん!？」

「「え?」」

固まる三人と一匹、若干一名が特に驚く事もなく見つめている。

「ああ、聞きたい事とかあるだろうがとりあえず全部後回しだ。木乃香を運ぶのが先だろ?」

呪術を使用したのかあれほどの騒ぎがあつたのに起きることのない木乃香、ちゃんと息も脈も正常なので眠り系統の魔術だろうとあたりを付けた音楽は皆に向き直って宿に戻ろうと皆に促す。

しかし、ほとんどの者が突然の事態に思考が付いていかずフリーズを起こしている状態。結果、刹那が事後確認を取るために今後の事を質問することになる。

「音楽さんはこの後どうするんですか?」

「生憎、今日は近場で宿取れなかったからな、話し合つのは明日つて……心配しなさんな、少なくともこの修学旅行中にいなくなることはねえよ」

皆の輪から一番外側にいたアキラに歩み寄り頭に手を置いた彼はそのまますれ違つように歩み去ろうとする。

「アハト君っ！」

そんな彼の背に再起動を果たしたネギが呼び止める。

無言でゆっくりと振り返つた彼の姿に先程の光景がよみがえつてすぐんでしまふ。正直何を言おうとして呼び止めたのかはネギ自身整理がついていない。だが、呼び止めた以上何か言わなくてはと自分の中から必死に言葉をくみ上げて紡ごうとする。

「あ、あの……その……さ、さっきのあれは、何であんな事をしたんですかっ」

質問というより糾弾に近い叫び

「さっきの……ああ、アレか。あれが俺のやり方だ、一応弾も急所は外れてるし骨折くらい、てか、そもそも殺してないんだから問題ないだろ？」

「な、いくら襲ってきたからってっ」

「じゃあお前はあの場で木乃香を助けられたのか」

彼の当然と言わんばかりの言葉に思わず叫び声をあげかけるネギの

それに音来の声がかぶさる。

先程の戦い、攻勢に出られてからネギ達は結果として打てる手の全てを潰された。そして己は戦士の少年に足止めされていいようにもてあそばれる。自分自身わかっている、女術者を捕らえるために“風の矢”を放って以降、自分はあの場で全く機能していなかったことに。

「敵に情けをかけるのは強者のみに許された行為だ：少なくとも、あの場で手も足も出なかったお前が言える言葉じゃない」

「あ、あんたっ！何もそこまで言わなくてもっ」

「事実だ、あの場で唯一拮抗してたのは刹那だけ、どう見てもギリ貧で木乃香を連れ去られるのも時間の問題だった：もしもの場合、お前に責任が取れるのか？」

彼が吐く言葉の一つ一つがネギの心を穿ち、自覚できるからこそ彼は反論もできない。

見かねて明日菜がその場に割り込むも事実という一言に二の句を断たれ、正論故の続く言葉に論破される。

そうして先ほどの空気が一転して険悪な空気が流れる場で誰もが言葉を発せずただ時間が過ぎる。そんな中、静寂を先に破ったのは音来の方だった。

「いや、言いすぎた……説教臭くなるとどうも駄目だな」

解散を促す彼は一人その場を離れ、その身体がぶれたかと思うと既にその場に姿はなかった。

一人その場で先程のやり取りを反復するネギは無意識に掌をきつく握り締めていた。

side:???

合流地点で一人静かに息をひそめていた彼はそこに降り立つ物々しい音に背を預けていた樹木の幹から離れる。

「これまた、ずいぶんと派手にやられたね…そんなに手強かったの？例の少年は」

彼の口は味方の容態を気にした風もなく、またその結果に特に関心もないように問いかける。

「あはは、うん…言い訳させてもらえるんやったら思わぬ邪魔が入ったというやつで」

問われた少女も下ろした仲間を確認しつつ歩み寄ってきた少年に答える。

少年と違って手早く処置を施すその姿に淀みはなく、迷いが無い。この辺は見た目に反して彼女が荒事慣れているということであるだけだが、両者に共通して今回の成果にさして関心がない風なのはど

うか、目の前で気絶している女性が知ったらさぞつるさい小言が聞けるだろう。

「邪魔？増援か何か？長の方が先に手を討ってきたとか？」

「さあ、そしたら千草はんが気付いてもよさそうですけど…そんな雰囲気じゃあらへんかったしな」

「ま、後々わかることだし、とりあえず今は彼女たちの治療を優先しようか…小太郎君は…ずいぶんと派手にやられているね」

容態を確認するまでもなく彼の状態はひどい、一応止血はしているようだが見た限りで流血箇所が5つ、さらに足の向きがあり得ない方向に曲がってしまったている。間接どころか腿の中ほどで曲がったそれは骨折の跡だろう。

「わかった、じゃあ彼女達は僕が運ぶから月詠さんは先にアジトに戻って治療の準備を、さすがに治りが早いつてもこれは後々響きそうだしね」

治療術心得があるとはいえさすがに骨を直すのには時間がかかる。それに自分達は人目につくのはあまり好ましくはない、いくら結界を周囲に巡らしているとはいえそれは一般人に対するもの、その道の同業者からすればここにいと狼煙を上げているようなものだ。

二、三必要なものと今後の事を伝えた後、彼は月詠を隠れ家に向かわせる。そうして一人その場に残った少年は周囲に気配がない事を確認し、倒れ伏す彼女の元に静かに歩み寄った。

「……………さて、彼女には先に確認しておくことがあったね」

一言、聞きなれないような言葉をつぶやいたそれはたったそれだけで効果を表し、気絶したままだった天ヶ崎 千草はゆっくりとその目を開く。

「はっ！…え？ここは…」

「やあ、おはよう天ヶ崎さん。気分はどうだい？」

「そ、そうや…ウチ、ウチあの時、あいつに銃で撃ち抜かれて…」

事態を徐々に思い出したのだろう。目に見えて顔を青くする彼女は声をかける彼の言葉にまるで反応もせず、次第にガタガタと震えだす。

「よっぽどその邪魔者が怖いんだね」

「あんたに何がわかるんやっ、あれはアカン！次行ったら殺される
っウチは…ウチは…！？」

（限界…か、やれやれ…もうちょっと使えろと思っただけどね）

『僕は君の味方』

「あ」

何の変哲もないはずの一言、それだけで喚き散らしていた彼女は大人しくなり、暗い瞳は一層その濃さを増していた。

「よっぽど怖い目にあっただんだね…でも失敗した以上またお嬢様を

攫いに行かなくちゃならない」

「いや、いややつ！あんな、あんなようわからん人間っウチは死に
とうない！もしあの時　　っ」

『落ち着くんだ千草』

首を振った彼はなおも錯乱しかけている彼女の目の前にその手を視
界を遮るように突きつける。

言葉とその動作に硬直した千草は物言わぬ人形のように大人しく、
彼の言葉通りに先程の状態がうそのように落ち着いていた。

「そう、それはこわかったね。でもそれじゃあ僕らの計画は叶わな
い、君の願いも叶わない。さてどうしようか？」

「そやけど、ウチは次あいつの前に立つ自信が…」

「そうか、なら発想を変えてみよう。嫌な事は忘れればいい、むし
ろそんな事は起こらなかつた」

「そんな事　　」

「できる。僕が君の嫌な記憶を忘れさせてあげる」

触れない距離を保っていた掌が優しく彼女の額に当てられ、ゆっく
りと降下していく。その動きに合わせるように瞼を閉じた姿はまる
で眠りに就いているよう。

「さ、一つずつゆっくりと思いだして、思いだすのは苦痛かもしれ
ないけどその先には一切の苦痛はない。……いや、今回の戦いで君
は彼に無様な負け方をし、プライドを傷つけられるほどの醜態を晒

す羽目になったその事実だけは覚えている……だけどそれイコール彼を恐れるということではない」

「ウチはアイツに負けた……けど……奴を怖がる必要ない……」

そんな彼女に彼は一言一言丁寧に呟き、その言葉が彼女の奥深くに沁み渡る様にゆっくりと確認するように繰り返す。

「そうだね、むしろ君は彼が憎い、あんな恥をかかせた彼を殺したいほど憎いんだ」

「怖くない……憎い……ウチはアイツが憎いつ」

そして言葉を受け取っていただけの筈の彼女はいつの間にか復唱するだけではなく言葉に感情が乗り始める。

幾つものつの暗い感情、『憎しみ』や『怒り』といったものを言葉にして吐き出す度に彼女の表情もも険しくなっていく。

「さ、落ち着いて……言葉を復唱してみようか、彼が『憎い』と。まずは簡単に心に大きく、広く響くようにそして言葉を呟く度にそれは君の中で揺るがない真実になる」

「あ……う………い」

「……い………いっ………く……」

やがて静かにぶつぶつと繰り返される言葉、まるで知らない言葉を自信のないように小さな音量でつぶやいていた彼女、だがそれはやがて膨れ上がる風船のように体積を増し、言葉と表情に力がこもる。眩く度に思い出す事。

元々憎しみから、魔法使いが嫌いでも今回の計画を進めた。

何日も何日も、それこそ月日が過ぎるのも忘れるくらい計画に没頭し、彼女が京都に訪れると聞いた時はこれは天命であるかと信じもしない神の事を信じかけた。

そうして計画を移した今日、うまくいきかけたそれは見事に瓦解する、たった一人の乱入者のせいだ…

その顔を思い浮かべた瞬間胸の鼓動が一つ跳ね上がる。

可愛さ余って憎さなんとやら、愛に憎がついて憎しみに変わる様にそれは紙一重なのかもしれない。

だって高ぶる気持ちと感情は初恋に震える少女の様にこそばゆく、こんなにも狂おしい。

「憎い憎い憎いにくい憎い憎い憎いにくい憎い憎い憎いにくいウ憎い……………」

まるでこの気持ちがあると錯覚してしまいそうではなか。

そう思ってしまうほどに彼女の心は一つの感情、一つの人物によって埋め尽くされる。

「憎い憎いにくい憎い憎い憎いにくい憎い憎い憎いにくい憎い憎い

「……」

呟くごとく彼女の表情は一色の感情に支配される。

終点の定まらなかつた瞳はその闇をより一層色濃く、呪詛を吐き出すように言葉を奏でる口は怨敵に咬みつかんとするほどに険しく、そして強すぎる感情は肉体の痛みすら置き去りにする。

そう、彼女はいつの間にか唇を噛みきっていた。通常なら拭うなり痛みに顔をしかめるところ、だが彼女はそれすら不要であるかのようひたすらに、それこそ血を呪いのように吐き出しながらつぶやき続ける。

もはや彼女の中で魔法使いへの憎悪など二の次になっていた。

そう、彼女は憎いのだ。

目の前に現れ、人の計画のことごとくを潰し、己の顔に泥を塗った人間。

魔法使いであるあの男が憎かった。

『私は彼が嫌い、憎くて憎くて殺したいほど嫌い』

「ウチはっあいつをメタクそに潰してやりたいくらいアイツが憎いッ！！」

そう答えにたどりつかされた彼女はまるで曇りが晴れたように晴れやかに夜空を見上げる。

全ての感情を置き去りにし、全ての事項を置き捨てて彼女は今その瞳で誰を思っているのか。

だが、まるでそれ以上の事に関心のない少年は彼女の状態に上出来だと一つの作品を眺めるように淡々としている。

そこにそれ以上の感情はやはりなく、再度上げた手のひらが彼女の頭上を覆うようにかぶさる。

「あ？……」

ゆっくりと次第に大きく頭を揺らされる千草、その表情は目覚めた当初の不安などかけらも見当たらず、母の腕の中で安心した幼子のようにその瞳をトロンとさせる。

「そう、それが君の新しい行動原理だ……さ、今は疲れたろう？今日はいこれで休むんだ、深く、深く眠りについて、君は明日の朝目覚める。そうしたら君は君の役目を全うするんだ。その男を殺すために……」

「ウチは………奴を………つぶ………」

次第に重くなる瞼にそれでも彼の言葉を繰り返そうとする千草。既に聞き取れないほどだったそれは彼女の中で確たるものとなったのだろう。やがて静かに寝息を立て始めた彼女を小太郎共々ゆっくりと宙に浮かせて彼は移動を始める。

「ふう、使えない人形ほど手間のかかるものはないね。まあ用心に越しておくことはないか……」

（イレギュラー、彼女もこれで結構実力はあるはずなんだけど……厄介だな）

彼は表情通りにこの夜の出来事に関心はない、ただ予定より手間がかかった。それだけであり、今後予想修正された未来も彼にとっては何ら興味のないことではなかった。

取立27回目　く救出と成功の後に。彼と彼等の溝と壁く（後書き）

はい、いかがだったでしょう？

ちよつと今までにないジャンルを盛り込まなくちゃならなかったの
で最後の方はちよつと急展開だったような（焦）

主人公もちよつと黒かさせていく流れなのでしょうっばなは飛ばして
います。いや、書いていて作者である私はそれなりに楽しく執筆し
ているんですけど、それが読み手に面白いと感じていただけの
別問題でして…

まあ、流れは置いといて！ようやく修学旅行編の1日目が終わろう
としています。

え？もう二日目だろうって？

いやいや、私主人公sideが弱くしてしまうくらいがあるんです
が、それを改善するために次回はちよつと頭に食い込んでいます。

まあメインは2日目の内容です。

しかしこの作品にしては珍しくネギ君をへこませてしまった展開…

【（注意）この作品は原作アンチではありません…たぶん…】と言
っておきましようか（苦笑）

毎度口調が変わる主人公ですが今回は子供姿なので全体的にそれっ
ぱい感じに、キレた感じやネギに語るシーンはちよつと雰囲気変え
てますが…どうですかね？うまくその辺できていましたでしょうか？

つと、長くなってきたので今回も続きはあとがき（続）の方で！

最後のあいさつを前に、本日は昨日更新の予定を一日送らせてしま
って申し訳ありませんでした。次回はしっかりと期限通りにやって
いきますので今後ともよろしくお願ひします。

それでは結局長くなってしまいましたがこの辺で、次回にまたお会いしましょう。

それでは、再見ッ！

取立28回目　く閑話、確認と許容と容認。誤解の深まる時く（前書き）

どうも、28話目の投稿になります。

えゝ今回は少々短めでお送りいたします「副担任は借金教師」、
どうか最後までお付き合いいただけるようお願いします。

それでは本編のほうをどうぞ！

取立28回目　く閑話、確認と許容と容認。誤解の深まる時く

そこに一人の少年がいた。

おおよそ少年とは形容しがたい服を身に纏い。

おおよそ少年とは言い難い雰囲気醸し出している。

そんな彼は一人、人目を避けるように体を引きずって街の闇を進んでいく。

時折、玉のような汗を額に滲ませて苦悶する表情は見る者に不信感と感を抱かせる。

だが、一つ奇妙な点を挙げるとしたら、彼は身体的にいたって健康体であり、外傷らしい外傷もないという事。

あるとすれば内面的な何か、対内的に病気を患っているとしたのならまず彼のような物々しい恰好で外にいるなど考えられない。もっとも、彼が病院脱走の常習犯であるのなら話は変わってくるが…

話を戻そう。

つまり、人通りを避けながら裏道を進む推定10歳前後の子供と言うのは明らかに普通ではなく、こうして夜の街を歩きさまよう姿は異常でしかなかった。

「　　っ　　っはあ　　……」

息苦しそうに喘いでいた彼の呼吸が急に静かになる。表情もうつて変わり、目を細めて息を殺すそれは狩人を彷彿とさせる、とても見た目通りの少年には見えなかった。

そんな彼の変化に合わせるように現れる来訪者。

これも特異な点を挙げるなら、彼女が近道をする為に裏道を駆けて来たわけでも、不正な取引で白と黒の御上に追われたやのつく方々でもない。

ふわりと音も無く現れたそれは、少年の頭上を飛び越して現れるといった現実の枠を殴り壊した、そんな非常識な現れ方だった。

周囲は裏路地にしては開けているとはいえ5、6階の建物が立ち並ぶ建物に囲まれている。

まして、真つ当な幼児幼女の良い子は寝静まるこの時間に人が振ってくるなどと誰が想像できよう。それともリストラされたサラリーマンとやらが絶望の淵に自殺、などとすれば話は簡単…のわけなないが、目の前で立ち上がる人影は明らかに健康そうであり、見る人から見れば我が目を疑いたくなる光景だろう。

「　刹那、か？」

そんな人影、もとい少女に少年はそれまでの秀囲気を霧散させて声をかける。

そしてまさか人などいないと思っていたのだらう少女は突然の声、それも見知った人物の声だと気付くと慌てて振り向いた。

「っ…って音来さん!？」

驚き声を発する少女に少年、音来はようつと片手を上げて軽く返す。その表情は先ほどまでの影はなりを潜め、額の汗も徐々に薄れてきている。

「「よう」じゃないですよ!いきなり現れて、何で何の連絡もよこしてくれなかつたんですかっ」

「あ、悪い…俺も来れるかどうか半々だったからな、いきなりの決定だったし…まあ、連絡手段が連絡手段として用をなさなかつたというか…」

驚いたのもつかの間、事態を飲み込んだ彼女がまず行ったのは烈火の如く彼に詰め寄る事。その血気迫るといっても過言でないような勢いは背に怒っていますと書いているかのごとくだ。

そんな彼女に言い訳じみてしまった彼が取り出したのは無骨なフォルムの携帯電話、表示されたディスプレイは文字を映さず、開いた画面は真っ暗なまま…つまり電池切れというやつである。

「っつて、それじゃあ携帯の意味がないじゃないですか!あれですか?私やアキラさんにさんざんレクチャーさせておいて携帯のバッテリーも読めないんですかっ?」

これにはさすがの刹那も呆れるばかり、先程の事態もあいまって火に油状態でしかなく、結果として言い訳どころか後ろが壁という事もあって退路のない少年は地面に正座、少女にそのままお説教されるという絵になっている。

「そ、それより、お前木乃香を旅館に送り届けるはずだろ？ネギ達はどうしたんだ？」

流石に怒られっぱなしでは割に合わない、とっさに浮かんだ疑問を口にして話題をそらそうとしたのだが、これがどうもビンゴだったようでとたんに言葉に詰まった刹那は何を思い出しているのか顔を真っ赤にしている。

となればこれも修行で比較的身近にいた成果か、音楽にはおぼろげに事態の予測ができてしまった。

というより前にもこんな光景を見た事がある。

「……………まさか、またお嬢様に迫られて逃げてきたとかじゃあ……………」

音楽の言葉に凶星と丸分かりな程肩をビクリと震わせる刹那。

実も何もないが、彼女は木乃香をクラスメイトや護衛対象という前に特別視しているくらいがある。それも護衛という観点からならまだいいだろう。だが彼女の場合は木乃香の存在が神聖化しているというか、一種の畏れを懐いている。それに恐れや惧れのように多様な関所が綯交ぜになって木乃香を避けてしまっているのだ。

これは護衛としていかなものだろうとは音楽も思うが結局は当人の問題、彼にできる事は当たり前障りのないアドバイスしかできる事はなかった。

「しかし、私には……………」

「しかしも駄菓子もないだろ、お前は木乃香の護衛なんだ。いい機会だからこれを機にもっと距離を縮める」

なおも言いごもる彼女に複雑な思いをお抱くもそれを億尾も出さずさらに言葉をぶつける

「無理には言わない。けど守る難しさはお前もよく知っているだろ」

他人を守ると言うのは簡単な事ではない。まして対象となる木乃香は裏の事情など知らないのだ、それが親の意向とはいえ危機感のない護衛対象ほど難儀なものはない。通常なら近辺警護と周辺警護の二通りに分かれるのがセオリーだ。

だが、この少年にはそのどちらにもつけない訳があった。

「あ、あの、それなんですけど…音来さんも応援に駆けつけてきてくれたという事ですし、明日からお嬢様の近辺での護衛をお願いしたいのですが…」

「……この際だからお前には言っておく。俺はこの修学旅行中、木乃香護衛にはつけない」

「え？」

「正確には護衛対象がな、…学園側の依頼は『修学旅行中の3-A全体の安全』でな、本来瀬流彦先生が当たるはずだったが京都は広い、まして生徒によつては県外に出る者もいるからどうしてもカバ―が効かない。もちろん敵もそこまでして生徒に危害を加えるとは考えられないけど万が一という事もある」

音来の言葉に理解が追いついていないのか呆けている彼女だったが彼は構わず続ける。

「知つての通り関東と関西の仲の悪さは根が深い、今回の襲撃者に呪符使いがいたことから協会縁の者というのは間違いないが敵の全容、規模が不明確だ。そんな時に護衛を、それも明らかに浮くような人間を付けるのは合理性に欠ける。少なくとも魔法先生だと知られている可能性のある成人体やこのクラスにまつたく関係のない幼年体のままでうるつくのはあまり好ましくない……」

麻帆良学園は過去これまでに不特定多数の組織、あるいはフリーの雇われ集団による襲撃を受けている。それを迎撃、捕縛するのが麻帆良の魔法使いの仕事の一つである。音楽はその任務上この迎撃に駆り出される頻度が高い、さらには襲撃側の組織に関西呪術協会の影があるという事が重要だ。事が事である故に両協会が激突するとはなかったとはいえ音楽の顔はそれなりに売れてしまっている。当然その人物に多少なりとも知名度があれば警戒される率も高まる。下手をすれば彼の顔も割れているだろう。

だが今回の増援の一件、一見して捕獲には失敗してはいるがまったくの失敗ではない。

“手ごわい敵”がいるという認識と“鳴守 音楽”が来ているという認識とではまるで違う。応援に音楽が駆け付けたのは幼年体での姿、幸いにして音楽の年齢詐称術に関してはあのエヴァンジェリンでさえも見破る事が困難だった。なら敵にはまだ自分の正体は発覚していない。これから各年齢層ごとの変装で敵にこちらの人数を誤魔化したり攪乱する手段には事欠かない、彼の変装によるアドバンテージは大きいのだ。

だからこそここで表だって動くことは避けたい。

そう説明する音楽の言葉を聞くうちに冷静になったのか仕事時独特の眼をしている彼女は真剣に聞き、脳内でシミュレートする。

「……………わかりました。なら周辺各位の方はお任せするということでしょうか？」

「ああ、お前は木乃香を守る事に集中してくれ」

ではと元行く方向へ進もうとする彼女だったが…

「あ、ちよつと待った刹那」

「はい？」

「はいじゃないだろう。護衛に集中するって言ったばかりなんだ、早速戻ってお嬢様の護衛にあたれ」

「いや、それはその…また別の話というか」

「たわけ、別も何もあるか……………どうしても近くに降りずらいつて言うならせめて見える範囲で見守ってやれ。まさか、このまま先に宿に戻る気じゃないよな？」

宿周辺の安全を確保するのが優先だとかネギが付いているから大丈夫だとか必死に退路を構築しようとする刹那だったが、音来はこれを無慈悲に断線してやる。

結局、論の余地がなくなってしまうた刹那は渋々といった様子でもと来た道を引き返す。

「……がんばれよ」

来た道に戻る刹那を見送り、音来は彼女と反対方向に歩きだす。

翌日の嵐山旅館ロビー。

そこには二人の少年と三人の女子中学生＋1匹という少々奇妙な面子がそろっていた。

「…すまないな、こんな時間に集まってもらって」

「いえ、この後の予定を考えるとしょうがないですから」

まず始めにと切り出す音来の謝罪に刹那が返す。逆を言えばこの二人以外は緊張や困惑、警戒といった感情から言葉を紡ぐことができなかったのであるが。

「さて、じゃあまずは改めて自己紹介からだな。魔法世界 傭兵ギルド『西の夜明け』所属、鳴守 音来だ。アハト・ジーベンスの方は仕事用の偽名でなこっちが本名。麻帆良にはちょっとした仕事の事情で警備を依頼されて来た」

「で、それはいいけど…いや突っ込みどころは多いんだけど、とりあえず何であんたはそんな恰好なわけ？」

「ああ、便宜上講師扱いだったからな、その為に身体を少々変えていた。…ま、見ての通り子供のこれが本来の姿だな」

最初から険悪な表情でいぶかしむように彼を見ていたアスナはつげんどんな物言いで質問をする。

が、音来の返す答えに何がショックなのか日本の法律はとかまた子供がなどとブツブツと何やら唱えている…まあ、あれは放っておいていい類の事だろう。

「あ、あのっ昨日の事なんですけどっ」

そんな二人のやり取りが空いたからだろうか、今度は身をすくめていたネギ少年が意を決したように身を乗り出す。

ここで彼が言う昨日の事というのは間違はなく襲撃の事であり、その際の音来が敵を無力化した手段の事だろう。

「ああ、あの時はすまん。今の口調もそうだが仕事の時はどうもスイッチが違ってな、言いつぎた…だけどあれが傭兵としての俺のやり方だ。納得してくれとまでは言わないが理解はしておいてほしい」

だが、音来にも矜持というものがあるしここでその論議をしていても平行線だ。だいいちネギは物事を悩み過ぎるきらいがある。エヴァンジェリン戦の時もそうだ。今増援がない望めない以上、現状で必要以上にへこませる必要はないし論議している時間もない。

なら音来がとる手段は有無を言わせぬ追及の拒絶。それ以上の論議は今この場で無駄でしかないと言葉と態度に籠める。

幸いネギは賢い子だ、音来の意図を汲んで乗り出した身と言葉をおさめる。その際に肩に乗る小動物と横に座るアスナの表情が警戒の色を強めたがしかし、これも追及すべき事柄ではないと己を納得させる。

「…じゃあ、すすめるぞ？次は現状の確認だ」

音来は昨日敵と遭遇したとはいえその際には戦いも終盤、正直事態の把握には精細を欠くし計画と対策を練るにも圧倒的に情報が不足している。

皆は互いに知りうる限りの情報を交わす。それによると大まかには以下の様になる。

敵は関西呪術協会の中の一部の者達。

修学旅行初日に数度妨害行為と思われる事態にあうも実害はなし。

その夜、敵の一人がどうやってか結界を掻い潜って宿内に侵入、木乃香を連れ攫う。

数分後、異変に気付いた明日菜と刹那が追跡を開始。途中敵と遭遇したネギと合流し追跡を再開、最終的に駅前の階段に追詰めるも敵の増援により劣勢に陥る。

同時刻、後から麻帆良を経った音来がその場に遭遇、結果敵の撃退に成功。

「とまあ、こんな所か」

「すみません、私が不甲斐ないばかりに…」

「そんな気に病んでもしょうがないさ、むしろ敵を追撃できたんだ

から護衛としても役目は果たせているよ」

「ですがそれはあくまで先生が応援に来てくれたからというだけで…」

「ああ、もうっ逆に考える、俺が駆け付けてもあの場でお前達が足止めできてなかったら木乃香攫われてたんだ、お前はよくやったさ」

伏せる刹那に切り替えると促すも妙なところで頑固な彼女は己の責をなかなか許容しない。

続く言葉の応酬にこれも平行線かと音楽は手を打ち強制的に終了させる。

「はい、その話は終了！うだうだ言ってもしょうがない。それよりも今後だ。ん？どうしたアキラ？」

「うん、あの…敵は今日も襲ってくるのかな」

そんな彼に次に問いかけたのは今まで黙っていたアキラだ。

彼女が黙っていることに音楽はある種の怒りからと考えていた彼は至極まともな質問内容に内心ホッとしつつ平静を装いながら状況からの推察を告げる。

「いや、今日はなしとみていいだろ。昨日あれだけ手酷くやられたんだ、むしろあるとしたら明日か明後日の最終日だろうな…」

もちろんこれは敵が組織だった人数を要していない場合の話である。本来なら襲撃側から見れば相手の隙を窺うのだから相手を疲弊させるのは常等手段だ。そういった意味では連日の襲撃は有効ではある。

あるのだがそれには物資と時間的制約、さらには人員的な面でコストが大きい。

大組織なら問題はないだろう。だが昨日の襲撃時、相手はたったの4人。事故処理を含めるとあと何人かはいそうだが人払い結界自体は符によるもので設置・撤去は比較的容易なことからこれも少数だろう。さらには味方が劣勢になった時点で増援はなし、少なくとも十数人を超える事はないとみている。

そして昨日の段階で敵は味方の一人を精神的、もう一人を肉体的に打撃を受けている。女術者の方は回復したとしても少年の方は復帰の望みは薄だ。少数のグループにとってこれは痛い。

これで慎重派であるなら諦めるかもしれない。しかし、相手は修学旅行中に仕掛けてくるような連中だ、十中八九めげて等しいだろう。

といっても回復を待つにしろ、応援を呼ぶにしろ計画の修正は否めないだろう。なら敵は次の襲撃に力を注ぐはず。

結果的に前回の襲撃の難は回避できた。が、奇襲が効くのは一度きりだ、人員的に増援の手がない学園側としては昨日の段階で敵を捕らえられなかったのは痛手だった。による犯行なら2人を欠いた時点で次の手に慎重にならざる終えない。

「そう言えばネギ君、親書の方は？」

「あ、えーと…今日は奈良に見学の予定なので距離的に無理かなって、一応明日西の長の所へ持っていこうと思っっているんですけど」

彼の實力を鑑みるに一对一なら抑えられなくもないだろうが単独で臨むのは危険すぎる。圧倒的に戦闘経験の足りない彼は相性の対処

法を構築できていない。つまり機能のように実力のある戦士系の相手にはどうしても後れを取る。

さらには敵の狙いは間違はなく木乃香、もちろん関東魔法協会の事をよく思っていない一派にとってそちらも妨害対象ではあるだろうが重要度で見ると明らかに木乃香を護衛するべきだ。

「うん、懸命だな。しかしそうすると敵も予想しているだろうな……」

奈良での自由行動。当然ながら敵も読んではいらるうがこちらとしても慎重にならざるおえない。

京都から奈良までそれほど離れてはいないとはいえもしもの時にどちらも駆けつけるには遠すぎる。最終的には護衛と親書の二組に分かれるとしても今日実行するにはいささかギャンブル過ぎる。

「……………」

「あの、音来さん。もうそろそろ部屋に戻らないと」

さてどうするかと皆で頭を悩ませていると刹那がいったん切り上げようと声をかけてくる。

気がつけばロビーの付近で従業員の人達があわただしく準備に奔走していた。

「あ、そうかすまん。しょうがない、生徒全体の方の警護は俺の方で引き受ける。刹那達は木乃香の護衛に集中してくれ」

時計を確認すれば寝起きの良い生徒は置きだすだろう時間、音来達は会話誤認の法を解いて一旦その場を解散することにした。

side: Negi・Springfield

「「「ごちそうさまでした!」「」」

特に揃ってという決まりはないので朝食を終えた班は各自の部屋へ戻っていく。

中には片付けもそこそこに帰ろうとする生徒もいたがそこは修学旅行、監督役の先生に呼びとめられて全速力で逃げるなどという光景も見られた。

そんな中ネギは一人輪の外で昨夜、そして今朝の事を思い出していた。

殺してないんだから問題ないだろ？

あれが傭兵としての俺のやり方だ

エヴァンジェリンの時といい、ネギも魔法使いにいろいろな考えを持っている人がいるという事を学んだ。だけど実際にそう言う人に直面するとどうしてもショックを隠せない。

自分が目指しているものは“立派な魔法使い”、時として力を行使

することが必要なのも知っている。慈善だけでも知っている。ただ彼が言ったように納得することと理解することは別物だ。

「はあ」

「なあにため息なんかついているのよっ」

「へぶっ！あ、アスナさん？」

溜息をついていた彼は突然背を叩かれたことに驚いてたたらを踏む。といってもこのやり取りも慣れたもので声を聞くまでもなく誰がやったのかは彼には想像がついていた。

「ま、どうせあんたの事だからあいつに言われたことでウジウジ悩んでたんでしょうけど」

「うっ」

「……しょうがないじゃない、あんたとあいつは違うんだから。あれでしょ、あいつマギなんちゃらってのは目指してないんでしょ？」

「あ、ハイ。たぶん…それと“立派な魔法使い”^{マギステルマギ}です」

「ならいいじゃない。あんたはあんたのやり方で立派にそのマギステルマギになって見返してやればいいのよ」

「アスナさん……」

だいちあいつは私も気に入らないとかなにやら付け加えているがネギには彼女が自分を心配して声をかけてくれたことがわかった。本当にいつもいつも彼女には助けられている。時に傍で、時に背を押してもらって…

そう、本当に…

「ネギくん！今日、ウチの班と見学しよう
っ」
「へぶっ！」

いきなり飛びついて来た一人の生徒のおかげで彼の感動は不意に中断させられる。

そしてそれに続くようになだれ込むように起こるネギ争奪戦？

ノリの良い生徒が多い3-Aのクラスの大半は参加するか観戦に回っている。

つまり止める人がいない…

かくして等にそっちのけで開催される第 回ネギ先生争奪戦。

…いろいろとだいなしであった。

「あ、あのっネギ先生！」

そんな彼に声をかけてきた少女。

いつも目元まで下げていた前髪を後ろに結び結び、緊張からか赤くなった表情を視線が集まることでさらに赤くする。

そして一際大きく息を吸った彼女は意を決し、普段の彼女からは想像もつかない音量で告げた。

「よ、よろしければ今日の自由行動、私達と一緒に回りませんか
っ」

これをネギは敵の襲撃もあつたために承諾。そう、この段階でまだ彼女の思いは一步通行であり、こういう面に疎いネギは気付くはずもない。

だからこの時は誰も予想もしていいなかった。

この後に待ち受けている運命に、彼女がこの場で歩み寄つたことでそれは自身の背を押す勇気となつたことに。

そしてこの事がどんな影響を及ぼすのか、まだ誰も知らない。

s i d e : o u t

取立28回目　く閑話、確認と許容と容認。誤解の深まる時く（後書き）

はい、という感じで今回は前回の展開を物語に合わせるために緩衝材目的で入れてみました。まあ予期せぬトラブルというか、気づけよという話なんですが肝心の二日目の内容はカットして次回に回すことに…

なかなか思う通りにいかないものです。

まあ次回の話はのどか告白という重要なところなのですが…本編引っ張っておりますが省略する予定です。のどかファンの皆様は本当に申し訳ない。ですがこれも話数調整の為作者も苦渋の決断でした。トントンはただいま猛省中ですがおそらく変更はないですね。

そんなこんなで今回のあとがきは短くいきました。本編も短かったですけど（苦笑）

次話こそはのどかのパクティオ　があるあのお話までいきたいです。

ではこの辺で、次回もよろしく願います。

それでは、再見っ！

取立29回目　く本音と相談の応酬。そしてほんの一握りの和解く（前書き）

どうも、まず始めに……

今日は寝坊どころか寝落ちしてしまいました（汗

いや、起きたのは7時36分くらいだったんですが何分作業が途中だったので…

突貫で仕上げてみました！

なので少々見直しがあまいです。申し訳ありません（焦

また今日中にもう一度見直しをしますのでどうかご容赦をっ

では、遅くなりましたが29話本編、どうか最後までご覧ください。

取立29回目　く本音と相談の応酬。そしてほんの一握りの和解く

京の都を離れて3 - A + が訪れたのは日本が誇る古都“奈良”。

ちなみにネギ達が向かったのは奈良公園、ネギが行くという事もあって一部の生徒が見学場所を変更しかけたが交通費が取り決められていたために断念。いや、中にはポケットマネーも辞さない生徒もいたので収拾に苦労していたのは記憶に新しい。

そんな中音来が訪れたのは興福寺という古い大社だ。なんでもこの国の歴史的遺産だそうで世界遺産にも指定されているらしい。結構修学旅行の見学先としてはメジャーなそうな。

彼がネギ達と別行動を取るのは保険の為に他の生徒の護衛とその方が身軽なためだ。
なので彼は今興福寺に訪れた生徒たちを追跡している。

職業柄気配遮断の手段は事欠かない彼は一般人に気付かれないうように且つ、関係者側に悟られないよう一般人の中に溶け込める境界を難なく形成する。

しかし……

…中身も外見も子供な今、これは犯罪行為ストーカーなどではないと思いたい音来だった。

「しかし、本当に動きがないな……」

昨日の痛手から今日は攻めてこないだろうと言ったのは音来であるがそれはネギ達に必要な以上緊張させない為に行ったことであり、敵勢力が少数のグループであるとあたりを付けた予想でしかなかった。

現在刹那の式神を通じて向こうをリアルタイムに見るに本命と思われる木乃香に一切アクションがない。

なのでこの結果は彼等にとって都合がいいものであり。同時に拍子抜けでもあった。

まあ、敵が単に慎重派なのかもしれないがこれで敵が少数であるという仮説の信憑性が上がる。

相手にバックがないとなれば政治的に介入されることもなくなるのでこちらとしてもやりやすい。後は……

「…順序を間違えなければ問題はない、か……」

そこで思考を中断した彼は道行く先に見知った顔の男性を見かける。

「やあ、久し振り…かな？」

級友にかけるように声をかけてきた糸目の男性に音来は黙したまま目線で場所を移すことだけを伝えてその場を離れた。

「……なるほどね。うん、大体把握したよ」

読んでいた学園長からの報告書類から目をあげた彼はそのまま後ろのベンチに座る音楽に口を動かさずに話を続ける。

「まあ行方が分からなかったから何かしらあったとは思ってたけど……と、それよりも昨日までの状況だね」

「いえ、直に来なかったのは申し訳ないですが、そちらの件は別口から詳細を窺いました。敵、と思われる一団にも昨夜接触しています。私としては……瀬流彦先生？」

「あ、なんとというか……聞きなれない言葉使いつて結構鳥肌ものだなあって、いや他意は無いんだヨ？」

なら他に何かあるのか問い詰めたいが彼の邪気のない表情に毒気を抜かれてしまう。

そついう意味なら得をしているというのだろうか？

などと余計な事を思い浮かべつつ音楽はいたって平静に切り返す。

「ひどい言われようですね、これでも結構気を使っただつもりなんですけど……こんなもんですかね、瀬流彦さん？」

「ううん、まあ及第点で。おいおい慣れていくよ」

「それで、自分としては瀬流彦先生から見た敵の予測と現在のこちらの戦力的意見を聞きたいんですが」

「そうだね……君も接触しているなら見当は大体ついていいるだろうけど、敵は関西縁の一派とみて間違いないだろうね。規模は流石に把握できないけどこれまでの妨害の手口から見てそこまで大がかりなものはないから少人数だとあたりを付けている。逆に組織だった規模を持っていたとしたら昨日の学園長のお孫さん誘拐の時にもっと戦力を投入してくるはずだしね」

「では、瀬流彦先生は連中の狙いは近衛にあると？」

「うーん、そうも言いきれないかな？…程度はあるけど魔法使いをよく思わない関西術師は多い。だから僕も親書を持つネギ君をそれとなく気にかけていたんだけど、それと同じ取り方をするなら近衛さんの誘拐時の手の込みようはそれまでと違った…音楽君は近衛さんを誘拐したとしたら敵にどんなメリットがあると思う？」

「誘拐と言うならまず身代金とか何らかの交渉手段が思いつきますね。安易に行くなら父親である関西呪術協会長への脅迫、祖父がいる関東側にも牽制が効きます」

「そうだね。あまり考えたくないけど彼女は両協会にとって影響力が大きい。だとしたら連中は今の協会に不満を持つ者達、または魔法使いを嫌う過激派つてところだろうね。恐らく修学旅行中は今後も近衛さんは狙われるだろうけど、彼等が魔法使いを嫌っているのなら親書を持つネギ君を放っておくはずもない…」

「ですね。付け加えるなら人質に他の生徒を狙ってくるかもしれないと考えると明らかにこちら側は人員不足です。個人的には学園側の警戒不足な面が否めないかと」

「あはは、耳が痛いね……………音楽君はこちらの状況をどう見る？」

それは暗にネギ達を含め今の戦力をどう見るかという事も含まれているのだろう。

が、今朝のネギの雰囲気を出した音楽はわざとそちらの考えに気付かない振りをした。

「……………班の構成からみて龍宮や長瀬がいる2班と4班はさして心配する必要はないでしょう。春日や大河内もいますからいざとなれば対処はできると思います。反対に、一般人のみの1班と3班は無防備ですね。戦力的にみるなら5班は偏り過ぎですが……………今日襲撃の可能性が低いとなると3日目、最終日は京都周辺になりますから完全自由行動の明日が山場でしょうね」

「うん、そこは同意見かな。……………最終日には大阪に行く班や京都でも中心部から郊外までバラけるからね、こちらとしても護衛の手は薄くならざるおえない」

一応の意見交換と確認を終えた瀬流彦と音楽はその後今後の事について詰めていく。

事実上これ以上の増援が望めないなら悩んでも仕方ない、現状の戦力で守りきれるように手は多く尽くすべきだ。

もちろん修学旅行自体を中止にするという手もある。だがそれは最終手段であり、瀬流彦としては大人の事情で関係のない生徒達の大切な時間を無為にしたくなかった。同時に依頼が護衛である音楽にとっても別の見解からも同意したこともある。二人はその最終手

段が執られる事の無いよう慎重に予測と検討を重ねていった。

やがてあらかたの意見を出し終え今後の配置分担も決め終えた所で、そろそろ切り上げるかと立ち上がるうとした瀬流彦に音来が声をかけた。

話し合いの途中、珍しく後半の意見に鋭さがなかったことに気付いていた瀬流彦はさして驚いた風もなく、上げかけた腰を据えて今度は向き合う形でその目を彼に向けた。

「あの、これは今の状況とは直接関係ないですけど……先生はネギ君の事どう思ってますか？」

「ん？ネギ君かい？うん、真面目で真直ぐな良い子だね。彼の過去についてはいろいろと聞くけど変に捻くれたところもないし……何か彼とあったのかい？」

「いえ、ただ昨日敵を撃退した際ちよつと……やり過ぎだと非難されたのを反論してつい言い逃げてしまつて……今朝会つた時も気まずそうだったから気になつて……あの、瀬流彦先生の方からそれとなくフォローしておいてあげてくれませんか？あのままだと今後にも……」

「いや、それは君が自分で言うべきだ」

「……確かに善良な人から見たら君達のやり方は残酷に見えるかもしれない。僕自身“立派な魔法使い”を目指してる一人人として、一人の友人としてなら待ったをかけた」

「……」

「でも、一教師としては君を責められない。君は間違いなく近衛さんを助けた、それはどうあっても変わらないことなんだと思うよ。手段はどうあれね…だから僕は君に感謝しているし、無茶をしたことに怒ってもいる。そう言うのは一概に責められないものなんだよ。だからそのことでネギ君と意見が違ったんだってたとことんぶつかった方がいい、君も彼も意外と頑固だからね、もしかしたら喧嘩になるかもしれないけど若いうちはそうしたほうがいい。君もまだまだ子供なんだからさ」

「……瀬流彦先生……」

そう言つて目尻に柔かな弧を描かず彼は諭すように目の前の少年を見つめる。

気付いたというよりこうして元の姿を前にしても忘れてしまいそうになるが彼は見た目通り幼い。それこそ何で傭兵なんて物騒な仕事をしていたのかと思うほど、だがそれは、そこまでは自分が踏む込む領域じゃない。己がこの教師（しごと）に誇りを持つているように、彼だつて自分の仕事に誇りを持つているだろう。それは短い付き合いとはいえ同僚として比較的交友のあつた瀬流彦は理解しているつもりだ。

だから多くは語らず、自分は背を押すぐらいが丁度いいだろう。そう思っていたのだが……

「……この非常時に喧嘩して来いと進めるなんてドラマの見過ぎです。あと若いと言つてもあなたも十分若造だと思いませんか？」

なんとも、受け手が捻くれていては糠に釘だった……

「な！？君ねえ、せつかく人が親切にアドバイスを……」

「冗談です……参考になりましたから今夜にでも実行してみます。まあ、喧嘩に発展しないよう注意は払いますが」

「はあ、素直じゃないねえ、こりゃアイン君も苦勞するわけだ」

「どつとでも、それにこの手の皮肉は向こうの方が十八番です」

ついたため息を吐いてしまう瀬流彦にさして気にした風でもなく返す音来だったが先程相談を持ちかけた時より幾分か本調子に戻ったのは明白である。

どちらともなく苦笑が漏れる中今度こそ行こうかと立ち上がる二人。

そんな彼等、いや、彼の元に届いた一通の違和感。

それに気付いた音来が眉を顰めて何かと正体を探ろうとしているとその発信源が自分の胸元にある事に気付く。

『 さん 音来さんっ 』

「ん、この感じは……刹那の念話か？」

そう言えば携帯に出にくい彼に業を煮やした彼女が一枚の札を叩きつけたのを思い出す。

その時はものすごい剣幕だったと内心苦笑しかけるも緊急事態かもしれないと気を引き締めた彼は脳裏に昨夜説明された使用法を思い出しながら懐から取り出す。

確か額に当てるだけで本来の念話と変わらないから猿でもできるとかなんとか……ひどい言われようである。

「これでいいんだっただか？うっん、ん、あ、刹那か？俺だが、た、大変です音来さんっ！！」………」

いきなりの大音量に無駄と解りつつも思わず耳に手をやってしまう音来。

そんな彼の様子に頭上に疑問符を浮かべる瀬流彦を目で制してもう一度、今度は若干おっかなびっくりといったような風に額にそろりと札を近づけた。

『あ、もうどこから話したら、いや話してもいいものなのか…あ、あ、それよりも…』

「…落ち着け刹那。何があっただか整理してゆっくりと話せ」

『その…ネギ先生が倒れました……』

「はい？」

突然の要点だけの回答に目が点になる音来。

事態を把握しなおした彼は横の同僚に事情を説明するのも手短に空へ駆けた。

夕刻。

旅館に戻った、もとい搬送されたネギは一人露天風呂にて一日の疲れを洗い流して……いるはずもなかった……

「はあ……」

昨日もそうだったが今日も頭を悩ませている少年。本来なら癒しの場でもある“温泉”をもつてしても彼の苦悩は取り除けないのだ。

それと言つのも数刻前、正確には修学旅行初日から相次ぐ妨害行為に頭を悩ませていた彼は昨夜誘拐されるといふ被害にあった木乃香を護衛するために彼女の班と共に奈良公園に訪れていた。

警戒を怠らないように気を引き締めてあつたのであつたが、途中協力関係にあつた刹那、明日菜と逸れてしまい、どうしようかと悩んでいた彼の元に彼女たちと同じ班である宮崎 のどかと一緒に二人で公園内を回ることにしたのだ。

今にして思えばあの時明日菜達と逸れた時直に追いかければよかったとか後悔の念が浮かんでくるがそれも銭ない事、事態はすでに事が起こった後であり、誤魔化しようもないのだから。

「…それにしても、まさか告白されるなんて…へ、返事はどうしたら…いや、でも親書や木乃香さんの事もあるし…」

「あ、兄貴、もちつとしゃきつとしてくれよ、そんなんじゃまた襲撃されたら時どうすんのさ」

そう。見学途中に逸れてしまったネギはなんと自分が担任をするクラスの生徒であるのどかに告白されてしまったのだ。

彼とてカモの言いたい事は解る。だが10歳の少年に重要任務に敵の妨害、生徒の誘拐、そこに告白という処理の追いつかない事態の連続に困惑するのは致し方ないだろう。実際奈良公園では知恵熱というやつだろうか、告白したのどかが走り去った後に倒れていたりする。

その後、旅館に運び込まれたのだが職員会議も上の空に流れ、夕食もそこそこに現状のままというわけだ。

そんな状態だったからこそ彼は背後の引き戸が開く音に気付かなかった。

「む、先客か」

「えっ…って、音来さん!？」

「なんだネギか、同じ年なんだから呼び捨てでいいっていったろ？俺も勝手に呼ばせてもらってるし」

なんだも何も知ってて入ってきたとしか思えないタイミングに萎縮してしまうネギだったが、対する音来はネギの様子も気にせず桶ですくって体にお湯をかけている。

「あう、そ、そうかもしれないませんが…あの、そとの張り紙は…」

「ん？『先生専用時間』の事か？まあなりは子供だけど俺は一応学園講師だからな、新田先生以外なら言い訳きくし…隣り、いいか？」

「やいてめえ！今度は何をたくもがつ！？」

「あ、はい！どうぞっ」

騒ぎ立てそうになったカモの口を反射的に塞いだネギは横に半身ずれて場所を譲る。

「ふう ……気持ちいな温泉ていうのは、うんたまにはこっついうのもいいな」

「あ…そうですね。この温泉、効能？って言うのがあるってあるらしくて、なんでも」

隣で湯船につかり一息つくと言わんばかりに脱力する彼を見ているととても昨日敵を撃退した人と同一人物には見えなかった。

むしろ見た目は違ってもその様子は彼が怪我を理由に姿を見せなくする前の、ネギが兄のように慕っていたそれで…つい気分が軽くなつたネギは少し饒舌に返してしまふ。

だからだろう…話が進むうち、昨日の事を問いただす前に今の悩みを打ち明けてしまったのは。

「あの、音来さん…もし、もしですよ。あ、僕じゃなくて友達の外国で教師をしている人なんですけど…もしある日友人だと思っていた女の子から告白されたとして、その子が職業上…社会的立場か

ら世間の非難を受けるものだったとして…音楽さんだったらなんて答えますか？」

何というか、もしもになっていない話だったがそれで事情を察したのだろう。

音楽は視線はそのままネギと合わせず、肩を縁に乗せ、脱力から上を見上げたまま答えた。

「知らん！」

「即答っ！？」

それはもう見事にバツサリと。

「てか相談相手を間違えてるだろ。俺なんかよりも新田先生…はまずいか、しずな先生とか他に相談に乗りやすそうな人はいるだろうか？」

何か答えをとまでは思っていなかったが突き放された結果に落ち込むネギ。彼とて他の先生に相談しようとした、のだが…仮にも教師という立場がその足を踏む留まらせてしまう。

しかも同僚以外と言っても周りは異性、それも年上ばかりで問題の彼女と同級生だ。必然的に相談のしにくさは教師間より難易度が高い。

だからこそ同姓で学園にいたころ何かと助けてくれた音楽に相談を持ちかけたのだが。

「俺に何を求めているのか知らんが生きた時間はほとんど変わらないんだぞ？」

「あう……」

やはり返答は変わらず断ち切られる。

確かに音来はネギと同じ10歳だと言うがまだ実感のわかない彼にとっては“音来”という人物は教師においても人生においても先輩であり、頼れる兄貴分といったイメージが拭いきれない。

思わぬ答えに落ち込むネギ。

そんな彼を横目に見やった音来は一つ溜息とともにポツリと一言付け加えた。

「……まあ、そうだな」

「え？」

「もし俺がその立場だったとして、相手の子は彼の悩んでいるだろう社会的立場だとかお互いの関係とかを理解した上で言ったんだと思う。……これって結構勇気のいる事じゃないか？」

「あ……」

「だからってわけじゃないけど、せめて誠意を籠めて返事を返してあげるべきだろうな。男なら言い訳せずに素直に気持ちを返してやれ、っていつても俺も恋愛経験あるわけじゃないから一般論の範囲な回答しか言えないけどな。それに俺は彼女本人じゃないし、もしかしたら結局は気持ちが悪かった考えなしなのかもしれないけど……少なくとも彼女も悩んで出しただろう結論だろうからな。ま、何が言いたいかって言うと、焦って誤爆する事だけは無いようになって……そういうこつたな」

そうこの場で初めてネギに目を向けたその眼は入って来た時の冷たい表情ではなくどこかやさしい表情をしていた。

ネギとしては突然のアドバイスでそれに気付く余裕はなかったが、それでも彼の言葉に思う事があったのだろう。自分の中で彼の言葉を租借しつつ続く言葉を聞き洩らさないようしっかりと聞いている。

「…ふ、結局は当人の気持ちの問題だし、俺がどうこう言うべきじゃないと思うんだけど…まあ、あんまり悩むのもほどほどにしておけっつうことで一つ伝えといてくれや」

そう言っつてポンと頭の上に手を置いてネギを撫でやるそれは彼と麻帆良で指導してもらっていたころからの彼の癖で、そんな彼の手に懐かしいものを感じたネギは思わず顔を伏せてしまう。

「あ、ワリッ…」

そんなネギの仕草に気分を害したのだろうと思ったのか、音楽はサツと手を引いて謝る。

もちろんネギは気分を悪くしたわけではないので慌てて撤回しようとする。

「あ、いえっそんなんじゃなくて…なんか、やっぱり音楽さんは音楽さんなんだなって…」

「なんだそりや…まあそうさな、俺も兄弟がいるならネギみたいな手のかからなそうなのがいいけど、生憎と兄貴ってのも柄じゃないからな。とりあえずはパスだ」

そう言っつて冗談めかして二カッと笑う表情はいつも見ていた表情で、この時ばかりは悩みを忘れて安心してしまふ。

離れた手に若干の心残りを感じたがいつまでも甘えるべきではない。そう自分の中で結論づける。

(うん、やっぱり音楽さんに話してよかった)

「あ、そう言えばその小動物痙攣しだしてるけど…いいのか?」

「え?...あ　　っ!!--ごめんカモ君っ」

彼の指さす先を点線が描くようにゆっくりと目を向けたネギの見た先には...

顔を真っ青にして痙攣していた従者(月給:5000円)がいたそのうな.....

s i d e : : o u t

おまけ?

s i d e : : ? ? ? ? (てか?の意味はあるんだろうか)

(ひ、ひどい目にあっただぜ…)

敬愛する？ネギの兄貴の手によって危うく昇天しかかった彼はその小さな身を伸ばし、フルフルと体が吸った水分を飛ばす。

「が、しかし…あの姉さんはいいな。なんか話も合いそうだしうまくいけば…」

瞳を\$?のような形状にするといった器用なまねを人知れず披露した彼は作戦を考え付いたのか湯気の向こうで倒れている彼女にコンタクトを図ったようだ。

「そんな事ね　よ姉さん!!あんた、キラリと光るもん持ってるぜ!」

「うおっ!しゃべったっ!って、ネギ君と一緒にいたっけ」

魔法使いとマスコットなどとぶつぶつしゃべっている彼女を一旦置いて説明を進める事にした彼。

そう、事態に目処が立ったのなら何事も速い方がいいのだ。行動は迅速にして大胆に、そして切るべきを尾は切れるようにする。それが彼という者だった。

簡単に自己紹介から話せる範囲での情報を適度に与える。

こういうものは餌を撒く釣りに近い。彼は最低限の手札で彼女を引き込もうと、彼女はより多くの彼の手札を引き出そうと水面下での静かな戦いを続ける。

やがて、ゴニヨゴニヨと内緒話程度の音量で繰り広げられていた駆け引きは終結したようで両者は顔を寄せ合い怪しい笑みをその顔に張り付ける。

「うむふむ、なるほど …… むふふっお主も悪よのお〜」

「いえいえ、お代官様ほどでは…。」

密談を終え、掌を扇に見立てて怪しく笑うノリのいい少女に彼も顔を寄せて裏取引お決まりの台詞をのたまう。

賽は投げられた。

ここに勝手ながら主人の与り知らぬ同盟と盟約を結んだ二人組が今、波乱の舞台に石を投げ込まんと立ち上がった。

しかし、火に油…というのだろうか？余計な化学反応を起こしそうなコンビの誕生に思えてしまうのは気のせいだろうか…。

取立29回目　く本音と相談の応酬。そしてほんの一握りの和解く（後書き）

え　　： 今回のお話を書いて二つばかり言いたい事が。

まず、

「皆さん温泉には必ず体をしっかりと洗ってから入りましょう。ペ
ットも特殊なケースを除いて入浴させてはいけません。マナーは守
りましょう！」

と、これは今日編集してて思った一言：

「お前は、本当は…何が書きたかったんだ!!」（某　青髪赤服の
似合う男風）

と言ってやりたい…昨日の俺は何を思ってこれを書いていたんだろ
う。

いや、改めて読み返したら意外と重要なポイントなのだろうかと思
ったんですが…

何が悲しくて野郎同士の入浴シーンなんか書いているんだ俺っ!!

いやまあいつまでもネギに引きずられたままではこの溝は致命的か
もとか主人公の3カ月はなんだったのかとか考えだしたらちよつと
くらい和解っぽい流れがあつていいのではないかと、そう言った意
味での『一握りの和解』です。

ですからネギはまだ疑念が晴れたわけではありません。ただ知り合
いの知らなかつた一面を…して驚いてはいますが文中にあるとおり

真っ向から対立というのは回避させました……今回は（苦笑）

さて、そしてようやく次回あの仮契約大会？が彼等の暗躍によって実行される。

音楽の立ち位置は？告白シーンがカットされた今回、これは原作通りに行くのだろうか？それは神のみは……いやこれはいくらなんでも調子に乗り過ぎですね（笑）

では今回はこのくらいに、そして次回に関してちょっと業務連絡です。

私、今回と言うか来週、ただいま卒論の一回目の発表を控えています。つきましては今週一杯はそちらに尽力したいので次回の更新はお休みさせていただきます。

更新は再来週となりますが30話と31話分をどう配分して投稿するかは考え中なのでまた近況報告の方で連絡させていただこうと思います。

急な勝手で申し訳ありません。

が、今回ばかりはどうかご容赦いただきたく申し上げます。

では、そう言う流れで次回、再来週又は近況報告の方にお会いしましょう。

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

再見ッ！！

取立30回目　く暗躍するは身内達、苦勞の重掛けな先生達く（前書き）

はい、どうも宣言してから本当に1週間間をあけましたトントンです。

いやくこの時間に投稿するのも久々ですね。今回も少し長めですが大部分カットを行って何とか30話目に納めてみました。

内容は本編をお楽しみにという事で（汗

ではこの辺でまえがき終了となります。

雑談は本編のあとに、それでは今回のお話もどうか最後までお付き合いください。

取立30回目　く暗躍するは身内達、苦勞の重掛けな先生達く

「ええ　　っ！？ま、魔法がバレた？？！？」

「は、ハイ……」

旅館に響く驚愕の声、というかもう怒声の域に近い明日菜の声。
まあそれかもしれないだろう。何せそのバレタ相手があのだ…

「よりもよってあの朝倉とは……」

どうやったたらクラス一厄介な人物にバレるなどという確立を引き当てられるのだろうか…

彼はそういう星の下で生まれついたのだろうか？

…一回ネギの星占いでも見てみたいものだ…主に将来的に彼の不安を思つて。

なんでも音楽と風呂で別れた後その場に朝倉がなぜかしずね先生に変装して乱入してきたらしい。

その場で魔法を見たとか証拠を突きつけられて焦ったネギは魔力を暴走、結果として証拠である画像はその騒動で携帯ごと壊れたそうだがネギはそのまま逃げてきたそうなの。

「あ、アキラさん　　僕どうしたらっ」

「そ、そのネギ先生……ドンマイっ」

藁にも縋りたい思いだったろうネギはポンと背に手を置いてなでるアキラに詰め寄るが…見事なカウンターを貰って崩れ落ちる。文字

通り続った藁では浮かぶこともあるまいに…
というか慰めようとしたのだろうがアキラのそれは見事に塩を塗る
うようなものだ。

「あうう??、仕方なかったんです…人助けとかネコ助けとか…」
「うっ!?!」

「ネコ助け?何よそれ???」

何やら身に覚えのある単語に人知れずビクリと肩を震わす音来、気
のせいだと思いたいがポツリポツリと話すネギの事情を聴いている
とやがてそれは確信にかわり…

「あのね…私の時もそうだったけどあんたは不用意に…」

「そう目くじらを立ててやるな明日菜」

「音来さん…でも僕魔法がバレて…」

「…確かにそこは褒められた事じゃないけどな、人命、もといネコ
を助けるためだったんだろ?ま、過ぎた事はしょうがないさ」

「何なの急に?」

「さあ?」

音来苦手意識のある明日菜からすれば自分以上にこの場でネギの事
を責めるのではと思っていたので彼女からしてみれば意外な面だっ
た。もつとも、知っている人からすれば彼の心情は分かりやすいモ
ノだったように答えを返してた刹那などは口元にうっすらと笑みを
浮かべている。

事態が呑み込めていないネギと明日菜はそのままにネギを撫でていた音来が彼が落ち着いたのを確認して立ち上がる。

そう、事態はまだ一つも解決していない。むしろ厄介事が舞い込んだのだからさっさと片付けられる案件から即片すべきだ。

「でだ、とりあえず朝倉の事を何とかしなくちゃならんと思うんだが」

「お　い、ネギ先生　っ」

ご本人様登場によって出端を挫かれる音来。

なぜだろう…こう、せっかく落ち着けたばかりだというのに目の前の二人組に不吉な…嫌な予感が浮かんでしまうのは彼の考えすぎだろうか？

一騒動にけりのついた音来は一人、旅館に予約しておいた部屋で思案にふける。

あの後、どういった流れかカモが朝倉を改心させたらしく、今後は秘密を守ってくれるとの事。

音来としてはどうも不安が残る物言だったが、データが残っていないかは確認させてもらったし、一応嘘ではないと結論付けたのだ

が。

「どうもあの手の野次馬根性強い奴は苦手なんだよな??アインと違ってそういった戦闘面以外の事にはいまいち確証を持ってないし…」

策略や政策といった事に強くない音楽はこういった手合いは苦手だ。まあ問題が一つ減ったなら負担が減ることは間違いないので深くは考えないようにしているが、どうも経験というか、本能的にどうか、違和感を拭いきれない彼は部屋で受け取ったメモリを片手で遊ばせて渋い顔をしてしまう。

(む、何やら妙な魔力の気配を感じるな……敵の作戦か?)

そんな彼の顔が一瞬の緊張のもとに仕事の顔へとシフトする。

刹那とともに夕刻張った結界に感知した様子はない。

もつとも結界というものも万能ではないので安心はできないが今回の反応は内部からのものだ。昨日の襲撃後から今まで館内は隈なく確認したし、時限式の術式が仕掛けられている様子はない。

だとすると既に潜入して紛れ込んでいるパターンか、あるいは身内が何か仕掛けを拵えたか…

「じゃあない、とにかく確認して回ってみるか…この時間は…刹那達ももうすぐ見回りから戻ってくる時間か」

ロビーに出てきていた音楽はネギが泊っている一室を目指すべく向きを変える。

彼女達も連絡と確認の為にそろそろ戻ってくるのは間違いないので行く途中に出くわすだろう。そう予想して彼は階段を上っていた。

しかし…

「やな予感…てか、面倒が起りそうな雰囲気なんだよな、妙な
気配ってというか悪寒ってというか…」

溜息が様になる子供というのはあまり見た目よろしくないが彼の
身を知っている人間彼すれば無理からぬ姿に見える。

「おっ神楽坂も一緒かちょうどよかった…」

「あ、音来さん」

「げっ…」

ちょうど報告に来たところなのだろう、教員部屋の前でぱったり出
くわした刹那達にこちらが声をかけるとまた違った反応が返ってき
た。

まあ刹那はわかるとして…会口一番に『げっ』とは、どうやら大分
苦手意識が植え付けられているらしい。

音来としては特に身に覚えがないが彼女からしてみれば何かしらあ
るのだろう。

こういうのは想像に至れないから性質が悪い。対処はまあ、触らぬ
神に祟り無しという方向で……

「なんか妙な気配がするんだけど何か知らないか？結界に反応しな
いから直接の害はないとは思っただけど…」

「いえ、私たちも戻ってきたばかりで…あ、さっきカモさんが何や

ら魔方陣を旅館の周囲に書いていましたからそれかもしれません」

「なるほど……まあ結界の機能に支障はないようだし、防衛の手は多くて損はないからな……うん、意外と殊勝なところもあるんだな」

刹那が言う“カモの魔方陣”を木乃香護衛の為に用意した物だろうと考えた音楽、実際彼の言うとおり刹那達が戻った後に音楽と二人で強化した結界は二重三重に強化されているが手札が多いに越した事はない。

もつとも、今回は感知型の結界で強力なタイプを織り込んだ上に対象を木乃香と旅館全体に限定している。

もし、昨日の様子に入り込まれても式神や魔力・気を放つ者が近付けば問答無用で反応するし、感知した場合は術者をその場に転移できるようにしてあるので、昨日みたいにバラけていても間隙を突かれる事が無い。もちろんその転移術式は木乃香本人や一般人の目もあるのでもうしても間に合わない時の最終手段ではあるが。

まあ、結界の強度を保つために最低二点以上の起点となる術者を付近に配置しなくてはならないので周辺警戒に人員を割けないのは難点だが術者自身が術の核なので敵に細工される心配がないのが利点でもある。

「ネギ君、入るぞ」

「あ、ハイっどうぞぞ！」

中から若干緊張気味の声が返ってきたのを確認して音楽達は素早く部屋の中に入る。

学園生徒である刹那や明日菜はいいとして見た目部外者な今の音楽は説明が何かと面倒だからだ。

「ネギ 周辺の見回りに行ってきたわよ」

「特に異常はありませんでした。強化した結界の具合も良好です」

部屋で休むに休めなかったのだろうネギは敷かれた布団の上で胡坐をかいていた。といつても昼間の事を考えると無理もないだろう。何せ厄介事がもう一つ増えたのだから…

彼の不注意が招いた結果だったとはいえ同情を禁じ得ない音来だった。

「そうですか。あの、音来さんは…何かありましたっけ？」

「そろそろパトロールの時間からな、呪印の発動具合の確認に来た」

そう言ってネギのそばまで来た彼はネギの細腕を手に取り、彼の手首に描かれた紋様に魔力を通す。

「……………」

「はあ それにしてもすごいですね。東洋の呪術と西洋魔術の複合術式なんて」

ネギが言うのは音来が刹那と作りだした結界の事だろう。

「……………お互い組織が毛嫌いしたりする傾向があるみたいだが、俺達ようへいはそういうのに執着がないからな。それに、これは言うほど難しくないぞ？」

もともと、魔力と気は混ざり合わない水と油のようなもので特殊な訓練でもしない限りまず両方を混合して使う事は出来ない、習得に

至ればこの上ない強みとなるがそこに到達するまでに長い修練が必要で、効率が非常に悪く、使い勝手も悪いからだ。

しかし、この結界は別だという。

結界という物は他の術と違って方程式の塊だ。札を要する東洋魔術も、精霊を介する西洋魔術も時間やそれに要する規模が違うだけで概念は同じだ。

敵を捕らえる捕縛系、侵入や害意を察知する感知系、害敵を攻撃する迎撃系と多種多様な結界が存在する。だが、用途が同じなら紐解けばおのずと同系統の公式が見えてくる。

つまり、必要な言霊やエネルギーを抜きにすればこれほど似通った術はない。

だから回路と回路を繋ぎ合せ、用を成す様に選択していけば様式の違うものでも利用は可能なのだ。

この手の結界の備えは刹那より音来の方が経験が豊富だったので細かい調整をしたがおそらく要領をつかめばこういう事はネギの方が得意だろう。

「そんな感じで、聞こえは難しいけど…まあ配線を繋ぐみたいな作業だし、パターンを掴んで慣れれば意外に簡単だ…っつと、うん、問題はないな」

正常に呪印が核として機能しているのを確認した音来は戻ってきた刹那達の方も確認して回る。

そうしてちょうど全員の呪印を確認し終えたところで入口付近に人が近付くのを感知する。

「先生、アキラです」

「あ、大丈夫です。どうぞっ」

ノックの音と共に聞こえてきた見知った声に一同気を緩めてネギが襖をあけてアキラを招き入れる。

テーブルは宿の人が布団を敷いてくれた際に隅に寄せおいてくれている。まあ、話合いといつても簡単な報告だし手早く済ませる必要があったので部屋の中央に円になるようにして集まる。

そこからは簡単な報告で館内を見回っていたメンバーと周辺を見回っていたメンバーとで意見を交わす。

確かに今のところ敵の動きはない、これは当初の予測通りだが警戒をしておくに越したことはない。とはいえこの手の警護に経験のないネギや明日菜を矢面に立てるつもりは音来にも刹那にも無かったので交代時間もそれを考慮して組んでいる。まあ一部講義の声もあつたが経験則から二人がかりで説き伏せたが。

「それじゃあ次の時間は割り振つたとおり、俺とアキラが館内、刹那と明日菜が近衛の近辺、ネギが館外周辺だ。何か質問はあるか？

……はい明日菜」

「根本的な問題だけど、こんな遅くにネギが抜け出しちゃうと他の先生が騒がない？それにアキラも班の子達が気付かないはずないし、だいち新田とかに見つかるらと面倒なんじゃ」

「ああそれなら、……班や部屋のチェックならコレで何とか」

明日菜の疑問ももっとも思っていた一同に答えたのは音来ではなく刹那。

彼女が取り出したのは大雑把に人を模したと思われる紙の束。

「紙？これって??」

「はい、これは『身代わりの紙型』と言ってこの紙に名前を書けば本人とそっくりの身代わりに変化してくれます。簡易ですが簡単な命令もできるので部屋にいさせる分には気付かれる心配はありません」

「へ、紙型ですか。式神みたいですね　はい、アキラさんの分も」

「あ、私はもう自分の分を使って部屋を抜け出してきてるから大丈夫」

受け取った紙型から数枚を手渡そうとするネギに対しそれをやんわりと断る。

だが、それも考えてみれば当然の事で、今の時間生徒が部屋の外をうろつくには生活指導の新田が目を光らせているため困難。さらにこんな時間に一人部屋を抜け出してしまえばいつまでも戻らない彼女を友人が不振に思うだろう。

そこに思い至ったのだろう、貴重な修学旅行の時間を割いて協力してくれるアキラにネギは頭を下げていた。

「すみませんアキラさん。こんな事に巻き込んで……本来なら先生である僕が何とかしなくちゃいけないのに、こうして協力までしてもらって……あつ」

「ふう、それこそ今さらだよ先生。巻き込まれたって言うならそのもう一人の先生に教えられた時からだし……」

「……言うようになったな」

「魔法に関わったのも自分で決めた事だから。それに、私はクラスメイトが危ない目に遭ってるのに放っておけるほど薄情じゃないつもりだったんだけどな」

「アキラさん……」

「じゃ、身代わりの問題も解決したし、後は　　っ!？」

場を切り上げるために膝を上げた音来が何かに気がついたのか言い終わらない内に横にいたアキラの手を引いて一気に入口の真反対、障子の裏に身を隠す。いきなりの事にあっけにとられていたネギであつたが横をみると刹那も明日菜と共に襖の陰に隠れるように張り付いていた。

「いったい何をと声をかけようとするネギ、そんな彼の疑問は一瞬後に解かれる事になる。」

「ネギ先生　、そろそろ寝ましたか　」

ビックリと肩を鳴らして驚くネギもお構いなしに部屋の襖を開け放つたのは彼の指導教員でもあるしずな先生。

いきなりやってきた彼女はネギに早く寝るようにとことさら部屋を出ないようにと強く念を押した後そのまま去って行ってしまった。まさしく台風が去ったというようない一方的な流れだったが、隠れている音来達にとってはこれ幸いともう一度気配を確認した後、部屋の中央に集まりなおす。

「……大丈夫だ。また誰か来ると面倒だしさっさとバラけるぞ」

その言葉を区切りに部屋にネギを残したその他4名は先に周囲を窺って外に出る。

side: Kazumi Asakura

「さあ！お待たせしました！！間もなく修学旅行特別企画！！『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』スタートです！！司会は私、麻帆良パラッチこと朝倉 和美が務めさせていただきます！では、選手紹介に入ります。まずは1班から……」

時計の短針と長針が11時を告げ、彼女は手にマイクを握り締めて熱の入った開催宣言を始める。

準備こそ最速に済ませたが要は急ごしらえの計画、自身としてはもう少しセツティングに拘りたかったが無理強請りをしててもしょうがない。

それに、そこは報道屋としての腕の見せ所だ。脳内で構築した原稿

をそれこそリアルタイムで書き換え、言葉巧みに演出していく。

「安定感のある運動部二人組にその小さなボディに未知数の可能性、鳴滝姉妹！そしてこれは大穴か？図書館組の5班。さあ！まだトトカルチョ参加は間に合うよ、詳細は私まで！！メールでお願いします」

そうしてマイクのポリウムを切り、横でもう一つのノートパソコンでカメラを確認している相棒に向き直る。

「っとこんなもんでどうよ、カモっち」

「十分でさあ姉さん。魔方陣の感度も良好…うえっへへへ、コレでうまくいけば最低でも一つ、乱戦になれば契約カードもがっぱり出さあ」

「ふっふっふ、さらに今回は班&個人の連勝複式トトカルチョもやってるから親のあたしらは2倍美味しい…うちのクラスは良くも悪くもお祭り好きだからね??」

怪しい笑みを深くする一人と一匹、目が\$マークに見えるのは錯覚ではないかもしれない。

少なくとも今結託している二人のその根底には、物欲と好奇心というそれぞれの欲求と思惑があっただから。

「おっ追加投票さね。えっと………ほうほう、こりゃうまい具合に割れたね」

手元のパソコンで倍率を集計する彼女はそのバラけた結果に満足がいつているようだ。

何事も先のわかった賭け事程面白くないものはない、それに比べ今回はパワーバランスも個性も悪くない。さらに館内には行く手を阻む自動説教マシン…もとい、“鬼の新田”がいる。そうやすやすと読めないからこの手の遊びは止められないのだ。

「姉さんっそろそろ時間だ」

「OK、カモつち。さて、ホンじゃ始めすか」

時計を確認して組んだ手を伸ばして気を取り直した彼女は普段報道部の腕章をつける腕を捲り上げるようにして画面に向かう。

「3、2、1、キュー!!」

「さあ、教員部屋にいるネギ先生に最初にアタックできるのは誰なのか!! それでは修学旅行特別企画!! 『くちびる争奪!! 修学旅行でネギ先生とラブラブキッズ大作戦』いよいよスタートです!!」

side:out

「何だ? 妙に旅館内が騒がしくなってきたような…」

「む、話を逸らさないでくださいっ今は…」

「あ、いや、そうじゃなくて…」

妙な気配の次は館内でわずかに感じ取れた殺気というか盲念というか、若干身震いしそんな感覚に囚われつつも彼、鳴守、音来（幼身体）は彼の生徒兼弟子であるアキラに問い詰められていた。

それというのも遡る事十数分前、ネギの部屋の前で刹那達と別れてから少し経ち、二手に分かれるかと提案しようかというところでアキラが話があると待ったをかけたからだ。

敵の襲撃は無いと予測しているとはいえ今は警戒中だ。がしかし、彼女の真剣な表情に無下に断れなかった音来は正面入り口と非常口である裏口まで一本道が続くロビーへ移動することにした。

ロビーはさすがにこの時間は客もいないが話の内容が魔法関連だと当たりをつけていた音来は途中はから認識を逸らす呪術を編んだ魔具を使用している。これは会話もそうだが対象である本人達も認識の外にずらしてくるタイプなのでもし途中で新田先生などに出くわしても見つかる心配がない。

「昨日のやり方についても言いたい事はたくさんありますが、私がいまず聞きたいのは貴方があの夜以降、どこで何をしていたかという事です。つあれだけ探しても行方が分からなくて…ある日ひょっこり姿を現したと思ったらまたいなくなって！私がどれだけ心配したとつ」

段々と言葉の端々に力の入る彼女の様子に気押されつつ、今までネギ達の手前堪えていただろ感情の発露としてぶつけられたそれに、音来は悲痛な面持ちで受け止める。

確かに音楽は弟子でもあるアキラに何も告げずに姿をくらました。それにはちゃんとした理由があり、彼が自身に下した判断、いや、臆病な自分自身が逃避した事による結果だ。そう思うと今の彼女の泣き叫ぶような言葉に胸を抉り取られるかのようにだった。

しかし、その胸にある事実を言えたら楽になるだろうか？

その答えは出すまでもなくNOとしか言えない。

だから彼は震える彼女の肩を抱いてやる事も、その疑問に答えてやる事も出来ない。

己にその資格はないと自身を断罪する彼はただ黙っているしか手段が見つからなかった。

「……やっぱり何も言ってくれないんですね」

「アキラ……」

「…邪魔になったんだったらそうはつきりいつてくれた方がすつきりしますっ」

「そうじゃないっ俺は……っ」

俺は、何だというのか…、秘密をばらすのか？こんな勢いで？

アキラの嘆いた言葉に思わず出かかった自分の言葉に自問してしまう。だがそれこそナンセンスだ。言えるならさっさと打ち明けてい

る。言えないからお互いに苦しんでいるんだ。

だが、こうまでして心配して訴えかけてくる彼女をそのまま無視するというのは間違っているかと告げているのも間違いなく自分自身だ。なら…あの日何があったかを言えなくとも、せめて現状を包み隠さ

ず告げるべきじゃないのか？

「……ごめんなさい、やっぱり」

「待ってくれっ！」

その場を立ち去ろうと立ち上がったアキラに思わずその手を掴んでしまう。

それこそ何を言うのだと音来自身自分の中で答えはまとまっていな
い。

だけど、彼女にここまでさせてしまった以上このままでいられない、
何より一時的とはいえ彼女を守るという約束を他人任せに放棄して
しまっていた。償い、とは言いたくはないがこれ以上隠しては
この関係も壊れるような気がして、ついに彼はわずかな勇気を持っ
て決意を告げるべく口を開いた。

「俺が、俺がお前から離れてたのは……………」

「先生…………あっ」

アキラが音来の背後に何を見たのかそちらに気を取られるように目
を向けてしまう。

だが、その心境からかそれに気付かない音来はそのまま言葉を発し
ようとして…………

バキッと衝撃音と言い難い音を立てて崩れ落ちる事となった。

ここで捕捉させていたきたい。

今現在まで音来はアキラを含む己の周囲に自身の認識をずらすよう
魔具を発動させていた。

つまり、周りの人間にとって二人以外に誰もいなかったロビーは無

人でしかなく、そこには無機物以外何も無いと認識される。
さらにはその魔具の性能がいいのか同じ魔術を触媒とする紙型の身
代わりの目すらも欺いた。

なぜネギの紙型が4体もいるのか、なぜ彼らがこの場に集結したの
かは倒れ行く彼には与り知らぬ事ではあるが…
結果として、いないものと認識された彼は普段なら避けれていただ
ろう他の接近に気付かず、反応する前にそれらの膝がとび蹴りとな
って多方から炸裂することとなってしまったのだ。

「ねぎくん」「ネギ先生」

さらに集まってくる他の生徒らしき声を耳にするも、うまい事急所
に入ってしまった音楽の意識はそのままフェードアウトしていった
……

side:Aruveil・Chamomile

大量仮契約カードゲット作戦、『くちびる争奪!!修学旅行でネギ
先生とラブラブキッス大作戦』を画策した朝倉、カモの二人だった
が終盤にかけてまさかの大波乱、何とターゲットであるネギが5人
に増え、その上それぞれが生徒にキスを迫るという事態に。

いや、当初の計画ではネギがキスに積極的なのは大歓迎のだが本
人が5人に増えるというのは想定外だったのだ。

「な、なんで兄貴が5人も??つ!??」
「ど、どどうすんのよ??こんな聞いてないってば??」

実況場として無断で拝借した一室で騒ぎ立てる主謀者二人にとつても予想だにしない事態に大慌て、迫られた生徒達も大慌てという事態だが現場はお上の都合など知った事かと言わんばかりに勝手に進行していく。

「およ?5番のカメラに映ってたネギ君が消えちゃったよ??」
「なぬ!??」

そう、急展開に倍率人氣がトップに躍り出た5番のカメラが捉えていたネギが突然爆発し、盛大に煙を上げて消えてしまったのだ。

(ふ?む...こりゃ、使い魔の類か?)

ネギのもとから離れていたカモは知る由もないがこれは刹那がネギに貸し与えた変わり身の紙型による分身で、彼が名前を書いた際に失敗した物を処理しなかったためにお頭の弱い彼らがあるとある生徒の一言によって命令と誤認して暴走したのだ。

そんな彼ら身代わり、sは仲間の一体を失うもそのまま暴走は続き、ついには騒ぎを聞きつけた新田先生を蹴り倒してしまう。現状、もはや收拾不可能な程に混乱が極まっていた。

「お?姉さん姉さん、この生徒参加してたか?」

「ん?、何も映ってないけど?」

「な、そんなはずは.....」

そんな混乱の場に出くわした参加者一同、そしてその場にいないはずの少女が一人、一瞬カメラに映った。

それも和美がモニターを見直す一瞬の間に消えてしまったので誤認かと二人は片付けたのだが…

画面はそんな事はお構いなしに次々と身代わり、偽ネギ達が爆発と共に消えていく。

それと同時にカモの手元に現れるカード。

これが今作戦の要であり本命、魔法使いの従者であるその契約の証明として作られる魔法の便利アイテムの量産だ。

奇しくも偽ネギとのキスでも発生するようで次々と出現する。

「おお??? つてスカカードか、でもくーちゃんにまき絵、それと鳴滝姉妹が結構大量に……お? いいんちよのまで出てきてこりゃ大量だね　ほんとに」

しかし、現状参加した班員のほとんどが爆発に巻き込まれて再起不能となり、無事なのは最初に偽ネギを迎撃した5班の綾瀬　夕映と宮崎のどかのみ、要はすでに賭けとして成立しない状態になりつつある。競走馬が一匹しかないのではレースなぞできようはずもない。

「つまり、ネギ先生は全員ニセモノ。という事はこの瞬間…トトカルチヨは親の私が総取りか????!?」

抗議の声が各部屋に仕掛けたモニターからかかるも無視を決め込んで撤退にかかる一人と一匹、状況から見ても動きが期待できないのなら引き際、終わり時で逃げるが勝ちというやつだ。

「あ、姉さんっ本物の兄貴だぜ!!」
「な…なぬ!？」

今度はカモではなく朝倉が驚きの声を上げてモニターに食入る。誰がこれを予想しただろう?なんと残った5班の二人がいるロビーに本物と思われるネギがやってきたのだ。

「まちがいねえっ多分見回りに行ってきた戻ってきたばかりなんだ!杖も持つてるしこりゃあ」

その時を固唾を呑んで見守る一同、なにやら話し込んでいるようだが一向に進展があるように見えず、またこの距離では音も拾えないので視聴者は映像を前にジレンマとともにただ見守るしかない。

そして

「お　　つと!!!!ここで大番狂わせ!!まさかの大逆転だ
!!優勝は宮崎　のどか　　!」

朝倉の終了宣言と同時に旅館全体が騒がしくなる。そしてカモの手にスカカードではない正規の仮契約カードが出現した。歩み寄ろうとした彼女が何故か倒れそうになり、それを支えようと

したネギとの二人の唇が重なってしまったのだ。なんとというラッキースケベ…

「へ??、これが宮崎の契約カードか…ま、トトカルチヨの方は総取りとまではいかなかったけどおいしい思いはできたしね」

「フフフツ、こっちもスカカードが5枚、本屋の嬢ちゃんの正規の

物を合わせれば6枚だ、ま、大がかりだった割に情けねえ結果だが、急ごしらえにたてた作戦の成果にしちゃ上々さ」

「シシシッさて、いつまでもここにいたら新田に見つかるかもしれないから私たちもここいらでトンずらしましょうかね…」

「そうさな、姉さん俺たちは魔方陣の方を片付けに行ってくるけどこっちは後は大丈夫か？」

片付け始める朝倉を手伝っていたカモは証拠隠滅の為に魔方陣を消しに行く旨を伝える。

ここまでの準備は主に朝倉が機材をセットしてカモが手伝う形だったがさすがに魔法関連の術式を一般人に任せる訳にはいかない。

彼女もそこら辺は自分の管轄の外だとわかっているので片付けながら片手を振って了承を伝えた。

「そんじゃまた後で合流…ったあっ！…な、なんだ？こんな所に棒きれなんて…」

もちろん、その場を無事に出れたらの話だったのだが…

「ほう、どこへ行くというんだアルベール・カモミール…」

「ひいっ！…あ、あんたは…」

「ん？どうしたのカモっち…ってボク？だめだよ勝手に入ってきてちゃ、お母さんとお父さんはどこにいるのかな？」

素っ頓狂な声を上げる相方が気になり、扉の方に目を向けた朝倉が見たものとは出口を塞ぐように立っていた一人の子供。

が、近くまで歩み寄った朝倉を前にしても子供は動じずに彼女を見上げるだけで…

「ずいぶんな挨拶だな朝倉、今日顔合わせをしたばかりだろう？」

「こら、年上の人をよびすてにし、たり……………」

そこで昼間の出来事を思い出して固まる。

そう、まだ日も跨がぬ今日の出来事、なにやら衝撃的な出会いを果たした事を記憶の片隅から引っ張り出す。

それは忘れようにも忘れようのない出来事だったはずなのに一仕事終えた安堵感からか彼女らしくないミスをおかす。

「お、音楽先生？」

「おう、思い出してくれたか。まあ今更自己紹介なんて面倒だしな、ちやつちやと用件だけ済ませよう。さ、用があるのはお前だよ、小さな小動物」

「ひゃうつ!？」

「…言つたよな？今度妙なまねするようなら下ろすぞって……………その薄汚い皮剥いで襟巻にしてやろうか、あ、あん？」

「ま、まあ先生、これには深い訳もあって、ひいてはネギを助けるために陰ながら動いたことで悪気はなかったんだよ」

「ふむ、朝倉の言い分も分かるが……………それだけで一般人を本人の了解もなく巻き込んだのか？」

横から相方が助け舟出すもを聞き入れる様子はないようで、心もち

落ち着いたように聞こえる声もその表情が入ってきたときから変わらないのでは一向に冷や汗が引かない。

「あ、あの…それは事後承諾と言いますか…、ほら今は敵がどんな手でくるかわかりやせんし、自衛の手段として持たせておくのにも」

「はあ???...分かった、その件に関してはとりあえず承服しておこう」

そしてカモ自身も身の潔白ほしんの為に必死で事情説明じじょうせつめいするも相手は聞き入れてくれているのかも怪しいような答え方でカモはついその短い脚を一步後ろに後ずさる。

「が、今の俺はとても虫の居所が悪くてな…誰のせいであんな事になったのかと思えば　もういい、取り繕うのは止めよう、これはやつあたりだ」

「は？」

「今日まで地獄のような特訓を切り抜けてきてみれば思ったよりも複雑な状況だし敵は目の前で着いたそうそう戦闘しなくちゃいけない仲間内には疑われるしまあそれは慣れっただけどさよりにもよって弟子にも疑われて泣かれかけるしいざ俺が人が一世代の決意で告白しようと思った所で邪魔は入るわ面倒事は増やすわ拳句の果てにこいつ等は反省の色は見受けられないしあれだよねコレ?これってお置きOKってことでいいんだよなそうだ神様が俺にこいつらを懲らしめろって言っているんだそうに違いないそうしようそれがいい……」

「あ、あの音来の旦那？」

何やら一息にぶつぶつと唱え終えた彼はゆらりと顔を上げて力毛達に向き直った。

「ああ、すまない。じゃあに生ものから済ますとしようか」
「何を!？」

その顔は清々しいまでの笑顔であったが目が笑っていない。何よりどこから取り出したのか両手に4本ずつ携えたナイフが次の瞬間に告げられるだろう結果を予測させて、カモの小さな体に悪寒を募らせる。

「安心しろ、ナイフ投げは遊び程度だったが大したなんでいる。林檎を粉碎するのは得意だったぞ」

「それナイフ投げの表現じゃないっすよ　　ってひいっ!！」

全く感知できなかったそれは飛来した物体を目測させず、風を追い越して己の横に粉碎音を喚き散らしていた。

ギリギリとブリキのように着弾点に目を向けると、壁に刃先どころか柄の半分ほど壁を砕いて埋まっているナイフがあった。

そう、彼の言う事は誇張でも何でもなく事実であり、こんな一撃を受ければリンゴなど刺さるまでもなく粉々になる。

カモはあと数センチずれただけでおこりうる事象に身震いしつつまさか本気でと見上げるもそこに立つ人間は瞳に光が窺えず、余計に体を震わせる結果となった。

「せいじゃあ私はこれで…」

「どこへ行く?」

「へ？」

「俺はお仕置きには平等な方だ。この畜生に灸をすえたらもちろん、次はお前の番だよ朝倉 和美」

そうして開かなくなった扉を必死に開けようとする和美と逃げる要にも足がすくんでしまった力モの二人：

聞こえない絶叫と悲鳴が響きわたったそうなの。

この後、偽ネギによつて騒動に巻き込まれて意識を失っていた新田先生によつてその場にいた3-A生徒は全員正座、ただし、新田先生が朝方まで必死に探したものの首謀者とみられる生徒は見つからなかったという。

そしてその日の早朝、女生徒はクラスメイトによつて発見される。もっとも、その子は発見当初に軽い錯乱状態であり、心配した先生陣の配慮から新田先生からのお咎めなしとなったのは余談である。

取立30回目　～暗躍するは身内達、苦勞の重掛けな先生達～（後書き）

つとそんな感じで久しぶりにギャグ要素が少しばかり加味された？
今週話でした。

まあ、今までの雰囲気を崩したくなかったのでその要素はかなり削りました。それに修学旅行2日目を30話で何とか終わらせたかったので…といってもそのおかげで少々無理してしまっただ感はぬぐえないんですが（苦笑）
できる限り違和感を抑えようかと努力はしてみました！

その他には補足的な説明が多い最近のお話、魔法や呪術に関して独自の解釈も交えているので説明不足にならないように保管させているのですが、これが一番削りにくかったですね。ええ、後半の仮契約作戦も含めて大分削りましたがこっちの方が苦勞しました。
その他主人公視点強化という名目でその仮契約中の流れを大幅にカットしています。

まあ朝倉は本編で姉御肌な活躍をして私的にかなり好印象なので今後は活躍を増やしてあげたい…具体的には学園祭編あたり？
原作も思わぬキャラの登場でさらなる超展開が予想されるので来週が待ちどろしいです。

…まあそれよりも自分の事を何とかせにゃいかんですが（汗）
では今日はこのくらいでお暇させていただきます。

最後までお付き合いいた大ありがとうございました。また次のお話も読んでいただけると嬉しいです。

それでは次回、又は近況報告の方でお会いしましょう。
どうもありがとうございました！

再見ッ！！

取立31回目　く獣、咆哮と意地の衝突。封鎖された空間の中で（前書き）

ども、人間やる気になれば結構何とかなるんだと再認識しているトントンです。

なんと、今回は久々に3日経過で投稿です。

2日はなんだかんだと誤字修正で全く手をつけなかったのに……何のスイッチが入ったのかペースがだんちでした（失笑

と、せっかく早くできたのでさっさと本編の方をご覧いただかなくては（焦

では、31話を迎えた本作、どうぞ今回も？最後までお付き合いください。

取立31回目 く獣、咆哮と意地の衝突。封鎖された空間の中で

「ちょっと！こんなにカードいっぱい作っちゃって、一体どー責任取るつもりだよネギっ」

「えうつ！？ば、僕ですか！？」

朝、集団朝食を終えて集まった一同の場で一人最少年の子供先生に詰め寄る女生徒。

だが、それを擁護する人間はこの場にはいないようだ。

それもそのはず、今回の問題は無関係である筈の一般人を危険を内包する魔法関係側に無了承に巻き込むという。言うなら詐欺や犯罪になりかねない事態だったからだ。

これでも擁護するならそれは余程の考え無しかお人よし、もしくは同罪者ぐらいなものだろう。

「まあまあ姐さん、落ち着いて」

「そうそう、儲かったってことでもいいーじゃんアス…」

そんな中助け舟…を出そうとしたのは此度の騒動の主犯である二人だ。

が、二人は擁護しようとして明日菜に声をかけようとしたのだが、突然ビクリと肩を震わせたかと思うとそのまま縮こまって何やらブツブ

ツとしゃべりだした。

聞き取りにくかったが「ごめん」という単語を多用しているところから一応反省をしているようである。が、それにしても異様な反応、時たま呟かれる「ナイフ」とは何のことだろう？

「何なの？」

「さ、さあ？」

事態を呑み込めていない明日菜とネギに対し、おぼろげに呑み込めた刹那とアキラは乾いた笑いを浮かべつつ、目の前で震える二人に心の中で手を合わせておく。

「たくつ、イベントの景品らしいからカードの複製を渡したのはしよ
うがないけど…こんな通信以外に役に立ちそうもないもの貰って
もしようがないじゃない」

手に持つ6枚の契約カードと睨めっこしつつ、ジトつと睨む程度に
収まっているあたり予先は弱まったが、基本根は良いので無関係
な人が巻き込まれるのは気に入らないのだろう。おそらく実体験に
基づく経験的なものかもしれないが…

まあ、音楽もむやみに関係者を増やすような軽率な行為には反対な
ので擁護する気はかけらもない。むしろ制裁は身を持って刻んだ筈
なのでそれでも懲りないようなら救いようがないが。

「そういうなって。実際、カードの念話機能は便利なんだぞ？携帯
と違って小難しい動作はいらんし……ってなんだその目は」

「いや、別に……」

「今時携帯が小難しいって、どこぞのおっさんじゃあるまいし」

「お、おっさっ」

「あ、明日菜さんもっとオブラートに！そういう事は例え思っても黙っているものですよっ」

若干の精神的打撃を受けるも務めて平静を装おうとする音楽。

この辺はさすがかもしれないが、話の内容が内容だけに小さく見えしてしまうのはしょうがない…ように思える。

「……まあ、今後明日菜も前線に出る危険があるんだ。これくらい知っておくべきだろうな」

「え？」

気を取り直して形でテーブルに置かれていたカード、明日菜の契約カードを手にとった彼はそれを彼女に手渡した。

本来ならこういうのはネギが契約を補助したカモなどが説明するべきなのだろうが、ネギは契約については知識が少ないしカモについては今だすみで震え続けている。

……どうやら昨日はやりすぎだったかもしれない。

まあ、それについては自業自得な面があるので音楽はその姿をシャットアウトして明日菜に向き直った。

「これを持って『来れ《アデアット》』と唱えてみる。効果は…まあ、お前の場合言うよりやってみた方が早いだろ」

「な、なんか馬鹿にされた気がするんだけど……」

不承不承といった風に受け取ったカードをちらりと見た明日菜は納得いかないまま、ぼそりと言われたとおりの呪文を唱える。

「あ、『アデアット』 きゃっ……ってなんか出たっ!？」

一瞬強い光を放ったそれは形を全くの別のものに変える。

契約カードの能力の一つにして一番重要な能力。

契約者の能力・象徴を体現させる唯一無二の魔法具、アーティファクトの召喚である。

「それは…昨日ネギが出した」

「うわ 私も魔法使いみたい」

出現した魔法具、“ハマノツルギ”という……ハリセンを掲げて少々上機嫌そうな明日菜と感心したようにそれを眺める一同。

が、ただのハリセンと侮るなかれ、なんとこの武器？は一昨日の襲撃時に敵の式神を一撃で送り返してしまおうという特殊効果を発揮したのだ。存在そのものが紙に魔力・気を宿して動く式神は能力も様々で物によっては絶大な力を持った式もいるという。もちろん術者によってピンキリであるので単純にハリセンの力が見た目に反して強力だったという事も考えられるが。

一昨日、その式神が消える様を目にした皆、特に式神の知識がある刹那の認識は違った。

式神は通常攻撃で消滅する際にはその核となる式符ごと消滅もしくは破損する。

が、明日菜が行ったのは式を送り返すという存在を否定するにも等しい、陰陽道においても高等とされる手法だ。

少なくとも魔法を知ってわずか、適切な訓練も受けずにできるものではない。ならそれは彼女の特性、潜在的に秘められた力という事になる。

なぜそれが明日菜なのかは不明だが、彼女を即戦力たらしめる要因になるほど強力な能力なのは間違いない。

「…この間も思ったんだけど、なんで武器がハリセン？」

「さあな、カードの能力つてのは契約の精霊つてのが判断しているらしいし詳しい事は俺よりその小動物の方が詳しいだろ。ま、絵柄は大剣だからな身体的か精神的な問題でブロックされてるんだと思うんだが…訓練すりゃー使いこなせるかもしれないな」

「え??、いいわよ別に使いこなさなくて」

まあそれが一般人としての反応だろうと音来は思う。

明日菜の場合その場の勢いで事情説明をすつ飛ばした契約だったらしいので覚悟だったり心構えといったものは後からきているのだろう。

だから不満を垂れつつ無邪気にハリセンを振り回して喜んでいるのは微笑ましいのだが……

「ねえねえ！これカードに戻す時はどうすんの？」

「……『去れ《アベアット》だ。浮かれるのもいいが』

言おうとしたそばから『来れ』『去れ』を繰り返し唱えてまるで手品のようなとはしゃいでいる明日菜。

…気持ちは分からなくないと言ったが前言を撤回したくなる。

今日は修学旅行3日目、音楽が敵の襲撃があると予想した日でもある。

できればもう少し緊張感を持って欲しいと思いつつ、彼は小さく溜息をついた。

「……話を本題に移っしていいか？」

「あ、はいっ」

咳払いしつつ、話を変えるべく切り出す音楽。

といつてもその話題を振ったのは彼自身でもあるが…緊張感が欠如した現状に渴を入れるには仕方ないだろう。

一昨日から散々繰返した情報を確認し合い、そして肝心の今日の行動を確認し合う。

「昨日も言った通り敵の動きがあるとしたら今日だ。任務である以上、西の長に親書を届けるのは礼儀としても絶対だ。ネギは予定通り今日西の総本山に向かってもらう。刹那は木乃香の護衛とこれは動かない。…で、昨日刹那と相談した結果、従者である明日菜はネギと、アキラは周辺警戒をしつつ木乃香の護衛をしてもらう」

「先生はどうするのよ？まさか自分だけ楽しようとかじゃ…」たわ

け「あいたつ」

「こんな状況下でそんな呑気に構えてられるか、護衛対象はお前から以外の3-A全員だよ。一応、学園長から万が一の為にクラスメイクトの安全確保を言い渡されてるからな」

音楽に叩かれた頭を押さえて睨み返す明日菜の視線を右から左に受け流して説明を続ける。

今回の分担はより戦力を均等に分けたつもりだがアキラを自身の傍に置かなかつたのは昨日の出来事が少々気まづかつたのと今日は完全に裏方で動き回るのでその方が身軽だったからだ。

「っと、そうだ。アキラは認識阻害の呪符を渡していたな、あれは今回は使わないでほしいんだ」

「え？」

「敵も呪術使いがいたからな、一般人の目を誤魔化すならともかくそんなもん使えばここにいて知らせるようなもんだ」

音楽は合流以降にアキラが使える手段はに確認している。

その際から念頭に入れていた事だがこればかりは仕方ない。彼女の認識阻害の呪符は簡単に言うなら一昨日敵が仕掛けていたものの簡易版の様なものでまだ習熟度としては甘い。

一般人の目を誤魔化す程度なら問題はないかもしれないが、魔道に心得のある者や同様の術に精通した者の目を誤魔化すまでには至らない。

さらに尾行となれば必然的に一人となる、むしろ音楽も陰ながらフオローには回るつもりだができる限りは一人で切り抜けてもらいた

い。その為の提案だった。

「それは判ったけど、私は他に隠蔽術は習得してないし、尾行もちよっと…自信ないかな」

「ああ、それについては刹那が式神をつけてくれる事になってる。だからアキラは簡単な変装程度で後からついて行けば大丈夫だ」

もとより昨日相談を持ちかけた時点でこの案は頼んでいたので問題はない。

刹那の予定では各班に式神を放つつもりだったようだがそこに音楽が裏方に回る事で負担が減ったのでその分を回してくれる事になったのだ。

さらに生徒護衛には瀬流彦もいるので人員的には心配がない。連絡手段を確認しつつ、そろそろ生徒が今日の自由行動の準備に入るだろう話を切り上げる。

「いいか？敵も本腰を入れてくる。警戒は怠らないように…あと、一般人は巻き込まないように、慎重かつ臨機応変に対応して欲しい。以上だ」

明日菜達生徒組、教員であるネギに一般客名義の音楽はそれぞれの準備に備えるべくロビーを後にした。

「って、俺は言ったばかりだったよな刹那」

「すみません…」

「いや、チビ刹那、お前に言ったんじゃ…もういいめんどくせえ…」

今愚痴っている音楽は目の前のゲームセンターで一際騒がしい一団を目に、やはり溜息をついていた。

そんな数分前のミーティングを思い出して目頭を押さえている音楽に相変わらず癖が直らないと苦笑しているアキラと、諸事情により刹那の式神であるチビ刹那が浮遊している。

彼らが見ているのはネギ御一行＋、一度支度をするために解散した筈なのだが…何故かその中に一般人である早乙女や夕映、のどかそして別行動をとるはずだった木乃香と刹那までいる。

そう、抜け出した筈の明日菜が早乙女達に見つかりネギと合流してしまったのだ。

それを離れて観察していたアキラから連絡をもらい、彼女と音楽が合流した頃に刹那がチビ刹那を此方に寄りこし、現在にいたる。

正直に言おう、刹那お前がいてなぜこうなったと叫びたかった。

この手の事に慣れていないだろうネギ、全くの素人である明日菜が尾行されたのは百歩譲ってまだ分かる。だが、仮にも穩行にも精通している刹那がいて一般人の合流を許したのははいただけない。それは音楽でなくとも話を理解していたのかと愚痴りたくもなろう。

「それで先生、どうするのアレ？」

「んあ？どつするもこうするも、一緒にいるもんをいきなり消したら不都合が出るだろ。ありゃネギ達が自力で抜け出すのを待つしかないな。ま、そんな時にもあいつらが撒けそうになかったらフォローすりゃいいぞ」

そもそも穩行とは隠れ潜み見つからない事が前提であって、すでに共通に認識している存在同士を別けるのは穩行とは言わない。それは認識を強制的にずらし、記憶を改竄する魔道の中でも一際手間のかかるうえに準備も必要になる術だ。

音楽も仮にも魔法使いではあるが、どちらかといえば戦士寄りの部類である。もちろん普通ならその手の手段は彼らにとって必須ではあるが、音楽はこの記憶を操作する術を嫌っている。

といつてもほとんど独学で魔道を進んだ彼が記憶改竄等という精密さを要する魔法を使用すれば後遺症を残す危険性もあるのだが……

ともかく、こうなった以上ネギ達が何らかのモーションを起こしてくれなくては打つ手がない。

とりあえずは人通りの多い所を通って撒くつもりのようなのだが……残念ながら平日に組まれる中学生の修学旅行期間というのは客の量がシーズン時より明らかに少ない。まあそれでも比較的人通りが見られるあたり、この地域の知名度が窺えるが。

「はい、先生の分」

「お、サンキュっ」

「……敵の動きは？今日だよね、先生が予想したの」

店の外から全体を把握できるよう向かい側のカフェで観察していた

音楽は注文をとってきたアキラからアイスティーの容器を受け取って隣に座るように促す。もちろん会話内容が周りに悟られないよう細工しておくのは忘れない。

「そうだが、まあ、固まってるうちはまだ仕掛けてこないだろうな。敵も馬鹿じゃない、こんな街中で仕掛けてきたらそれこそテロ騒ぎだからな…ズズ　　っはあ　　、一昨日の手口を見た限りじゃ無関係の一般人を巻き込まないっていう最低限の良識はあるようだから、ああして人が多い場所にいる分にはまだ安心できるさ」

（敵が、なりふり構わず攻めてこなけりやな…）

内心、音楽が懸念しているのはそれだ。警護側が何を一番恐れるのかといえばそれは不測の事態に陥ることだ。

こちらにとっても一日の猶予があって迎えた3日目であるが、それは向こうにとっても同じ事、むしろ責める必要なく準備に専念できた敵側と違って昨日も警戒に神経をすり減らしたこちら側とはコンディションも違う。

その為音楽は負担をできる限り自分に向くように割り振ったつもりだが、全くのゼロというわけではないだろう。そういう物は蓄積すると人の判断能力を鈍らせる。ただでさえ後手に回るしかない護衛側は今日という日に常に神経をすり減らさなくてはならない。

そのうえで相手が奇策を打って出た場合こそ勝負の分かれ目だ。考えたくもないが敵が一般人を巻き込まないという先入観も捨てるべきではある。

ただこの場でさえ見た目肩に力の入っているアキラにそれを伝えるのは音楽にはためらわれた、それだけの話だ。

「……チビ刹那、お前はもう少し落ち着け。そんなんじゃない、一般人にも気取られるぞ」

「あ、ハイっ」

もう一人のアキラとは違った意味で緊張している一人、もとい一体のチビ刹那。

見た目、人形な彼女は隣に座るアキラの腕の中だ。

こういう時カモフラージュできるのは便利だがもう少し表情を抑えるようにしてほしい、本体同様に木乃香の事が心配なんだろうが、中の情報をより正確に伝えるのは彼女の役目なのでもう少し引き締めてもらいたい………なんとというか、ハラハラと表情を変えるのが周りにばれないかと気が気じゃない。

確かに音楽も心配事がないといえば嘘になる。

それは、敵の動向など真に読むことは不可能だからだ。

がしかし、それでも音楽は今回の件は乗り切れると考えている。

それも身内に鼻屑目もなしでだ。

流派の中で若いとはいえ麻帆良でも上位に位置する実力者である刹那、魔力無効化と式神には無敵の力を誇る明日菜に世界でも屈指と言っているほどの魔力を秘めたネギ、アキラはここ一週間修練には付き合っていないが事前の実力で自衛の手段は叩き込んだ上に模擬とはいえ刹那の次に実戦経験が豊富だ。

バックアップも瀬流彦に自身も入れれば即席にしては十分過ぎる戦力、確かに数の上では少々心もとないがそれは敵も同じ話だ。

それに、

彼には万が一の為の奇策をエヴァンジェリンから授かっている。億が一にも遅れをとるつもりはない、もしそんな事態があったとしても払う代価に覚悟はできているのだ。

「！？先生つ動きました！」

そうして待機から何分が経過したのか。

思ったより時間がかかったなと視線を戻した先には店の中から抜け出す二人の姿があった。

「ん、うまくいったようだな…じゃ俺は元の配置に戻る。アキラとチビ刹那はこのまま」

そうして音楽は目に移った人物に言葉を止めて溜息を吐きたくなつた。

彼女はここまで行動的な人物だっただろうか？

いや、そんな詮索は後回しだ。幸いネギ達の後を追う姿は彼女一人だけ、それがあの早乙女などでない分まだマシだろう。

「なんでつけられるかねえ……」

「私がつ」

「顔見知りのお前が言ってどうする。俺が適当に撒いてくるから、ちよつと待機してろ」

そう言つて一人席を立った彼は店先でネギを追つていったのどかを

引きとめる為に店内の混み具合をもともせず悠々と出ていった。

「きゃっ!?!」

「わあ!?!」

結論から言つて、音来が彼女を引きとめた手段は単純だ。
出会い頭の衝突事故。

路地の裏から飛び出した音来とのどかがぶつかるといふ何の捻りもない作戦だがこれはこれで普通の人間には有効だ。

何しろネギは足が速い。まあ、魔力強化のそれに素で並走できる明日菜は論外だが、とにかく彼らの移動速度は通常ではない。なら足止めなど必要なく、少しの間目標を見失う時間を作ればいい。

「あたたっ」

「ごめんなさいっ急に飛び出して!お姉さん怪我ない?」

普段の大人ぶつた声はなりを潜めた声色で人畜無害な子供を演じる音来。それもそのはずで、彼の今の姿はどこからどう見ても学園教師の姿からかけ離れた少年ボディ、もちろんこの手の変装を仕事柄得意としていた彼は髪の色艶から体の色、さらには骨格の微妙な変

化といったオプシオンまで使用し、一般人ではまず、判別不可能な域の変装を可能としていた。

「あ、大丈夫ですーあなたこそどこか怪我は」

のどかはクラスの中でも一際良心的な人物だ。それを利用してようが気が引けなくもないが、狙い通り目の前でぶつかった少年である音楽を当初の目的はそっちのけで心配してくれている。

「うん、僕は平気だよ。ちょっと足を擦り剥いちゃったけど、これくらいへっちゃだから」

「ち、血が！？大変っ」

実際は大きさに転んだ音楽がワザと擦り剥いた怪我であるがそれを見た彼女は慌てて手持ちのポシエットから絆創膏とガーゼを取り出した。

「……これでよしっ」

「わあ、ありがとうっお姉ちゃん！」

「へへ、どういたしましてー」

手慣れた動きで血を拭き取り、絆創膏を貼ってくれる姿にやはり心が痛むが…

「本当にごめんなさいっお母さんのお使いで慌てて…」

「ふふ、いいよー気にしなくて。でも、今回はよかったけど、車と

かだつたら大変なんだから。今後は飛び出さないよーに、分かった？」

「うんっ！」

背後の気配を探ってネギ達が十分離れたのを確認して早くこの場から立ち去る事にする。

彼女だけならまだしも他のメンバーがこの場に合流してしまつたら今度は自分が離れるのに面倒をきたす。それでは本末転倒でしかない。

「ありとうお姉ちゃんっまた会つたら絶対お礼するから！」

バイバイと手を振る彼女に元気よく走る少年を演じ続けて交差点を曲がり、大周りをしてアキラがいる場所をたどって合流する。

「…………えつと、誰？」

それが一仕事終えて戻ってきた師匠に対する弟子の第一声だった。

街中を一人の少年が歩いていた。

学ランにニット帽という春先には少々厚手の恰好をしている彼は不機嫌を絵にかいたような表情で黙々と練り歩く。

いや、時たま悪態をつくように道端の石を蹴り飛ばしてはいるがそれは特に変わり種のない光景だろう。

「ケツおもしろくないっ」

彼、犬上 小太郎はどこからどう見ても不機嫌だった。

それというのも一昨日の晩、彼が雇われた呪術使いの女に今日の任務から外された為だ。

元来、好戦的な性格をしている彼にとって謹慎というのは実に面白みがない。

しかし、一方で謹慎の原因となった夜の出来事からその理由は理解はしている。

あの夜、不意を突かれて己の右足に鉛玉と骨を折るといふ真似を貰った黒髪黒装束の少年、自分と同じくらいの子供から戦闘に支障の出る怪我を与えられたというのは彼にとってもシヨックだったのだ。

だが、それとこの謹慎に納得しているかと言われれば話は別だ。

犬上 小太郎という少年は考えるよりも即実行、緻密な作戦よりも突発的な閃きといった本能に忠実な性格をしている。

その本能に従うならこんな所で燻っているというのは我慢ならない。今は辛うじて理性が先走る事を抑えているがそれもきっかけがあれば弾けそうな状態だ。

だいち件の怪我ももうほぼ完治している。

さすがに細かく砕かれた骨を元の形に戻すのは容易ではなく、まだスラスラの部分もあるが奥の手を使えば十分戦闘は可能だ。

付け加えるなら、小太郎は裏稼業を生業として食撃いできたうちだ、この程度の怪我はそう珍しいものでもないし、これより酷い状態で戦わなくてはならない時もあった。

だからこそ、あの時痛みに足を止めた自分に腸が煮え繰り返る。

「 !? 」

ピクリと彼の血に流れる部族のなせる業か、その耳が、鼻が近くに異物があると教えてくれた。

（これは…一人か…なんや妙に探りにくいけど !? 」

そこで彼の思考が止まった。いや、急速に一点の事柄に強制的に集約されたと言った方が正しい。

僅かに、ほんの僅かに違うこの気配と匂い…

その気付いたこちらを挑発するように発せられた殺気には身に覚えが、忘れようにも忘れられない感覚がよみがえる。

「 …… おもろいやんけ、その挑発のつたるっ 」

睨む先にいるであろう敵を目標に彼の姿はかき消えていた。

小太郎が走る事数分足らず、郊外とも街中とも言い難い人気のない……いや、人払いがされた公園でそいつは待ち構えていた。

「よう、見つけたでっまた会ったなこの間の黒いの」

「おお、見つかったやたか……今日はおとなしくブラブラしてようと思つてただけだな」

昼間なのに肌の露出を嫌うように黒のレザースーツが首元まで覆い、手袋とブーツが合わさる事で顔以外を黒い一色で統一した彼は口元だけ器用にうすら笑いを浮かべてからかう様に小太郎を出迎えた。

「はっ！白々しい、あんなだけピンポイントで殺気放つてよう言うわ。自分に用があるんやろ？もったいつけずにさっさと言やええ！」

「はは、こつちもそのつもりだったんだけど……おしゃべりは嫌いかな？」

じれったい。

それが小太郎が抱いたそいつの第一印象だ。

一昨日は意識は失わないまでも夜だった事もあり記憶に薄い、さらにその時は碌に会話もなかったので印象も何もなかった。

それが今日になってみればどうだ？

少なくともあの動きから同業者か自分同様になみならぬ訓練を積んだ人物なのは分かる。

そこからきた想像はもっと寡黙な人物像。言いかえれば仕事を体現したような性格だと想像していた。

「ああ、そうそう。なんか俺の事“黒いの”とか言ってたけどコレ、髪の毛は地毛じゃないんだよね、変色系の魔法で元は金髪なわけよ、って同業者なら分かると思うんだけどこの国じゃブロンドって結構目立つんだよね。不便だし毎回数とか調整してるんだけどやっぱ黒が一番なじむな。まあこの服と合わせると結構いかつい格好になっちゃって」

だが目の前の人物はのらりくらりと距離を一定に保って喋り続ける。正直に言えば癪に障る喋り方だ。まあ、この手のやつに碌なのがない事は経験上8割方間違いない。用心して踏み出そうとする足を止めて警戒するがこの手の相手を苦手とする小太郎はどうしても表情に険が出てしまう。

「OK、分かった。じゃあ単刀直入にいこう……おまえの知ってる情報を全て吐いて貰う。なに、素直に喋ればこの間のような手荒な真似はしな……」

はつきりと断言しよう。

もう我慢の限界だった。

マシンガントークに続いて本題に入るかと思われた次の言葉。

その明らかに見下した発言について抑えきれず無意識に投げってしまったクナイを難なくキャッチされたのを確認した彼は学ランの上着を脱ぎ捨てる。

「怒頭に来た……言ってくれるやんけ、こっちは一昨日の借りを返したくてウズウズしてたんや。聞きたかったら」

意識を己の内に向け、体に流れる血が本能に呼びかけるのを合図に頸木を解き放つ。

“犬上 小太郎”

彼の聞きなれない名字は彼の部族、その身に流れるある妖魔の血からきている。

もともと彼は人と妖の混血であって、純粹種ほどの力は発現できない。が、それでもその血に秘めた力を解放することによって人の身にして絶大な力を発揮する。

“獣化”

狗族という妖魔の力を開放し、己の闘争本能と身体能力を飛躍的に上昇させる小太郎が持つ奥の手。

「力づくで聞き出してみいっ！！！」

強大に膨れ上がった力は体の筋繊維を膨張させ、彼に強靱な力とさらなる速さを与える。

その速さは高速歩法術“瞬動術”も合わさって既に常人に捉え切れる物ではない。

「へっ、よう避けるやないか！けどな、逃げてばかりじゃどうにもならんでっ！！！」

小太郎はさらに相手を追い詰めるべくその身を影分身で分身を作りだして物理的に退路を塞ぐ手に出る。

確かに目の前の敵は常人ならざる回避を可能にしていた。

しかし、小太郎はまだ十分余力を残している。つまり今以上に速度を上げられるのだ。

徐々にギアを上げるように速さを上げ、時に緩急をつけて惑わしながら相手の力量を測りつつ、決して大ぶりにならないよう心に歯止めをかける事も忘れない。

そう、今度は前の様な無様は晒さない。

状況的に見て有利なのは小太郎だった。

相手は一応に身体強化の類を扱っているようだったがそれもお粗末。仮に、高速歩法に覚えのある者だったとしても、その手の術は方向転換がきかないのが難点だ。つまり縦横無尽に高速展開する小太郎し、なおかつ荒いとはいえ複数の分身から本体を見分けるのは容易ではない。

そうして口元に笑みを浮かべた小太郎に、今度は鏡合わせのように笑みを返して少年が大きく離れた。

「…逃げてたわけじゃないさ。たった今まで細工をね、させてもらった」

分身を含めてほぼ360°を塞いでいたのにも関わらずその僅かな穴を抜けて見せた技量、驚嘆に値する事実を認識するとともに彼は肌を感じる異常を感じ取っていた。

流れという流れが消失している。人も風も喧騒すらも、この場の空気の流れが止まっていた

「空間凍結、結界の類か」

「へえ、さすがに知ってたか、正解だ」

小馬鹿にしたように告げる口調に怒りが募るが内心は冷静だった。そもそもわざわざ殺気を放って指名してきた以上コレが畏の類というのは判っていた。

しかし、人払いを済ませた場所にさらに空間を閉鎖させる意味が小太郎には理解できなかった。

閉鎖型の結界というのは認識を逸らす類のものと違って魔術的に高度な技法を要する。文字通り外部からの干渉を遮断するこれは術によって程度の違いはあれど通常は拠点防衛の魔術であって戦闘域に使用するものではない。

それというのも下拵えにかかる時間も道具も手間を要し、とても戦闘中に使用するのに向かないという事とそれよりも既存の簡易的な結界が普及してきた事により使い手が減ってきたという事が原因だ。

第一、目の前の男は魔法使いである前に戦士系だ。

西洋東洋とその魔術体系は異なれど大本、特に戦い方という物にそれほどの違いはない。さらにそれが戦いという争い事となるならそれは利便性をより効率的に追及されたものであり、立ち居振る舞いや間合いの取合いなどはそれが顕著に現れる。

小太郎も我流だが実戦を多く経験した戦士だ。

僅かといえど相対したのなら相手がどちらを得意とする性質なのかぐらいの判別は付く。

もっとも、実力を隠す者が多いより上位の猛者達ではまた話は違ってくるが。

ともかく相手がそういった類いでないならとてもこんな大魔術を御するようには見えない。

少なくともどちらかに傾倒した使い手であり、より戦士に重きを置いた戦い方を好むというのが小太郎の読みだった。

しかし、根は腐っていようと目の前の生き物は己と同業者、そして何より手段を選ばない類だ。ならそれ以上の何か、相手も奥の手を持っていても不思議じゃない。

体は依然として熱を放つが脳だけが冷却されたように冷静になってくる。

戦闘において理想的なコンディション。

小太郎は相手がどのように動こうと対応できる距離を保ちながら緊張の糸を張った。

「……………」

「……………」

静止し合ってから一分も経ったか、それとも数秒の間だったのか。極限状態の緊張というのは時間の間隔を狂わせる。小太郎も己が我慢強い方ではないのは理解しているつもりだ。

それでも、昨日の失態を脳裏に甦らせてブレーキをかけていた。が、それもそろそろ限界というものだ。

あと10秒、動きがなかったらこちらから仕掛ける。

機を窺うのにも焦れかかり、先手の手段を最速で練り上げた小太郎は心もち重心をずらして備える。

すると、相手はこちらの変化に合わせるようにスッと右手を左腕に

かけ、レザースーツの左二の腕についていた留め金を一つつつ丁寧
に外していく。

思わずその動作に体が動きかかったが、彼の本能が足を強制的に止
めた。

一体何を血迷ったなどと自分に鞭を飛ばしにかかったが理解はその
一瞬後に突然訪れた。

「まあ、そう構えなくても……これ以上特に仕掛けなんかないさ。い
やなに、本当はこの仕事で使うつもりもなかったんだが 予定
が変わってな、お前なら良い実験台になりそうだ」

普段の小太郎であるなら、この場に飛び込んで来た時の己であるの
ならまず食いかかっただろう挑発。
だが、彼は一步としてその場を動かなかった。

いや、動けなかったといった方が正しい。

「ああ、怯えなくていい」

またあの表情。

口だけ笑っているどこか癪に障る癪に触る笑みに空寒いもの感じつ
つ、男の手が最後の留め金を外した事でそれは確信に変わった。

瞬間、空気が変わった

それまで濁るように滞留していた空気。
肌を撫ぜるだけでも悪寒を催すそれを軽く凌駕する程に濃密なナニかの塊。

ゆっくりと地に落ちる袖の下から現れた肌は異質、異形、異常の体現。

そう、小太郎は認識を誤っていた。

この手合いは冗談でもなく己を実験台とする為に宣言したのだ。比喻でも挑発でもなくただ自身の力を試すために。

「俺もお前と同類。ただ、それだけだよ」

その言葉の重みを理解して少年の体は震えあがった。だがきつとそれは武者震いかそれに類する何かだ。

犬上 小太郎という男は己が止まる事は良しとしない。

考える前に行動を、戦略は練るものではなく本能で導き出す。

一に行動を、二に行動、考えるなど後回しだ。

敵を目の前のしてうだうだ悩むのは彼の性分ではないのだから。

「ハッ、上等！…格下と思うとると痛い目見るでっ！…」

高らかに宣言するとともに出し惜しみのない全力をもって臨む。
知らず笑みを浮かべていた彼は高揚する気持ちを無自覚なままに大地を蹴った……

s i d e : o u t

取立31回目　く　獣、咆哮と意地の衝突。封鎖された空間の中で（後書き）

と、いう具合です。

まあ主人公の力についてやって文章に表現できる段階に片足をかけ
てきました。

といつてもまだ“片足”なので全容はひっばらせていただきます。
考えている場面ではその力の全容についてはやっぱり終盤に持って
いきたいので、読んでいただいてる手前、申し訳ありませんがご容
赦下さい。

さて、ようやく迎えた3日目、ここからは少々のオリジナルを交え
つつゆっくりと原作から改変されます。これについては何度も申し
上げますがオリジナル主人公介入による原作の内容に修正と変化を
盛り込んでいきます。

その為設定に作者の解釈が多分に含まれる場面もありますがどうか
ご容赦ください。

では、今回はこのあたりで切らせていただきます。
最後までお付き合いいただきありがとうございます。今後とも目
にとまりましたら読んでいただけると嬉しいですよ。

それでは、また次回。再見ッ！

取立32回目　く彼と彼女の戦場。作為と殺気の満ちた世界く（前書き）

ども、なにわともあれ32話投稿。

今回は約1万字以内に納めてスマートにしてみようかなと

（全然スマートじゃないやん！）

という突っ込みが聞こえてきそうなんでこの辺にしておきます。

とりあえずはお待たせしてしまったので本編に移りたいと思います。

では、副担任は借金教師、最後までお付き合いください。

取立32回目　く彼と彼女の戦場。作為と殺気の満ちた世界く

「チツ　小太郎のやつ何処行きよつたんや」

参道を長く長く鳥居が続く道の外れの竹林の中、女は一人舌打ちする。

独特の着崩した着物から露出した肩が扇情的な雰囲気醸し出す妙齡女性。

その立ち居振る舞いに男なら色を煽られるかもしれないが、刃物のような刺々しいまで威圧感を振りまくその姿が台無しにしている。

「　しゃあない…ま、夜までに戻ってくれば問題はあらへん」

彼女は取り出した数枚の札を正面に、言霊を乗せてバラ撒く。

すると、空中で僅かに発光したそれらは次々と異形の鬼達を召喚する。

「まあ、あのジャリどもならこの程度で十分やろ」

呼び出した鬼は大小含めて16、万が一に敵の力量が上という事もある。中には選りをかけて上位種の者も混ざた混合部隊、その姿に満足したのか女は笑みを浮かべ、対象の始末を言い渡す。そう、足止めではなく排除だ。

考えてみれば難しい事はない、ただでさえ援軍で相手がこちらの人数を上回るのだ。なら削れる時に削るのは定石で躊躇うところなど何も無い、それを足止めしようなどと…昨日までの自分は何を血迷っていたのかと嘆きたくもなるが、そんな事は後回しだ。

背格好から外見の特徴、といっても私有地の山奥で西側の手の者の多くは出払っているのでここを通るものはほとんどいないが…そして式払いの妙な力を持った女が一人いた事を告げる。

「承服した。しかし、相手が子供とは…いまいちやる気がおきんの

」

「ふん、あんた等召喚魔は主の命令を聞いとればええ。黙って仕事しとき」

どうも人間味溢れる物言いに不安を煽られるも自身の召喚に手扱かりはないとその考えを振りきる。

それにしても、あの男がこの場にいらなくて本当によかった。でなければ今の自分を抑え込む自信がない。

こちらの優先順位はあのお嬢様を捉え利用する事、私欲がそれに勝ろうとするのは堪えるがその後の事を思えば何の事はない。

「おお?? 恐つ、最近の女子は恐ろしい顔で笑うの」

そんな彼女をあざ笑うかのように茶々を入れる比較的小さい鬼。何の事はない、召喚された妖怪や悪魔といった類はただの使い魔と違って程度の差はあれど知能体だ。中には人に使役されるのを良いとしないものもいて反抗したりするものも少なくはない。彼もそうだった性質だったのだろう。

が……

「黙つとき……下らん事言うしか能が無いんやったら仲間内に始末させてもええんやで」

この女を前に軽率な発言は厳禁だった。

喜々とした笑みを浮かべていた彼女はいつの間にか凍りついた様に冷たい表情で札を構える。

召喚主の言葉は召喚された者にとって絶対という事はない。何度も言う様にそこにある力関係に対等あるいはどちらかに傾き、人より魔が強い傾向にあるのは種として当然の事、だからこそ召喚者は自身に無理からぬ召喚を禁じ手とする。過剰に力を望み、御しきれなければその刃は自身に対する脅威となるからだ。

しかし、戦闘用に関してはその限りではない。

自身より弱いものが戦闘で役に立とうか？

答えは否だ。故に両者の関係はギブ&テイク、対等で明確な利害関係が望ましく、だからこそ鬼は無尊な女の態度に横槍を入れた。

だが、実際にはどうだ。

易々と己を言葉だけで縛つたこの人間は並みじゃない。

本来畏怖の念を抱かせ、恐怖を与える側である妖との関係が反転している。

あつてはならない事だった

「そこまでじゃ、わるいのう召喚主殿。こいつもウチのモンじゃ新米じゃけえ、不出来でのう 礼儀がなつとらんかった」

「た、大将っ」

両者の間にぬつと伸びた丸太のように太い腕、見上げれば明らかに別格と分かる大鬼のそれに片や安堵を、片や興を削がれてその場の険が霧散する。

「……ウチはかまへんよ？でも、そんな調子じゃ先が思いやられるわなあ」

相変わらず気味の悪い笑い方をする女に鬼は背に嫌な冷たい感触を味わいつつ己の召喚主を見送る。
今度はちゃちゃを入れる気などさらさら起きなかった。

「あかんなあ、どうも気が立ってしょうもない…お楽しみはまだまだ先やのに、先が思いやられるわ」

自身の堪えのなさに呆れた様な言葉を吐くもその顔には相も変わらず笑みが浮かぶ。

「さあて……月詠はん、こっちは終わりましたえ。そっちはどないなつとります」

懐から取り出した通信用の札を取り出して仲間にして神鳴流の剣客である月詠に念を飛ばす。
するとすぐにあの独特の間延びした口調が返ってくる。

「はい??、なんやバス移動が多かったですなあ、寺巡りは休憩して今は常盤から丸太町通りを西に行つとります??」

「……一昨日のを警戒して電車は使わなかったか、まあおつれさんもおりますしなあ…せやけど、中心街の方に行かれたら厄介おすなあ、月詠はん、それ以上西進されたら面倒や。どこか適当な場所に追い込んだとき、ただし派手目なもんは控えて貰います。ウチも今向こうとるさかい」

「はいな、ほな現地集合で お待ちしとります??」

一瞬間があつたのが気になるが基本依頼には律儀な人間なので信用して念話を切る。確かに難儀な性格をしてはいるがこういった荒事に彼女ほど適人はいない。

一応他のメンバーに確認をとるも小太郎だけ相変わらず反応が無いのは気にかかったが謹慎を言い渡した現状、彼に出番はない。召喚した大猿の式に自分を抱えさせて大きく跳ね上がる。

やがて藪を抜けた先に見える街を見下ろして歓喜に震える。
ようやく、ようやくだ。

たった一日がこれほど長く感じられた日は無いと彼女は断言できる。それほど待ち焦がれ迎えた今日、ようやく彼女の念願と復讐が果される。

向かう先に一切の不安はなく、彼女はただ心躍らせていた。

s i d e : n e g i .

西の長に学園長から預かった親書を渡す為、刹那達と別れたネギ、明日菜、カモそして刹那が連絡用に寄こしたチビ刹那の二人と二匹？は協会の私有地である山道を進み、今協会を目前とした大鳥居の前に立ち並んでいた。

「いい？行くわよ！！」

「あ、ハイ！」

明日菜の掛け声と共に駆け出した彼らはそれぞれの獲物を携えて鳥居を潜る。

その先には緩やかな石段に立ち並ぶ鳥居の群れ、明らかに罾を仕掛けていそうな雰囲気と自然と歩調が警戒を現す様になる。

「……な、何も出てこないわね」

「はい、変な魔力も感じられないですし…おかしいですね」

一瞬このまま行けるのではと安易な考えがよぎるがそれは頭を振って否定する。

この場は関西呪術教会の総本山、ここまで来るのに何の妨害が無かったのが不思議だが間違いない敵のテリトリーであるこの場で油断するのは愚の骨頂だ。

「行けるんじゃないコレって？よおしっこのまま一気に……」

「待つてください明日菜さんっ闇雲に進むのは危険です。ここは慎重に行きましょう」

「え??けどさあ、このままガチガチに警戒してても埒が明かないじゃん」

「いえ、ここはネギ先生の言う通り慎重に進むべきです。本体の方もまだ動きはありませんが分散している我々を狙わずにいる筈はありません」

「うっ……分かったわよ」

渋々といった風に了承した明日菜の様子に笑いが漏れる一同、だがそこに油断は無く一か所一か所を各人がそれぞれに警戒し合って確実に進んだ。

そして…

「!!ちびせつなさんコレっ!!」

偶然か彼女の目がいいのかは判らないが鳥居の1/3を進んだ所で明日菜が傍にあった鳥居を前に声を上げてチビ刹那を呼ぶ。

「これは!？」

「あっ!ちびせつなさん」

「は、良く見つけたな姐さん」

「まあね、これでも私目は良いんだから」

驚き鳥居の支柱の反対へ飛んで行ったチビ刹那を追いかけるネギを置いて目の前の鳥居の支柱に描かれた奇妙な文様を眺める明日菜とカモ。

そこには朱に塗られた柱に紅い見慣れない文字が描かれていた。

「それにしてもなんだこの文様？」

「私を知るわけないでしょ、確かにどこかで見た様な気もしなくもないけど……」

「これは、無間方処むけんほうしよの呪法です……」

「むけんほうしよ?」

「明日菜さんが似ていると思ったのは昨日私が見せた結界用の式符の梵字に似ていたからでしょう」

「結界って!じゃあこれは敵の罠ってことですか!？」

「ええ、危ない所でした。この結界は内部の空間の端と端を半球状

に結んで相手を閉じ込める結界です。もし入っていたら結界の基点を破壊しない限り出る事は出来なかつたでしょう」

それを聞いてゾツとする。

結界の便利さはネギも知る所であるが、逆をいえばその恐ろしさも知っているということだ。

結界の長所はその探知が著しく困難な所だ、その基点ともなれば隠蔽に力を入れているのは想像に難くない。短所である設置に時間がかかるという事は基本だがそれも手間を惜しまなければ隠蔽も術の強度も申し分ない強固な結界となる。

警戒に念を押した事が功を成した事に安堵するもしかし、ここで新たな問題が浮上する事になる。

「そうですね、でも弱りましたね……罨を見つけたのは良かったけど、これをどうにかしないと先に進めませんね」

そう、ここまで一本道に目指してきた彼らにとって終点はすぐそこで他に道は無い。つまりこれをどうにかしなくてはならないのだが…

「だな、前情報じゃここ以外に入口はねえって話だしよ。兄貴は解けそうか？」

「ええっボク！？さ、さすがに日本の魔法はちよつと…」

「ああ、それなら大丈夫です。中に入ればこの手の結界は厄介ですが外からなら対処法が…」

「それをやられたらウチ等が困るんじゃないのぉ〜」

「「!？」」

突然の野太い声に一瞬で反応した彼等は背後の敵映を確認しようと武器を構えつつ左右に散った。

何しろ背後には罾が待ち構えているのだ、ならば空いている左右しか逃げ場がないのは考えるまでもない。

が…

「残念、そつちは通行止めじゃきん」

「ぐつ!？」「きゃあつ!」

突然何か大きなもの掴まれた感触に感じた次の瞬間、ネギは背中に衝撃を受けて倒れていた。

投げ飛ばされた。

その事実を即座に理解して起き上がるネギだったがそこには敵映が無い。

いや、誰もいなかった。

「キヤ　　っ!」

「あ、明日菜さんっ」

一瞬我が目を疑う光景、何も無いはずの空間からいきなり明日菜が飛んできたのだ。

慌てて受け止めるべく駆け寄るも自身より大きい彼女に踏鞴を踏むネギ、辛うじて転倒を免れたのはさすがだった。

「大丈夫ですか明日菜さん!」

「あたた、ネギ…ここは」

「ほお??、意外と遅しいなあ、坊主」

「お前はっ!」

誰だと言葉を挟みかけて口が固まる。

岩から削りだしたように頑強な体、彫りも深く、血の色の通わない青い肌は同じ生き物に思えない。

何より自身を見下ろす3mは優にあるだろう巨体、それらを構成する全てが異形の塊だった。

「お前言われても名前なんぞ無いしのお??、おお、そうだっ!皆からは邑久の大将と呼ばれとったのう」

顎に手を当ててくぼんだ目を歪めるそれを見て辛うじて笑っているのだと理解する。

だが、それがどうしたというのだろう。ネギも明日菜も武器を手に持ったはずの掌に感じる重みが頼りない、そう感じるほどの威圧感だった。

「……なんじゃ、反応が無いとつまらんじゃろう。か??いかん、いかなぞ最近の人間は、理屈ばかり捏ねちよるからいざという時にかたまつとる破目になるんじゃ」

「逃げてくださいネギ先生!こいつはッ」

「なんじゃ、威勢が良くてもおどれは煩いだけじゃのお……」

「!?!ちびせつなさんっ」

そんな彼らを現実に引き戻した声、チビ刹那の声を聞きつけて目を上げたそこには鬼の背後の空間から現れたもう一体の鬼、背格好は目の前のそれに及ぶべくもないが筋骨隆々も度が過ぎるといっほどの体格は人の域ではない。

その腕に彼女は捉えられていて…

「こいつぁいらんの……」

ぼきりと首を擦じ切られた。

「ち、ちびせつなさんっ!!」

劈くような悲鳴を上げる明日菜にネギも挫けそうな心を必死に支える。

今この場でもっとも経験があるだろう彼女があっさりと捕まった。その身は式神だろうと知識と経験は共有しているはずのそれがだ。

「兄貴っ!ボヤっとしてる場合じゃねえ!!急いでこの場から離れねえとっ態勢を整えるんだよ!!」

「っ明日菜さん!!」

「ね、ネギっ刹那さんが!」

「今は後です！彼女は刹那さんの使い魔です！本人に異常はないはずですから急いでこの場を…」

「何処行く言うんじゃ、坊主」

瞬間、自分たちの周りを濃密な気配が押しつぶした。例えるなら蜂蜜のようにドロリと濃く甘い液体が体を纏うような…しかしその実、甘さなど皆無であり、吐き気を催すような濃密さという所は同じだったかもしれない。

「くっ、どこにこれだけの数がっ」

「な、ないよこれ…」

大鬼に気を取られて気付かなかったのだろうか？
気がつけば十数体の大柄な鬼達に囲まれていた。

「さあ、存分にてごおて貰おうか…」

辛うじて構えを取るネギに対して大矛を軽々と振るいながらにんまりと笑みを深くした…

side:out

side: Setsuna・Sakurazaki

「クツ、今のはっ！」

（今の鬼は明らかに上等種、いくら明日菜さんが式払いの力を持っていてもあれは危険すぎるっやつらもしかしたら本気で…）

自身の分身である式の反応が途絶えた事に焦りが募る。

彼女が式神を介して最後に見た敵の姿は自身を捉える鬼とそれを従えていた大鬼が一体、だがあのクラスの鬼ともなれば“名付き”、少なくとも十数から三十は下らない数の下部を従えているはず。その量は召喚主の裁量次第だが、まずあの二体だけとは考えにくい。

（どうする？ここは一度応援に向かうか？いや、距離が離れすぎて現実的じゃない。それに例え合流できてもお嬢様に気付かせず救援するのは困難だ…アキラさんに連絡を、いや、いつそ音来さんに向かってもらった方がいいっ）

できれば今日一日他県にまで移動している班全体を護衛監視している彼の配置を変えるのは避けたかったがそうもいつてられない。自体はまず一刻の猶予もないのだ。

「せつちゃん、ネギ君達いたあ？」

「お、おお、お嬢様!？」

「ああ、またお嬢様なんて言うー」

さっそく連絡をと忍ばせていた符を背後に慌てて隠して向き直る。どうやらその動作は怪しまれなかったようだが、勘のいい彼女の事だ、いつまでもこのままでは何か気付かせてしまつかもしれない。そうして刹那は話題を逸らすべく本来彼女が提案してきた話題へと無理やり方向転換させる。

「そ、それよりもネギ先生達ですよねっゲームセンターからはぐれてそのまま、私の方は見つかりませんでした」

「ああん、ほんまどこ行ったんやろ？携帯も電波が悪いのかつながらんし…」

「それはネギ先生も子供とはいえ教師ですし、神楽坂さんもいますから心配はないかと」

「そやな？、案外仲良くやってるかもしれんしな」

そんな想像をしているのかは自分が及ぶべくもないが彼女の優しい表情を見ているとつい焦っていた心が緩みかける。

だからだろうか、その刹那の緩みを狙い澄ましたように高速で物体が飛来してきたのは…

「っ!？」

咄嗟の条件反射で捉えられたのは僥倖だった。

手に握ったのは恐らく寸鉄の類として簡易に削られた鋼鉄の棒。捉えた瞬間に肌で感じた気の質に厄介な相手が張っていた事に今更ながら気づかされた。

「ほえ？いきなりどうしたん？」

「失礼しますお嬢様っ」

（まさかもうこちらに仕掛けてくるとは…合流させない気かつ）

いきなり手を取って駆け出す刹那に驚きの声を上げる木乃香だったが刹那にその声にこたえる余裕はあまりなく、この時どう答えたかはよく覚えていない。

何しろ担任とクラスメートの危機に大切なお嬢様を危険にさらしているという状況が彼女を焦らせていた。

10はあるかという寸鉄が再度刹那を排除しようと飛来する。

がしかし、彼女はそれを難なく捉えて空いている左の掌に納める。

もともと街中で人通りの多い大通りだ。そう簡単に弾く訳にもいかず、かと言ってお嬢様を置いて敵を排除するには些か相手の力量が厄介だった。

が、それは相手側にとっても同じ事でまだ本気でこちらに襲いかかる気はないようだ。その証拠に迫る寸鉄の狙いは雑で通った気も薄く、その練度も甘い。

恐らくは見方が出揃うかこちらを追い込むかが狙いなのだがそうそうその手に乗ってやる気など刹那にはさらさらない。

(ネギ先生つもう少し耐えてください!!)

脳裏に置き去りにしてしまった子供先生に謝り、彼女は敵の攻撃の間隙を縫って取り出した札に気を走らせた。

side:out

『魔法の射手 連弾・光の11矢!!』

ネギが放った光球がその身を矢とし、彼が定めた敵を貫かんと猛威を振るう。

一発一発なら確かに弾かれ効果を成さない。だが、何かの諺に三本の矢がどうかあったように光流ともいえる量を誇ったそれは確実に鬼の一角を崩す。

「くあ、今のはきいたでっ」

「あっそ、ならもうひとつおまけよっ!!」

その体勢を崩した鬼に接近した明日菜は振り上げた手の獲物を目の

前に振り下ろす。

アーティファクト“ハマノツルギ”

剣と銘打たれたそれはどう見てもスチール製のハリセンだったがどういうわけか、この武器は特殊効果から召喚された魔を元いた世界へ送り返す力があつた。

「よっしっコレで3体目！いけそうよっネギ！！」

彼女らが屠つた鬼はその数実に5体最初にいた11体から既に半数を削つた事になる。

ネギが魔法で翻弄し、明日菜がそのガードを、もしくは彼が討ち漏らした鬼を一撃で送り返す。

そもそも初めからハリセンによる一撃必殺を主に戦えば楽なのだろうがこの鬼達は意外に統率のとれた動きをしていて強化された明日菜でも捉える事は容易ではなかつた。

だからこそ戦術を前衛後衛の定石から外して前後臨機応変に対応するように切り換えた。その分詠唱時間の短くて済むが威力の低い“魔法の射手”を連発する事になったが、そこは明日菜のハリセンも合わせれば話がかわってくる。

つまり、二人は順調に敵を排除していたのだ。

「は、はい。このまま…」

「ネギっ」

「もろうたっ！！」

グラリと傾いたネギの体、消耗が激しかったのか疲労に汗を浮かべる彼に凶刃を振りかざす一体の鬼が背後に迫り、明日葉が叫ぶのとほぼ同時に振り下ろしていた。

思わず目を背けたくなる一瞬、がしかし、耳に聞こえたのはこの場で何度も聞いた鉄が地面を叩き割る鈍い音。そう、ネギはあの体で大きく回避して見せていた。

「我が手に宿りて、敵を喰らえ！『白き雷！』」

掌から放たれた熾烈な雷は彼を殺めんとした鬼を刺し貫き、その後方に位置した鬼も巻き込んで進り、その場に強烈な雷鳴を轟かせた。恐らく初めから敵を射程に多く集めるよう誘導し、狙っていただろう一撃。払った対価は大きかったがそれを含めてお釣りの来る成果が目の前にあった。

「ちよ、ちよつと大丈夫なのネギっ」

「ええ、っこのくらいどうってことありません。それよりも…」

先ほどよりも目に見えて表れる疲労を必死に隠すネギ。だが、確かに目の前には彼らの奮闘により、鬼の数は3体まで減らす事が出来た。

明らかに劣勢だった勢力差をここまでひっくり返した。ならネギの疲労分を引いても自分のアーティファクトの力があればまだ目はある。十分に挽回の余地は出来たのだ。

「おお????のんびりしちよつたらいつの間にやら数が減つとるの

お…あ、こつちか」

「何のんきに立ってるのよ！次はあんた等の番なんだからっ覚悟しなさい！！」

そんな明日菜の宣言を皮切りに静寂が訪れた。

互いに出方を窺うような静寂、冷やりとした風に汗が滴り落ちるのを鬱陶しく感じつつもそれを払うような愚行はしない。

そうして、そんな空気を切り裂いたのは互いの得物が衝突する音でも、どちらかが踏み込んだ音でもなく、鬼が高らかに放った笑い声だった。

「なっははははっ言うに事欠いて覚悟しろかっ！！いや、無知ほど恐ろしいものは無いのー」

「何よ、何がおかしいってのよっ」

「その力量も測れん愚かしさが哀れだと言ってるんだ、小娘」

「え？ キヤツ！！」

目の前に一瞬で肉薄された事に気付いたのは相手が腕を振り下ろすのを見た後だった。

完全に出遅れた形の防御、次に迫る衝撃に身を固くするも訪れたのは柔らかい掌の感触。そして自分が地面に手をついた時、初めて突き飛ばされたのだと知った。

「ガッ、ア！」

「なんで…ネギツ!!」

「明日菜さん…大丈夫で…ぐっあ!!」

「ほんにおもしろいのお…さっきまでの下っ端とウチ等を同列に思えるその能天気さが理解できん。おどれ等の目は節穴か？」

倒れたネギを踏みつける足に力を入れて、さっきまでの自分達の奮闘を嘲笑いながらこちらを眺める鬼。

「あんた達っ！子供をそんないたぶって何が楽しいのよ!!」

「おっと、嬢ちゃんは大人しゅう見てよーな。子供言うても潰れる瞬間は見モノやで？こう　プチとなキレイなアカい花が咲くんですよ」

「っ」

「まあ、そう急くな…悪いなお嬢ちゃん。これも召喚主の命令じゃきん、この場で始末さしてもらわないかんのじゃきん」

ハマノツルギを手に急いで起き上がろうとした彼女を片手で押え上げた鬼、そんな彼女の姿を見て憐れんだのか横にいつの間にか立つ大鬼が話しかけていた。

「なによ…何なのよそんなっそんなのそっちの勝手な都合じゃない！！私の友達をお攫ったりネギを傷つけたりっ私、あんた達なんて「アスナさんっ」ネギっ！」

「っ、だ、大丈夫です、このくらい……すぐ……僕が助けてあげますから」

そう言つて明日菜に笑いかける彼は今も踏みつけられ時に剣の平で叩かれ、顔は腫れ上がつて無残な姿、とても直視に堪えなかつた。

「な………何言つてんのよっ！もうあんたボロボロじゃない私はいいからあんたは早く逃げな『魔法の射手！光の1矢！！』キヤア！」

「くっ！……このガキやああ！！」

そんな彼が起こした行動に目を疑つた。

自分を足蹴にする鬼でもなく明日菜の腕を抑えつけた鬼の腕をピンポイントで狙つて放つた一撃。文字通り振り絞つた力の限界を込めた一撃は自身をこの場から脱する為ではなく彼女を助けるために放たれたのだ。

しかし、明日菜はこの時ばかりは理解が体に及ばず呆けていた。彼の行動に己が理解できずに止まっていたしまった。

だが、矢を受けた鬼にとってはそんな明日菜の事などどうでもよかつた事なのだろう。

背に携えた大きな棍を抜き放つて振り回しながら歩いていく。

その姿にようやく事態に思考が追いついた刹那、その場に怒声が響き渡つた。

「待たんかい！」

「な！？大将、何でっ」

「いい根性しちよるじゃねえか坊主…いや、男に坊主は礼に欠くか。」

驚く配下の鬼達を無視してネギを踏みつけていた鬼をどかして明日菜を捉えているように指示をする大鬼。

その真意は彼女にも鬼達にも理解できなかったが、仲間の鬼からすれば大将の悪い癖が始まったそう愚痴るだけだ。

「いや、今の一撃はえかった…今時己を顧みず他人を助けようって奴はそうおらん」

腫れ上がったネギの顔を撫でる武骨な手は優しく、ともすれば助かったのかなどという淡い期待を明日菜に抱かせた。

「ただのお、悪いが…それで見逃してやることはできん」

自分は何を甘い事を考えていたのだろうか？

本当にこの場で彼を助けたいならあの瞬間、鬼が手を離れた瞬間にハマノツルギを拾いなおして反撃すればよかったのだ。

今またこうして捉えられた我が身では何もできないではないかっ！

「いい目じゃ…ほんに3年も経てば楽しく殺合えるようになったちゃるうに」

「止めて！まだそいつは十歳でっ教師なんかしてるけど全然子供で…っでも、とつても一生懸命」

「じゃあの、冥土で待つとね。すぐ嬢ちゃんも置くつたる…」

「くっ」

「ダメ　　っ!!」
「じゃあの　　」

少年が漏らしたのは後悔の念か、自責の無念か。
少女はそれを聞く事もなく、ただ訪れる瞬間に恐怖して叫んだ。

「ぬううう!!」
「……え？」

そしてその場に響いたものは鉄が地面を叩き割るあの音でも、少年の血肉が割かれる身の毛の弥立つ様な不快音でもなく、鐘を鳴らす様な一つの鋼の音だった。

「こんなになるまで諦めなかったのか…男だなネギ先生」
「なんじゃいおどりゃあっ！」

歩み寄る姿は遠く、距離にして10m程。
だが、確かにその姿を捉えたネギは霞む視界に安堵の笑みを浮かべる。

「俺か?そんな事はどうでもいいだろ……構えろ…選手交代だ、俺はネギのように優しくはないぞ?」

「はっ！上等ッ！！」

銃を携えた少年が今参戦した。

取立32回目　く彼と彼女の戦場。作為と殺気の満ちた世界く（後書き）

ども、投稿体勢でパソコンを前に寝落ちしたトントンです（笑…えない（失笑

そんな感じでいつもよりスムーズに進むようにできる限り無駄な情景描写を削ってみました。

いかがですかね？久々に1万以内（スペース改行含めず）納める事が出来たので自分的には結構切り詰めてみたんですが…

あ、あと台詞のやり取りも今回は多めですかね？比較的。

前회가キャラの喋った回数両手足で数えられそうというコメントをいただいた時に啞然としたので…（苦笑

まあ、その分表現と削るのに苦労しましたが

本編のテンポも上がったので＋　な結果だったと個人的には思っています。

さて、それでは今回もあとがきは短めに終わろうと思うのですがその前に業務連絡をば、

いよいよ大学生にとって試験の難関である？前期のテスト期間が迫ってきました。

つきましては休載日を設けようと思うので先にご連絡しておきます。詳しい日程は必ず！活動報告に入れますので！

ああ、最近活動報告書いてないな〜あとがき（続）もたまってるし（ボソッ

ま、まあなにわともあれこの辺で！

休載連絡は月曜までには入れておきますのでどうかチェックしてや

ってください（笑）
では今日はこの辺で失礼を！再見ッ！

取立33回目　く轟く雷光と舞上る砂塵。それは一つの終わりの

「ふう、ここか……」

チビ刹那の要請を受けて道無き道、どころか空を飛ばす事約10分。ようやく見えた鳥居の前にいったん呼吸を落ちつける音来。

傍らに追隨していたチビ刹那は既にこの場にはいない、彼にネギ達の状態を知らせに式神を飛ばす時には既に敵の襲撃中だったからだ。

その上で彼女はネギ達を助けに行つて欲しいと言う。

優先順位というならどちらも天秤に乗せるべきではない。彼の依頼内容は“修学旅行中の3-A生徒の護衛”だ。例え片方に依頼主の孫娘がいるとは言つても選択は平等でなくてはならない。さらに言うなら戦闘経験から見て刹那がいる分、木乃香の護衛には信頼がかける。

一瞬、己が弟子がその場にいる事を思い出して身を返しかけたが私情を揞じ伏せて協会の総本山へと進路を取った。

言い訳かもしれないが自分の身を守る術はそれなりに仕込んでおたし、実戦経験は少なくとも零ではない。なら、今は一刻も早くネギ達に合流すべき時、その上で応援に向かうなり、西側に要請するなりすればいい。要は時間の問題で自分は迷っている暇など微塵もない、改めて状況を認識し直した彼は体力の温存もそこそこに全力で駆け抜けてきたのだ。

が、当然その代償は存在する。

（残量は……5分か、思ったよりも時間をとられたな）

身体の調子を確かめると共に確認したのは消費魔力とそれに伴う戦闘可能時間だ。そう、この任務中、音楽は自身に魔力使用に制限をかけている。

17分

それが彼が一日に全力戦闘を行使出来る限界時間だった。

もちろん、インターバルをかければ幾分かは回復するし、その行使もごく少量の魔力消費で済む術や出来合いの魔具による探査や強化程度なら一日を優に活動できる自信が彼にはあった。

小太郎との戦闘で隠し玉を使用したのは痛かったが制限状態で勝てる相手ではなかった。結果的に早期に戦闘を終結出来ただけ良しとするしかないだろう。

「って、グタグタ考えてる場合じゃないか……」

そうやって足に再度力を入れ直して彼は肩に乗せていた荷物を背負い直す。

足に纏った魔力が参道に敷かれた敷石が軋みを上げる。素人目にも上物と思われる御影石を惜しみなく使った延べ段。その道の間人かからすればいい仕事をしていると揃って満足げに首を振るのだろうが、生憎音楽にその手の感性を求めるのは無駄な事のようにだ。一片の配慮の欠片もない踏む込みに粉塵を巻き上げて駆け上がっていく。

鳥居の朱が視界の端に流れて赤いトンネルを進んででいるような錯覚を与えていた。

やがて、参道の1/3と踏破しかけた所で突然急制動をかけて立ち止まった。

代り映えのしない空間。

そこには変わらず鳥居が続くだけだったが音来はその何も無い空間を睨みつけて右手を虚空に掲げる。

「……ここか」

触れる肌が確かな境界線を感じ取ったのを確認し、そのまま右手を自身の右側へ水平に伸ばす。

それは単に手を広げただけに見える光景。

唯一違うのは手首の部分から先がすっぽりと無くなっていた事。いや、その手首の部分には霞みがかかった様にユラユラと揺れ、ゆつくりと腕を引き戻した先には彼の手に黒い筒状の物体が握られていた。

「距離はは10mちょいか、射程ギリギリだな……ま、そんなこと言ってる場合じゃないか……」レグ・ニス　リ・ライト　トルトニス……」

背負った荷物を傍らに下ろし、手に持った黒銀の筒の端を肩に当てて何も無い空間の先にもう一方の端を差向ける。

『弾ける』

途端に筒が発光し、奇妙な音色を響かせる。

何かを確認するように目を凝らした彼は筒を担いだまま足元も荷物を拾い直してゆっくりと進む。

そうして参道にいた彼の姿は突如消え

彼の行く手には何もない筈の場所に3体の怪物とそれに捉えられた少年と少女がそれぞれこちらを見ていた。

鬼に捕られている明日菜とネギ、共に傷を負っているようだがどう見てもネギの方がその数が多く、その血と埃に汚れた姿は彼のとった行動が容易に想像できた。

「こんなになるまで諦めなかったのか…男だなネギ先生」

だからこそその贅辞。

もちろんこれだけの距離では呟くようなその声が彼に届いたかどうかは定かではない。が、音来の目にネギの表情が安堵の色に染まるのを捉えた。

助けた手前安心されるのは文句を言われるよりいいが、あまりに純粹な信頼の目にむずがゆい感触に囚われてしまう。そんな目を向けられてはつい必要以上に張り切ってしまうそうになるではないか。

「なんじゃい貴様っ！」

敵の三体の内、一番大柄な鬼が殺気と共に怒声を浴びせてくる。

だが、この程度のモノなら比較的かけられなれた彼だ。視線をネギから敵に移し、右手に持つ筒をピタリと相手の眉間に向けた。

「俺か？そんな事はどーでもいいだろ……構えろ、選手交代だ。俺はネギのように優しくはないぞ？」

「はっ！上等ッ！！」

音来の言葉に乗ったのは三体の内比較的小柄な鬼。といっても2mは超す体軀をその身からは想像できない速度で見せ、一息に接近してきた鬼は上段に抜き身の大大刀を振りかぶっていた。

本来なら人には受け止めず事敵わぬ剛剣。

だが、音来はその一撃を半身に逸らす事で難なく避けて見せた。目標を失った刃はそのまま石段をきれいに寸断して刀身を埋没させる。

「
」

交差する視線。

体格で劣る音来が自然と見上げる姿勢になるその一瞬、鬼が己の得物をと柄に力を込めて無効とした瞬間。音来は鬼の視界の外に飛んでいた。

“虚空瞬動”

音来が習得している高速歩法術の一つで魔法関係者の内、研鑽を積む者にとって割と必須な技法であるそれは通常の瞬動術が地を直線に進めない事に対し、上下に移動経路を見出す事が出来、より三次元的な高速機動を可能とする。

もつとも、突然目の前から消え去った音来に虚を突かれた鬼にとつ

てそれを知る術は無いが。

「 バイバイ」

「ぬうつ!!!」

が、比較的小柄とはいえ身内にも別格と称された鬼。その意地か本能のなせる業か、気配も目視も出来ぬ筈の背後からの文字通り必殺の一撃、それを片腕を犠牲にして防ぐ。

だが、退魔用の術を施した銃弾はその肉を裂き、骨を砕いき、その先にあつた足まで貫通せしめた。これが遠距離ならまだ威力も低いというもの、しかし今回は至近距離といつてもいいほどの近距離、高速回転する弾は易々と丸太の様な腕を吹き飛ばしていた。辛うじて足はつながつたが確たるダメージを受ければ鬼とて膝をつく。

それを一瞥してほぼ同時に放たれた四発のクイックドロ―。

狙いは残る鬼の二体、その眉間を正確に狙つた射撃はしかし、振り上げる大矛と棍棒にそれぞれ弾かれた。

「阿呆、いくら術施した鉄砲玉ちゆうてもこんだけの距離があれば見極められんわけなか」

「ああ、だろうね」

「な!?!」

突然背後からかかる敵と思われる声、冷やりと汗をかいた一体に対し、大将格の大鬼はその大矛を横薙ぎに音源を断つ。

「……やるやんけ」

が、さらに後ろに響いた着地音、という事は経つ事敵わなかったという事。しかし、外したというのに彼は人より裂けた口元を更に切り込みを深く、愉悦の笑みを浮かべる。

「不意打ち続きで悪いけど。返してもらったよ、ウチの生徒と同僚」

「いやあいやあ、かまへんかまへん。こっちも童が相手じゃ興が乗らんかったけんのお。おどれも見かけは童じゃけんどこからは遠慮無用でいかしてもらうきんっ」

「……意気込んできるとこに水差すようだけど、あまり時間かけたくないんだよねーこつちとしちゃ……返すもん返してもらったし、これでお開きじゃダメかな？」

「ハッ！付き合い悪いでっにいちゃん！！」

ワザと幼い風に首をを傾げる音を一蹴して襲いかかってくる。

「はあー……やっぱそうだよね……どうしてこー、鬼ってやつは好戦的な連中ばつかなんだろ」

「つて、考え事なんか後よ後！それよりも前見て前ッ！！」

「はいはい、分かってますよつと！ほっ！とお！つた！？つぶなー」

「ほっほあー、両手塞こごおちよるのにえろつ綺麗に避けはるのお…
…一角こ！…」

「あいあい」

「キヤア ツー！」

轟ツと大振りに振り下ろされる棍棒を難なく避ける音来。

そう、左右にネギと明日菜を抱え背負っている彼は反撃しようにもその手段がない。その為二体が繰り出す怒涛の攻撃を避けるしか手が無い。が、横からその度に悲鳴が上がるのはどうにかならないものだろうか。

「しっかし、一本角だから一角って……また安直な」

「ちょ、呑気な事言っていないでどうにかしなさいよー！！」

「ははっおのれに言われる筋合いはないけ、余計な御世話じゃい！」

心なしが勢いが増した棍棒の猛攻、少しでも隙を見せようものなら容赦なく砕きにかかるだろう。さらに、じっくりと機会を伺いつつ時たま大矛を繰り出す大鬼。加えて、いつまでも抑え込まれていては先程の鬼も加わるだろう。はつきりいって大ピンチだった。

「ま、確かにギリ貧だわな……明日菜」

「な、何よ？」

一応に確認を取る音来。

そのいつになく真剣な表情に及び腰になる明日菜。

「……………怒るなよ？」

「へ？何を……………ってちょっ！どこ触って……………って、え、え、ええっ」

がしかし、彼の手はあるうことが背負っていた彼女の腰にまわされる。これにはさすがに非常時とはいえ慌てずにいられない。その手に抵抗しようと体勢を変えようとして……

「じゃ、ネギの事よろしく」

「キヤア　　！！！！！！」

抱きかかえさせられた少年と共に大空へ投げ飛ばされていた。

叫び散らすも生憎速度も距離も違えば音は届くはずもない。が、彼女の心情は推して然るべし……というより後で憶えてると言わんばかりに睨まれちゃ何を言いたいかなど明白だろう。なんとというか、彼女を見ていると目は口ほどにものを言うという諺もあながち間違いないのだろうと素直に思える。

「ま、黙って文句言われるのはキヤラじゃないよね」

「ハッ！ようやっと両の手が空いた様じゃが二角も戻った。ワシ等三体を相手にどないするちゆうんじゃ」

上を向いて余裕の表情で身の心配をしていた事が癪に障ったんだろ

う。
視線を戻せば確かに先程片腕を吹き飛ばされた鬼も太刀を構えて怒声を上げている。大層ご立腹のようで青い体皮をこれまた真っ赤に染めている様はどうやら痛みを軽く超えている様子。

加えて背後に回った一本角も合わせて前後右と三角形に塞がれた形になる。

が、それでも表情を変えずに彼は更にのたもつた。

「どうかな、意外と何とか出来るもんかもしれないよ？俺って結構強いから」

「ぬかせっ！」

これまでいなされ続けて焦っていたのだらう。合図を待たず飛び出したのは一本角と二本角の鬼、互いに鏡合わせになるよう持っていた彼らは互いの得物を振り上げ、これまでで最高の踏み込みを持って駆け出した。

袈裟に振り下ろされる太刀と垂直に重力に味方に迫る棍棒。

絶妙なタイミングで交点を逸らし、相手の逃げ道を塞いだ見事な一撃だった。

そしてそれは彼らの剛腕によって放たれたもの。その二つは人の身など容易く必殺たりえる二振り。だというのに、少年は余裕の表情を崩さず、何を血迷ったのか太刀筋の先に腕を掲げていた。

正気を疑うような行動に一瞬鬼達は機を疑うも一度振り下ろしたもののというのは急な制動を受け付けない。ならとこの一振りに更に力を込める。策があるのならそれすらも断ずると放ったそれはしかし…

『来たれ《アデアット》』

抜刀すら超えて表れた物体に遮られた。

「クッ！」
「ぬううっ」

掲げた両腕に現れた不格好なまでに巨大な赤い手甲。鬼の二の腕をも上回る程の太さなそれは所持する少年の背格好も合わさってよりその異常さを際立たせる。

そして、血のように赤い光を放っていた手甲はやがて光を収束させ、赤銅色の鈍い色に変色していく。

「はっ！たかが手甲一つがナンボのもんじゃい！！」

遮られようと己が力を疑わない二角は再度振り上げた。

だが、その剛腕が振り切るよりも尚速く

「遅い……」

両の視界を塞がれていた。

「なっ！？ちょ、ま」

それが相手の腕によるものだと気づき、鬼は脳裏に自分の頭が握りつぶされるといふ場面を夢想し、その本来あり得る筈もない光景に背筋が凍った。が、結果的に彼の心配は杞憂に終わる。なぜなら……

『弾倉連装・爆』

爆散する頭部と共に四散して送還された彼にその思考は中断を余儀

なくされたからだ。

本来、肉塊となり、血肉を降らせる筈のそれは本体が消えたと同時にこの空間から消え去る。その爆発の余波を残して、まるで血を払う様に手を払った音楽は戦闘用の仮面を張り付け、無表情に残りの掃討に務めるべく向き直る。

「ふ、二角!!おどれっ」

「だからおせえーんだよ」

「なっ!?!」

一本角が激昂した次の瞬間、彼はその胸に音も無く咲いた赤い花を見たのを最後に、驚愕の表情を浮かべたまま二本角と同じく散っていった。

鬼に花を生けた本人である音楽は手甲に纏った風を血糊と共に払う様に一振りし、持したまま動かなかった一体に顔を向け……

「 イ ヤア ツ!!!!!!!!!!!!!!」

「つと……怪我はねえーみたいだな」

落下してきた明日菜達を難なく受け止めた。

叫び疲れたのかゼイゼイと大きく呼吸する彼女をネギ共々丁寧に下ろしてやる。

その際に物凄い目で睨まれ、あげく手が伸びそうだったがそれを掴んでいさめる。気持ちには分らないが今は相手をしていられる

時でもない。

「まあ、ちよい待ち。奴さんがそろそろ痺れ切らしてるからな……ネギ連れて下がってな」

不満顔で文句を訴える明日菜を雰囲気だけで押さえてネギを任せる。さすがに彼女もこの場で喚くほど事態が飲み込めない人ではないということだろう。

二人が距離を取ったのを確認し、音来は今もなお律儀に待ち続ける。大鬼と対峙する為に弧を描くようにして歩み寄る。対角線上に明日菜達を巻き込まないためだ。

「よお、部下二人を見殺しって、ずいぶん薄情な大将だな？」

「なはははっ、“邑久の大将”も大昔に下が勝手に担ぎ込んだもんじゃ。先走ったもんの責や面子なんか知らん、そんなもんは頭の賢しい奴が考えればええ。ワシは派手に暴れられりゃあ満足じゃきん」

「……鬼ってというのは、どうしてこう人間っぽいのかねー」

「おぬしもその方がらしいのーっいや、やはり凝り固まったもんは性にあわんじやる」

「一緒にすんな。言ったる、こっちは時間をかけたくないんだ。一撃で決める」

「つれないの……」

まるで拗ねたように手を後頭部に持っていくが、敵つい強面では真逆

の印象しか与えない。それにこれ以上話そうと身が無いのは明白だ。何しろこの鬼は己の欲望に忠実で力の行使に躊躇が無い。加えて実力も伴うと来れば厄介きわまりない相手だ。

(だから、この一撃は本気で行くっ)

「っさい！ 『弾倉変化・雷刃！』」

乾いた音を響かせ、合掌した掌が瞬く間に発光する。

赤銅の手甲が過熱されるようにより赤く色付き、その光を赤い雷に変えて両腕に纏う。

「ほっほお〜こらぁえらいどんどろはんじゃのう」

「……御託は良いからさっさと構えな」

その一言で両者はまるで口から力を漏らすまいと固く一文字に結ぶ。鬼は開いた左手を相手に向け、右手に持つ大矛を大上段からゆつくりと下げる。相手の正眼を狙い穿ち防御を捨てた一点突破の構え。

対して音楽は両拳をを腰だめに据えて体勢をより低く、頭を差し出す様に構える。

武器が違えばおのずと構えも違ってくる。

両者は互いの一手先を読み合い騙し合い、後手を先手とすべく睨み合う。

やがて、

二人の間に落ちた竹の葉が鬨気に当てられたのか落ちる事無く弾け散る。

「霸霸霸霸阿阿ッッ！！！！！！！！！！」
あまつきり
「天斬！！」

粉塵巻き上げる剛剣と雷光瞬く両拳が激突し

大地は極光と突風に包まれた。

取立33回目　く轟く雷光と舞上る砂塵。それは一つの終わりの（後書き）

どうもです。久方ぶりに通常ペースに戻ったトントンは。

いや、この後試験期間突入ですからまたちょっとごたごたしますけどね（苦笑）

まあ、何はともあれお送りしました33話。今回もテンポは良く言ったと思うのですが、内容は戦闘一本で主人公side一本に絞ってみました！

まあ意外とまとまりよかったです。実は前半半分を真っ白にして修正したりと意外と変更点が多かった話です。

あ、ちなみに鬼に所々で方言を使わせていただきましたが『讃岐弁』という物です。そのなかでも西よりももので三体にはそれぞれ口調を微妙に変化させてみました。……いや、分かりにくいだら……って突っ込みが聞こえてきそうです（汗）

まあ、これもキャラクターを出すのに良い味を出しているのではと私は思っています。

さて、これでネギsideの話も一段落。次はもう一方のお話ですが……やはり個人的に一波乱欲しいのでいじると思います。原作からやっぱりアキラも混ぜましたから彼女の出番も欲しいですしね！

ま、後の細かい所はまた……これいつもの……てか最近のパターン無きが（焦）

とと、とにかく今日はこの辺で！登場させたアーティファクトなど語りたいたい所は多いですが設定全部載せるとあとがきがかつてない事

になりそうなんで（泣笑？

では、本日はこの辺で！最後までお付き合いいただきありがとうございます！
ございました！

次回の更新は正式には8月ですが合間合間に一話作れましたら投稿
します。気長に待つていただけるとありがたいです。

それでは、こんどこそお暇させていただきました。

また次回お会いしましょう！再見ッ！

取立34回目　く取引と砲撃、長すぎた終幕にようやくの脱出く

彼が目を覚ました時、それは今まさに雌雄を決する為に両者が激突せんとする時だった。

耳が痛いほどの沈黙とはこういう事を言うのだろうか。

鬼が明らかに突きを狙った型に対して音来は徒手空拳。いや、いつの間にかその両腕に大きな籠手をはめている。

見るからに使用者のサイズに合わない巨大なそれは確かに見た目通り強固なのだろう。が、敵の大矛を見れば如何に保護を目的とした籠手とはいえ防ぐのには心許ない。

だがそれも普通の防具の話。

彼の両手には強大な魔力で編み出されただろう雷を纏っている。

己の存在を相手に誇示するように火花を上げて弾け散る雷、確かにあれなら鬼の一撃を打倒できるかもしれない。

だが、ネギに想像できたのはそこまで、実際に相対したネギにはそれを相手に届かせる手段が浮かばない。

敵は矛、音来は無手。互いの獲物リーチの長さを鑑みるまでもなく相手側が圧倒的に有利で、自身に覚えが無い武器に対処する術なく、武術を納めていないネギにとってこの先は全くの理解の外だったからだ。

が、かといって加勢しようにも今だ痛む体ではどうする事も出来ず、眺めているしかない現状。彼には自分の弱さを嘆く以外の術を見つけれずにいた。

そして……

「霸霸霸霸阿阿ッッ！！！！！！」

先手を取ったのは鬼。

正眼を狙い、巨体を活かした上段から撃ち下ろされる一撃は巻き起こす轟風に砂塵が付き従う様に舞う。

予想以上の加速と響く怒声に大気の震えが離れている筈の自分を畏縮させる程だ。

そんな敵に対して、彼は

「
」

自分を抱えてくれている彼女が目の前の光景に何をしているのかと悲痛な声を上げる。

だがそれもそうだろう。自分自身この震える口が動けば叫んでいた。

なぜなら彼は敵の先手に対し、構えた姿勢から動かずに時が止まったかのように黙っているだけだったからだ。

正に正気を疑う行動。

後手というのは本来技量が相手を上回り、相手の術を去なす、又はその上を行く力・速さを持っているからこそ成立する。

上回っている事が大前提、良くて拮抗してこそ成り立つもので間違っても格下が挑む手段ではない。それは奇策にもならない無謀ではないからだ。

そして、状況は鼻肩目で見ても二体の鬼を軽く屠る音来の技量は確か、されど相對する鬼の力量もそれまでの魑魅魍魎とは比べるべきもない上位の域。

それを理解できない彼ではないだろうに、彼は用意した筈の雷も燻る様に火花を陰らせ、構えたままにいる。

そして後三寸も無く喉笛を捉えるという距離。

脳裏に数瞬後に彼が貫かれる状景が浮かび……

彼は動いた。

その動きはウエールズで育ったネギにはあまり見慣れないであろうもの。

日本の国技である相撲の戦法の一つに酷似した合掌は籠手の掌の大きさも相まって迫る凶刃を容易く白刃取る。

だが一点に集約された突きを受けきるのは困難だ。

彼が手を合わせた瞬間、身体をを空に投げ出していなければ

ば……

「ぬうう!?!」

刺突の勢いを利用し、掌を基点とするように空中で反転した彼はそのまま鬼の背後に落下し

『アマツキリ
天斬!!!』

合わせた両の手の紅雷が開放され、身体の回転のままに放たれたそれは弧を描き、刃となってを振り下ろされた。

光の螺旋はどこまでも高く大きく、何よりも速く、合わさる両手が放つ一刀は大地を、空を、そして鬼を^{てき}切裂き、戦場に終焉を告げる音を響かせた。

「すごい……」

明日菜の叫びから1秒にも満たない攻防。

そんな戦いの終わり、ネギは知らず汗を握っていた手が震えている事に気付いた。

畏怖でもない、戦慄でもない。いや、この感情は恐怖という枠には程遠く、そしてどこか似通っている。

憧れにも似た尊敬と劣等感。

自身の及びつかぬ相手と状況を瞬く間に覆した圧倒的な力。

同じ年という彼の言を、境遇を疑いような心根を恥じるとともに、

どうしようもなく羨んだ。

彼は自分の練磨する魔道を遙か先に進んでいた。

「今のをくらって生きてるたあな……割かしマジだったんだが」

「呵ッ呵ッ呵！なに、そんじょそこらのやつとは出来がちごうからの」

“雷刃・天斬”

必殺を誓って放った一撃は結果としては逸らされた。振り下ろした一刀を音来の跳躍に逸早く対応して矛を防御に回したからだ。

もつとも、きつかりと代償として武器を粉碎し、半身を断つたのだから本来はそれで詰み。

だからこそ、どこからどう見ても死に体で生きている鬼こそ異常でしかない。

「は、で？もう一発いつとくか？」

右肩から腰にかけて綺麗さっぱりと蒸発している筈の鬼は豪快に笑い飛ばす。

「なはは！おう！是非とももう一合い……とまあ言いたいところじゃが、ちつてももうそろそろ限界か……くやしいの……本当に一合いで終わってもうたわい」

「殺すつもりで撃った一撃を堪えられたんだ。勝った気がしないよ……一応聞くけど、この結界の解除方法は？」

「む、結界か？お主……ワシがそんな小難しそうな手を扱う様に見えるか？」

「見えないな全く」

どこに目を付けているという鬼の問いに即答で返す。

どこからどう見ても戦好きの召喚魔が魔術を好まない傾向にあるのは身に沁みてるし、まして最後の立会に正面から挑む気概も猛者がその手の小細工を弄するとは思えない。

彼がこの場に到着するまでに倒されたのなら話は別だがそれなら結界は解けているだろう。なら術者は一昨日の式使いあたりが妥当、本来使い捨てるの召喚魔にその手の細事がいきわたっているとは思えない。まあ、彼もそのあたりは承知のはずである。

「一応だ。聞けるならそれはそれっただけだ。まあ、たいして期待はしてなかったけどな」

「つとに、遠慮が無いやつじゃのお……」

「あんた等程じゃないさ」

「がはははははっ！ 然り然り！！鬼のワシが言う事じゃのうたの

おー」

笑ったり呆れたりまた笑ったりと意外に表情豊かな顔をするこの大鬼についで二三言葉を乗せられそうになる。が、その感情は行動にのる事無く終わる。鬼の身体が消えかけている事に気付いたからだ。

「ん？なんじゃ、意外に早いの……」

半透明になる己の腕を掲げ見る鬼。

その言葉はまるで他人事のようにこの結果意外に心残りはないといわんばかりだった。

「楽しかった。また殺合おうや」

最後まで自由奔放に、一擲千金を自で行くような鬼は気安い言葉の軽さで再会を言い渡し、答えは必要ないという様に塵と消える。

巻き上がる風に乗るそれを見上げた音来の表情には珍しく笑みが浮かんだ。それはまるで知らない自分の内に気付いた様で、何かを悲しんでいるようなそんな自嘲的な笑みだった。

「は、こっちは願ひ下げだよ」

かくして一つの戦いが終わる。

同時に張りつめていたような空気も霧散し、ネギを抱えたまま膝をついていた明日菜は気が抜けたのかペタンと座り込んでしまっている。

まあ、つい最近まで一般人だった人間が殺し殺されるような場に遭遇したのだ。対抗する術を得たといっても俄仕込み、むしろ良くこらえたというべきだろう。

「さて、状況クリア、伏兵の気配も無い、な……明日菜。明日菜？」

そう思い、敵の反応は無いが一応の警戒をしたまま座り込む彼女達に近寄る。

しかし、これが全くの無反応。近づいて呼び掛けようにも呆けたまま焦点が合わず、ついに間近についてしまった音来はしゃがみ込んで彼女の目の前で手を振ってみたりする。すると……

「え？つてきや あ……」

「……………助けて文句言われる事はまあ経験上それなりにあったが……さすがに問答無用で殴られた事は無かったぞ」

確かに無遠慮に顔を至近距離に近づけたのはこちらの不遜だったかもしれない。

だけど、悲鳴を上げられた上に殴られるというのはどうにも納得がいかない。

そこ！自業自得とかいうなっ

「う、ごめんなさいっ」

まあ、納得がいかなくても先に謝られたら矛を収めるのが大人の対応というやつだ。

……歳は間違いなく下だが精神的にという意味で、だ。というか多少無理矢理でも納得させる方向に向けないと話が進まん。

「は……いや、もういい……さすがに慣れた。蹴りじゃなかっただけ良しとするさ」

「？っ」

が、この程度の反撃ならお上も目を瞑ってくれるだろう。たぶん……

「ま、まずはネギの容体の確認なんだけど……こんな所じゃ落ち着いて治療も出来ないな。とりあえず脱出するか」

「え？あんだ結界解けるの？」

「いや解けん」

出れるのかと思った矢先に否というあまりに簡潔な返答、脱力した明日菜が思わず扱けるのも無理からぬことだ。

そんな先程の鬼との問答を焼増したような光景、違つとすれば解ける解けないの聞き手が逆になっている事か。

……訂正、若干抗議の声が烈火の如くである。

「んな吠えられてもな……扱うのと解呪は別モンなんだよ。

定石通りの結界ならともかくこれはその道の術者が張った結界だからな、当然原型にいくらか脚色入ってるし他人が解除するには手間なんだよ。まあじゃなくちゃ結界なんてもんは意味がないけど……

しかしこりやまた豪く複雑だな、術者の性根の捻じれ具合がよく出てるよ」

「そんな感心してる場合じゃないでしょっ！てか、だったら外にいる時にまずコレを何とかしてから入ってきなさいよ！！」

「あーハイハイ、耳が痛うございますよっ……」

「って、何やってるのよアンタ？」

先程からあたりをうろろろしていた音楽、一見解呪方法を探っている様に見えるが彼は解けないという。なら何をと眺めていると

何やらくたびれた大袋をぶら下げて戻ってきた。

それをゆっくりと地面に下ろすとやたらと複雑に結んでいた紐を結び解き、口に張り付けてあった札を剥がす。

「ん？そりゃ……解除の算段を付ける為に……ほら、今からこいつに聞き出して、な？」

「あ、コイツこの間のっ！」

明日菜が指さした先、大袋に包まれていたのは大層な魔具でも脱出する為の機会でもなく……

「チツ、もつと大事に扱えっちゅうねん」

黒髪に獣耳を生やした学ラン姿の少年だった。

「ちょっとつなでコイツがここにいるのよ!!」

「なんでも何も、連れて来たからここにいるんだろ？」

そう、相変わらず人を指差すというマナーとしてどうかという行為を続けているがこの際それは置いておく。彼女が問題としているのが音来が連れてきた少年、犬神 小太郎だという事が問題なのだろう。

何せ友人を連れ去った実行犯の一味、姿こそ……風変わりだが何処にでもいる活発そうな少年。だが、彼女は一昨日の夜の光景を憶えている。

あの時は自分たちの奇策を彼の乱入によって阻止されたのだ。それからの劣勢、幸いというか音来の到着によりその日は事なきを得たが敵が今目の前にいるのだ。どうしてと疑問に納得がついてこないのは当然だろう。

「だ・か・らッ、なんで敵を連れてくるのよ!しかもあんな所に放っておいてっ襲われたらどうすんのよ!!」

「いや、コイツとは一応決着付けたし」

「だからってそれなりに……姉ちゃん」何ッ!!」

そんな明日菜と音来の間に割り込む声の一つ。

この場には彼らを除くと負傷著しいネギと縄は無いが捕り物状態の

小太郎。

前者であるネギが意識のないままだとしたらこの場で当てはまる人物は一人しかない。

「……その兄ちゃんの言う通り俺は勝負に負けた、負けた以上は勝者に従う。俺は文句を言うような男じゃなかつた」

「だ、そうだよ？」

彼女としても逸早くこんな場所から出たいというのは望む所、そもそも関係者といっても明日菜は門外漢なのだからこの手の対応には任せるしか手が無いのだが、それでも目が文句を訴えているのはどうにかならないものか。

いや、口が収まった分いくらかましではあるが……

まあ愚痴っても耳には通らない、どこるか反撃の苛烈さは目に見える。なら、こちらの文句は置いといて作業に集中すべきだろう。

「ヘイヘイ、……ほんじゃまあ、小太郎……だつたよな？ 状況は入る前に確認したから判ると思うけど、約束通り結界コイツの解除方法、教えてくれるよな？」

「……負けたもん拒否権なんかないやろ」

確かに、と苦笑しつつ内心その潔さに感心し、座り込んだ小太郎を立ち上がらせる。

後ろ手に両手を縛るのみという捉えたというには彼の實力を考えるとあまりにお粗末。が、裏を返せばこの少年への信頼という捉え方もできる。

敵に信頼、というのもおかしい話ではあるが。

それというのも刹那から連絡を受ける小太郎との勝負、拳で判り合ったというほど熱血ではないが愚直な彼の戦い方はその心情を推量するのに十分な判断材料だった。何より決着時、そして捉えられてからの態度、肝を据えた座り方は迷いが無く。どちらかというところを削がれたというのが大きい。

つまりは戦闘を好む傾向にあつた彼だったが悪というには幼い、“どこか憎めない奴”というやつだ。まあ、若干口が悪いのはご愛嬌という事で。

納得のいかないという顔を隠すことなく後をつけてくる明日菜視の線を背に感じつつ、小太郎を先頭に進む一同。

そして彼等が進む事五分足らず、変わりべもない鳥居群の一角に小太郎が唐突に止まる。

「なるほど……言われればぼんやりと見えてくるな」

「って、兄ちゃん本当に感知系ダメなんやな……」

「っさい、人には適材適所って言葉があるんだよ」

「ちょっと、したり顔で話してないで判るように話しなさいよっ」

後ろから痺れを切らした本人からの抗議、それに音来はだからと言言葉を区切り、懐から愛用の銃を取り出して、

「こっから出る為の段取りって言ったろ」

無造作に引き金を絞った。

途端に響く破裂音。

薬莖が火薬を爆ぜる発砲の音に続いて鳴ったのはまるでガラスが割れた様に耳に残る不快音。

それは一つの世界が崩れた音、作られた枠に内包されていた“無間方処”という一つの世界が放たれた弾丸により、境界の頸木を穿たれ崩れゆく音だった。

「な、出られたろ？」

あける先には確かに代り映えのない空間。
がしかし、確実に繰返された結界とは違った外の世界だった。

取立34回目　く取引と砲撃、長すぎた終幕にようやくの脱出く（後書き）

はい、どもなんだかんだでテスト中の投稿は無理だったトントンです。

いや、終わってみるとあっちゅうまなのが不思議な脱力感。後は野となれ花となれ……って野になっちゃ困るんですが（苦笑）

ともあれ今回のお話は前回の主人公の技の大まかな説明と戦いの後、って感じに集約しています。これもテスト期間の合間合間に打った文章を継接ぎに肉付けをして捏ねて出来上がった作品。比較的、というか久々に時間をかけて打ったのですが……うん、判定やいかに？

つと、肝心の更新スケジュールです。またまた帳尻合わせに来週は変則で行きます。

まず、今日までで骨組＋見直し前状態までは持つていけているので日取りもちょうど良く2日づつあける形で10日（火）と13日（金）の零々1時を目安に上げます。つまり月曜から火曜にかけての深夜、木曜から金曜にかけての深夜です。

細かい所は更新毎にあとがきに乗せていきます。

なのでとりあえず次回の更新は10日の午前0～1時という事でよろしく願います。

それでは本日もこの辺で失礼を、また次回の更新でお会いしましょう。

再見ッ！！

「そら、まずはネギの容体だ。そっち寝かせてくれ」

「あ、うん……」

鳥居が立ち並ぶ石段を抜け、一行は開けた高台の一角を陣取っていた。

本来なら抜けてすぐ状況確認をするべきなのだがここは敵の懐、いつ再度の攻撃があるか判らないのなら少しでも見通しの効く場所がいいと少々強行したためである。

もつとも……

「ずいぶんとボロボロだったが、見た目ほどじゃないみたいだな……
…って起きてるのか？」

「あ、はい……」

辛うじてといった具合で返事をするネギ。

音楽は見て目ほどではないと断じたが打撲擦りキズは相当なもの。が、彼の見立て通り内臓損傷や骨折といった治りの遅いものや大掛りな手間を要するものが無いという意味である。それだけ見ればむしろ僥倖、卒業間も無い身で良くこの程度で済んだというもので、正直ネギの事を見直していた。

まあ見た目の割に疲労が著しいのは情けない様に見えるがそれも彼なりに試行錯誤して戦闘を堪え切った結果、魔力消費による疲労となれば多少大目に見てやってもいいか。

そんなネギの傷の具合を内心微笑ましく見ていた音来。ネギ自身思う所があるのか若干身を固くしていたがそれも無理からぬところだろう。

と、そんな場の雰囲気を変す悪態が一つ、いまだに捕らえられたままにいた小太郎のものだ。

「ケツ、従者になんか頼つとるからそんな大目玉喰らうんや」

「何ッ!？」

「フン、ほんとの事やろつ、自分一人じゃ殴れもせん。西洋魔術師いうんは」

「どうやら小太郎は西洋魔術師、というより一般的な西洋の戦闘スタイルがお気に召さない様子。」

確かに手合わせをした彼の戦い方は音来もよく知る所、また性格上男は矢面に、女は後ろないし殴らないといった信条を持つ彼にとつて明日菜と戦うネギの姿はあまりよく映らないのだろう。

かく言う音来も養父から似たような教育を受けた身、まあどうも小太郎の育ち方は極端に肩用っているようにもみえるが判らなくもない。加えて音来自身前進を良しとした戦闘スタイルなのでその理解も一押しだった。

「つといても普段の彼なら我介せず、もといあまり関与しない所だが……」

「お前は黙ってるややこしい……ネギもむきになるな。ほら、ちよつと横になつてろ」

ネギにしては珍しく小太郎の挑発に乗り気だったとなれば傍観というわけにもいかないだろう。

さすがに怪我人を暴れさせる訳にもいかない。

諸悪の根源である小太郎に拳を一つ落として起き上がるネギを再度横にする。

上半身合わせて打ち身が悪かったのか右肩が少々腫れ上がっているが年齢的に見てもネギの年頃の自己回復力は高い。その程度ならむしろ多少の補助の方が丈夫になる。

口から吐血した時は内心冷やりとしたが透かして見るにやはり内部に損傷は無く、どうやら口内の切口から食道に流れ込んだ血が一定量を超して吐き出されただけだったようだ。

「ん、外傷は目立つが骨まで入ってないな。つつても、さすがに口の中はこのままって訳にはいかないから……ホレ、コレ嚙んどけ」

「……なんですこれ？」

そう言つて音楽がネギに差しだしたものは濃緑色に所々黒い短点を持つガラス玉程度の大きさの玉。

見た目が見た目だけに引き気味で尋ねるネギに音楽はいいからと彼に持たせて飲むように言う。

人間誰しも未知の食べ物というのは口に入れにくいもの、まして見た目が奇怪なものなら尚更だろう。

そうして玉を睨む事数秒、いい加減焦れて来たという所でようやく、

踏ん切りのついたというかやけくそ気味に一息に口にネギがそれを入れ……

「#”%@&\$/’ *。? ㄨ!!!!!」

「はい、吐出さない飲込まない」

サツと顔を青くして暴れそうになるネギをホールドし、素早く口と咽を掴み押さえる。

それもそのはずでこの養父特製の丸薬は死ぬほど不味い。死ぬという表現は少々安直だがどのくらいかというところと開発者である養父本人が二度と口にしたくないというほど不味い。なら作るなと飲まされた音楽本人も糾弾したが確かに痛みも傷も瞬く間に治った優れたもの、認めたくはないが薬としては一級品である……

苦い思い出を振り返りつつ、そうしてネギが規定時間咀嚼し終わるまで押さえ、時に口を塞ぐ手を器用に使って噛む手助けをしてやる。暴れネギを抑える音楽を遠巻きに、しかし治療と判っている手前止める訳にもいかず、その光景を二人と一匹が眺めるままにただ無情に時が過ぎていく。

「うー……まだ口の中が苦いです……」

「あははは……」

丸薬による口内の治療が終わり、音楽が手渡したお茶で必死に口を漱いだ後、うなだれるネギに明日菜は頭を撫でやりつつ苦笑している。

彼の暴れ具合からしてその味は想像に難くない、間違ってもお世話になりたくない。自身の怪我が少なかった事に安堵しつつ申し訳なく思う彼女であった。

そして、薬を寄こした本人はというと、傷口を無遠慮に確認した彼は持ってきた袋の一方を漁り円形の筒を明日菜に渡して刹那達と連絡を取る為に少し離れた所にいる。

「はい、こつちはいいわよ。次、背中見せて」

「あ、明日菜さんやっぱりこれくらい自分で何とか出来ますから…」

「怪我人が遠慮なんかしてるんじゃないのっほら、さっさと背中を向ける！」

「はぐっ」

「あ、こら動かないでっ我慢しいなさい」

良薬は苦しという事だろうか？

どうやらこの傷薬も良く効くようだが傷口によくしみるようで顔をしかめるを通り越して暴れかけている。

明日菜も口では我慢しろなどというが背中、特に腫れ上がった右肩を中心に全体に残る擦り切れた傷を見るに大分我慢してもらわなくてはいけないので少々気が遠くなる。

が、それを処理する彼女の手は意外と手際よく、中々に甲斐甲斐しいものであった。

「……音来さん強かったですね」

「そうねーバババってあつという間に鬼達を倒しちゃってあたしたちの苦勞はなんなのよ　って感じだけど」

そんな中、ようやく背中を塗り終わり、終わった上半身に包帯を巻く彼女にネギが声をかけてくる。

彼の口調は先程の事を思い出してかどこか沈みがちだったが明日菜は努めて明るく返した。

それは単に安全を確保できたことからによる安堵だったかもしれない、あるいは暗くなる彼の雰囲気のを払拭しようかと判らないなりに振舞おうとしたのだろう。

そんな彼女の配慮を知ってか知らずか、ネギはそのままのトーンで変わらず、まるで独り言のように独白していく。

「僕、エヴァンジェリンさんと戦って勝って……やっぱりあれはまぐれなんだなって、今日実感しました。……いえ、本当はもっと前からわかってはいたんです。でも、やっぱり勝てたって事でどこか有頂天になって、どこか強くなった気になっていたのかもしれない。そしてお父さんの手掛かりがあるっていう京都に来て、木乃香さんが攫われたけど明日菜さんがいて刹那さんがいて……どこか甘く見ていたんだと思います。……コッチ側が安全じゃないって事は僕自身判っていたのに……」

彼の告白、それは自身の弱さに対するものだった。

守っているつもりだった。“立派な魔法使い”として、憧れのあの

人の背中を追い続ける為に、いつか胸に誓った誓いを果たすために努力してきたはずだった。

その結果が今のありさまだと彼は言う。

必死に戦った。

でもダメだった。

違う、これはゲームじゃなくてももつと単純な事で、“負けたら死ぬ”そんな簡潔な事実を改めて突きつけられたのに何もできなかった自分が齒がゆいと身を震わせた。

恐らく彼は泣いているのだろう。

だがそれを覗き込むほど彼女は無粋ではない。が、そこに何か論破できるほど頭がよくないとは自覚している。

悔しいが目の前で嘆く年下の少年の語りを否定してやる言葉は彼女の辞書にはない。

でも、

本当にそうだろうか？

胸に感じたのは簡単な疑問。

心に思ったのは小さな蟠り。

答に至ったのは簡潔な確信。

「これじゃ僕教師としても魔法使いとしても
……ありがとうね」

そう、ただの感謝の言葉。

「だからっありがとっって言ったのよ！こ、こうして私がほとんど無傷なのもあんたのお蔭だし、一応、これでも感謝してるんだから
彼は自身が弱いといった。

それについて彼女は言うべき言葉を持ち合わせない。
当然だ。自分はこんな世界に関わってはいるが圧倒的に知識が足りない。

強さの位の判断基準が拙いからだ。

だが、彼が教師として魔法使いとして未熟と嘆くなら待ったをかけられる。

少なくとも学園にいたころも、一昨日の夜も、そして今日あの時も、情けないと思う時もあるが最終的に乗り越えてきた。

そしてなにより今の自分に彼のお蔭で助けられてここにいる。

まあ、出会いこそ最悪だったが少しぐらい認めてあげてもいいかもしれない。

それが明日菜の今現在のネギの評価であり、感謝の言葉に繋がった。

そんな彼女の言葉にどう思ったのかネギは顔を向けたまま呆けている。

またしまりのない顔をしているなど少々小突いてやるうかと考えが浮上するも今くらいは勘弁してやろう。

そうして、比較的やさしく正面を向き直らせてまた包帯を巻く作業を再開する。

その手は照れくささが今頃ぶり返してきたのか若干乱暴だったが微笑ましさは変わらなかった。

やがて上の治療は終わり、さすがに秘部の処置は互いに了承しかねたのでネギ自身に任せて明日菜は退散する事にする。

「は、あいつもあんな事で悩む事もあるのね　って当たり前前かもね」

強い弱いというには既に思春期を迎えた明日菜とネギとは感覚が違う。そもそも男の子と女の子では尺度が全く違うので測りようもないが。

手持ち無沙汰な感じであるといつの間にか連絡を取り終えただろう音楽がこちらへ踵を返して戻ってきたところだった。

「明日菜、ネギはどこだ」

「ネギなら向こうよ。……なにかあったの？」

再会してから常時感情の起伏をあまり感じられなかった彼の言葉に

変化は聞き取れなかった。

だが本能的にそれが逆の事態を、悪い方向に想像させる。

「攫われた……」

思わず聞き返した物騒な単語。

主語が抜け落ちた言葉、“誰を？”そんな当たり前の質問を口にする前に彼女の脳裏には友人の笑っている顔が浮かぶ。

なぜならそれはごく最近聞き慣れてしまった言葉で、今最悪を予想させるには十分な言葉だったからだ。

side: Setsuna・Sakurazaki

夢、を見ている。

目の前の光景を夢だと判断するのは容易い。

何故ならそれは自身にとって、いや、現実に起こり得ない光景だからだ。

「お嬢様は、確かに頂きましたえ」

そう、敵である天ヶ崎 千草。彼女の腕の中で力なく捉えられている大切な人。

彼女が自分の目の前で敵の手に落ちるなど悪夢以外の何物でもものない。

「クツ、貴様っ！！お嬢様からその手を離せ！！！」

「ホホホ、あきまへんなあ。というより、放してもええんどすか？おちてまいりますな ……大切な大切なお嬢様が」

こちらをおちよくる相手の物言いに血が上るのがはつきりと肌で感じ取れる。

飛べるなら今すぐにも駆けつけてその手を切り落としたい衝動に駆られるほど、だがそれはできない。

単に掟や周囲の目があるからではない。そんなもので足がすくむ段階はとつくに飛び越えている。

なのにそれが出来ないのは

「よそ見しているなんて余裕だね」

「クツ」

背後から音も無く忍び寄った隠者の一撃を身を翻してかわし、追撃に手に持つ夕凧を振るうもしかし、そこには既に影も形も無い。

「あゝん、ウチ一人で十分やから先輩をとらんといてください」

「……君は遊びが過ぎるのが玉に瑕だよ」

わざわざ左右の死角に降り立ちながら私を挟んで会話をかわす両者の態度に苛ただしさがつのる。

だが、少しも油断は許されない。

片や飄々とした気の抜けた掛け声、されど苛烈な一撃を見舞う二刀を携えた少女。

片や誰かの様に又はそれ以上に感情の読めない仏教面で堅実に確実に虚を突く少年。

一人なら相對しようと思われをとるつもりはない。

いや、例え相手が上の位だろうと喰らいつく自信はあるし、それをおいて木乃香のもとへ駆けつける算段はある。

だがこの状況、二人は振り払う事さえかなわぬ領域の強さを誇っていた。

「クソっ邪魔を、するなっ!!」

「……………」

「よっ、ほつと、あきまへん、あきまへんなー刹那先輩。刀が乱れとりますなあ、そんなんじゃウチつまらんようになってまいります」

「

纏わりつく八工を払う様に、忌々しい邪魔ものを切り払う様に放った拡散する斬撃は予想通りに往なし、あるいは躲される。

それはいい、むしろ目眩ましに相手の足を止められれば上々というもの、しかし敵は予想の上をいき、絶えず向かうべき場所への進路を断つ。

一合、二合、積み重ねるごとに激しくなる剣戟はそれだけに時間の経過を私に示して焦りを募らせる。

まだ、まだ間に合う。
彼女が何とか敵を引きつけている、だがそれもいつまでも持つものではない。
確実になす為には後一手が必要。

なのにその一手が不足している。

「　　っ、悪いが、貴様の娯楽に付き合う気はかけらもない！そこを通せ！！」

「あゝん、いけずやわー」

視界に、気を抜けば木乃香を抱える千草を視界の外に追いやろうとする二人。だがそれだけはさせない。

今馳せ参じる事が出来ずともその姿を見失うような事があればそれこそ打つ手がなくなる。

今できる事は僅かな隙を確実に捉えて戦況を打開する事。しかし、その為に耐え忍ぶのは駄策、やるからには全力で持つて烈火のごとく攻め込む！

「チツ　　その神鳴流剣士！！」

屋根の上に立つ女の叫び声に意識を割く、しかし油断なく目の前の敵と距離を取る。

こいつ等は少しでも注意の匙加減を間違えれば即首を刈りに来る。油断なぞ一ミリも出来ない。

「いいかげんしつこいおす……………そんなに返して欲しければ返し

たるわ」

な！？まさか　　っ

見止めた光景に思わず緊張が崩れかかる。

なんと敵は捉えた筈の拘束した木乃香を式神で掲げている。それも屋根の縁の外にだ。

女の狙いが木乃香なら………いや、そもそもやつらの狙いと思っ

ていた木乃香に危害が加わると思っていた事が間違いだ。

そんなこと誰が決めた？

あいつらが木乃香の何を欲していると誰が決めた？

立場か？魔力か？それとも彼女の能力か？あるいはその全てか？

その上で彼女に危害が及ばないと言ったのは誰だ？

私だ

「ほら、大事なお嬢様がお待ちやで？」

「っ！お嬢様！！！！！」

正直に言うなら今すぐあの女の顔を殴りつきたい、だが、そんな事時間の無駄でしかない。

この身はお嬢様を守るためだけに、なら最速で今この瞬間落下していく彼女に駆けつける！

「ようやく隙が出来たね……」
「っ!」

防御、と思った時には体があらぬ方向へ吹き飛ばされた後、壁に激突し、ようやく殴られた脇腹に痛みがついてくる。

何たる失態、油断なくと思った矢先にこの体たらくだ。打ち所は外筋と肋骨を浸透して内臓に及ぶ、こればかりは気概でどうにかなるダメージじゃなかった。

「あ、フェイトはんひどいやんっ結局先輩の勝負とられてもうた」

「アホ言うとらんで暇やさっさとしい」

そこへ文句を垂れている月詠と木乃香を抱えた式神に乗った千草が目の前に下りてくる。

「ざんねんやったな……というか、いくらウチかて大事なお嬢様を傷モノになんかしらいひん。のにあんな必死で　クククっほんま、おもしろいもんを見させていただきました」

「お、お嬢　さま　っ」

「まあ、まだ息あるようけど……ウチはそれを見逃してやるほど優しゅうないんで」

式神から木乃香を預かると空いた手を振り上げる。その手には何も

握られていない。
代わりに横に立つ式神が腰から抜き放った直刀を片手で上段に構えていた。

「ほな、さいなら」

降りる手に合わせて迫る凶刃。

恐怖は無い。

あるのはただ後悔の念と自責。

何故守れなかったといくら責めようにも責め足りない現実に悔しさから最後まで刃から目が離れない。

そして、

身体が痛みを享受する前に視界がゆっくりとブラックアウトし、意識が逆に浮上するのを感じる。

ああ、良かった。

夢見は最悪だったけどやっぱりこれは夢だった。

夢なら、現実にはない出来事だと思わず安堵のため息をついてしまったがどうにか気を引き締める。

確かにこれは夢、だけど夢とはいえお嬢様を守り切れなかったのは不吉すぎる。

が、逆を言えばこれはこれでついているともいえる。

どうも私はあの人が合流してから気が緩んでいたらしい。

味方の増援は期待できないと思っていた矢先、それも敵の襲撃の中で劣勢というタイミングで駆けつけてくれたのだ。多少気が緩むのは仕方が無い仕方が無いかもしれない。

だがそれがもとで大切な人を危険にさらしては本末転倒だ。

やはり最終的にお嬢様を守るのは私の役目、ならこれを機に気を引き締め直そう。

ほんのりと暗くなった視界に明るさが宿る。

どうやらもう本格的に意識が覚醒しだしているようだ。

さあ、やる事はたくさんある。

警備の組み合わせの見直しに各自の装備確認。

そうだ、まずは音楽さんにいの一歩に相談してみよう。

彼なら例え夢だったとしても蔑ろにしないで真剣に聞いてくれる、そんな気がする。

懸念事項の再確認はどんな任務でも有効だ。仕事には真面目な彼ならいいディスプレイションになるだろう。

上げてみるときりが無い、でも時間は有限だ。

だからこそその中で最良の手を選びとる。

待っているっここからは夢のようにはいかない！

決意を新たに私は起き上がる意識に鞭を打って現実に望むべく
眼を開いた

ども、時間を配慮してみたら結構な時間に………
てな訳で今回は初めて思い切って予約掲載を使ってみました！

さて、ようやく進み始めた物語？

流れはゆっくりと逸れていくようです。

さてこの事態に主人公達の対処はいかに？

てか彼女ストーリーからログアウトしましたけど大丈夫なの？

まあ色々賛否両論………てか8割方否な気も………しない事にしておき
ましょう。

とまあこんな感じで進んでいきます。どうか未長い目で見てやって
ください。

さて、次回の更新は13日ですね。こちらも見直し程度と問題はな
いので時間に変動はありません。
ただ、今日の様な事もありますし予定より時間を置いて確認いただ
くか朝方に見る事をお勧めします。

では、本日はこの辺で失礼を

今回も最後までお付き合いいただきありがとうございます。

今後ともどうかよろしくお願いします。ではでは！再見ッ！！

取立36回目　く鬨ぎあう信念と合理性。沈黙の敗走く

何処で間違えた？

今朝目を覚ましてから今この瞬間までの出来事の一つ一つを矢継ぎ早に消化していく。

全てにおいて最善を尽くした。いや、尽くした筈だ。

だが、何に両腕にかかる重みはその前提を否定する。

己の選んだ選択肢は間違いだったと。

「あ、戻ってきた。音来せんせ　っ！？刹那さん！！」

遠く俊足で駆け抜けてきた彼を逸早く見つけた明日菜が声をかけると同時に両脇に抱えられた彼女達の異変に気付き、慌てて駆け寄る。

そんな彼女に音来は掌を突きつけて制止をかける。

だが彼の上下する方から見て明らかに温存を考えない全力の疾走。姿も効率を優先したのか今まで一度も行わなかった成人体への“変化”を行っている。これで心配するなという方が無理だろう。

だから一息に息を整えた彼は表情だけは努めて平静に、事実だけを淡々と告げる。

「……静かにしろ、意識は失ってるが脈はある。だけど俺の手持ちじゃ手当が不十分だ……だから、順序は狂ったが今はこのまま呪術協会へ向かう」

二人を抱えている状態にもう一人は無理という事でネギが走る分には問題が無い事を確認して小太郎を明日菜に任せる。明日菜が自分を運ぶという事にもう抗議をする小太郎だったが口に術を施した布を巻きつけて音を強制的に遮断させる。

少々強引だが今は言って聴かせる手間も惜しい。

全員の準備を確認し、一同は残りの石段を一気に駆け上がる。

道中、彼は二人を抱えているのにそれをものともせず、尚且つ後続を置き去りにしないよう追いつけるギリギリの速度で駆ける。それに後ろから抗議の声も上がるがそれを完全に無視し、彼女らにも全速疾走を強要する。

そして目の前に見えた質素ながら偉観な大門を前にしてようやく停止し、門を叩いて用件を林一帯に響き渡るような大声を放った。

「失礼するつ関東魔法協会から使者として参った！長に御目通り願いたい！」

響き渡る怒声の後に訪れる静寂、近くで直撃を受けた明日菜などは思わず頭を抱えるようにして耳を塞いでいる。

そんな中門の向こうに反応は全くなく、内心焦れて来た音来が強行しようかと足に再度力を入れた時、ようやく門が開かれた。

が、そこにいたのは下の者でも警戒に当たった仰々しい従者でもなく、

関西呪術協会会長、近衛 詠春本人だった。

突然の長の登場に驚く音来と状況を理解できない若干名。

だが、彼は即気を持ち直し、出来る限りの居住まいを正して頭を垂れる。

「関西呪術協会 長、近衛 詠春殿とお見受けする。私は関東魔法協会の使者の一人の鳴守 音来、突然の無礼をお許しただきたいつ！ですが」

しかし、その声を詠春が手振りで遮り、顔を上げさせる。

「大体の事情は察しています。とにかく今は中へ、彼女たちを別室へ案内させます」

まるで見ていたというばかりに事情を聴く事無く容易に入れた事に驚く音来。だが、嘘か真かと門前払いされるよりずっとマシだと思考を切り替えた。

そして背負った刹那の顔を一瞥し、術者をに施術の用意をさせているという部屋へ先導する彼の後を追う。

施術室に二人を預けた後、音来とネギは長、詠春の案内で別室に通された。

明日菜も来るように言ったのだが彼女は刹那達の傍で待つと聞かず、詠春に断りを入れて施術室前に残っている。

「改めて、先程は不作法な訪問の上に便宜を図って頂きありがとうございます
ございました」

「いえ、直前まで彼女、刹那から報告は受けていましたから……それに君達の事は元々東の長からは連絡を受けていましたのでそうかしこまらずともよろしいですよ」

「……ですが、こちらの不手際で木乃香さんが……」

畏まって頭を下げる二人によいという詠瞬だったがネギの言うところ事態は深刻だ。

近衛 木乃香、目の前の詠春の愛娘であり関東魔法協会理事の近衛近右衛門の孫である彼女が攫われた。

しかも彼女は日本でも屈指の魔力保有者。その地位的影響力も潜在能力的にも高く、それだけに今後の展開を想像するのは容易、だがどれをとっても芳しくないものだ。

「それについては私も見通しが甘かったと言わざる終えません。今は反省するよりも先にこれからの対策を練る事が重要です」

それは実の親として冷めた物言い。だが彼とて自分の立場から感情を押し殺しているのは明らか、本当なら護衛を全う出来なかった自分を叱責するなり今すぐこの場を飛び出して娘の元へ駆けつけたい

だろう。

なのにそれをしないのは自分という秤をしつかりと保っているから、己の役目と状況を見据え、足かせにも見える立場を全うする為に前を見据えている。

音楽が感じた詠春の第一印象は恐ろしいまでに冷静な男というものだった。

「ですからまず、説明をしていただけますね？」

「はい……」

なら自身も迅速に彼の問いに答えなくてはならない。

横にいるネギとカモを加えて二人と一匹は自分達を知る経緯を事細かに、且つ見落としが無いよう自身が咀嚼するように、京で起きた出来事を初日の新幹線での出来事から順に語りだした。

「ほな、さいなら」

振り下ろされる刃、鏡のように磨きあげられたそれはまるで血を欲す様に怪しい輝きを放ち、眼前に力なく倒れる少女エモに狂喜する様に風切り音を響かせながら空を切り裂いた。

が、結果として刀は少女の生き血を啜る事無く、されど鉄の味を確かに感じた。

赤い火花を散らしながら刃を弾く籠手テツの味を

「何!?!」

「フンツ!!!」

瞬時に展開した籠手アイティファクトを刹那と刀の間に滑り込ませ、斬撃を打ち流す衝撃を利用して左手に込めて裏拳を思い切り鳩尾に打ちこんでやる。

自力に相手の力を遠心力に上乗せし、魔力の暴発を加えた一撃は召喚魔の身体をくの字型に曲げ飛ばし、横に立っていた召喚主ごと吹き飛ばす。

「間に合った、な」

辛うじて溜息を洩らすのを堪える。

緊張と共に溜息を洩らすのは自分の悪い癖だ。

なぜ人通りが多いこの場所で事に及んだのかは分からないがここは戦場、一難を退けたとはいえ彼女の言葉が確かならこの程度で済むはずが無い

「　　っ！！」

背後に感じたあまりに生きていない気配に背に冷たいものを感じつつ横に飛び込み、刹那を抱えて大きく距離を取る。

着地して逸早く捉えたのが大きな水たまりとその上に立つ白髪の少年。

天候は晴れ、水溜りなどこの場に存在するはずが無く、明らかに魔力を有したそれは確実に攻撃の布石、用途として使用されたもの。そしてその上に立つ少年。彼に見覚えは無いが先程感じた奇妙な気配を放ち、重心に全くのブレが無い常人、いや、人間離れた佇まいは彼を敵であると判断するには十分すぎた。

「おかしいね、ここら一体は電子機器も含めて念話電波は妨害してただけど……どうやってここを特定したんだい？」

「……企業秘密だ……答える義理は無い」

止まらない冷や汗を全力で誤魔化し、目の前の同い年くらいの風貌の少年に本気で警戒する本能に無理やり造った張りぼてで虚勢を張る。

一昨日相対した女術者は吹き飛ばしたとはいえあれで倒したとは考えるのは安易だ。それに目の前にいる少年に情報ではもう一人、あの二刀流の神鳴流剣士がいるという。これがいつかの様に拮抗しているのなら自身が一人一人確実に潰していけばいい。

だがそれも現実土台無理な話、頭数がそろわないどころか後ろには気を失っている刹那がいる。

見た目ひどい外傷もないのに気を失っているという事は内部に深刻なダメージを負っているのだろう。

とてもじゃないが即参戦という事態にはいかない、こうなると小太郎監視と負傷したネギを休ませる目的で明日菜も残してきたのが今更ながらに悔やまれる。が、ないものをねだってもどうしようもない。

そしてもう一つ、彼には懸念事項があった。

それはもう一人、少し離れた場所で安置してきた少女の事だ。

そもそも音楽がどうやってこの場所に駆けつけたかというとその少女のお蔭だからだ。

嵐山からここまで軽く見積もって1時間強、いくら音楽が足に時間があったとしても即駆けつけることは不可能。

だからこそ、彼はアキラに渡した指輪を頼りに強制転移移行を行った。もちろん使用者の意識がある事が大前提な為、昏倒してもおかしくないダメージを負った彼女が意識を繋いだというのは大きい。更に相手方が張った結界というのが空間を隔離する類ではなかった事、これらの要因がそろって彼はここに駆けつける事が出来た。

一人戦う刹那のもとへ行ってくれと手に食い込むガラス傷も気にせず懇願する彼女を置いてきた納屋を敵に気付かれないように視線を向けずに確認する。場所はスタッフの待機所を納屋に偽装した物だったのか内装は外見以上に小奇麗で手当てをするにも申し分なかった。

だが、さすがに時が惜しいのは彼も理解しているので出来たのは出血程度、最低限の治療しかできなかったのは悔やまれるがそれは彼女が言う様に全てが終わった後、この場を切り抜けてからすべき事だ。

「……………」

意識を何割か戦闘に戻しつつ、その更に何分かを籠手に割いて余剰魔力を概算する。

何故なら彼はこれまでの連戦と高速移動、強制転移を使った事によって自身の魔力総量の内、戦闘に許容できる量をほぼ使い切っている。

それこそが彼の一番の誤算。

今ここに立つ彼はアーティファクトに貯蔵した魔力で戦っているにすぎず、例え“魔法の射手”一発分の魔力も無駄にできない。加えて、敵三人を一人で相手するとなれば確実に全力戦闘、そうなればいくら貯蔵していたとはいえ3分として持たない。

絶体絶命とはこの事だった。

「 やつと……………合えましたなあ……………黒染めの男ッ!!!!!!!!!!!!!!」

「 なっ!?!?」

突然横から飛んできた剣戟、それはいい。

咄嗟に受けた音来も鬼を仕留め損ねたと思っただが飛ばした際にぶつかつた感覚で大体の力量は把握できた、あの程度なら問題無く今度こそ滅せられるからだ。

なら、この驚愕の声は何故？

「よっやくや、よっやくっ！」

血走った眼でこちらを睨むのは件の鬼ではなく、術者である天ヶ崎千草だったからだ。

「っ、らあー！」

火花を散らす刀、吹き飛ばした筈の鬼のそれを片手で振り回す彼女から間合いを取る為に力任せに弾き、大きく後方へ跳躍する。

おかしい、彼女は術者、それも符術を使った典型的な後衛タイプだ。一昨日の逃走劇も強化したネギ達から逃れるために自身の足ではなく式神を纏う事で速力を増していた。なら今も式神による強化をしているのか？

答えは否。

よるめいた体勢をゆったりと立て直す独特の着物を着崩した肩を露出した装いはそれ以外の装飾が見受けられない。

違うとしたら一点、手に持つ人の身に余る大きさの刀の刀身が徐々に黒く染まっていく事か。

それも恐らく式神とは別の、符術ともまた違う呪術を使ったもの。だが、^{エンチャント}武器に付与するという行為はそのカテゴリー以上の強化は理論上不可能、何故なら強すぎる力は武器の許容を超えて器そのものを破壊してしまうからだ。

……なのに、鬼の力で傷付かなかったかった筈の籠手に太刀傷が残っている。

音来も愛用する傍ら数々の品をコレクションしてきた。その観察眼からしてあの刀はただの鈍ら、丈夫さだけを優先させた霊格も神々しさも無いただの刀だ。それが俺のアーティファクトに傷を？

明らかに理解の外の力に戦慄を覚える。

ここにきて切った彼女の切り札か、それはただの呪術にはあまりにも得体のしれないものだった。

「長かった……ウチがこん時をどれだけ待ち望んだか……子供が誕生日を指折り数える様に待ち焦がれた、初恋の告白以上に身を焼かれたっ……けど、もうそれも終いや……」

ゆっくりと幽鬼の様に生気の無い顔を上げ、手に納めた刀を掲げる。よく見るといつの間にか、その手に持った刃は黒く、禍々しく変色を終えていた。

「今すぐその身体引裂いて清水の舞台に吊るしたるッ！！！！！！」

やばいっ！

未知の力に思わず総毛立つ小心者な自分に鞭を打ち、下がりかけた

右足を無理やり前に持つてきて構えを取る。
後ろにはいまだ目を覚まさない刹那がいる、避ける逃げる以前だ。
あれをこの場で淘汰しなくては先が無い。

迫るあまりに黒く禍々しい刃。

盾は無理だ、あまりの妖気に手持ちの手段では貫かれる姿しか見えない。

では刃を？

それも却下、半端な力ではその衝撃に打ち碎かれるだろう。

迎え撃つならなら容赦なくだ。

それこそあの“雷の刃”の様に、今は後先を考えて出し惜しみをしている場合ではない！

残る魔力総量の半分を使い切る気持ちで両拳のリミッタを外す。

紅く発光する籠手を見て一層笑みを深くする千草を見納めて右拳を大きく振りかぶる

「そこまでだよ千草」

だがその両者の間に突如降り立つ白い影。

意外にもそれは敵である筈の白髪の少年だった。

「フェイト！？なんでや！！せっかく目の前につ」

「これ以上は記憶操作にも時間がかかる。第一、目標を捉えたのに目先の新しい獲物に飛びついていてると一昨日の二の舞じゃないのかな？」

踏みとどまるように女を諭す少年はそれにと続け、こちらに聞こえない大きさの声で二三彼女に告げる。

すると、狂喜に染まっていた女の表情が一転し、瞬く間に表情から険がとれる。いや熱が冷めたと言った方がいいかもしれない。

「……そやったな　あかん、どうも最近堪え性が無くてあかんわ。それに、この程度じゃダメやったわな……もつと相応しい舞台で、もつと大きな絶望と苦痛を……ウチが味わった以上の痛みを与えるんや」

が、依然としてブツブツと言葉を吐き続け、時々薄ら笑いを漏らす様子はどう見ても常軌を逸している。

それはまるで思いついた悪戯が成功する瞬間を夢見て心踊らせる童子の様に、ただ純粹に綺麗に歪な笑みを浮かべ、小躍りしそうな様子はそれゆえに見る者に悪寒を抱かせる。

「　　つ、待て！木乃香は連れて行かせない！！」

はっと気付いて彼等の進路に瓦礫を投げ飛ばして進路を塞ぐ。

晒した醜態にさっきまでの自分を殴りたいがそんなものは後回しだ。俺はここに何をしに来た？

生徒を助ける為だ。

「……その様でどうやって？君の仲間はこの場には二人、一人はしばらくは起き上がれないだろうね。けど君なら彼女を守りながら僕達を足止めするくらいはできるかもしれない。じゃあ、もう一人は？彼女は一人で大丈夫なのかな？」
「ッ！？」

だがその決意は少年が放った言葉に止まる。

それは目に見えない脅迫。

この場にいない、いや、自身が安全な場所に退避させた筈の彼女の事。

彼はその気になれば彼女を巻き込めると言っている。戦える状態ではない彼女を今この場にいなから血に染める事が出来るといったのだ。

秤にかけるまでも無い、一人を助けるために助かる筈の二人を犠牲には出来ない。

何より敵は木乃香の力を狙っていたのだ。最悪攫われたとしても身柄の無事だけは保障されている。

助けるチャンスはまだある。

動かないこちらを一瞥し、先に立ち去った千草の後を追って少年、フェイトも去っていく。

やがて彼等の姿が見えなくなり、言い訳に限界が来た俺は思わず自分の頬を思いつきり殴った。

その行為に、それすらも自己満足だと冷静に嘲笑する自分に気付いて俺は自分自身を嫌悪した。

「その後は……長のご推察の通りです。状況から御息女である木乃香嬢の救出を断念……並びに、追撃は好ましくないと独断で撤退を決行しました」

そつだ。自分は最善サイアクの手段を選んだ。

選んで実行した。

任務の優先順位、仲間への背信、あまりに合理的で反道徳的な選択。どれも納得をしているはずなのに後悔が後から後からついてくる。

そして今、まるでそれらに許しを請う様に頭を下げている。強くなつたはずの自分に絶望し、失望している。結局無力で変わっていない。

本当に情けなかった。

「長、いえ詠春殿……此度の不手際は私の状況判断が至らずっ、誠に申開きのしようもありません!!」

口から洩れる言葉自体が言い訳がましくて自分自身吐き気がしてくる。

でもそれを止めるわけにはいかない。これは言い訳ではなく事実を

伝える為の告白だからだ。

「……………顔を上げてください……………」

沈黙。

それは己の心を責めるような拷問の様な時間だったがそれを飲込む。いかなる責めを受けようと全て受け入れなくてはならない。自分はそれだけのミスをして、目の前の彼にはそれを責める権利がある。

「一つの組織を束ねる長として、貴方の判断は間違っていないと思っ
ています。……………よく彼女達を無事に連れ帰ってくれました」

なのに、彼は今何と言ったのだろうか？

「……………分かっています。私も彼女等をこのまま野放しにしておくつもりはありません。既に手を打ってあります。……………こうなってしまう
つては既に後手ですが、関西に散った部下達を至急、可能な限り呼び戻しています」

「それは、でも間に合うんですか？先程関東の各地に散らばっていると……………、それに敵も黙っているとは思えません」

「間に合うかは相手の出方次第ですが、既に東の方には使者を飛ばしています。これも身から出た錆、もう世間体を繕っている場合ではありませんから」

「ならっ僕達にも何か」

「

「申し訳ありませんが、君達には本山を降りていただきます」

思考の増埒に陥っているといつの間にかネギが対応に出ていた。

内容は自分たちにも木乃香の救出を手伝わせてくれというもの。が、詠瞬はこれを拒否、宿まで使いをつけるのでそのまま山を下ってほしいという。

「相手方は目的である木乃香を手に入れました。なら、これ以上あなた方を狙う必要はありません」

「ですがっ！このかさんは僕の生徒でっ」

「既に子供が立ち入る状況ではないんです！！」

「っ！！」

「大声を出してすみません。ですが察してください……君はまだ幼く未熟だ。魔法学校を卒業したばかりの修業の身、そして何より友人の息子を矢面に立てたくないという私のわがままです。……どうか聞き分けてください」

無茶だとは一言も口を突いて出なかった。

詠春が関東呪術協会の長に就任する前、“紅き翼”のメンバーでサムライマスターと呼ばれた歴戦の英雄だったのはあまりにも有名な話。そうでなくとも彼の声の一つ一つには重みがあり、若干10歳の身の上で彼等にとっては抗いがたいものがあった。

だが、ネギの表情はどう見ても納得はしていない。

詠春の言葉に何とか食いさがろうと必死に言葉を探している。がしかし

「……どうしても納得がいかないというならまず貴方は己の責務を果たしなさい。貴方は教師だ。一魔法使いである前に彼女等の担任……君には何よりもその安全を守る義務がある。なら君はまず、彼女等をこんな危険な目に巻き込む事ではなく安全な場所を確保する事が第一でしょう」

「……わかり、ました……」

「さ、時期ここも戦いの準備で慌ただしくなります。ネギ君、すまないが親書の話は日を改めて機会をもつけさせてもらおうよ」

それを切り出されてはもう反論の余地も無かったのだろう。苦い表情を隠す事も出来ず促されるままに部屋を後にする。

部屋の外にいた巫女装束の従者に明日菜が待っている施術室へ向かう途中、頂垂れそうになるも気を無理やり切り替えて廊下を進む。

これから自分達は残った明日菜に説明をしなくてはいけない。もちろん今も眠っている彼女等にもだ。その自分たちがこんな有り様では話にならない。

到着するまでに何とか心を落ち着け、今あった出来事を自分の中で必死に消火する。

「……あの、刹那さんとアキラの様子は」

「見た限り命に別状はありません。応急処置が的確だったおかげでしょう……大丈夫です。ウチの術者は優秀ですよ」

途中、施術室が近いという事で振った話題に従者である前に行く女性性は努めて優しい笑顔で返してくれた。

今は逆にそれが胸に痛いがそうもいつてられない。

気持ちを切り替えるように歩調を言ったん整える。見るとネギも少し立ち止まって自分の頬を叩いている。

同じだ。

自分もまた、あの角を曲がれば仮面をかぶるのだ。

傭兵というの心に檻をかける為の仮面を

取立36回目　く鬨ぎあう信念と合理性。沈黙の敗走く（後書き）

ども！前回予約掲載なる機能を覚えたトントンは今までの統計から5、6の投稿時間が新着順での一日の掲載時間とあるキーワードでのが長いという自論を立証すべく

長いなこの口上（笑）

とまあ、今回はいつもより時間を大分中途半端に遅らせてみました。いや、夏休みつてこついう事出来ますからある意味便利ですよ？うむ、この実験で新たな一步を　　つて内容が伴わなくてはダメなわけですが（苦笑）

さて、今回のお話は急転させた事態を回していきます。

徐々にキャラの立ち位置が変わつて言ってるんですが分かりますかね？

といたしますか、一部のファンの方には申し訳ない！所々でキャラの活躍が少なくなるかもしれませんが（汗）

やはり原作の赤松先生の生徒の使い方はうまいですよ

自分もああいう風になまく登場させていきたいですが中々勢いに乗つたり思いつきが先行したりと軌道に乗らず……

エンディングは……見えて、きた？

さ、さて、なにはともあれというより今日はこの辺にしておきましょう。

それよりも次回の更新です。

今後は私教習所に通い始めまして、でも中型一種の免許なのでそこ

まで時間はかかりませんし週一は守れます。というか今日予約確認したら中型は取る人が少ないのか時期なのか定員に余裕があつて予約の取り放題でした！

てな訳で更新に支障をきたすようなことは無いでしょう。今後も更新毎にあとがきに次回の更新を乗せていこうと思います。

ペースとしては2週間に3話分更新が理想！を掲げて8、9月中は頑張ろうと思います。あ、次回の更新はとりあえず来週の金曜、つまり20日のこの時間前後となります！

では本日はこの辺で、今回も最後までお付き合いいただきありがとうございます。ありがとうございました。今後とも本作をよろしく願います。

それではまた次回、再見ッ！！

取立37回目　～それぞれの役目。揺れる信頼と不動の信念～

「……刹那さんが目を覚ましたわよ」

「そうか、わかった」

部屋にきた明日菜が別室で安静にさせていた刹那が目を覚ましたと言いに来た。

彼女の物言いにはどこか刺々しいものがある。それというのも、関西呪術協会の総本山から使いの者を伴って山を下りる途中も彼女は彼等の決定に抗議していたからだ。

だが、それも当然か。彼女の性格からすれば一人飛び出しても親友を助けに行くだろう。それを行くなと止められて誰が納得できるだろうか？

最終的に長本人、木乃香の実父自ら説得に加えて音楽達も動かない、更に刹那達を休ませるという言葉を出されて何とか引き下がらせた。その彼女が今も納得していないのは重々承知している。

しかし彼女もこちらの状況を全く理解していないわけじゃない筈だ。ネギは重傷と行かなくとも負傷し、魔力の大部分を消費している。

刹那も目を覚ましたという話だが万全を望める状態ではないのは明らか。

アキラにいたっては彼女が一番負傷具合が酷い、命まで捕る気は無

かったのだろぅが四肢の内両足をを砕かれ、腹部に大きな切り傷が生々しく刻まれていた。

そんな状態であつた為に、発見当時意識があつただけでも驚いたが、彼女はそんな状態で結界内にいた音来に窮地を知らせるようとワザとガラス片で傷を作つて痛みに耐えるという普通なら考えられない行為を行つた。

当然、治療に割く気力も余力も無い状態だつた彼女は出血量も多かつたが、それは起き上がる事もそれ以上戦線に立つ事も出来ないと判断した彼女なりのその場で可能だつた最良の判断だ。

いや、筈だつた。

予定外だつたのは救援に向かつた音来自身が既に戦闘分の魔力を枯渇しかけていた事。

結果として彼女等を回収する事は出来たが一人、彼女等の友人を奪われる結果となつてしまつた。

敗北。

負傷した自分達に残つた力はあまりに頼りない。

戦える状況にないのは明らかだ。

一人先に部屋に出て行つた彼女の背を見送り、つい出てしまいそうになつた溜息を飲込む。

恐らく今も本山で治療中のアキラも、この場にいる全員はそれぞれ後悔と苦悩に苛まれている。

自分だけじゃない。

ただどその自分が一番の戦力外である事を自覚している、出来ることなど皆無。

少しでも回復し、残った彼女達の安全を全力で確保する。それが今自分が一番になすべき事だ。

顔を振り、視線の先に明日菜の姿が消えていない事を確認した彼はようやく廊下を歩きだした。

目を覚まして一番に感じた感情は“安堵”。

自分が寝ていたのはここ最近ようやく見慣れた旅館の自室、私達3班の部屋だ。

先程まで見ていた夢の内容は良く覚えていて。それ程目覚めの悪い夢だったからだ。

どうせ見るならもっと縁起のいいものを見たかったというもの、まあ夢に文句を言っても始まらない。そういう夢見たという事は自分

の中に不安があつたからだろう。

そう自己完結を終えて中途半端に起きた頭を完全に覚醒させる為に
上体を起き上がろうとして

「　　っ!?　　……え?」

腹部から全身に走った鈍い痛みから、身体が不自然に重い事に今更
ながら気付いた。

「　　!!!!!!!!!!」

横で誰かが慌てて部屋を出ていく気配を感じたが今はそれに構う余
裕はない。

寝相が悪かったなどと頭の悪いボケを晒す気は無い、なぜなら自分
はこの身に起きている勘違いに気付いたからだ。

あれからどれくらいの時が経つたのか。

自分はどれだけ気を失っていた?

いや、そもそも何故あれを夢だと思っていたんだ自分はっ!

「　　そうだ　　あれは、夢なんかじゃないっ」

蘇る悪夢と共に痛みを主張する傷がそれを現実だと訴える。

分かっている。

忘れていられた方が幸せだったかもしれない。

こうして痛みに後悔を募らせる事も無かったかもしれない。

だが、思い出したのなら自分が取るべき事は一つ、彼女を助けに行く。

後悔も懺悔も全てはその後、けじめは然る形で受ける。だから、今はこんな所で臥せている場合じゃない！

「何処へ行く気だ」

「！？ 音来、さん……」

そう布団を飛び出さんとしたところで部屋に入ってきた男。私達のクラスの担当教師にして協力者、増援として麻帆良から京の地へ飛んできてくれた少年……いや、今は何故か見慣れた“成人体の姿を取っている。その彼が出入り口である戸を塞ぐように立っていた。

「だんまりはよせ、何をしようとしたのかは大方の見当はつく……俺が聞きたいのはそんな体でどうする気だっただことだ」

「……分かっているなら放っておいてください」

「質問の答えを聞いてからだ。ああ、もちろんお前が今しようとしている事が俺の予想通りならに協力する気は無い、それに勝機が見えないからな。俺達は負ける勝負はしない主義だ」

「っ　、だったら尚更です。別に無理に協力を頼む気はありません、ですからそこをどいてくださいっ」

彼を避けて出ようと横をすり抜けようとした時、戸口を出るといっ所で力強く手を取られる。考えるまでも無い、彼の手だ。

「っ!?　放してください!」

「悪いがそれも聞けない……少なくとも怪我したお前をそのまま行かせるのは依頼内容に反する」

「だから何なんですか!　依頼?　なら私も私に与えられた任務の為に動きますっ!!　私は長から与えた、お嬢様を守る為に」

「その詠春殿からの命令だ」

「え?」

「お前が倒れた後、アキラと共に総本山に運んで治療を受けさせてもらった。その時に、長との会談でお前を含め俺らに今回の件から手を引いてくれと頼まれた」

彼の言葉に、長からの言伝というその言葉に絶句する。
手を引く?　それではまるで

「な、何なんですかそれは！！ このちゃ、お嬢様を見捨ててっ私達はただここで待てと！？ そんな馬鹿な話っ！！ あなたは黙ってそれを受け入れたというんですか！！！」

「落ち着けっ結論を急ぎ過ぎだ！ ……俺だつて、いや、長だつて木乃香を助けたくない筈はないだろ。だけど現実、こっちのまともな戦力は軽症のお前と比較的無傷な明日菜だけだ。ネギは魔力を消費しすぎて今は寝込んでいるし、アキラは本山で療養中だ。俺にいたっては……今日戦闘に割ける魔力がもうない。分かるだろう？ 今俺達が行っても足手まとい以外の何物でもないんだ」

落ち着けと、詰め寄った私の肩を押さえていた手が放される。横を向いた彼の表情は影になって見えない。だけど彼の今の言葉を聞いても納得はできない。

お嬢様は、このちゃんには私にとって大事な大事な人だ。その人を目の前で連れ去られるという愚を犯した。

その汚名を返上する為に、結果として命令に反する事になろうとも、私はあの時の誓いを果たす為に

「出来る事はもうやった……お前も俺も最善を尽くした。長も散っている関係者を呼び戻している。……お前が今出来るのは傷を治す事だ。それまでここを出る事はどんな理由があろうと俺が引き止める……それが俺の仕事だ」

言いつべき事は言ったと部屋を出ていく彼を無言で見送る。

幸い部屋を監視する類いの仕掛けも無く、部屋の外に待機しているような気配も無い。

少々拍子抜けもしたが、それは私にとって望む所ではないし、ない

ならないで好都合。

だが、冷静になれば彼の言葉に理があるのも事実、それを感情が承服しかねるのが問題なのだ。

私はあれらの言葉で納得するほど利口ではない。だが無策で飛び出すほど無謀でもない。

助けに行くからには万全を、確実に救出する。

少し頭が冷えた

そうだ、怪我を残した身では選択肢は確実に常時より少ない、されど傷を癒す間を堪える性は私にはないようだ。

なら、お嬢様を助けるまでの算段を導き出すまでのこの一時、頭は全力で活路を、身体は暫しの休息を。

それが私が私自身に許せる妥協点だ。

この身を今度こそ彼女の剣とすべく、私は神経を研ぎ澄まし、会敵するその時までを思考する。

「うんそう、刹那さんもさっき目が覚めて、今音楽、先生が様子を見に行ってるわ。まあ、結構大丈夫そうだったわよ」

「そう、ですか……ならっ」

こんな所で寝ている場合ではないと、まだ回復しきっていないだろうに布団から出ようとすると少年をやんわり……いや、少々乱暴に寝かしつける。

隙を見て旅館を出ようとするのは音来じゃなくても止めるだろう。

確かに親友である木乃香を助けたいのは明日菜と同じ気持ちだ。だが、目の前で無理をしようとする彼にそれを強要すべきじゃないのは理解できる。

「あんたは、またそうやって……今刹那さん達が木乃香を助ける方法を考えてるから、あんたはそれまで休んでなさい。それがあんたの仕事よ」

「あ、ありがとう……」

ようやく抵抗を諦めてくれたのか大人しく布団に寝てくれたネギ。思う所は同じだろうけど、あの時私は悔しい言う告白を聞いた。その彼からしたら今回の事も自責の念は一押しだろう。

「子供が遠慮なんかするんじゃないのっ……ほらっ今行って体力ないから戦えませんでしたじゃ話にならないじゃない」

「あっっ」

クシャクシャと少し乱雑に頭を撫でてその場を立つ。

とりあえずは落ち着いたようだし今は大丈夫だろう。仮にもし抜け出そうとしても音来先生が止める……なんか正体を知ってからどうも先生と呼ぶのに抵抗があるんだけどあの人……

ってそうじゃないそうじゃないそうじゃない。

あの人が見張っている以上、私としては面倒だけど、代わりにネギが勝手に飛び出していく様な事にはならないだろうから一応は良しとしておこう。

「じゃ、私はもう一度刹那さんの方を見てくるから。いい？大人しくしてるのよ！ 戻ってきた時にまた抜け出そうとしてたらただじゃおかないんだから」

「あ、はいっ」

……いや、ちよつときつめに睨みを利かせてみたけど、そうやって怯えられてしまうと心が痛むのはなぜだろう……まあいいけど。

「よしっ、じゃあ後はお姉さんに任せておきなさい」

すると少しは安心したのか今度は笑顔で小さく「はい」と返してくれるネギ、相変らず元気はないが幾分か顔色も増しになったようで少し安心する。

つと、そうだった。もう一人、今言った人も目を離しすぎれば間違はなく一人で先走るような人が残っていた。

友人というには彼女とは付き合いは短いかもしれないがそれくらいは解る。

最後に戸を閉めながら横になっているネギを確認して今度こそ部屋を後にする。

途中、廊下を彼女が寝ている部屋に向かう中、先程の言葉が頭の中でリフレインする。

「お姉さん、か……ほんと、すっかりしないとね」

言葉にして反復する。

何気なく漏れた言葉だけど比較的しっくりと自分に嵌まった言葉だった。

「すまない、……本来なら無関係の楓や古を巻き込むべきじゃないのに」

「なんのなんの、京都見学も超殿のお蔭で今日は十二分に堪能できたでござるからな。それに、拙者が勝手について行くと決めたのだから、刹那が気後れする事はないでござるよ」

「そうアルね、困った時はお互いさまヨ」

「だったら、私も一緒に行かせてもらっわよ」

「明日菜さん!？」

何やら感動的な場面……なのだろうか？

経緯は分からないが協力してくれるような雰囲気だったので考える

よりも先にその場に割り込む。

これは決してKYではない、え〜と　・その、空気を読みつつその斜め上を……じゃない、何というか……あえて……そう！　言うなればA K K Yよ！あえてうきままない

「水臭いじゃない、一緒に木乃香を助けようってこの間も言ったばかりでしょ？」

とまあ、噛み砕くとそついう感じ。

いざ様子を見に部屋に行けばそこはもぬけの殻、まさかと思つて一階に駆け下りてみれば従業員用の出入り口に集まっていた3人。仮にも協力すると言つて三日も経たない内に仲間外れにされるのは抗議しても的外れではない筈。

ま、実際仲間外れにされたのはどうでも　・よくないけど……
ともかくつ、木乃香を助けに行くのなら何と言われようとして行くつてこと。

「ですがネギ先生も伏せつていて、今の明日菜さんは　　」

私も付いて行くと一歩前に出ると刹那さんが止めるように手を伸ばしてきたが、やんわりとそれを下ろす。

今の状態では私は一般人と変わらないと言いたいのだろう、彼女は。

まあそれ自体は相変わらず確証なんて持てないが何とかかなりそんな気がする。

それに、どうにも認めたくはないが……私は、女の子にしては体力のある方だ。

「ああ、問題ないわよ。私にはこれがあるし、ね」

確かにネギの魔力供給の無い今の私は戦力としては弱いかもしれない。でも契約カードの武器、あの剣があれば私も戦える。

何よりあいつに見栄を張った手前、ここで黙って行かせるのでは格好がつかない、と思う。

「あ、ありがとうございます」

感極まった様に深く頭を下げる刹那。

私としては友人のピンチを見捨てておけないだけで割と当然の事で、そこまでされるとかえってこちらが恐縮してしまうのだが。

頭を下げたままの彼女に歩み寄ろうとしたその時、先程の言葉にようやく気付いた事があった。

彼女の喋り方も態度も、二人ともまだ付き合いというには短いかもしれないけどどこか似ている。そう、何故か放っておけないアイツのように。

「全く、あいつみたいいな事言って……」

「はい？」

「いいのいいの気にしないで、今は独り言だから」

まるで同じように、恐縮して肩身が狭い様に萎縮する様は瓜二つではないだろうか？

と思いつつも内心それに問答無用に手を差し伸べる自分の性分にも呆れる。私はこんな面倒事に自分から首を突っ込む様な人間だった

だろうか？

……いや、案外自覚がないだけでそうだったのかもしれない。

考えてみれば周囲の理不尽に反発する事も多かった気もするし、クラスの騒ぎには比較的多く遭遇していた。

まあ、いいんちよと暫し喧嘩、みたいなことになるのはノカンだつたとして……

あれはあれで一種のコミュニケーションみたいなものだし？ なかつたらなかつたで調子狂うし、今更お手手つないで仲良小良しって年でもないし ってまた話がそれた……

何が言いたいかつていうと、私はあのクラスが騒がしく思う時もあるけれどその馬鹿騒ぎが結構好きで、そんな中の日常が無くなるなんて考えて事もないし考えたくもないってことだ。

なのにその中のピースである親友が欠けているというのが我慢でない。いや、許してはいけない事なんだと思う。

そういう日常はこれから続いて欲しい。
無くなってほしくないんだ。

だから、この日の出来事をいつか苦労話の笑い話に出来るように、最高の修学旅行として思い出にする為に、今この場に欠けている掛替えない友人を私達は助けに行く。私が非日常に飛び出す理由なんてそれで十分だ。

「さて、となればまずこれからどうするかと……刹那？」

「あ、ああ、ともかく今は情報が欲しい。一度総本山に入行ってかき集める必要がある」

「でも音楽、先生の話だと帰るように言われたんでしよう？ 入れてくれるかな？」

「ええ、それが一番の問題です。これは言わば長の命令に背いた行為、明日菜さんや楓達が西の者ではないとはいえ、いえだからこそ接触は難しいでしょう……」

「なるほど……なら潜入でござるか - 拙者の領分でござるな」

ニヤリと不敵に笑みを浮かべる楓、糸目ながら割増鋭くなったように見える眼光？ に思わず何者かと聞き返すがニンニンと独特のござる口調で隠す気があるのか怪しい返し方をされてしまう。こうなると話す気がないのは暗黙の了解なので今は断念しておく。

それよりも問題は何より時間だ。

確か、音楽が刹那達を助けに行つてから今までに既に3時間以上が経過している。今は日も暮れ始めて夕刻、一度本山に戻るといふ話だしここから全力で行つても一、二時間はかかると見れば一時も無駄にしたいくない。

「ほほー結構あるネ。アスナは大丈夫アルか？」

「フン、これでも新聞配達のバイトで毎朝走りこんでるんだからっ」

「ニンニン、いざとなれば拙者が運ぶ故、心配はないでござるよ」

ていくあたり結構うつかりさんの集まりのようだ……………大丈夫だろうか？

「ま、行つちまったもんはどうしようもないし、見逃した俺が言う事じゃないけど……………」

というのも俺本来の任務は彼女等を旅館から無許可に出さない事、より限定するなら敵地に向かわせない事だ。

なのにこうして見逃しているのは彼女への罪悪感からか、だとしたらとんだお笑い草だ。御高説たれた説教も、こうして自分の心の平静を保つために妥協しているようでは説得力も何も皆無でしかない。

まあ、自身に戦^{まじやく}える手段が殆んど無いとしても無責任に放置するまで墮ちる気はないし、突き放した以上その結果に責任を持つのも俺の仕事だろう……………たぶん。

「……………つと、これか？え〜と……………これでこうで……………」

懐から取り出した長方形の物体と格闘し、面の一方を耳に当てて待つ事少し……………

「……………あ、俺だ俺。は？ 詐欺？ 何の話をしてるんだ？」

ようやく繋がった相手の私だというあまりに淡白な声、それに対して同じように返した筈が詐欺なら切るといふ唐突な言葉に慌てて名前を言う。

正直コイツには頼りたくなかったが状況が状況だ、俺も形振りの“振り”くらい取っ払うべきだろう。

一呼吸おいて心を落ち着ける。

コイツとこの手の話をするのは色々とすり減らす。なんというか得意ではない相手なのは間違いない。

「いや、それとは別件……というか頼み事だ。そ、仕事の依頼」

苦手ではある。が、このように荒事に関して察しがいいのは助かっているのも確か、そして話がトントン拍子に進むのも必要以上に詮索が無いのも今は有難いのも事実。

それと言うのもこと仕事という括りの中で、こちらの世界で知り合った数少ない同業者であり、信頼を置けると判断するに十分な共同経験がある事が大きい。

「ああ、足を確保して途中で拾って欲しいんだ。そう、場所と状況はコッチついてから詳しく話すから。まあその後も協力願えると助かるんだが　はあ？　そりやおかしいだろうっ！？　　っあ　あもっつ、わあっつた！　それでいいからさっさと来てくれっ、大至急な！！！」

……だとしても、この交渉事に融通が利かない所はどうにかならな
いだろうか？

これがなければ俺も苦手意識も幾分減るというものなんだが……と
いっても、いざそう聞かせてみようにも「知り合いとはいえビジネス
スはビジネスだ」とか言っつて梃子でも動かないのは目に見えている。

乱暴に切った携帯の向こう、先程まで話していた相手に悪態をつく。
無駄な行為とは分かっているが、こっちの状況をどう知ったのか足
元を見て明らかに通常より割増しな報酬を要求してくるのだ。愚痴
の一つでも言いたくもなる。

まあ愚痴っても始まらないのはこれでも分かっているつもりだ。こ
ういうのは条件反射というか、もう半ば癖になっていて自分自身諦
めている。最近は従者である彼女も口を出さなくなってきたので
で相当な重傷かもしれない。

ルーチンワークになっている溜息を吐きながら人目に付かないよう
に屋根から降りる。

待ち合わせまでまだ少々時間もある。といっても相手は時間に煩い
性質の人間、準備も早々に済ませるべきだろう。

さて、頭の中で自身に用意できる手段を模索しつつ、さっさと向か
う事にしよう。

これ以上の面倒はさすがにごめんだ。

取立37回目　～それぞれの役目。揺れる信頼と不動の信念～（後書き）

毎度！　本日で37話目！44部……はちよつと不吉か、でも私4とはなぜか縁があるんですよ　大会の時なんかゼッケン4でしたし、受験番号は00044、いいのか悪いのか……、まあ結果は上々だったんですけどね（苦笑）
つと、それよりもこの度皆様のお陰でPVが48万！ユニークが4万を超えました！

正確に言うなら前話の更新後、細々とやっていただけにこうなるのもう感無量です。皆さま本当にありがとうございます。
hit記念に何かやるうかと企画しようかと思いましたが4はどうもキリが悪いので（前半の話はなんだったんだつちゅうねん！）、ユニークが5万を超えたらまたおまけを掲載させていたかどうかと思います。それまでにはちょうど修学旅行編も終わっているでしょうし、今からいくつか温めることにします。

さてさてアクセス記念の話も終わったので本編……っといつても今回は心理描写を多分に使って動きは少なめ、最近戦闘パートが多かったのとこれから決戦になるので少しソフト（？）にしてみました。まあ、ようやくと修学旅行編が終盤に向かって動き出したのでどうかお楽しみに！

では長々と来ましたが最後に次回の更新の報告を！

やはり来週、27日までにはもう1話あげたいので予定としては24日のAM、05:00を予定しています。個人的には同日の00:00がキリがいいかと思つたのですが今回は更新時間を合わせていきたいのでこれでいきます。

また変更するようなら別に連絡しますからどうぞよろしくお願います。

それではこのへんで失礼を、最後までありがとうございました。また次回もよろしく願います。では、再見ッ！！

取立38回目　　〽零れ落ちた命と救う父の手。〽

「妙でござるな……人の気配がまるでござらん」

「分かるか？」

夜道を最速に、人目を避けて辿り着いた、いや戻ってきたというベ
きか。

藪の陰に潜む私達だったが予想に反して内部に人の気配がない。

つまり、木乃香お嬢様救出の為の部隊は既に出た後という事になる
だが、これが単に出入りというだけなら分からなくもないが、長で
ある詠春は責任感に強く、実直で堅実な人だ。更にアキラが療養の
為に残っている筈で、いくら人員不足だとはいえ此処まで手薄にし
ておくとは考えられない。

「どうする、まだ周囲を探れば気の跡を追えそうだが、追うか？」

ついこの間までの自分なら迷わず詠春の後を追っただろう。だが目
の前に友人の安否が気遣われるとなれば話は別だ。

「いや、一度中を確認して行こう。幸い長達が出てからそう時間は
経っていないようだから手早く済ませれば問題はない」

発見される確率を減らす為に明日菜さんを古に任せ、内部を知る私と隠密に優れている楓の二人で潜入する事にした。出る時に自分も行くと言ってきたが、そこは無理にでも納得してもらおう。彼女も分かっていると思うが自分達は急ぎの身で、本来この潜入も長達が出た後では必要のない事だ。

今回の行動事態も完全に自分達の我儘、第一目標であるお嬢様救出を優先するなら安全地帯にいる彼女の確認は後にするべき、なら何故今確認するのかと聞かれれば目の前の雰囲気第六感的なあやふやな、経験が不穏な気配を告げたからだ。

もちろん勘違いであるならそれに越した事はないし、そうであって欲しい。
内心の不安は？も出さず先導して周囲を警戒する楓に次の角を右に曲がるように合図を送る。

「ここか？」

目的の部屋の前に着いた私と楓は素早く戸と壁に背を当て内部を窺う。

やはり気配がない。

ここに来て不安が確信に傾き始めたが確認しない事には100%ではない。

横でこちらの合図を待っていてくれる楓に頷いて返して3拍子きっかりに突入する。

「……いない？」

綺麗に敷かれた布団が一組。

怪我人が伏せていたのだから部屋に生気が薄いのは分かるがそれがまるで無い。

いや

「ちょうど一時間前後でござるか、微かではあるが布団にまだ温もりがある」

楓に倣って布団に手を当てると確かにほんの僅か、下手をすれば見逃してしまいそうな程の気配がそこに残っていた。

彼女は重症で今日中には目覚める事はないだろうという事で移動はさせず、本山で預けることになったはずだ。

その彼女がいない？

どうもここに来てからおかしなこと続きだ。

……長の性格から戦場に病人を連れていく事はまずない。

なら入れ違いにここが敵の襲撃を受けたのか？

それならばこの館内の静けさに説明がつかない、そもそも戦闘痕がまるで無いここが襲撃されたとみるのは無理がある。

だとしたら予想外に回復の早かった彼女が周囲に人がいない為に抜け出したのか？

……あり得る話だが前提に彼女が目覚める必要がある、どちらもこ

の静けさに説明がつかない。

「本当にここで間違いないでござるな？」

「ああ、出る前に一度顔を確認しているし、部屋の物を動かした形跡がまるで無い」

「だとしたら、やはり妙でござるな……ここにいた者の、アキラ殿の気配は廊下でぱたりと途切れておる。出た形跡も無く隠形にまるで覚えがない彼女が隠れているとしても拙者達が見分けられないというのは腑に落ちないでござるな」

「急ぎましょう。どうにも嫌な予感がします」

やはり何かあったとみるべきだろう。ならこれ以上発見も無いここにいるのは無駄でしかない。推察が一番可能性が高いアキラの消息は長の元か、最悪敵に連れ去られたか……一人逃げ隠れたという線も捨てきれない、が今はまず明日菜さん達合流すべきだ。

今度は隠密も気にせず全力で外に、抱えた不安の塊を振り払うように私は館を後にした。

魔術処理を施した見た目なんの変哲もない腕時計を確認して周囲に軽く視線を巡らせる。

旅館の裏手にある業者用の搬入口、宿の人達には申し訳ないが既に入払いの処理は施してある。敵が目標を捕らえた以上こちらの結界が相手に居場所を知らせようともう問題は無い。それに、これは敵ではなく彼女への目印だ。

「おっ？来たか、流石時間通り　　は？」

「お待たせ。少々手に入れるのに時間はかかったけど、コレで問題はないかな？」

目の前に乱暴に横付けされた鋼鉄の塊である物体に啞然とする。

確かに先程時計を確認した時は約束の時間15秒前だったので確認するまでも無く秒単位でジャストの到着　　いや、時間なんぞ問題ではない。

「問題も何も……いや足を用意して欲しいって言ったのはこっちだけどさ」

「なにかな、やっぱり気になるのかい？」

カンカンと鉄板を叩いて小耳に響く音をさせながらこちらを窺う彼女の論点のズレ具合に突っ込みを入れたくなる。いや、この場合はわざと逸らしているのか。つまり、この目の前の物体の入手手段はまともな方法ではない。

彼女に頼む以上ある程度の荒事は覚悟していたが、初めからこうも全力で見せつけられると別に意味で幸先が不安になってくる。

依頼後に彼女が要求する請求額が今から恐ろしくあつた……。

「いや、やめとく……こつというのは聞かない方が華だろ？」

そうでなくてもこの手の仕事に、不等価の質問はタブーだ。例え味方でも情報は最低限の公開で済みます。それが理想ならそこに準じるのも仕事人だ。

「そうかい？ 私としては別にこれくらい聞いてもらっても問題は無いんだけど」

「あははは……まあ急ぎだしな、いつも通り時間優先で頼む」

……決して彼女の切り返しに尻込みしているわけではない。

「あ、あのっ！！」

「ん？ 君は……」

そうして自分の荷物を載せていると、背後からテノールのまだ声変わり前の幼い声色が精一杯の声を張り上げていた。

「おう、ネギか。どうしたこんな所で？ まだ寝てないとダメだろ」

回復しきっていないだろうと言うこちらの言葉に若干怯んだようだが、彼は拳を握りなおして彼は勇気を振り絞るようにもう一度叫んだ。

「僕もっ、僕も連れて行ってください！！」

「いやだ」

もちろん取り合う気など初めからなかったので即答である。

「そんなっ」

「そんなも何も……お前、これから俺達は何処に行くのか分かっているのか？」

即答で断られたのがショックだったのか、一瞬のフリーズを見せて再起動した彼が慌てて食い下がる。

もちろんと言う彼だったが、今だ顔をしかめている様子は伏せってから魔力が回復しきっていないのは明らか、それもこちらにはれると承知で言ってきているのだろうが、生憎と今回は状況が違う。全快状態なら俺も気を割く余裕があるが、今度の戦いは自分の事で手一杯、とてもじゃないが同じ状態、もしくは戦闘力でそれ以下の人間を連れていくにはメリットがなさすぎる。

結果として、言葉以上に熱意を語る視線を無視し、おどけた様に連れていく気はないと態度で示す。

「負けた戦りにリベンジしかけるなんて、養父ジジイが聞いたら張つ倒されそうだけどな」

「僕は……ただ彼女を助けるために、僕は木乃香さんのっ」

「なら尚更やめておけ」

驚いて言葉を零した彼に、俺は間を与えずに押し立てる。

「お前もボロボロだ、教師として責任を果たせって言っという卑怯かもしれないけど……単純に責任感から行くなって言うならやめておいた方がいい」

「そんなっ！ ボロボロだっていうなら音来さんだっつ」

「こんな態でもやり方はいくらでもある。同い年って言ってもお前とは経験値が違うからな」

あの日の様に“経験”という言葉を盾に突き放す。

冷たいようだがこれも彼の為、おそらくネギは強くなる。それこそ今の俺なんてあつという間に追い超すだろう。

こいつはおれと違って器用な部類の人間だ。詠春ではないがそんな才ある者を態々戦場に出すのは気が引ける、言い直すともしもの時に俺が責任をとる自信がないというのが大きい。情けない話だが、詠春の様に凄みも貫禄も無い俺では多少汚い物言いになってもこれがベストな筈だ。

「良いんじゃないか？ 別に連れて行っても」

「おい、お前も何言ってるんだ　っ」

なのに、喋りながら積んでいた荷物の最後を載せた所で中から思わぬ声がかかってくる。

この件に関しては俺と同じか、もしくはまるで関心がないと思っただけにその言葉に素で驚き、荒げかけた声をなんとか抑える。

「いや、単純に戦力は多い方がいいと思ってる」

「だからって彼を連れていくこと無いだろう。それに向こうには独断で先行した刹那達がいるんだ。これ以上面倒は　」

「君が戦えると言つてもそれは所詮選択肢を絞られた状態、切れる手札は多いに越したことはない。それに、少なくとも本気で彼が助けに行く資格は無いとは思ってないんだらう？」

「っ わつたよ！ この合理主義者めっ」

「フフツ、知らなかったのかい？ こういった性格の方が戦場では長生きができるものさ」

そうかいと捨て台詞の様に吐いた言葉と共に恨みがましく睨んでやったがこいつはそんなものはものともしない。

結論、相棒のアインもそうだがこの手の損得勘定がしっかりしている上に口が達者な人間はやっぱり苦手だ。

「ネギツ！！」

積んでいた事で死角に入っていた少年へ顔を出し、八つ当たり気味に思いつきり叫ぶ。

「同伴者からご指名だ！ 乗るなら1分で支度を済ませろ、それ以上は問答無用でおいで行くっ！！ 返事はっ」

「あ、ハイッ！！」

パアツと満開の笑顔で大きく返事をした後駆け足で旅館内に戻っていく彼を見送る。

当初の予定を悉く打ち破られた今回の修学旅行だったが、これはある意味その中でも最たるものじゃないだろうか？

ゴソツとわざと音を鳴らすように寄りかかった背後からくすくすと

聞こえる忍び笑いに振り向いてさっきより3割増しで睨んでみる。
が、まるで効果がない涼しい表情に出立前に気が重くなる俺だった。

「何？ それじゃあアキラさんは敵に攫われたってこと！？」

合流後、私が先導する形で古と明日菜さんを挟むように楓が殿を務めて林を進み、その途中で館で見た事を確認している最中だった。

「いえ、まだ確証はありませんからその可能性もあるという話ですが、事態がまるで掴めていない以上ここはやはり長達に追いつくしかありません」

そうだ、懸念事項が増えたとはいえ今できる事が限られているなら当初の目的通り目前の事態を一つ一つ処理して行く。どちらも見捨てる気はないが思考に嵌まって両方とも取り溢しては目も当てられない。

「むっ、この先で何やら一戦始めている様でござるな」

「何っ？」

言っている傍から思考の渦に囚われていた自身を叱咤りつけ、慌てて感覚を全開にして神経を周囲から楓の言う前方に集中させる。

すると確かに大きな気の衝突が確かに感じられる。これだけの物を何故気付かなかったと悔むが今はその時ではない。その中で一際大きく余波を響かせているのは間違いない。長物だったのだから。

「ならペースを上げていくアルツ」

「いえ、一旦速度を落としましょう。状況もわからず乱入するのは危険です」

が、慌てて速度を上げようとした明日菜と古を止める。

おそらく敵も自分達がここに来ているとは思っていないはず、つまり思わぬ増援となった自分達はこの場において間違いないイレギュラー、それを利用しない手はない。

だが、それも考えないしに突っ込んで台無しだ。事は慎重に且つ大胆に行動を起こす必要がある。これをの好機とできるかどうか、まさに乾坤一擲の大事な局面だ。

「……二手に分かれましょう。楓と古は右手から、明日菜さんと私は左手から挟撃します」

「あいあい、任せれよ」

「OK」

「ラジャーアルツ」

だからこそ選択したのは両者の間を寸断すべく切り込む挟撃。

こちらの勝利条件は木乃香を助け出す事で敵を倒す事ではない。敵をこの場で倒せれば今までの借りを返せる。だが、見たところ相手は詠春を抑え込めるほどの力を有する程の使い手もいるようだ。私

と明日菜さんはフィジカルの面で万全とは言いがたい、それに今は私情を挟むべきではない。何よりも彼女の安全を確かめ、それを確保する事こそ第一だ。

「では……行きます！」

何戟目だろう。

実践から離れて修練に割ける時間が減ったあの時からいくらか経つがここまで感覚に体がついていかないのは衝撃を憶える。二対一というハンデの中ここまで堪え、攻勢に出れるのもあの大戦期の経験があつてこそだ。

「サムライマスター青山 詠春。いや今は近衛の姓だったっけ？
冷静な君がこうまで取り乱すとは、英雄もやはり人の子だね」

「っ！！ 知つた風に っ 秘剣・飛燕抜刀 霞切り！！」

「二刀連撃斬鉄閃」

「くっ、まさか同門の者とこんな形で手合わせする日がこようとは……」

「はわ〜……やっぱ青山本家の太刀筋はええーですなーまさか鞘でウチの太刀が止められるとはおもいませんでしたわ」

本当に厄介きわまりない。

神鳴流という多種多様な敵、戦場に対応する為のこの流派は武器を選ばない、その為目の前の少女の様に二刀流といった使い手もいる事はある。が、それも少数、技として確立されていても始祖から続く野太刀を主流とした流れは変わらない。

今も急所を正確に、それも斬閃が決して交わらず一刀で切り返せない位置を狙った攻撃に対応するにはこちらも二刀で迎え撃つ必要があった。

だが、咄嗟に気を通して強化したとはいえ、所詮鞘は刀を受け切れるようにできていない。一合いを防いでくれたそれは澄んだ音を立てて砕け散る。

「それだけの腕を持って……仕事も選びようがあるだろうに、師は誰かな」

「そんな無粋やわー。今は一人の剣士として、楽しく斬り合わな損してまうやる？」

「戦闘狂か……悪いが」

戦闘狂、刀に狂気を宿す者がいるのは神鳴流の悲しい性だ。本来なら直々に正してやりたいところ……だが。

「付き合う気は更々無いツ！！ 神鳴流奥義 雷鳴剣！！」

轟音が駆け巡り、大気を揺るがす雷が大上段に掲げた刃に宿り、強力な一刀となって地上を蹂躞する。

殺しはしない、だが戦闘続行が不可能になるくらいには痛めつけさせてもらおう。

「はわわ〜!?!? 今のは危なかったわ」

しかし、目の前の少年少女は両者共に健在、片方が服の裾を焦がしているがダメージが無い事は明らか、その煤を払うように焦げを払い、少年は仕切り直しと おそらくそれが構えであるだろう自然体のままでいる。だが、今の一撃に二人が距離を測り直したのは事実。

それが今好機となる!

「今だっ!!!」

予め決められた位置に潜んでいた従者が物陰からそれぞれ姿を現す。彼らは決して力あるものではない、それこそ目の前の少年達に手も足も出ないだろう。それほどに敵は強い。

だが、ことある一点において彼らはそれらに勝る長所がある。

「あらら」

「むっ、これはー……」

捕縛陣、それも大掛りな高等術式のものだ。

陣というものは結界がそうであるように強力であればある程予め準備を強いられる。特に敵地に赴く場合はそれが顕著に出る為不利になる。準備期間が多ければ話は別だが基本迎撃向きの戦術だ。

それが今回は打って出た真逆の襲撃戦、当然出来合いの簡易術式では敵は苦も無く陣ごと破壊出来る程の実力があると詠春達もあたりをつけていた。だからこそ準備に時間がかかり、相手も予想してないだろう高等の捕縛陣を敵地で、しかも戦闘中に完成させるといふ賭けに出た。

当然これは設置中の術者の存在がばれない事が大前提、式神使いの女を押さえつける者も、今捕らえた二人を気付かせないよう派手に立ち回った詠春の立場は非常に重要であり、一歩間違えればこちらの意図がばれて総崩れになる恐れもあった大胆な策だ。

しかし、詠春等はこれを見事に成し遂げた。

式神だけではなく、前衛も可能な女術者に翻弄されつつもなんとか堪え、二対一という逆境を跳ね返した、彼等の勝利だ。

そして

「娘は確かに返してもらったぞ!!」

「ちっしまったっ」

唯一陣から逃れた女術者が舌打ちをしたが遅い、既に祭壇にあげられた木乃香はこの腕の中、二度と放しはしないと胸に感じた温もりをきつく抱いて堂々と立つ。

「大変ですっ 結界が!!」

「何ッ!?!」

傍らにいた術者の一人のあり得ないものを見るような叫びに自身も慌てて声の方を振り向く、すると今しがた発動したばかりの捕縛陣にも罫が入っていた。

「あの捕縛陣に罫を入れますか……やむを得ません。ここは私が

」

「長つ、殿は我々が!!」

「しかし彼らは」

そう、敵を捕らえる事に成功したのはこちらの最大戦力である詠春自身が二人を抑え込み、注意を外に向けないようひきつけていたから。

確かに罫の入った陣はあと数秒も持つか怪しい、かといってそこで自分が抜ければ結果は想像に難くない。

「だからこそ長自ら守り通してくださいませ！」

「我らは大丈夫ですつ、お早く！」

「分かった……木乃香の安全を確保できたら直ぐに向かう。君たちも無茶だけはしないでくれ」

そんな事は重々承知だという彼等の言葉と姿勢に折れ、私は首を縦に振る。

彼等の目的にキーパーソンである木乃香を奪還した今は逸早くこの場を去る必要がある。無理に戦闘を続行させるのはあまりに危険だ。

敵を捕らえる好機は既に逸している。いや、そんなものがあの一瞬に可能だったかは不確かだ。なら、今は全力でこの場を離脱し、自

身に可能な限りの早さを持って舞い戻り、この戦いを終わらせる。

「はい、私達も折を見て切り上げます」

「すまないっ」

ただ一つ、表に出す気は無くとも出ていたかもしれない娘可愛さに部下を残す事に頭を下げ、私は全力でその場を離脱した。

林を駆ける事数分、そろそろ敵の感知領域から離れたかと木々が開けた場所で木乃香を下ろし容体を確認する。

見た感じでは外傷も無く、顔色も正常。纏う気に乱れも無いことから何か術式を施された心配はないはずだ。

「ん……ここは………」

気が着いた!?

ゆっくりと目蓋を上げる娘に思わず抱きしめる。

「おとう、さま？」

「木乃香っ私ができるか？ 痛いところはないかっ、あいつらに何か」

矢継ぎ早に聞き、強く抱き締めすぎた事に木乃香の小さな抗議の声によろやく気付く。どうやら自分も思った以上に焦っていたようだ。立场上、親として接する機械が減ってきた最近、こうして娘を心配する自分の心に場違いながら感じた安心感から一つため息が出て気が緩んでしまふ。

だが、今くらいは神様も許してくれるだろう。

「なんや、ようわからんけど痛いところはないな……」

だんだん意識が戻り、口調に生が戻るとともにしっかりと焦点の定まってきた目を見て安心する。とりあえずこの場は大丈夫そうだ。

周囲を今一度確認し、懐から結界用の術具を持たせる。魔力を扱うものの認識をずらせる高価な物でこの出陣前に蔵から引っ張り出してきた逸品だ。

「いいかい木乃香、お父様はこれからまだやらなくちゃならない事がある。私が迎えに来るまでこれを持ってここでじっとしていられるかい？」

やさしく言い聞かせるように言うと木乃香思いのほかあっさりと言葉を聞いてくれた。

思えばこの子は母親に似て聡明な子だ。どこか空気のように軽い印象を受けがちだが芯はしっかりしている。

渡される札を大切に懐にしまうのを確認した後、緩んだ気を引き締め直し、戦場へ残した部下と合流すべく力を入れなおした。

「これは……長とお嬢様の気です!！」

「ほんと!? じゃあ木乃香助かったんだっ」

突然の事態に思わずその場で緊張を解きかかったが慌てて繕う。
まだここは戦場なのだ。この先、長達がいる向こうではまだ戦闘の
気配が続いている。

まずは長達に合流だ。たぶんこの場に訪れた事に長は怒るだろう。
立派な命令違反だ、叱りを受ける覚悟はできている。だが、せめて
最後の戦いには参戦させてもらおう。結果的に今回の独断行動で何
らかの処罰、お嬢様の護衛から外されるかもしれないが、今この瞬
間彼女の為に戦えるのなら本望だ。

「ええっ! 行きましょう明日菜さんっ」

「うんっ!!!」

同じように喜んでいる明日菜さん、お嬢様……いや、このちゃんの
親友がこの人でよかった。そう思える一瞬だった。

「お? いたわよっ、よかったわね刹那さ」

「

たった十数メートルがもどかしく感じる程の距離を駆け、その5メートルほど手前の茂みで立ち止まってしまふ。

横にいた私を彼女が呼んでいるが今の私にはその声がまるで耳に入らなかった。

彼女の姿を視界に収めた私はその場で涙していたからだ。

そこにはちょうど大木の一つの根元に腰を下ろさせた娘を気遣い、その無事な姿に安心したのか力強く抱きしめている詠春の姿があった。

その脅えた娘を父である詠春が抱きしめている光景は微笑ましく、私もうれしい半面どこかこの光景をそのまま眺めていたいと足を止めていた。

だが

数瞬後にその絵の中に一つの違和感があった事に気付く。

距離もあって本当に小さな、だけど見慣れたそれは見間違っはらずもなく、心の警鐘は煩いほど鐘を鳴らしている。

目の前の光景が信じられなかった。

なぜこうなった？

むしろ夢ではないかと我が目を疑う光景。

いや、悪夢で無くてこの光景がなんだというのだ。

「バイバイ、お父様」

「お、お嬢様……」

紅く染まった鈍色に怪しく光るの短い物騒な物を持った木乃香お嬢様。

半身を同じく赤く染めた彼女は倒れた肉親をまるでゴミの様に脇に放り、ようやくこちらに気付いたのかゆっくりと向き直って

あの懐かしい笑顔を向けていた。

「あ、せつちゃんや」

そう、幼き頃のまま、あの時の眩しい笑顔を、鉄の匂いが漂うこの場所で……

取立38回目　〜零れ落ちた命と救う父の手。〜（後書き）

……やってしまったorz

いつからこの構成を考えていたのかと言うと3ヶ月も前の事、けどそれは過程であってここまでダークにする予定はなかったのに、俺はどうしてしまったのだろうか？（壊笑）

「本当にこんな物を書きたかったのか！！」と問われれば「うん！！（満面の笑み）」

と答えてしまいそうだから性質が悪い。いや、主人公の乱入で狂った物語はこのくらい大きく変化しても問題ないだろうとは思っています。

……やりすぎ？

はははっ！　まあ、本編の話はこの辺にしておきましょう（汗）
こんな流れになってしまいましたが続きを楽しみにしてくれる方がいればうれしいです？

さて、次回の更新予定なのですが……その前に謝罪を一つ。

27日に更新予定の次話、もしかしたら遅れるかもしれません！！
申し訳ない、明日25日にどうしても空けられない用事を入れられました……祖母の紹介なので断れず、不甲斐なく情けない話ですが
一日お時間を頂戴したい次第です。つきましては28日のAM 05:00に予定を変更させていただく流れです。

なので既存の38話までの誤字+修正も25日の分は延期させていただきます。今日の24日と26日以降は通常通り修正分も上げていくのでなにとぞご理解の程をよろしくお願いします。

では、長々と失礼しました。次回、28日となりますがそれまでお待ちいただけると幸いです。それでは再見ッ！！

取立39回目　く決意の力、強攻のラ　ダニーヴァく

「元気しとった？　せつちゃん」

「……お、お嬢様何をして　　」

噛み合わない会話。

震えた指さす先に倒れている父親に彼女自身はまるで関心が無いという風に笑顔をその場に振りまく少女の姿は狂っているとしか言いようがない。

いや、彼女を幼少から知る身として彼女がこんな事をする程の事があつたとは思えない。仮にあつたとしてもこんな事をする人ではないと断言できる。

なら、この目の前の光景はなんなのか？

「？　ああ、嘘つきな父様にお仕置きしただけだよ。それがどうかしたん？」

「どうかしたってっ、木乃香！　その人はあんたのお父さんでしょ
！！」

「だって、父様やる？　ウチにコツチの事黙って教えてくれへんかったのは？」

思わず言葉に詰まった私に代わるように明日菜さんが声を張る。だがそれすらも何の事は無いと首を傾げてこちらを窺う彼女は明らかに異常。だが表情は正常、澄んだ瞳に狂気は無い。

まず間違いなく操られている筈なのにその雰囲気には呪術独特の異常が見られないのは何故だ。

「ウチの周りでみんなドタバタドタバタ、けんどだあれも教えてくれなんかせえへん。それもそうや、えらい父様の命令でウチは麻帆良に来るまでずーっと独りぼっちやった」

「それはっ、お嬢様の事を思つての事です!!」

「いいんよ。気使つてくれへんでも……せつちゃんもウチと一緒にいるの嫌になつたやろ？」

「な!?! それは違いますっ! 私は」

「ええて。考えてみたらずっとそうや、守られてばかりで本人は自覚が無いんやからそら嫌われてもしょうがない だから決めたんよ。ウチは強くなる。誰にも負けなくらい強おなつて今度ウチがせつちゃんを守つたる。そしたらまた一緒にくれるやろ?」

「このちゃん……」

まるで別人、魔法に関しては千草とかいう女術者に吹き込まれたとしてもこうまで変わるのか? 彼女が?

いや、彼女は敵に何らかの手段で操られているのだ。

そうじゃ無ければ説明がつかない。

実の父を刺して笑っているのも。

血濡れたまま何食わぬ顔をしているのも。

そうしたこの状況下で澄んだ笑顔をつかべているのも。

出なければこの状況に膝をついてしまいそうになる。

彼女の言葉が正常だから心が折れかかる。まるで本心の様に語られるから辛い。

彼女は正気のまま狂わされている。

それこそ幼子が道端の蟻を潰す事に興じるように、この行為に大した意味は無いという。彼女にとって父親を刺すという過剰な行為も罰の範疇に入るほどに基準が狂っているんだ。

わかっていてもそう自身に言い聞かされなければ彼女の言葉の矢に立塞がることすらできない。

「でもごめんな……まだウチは弱いままなんよ。これじゃあ一緒にいてくれへんよ……だからこれから鬼さんを起こさなあかん。起きてもらうて力を貸してもらっんや」

思わず彼女の前に飛び出せたのは僅かに冷静だった使命感がそうさせるのか、刀は抜けず、足も震えている。

けどこのまま行かせてはいけない、そんな事は解っている。でも迷

いが晴れず私はここに立っていた。

「やっぱり邪魔するんやね。あの人の言った通りや……けど、これは誰にも邪魔はさせへん」
千草

「……」

「っ!？」

その迷いすら一瞬で吹き飛ばす出来事が目の前に
彼女の言葉と共に現れた

「貴様っ、天ヶ崎 千草!! お嬢様から離れろ!!!!!!!!!!!!!!」

左手に帯刀していた刀に手が伸びる。

駆け抜けたのは最速に、抜刀した刃は確実に相手を刈取る。

だがその間に現れた人影に寸前の所で振りかざした刃は逸れた。

「っ!？」

「だめやよせっちゃん。千草には鬼さんを起こしてもらっ為に協力してもらわなあかんのやから」

「お、嬢様……くっ」

「せっちゃんはせっかちな ……千草、魔力はウチがだすから
あの二等を呼んだってな」

「御意に」

「

大気が重く感じるほどの濃密な魔力の放出、それを代償に横に控えた千草が印をふみ、言霊を乗せる。

すると途端に地面を光が埋め尽くし、それが召喚による陣が放つ光だとわかった時には戦慄を憶えた。

「な、なによこの数っ」

果たして呼び出されたのは、あまりに圧倒的な数。

それこそあたりの地面を陣で埋め尽くさん程のそれはから現れたのは軽く見積もっても千を軽く越すかという数の召喚魔の群れ。

木乃香に秘められた力が強大だという事は知っている。それがつい最近まで封印されていて、ある出来事をきっかけにそれに綻びができた事も……だがそれはこんな短期間でしかも聞きかじった程度で容易く制御できるものではない。

いくら術式を千草が制御したとはいえそれは普通の術と変わり映えのしないもの。いや例え無理やり引き出す術を彼女がとれたとしてもこれだけの数を呼び出す事は出来ない。抵抗の末に無理やり引き出せる魔力の量などたかが知れている。つまり、やはり彼女は

「ほな鬼さん達はここでせっちゃん達を足止めしといてな、怪我させたらいややよ」

「しかしのお、向こうが抵抗すれば掠り傷の一つや二つはできてまうやろ」

「木乃香御嬢様、いざとなれば即死で無い限り治療は可能です。もちろん痕も残りませんから心配はありません」

「んー……わかった。でもできる限り怪我はさせへんようにな？
もしウチが戻ってきた時に誰か一人でも倒れとつたら……ウチも怒
るで？」

「お嬢様ツ！！」

「……せつちゃん。もう少し待っててな、戻ってきたらまた遊ぼう」
制止の為に掲げた腕は宙に伸ばされたまま、その先につかむべきも
のは無く力無く下りていく。

そうだ、目の前にいるなら彼女を止める方法はいくらでもあった。
あれが彼女を助けられる数少ないチャンスだったんだ。それを私は
足踏みをして……

「しっかりしてよ刹那さん！！ 私達は木乃香を助けに来たんでし
よっー！！」

「ですがお嬢様はもう 私はず、私はまた肝心な時に何も

「だったら尚更止めなくちゃだめじゃん！ 今木乃香をここで立ち
止まっついてどうするのよー！！」

「！ー！！」

「盛り上がっていると悪いけれど……終いや、嬢ちゃん」

「きや っっ」

振り向いた先にいたのは先程召喚された妖魔の一匹、だが明日菜が気付いたのは避けるのには致命的に時が足りず、反射的に伸ばした手がカードを手に取るも具現化するその一瞬間に及ばず

「あ
」

「すみません明日菜さん、どうやら弱気になっていたようです」

されど友人たる彼女の剣は確かにとどいた。

手に握る夕凧の感触を今一度かみしめる。

伝え聞く大戦期を英雄とまで言われた詠春と共に駆け抜け、その名を伝説の域にまで昇華させた名刀。

この剣を託されたのは私がお嬢様の護衛の任に就く際に長自身から託された物。

明らかに身の丈以上の業物に思わず突き返したのは記憶に懐かしい。その場は諭され不承ながらも受け取ったが、今ならあの時長が自分に託した理由がほんの少しだけ解る気がする。

なのに自分は何もできなかつたなどと、自分は大馬鹿者だ。

彼女を守ると誓ったあの日々の思いはこんな簡単にくじけるものだったのか？

否、断じて否。

恥ずかしくも一般人であった明日菜にまで励まされ、こうして気付くとはまだまだ精進が足りない。

先程の一刀、この自身の腕も夕凧も、培ってきた日々に応えてくれている。全てはお嬢様を守るため。その為に鍛え、厳しい修行も乗り越えてきた。

ならばここでその成果を発揮しなくてどうするのだろうか。

彼女は確かに敵の手に落ちている。

自分に知りうる限りで敵の術を敗れるかは定かではない。だが、彼女を助ける為だけに鍛えた剣は今彼女を止める力を貸してくれる。

彼女が何を持って操られているのかは分からない。でもそれがどうした。彼女が今しがた行った事を望まないのは自分もよくわかって
いる。

先程の明日菜の言葉がまさにそれだ。

本当に、お嬢様は友人に恵まれている。

彼女は独りぼつちと言っていたがそうじゃない。

皆が彼女を大切に思っていたから長も従者たちも駆けつけ、明日菜
さんもネギ先生も今まで協力してくれた。

そして、私自身も、何よりも彼女の事を大切に思っている。

だから、こうして気付いた私にもう迷いはないっ！

「これだけの数が召喚される程の魔力が放出されたんです。おそらく
楓も気付いてくれます」

この数を乗り切れるのかと言えが少々心もとない。だがこの程度乗り越えられなくてお嬢様を御救う事など出来る筈もない。いや、背負いすぎるのは私の悪い癖だろう。

この場には明日菜さんがいる。今言ったように楓達も駆けつけてくれる筈だ。

振り向き、後ろにいる彼女の顔を確認して安心する。

明日菜の表情には一遍の迷いが無い。

この先に木乃香救えるかどうかという不安が無い。彼女の中でそれは確定事項であるかのように、今の私にはその視線が何よりも頼もしく、背中を押してくれる。

「ですから、楓達が駆けつけてくれるまでの一時、何としてもここを堪え切ります！」

「うんっ！！ よーっっ、やってやるっじゃん！」

だから、勢いよく私は先陣を切る。

心地よく応えてくれた彼女の言葉に背を押され、再確認した自分の原点を胸に、今日この日まで守り続けてきた誓いを果たす為に、その為の一刀を私は振りかざした。

「キヤツ!? あーもうっいいい加減しつこいつーの!!」
「明日菜さん!!」

一体を屠ると同時に舞い降りた一体の鬼と思われる巨躯の影を確認して大きく横に飛ぶ。

先程の叫び声には冷やりとしたが無事なのは確認した。

だが状況は芳しくない。

見渡す限りの妖怪の群れ、その巨体と周囲十数mを円環状に何重にも埋め尽くす驚異的な数が巨大で長大な壁となる。

まるでコロッセオに投げ出されたように錯覚するほどに壁の層は厚い、もつともその壁は近付こうものなら容赦なくこちらを引き裂きに来る。

「ほんとっ! こんなに多いとキリない、わねッ!!」

そうなのだ。自分はともかく明日菜の攻撃は鬼達にとっては一撃必殺、単純にみるなら有利な筈。だが、圧倒的な物量がその利を覆す。

明日菜の対抗手段は一般人の枠を超えた身体能力と唯一の武器であるハマノツルギのみだ。そしてその特殊効果も消しうる対象は基本1つだ。いくら大降りに振ろうとも捉えられる数はたかが知れている。最初こそ2、3体を一遍に倒せたが時間が経てば相手も学習してくる。一定の距離を保ちつつ固まらないように2、3体が攻撃と牽制を繰り返し、1体が倒されれば“壁”からまた補充される。

対して刹那の刃は確実に数が減らせる。己の剣は京都に古く続く退魔の流派、神鳴流だ。その力は明日菜のハマノツルギ程ではないが鬼達に痛手を与える事が出来る。効果範囲も繰り出す技を適材適所

に合わせれば大多数の鬼を屠れる。だが

「がははっよう避けるな。ホレ、もう一丁ッ!!」

「ゲッ!!」

「ホッホッホッ、小生の事を忘れてもらっては困るのぉー」

強化した両腕でさえ受け流す事が精一杯、だが容易に捉えられない速度を持った豪力。

一瞬で距離を詰め、驕らず決して無理をしない判断力に確実に間隙を突く技量を持つ速力。

互いに真逆の性質を持ちつつ驚異的なコンビネーションを持つ2体の異形、更にその後ろに控える妖魔の一体が司令塔の役割を果たし、大小様々な下部を送り込む事で二体の生じる隙を完璧に埋め、こちらに絶えず休む間を与えない程の怒涛の攻めを繰り出す。

数字なら明日菜の倒した数と合わせて確実に減らしている。だが、その総数が万を超える数ともなれば所詮雀の涙程度、この後に力を温存したい身としては大技もそうやすやすと使えず、はつきりいって活路を見いだせずにはいた。

(くっ、二手に分かれたのは失敗だった、楓の事だからこの異変に気づいてはくれるだろうが……)

「そらそら! ぼーっとしてると八チの巢にするでッ!!」

「ッ!!」

斬鉄閃!!」

「もらったッ!!」
「なっしま」

思考する隙を突かれた攻撃を掻い潜る為に生じた僅かな隙、身を捻るうにも回避の為に稼働した体は即座に制動を受け付けない。

技後硬直、最悪なタイミングで手順を踏み間違えた自身に訪れたそれは走馬灯さえ抱かせないほどにとく速く

「な!？」

高速で舞い降りた鉄の塊に弾かれた。

「ギリギリセーフ……でござるかな？」

「あいや　これはまた一杯いるね」

「楓ッ、古!!」

数刻前に別れた仲間の登場に倒れたまま頭上を見上げる。

あの独特の笑顔を浮かべたまま投擲の為に登ったであろう木から飛び降りた彼女は寸分変わらず目の前で着地した。

「すまぬ、手薄な壁を見つけるのに時間を取られた」

「いや、こうして来てくれただけでもありがたい」

差し出された手を借りて立ち上がる。何とも情けない有様だがそれに恥じるより今は純粹にうれしかった。

「楓、おいてけぼりはひどいアルよっ」

「おーすまぬすまぬ」

「……って楓はともかく、あんな所から飛び降りて何ともないなんて古ちゃんも対外よね」

「あははは……」

不満を訴えつつも楓と同じく10mは優に超す巨木から下りてきたのだからその講義もいかなものか、多分彼女の事だから先手を楓に譲りつつ先にさっさと行ってしまった事が不満なのだろうか……

「ま、その分は今から存分に暴れさせてもらっから無問題ネ！」

目の前の敵に不敵な笑みを浮かべて拳を合わせる様は完璧に気持ち切り替えている。やはり彼女も表の人間とはいえ極限まで磨き上げた拳法家、その胆力は並ではない。

「いや、そう樂觀できる状態でも無い」

「確かに、この数は少々厄介でござるな……」

「ああ、おまけに統率も取れている。一対一なら問題は無いが」

「ま、こっちも2人増えたんだし、ノルマが減ったんだからどうに

かなるでしょ？」

彼女がこういうとそう思えるから不思議だ。

皆が皆同じように軽く笑みを交わしてそれぞれの獲物を構え持つ。

敵もいつまでも待つてはくれない、思わぬ増援に怯んでいたがそれが彼女たちだけと見るやじりじりと円を狭めにかかっている。

もちろんこちらもそうやすやすとやられる気はない。円の中から痺れを切らした数体が飛び出すのを確認しそれに呼応するようにこちらも迎え撃つ。

「いくわ」

「っ！？ 明日菜さん待つて！！」

先陣を切ろうと飛び出す明日菜の首根っこをつかんで慌てて引き戻す。少々苦しそうな声を上げていたが今は許して欲しい。

「な、何だ！？」

轟音を上げて飛び込んできた鉄の塊。否、塊と言うには洗練されたフォルム、ロシア製のリーダーニーヴァというオフロード車で名車と称された車だ。

だが、当然そんな事を聞きたい者はこの場にはいないだろう。重要なのはそのオフロード車が何故ピンポイントでこの場に飛び出してきたかという事だ。

“美しき草原”の意を冠する車体は草原どころか荒れた林の中を走破し、目の前の鬼を薙ぎ払い木々に阻まれる形で停車している。もっともそれは停車というにはあまりにお粗末、正確に言うなら激突による強制停止。意外にもバンパーを破損したのみで車体は比較的損害は無さそうだが、衝突時に響き渡った轟音と衝撃は運転手の安否も気遣われるというもの。

だが最初の突撃以降なんのアクションの無い乱入に焦れた一体の鬼がそちらに近付き　　突如脳天から真っ赤な花を咲かせた。

「な!？」

その光景は倒れる鬼と同じように頭部を、あるいは人体の急所である部位を正確に貫く銀の残光、それは瞬く間に銀の雨となって地上に赤い花を咲かせ続ける。

十秒にも満たない時の中、こちらの周囲を取り囲んでいた近くの妖魔達をその僅かな間に屠り、その担い手達はようやく姿を現した。

「俺が15のお前が15体、チツ引き分け　　「カウントは間違えないで欲しいな」グツ！」

「30体中7体がほぼ同時にヒット、5体は存命、正確なスコアは10対8……惜しかったね、私の勝ちだ。報酬は約束通り3割増し

あ、現金払いでね」

……その新たな増援である彼等は何故か目の前で突然言い合いを始める。

そのこの場にそぐわない珍妙さは敵味方合わせて場の空気が止まるほど。なのに渦中の二人は周りの事など意に介さず真剣に何やら論議を続ける。

主にお金の話を……

「待てよく見ろ！ 俺の標的は眉間と心臓を一発ずつ当ててるだろ
っ命中弾数は俺の方が上だ！」

「そういうのを無駄遣いと言うんだ……まったく、急所を正確に打ちぬくのは俄仕込みにはなかなかだが、左右別々の敵を狙えないのなら二丁の意味は半減だよ。それに、これは撃破数を競うんじゃないかったのかい？」

「ぐっ、両手に何か構えてないとどうも落ち着かないんだよ！ 第一お前と違ってこっちは3カ月しか習得期間が無かったんだからそのくらいのハンデくれてもいいじゃねえか！！」

「やれやれ、君は少し銃というものをなめているようだね。だってら初めからこんな提案をしなければいい話だ」

「なっ！？ いきなり作戦を変えて飛び出したのはそっちだろっ」

「論点をすり替えてもらっては困るな。奇襲として効果的なのは納得していた筈だ」

「あの ……」

「「なんだ!!」」

「あつっ！ いえ、その……………か、囲まれているんですけど」

ようやく治まった論議、とぼちちりを受けた少年には悪いがこの場にいた者はそのおかげでようやく動き出せた。

車に巻き込まれる形で空いた穴と銃弾の雨で減ったにも拘らず依然と健在な蠢く壁。そう、彼の言うとおり状況は結局変わっていない。いや、目の前で自分達を無視してふざけた騒ぎを始めた二人の登場にあちらのボルテージもやや上がっている様だ。

そんな状況を流し見た二人はしかし、またもや空気の読めない発言を続ける。

「ふむ、多いな……提案があるんだが、先にこいつらを片づけたら先程の条件をのむ、というのはどうかな？」

「OK、その賭けのつた！ 負けた方は弾代上乘せな」

「ほう、それはそれは今日の君は気前がいいな」

「冗談、今日までのツケ含めてきっちり支払ってもらおう！」

かくして互いの獲物を手に駆けだす二人に頭を抱えたくなるも今の自分出来ることなど一つしかなく、私はそれに続く形で乱れた戦場を駆け抜けた。

取立39回目　く決意の力、強攻のラ　ダニーヴァく（後書き）

うむ、久々にタイトル共に難産だったかも……前回までに字数が増えてきてるから削りにかかったのがまずかったのか？

ともかくそんな感じな39話、ようやく乱入する主人公！ってのが書きたかったので最後は残しました。が、若干遊びが過ぎた気がするので今の修正期間に合わせて手を加えるかもしれません。（苦笑あ、オフロードとはいえ車があこの山道走れるかというのは無しの方角で（焦　正に作者の浅知恵ですが魔力使わないで長距離移動する手段ってあまり思いつかなかったもので……おもいつきってダイビングさせてみました（笑

さて、ともあれ39話も終わって次は40話、なんか結構な数が続いている今作です。これも皆様のお陰です。本当にありがとうございます。修学旅行編は……な、なんとか45話に入るまでに終わらせます！　というか終わらせたいです。その後学園祭編に入るまでに数話入れたいので（汗

あ、次回の更新の話でした。えーっと、今回までに2週間で3回更新してきましたがサイクルの感覚がいまいちだったので夏休み中は期間を少しずらします。2週間とはいきませんがキリがよくなるので4日づつ間を空けての更新ペースをとっていきます。ですから次は9月2日の木曜日に投稿します。時間についてはおって小説情報の方にも上げますのでお待ちください。

では、今回もこれで失礼させていただきます。再見ツ！！

取立40回目　　↓決戦に向けて、三度の開幕にして終幕↓

「どうだ、動きそうか？」

「うんともすんともいわないな……一度バラして見ない事には何とも言えないけどこっちはそこまで時間も無いしね」

一運動を終え、木に激突した車を確認していた龍宮が戻ってきたのを見て一応の確認をするが予想通りの様子。煙は出ていないがアクセルを固定している筈のそれがエンジンの回転音も上げないのだからどこかしらトラブルがあるのだろう。

時間的に見ても人員的に見ても強行は可能なのだからここで余計な手間をとる必要も無い。

個人的にもこの悪路をこれ以上行くのは遠慮したかったのもあるが。

「なら急ぎましようっこうしている間にもこのかさんは」

「けどよう兄貴、ただ闇雲に飛び込むってのも無茶つてもんだぜ」

「カモ殿の言う通りでござるな。刹那、木乃香殿が操られているのは間違いないでござるか？」

「……ああ、どんな手段を使ったのかは分からないが、お嬢様本人であるのはこの目で見ている。まず間違いない」

「そうか、なら近衛が敵にまわっていると想定して動くべきか……長の容体は？」

「恐らく刀に何らかの呪術が施されていたんだと思います。幸い毒そのものは取り除けましたが破損した内部の状態がひどく、戦闘には……」

詠春も木乃香、娘にまさか刺されるなどとは予想だにしていなかっただろう。

刺し傷自体は脇差だった事と急所を逸れていた事から命に危険が及ぶまでではなかったのだが、患部から直接流し込まれた呪いによるダメージの方が酷かったようだ。

酷な話だが事情を説明してもらった後今は横になってもらっている。歴戦の英雄がこうもあっさりとは思うが事情が事情だ。皆の雰囲気からも刹那達から語られた木乃香状態にショックを隠せないでいるようだし、戦力はそれなりに形になったとはいえ士気の面でも落ち込んでいては今後の戦いへの悪影響は目に見えている。

「……刹那、お前はあいつに剣を向けられるのか？」

「ちよつとつ今は木乃香を助け出す話でしょ！　なんで刹那さんが木乃香に剣を向ける話になるのよっ」

「想定として十分考慮される範囲だ。操られている以上立塞がるのは間違いない、その時に仲間内で満足に動けない奴がいたら足手まといだ」

「な、何もそんな言い方」

「私も音楽さんに賛成だな」

「龍宮さんッ!？」

「私は寮生活以上に任務でも刹那と組む事が多かったから近衛をどれだけ大切に思っているかは知っている。その上でいうなら不安の方に天秤が傾いているというのが正直な話だ」

「でもっ」

俺と龍宮の言葉に真っ向から反論する明日菜とネギ、楓達も言葉には出さないがどちらかと言えば明日菜達寄りだろう。だが現実を理解している分だけこちらの言い分も無視できないと言ったところか。

「いいんです明日菜さん」

が、その場で待ったをかけたのは他でもない、刹那本人だった。

「龍宮達の言っている事は間違いじゃありません。私自身お嬢様を目の前にしたらまた足がすくんでしまうかもしれません」

彼女の独白はその胸に手を当てている様に今もまだ迷いがあるのは確かだろう。その言葉もどこか震え気味で頼りない。

「でも、決めたんです。いえ、気付かされたんです。明日菜さんあなたに」

「わ、私っ?」

「私はお嬢様を救いたい。この気持ちはお嬢様の護衛としての使命感だけじゃないと、分かっていたはずの事なのに……でももう迷わ

ないと決めتانです。私は必ず、お嬢様を助け出します」

だけどその瞳だけは、今の言葉に偽りがないと物語っていた。

「不明慮で未回答同然だけど……十分及第点だな」

「あんたまたそんなこと……って、え？」

明日菜の言うように少々言葉が悪かったのは認めよう。

だがこれから木乃香奪還する為にはここにいる全員の力を当てにしないではいけない。

長が言っていた両面宿儺という大鬼が封印からとかれれば形勢は判らなくなるし、敵の実力も決して軽視できるものではないのはこの間の一件で再認識している。だからこそその問いかけだったがどうやら杞憂に終わったようだ。

憎まれ役に便乗してくれた龍宮にアイコンタクトのみで礼を告げ、皆を一瞥する。

どうやら刹那の言葉に気持ちも纏ったようで、結果としては上々。後は救出するその時まで全力で駆け抜けるだけだ。

そうと決まれば行動は迅速に、一度大まかに手順と役割を取り決め、詳細は移動しながら確認し合う事にする。

何しろ時間が惜しいのだから短縮できる所は切り詰めなくてはならない。

「こんな所か、要点は接触までに正確に把握してくれ」

「様に……若干名が理解しきれていないようだ、あまりそちらだ

けにもかまけていられない。
せめて向こうに着くまで理解できるよう組み合わせたし、まあ出来る限りの説明はしたはずだ。

「よし、じゃあ行くぞ！」

隊列を組んだまま視線の先に捉えた木々の開けた場所、決戦の地となる大池のを見やり散開する。
タイミングを合わせる必要はない、それは彼等が合わせてくれる。私達の役目はまず儀式を中断させることだ。

「なんや、思ったより早かったなあ……」

「天ヶ崎、千草っ」

注連縄を施された重厚な大岩が池の中央から飛び出している。
その手前、祭事の為に使われると思わしき棧橋の手前で女は立っていた。

「お忙しい中ご苦労さんやなー……この間ウチらにあんだけめたくそに負けた言っつのにほんまこりんやつちなあ」

「このっ、木乃香に何したのよ！」

「木乃香御嬢様ですか？ ああ、あれはウチやおまへん。フェイトがなんやら説き伏せていたようやけどその件はウチは何も手を出しとらへん。……まあ、案外本心やったんと違いますか？」

？る いきる 心を抑えて飛び出しそうになる両足にストップをかける。

とはいえ睨む目が鋭くなるのを抑えられる程冷静でもいられない。

「おお怖っ……けど、一足ばかり遅かりましたなあ」

「何ッ!？」

「ちょうど今しがた儀式が終わったところや」

そこ言葉を待っていたかのように鳴動する大地と大気、空気に混ざる濃密な魔力と存在感は明らかに規格外。

その規格外の存在が発光する水面から徐々にその姿を顕わにしている。

「……リヨウメンスクナ神、飛驒の大鬼神と畏れ崇められた大鬼や」

周囲の大き木を優に超す身の丈は10数mはあるだろう巨体。

前後に二つの面を持ち、異様なまでに太い4つ腕、その腕を地につきそれは重い腰を上げるようにゆっくりと立ち上がった。

「……刹那さんあそこ！」

その足元、祭壇の前にいた少女がこちらの声に気付いたように振り返った。

「あ、せつちゃん。また合つたな」

「お嬢様っ」

「どや？ スクナ言うんやてこのコ、すっごく強いんよ」

まるで子が親に褒めてというように無邪気な彼女、その後ろに聳え立つ巨体の威圧感と相まってこの場でその雰囲気は異常性が際立つ。

ここからだ、お嬢様を助け出す為に、私は私の役割を全力でこなす。

「お嬢様、帰りましょう……まだ間に合います、ちゃんと長と話し合つて」

「いやや」

「お嬢様っ」

「いやや！ せつかく力手に入れたのにこのコを取られたらまたウチは独りぼっちになってまうっ、そんなの絶対いやや！」

落ち着け、ここまでは想定内の範囲内。こうなつた以上言葉だけで助けられるなど楽観はしていない。

スクナが封印から解き放たれたのは驚いたが長から話を聞いていた以上この手の事態は予想している。最悪なのは助ける事かなわず敗北する事、無責任な気もするがスクナを倒す事が第一ではないのだ。

「……せや、だったらこのコの強さ見せたら納得してくれるやろ？」

もちろん

その背後に

「っと、お前の相手は俺だよ」

「グッ……あんたはッ!!」

打ち合わせ通り彼が奇襲をかける。

「音来さん!!」

「ちっ、一撃じゃ無理だったか、刹那！ こっちはいいからさっさと行け！」

「はいっ!!」

飛ぶように駆けていった少女達を視界の端に仕切り直しと視線を戻そうとして……

「さて　　っと……お前、ちょっとは空気読めよ。少しくらい待てないわけ？」

有無を言わず斬りおろされた一刀をグリップの底で刀の腹を弾く。

「いんや、十二分に渡してもらったわ……一昨日も昨日も……こんなに長く感じた二日間はそうは無い」

「……何根に持ってるのかしらねえけど、こっちには全く憶えが

ッ！！」

「いけづやなあ　　こんなに女が誘つとるのに……意気地のない男はもてませんよつと。まあ、そんならいじゃウチは諦めんから、よろしゅう頼みます」

咄嗟に転送した黒銀の筒で黒染めの刀を防ぐ。

剣技は素人以上常人未満、とても熟練とは言い難いレベルだ。なにこつして二度も仕損じ攻撃を許している、戦士と術者が対峙した戦いにおいてあり得ない光景。

身体能力を何らかの手段で強化しているのだからとしても所詮は術者の強化、同じ強化でも基礎力に差がある両者においてその差は揺るがない。

「えらく芸達者じゃねえか」

するとこちらの言葉にうつすらと笑みを浮かべ握る刀に更に力を上乘せしてくる。

当然こちらもそれに乗る形で腕に力を入れて押し返す。だが鏢迫り合いの形で交差している筒と刃、それで状況が変わるはずもなくこれ以上変化がなければ距離をとり直すかと思つた次の瞬間

突然拮抗していた筈のそれが、止めたはずの刃がまるでバターの様に筒を斬り進んでいく。

「っ！？」

慌てて退くが妙な事に相手は追つてはこない。

警戒をそのままに手に持った筒を確認すると中程から沸騰し溶け崩

れたかのような形跡が残っている。

「急ごしらえだったとはいえコイツを腐敗させる程の瘴気……そいつが血化粧か」

「なんや？よう知つとるやないか。まあ最近は何装”言われとりますけど」

「本来それは禁術の類だろう。それも何故お前の様な輩が扱える」

相変わらず寒気のするほど禍々しい刀。

その正体がわかった所で状況は全く変わらない。

「これは、ウチが蔵から見つけた書物にあった、禁術“血霞”言っんよ」

「血霞？」

「呪いを直接身に纏う従来の呪装と違って武器に纏わせる。血に混ぜた毒性も身体に通わなかったら問題あらへん、しかも媒介を用意せずとも傷口から直接送り込めばポックリと終いや……さあ、楽しく踊りい！！」

取立40回目　く決戦に向けて、三度の開幕にして終幕く（後書き）

私事で遅れましてすいません。あ、検定の方、無事合格できました！
ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

さて、件の40話目、修学旅行編ラストまで残り駆け足でやってい
こうと思imasのでどうぞ皆様これからもよろしく願います。
それではまた次回く

取立41回目　↳反撃の狼煙、勝利への覚悟↳

『黒い刀、ですか？』

『ああ、あの女術者が使っていたんだ。多分何らかの呪術で強化してるんだと思うんだけど……俺はこっちの魔法にそこまで明るくはないからな』

『はあ、私も嗜んでいる程度なので……何か他に特徴はありませんでしたか？』

『どんなか、正直あの刀は直視したくない……なんて言うか刀自体はどこにでもありそうな普通のものなんだ。いや、だったと言った方がいいのか』

『だった？』

『……俺自身趣味で刀剣類の収集もしていたからそこそこの鑑定眼はあるつもりだけど……初撃を受けた感覚でもあれは俺の武器に傷を負わせられるはずがない、現に一合い目は問題なく受け止められた。なのに二撃目はアーティファクトの一層に傷を入られた。切口からいつてもただの強化じゃないと思うんだ』

『私も聞き及んだ程度ですが、恐らく“血化粧”という呪術ではないでしょうか？』

“ 呪装・血霞 ”

旧称 “ 血化粧 ”

聞く所によると血化粧というのは身体の特定の部位に血の紋様が浮かび上がる事からそう呼ばれた陰陽道の中でも禁忌とされている呪法であるらしい。

相手を呪う、その概念のみを追求した呪術の根底にして用法は単純、名の通り己の血を媒介にする事で呪いの純度を飛躍的に高め、その高純度の呪いを相手に流し込む事で死に至らしめる。その副次的効果として身体能力が飛躍的に底上げされるそうだ。

聞いていればいい事づくめ、これで何故禁術などと呼ばれたのか。

答えは単純、術者自身の命を著しく縮めるのからだ。

相性も関係なく死に至らしめる高濃度の死の呪いはそれだけに猛毒、いかに術者といえどそんな毒を体内に宿していれば時間と共に毒が蓄積するのは当たり前な話だ。だからこそ純度を表わす体表に現れる血の模様はカウントダウンだとされている。血色に輝く化粧が黒く変色を終えた時、その呪いは術者が消化できない濃度の死の塊に変質する。

のだが

「 つ、紋様がないだと! ? 」

「 クフフっ、ほんまに知つとるんは名前だけどおすか。この “ 血霞 ” にそんな旧時代の急所があるわけおまへんっ 」

そう、話に聞いていた紋様が何処にもない。あくまで目安的なものだが血化粧最大の特徴である血の紋様が何処にもない。

本人の言葉を信じるならこの術は“血化粧”に類する術だ。いや、あれだけ自信にあふれた物言いにブラフが含まれているとは考えにくい。だとすればあの“血霞”は本物、それも彼女にとって切り札になるほど強力な。

だが奇妙な点が多いのも確か。

まず変色した刀身の色が赤ではなく黒だという事、明らかに致死量以上の濃度と容易に判別できるそれは強化しているこちらの武装に受けることさえ許さない。

第二に恩恵である筈の身体能力。実際には強化というにはあまりにお粗末、精々術者が戦士に追いつく程度のそれは聞いていた強化状態とはかけ離れている。

「アテアット つ、来れ!!」

しかし、その奇妙な点を除いてもこれが強力な術であることには変わりない。

強化による身体能力はこちらが上とはいえ相手に油断はない、いつかの様に背後をとろうにも早々隙を見せるほど愚鈍ではない。加えて、出力不足の点も少なからず響いている。

「あはつ、どないしはりました？ もうネタ切れかいなあ……自慢の妙に厳つい籠手も、一昨日の戦いでウチの“血霞”を防ぎきれない事は証明されとります。残念やったなあー、アンタとウチの相性

は最悪みたいで……」

「言ってる！ 『弾倉連装・焰 夷火槌！』」

ホムラノイカズチ

大きく距離を取って放たれた炎の一撃。

それは大気を糧に猛り、さながら三つ羽の征矢の如く目標目掛けて滑空する。

発射から着弾までの一瞬、土煙と共に爆炎を地表に燈した。

「……まいったねこりゃあ」

やがて煙と共にゆっくりと炎が消えていく様を見て驚愕と焦慮の溜息が洩れる。

瞳が捕らえた炎の中心、そこには依然として健在な千草の姿があった。

「な？ 言った通りやる。ウチとあなたの相性は最悪やよって、なんぼしはりましたも……この勝負、先はもう見えませんでしたなあ？」

刀を物理的に防御できない事に加えて強固な防御力、本来術者として後衛主体である彼女が防御術に優れているのは判っていたつもりだったが、お陰で先程から遠距離による揺さぶりがまるで効果が無い。

近付こうにも一撃必殺どころか掠り傷でさえ致命傷になりかねないのではあまりにも分が悪い。

万全の状態なら短期だろうと長期戦だろうと勝つ見込みはある。

だが、回復したといっても全快には程遠い身としても、背後に異様なまでの存在感と威圧感を放ち続ける化け物がいては短期決戦しか選択肢はない。

欲を言えば余力を残しておきたいのも事実。しかし、今相對する敵はその残量を確実に削れるほどの力の持ち主なのだ、下手な手は打てない。

まずは確實且つ最小の労力にして最良の手で敵を倒す。

あの時の不甲斐ない決断に信頼を取り戻す為、さあ検索を開始しよう。

様子見は論外だ。時間が無いとは今さっき認識したばかり。

速攻もだめ、後先考えず行くにはストックが無い、何より今のスタイルでの戦闘経験が不足している。

なら

無の構えから攻守を考慮し、正拳の構えにシフトする。

アインと組む以外では思考より本能で戦っていた。彼女と組むようになってからはより理性的な戦い方を、だが今求められているのはそのどちらでもない。

敵の術を目の前にしてから討ち合った回数はまだ数えられる程度だ。つまり圧倒的に情報が不足している。戦闘前に刹那からある程度の情報は聞けたが、この国に百聞は一見に如かずという言葉があるようにいくら前情報があるからといってもそれで勝てるほど甘い相手ではない。いや、アインがこの場にいればその前情報と数少ない戦闘記録だけでも対策には十分だろう。

「っあ！！ 木乃香さん！」

旋回しながら大鬼を攪乱する。言うだけなら簡単、だけど自身の丈の数十倍の巨体を前にするとなかなか精神的に来るものがある。でも敵の大きさを考えたら二次元的よりも空を飛べて速度も自由に取れる自分が適任だ。泣き言を言っている暇はない。

「兄貴ツ後ろだ！！」

「っ！！」

必死に背に掴まっていたカモ君の声に急降下する。

すると 頭上を豪速で振りぬかれた野太い腕が空を切っていた。

風すら凶器となり暴風と化す、勢いのままに地表に打ち下ろされた拳は周囲の大木をまるで積み木を蹴り飛ばすように吹き飛ばしてしまふ。

一瞬でも対応が遅れてたらと思うとぞつとする。あんなもの掠るだけでも致命傷は避けられない……だけど今はその渦中、この一時ですら気を抜けば次の瞬間にはあの大木の惨状が自分の末路になる。

「Uoooooooo！！」

「くっ、ラ・ステル・マ・スキル」

叫び声に見上げた先には大口を開けた大鬼・リョウメンスクナ。それが大気に満ちた魔力を一瞬で集束させていた。

あれは、マズイ！！

打ちつけた背中が痛みを脳に訴えかける。

イタイツライクジケソウニナル

でも今は這つてでも進まなくっちゃいけない。

頭上には再度の魔力を集束している気配がすぐそこに

「ネギツ!!!」

地についた耳が声と共に駆け寄る足音を聞きつける。

彼女の声、予定では彼女の出番はまだ先の筈だ。

「グッ」

手に持つ“ハマノツルギ”で追撃の光の洪水を受け止め掻き消し続ける明日菜さん。

彼女の剣には魔に通じる物を消し去る特性がある。だがしかし、大質量の光はその処理速度を僅かに上まるのか衝撃に堪え切れず膝をつきかける。

「あ、明日菜さんっ」

「あああああっやあ!!!」

本来なら防ぎきる事などかなわない筈の攻撃、その細腕の何処にそんな力があるのだろうか。

肩で息をしつつも笑顔を浮かべて振り向く姿は年上であるという事以上に何か僕を奮い立たせる。

「ほらっ、なにボケっとしてるのよ！ 次、来るわよっ」

「ハ、ハイ！」

引き上げられる前に自身の力で立ち上がる。

大丈夫、痺れも抜けてる。まだ動く、まだ戦える！

背後に何度も感じた大質量の威圧感を感じて明日菜さんの腕を取って平行に急加速で飛び去る。

急な腕の負担に後ろから抗議の声が聞こえてきたけど次の瞬間に響いた大砲の着弾音の様な轟音に無言になった。

振り返らなくても地面が砕け散った様子が容易に想像できる。

「で、どうするの？」

「いや、作戦台無しにしたの姐さんだ」

「何よ！」

杖の後ろに乗せた明日菜さんとカモ君が言い合いをしている姿に表情が綻びそうになる。

そうだ、確かに明日菜さんが出てきた事で最初に立てた作戦とは外れてしまったけど手が無いわけじゃない。

明日菜さんのお陰で僕もまだ動ける。手を差し伸べてくれる仲間がいる。何よりここにいる皆は木乃香さんを助けたいって気持ちを同じくしている。

力の総量では勝つことはできないかもしれないけど、この言葉に出来ない何かがある武器だ！

「……僕に考えがあります」

「「え!?!」」

「問題はタイミングです。具体的には

呆けていた二人の表情が徐々に真剣なものに変わっていく。

確かにうまくいけば鬼も倒せて木乃香さんも助けられる。けど踏み切るには少々判断材料が足りないのも事実。失敗すればその注ぎこんだチップは戻ってこない。でも僅かでも確率が高いのならここはその賭けに出るべきだ。

「 という感じです」

「おいおい兄貴、そりゃ

「勝てるの? そうすれば」

不安を言いかけたカモ君の言葉に明日菜さんが被せる様に、真剣な目で僕に問いかける。

親友の未来がかかっている。これからまたいつもの日常に戻る為に彼女は戦っている。中途半端な答えじゃ納得しない。でも

「勝つんじゃないやありません。助けるんです、絶対」

不思議と確信を持って言えた。

だってその日常は僕にとっても掛替えの無い物で、きっとその場所はここにいてる皆がにとっても大事なものなんだ。

十分に距離を保ち、一度明日菜さんを下ろす為に高度を下げる。

そして杖から飛び降りた彼女は確かに頷いてくれた。まるで僕が今

考えている事に賛同してくれている様に。

「明日菜さんは僕と一緒にスクナの注意を引いてもらいたいんですけど……」

「大丈夫よ！ 皆でやるならきつとなんとかなるって」

「カモ君にも、大変な事だけどお願いできるかな？」

「あ　っ、わったよ！ 乗りかかった船だつ。男力モミール・アルベール、最後までやってやらあ！！」

力強く頷いてくれた二人に感謝の言葉を述べると背中を強く叩かれてしまった。

どうやらカモ君も同じ気持ちだったようで自身を持ってと言わんばかりの表情でその短い手で肩を叩いてくれた。

「よし、じゃあ行くわよ！！」

視界の端にカモ君が一直線に駆けていくのを確認して僕達も戦闘体勢を取る。

心なしか先程までの寂しげな恐怖心は微塵も感じられなかった。

「っ！！　あのバカッ何やってんだよっ」

視界の端、スクナの攻撃に弾かれたネギに隠れていた筈の明日菜が飛び出しているのを見とめて思わず口をついて出てしまった。そもそもスクナの封印が解除された時点で崩れた計画ではあるが明日菜の役目はどの戦術でも要、明らかな独断行動だ。

「フンツッ!」

「　　つと、あつぶねえあぶねえ」

「こんな美人が目の前におるのによそ見なんて、失礼なやつぢゃなあ」

脇下から逆袈裟に切り上げられた刃を籠手の面を当てる事で受け流し即距離を取る。

チラツと見た籠手の有様はお世辞にも良いとはいえない。表面の赤銅の鉄板は削れ、酷い所は既に切り落とされている。

この39合いの内になんとか接触から腐敗に至るまでの速度を把握できたがここまでの惨状になると敗色が少々濃くなりかけている。

判明した腐敗速度、その接触から刃が透過するまでの時間およそ1秒。

つまり受ける事など論外、受け流す事も下手を打てば刃が内部まで腐らせる。対抗手段は避けるか瞬間的に弾くか、もちろん避けるだけなら簡単だ。仮にも戦士系、それもつい最近まで接近戦主体だったのだから呪符使いが強化したところで回避に専念すれば避けられる。

のだが、やはり物事はそう易々とはいかないらしい。

「クソッ！」

悪態をつきながら刃も来ないのに距離を取る。

だがこれは何も俺が臆病なわけではなく、俺の、正確に言えば俺達の足元に問題があった。

「あらあら、革靴がいい感じに溶けてきはりましたなあ」

そう、地面に浮かぶ黒い斑模様。既に足の踏み場も無くなりそうな程広がっているそれは全て奴の刀から漏れた“呪い”の傷跡だ。

千草は攻撃が当たらないと見るや手段を変え、こちらの動きを封じる手に出たのだ。弾き、時に受け流す度に刀身から呪いが放出される地面に線や点を刻んでいく。初めこそ何の意味がと思ったが効果は直ぐに思い知った。俺の後ろにあった木の一本が呪いの塊を受けて瞬く間に枯れていったからだ。見れば周囲の苔や下草も枯れ果てて中には塵と砕けていくものもある。

だがこれだけならケチらず浮遊術を使えばいい話、現に今も宙に浮いているのだが、それでも焦るのは徐々に斑点から瘴気が立ちこめている事だ。拓けた泉の周辺では流石に充滿しないが徐々に体力を奪われるのは堪ったものではない。

唯一の救いは放出された直後に空気に触れると呪いの濃度が下がる事か、もしこの黒点があたの刀に宿った呪いのものの毒を有していたらこんなものじゃない

「チツ、かといって、このままじゃギリ貧か」

「なんや？ ようやく諦める気になったんか？」

「ハッ！ 冗、談！！」

そう何度も使える手じゃないがこの腐った空気の中じゃどうしようもない。

右手の籠手に貯蔵されている魔力の一部を風に、左の籠手に水に変換した魔力を圧縮して一気に放出し瘴気ごと吹き飛ばす濃霧を発生させる。

「なっ！？ チッこんな目暗まし如きで」

『アフレコ下雷陣・荒波餌捕！』

広範囲捕縛陣“荒波餌捕”、霧状に散布した水分をレーザーに地表を走らせた電撃が蜘蛛の糸のように相手を絡め捕る。このアーティファクトだからこそ扱える技。

その気になれば鬼の数十体は捕捉できる代物だ。例え防御が優れていても空中に散布した霧が通電率を上げている。ただでさえ捕縛系にしては威力の高い陣で攻撃用としても十分使える。

まあ、最悪足止めか目暗ましになったとしてもこの状況を打開する為の時間稼ぎには

「みがわり式神！？ ツ！！」

「どうやら、陣の扱いはあまり慣れとわんようやな。ん？ 手品はもうしまいなにか？」

背後からの強襲に反応できたのは行幸、腐敗した地に手が着く事も構わず全力で回避行動に充てる。

確かに今のは準備も貯蔵魔力もそこそこ消費する技だ。大技である^{アマツキリ}“天斬”程ではないが今ので決められなかったのは痛い。

「ほなこつちからいかせてもらいますっ」

「クッ」

“旦那ッ！！”

「この声」

“小動物か？”

“こんなときくらい名前で”

“そんなこたあどうでもいいっ、こつちは今取り込み中だ！ くだらない用事で呼びとめたんならただじゃおかねえぞ！”

“ああああってブルってるばあいじゃねえ！！ ネギの兄貴から伝言だ”

“ネギの？”

“なるほどな。わかった、ならこつちもさっさと終わらせ
ないとな”

どうやら胆が据わっているのは子供先生の方だったらしい。
同じ同僚、しかも同年代の男の子。こういう荒事には自分の方が慣
れている筈だったのにいつの間にか思い切った手札の切り方をして
くる。

なかなか成長幅、この分だといつまで先輩風吹かせていられるかも怪しいかもしれない。

口元が緩むのを自覚しつつ、念話の為に座成りになっていた討ち合いに湯を入れて大きく距離を取る。

その際に確かめたアーティファクトの具合はやはり悲惨な物、注意を割いてぞんざいに扱った結果装甲の大部分は腐り落ち、基礎のプレートが見え隠れしている。

どうやら覚悟を決めるまでもなくそろそろ限界だったようだ。

カモが離れたのを確認して両腕の嵌められているアーティファクトの留金を二つずつ外していく。

「なんや、ほんまに降参かいな」

「いや　ちょっと向こうから急かされてな悪いけどもう加減してる暇ないわ」

「は？　手加減？　ぷはははっ強がりはよしなはれ。頼みの綱の籠手はボロボロ、おまけに瘴気に囲まれたこの状況ので何を出し惜しみしてた言っんや」

「まあそうさな。確かに俺も二度も使うつもりなかったんだけどさ　一つ教えてやるよ。俺のアーティファクト、リュウケンシキョウトウ“劉？手套”は籠手じゃねえ……あくまで手套、手袋みたいなもんだ」

臆面もなく笑う彼女に構わず留金を外し終わった俺は今度は両肩を掻き抱くように掴む。何しろこの瞬間だけは非常に痛い。

相手から見れば突然の珍妙な行動。警戒はしているようだがここま

できた以上既に手遅れ、あんたには最後まで見物して行ってもらおう。

「？ だからなんや」

「お前が削ったって言ったコイツは、ただの外装だって事さっ」

俺の声と同調するように一瞬鼓動するように赤く光る。

すると“手套”に縫いつけられたガードの留金であるネジがせり上がり

「拘束解除！！」
ポルトバージ

叫ぶ声に呼応して拘束具を弾き飛ばした。

鈍い赤銅色の武骨な籠手の下から表れたのは同じく赤銅、ではなく紅玉の様に磨き上げられた鮮やかな朱が鱗状に覆った物。

使用者の腕の4つ周り程太かった前の状態に比べて刃の様に突き出た肘の部分を除けば人の腕と大差が無い、見た目的にどちらが頑強であったと言えるば明らかに前者だ。

だが、それでもなお異様な、それこそ人を魅了する宝石の様に怪しい輝きと波動を放っていた。

手を一振りして関節の状態を確かめる、一種の儀式。

実にこれを使うのは今日2回目だがあまり使わないものという事とコンディションを整える為に修行の時から繰り返してる験担ぎの様なものだ。

魔力の通りも正常な事を確認し、バージした時の衝撃で後ろに下がっていた千草に向き直る。

「お前、俺とあんたの相性は最悪だつて言つてたよな。……逆だ、
“アンタと俺の相性は最悪、どう足掻こうと……この勝負の結果は
決まってる”つてな」

「ほ、ほおーならウチは今度こそその自信へし折つたるッ!」

ひくついた笑みに怒りを水増しした顔で迫ってくる千草の前に、今
度は確たる余裕を持って出迎えた。

取立41回目　～反撃の狼煙、勝利への覚悟～（後書き）

てなわけでお送りしました41話。今回は男性陣？が中心になっており刹那sideと楓&古sideとに分けてもう一話使います。

決着はうまくいけば次回のラストか再来週ですかね。まあ簡単に終わらせる気はないんですけどね（笑　登場キャラは絞ったのに書きたい事多すぎて（苦笑

では、ご意見ご感想、何かお気づきの点等がありましたらご指摘よろしく願います。それでは再見ッ！

取立42回目　く意地とプライド、それぞれの天秤く

『『斬鉄閃!!』』

波立つ湖面を更に荒立てる様に、甲高い金属音があたりに響き渡る。一息に二つの斬撃音に火花を散らして降り立つ二人の少女。

「この間と違って刀に勢いもキレもありますし、うれしーわ　今日は本気で来てくれたみたいで」

「クツ、毎度毎度私の相手はお前か……月詠といったな」

数分前から続く硬直状態、焦りが無いと言えば嘘になる。向こうはイキイキととても楽しそうに剣を振るう、つまり迷いが無い。

私自身も己の剣に、この任務に迷いはない、筈だった。

少なくとも彼女が攫われるその瞬間までそう思いこんでいたんだ。

だが結果はどうだ？

誓いを立てようとして攫われ利用されている。

幾度嘆こうとも悔みきれない、この現状が全てを物語っている。

落着け、負の思考に囚われ過ぎるのは自分の悪い所だ。そういう場合ではないという事は十二分に教えられ受け入れている。

「はい、名前を憶えてもらった上にいきなり呼捨てなんて、なんや今日はいい事尽くめでウチ顔が火照りますわ」

「……これだけ打ち合えばイヤでも覚える、お前は」

出かかった疑問を封じ込める。

何故こんな事に関与しているかなど今更だ。仕事で立場も違えば対立も已むなし、今すべき事は目の前の敵、見た目同年代と思われる二刀を構えた少女に集中する事だ。

気が散る材料は多いが相手をするなら自分以上に適任はいない。

だが抑えるだけではだめなのだ。一時でも圧倒し、この瞬間を越えていかなくはいけない。

それが勝利の方程式ならば

「私なりの礼儀だ　　脇見はしない、全力でお前を排除させてもらおう」

恥も外聞もかなくなり捨て、心に残ったのはやっぱりこの思い。

それを果たす為に、その結果の先に何があるろうと。

全てはそれから、全てはこれからのだから

響いた金属音に落下物が虚しく草木に音を耳にしたのはこれで何度目か。

腰に当たった手に感じる冷たい金属の感触も心許なくなってきた。既に30は落とされ弾かれた苦無達、死角を狙おうにも気配を絶とうにも、緩急やフェイク、トラップも含めようとその悉くが不発に終わっている。

いや、自分の初手を、不意打ちできるタイミングを弾かれた時点でこうなる事は初めからわかってはいた。

なら何故そんな無駄なことをしているのか？

答えは単純、それが自分に与えられた役割だからだ。

「いい加減出てきたらどうだい？ そろそろ手持ちの苦無も心許ないんじゃないかな」

そんな事は百も承知、一投を十に、百の刃にする為に工夫を凝らすもネタが尽きかけているのは当然、これは初めから決まっていた確定事項なのだから。

そしてこれからの自身の行動も

「
」

「折角の対面にもだんまりか……観念した、とみていいのかな？」

背後から音もなく表れた己を視線も巡らせず、一挙動すら見せずに捉えるという事はこの範囲内は相手の領域、半径30間（約55m）をカバーできる探知能力は尋常じゃない。

かといって引く訳にもいかず、誠割に合わない仕事だ。

「さあ、どうでござろう？ 拙者にも矜持というものがござる。このまま黙ってやられるのはごめん仕る」

「アサシンが武士を気取るとはね。実力があるのは認めよう、けど君じゃ役不足だ」

姿がぶれた次の瞬間には視界が暗転する。

全く関知できなかった一撃、辛うじて視界を覆った感触が掌底だと気付こうと、頭を掴まれては隠者としての領分を超えられたままだ。

が、それもその一撃が有効打になっていければの話で

「
」

「ハッハハ、今度はそっちが面食らう番でござったな」

捉えた筈の実が虚であったなら相手にとってこれ以上の恥はない。

敵と認識している少年の周囲にいる己の数は14体、立ちあがる彼の足元にいた自分を含めれば15体の分身を含めた事になる。

ほぼ均等に膂力を割り当てた分身は各々が生きた表情で生きた動きをする。

一瞬の虚を突かれた少年は恐らく彼にしては珍しい表情を浮かべていたがそれも僅かな事。

「別に、その年でこれだけ見事な分身を作れるのには驚いたけど

」

次の瞬間にはまた同じように分身の一体に突撃して来た。

「何も分身は君の専売特許というわけじゃない」

遮る他の分身体を避け往なし、或いは消し飛ばし、当初の目的である本体の水月を正確に打ちぬく。

「そのようでご覧な」

「!?!」

だが敵の攻撃が読めれば速さなど関係ない。

これまで正面切って対峙するその瞬間まで敵の性格を大まかに探る時間は十二分にあった。

そこから見れば少年は機械の様に、或いは得意になった子供の様に愚直ととれるほどセオリーに従った戦い方をする。

対敵した瞬間に僅かながら力を上げたとはいえこの手の相手は無駄な労力を嫌う。つまり次の一撃も全力ではない、即座に割り出した自身の補正值に従って力の開放度を上げていく。要は付け入る隙がまだあるという事。

「水を使った分身体とは誠めずらしい、拙者初めて見たでござる。」

しかし、どうやら似た系統の術が使えても欺く技量はこちらの方が上の様でござるな」

言葉に実を籠めないのは忍びの常、真意は常に潜め、悟らせず、欺き、敵を挫く。

今の一撃とて15の分身の中に本体はいなかったのだ。

流石にこの年で里で中忍と認められようともまだまだ未熟な身の上、いくら16の分身を可能としても実体と同等の分身を保てるほどの実力はない。

均等に、本当に神経を集中させれば実体と相違ない分身は可能だ。だがそれでは出来て3、4体、とてもじゃないが目の前の敵を欺くには駒が足りない。ならどうするか？

簡単だ、15の分身に実体がいると思いきませればいい。

初撃が交わされる事を想定し、慎重な性格を相手に印象付け、分身体を出してから出来る限り均等に、且つ自然に不出来になるように虚栄を実体に仕立て上げた。

もちろん敵が水を媒介に分身体を作れたのは想定外だったが、今の一撃は明らかに敵の予想を大きく上回った。

その証拠に相手の雰囲気に静かな殺気がにじみ出ている。

その雰囲気に今の一撃が決められなかった事が悔まれるが、自分の役割は敵を倒す事ではない、勝率を模索する事ではないのだ。

要は此奴をネギ坊主達の前に出さなければいい。良くて手傷でも追わせられれば僥倖というもの、最悪時間が稼げればいい。

それに、一太刀にならなかつたとはいえ一撃にはなつたのだ。

騙す、虚を突くという行為にもっとも重要なのは流れと間の取り方だ。

決して陥らせた状態から立ち直らせてはならない。渦が周囲を巻き込むように、抱きこんだら溺れさせるように怒濤の如く、されど相手を僅かな間で疲弊させる為に休と動の緩急は波の様に時に荒く、時に緩やかに

確かにそれはとても容易な事ではない。だが、相手を自分のペースに引つ張り込んだらこちらのもの。そして流れを作り出す一投は先の一撃がその役割を果たす。

「……認識を改めよう。僕は君を侮っていた……ここからは多少は本気で相手しよう」

「それはそれは　こちらを引締めねば……」

敵は言葉通り先ほどとは段違いに臂力を籠めてくるだろう。傾いた流れを手繰り寄せる為に。

もちろんこちらにも早々に親を譲る気はない、場の流れを僅かでも有利に保つために今まで以上に気を引き締める思いでかかる。

(しかし、誠に割に合わせぬ役目でござるな)

まあ、自身とて囚われの彼女を助けたい気持ちは偽りははない。そもそも人数が増えたとはいえ敵の平均値に比べこちらの実力は五分と五分、つまり一人一人の力の差が大きい、何人かによって均衡が保たれた総量、故に、自身がこの少年を一人で抑えるには大きな

意味がある。

背後から取り出す長身である自身とほぼ同じ刃渡りを持つ一対の手裏剣を前に即座に十字に組みあげる。

敵はこうしている間にも驚くべき速度でこちらの手の内の先を行こうとする。

だからここからは正真正銘の全力、この身に持てる全ての技と力をつぎ込んで足止めする。

「……甲賀中忍 長瀬 楓、いざ、参るッ！」

既に数える事を放棄した剣戟は途切れることなく森に木霊する。

そんな中

「よ、ほ、た〜」

「フツ!!!」

敵の攻撃を掻い潜り、一刀の数の差を埋めるべく防御を捨てた捨て身の少女と楽しげに刃を振るう二人の少女の決着は依然と決まらず、一進一退の膠着状態が続いていた。

だが、状況に優劣が付かずとも両者の姿は明確な差を物語っている。剣戟の数で劣る為の自身の剣速を上げる為に防御を捨て、最低限の回避の身で反撃に出た少女の体は既に切り傷だらけ、片や服が破けて白い柔肌が顕わになるうともその白地が主に染まる事のない少女。体力的に見ても両者の消耗具合には大きな隔たりがあった。

「ふふふっええですなあ、血に染まった先輩も……一息に食べてしまつのがもつたいたないくらいキレイやわ」

うっとりとし溜息を洩らしつつ対峙した月詠に湧き立つ悪寒と叫びたくなる衝動を必死に抑える。

唯でさえ隙だらけに見えて隙のない、雲の様に掴みどころのない彼女は苦手な部類だ。ただ闇雲に突撃しても返り討ちにあつるのは目に見えている。

こうして捨て身の強行に出ても状況を好転させられない、その事実には振るう私の腕に重く押し掛かる。

だが、既にこの戦法を取った以上止まるわけにはいかない。

「ツツツ!! あああああ!!!」

ひたすらに、烈火の如く攻め込む。

止まる時は相手を圧倒するか自身が倒れるその時と腹に決め、今日この瞬間まで培った経験を、技術を、その全てをここに注ぎこむ。決して自棄になつたわけではない、遮二無二刀を振っている様に見えるかもしれないが一刀一刀に技術が注ぎ込まれている。その斬線と軌道に経験が活きている。

自分が辿り着くべき場所に、立塞がるのが誰であろうと乗り越える。その為に私は刀を振るい、走り続ける。

その無茶な軌道に腕が悲鳴を上げようとまだまだ立ち止まるには早い。高速で反応する身体に思考が置ききばりをくらおうが足を止めるのには及ばない。

滲む血に意識が薄れかけようと、理性が心に歯止めを掛けようと、立ち止まる理由には到底なり得ない！

走って走って走り続ける。

今この瞬間はお嬢様を助ける為でなく、いや、このちゃんを助ける。そのためにも、まず目の前の敵を打破する！

その為に

「これで ツ、斬鉄閃！！！」

死に体の様に鈍い身体から放たれた渾身の一撃は、虚しくも弾かれる。

その弾かれた一撃、だけど手に残る感触は確かな手応えを感じさせた。

「あらら」

少女、月詠が左手に持つ脇差。

彼女の真骨頂にして私が最も厄介にしていた二刀流、その一方の刀を僅かな隙に打ち砕いたのだ。

「自慢の愛刀が折られたのに、随分な落ち着きようだな？」

「いやですわ　　これでも結構シヨックなんですよ？長年扱ってきた二刀の一本、利き手の方やなかったですけど、そら傷つきます

」

軽い口調で互いに語るがそれも容易な話ではない。

二刀の技もあり、確立しているとはいえ野太刀を主流にした神鳴流にとって所詮は邪刀、本来我流の一刀でしかない。

が、仮にも青山本家の血筋である長に長年教わってきた自分が苦戦させられたそれは紛れもない本物となっている。

その幾多の剣戟を受け流し、往なすのは実力があるだけに困難だ。だからこそ選んだ捨て身の道、その末の結果だった。

「けど、本来神鳴流は武器を選ばず……この両手さえ無事なら何とでもなります。いざとなれば鞘を構えてもええですし」

「そうだったな……お前みたいなやつに相棒に対する機微を聞くのも無駄な話だった」

状況は武器を折った事でこちらに風が舞い戻る。

相変わらず肺が空気を欲して煩いぐらいに自己主張するが、不思議と身体は軽かった。

今なら勝てるそんな確信をもったその時だった。

「……これで

」

“ 刹那の姉さん！ ”

（この声は ）

“ カモさんですか？ ”

“ だよな、やっぱりこうしてちゃんと名前で呼んでもらった方がオレっちのやる気も ”

“ カモさん？ ”

“ あ、ああ、無事なようでもよかった。 ってそれより緊急の案件だ！
ネギの兄貴から ”

断線しかけた神経を総動員して目の前の敵の警戒と彼の話の理解に当てる。

何故かニコニコとこちらを窺うだけで一向に攻めてくる様子はなく、折れた刀を鞘に納めて地面に置く彼女に不気味な物を感じつつ距離を保つ事だけは忘れなかった。

そうして理解に至った“彼の作戦”、幾分穴があるように見られるが十分賭けに出るに足りる倍率、そもそも敗戦から駆けあがってきた身だ。少しでも勝率が高いのならそちらにかけるのは当然。やれる手は全てやりつくすべきだ。

“なるほど、分かりました。油断のならない相手ですが ”

「何の相談ごとですか？ 先輩 ？」

「ッ！ それこそ敵であるお前に言う筋合いはないな」

思考の先にあつた彼の存在を気取られた事に慌てかけた心臓を無理やり取り押さえる。

彼の役目は小さくとも重要、まだ終わっていないというなら尚更、この場は何としても切り抜ける時。

“必ず合わせて見せます！ 合図の方はよろしくお願いしますッ”

「なんや、そこの茂みにだけかおるんですか？」

「ヒイヒイヒイツ！！！」

「速く！！！」

「あらら、冗談のつもりやったのに……悪いことしましたかな」

「冗談か……それこそどうだか」

笑う彼女の表情はどこにでもいそうな少女のそれだが得体のしれない彼女の内面の一部を垣間見た私としてはあの瞬間の先に赤い何かが見えるのをぬぐう事が出来ない。

所詮は想像でしかないそれだが、彼女相手では当たたらかざるも遠からずといったところだろう。

まあ、その間見えた先に私が届かせる筈もない。

「構えろ……お前には最後まで私に付き合ってもらおう」

「わ　　なんや愛の告白みたいでドキドキします　　」

両手に堅く握りこんだ白木の感触、切っ先が相手の吭元を捉える感覚、それを前にして本当に恋する少女の様に頬を染める彼女はやはり常軌を逸している。

だが、あえてそこを問う事はすまい。

油断をしているのなら結構、楽しんでいる余裕があるなら大いに大歓迎だ。

私はその一瞬にお前を斬り伏せる！！

「そうか　　なら、この一撃受け取ってみろッ！！！！」

描く斬線を心持ち高く鋭く描くようにして、両足はしっかりと大地を掴み、身体を低く前に押し出した。

混乱する頭を必死に働かせて事態を呑込もうとするも視覚情報が伝える事実^に思考が追いつかない。

ゆっくりとこちらに歩み寄る黒尽くめの男、その事態にそれまでの立場を逆転させた一手が認められない。

“^{ちがすみ}血霞”は自分の切り札だ。確かに呪いを撒き散らし瘴気を蔓延さ

せる“放華”は血を代償に作り出している以上その生成量に限界がある。だがそれでも毒は毒だ、決して人が直に歩ける状態ではない。そして、いくら強力なアーティファクトといえど、あんな薄手の装甲に自分の呪いの刃が押し負けるなどあつてはならないッ

「なんなんやそれはッ！！！」

歩みを止めず、こちらの刀以上に不気味な気を立ちこめさせながら男は近付いてくる。

その雰囲気、思わず後ろに後ずさる己の足。あり得ない、先程まで圧倒してたのはこっちだ。

男が“外装”というそれを弾き飛ばした下から表れた“手套”はどつ見比べても貧弱、例え張りばてだろうと堅牢に見えた先程まの方がマシというものだ。現に男も身軽になった身のこなしから今まで以上に綺麗に避けて見せていた。だがそれだけ、結局のところ反撃にまで出られなかったのは変わらない、変わらなかった筈だ。

「見た通りさ。これが俺が扱う唯一にして“劉コイツ？手套”本来の能力、今まで使った“貯蓄”と“変換”は封をしていた外装による副次的な能力にすぎない」

「ク　ッ」

近付き続ける男に対してこちらは足に固いものを感じて動きが止まる。

急速に募る焦慮感、木の根かなんであつたかは知らないが、それによって何かの琴線が振り切れたかのように身体は前の怨敵に躍り出る。

だが

『エアバンプ
傳く大気』

「!?!」

見た、感じた、気付いてしまった。

刃が歪んだ目の前の空気に触れ、男が刀を掴み取るその一瞬、その一時に感じた虚脱感。

「流石に直に感じれば気付いたか？ コイツは大気中のエネルギーというエネルギーを喰らう所謂魔導生命体に近い存在だ。ま、使いようによつてはこんな感じで気・魔力的要素の抽出 お前の“血霞”とかいう魔装の呪いを喰らう事も可能だ」

そう、あろう事がコイツはウチの“呪い”を喰ったと言ったのだ。

それこそあり得ない。だが妙に納得している自分がある事に気付いた。それ以外に説明がつかないと言った方が正しいかもしれない。瘴気と腐敗した大地をもともせず踏み歩いた事といい、こうして刃に纏った呪いを全て喰らいつくした事といいデタラメ過ぎる能力。冷や汗ものの切り札。だがそれだけに解せない。なぜそんな強力な手を持つてこうなるまで使わなかったのか？

「はっ、いけすかん。なんでそないな強力な切り札ギリギリまで使わんのや！ そないなんもん会敵した瞬間にでも使えば楽やつたるッ」

冷静になれ。落ち着けなくてはこの勝負は切り抜けられない、この

相性は崩せない。

考える、初めに使わなかったということは使えない理由があったと見るべきだ。この負の感情を乗せて振るう“血霞”のように、あの能力にも何らかのデメリットがあるはずだ。

この状況、護衛対象である木乃香嬢を攫われてスクナも召喚された状況である以上出し惜しみはしていられる立場ではない、つまりそれだけ後手に回り、不利である状況でも使いたくない 例えばをつけるなら術者の代謝に著しいダメージを負わすものだから

「さてな、言う義理はないのは言わずもがなだが……自力で気付くうにもお前が理由それを知るには少々役不足だ。そして諦める、これでお前の切り札は封じた」

「は！ 馬鹿を言いつ、いくら呪いを吸収しようと呪いを食ういう事は結局毒を食らつとるとの変わらん！ そんな体であと何回ウチの攻撃を受けられる？ このまま放ち続けなければいずれ倒れるのはアンタの方や！」

「無理だな」

「なんやと!？」

「人の構造上不可能だと言ったんだ。お前の切り札とやらは血を媒介に呪いを形作っている。そんな呪いを少量とはいえ何度も放出し、俺の手によって一度は刀身一個分の呪いを喰われた……例え本人が死ぬ気だろうと体内の血液が不足すれば動きは散漫になりやがて動けなくなる。そうなれば暴れない患者を死ぬ前に延命処置を施すぐらい魔法使いにとってはわけない。それくらいの心得は俺にもある」

「ク　　ツ、て、敵に情けをかけられるくらいなら　　」

「舌を嚙んで死んでやる、か？　それこそ延命確率は高いな。仮にお前が死ぬ直前まで烈火の如く暴れようと全快の動きじゃない、そうなれば意識を刈取るのは今よりずっと容易だ……もう一度言っ。諦める、お前が呪装それを切り札とした時点で負けは決まっている」

「グッ、だとしても　　アンタに頭下げるのは死んでもごめんやッ！――！」

「そうか　　」

もう一度生成した毒ドロイを刀身に纏わせて、脚力を持てる気力の限界まで練りこんで駆けだす。
それは自分が出せた限界を超えた一撃だった。既に視界に霞みがかかった身で出せた全快時にも出せたかそうかというほどに、その一走一刀は紛れもない最高の一刀になった。

筈だった。

「　　残念だよ」

それがウチ自身が奴の声を聞いた、最後の言葉だった。
プラグを引き抜かれたブラウン管のテレビの様に、ウチの一時はあつという間の刈り取られたのだから。

取立42回目　く意地とプライド、それぞれの天秤く（後書き）

ども、そんな感じで42話をお送りしてきました。

ここまで来ると話したかった主人公のアーティファクトの能力もど
んどん出せるので書いてて楽しいです。あ、もちろんまだ全部じゃ
ないですよ？

そしてようやく決着が見えたり先が長かったりと展開もいろいろと
転ばせてきています。まだまだ登場していないキャラもいるのでそ
こら辺はお楽しみに！

取立43回目 く呪毒、清濁併せ吞んでく

『 石の槍 』

「クツ!!」

何も無い筈の空間から突如現れ、飛来する多角形の石柱。先端を鋭利に削られたそれはまさに凶器、だがそんなものではこのように苦戦を強いられる事はないしここまで動揺もしない。

何に驚かされたか、それは目の前の少年が呪術ではなく魔法を使えたという事実だ。

『 君は予想以上に強い。仕方ないね、僕も、こんな借りもの力じゃここまでか 』

『 強がりとは見苦しいでござるな。お主には、似合わんでござるよ 』

『 結論は急がない方がいい。早計は主たる敗因の一つだよ 』

ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト

『ッ!?! 隠し玉とは……本命はこっちか、随分と舐められていたよつでござるな』

『そうでもないよ。使い勝手が違うだけでそう練度に差はないさ。それに、隠し玉というならそれを出さざるおえない状況にされたんだ。出す必要が無いならそれに越したことはない』

練度に差が無い?

確かに梵字・サンスクリット語という西洋でいうところの始動キーのみで発動が可能な呪術に比べて詠唱に時間はかかっている。だがそれも微々たるもの、明らかに高速詠唱の前では大した差でもないむしろ構えや印が無くなった事でより流動的に体術を交えた攻めを繰り出してくる。こちらにとってどちらが厄介だというなら言うまでもない。

「ッ!?!」

そして、そこに無詠唱の魔法が加われば詠唱の時間的要素は皆無だ。腹に掠り、衣服の一部を搔つ攫った地面から飛び出ている複数の突起物を視界の端に、こちらに歩み寄って来る少年を捉える。

「差がないと言う割には、随分と達者なよつでござるな」

「実質的には差はないよ。使用頻度が違うだけさ」

淡々と返す言葉はその立ち姿通りに捉え所がない。いや、会話に必要以上に乗らないという事はこの数合いが無くとも出会った瞬間に分かっていた事だ。それでも言葉を切らないのはたとえ僅かでも時間を作る為、手傷の一つという考えは捨てている。欲を出せば瞬く

間に刈り取りに来る相手だ。

手持ちの忍具は手裏剣も折られてクナイが数本、接触前に仕掛けたトラップも使いきった。

体術で上回っている相手に挑むのは心もとないが、手が無いわけではない。それに引き際はわきまえているつもりだ。その上であと数分は時間を頂かせてもらう。

「それと」

「ッ!!」

「無駄な時間稼ぎはやめた方がいい。足を負傷してよく動いた方だけどね」

掴まれた首に打ちつけられた背の衝撃、受け身も碌に取れなかったそれは次の瞬間の反応を遅らせるのには十分すぎた。

「さあ、君にはここで退場してもらおうか」

「クッ」

「明日菜さんっ」

「分かつてる！」

スクナを泉から出さないよう囿の役目をかってでた明日菜さんと攪乱してどれだけが経ったか、杖で空を飛べる僕と違って彼女は地上を動き回らなくてはいけない。一見僕の方が負担が少ないように見えるが彼女の強化には僕自身の魔力を供給する事によって強化を行っている。時間の経過と共に彼女は体力的に、僕は精神的にすり減っているのは確実だ。

だが皆が揃うまでここに留めるのは大前提、彼らが何を目論んでいるとしても移動にはどうしても市内に出る。それだけはあつてはならない。

「はー……ネギ君も、明日菜もいい加減しつこいわ」

そう言つて召喚用の札だろうか？ それを数枚振りまき、簡素な呪文と共に呼び出された召喚魔で僕と明日菜さんを振り払いにかかる。正直これが一番厄介だった。作戦とは別にあわよくば明日菜さんのアーティファクト、ハマノツルギでスクナ自体を送り返せないかという目論見はあつた。そもそもあの巨体が返せるのか、召喚ではなく封印され、神格とも崇められた巨神に効くのかは定かではなかったが試す価値がないわけではない。

だが

「あ　っ、もう！　しつこいのはどっちよ！！　木乃香もいい加減目を覚ましなさいっ」

こうして一度もアタックできずにいるのが現状だ。

女術者の入れ知恵か木乃香が召喚した妖怪は割合的に明日菜の方に

多く向かう。

速いといっても巨体の割にという話、リーチが長い分返りが遅いそれは単体なら一撃程度は容易く入る、筈だ。筈なのに小回りのきく小鬼や翼をもつたものが襲いかかってくるせいでスクナに集中できない。今でさえ付かず離れず間合いを取って決して一撃を受けない事に徹しているそれらはなかなか数を減らせない。

そして、スクナの攻撃のほとんどは僕に向かってくる。

僕を倒す事で明日菜さんへの魔力供給を断つつもりなのだろう。おかげで彼女への援護になかなか手を割けず、時間を稼ごうにも5分とてもつかどうか、最低でも10分は欲しいのにこれじゃあ

ガシヤロク
我砂轆轤

「え？」

聞こえた声は自分の口から、それすらも彼方に視界が捉えた光景に驚愕した。

スクナの足元、そこを境界線に決して泉から出さないよう攪乱していた筈のそれが、泉の水が突然干上がり、渦を巻いた泥がスクナの両足をまるで這うように捉えていくではないか。

「なんか、随分と頑張ってくれちゃったようじゃないの、どうにも」

「音来さんっ」

背後、宙に浮いた自身の下から聞こえた声に視線を投げやれば、いつか見た巨大な籠手を身に付け、片手を地面に当てた彼がいた。

「わりいな、予定よりも早く来れたんだけど……」

「一体何が　その腕ッ」

近寄って僕が見たのはあの赤い籠手ではなく、まるで珈琲にミルクを落としたように白と真逆の黒い紋様が混ざり合うように所々が変色していた。

「ん？　ああ、ちいとばっかし吸い過ぎたけど動くのには支障ねえよ。っと、そうだ。コイツ預かっててくれ」

「支障はないって、そんな筈は　」

大丈夫だという彼の言葉にそんな筈はないと追求する前に、彼は背に背負っていた白い何かを投げ寄りこし　　って人！？

「うっ……え！　この人は！？」

「なんでこの女がいるのっ」

「ま、細かい説明は後回しだ。……俺も約一名にちよつと追求したいけどな　　とにもかくにも事情が変わってな、足止め役は俺が代わりにやらせてもらう」

拘束はしてあるので大丈夫だと言って渡された女の人は木乃香を攫った一味のリーダー格とも思われる女術者。

確かに意識はないようだがそれだけでは据えかねる。第一皆がそれぞれ敵を振り切るのは条件の一つだがまだ合図もなく、決めの一

人が配役を変えたいなどとそう易々と承服できる事態ではない。

「そんなっ、無茶です！ あれを止めるならみんな揃って体勢を整えてからじゃないと！」

「俺もそれがいいと思うけどねえー……敵さん等の實力考えるに足踏み揃えるのはちょっときついてもんさ。決めに入るなら俺より総量のあるお前が控えてた方がいい。それに、お前も仲間の實力を計算に入れて立てたんだろ？ だったらそれを信用してみな、あいつらはそんなにやわじゃねえし、多少のアドリブが入るのが戦つてもんよ」

確かに腕の負傷は一大事だがそれこそ足止めなんて出来るわけがない。敵の一人を打ただけで僥倖、そんな身体でこれ以上何かをさせるなんてとてもじゃないが許可できる筈もない。

だが、既に債は投げられた後、動き出した以上もう止められない。実際僕たちの手である鬼達に粘れるかは怪しい状況。

なら彼の言う足止めの間5分、いや、一分と言わず活路を見出す事に全力を注ぐべきだ。

「……分かりました、5分、いえ1分間お願いできますか」

「おう、隙見て木乃香搔つ攫うぐらいの気概でいな。まあ、一分と言わず5分程度軽く止めて見せるさ」

心配するこちらを気にした風もなく笑顔で僕の頭に、その敵つい籠手に包まれた手で乱暴にひと撫でし、表情を引き締めて上空を、鬼を睨む。

「さあ　行くぜつ、デカブツ!!」

負傷した筈の身体を物ともせず、頼もしさを感じさせる程の勢いで彼は宙を駆けだした。

「フンツ!!」

背後を取った鬼の頭上に組んだ両手を思いっきり振り落として底なし沼と化した湖に次々と召喚魔達を落としていく。

スクナを相手する前にした事は邪魔な小物の始末だ。かといって割ける魔力は極力減らしたい、なので先程スクナの動きを抑える為に作った泥沼に叩きこんで一時的に動きを封じる手に出たのだ。

沼と言っても魔力を編みこんだ特製の泥は水分も過分に吸ってその重量と粘性を増している。落ちた召喚魔がもがくその様にどこか“黒い台所の恐怖”を捉える　ホイホイに似ているなど阿保な考えを封殺し、作業を続行する。

「っと、うおっ!!　あつぶねえー」

が、もちろん肝心のスクナが黙っている筈もない。

10mを超す巨体鎮める為に作った沼も底が無い筈もない、それが

4つ腕の内二本を使って湖の縁を掴むようにして巨体を支えている。そうせざるおえない訳がある。沼は常に渦を描くように常に回転し、その土を巻き込んで深さを増して呑込んだ相手をすり潰していく。いくら頑丈な巨体と言っても自重より遙かに重い物に押し掛かれては堪らない。それを足元に感じたからこそ彼は両腕を塞がっても支える方を選んでいる。

もちろん残り二つの腕は依然健在、その上前後ほぼ360°をカバ―できる極太の砲門は塞がないのだからその回避にも気を割かなくてはならない。

「おお怖っ、って、ビビってる場合じゃないってな。っし！」

「Guooooooooo!!!!!!」

雄叫びをあげるスクナを視界から外さないようにして最後の召喚魔を撃ち落とし、一気に地上に舞い戻る。

途端に迫る腕、だがそれに臆する事はない。

「まずは一本　その腕貰っていくぞ!!」

地についた次点で網は既に投げられたのだから。

両掌を眼前で合わせ、仕掛けを作動させる。

細工は既にできている。後は念じたとおり、湖を形成する泥が中に躍り出す。

合図と共に沼の一部が盛り上がり、とぐろを巻くようにして腕に巻きついてその動きを拘束する。

しかし、内包された魔力の残量では大技は不可、先程の一戦に切り札の一つを切った上にこうしてスクナの拘束にほとんどの魔力を使ったのだ。やはり倒すまでの余力は残っていない。せめて足止めするだけの魔力が残っていただけでもありがたいが、今眼前でゆつくりと浮上してくるそれを前に幸運という考えは掠れる。

それに、後ろに控える仲間にあれだけの啖呵を切ったのだ。ここで踏ん張らずにいつ気張るっ！

「っ！！」

材料ならある。

ただそれを練り出すには非常に困難。

それもそうだ。“劉^{コイツ}？手套”はただ喰らう事しかできず、籠手が操る放出した魔法も外装が吐き出した魔力を形成して制御しているからにすぎない。

なら今しているこれは機能外、間違つて喰った腐った異物を吐き出すような感覚に沸立つ悪寒を吞込んで掲げた両腕が形成した砂柱に混ぜ込んでいく。

千草から奪った“血霞”の呪いを。

『リュウビノクローヤ
硫砒の黒槍』

毒を纏った四角柱の砂柱はその特性に沿うように徐々に捻じれだす。それと共に砂色が黒く染まっていき、やがて黒柱となったそれは細く鋭い槍と化した。

「仕上げの一本だつ、遠慮せずもらつてけや!!」

叫びは既に絶叫。

己の魔力どころか相手の、それも毒である呪いを無理やりに使役した事で毒が更に身体に回つて悲鳴を上げている。

辛うじて掴んだ槍の冷たさに意識を奮い立たせて大きく振りかぶる。掴んだ槍は色に変異しようともやはり元は砂、そして今もなお捻じれ続ける感触の取り回しづらさに苦戦しつつ視線だけは正確に狙いをつけ、全身の筋肉を収縮させる。

そして、狙いと呼吸が整つた刹那の時、一気に抑え込んだ力を弾き飛ばす!

耳に響く風鳴り音を残して拘束で対象に飛ぶ槍、狙つた場所へ寸分違わぬ軌道を描くそれを崩れそうな身体を支えて見届ける。

そして

「まったく、千草の呪いを受けた身でこんな一撃を放つとはね……
面白いを通り越して呆れるよ」

予想だにしなかつた光景。

必殺とはいかなくても十分な殺傷力を持った一撃はしかし、寸前の

所で乱入者によって停止させられる。

あれだけの豪速で放たれた一投を触れることなく空中で、完全に不自然なまでに止めた少年は相変わらずの無表情でこちらに視線を戻した。

取立43回目　く呪毒、清濁併せ吞んでく（後書き）

ども、そんな訳でお送りしました43話です。1時には出すつもりが遅れてしまいました。申し訳ありません！

しかしこの決戦も長いですねー……なんだかねで夏休み中に終わらせられませんでしたorz

まあ、金曜から始まると言っても授業自体は少ないですし、研究はありますけど時間はありますから！　なんとか10月中旬に学園祭編に入れたらいいな、っという所でまた次回です。ありがとござい
ました！！

取立44回目 くただ、あなたの為に

「はあ はあ はっ」

「あの、無理しない方が……敵も追ってこないみたいだし」

「だアホ、誰が逃げるかい！ 俺は、戦いに つ、むかっとするんや！……」

「でもその身体じゃ……」

「クツ、確かに一発いいのを貰ったわ。けどな、借りは絶対返す！
こんなもん唾でも付けとけば治るわっ」

「それより、姉ちゃんこそ無理に追ってくる事しないで。治療してくれたんは助かったけど、怪我しとるんやろ？ せっかく安全な所まで運んでやったのに」

「けど、友達が攫われたのに私は何もできなかったから。動けない程じゃないんだ。出来る事なんてないかもしれないけど、じっとしてなんかいられないんだ」

「……ケツ、勝手にしい！ 忠告はしたでっ」

「おいおい、マジかよ」

「……そんな身体でまだこんな技が放てるとはね。でも　　少々
技の相性が悪かったね」

パキリと停止していた黒槍に罅が入り、途端に砂に戻っていく。

黒槍、“硫砒の黒槍”は確かに純粹な魔法ではなく既存の砂をべー
スに魔法で網上げた槍だ。その投擲も俺本人の筋力によるもので魔
法による速度補正は低い。だがあれだけの質量を誇り、高速で飛来
する物体を突然現れた少年に易々と止められるなど誰が思おうか？

更に槍を砂に戻した手段。呪いを含んだまま砂との結合を分解する
事無く破った手法は単純な消失系は力で対抗した訳ではない事を物
語っている。つまり、魔術的な練度は相手が上という事。付け加え
るなら、魔力で編んだものとはいえ材料には“マテリアル血霞の呪い”を混ぜ
た毒槍、触れればたちまち相手を汚染し、障壁で止めたとしても瘡
気が襲いかかる。

その恐ろしさはこうして身に染みている。

そう簡単に分解できる呪じゃない筈だ。

サラサラと地に落ちる黒い砂を眺めながら静かに滞空する少年に背
に冷たい物を感じつつ、息をひそめているネギ達の位置を確認する。

(よし、今度は飛び出さなかつたか)

敵も視線はこちらに固定したままだが油断はできない。気付いていない保障などどこにもないのだ。

だが、時間は甘く見積もっても4分強、宣言道理にはまだ早いと体内時計が煩く騒ぎ立てる。

測りかねる敵の力に軋む両手を騙し、いつものもの調子で対峙し続けた。

「…………お前を足止めしていた女生徒がいた筈だ。楓をどうした？」

「ふ、どうした？ 向かわせた以上想定はしていたんだろう？ 僕がここにいるという事はつまりそういうことさ」

「…っ、そうかい。だったらこんな所でのんびり戦ってる暇はないな……………」

「……………」

「さっさと倒させてもらおうぜっ」

例え倒されたとしても楓もそう易々とやられはしないだろう。仮に手傷を負わされて動けないのだとしたら救出は早い方がいい。

温存もそこそこに全力でかけた瞬動で背後をとる。

「どつやら、千草も思ったよりうまく立ち回ったようだね。動きに昼間程キレがないよ」

「チツ、言ってるっ!!」

防がれた頸椎を狙った右手刀を掴む受け手を蹴りで外し、大きく距離を取る。

「クソっ」

一撃で抑えられるとは思っていないが、ああまで完璧に取られちゃ気持ちも逸る。そもそも得体のしれない野郎だ、これ以上時間を掛けたくないって時に嫌な奴が来てしまった。

「音来さん!!」

「バカツ、なに出てきてんだ!」

声に反応すれば湖の反対へ向かわせたはずのネギ達がこちらに駆け寄る姿。

その後ろに

「っ!?! 後ろだ!!!!」

『石化の邪眼』

聞きなれない、恐らく古代ギリシャ語と思われる高等呪文。辛うじて聞きとれたのは最後の詠唱、だが時は既に遅く、放たれた邪眼の光は彼らに襲いかかった。

「てめえッ!!」

明らかに追撃を狙ったフェイトを遮る為に駆けつけようとした足に

ブーストを掛けて一撃を見舞う。

が、難なく避けて泥の湖面上に沈むことなく着地するフェイト。その何の感慨もない表情には殺意さえ覚える。

「フツ　　らしくないね“雷帝”」

らしさなんて知ったことかと両腕の魔力を狙いも定めず投げ捨てて爆散させる。

「クツ、ネギツ！　あす　　な？」

力任せに張った煙幕、油断はできないが立て直しが先決だと攻撃をくらった二人に振り向き

「だ、大丈夫？　ネギッ」

「僕は大丈夫です。それよりも明日菜さんがっ」

ネギを庇う為に覆いかぶさっていた明日菜が起き上った。

「大丈夫ってお前、直撃した　　ってそうか！」

マジックキャンセル
魔力無効化能力、そのアーティファクトだけではなく明日菜本人にも備わっている稀有な特殊能力。

魔法、いや魔術を扱う者にとって天敵ともいえる発現した筈の力を無に帰す力、どんな強固な呪文だろうと障壁だろうと触れる全ての魔の力は彼女の前に無力。

今のフェイトの攻撃、明日菜の服が灰色に変色して碎け散った事が

ら石化の系統の魔法だったのだろうがそれさえも本人には効いていない。

本人にその事が分かっていたのかどうかは知らないが、今の咄嗟の反応と行動は並みじゃない。

（本当に一般人だったのかよ……いや、そんなの後回しだ、今は）

「てめえは、水差すのもいい加減にしやがれ!!」

「むっ」

再度襲来した邪魔者の一撃を弾いて投げ飛ばす。

本当ならそのまま腕の一本は貰っていくかけ方だったが逆らわず自ら飛んだ事と奇怪な動きによって空中で綺麗に技を外されてしまった。

「音来さん!」

「すまねえなネギ、一発そっちにやっちまった」

「そんな! あれは僕たちが飛び出したからで」

謝罪を言いかけるネギに手をかざしてその先の言葉を遮る。

状況は依然として不利。

目標である木乃香奪取に王手は今だ掛けられず作戦を仕掛けようにも想定外が続く展開。

こっちは戦力である術者二人がスタミナギリギリに唯一健在……とは言い難いが一応無事な半裸の明日菜。

更には仲間内で楓の安否が不明なのが痛い、状況不明なら刹那も一緒だがこうして目の前に相手である筈のフェイトがいる以上判断材料的に不安が大きい。

こうなると念波妨害で距離的に連絡が取れない状況に焦りが出てくる。今は伝令に走っているカモが頼りだが……こっちはこっちでピョンチなものには変わらない。

「お互い言いたい事はあるだろうが、アイツはつえー……正直面子云々言ってる場合じゃねえなこりゃあ」

「じゃあ」

「ああ、格好つけといてザマネえが……抑えるのに手が足りねえ、いけるか？」

「ハイツ！」

「うし、いい返事だ！」

「え、あたしは？」

振り返ると肌蹴た胸元を隠してしゃがみこんでいた明日菜。その状況からどう見ても戦いに参加しろと言ってもNOと答えられそうだが……

「なに呆けてやがる。……ま、場所が場所なら痴女と間違えられてもおかしくない格好だが」

「しょ、しょうがないじゃないあの場合っ、てか何見てんのよあ」

はためいた外套、空間から取り出したそれを明日菜に被せてフェイトがいる方向に向き直る。

「わりいな、使える戦力は出し惜しみできる状態じゃねえんだ。それで我慢してくれ」

「あ、あんたこっち見たら先ぶっ飛ばすからねっ」

布が擦れる音から身体に巻きつけているのだろう。

正直、かさばる布が増えれば相手にとって付け入り易くなるだけなのだが、文句をつけられるよりはマシか。

一応保護能力を備えた代物ではあるが、身につけたら例の能力が発動するのでは、っと気付いたがもう後の祭りだ。

「ヘイヘイ、頼まれたって見ねーよ」

「っ！！」

……見ないと答えたのに後頭部を思いつきり障壁貫通ハリセンで叩かれたのにはどうにも納得しかねるのだが。

が、なにか言い知れない圧力に黙らされてしまう。

再開してからこのかた、パーティー内のヒエラルキーが暴落しているような気もするが、気にしたら負けなのだろう。

気を取り直し、明日菜が用意できたのを気配で確認して一応に牽制していたフェイトに重きを置き直す。

「待たせたな」

「別に、待ったつもりはないよ。下手に飛び込む気はないからね。さっきの襲撃が失敗した時点でその手は諦めたさ」

二度も強襲しといてよく言う。

依然として有利と確信しているからこそその余裕。が、悔しいが事実崩すにも不利な状況は相変わらずだ。

もともと、だからといって諦める奴はこの場には一人もない。

「そうかい。なら、こっからは全力で行かせてもらうか」

「その身体で全力も何もないと思うけど、君達には計画を狂わされてばかりだからね。悪いけど、油断なく潰させてもらうよ」

「ハッ、行くぜ！ ネギッ、明日菜！！」

呼応する二人の声を背に受け、駆けだす足と練り上げる両腕とは別に手順だけは脳内で組み立てる。

作戦を打ち合わせる時間はない。目の前の敵はそんな間を許す程優しくはないのだ。

ネギが立てた一手にもっていく為にも、この一戦を何としても打倒する。堪えるなど防戦的な戦術は止めだ。

この戦いは今まで散々後手に回り続けたんだ。今度は攻勢に出させてもらう。

「……次、そこから北に四本行った先の　　そう、それだ」

視界の先、約500m先に差し掛かっていた木の枝がノイズのかかり始めた返事が届くとともに指定通りに払い落される。

それは本来障害物足り得ない些細な物。だが、状況が想定してきた中で最悪の物に傾いてきているのだから少しでも成功率は追求すべきだ。

絞りかけた引き金にかけた指を心持ち弱める。機がすぐそこなら例え一瞬でもあれば事をなす自信はある。

今とっている構えもその為のもの、車から引つ張り出し、ここまで苦勞して運んできた獲物の有効射程距離は1000m強、当てるだけなら2000mは軽く越せるが速度も殺傷能力も著しく下がる。弾の効力を考えれば殺傷能力は最悪落としても構わないが速度まで低下してしまつては意味がない。

周囲を徘徊する低級の召喚魔達を誤魔化す為に足場の悪い木の上で射撃ポイントを探さなくてはならなかったのは苦勞したが反動を抑える為にワイヤーで簡易固定を施したし、消音用の結界も施してある。

といつても、これだけの重量級の獲物の一撃、居場所がばれるのは避けられないだろう。もとより狙撃は一撃目こそ肝要、外す

つもりなどさらさらないが……

『龍宮には古菲とここに残って欲しい、それぞれがターゲットに集中する為にも保険が欲しいんだ』

『私も残るアルか？』

『古菲は龍宮の警護にあたってくれ。射撃の瞬間は一番無防備だからな。まだ周囲には小鬼達がうろついている。合流をスムーズにするためにも今回は我慢してくれ』

『うー……わかったアル』

『OK、報酬分は働かせてもらっつよ』

『ああ頼む　　つとそうだ。龍宮、これ　　もしもスクナっていう鬼の封印が解除されたら本業に専念してくれ。タイミングはそっちに任せる。合わせるのは得意だろ？』

『随分とまあ豪放磊落な注文だね^{オーダー}』

『茶化すなよ、信頼してるからおまえに頼んでるんだ』

『まったく……高額報酬がいやならきっちり抑えればいいだろうに』

『どっしたアルか真名？』

『いや、何でもない。それよりも次の障害物だ』

現在古菲には木の上を移動しながら障害物を出来るだけ排除してもらっている。普段なら自前でこなす作業だが居場所が移動できない今はありがたい。

それに彼女はあまりじつとしていられない性分だ。唯でさえ下にいる人生初の異形の者たちに触発されているのに警護と退路確保だけでは酷だろうとの判断だ。

「……真名、やっぱり下の奴らも少し蹴散らした方が」
「だめだ」

「あう、即答アルか……」

耳に当てた通信機に返ってくる落胆の声に彼女が肩を落としえている姿がありありと浮かぶ。まあ、だからと言って許可する訳にもい

かないが
「む、あれは」

視界の先、監視していた対象の一つであるデカブツの向こうに、遠目からでもはつきりとわかる光源が一つ、特定回数 of 明滅を繰り返していた。

「……喜べ古、合図だ。一旦こっちに戻ってきてくれ　　状況が動くぞ」

そろそろ通信限界かと思われた状況と古本人の忍耐に限界が来たかという正にその絶妙なタイミングでの合図。

彼女にこちらへのルートを指示した後、私は予定通りの仕事を完遂する為に心持ちスコープに当てる瞳とトリガーを絞る指先に力を込めた。

「！！ あれは ネギ、明日菜！」

「あ！」

明滅する光信号、敵に悟られるのではという程に明確な発光は確かにこちらの目にも届いていた。

（来たっ、合図だ！）

「行きます！ ラ・ステル・マ・スキル・マギステル 」

「何を企んでるのか知らないけど 」

もちろんこれだけ接戦を繰り返した敵も何か仕掛けるとは感づいている。だが、その表情は依然として石の様に固く、不動のまま指先に魔力を収縮していく。

「結局は無駄に終わるんだ。諦めた方がいい」

「そいつは、どうかな！ うらあ！！」

虚をつけたかは怪しい背後取り、だが相手を打ち取るのにこれだけで手が足りないのは先刻承知、反撃への連撃はここから始まる！

当然、フェイトは余裕を持ってその襲撃を迎撃するべく先程俺を迎え撃ったように手に魔力を集中させ

「その程度、奇襲には程遠いね。石の」

「エアバンブ傳く大気」

今まさに振り上げようとする魔力の塊を奪い喰らった。

「っ!？」

「いけ！ ネギ!！」

「はああああ!!!！」

唯の右ストレート、魔法はその強固な障壁によって通す事かなわな
いが、近距離ではその限りではない。更にその程度は撃ち返せると
絶対の自信があったのだろう。

だが、迎撃の一手であった“石の槍”を俺に挫かれ、ネギとの対角
から討ちこんだ明日菜によって障壁を一時的に粉碎。

結果、迎え撃つのにワテンポ差が出来た事により、この攻防に僅
かに、こちらに軍配が上がった。

「……………拳を入られたのはこれが初めてだよ。ネギ・スプリ
ングフィールド」

明確な、濃密度の殺気を隠すことなく刃を喉元につきつける様に放つフェイト。だが今更怯むこちらではなく、どうだと言わんばかりに杖を向けるネギを筆頭に継続されるだろう次の一手に備える。

「へっ、残念だったなっ、今更躍起になってももう遅いぜ！」

「カモ君！ いつの間に」

するとその場に今まで伝令に湖の周辺を全力疾走していたのだろうカモが主人の肩に戻っていた。

ネギの一撃が決まって調子に乗ってきたのだろう。明らかに口調と鼻息に弾みのかかった口上に味方ながら調子のいい奴と口元が笑いかけるがこの場は自重、それよりも彼がこの場に戻ったという事はつまり

「上を見なっ」

そこには暗い夜の空に浮かぶ白い腕を大きく広げた少女が、自身の主にして大切な人を抱えて舞い降りた瞬間だった。

「カモさん、お願いします」

「あいよー！」

マグネシウムの上にライターを使った魔法というにはどうかという手段で用いられた合図は調った。

彼の話では先程まで二本の腕が音来さんの術で泥沼と化した湖に沈んだと言っていたが既に腹のあたりまで浮上している。

対してフェイトと先生たちの状況は膠着状態、だがそれも体力的にも精神的にも消耗しているこちらはいつまでも耐えられる話ではない。つまり猶予はもう残されていない。今をおいてこれ以上の好機は訪れないだろう。だから、このチャンスを逃すわけにはいかないのだ。

それは例え私自身が忌嫌うコレを使う事になってもだ。

「じゃあ俺は兄貴に合流するっ、本当にこっちは一人でいいんだな？」

「はい、信号はそのように、既に覚悟は決まっています。カモさんも急いでくださいっ」

迷いは、既に置いてきた。

そんな時間はとうに過ぎている。

心にけじめをつけて、恐らくこうなる一端を担ってしまった自分の過失を償う為に、私は大鬼の身体を一気に駆け上がる。

「あ！ せつちゃんや、こんな所まで会いに来てくれるなんて嬉

しいけど、ごめんな今手が離せんのよ。この、泥、烏糲とろもちみたいにしつこくて……」

不自然なまでに曇りのない笑顔が痛々しい。これも私の過ちから始まった事。

大丈夫だ、覚悟はできている。例え救出した後嫌われようとも、彼女をこのままに逃げ出す事だけはしてはいけないっ。

「お嬢様、いえ……このちゃん。もう、終わりにしましょう」

なんと、嫌だときっぱりと答える彼女は懐からいちまいの札を投げやって顕現させた小鬼をこちらに睨ける。

だが、その程度の鬼を屠るのに難などない。何故か重く感じる愛刀の重みを、無理やり振り払うように一刀のもと斬り伏せる。

そして、切っ先を……救うべき彼女に向けた。

「……申し訳ありません木乃香お嬢様。私は、お嬢様を救う為に剣を取りますっ」

「救う？………ぷっ、あは、あははっははははは」

突然壊れた様に笑いだした木乃香。

それはまるであの千草の様に狂気を孕んだ、感情の壁が決壊した様な直視に耐えない笑いだった。

「ウチの救いは今！ このスクナが叶えてくれる！！ 長い間そっぽ向かれても必死に我慢した！ 何度避けられていると分かっても諦めきれへんかった！ 疲れたと思ったけど必死で笑って話し続け

たっ、だつて、せつちゃんはウチが笑っている方が好きや言うてくれたからっ」

壊れた笑みを顔に張り付けたまま頬を伝い流れ落ちる雫、それは私
が彼女に流させてしまった罪の証、拭うにも事実が突き刺さる。な
によりも堪えた。

だが、今度は対峙したまま、突きつけた刀を下げる事なく、私は彼
女の言葉を受け止め続ける。まるで鋭利な刃の様にこの身を削るそ
れに挫けそうになるが、ここで折れる事は決して許されない。

私が膝を折る時、それは彼女を救えず全てが終わる時だからだ。

「なのにつ、なんでなん！？ いつもいつもいつもいつもい
つもいつもいつも！ 通り過ぎるだけで答えてくれないっ！
声がかれるくらい叫んだのに、ウチはただ昔みたいにただ一緒に
いたかっただけやのに　っ、せやから、ウチはもう待たない。
欲しい物はこの子を使って全部手に入れる！！　ただ笑って待つ
はもうたくさんや！！！」

「もう、止めてください。スクナはしばらくは動ける状態じゃあり
ませんっ、もうこれ以上は　」

「スクナが動かんでもウチにはまだこの子らがおるっ」

懐から取り出された札の束から召喚される妖魔、その中に

「……烏族、か」

痛む記憶、だがその感情すら置き去りに、心を決めた刃は思考する
より早く、事をなす為に動いていた。

「　　つ、邪魔を、するな!!」

まるで彼女との壁を現すように周囲を滞空する彼等を一体一体迅速に切り捨てる。

だが

「調子に乗るなよっ、小娘!!」

「クツ!!」

落ちていく。彼女と同じ位置から。

遠ざかる。彼女を救うべきその場所から。

見てしまった。笑みすら消え、涙するその姿を。

「っ!!!!」

何を躊躇っていたんだ私は!

既に決めていた事、何度も挫けてその度に皆が立ちあがらせてくれた。背中を押してくれた事でここに立つ事が出来た。

何より

彼女の、このちゃんの涙を見て踏みとどまるなど、護衛以前に友人としてあの日々を胸に駆け抜けた自分にとってあり得ないっ!

「なッ!？」

「白い翼っ」

「貴様っ、忌子の……生きていたのか！」

小鬼達を除いて、追撃する為に滑空してきた烏族達に動揺が走り、その中の頭目と思われる一体の言葉が私の古い記憶を、傷を掻きむしる。

「そっだ、私自身この身を、この両翼を今日まで嫌ってきた」

「当たり前だ！ 我ら烏族の異端児がっ、なんのつもりだ！」

「今更あの時の扱いに異を唱える気などない。ただ、私の大切な人を呪縛から解き放つ為に、コレは力の一つとして揮わせてもらう」

「傲慢なっ、なら、我らが掟の名のもとに疾く消えよ！」

一斉に襲い掛かってくる烏族達。

だが不思議だ。あれほど恐れていた、自分にとって嫌っていた記憶の象徴である烏族と直面し、その力を開放しているというのに、身体は少しも淀みがない。

翼の力か、振るう腕は羽の様に軽かった。

「なっ!？」

「すまないが、今の私は烏族である前に神鳴流の一人の剣士、彼女の守り刀として貴様らとの過去に煩っている暇はない」

散る彼らに過去と決別する。
もちろん全てを清算しきれぬ程割り切れているかは断言できない。
が、今この瞬間においてそれは迷いとして認識されない。

両肩の延長が力強く羽ばたき、彼女の、木乃香お嬢様のもとに再度
舞い戻った。

「お嬢様、これで終わりです」

「こ、来ないでっ!!」

既に札が尽きたのだろう。

懐から取り出したのはあの時の黒い短刀。それが差し向けられた事
がまるで今の私の姿に拒絶を現している様で歩み寄る足が竦む。

だが、それは彼女にも同じ事だったようで、歩みが竦んだ私に対し
て必死に距離を取ろうとするその足取りは覚束ず、見るからに危な
げで

「きゃっ」

「っ！ お嬢様!!」

次の瞬間に傾いた彼女へ私の体は考えるまでもなく飛び込んでいた。

「あ　　っ」

「ぐっ　　っあ」

胸に感じる熱、全身をむしり取られる様な激痛が襲いかかり、私の意識を刈取りにかかる黒い楔。

まるでそれが私の罪に充てられた罰であるかのようなその痛みを、私は心を落ち着けてただ享受した。

「あ、ああっああああ」

「ごめんね。このちゃん……」

だが、受け入れたとはいえここで倒れるわけにはいかない。

目の前の、自分の赤く染まる手を眺めて震えている少女をそのままにはしておけない。

私は震えて熱が失われかけた手で彼女の手を丁寧に解きほぐし、抜いた短刀を投げ捨てて、捨てられた子猫の様に震えている彼女の背中を抱いた。

「泣かんでええよ。この通り普通の人より丈夫な身やから……このちゃんに味遭わせちゃった事に比べたら事程度、痛みの内に入らんよ」

「せ、せっちゃんっ」

「うん」

「ウチ、ウチっ」

「このちゃんは何も悪くない、ちょっと悪い夢を見ていただけや。

ごめんね、ウチの所為で

っ

「せつちゃん!!」

わんわんと泣く彼女はまるで憑き物が取れたかのように、いつか見た守ろうと決めた少女と違わない涙をこぼしていた。

痛みに歪みそうになる顔を必死に堪えて抱く腕の力を強める。

もう涙を流させないと決めていたのに、二度も流させてしまうとは……つくづく私は護衛として失格だ。

「大丈夫。このちゃんが次に目を覚ましたら、全部終わってる……だから今は寝むっという、な？ あとは、怖い夢はウチが全部やつけておくから」

胸の中で涙を溜めた瞳がこちらを見上げ、嗚咽を漏らす愛らしい少女のまぶたの上に掌をかざして呪いを唱える。

全ては今日この日の出来事を夢物語とする為に、そして彼女に修学旅行の最終日も迎えさせる為に、それが彼女の剣となると決めた私の、最後の仕事なのだから。

途端に重くなる身体に鞭を打ち、最後となるかもしれない腕に抱いたスヤスヤと眠る少女の髪を陶器を扱うように丁寧に、大切に一度梳いて静かに羽ばたく。

吹きつける大気の冷たさに意識を繋ぎ、ゆっくりと降下して行く。眼下の先には彼らが、私の背を押してくれた人達が待っていた。

取立44回目　くただ、あなたの為に（後書き）

ようやく、ようやく大きく動かせました本編！　ども、私情によりなかなか投稿できなかったトントンです。いや、ほんと申し訳ないです。

ですがついに修学旅行編もラストスパート！　この決戦も断言できませんが次回完結できそうです。な、ながかったー……あ、この後、つまり決戦後はネギ達とは少々別に主人公主体のオリジナル（過去話？）がようやく入ります。ここまで長かったです。骨組み自体はどうか次回から過去編にかけては去年の11月あたりから先に考えていたのでその気持ちもひと押しです。

さて、そんな感じで次回も続くのでどうぞお楽しみに。今回も最後までありがとうございます！

取立45回目　く罪過の咆哮く

「刹那さん……その背中……」

白い羽、朱に染まる衣服に対してなお純白を誇るその両翼は彼女の誠実さと純真さを表しているようで目に眩しい。

反面、本人は悲痛な面持ちで、これから親に叱られる幼子のように表情に影がかかっていた。

「はい、これが私の正体です。皆さんに隠していた、出来れば最後まで知られたくなかった事です」

人と妖魔の合の子、部族の中でも禁忌とされ迫害を受けたこと、木乃香にさえ黙っていた隠していた事だということ。

それらの告白が全てを語っているとは思えない。今の今まで使うのを躊躇った力、本人が望まない力が引き寄せた過去の孤独を全て独白などでできようはずもない。

それに、時間の猶予もないこの場で会話が成立するはずもなかった。

「　　っ、生徒の一世一代かもしれない告白に水差すんじゃないやねえよっ！」

動く気配を素早く察知し、相手が攻撃のモーションに入る前に今度はこちらが襲撃を仕掛ける。

当然易々と受け止められるが今のあいつらには少しでも時間が必要だ。その間を稼ぐのも俺の役目っ

「何を……そう何度も僕が待つはずもないし、待つ義理もない
フン」

「くっ　　っ、この、KYめっ」

繰り出される蛇を連想させる独特の動きを軋む身体に鞭を打って全力で捌く。

だが、魔力を喰らったといっても千草の様にそれが致命傷になる相手でもなく、接近戦を難なくこなす技の練度には舌を巻く、正直全快時でもその後れを取るかもしれないその動きにいつまでも対応しきれぬ筈もなかった。

「!?　グッ」

「何とでも言えばいい。確かに見事な囷役だったよ。でも、戦力の内火力である魔法使いの二人は体力が底を尽きかけ、前衛である彼女もお姫様を救い出せたようだけど既に死に体　ああ、黒刀で刺されたみたいだね。そういえば君も千草の呪いを喰らったままだ。そしてその彼女、妙なハリセンを持っているようだけど、戦場はその程度のアドバンテージで生き延びられるほど幸運は続かない。おとなしく下がったほうが身のためだと思うけど?」

崩れた防御に立てなおす暇なぞ与えてくれる相手でもなく、

「　　っ、ハッ！　てめえこそえらく饒舌じゃねえか。けどそっちもわかっているのか？　戦力の上じゃこっちが上、お前一人から逃げ切るくらいの余力はある」

「君こそ、一つ大事なことを見落としているんじゃないのかい？」

「何？」

「君の渾身の一撃、それがなぜ防がれたのか、よく思い出してみるといい」

「ッ！？」

思考する間もなく答えは直ぐにやってきた。

背後に聞こえた雄叫び、逆回転を始めた泥沼の中を、ゆっくりと浮上し始めたスクナの姿がそこにあった、

「そんな　っ」

「僕自身ここまで計画を邪魔された以上逃がすつもりはない。けど、さすがにその人数じゃ確実とは言い難いからね」

「スクナを使役するつもりか？」

「使役？　まさか。僕にそこまでの魔力は存在しない。だけど、君たちにはそこのお姫様を連れ去ったことその身で後悔してもらおう」

言葉と共に彼が指を鳴らした直後、その背後にいた鬼に異変が起こる。

スクナを“我紗轆轤”から解放している筈の少年を鬼はその振り上げた腕で叩き潰したのだ。

「な、なんだっ」

「……スクナは神格とまで崇められた大鬼、気性は荒く、とてもじゃないけど自分より下位の人間の言うことなんて聞き分けはしない。僕達の仲間の中でも底にいる彼女ほど使役するというに値する術は持ち得ない。つまり、彼女はアレの制御装置だった。その彼女がいなくなればどうなるか、ブレーキの壊れたトラックと正面にまみえると思えばいい。まあもつとも　質量がけた違いだけだね」

ぴちゃりと音を立てて浮上した分身と思わしき虚像の少年。

だが今の一撃ではつきりした。この場で既に逃げるといふ選択肢が欄外にあるという事を、退路なんてどこにもないという事を。

「君たちにはここで消えてもらう。後々の障害になりかねない不安材料目は今ここで刈らせてもらう」

確かに彼にはスクナを使役する事など出来ないのだろう。だが動物が本能的に弱者を飯の対象とするように、今この場で真っ先に鬼が潰しにかかるのだとしたらどこからどう見ても満身創痍である俺達において他為らない。彼には最悪身を潜めてスクナに全てを任せるといふ手がある。例えこちらが身を隠す事に徹したとしても、彼の技量ならあぶり出すことぐらいわけないだろう。

「みなさん下がってください　っ、後は私が」

「ちよ、刹那さん！　いくらなんでも無理よ！」

だがそれはさしたる問題ではなく、むしろ肝心なのはその鬼をこちらまで吹き飛ばしたと思わしき少女。

森の入口で呼吸を整えて構えを解く褐色の少女とその背後からゆっくりと歩いてくる少女の二人組。

「あいや　飛ばし過ぎたネ」

「問題ないさ、むしろ彼らに加減など必要ない」

右手に提げていたライフルをくるりと回し、銃口を方に乗せた少女はこちらの状況を見てしたり顔の笑みを浮かべた。

「やつ、待たせたかな？」

「……いや、ジャストタイミングだ」

本当に、ここぞという時に大局を見誤る事のない仕事をやってのけた彼女、いや彼女達。

差し出された手に引き起こされながら確かに反撃へとつながった攻防にようやく感触をつかめた。

「さあ急ぐぞ。あの拘束も長くは続かない、一刻も早く」

頼もしき戦友は素早く仲間の容体を確認して一番重症と思われる刹那に肩を貸す。

術で眠っているらしい木乃香は古菲が、明日菜がネギを支えつつ準備を整えた。が、まだここから対比する訳にはいかない。

「ああ、それなんだけど……先に行つててくれ。」

「え？」

「龍宮、追加だ。コレも……持つててくれ」

スクナは封じた。これにより自分達の生存確率は一気に跳ね上がる。何しろ相手をするのはあの厄介な少年のみ、これなら俺だけでも十分足止めできる。

その旨を伝えると納得半分不満半分、要は俺の提案ではまともりはなかった、という事だ。

「やっぱり僕も残ります！ 限界というならここにいる皆は疲弊していますっでも、皆で補えば」

その中でも筆頭なのがネギだ。

確かに状態だけで見ると彼は明日菜の次に傷が浅い。もちろん昼間の戦闘の際の傷は癒え切っていないだろうが、何よりも責任感の強い彼からしてみればこの事態に俺を残して引くという事に納得が出来ないのだろう。

だが、この際彼の要求は全てカットする。

「大丈夫だ。刹那があんな決断をしてまで木乃香を助け出したのに、教師の俺が逃げ腰じゃあ格好つかないだろ？」

「それなら、僕だつてっ」

「ネギ、お前はこいつらの担任で一俺もお前も番責任のある立場だ。

何度も言うが彼女達の安全を保障するのが最優先、木乃香を助け出した以上これ以上戦闘を続行する意味はない」

まともにも動けるといふなら尚の事、既に回復した分の魔力を使いきった俺より彼を後に残す方が利口だからだ。

「それに、どっちにしても殿は必要だろ？ 余力のあるお前が明日菜達を守れ」

「っ」

歪む顔は彼の葛藤の様がありありと浮かんでいる。

だが納得できなくても行動を起こさなくちゃいけない時なんて腐るほどある。俺などより遙かに利口な彼ならこの状況で通すべき道理は嫌でも理解出来ているだろう。

だから、後を任せる事には問題はない。

あるとすればそれはやはり

こうして敵と対峙したまま動けない俺にあるだろう。

唯一の救いはこうして対峙する事で敵への形だけの牽制が出来ている事か、こればかりは日々の任務の賜物、無茶なスケジュールを組んでくれた誰かさんとそれを乗り越えてきた経験に感謝をしたなる。

でも、やはり。

覚悟はできたつもりだったんだけど、いざ使うとなるとどうしても

足が竦んでしまう。

彼女もこんな気持ちで、身が裂ける思いで下したのだろうか？

「……………限界、か」

形が綺麗であるほど綻んだ時は脆い、いつまでも隠し通せるものではないぞ

ポツリと、恐らく背後の身内の耳には届かなかった独白は続く。

ふと脳裏によぎったのは何時か従者を經由して伝えられた言葉で、修行の合間に本人から言われた忠告でもある。

もしあいつらと一緒にいたいのなら使うべきではないと付け加えられて。

「全くだよ師匠。先人の言うことはちゃんと聞くべきだったな」

もちろん俺だって使う気はないしリスクの多すぎるこの手札は正直切りたくない。

自身で考えられる最悪のケース、夜な夜な悪夢に見た幻想が何度も脳内でリプレイされる。

だけど

「けどわりいな、あなたの弟子は利口なタイプじゃないんでなつ、忠告、破らせてもらう！」

生徒にあんな姿見せられて、先生がブルオレってるってのは無しだ！

不安も恐怖も、心の弱さという全ての負のカテゴリーを無理やり自身の奥の方に閉じ込めて封をする。
子供騙しの様な、治療にもならない行為だが今は出来る事は全てやると決めた。

そして、ウチに内包された固く閉じていた筈の錠前を豪快に外し、内包された異物を開放する。

途端に漏れだす魔力の本流。
とても枯渴寸前だった人間とは思えない量のそれは紛れもない俺自身の魔力、そしてその中に徐々に混ざり出す異物をゆっくりと受け入れる。

「ちよつ、わぷ！」

「なんだこの魔力は!？」

「音来さん!」

耳に残る不安に震えた声、

「 さっさと行けっ！ そんな所にいられちゃ戦いにくいんだよ
！」

渋るネギを龍宮が諭し、徐々にその場から離れ出す面々。

口から漏れるのは強がりだと明らかにわかるだろう言葉。

そんな言葉を吐きながら、やはり見られなくなかったと思う自分がいた。

「行かぜ鉄仮面っ……冥土の土産にいいもん見せてやる。けどな！
コイツの見料は高くつくぜ！」

『ス　　っ！
チエンジ・ドラゴニョート
龍人変化！！！！』

途端に広がる全身の変化、既に放出された魔力は俺を中心に渦を巻き、余人を寄せ付けない鎧となっている。

“劉？手套”と起点に徐々に浸食される様な悪寒を感じながら、ようやく変化を終えた俺は人の感覚では感じられない鈍感な皮膚感覚を振り払うように腕を一閃し、外気を切り裂いた。

鱗の様、ではなく鋭利な鱗そのものが全身の体表を覆い、伸びた牙と爪は高質化して鈍い輝きを放つ。

体格的にも成人体よりは一周り程大きい、明らかに人の容姿からかけ離れたそれは何度も夢想した忌むべき姿の化身。

人の身を龍の姿に近づける。それが師匠であるエヴァンジェリンから禁忌とされて使用を禁じられた筈の俺の切り札だった。

『……初めに断っておく。一切加減はしない　　今からオレは、
お前を殺すつもりで攻撃させてもらっ』

口から漏れる声はくぐもって聞き取りづららしく、この状態の時は常に念話として周囲に発散される。

「……………いきなりの変化には驚いたけど、それが……………!?」

『言った筈だ。オレは今からお前を殺すつもりで攻撃するってな』

「……………」

視線の先の少年は初めて表情らしきものを浮かべている。

抜き手として放った手刀は感触からいって手応えのない分身体を惨殺する。

そうこれは、本来なら肋を穿ち心の臓を貫く。今までの俺の戦い方からはかけ離れた急所を確実に打ち砕く、相手を殺す為の戦い方だ。湧きあがる何かを無視し、襲撃の際に瞬時に展開した両肩から伸びる大きく武骨な翼を広げて威嚇する。

対して無言で、開いた掌を構えるフェイト。その姿には油断も予断もないと分かる。

先程までが無防備過ぎたのだ。敵を前に構えを取らないのはそれだけのアドバンテージを確信していたから、それでも分身体という保険を残していたあたり食えない奴ではあるが。

今の言撃は奴に無言の構えを取らせるだけのものがあつたという事だ。

『ジバシリ
磁走』

周囲の電位差を端的に、強制的に二層に分けて加速を得る。直線だけなら瞬動にも勝るとも劣らない、クイックなら別次元の域。

一息に相手の周囲を速度だけで囲み、物理的に退路を断ち、10通りのフェイントを混ぜた上でサイドから奇襲をかける。

手首から肘まで覆う鱗、その中でも一際鋭利に突出した刃は大気と共に相手の肉を引裂く。

先程まで苦戦していたのが嘘のよう。

遠目で見ているネギ達にしても今の攻撃を全て見切れたかどうか、龍宮なら或いは対応できるかもしれないが当てる自信はある。

それだけに、人の規格を超えた動きだけに代償もどかいが……コイツなら足の一本なんぞ惜しくないと心が騒ぎたてる。

『虚像、力……』

再度崩れた水に気配と匂いが周囲から薄れるのを確かに感じた。

だが腕に滴る赤は己のものではなくあの男のもの、致命傷を与えられずとも手傷は与えられてと見るべきか。

『まさか、君にそんな奥の手があるとはね……』

『……………』

『まあいい、顔合わせは済んだし今回は引かせてもらおう。これ以上は益が無いからね……もっとも、置き土産程度は送らせてもらおう』

『よ』

今だ念話が妨害されたままの空間で気配をまるで感じさせない距離からのダイレクト。

緊張が残る中ようやく訪れた静寂に体内に走らせた電流を解く。危うく片膝をつきそうな脱力感になんとか踏みとどまって足をひく。すると

ザリッと背後で鳴った砂擦れの音にゆっくりと振り返った。

「先生、なんだよね？」

振り返った先、この場には既に敵映は弾丸で一時的に動きを封じられているスクナのみ。

手段、或いはどう決着に至ったのかは分からないが刹那がここにいるという事は恐らくそういう事。

俺の目の前には傷付き伏した仲間を支える、不安そうな顔を浮かべた彼女達がいた。

『…………アア、見ての通りだ』

姿形も声も動きも全て、まるで別人の様だと言葉を呑んだのが雰囲気分で分かる。

だが、表面が変わろうとこの姿は違う事なき“鳴守 音来”本人の姿の一つ、隠してはいたがこうしてばらした以上手に隠す気はなかった。

『コノ姿、これも生まれつきの体質らしい…………俺本人もつい最近まで忘れていて、ようやく使える程度になったんだが』

「あの、元の姿には…………」

いた。

そう、一発目に使用した弾丸は俺と龍宮が持ち合わせた中でもとっておき、値段も張る特製の品だ。

だが、それ以外の弾が何も脆弱という訳ではない。むしろただ妖魔を抑えるだけなら余裕で予算をオーバーする。費用対効果に反する程上等な代物だ。

つまり、目の前で拘束を軋ませている大鬼はそれらをもってしても抑えきれないほど高等な霊核であるという事だ。

「そんな！ それじゃそうすんのよっ」

『アレが町に降りたら止める者がいない。せめて早朝に到着するという救援が来るまでなんとかここに足止めするのが望ましいが……龍宮、残段数は幾つダ？』

「16発、今の状態から見て疲弊させても1時間は持たないだろうね……正直、逃げる方をお勧めするよ」

『仕方ない力……』

「仕方ないって　っ、あんたあれが町に着いたらやばいって言うてたじゃん！　それなのにそんな無責任な　」

「落ち着いてください、明日菜さんっ」

「刹那さん！？」

「あのスクナ相手に現状對抗する手段がありません。　っ、幸い、こちらは少人数で相手は暴走状態ですから、この森をうまく利用す

れば体勢を立て直すくらいの時間は

『……そう言う事だ、お前や龍宮達はまともに動けるかもしれないがこっちは負傷者の方が圧倒的に多い』

「取りあえずこの場を離れるぞ。攪乱と殿は私がやる。音来先生は刹那を

状況を素早く判断した彼女の檄を聞きながら、俺達は戦場を後にした。

揺れる大地に木々がなぎ倒される轟音を背後に俺達は全速力で森を駆けぬげる。

状況はただの撤退、よくある全滅戦に近い有様だ。いくら小回りが利く上に視界の悪いこのフィールドはこちらにとって有利に働くといっても限度がある。

例えばモグラたたきを連想して欲しい。穴から飛び出すモグラを叩いて点数を競うあのゲームだ。

小さい頃、複数にんでふざけて穴から対象を出ないように塞いだ経験はないだろうか？

今状況はまさにそれ、焦れた大鬼はその四つ腕で、足で、口から吐き出す熱線で森の木々を片っ端から薙ぎ倒していく。

有利に働いていたのは初めだけ、当てずっぽうとはいえ一撃一撃が即死級の重量を誇っているのだから隠れているからと言って気は抜けない。むしろ有利な筈の木々の影は段々はこちらの視界も奪っていくので敵の攻撃のモーションを計りかねたらそくお陀仏だ。

今はこの中でも夜目が利いて視力でもっとも優れている龍宮が常に鬼と睨むあっているので奇跡的に直撃は避けている。が、熱線などの驚異的な速度の攻撃ともなれば傍を掠める事なぞざらだ。

「た、たくっ、いい加減　　どうにかならないのあれ！」

「ボヤいても仕方ないさ。ああもリーチが違いすぎるんじや迂闊に接近もできない。神楽坂のアーティファクトも当てなければ使えないんだろっ?」

「そ、そうだけど……」

「しかし、こっつ逃げてばかりでは勝てないアルヨ?」

「分かってる　　来るぞっ!!」

「くっつ!!!!」

掛け声と共に全員が彼女の手振りによってその射線上から退避する。すると、次の瞬間にはまばゆい光の本流が洪水の様に襲いかかり、阻むように乱立する木々を呑みこんでいく。

コレでは体勢を立て直そうにも作戦を立て直す暇さえない。

『已むを得ないか……ネギ、たつみ　ッ！！！！』

ドクンッ

突如激しい動悸が身体を襲い、もつれた足が虚しく空を蹴る。

「大丈夫ですかっ」

「私に対応する。お前たちは先に行け！」

「でもっ！」

「死にたくなかったら走れ！　奴はすぐそこなんだぞっ」

既に顔を上げる事すらままならず、叫ぶ龍宮の声に躊躇う様に去っていく彼等の足音を聞く。

俺が視界を元に戻せたのは彼女に大木の根元に寄り掛けさせてくれたからだった。

「それが、例の症状か」

『ああ……問題無いって言えばいいんだけどな　ちよつとヤバいなコレ』

脈打つ度に痛みを増すそれはもう痛みを堪えるのを顔に出さないようにする事すら困難な程、正直彼女が咄嗟にネギ達を先に行かせた事ありがたかった。

『行ってくれ、多分時間がない。……出来れば、あいつらには振り返らないように言っといてくれるか?』

「わかった」

『やっぱり……お前は一緒に仕事を組むなら最高のパートナーだな……まあ、ウチの相手には及ばないけど、な』

「……………」

戯言にはまるで無関心だと言わんばかりの目で首を振った彼女は脇に伏していた困惑気味の刹那を抱えて、一度だけこちらを振り返り

こちらの希望通りに立ち去ってくれた。

彼女らしい対応に既に動かなくなった口を動かさそうとして諦め、心の中で感謝の意を述べる。

そうして俺はいつかの様に、まるでプラグが抜かれた古いブラウン管のテレビの様に意識を途切れさせた。

目の前でおこる変化こっけいに思考が付いていかなかった……

- そんなにきにするとかねえ〜

- もっとわがままでいいと思っぜ？おまえ

あれも、

- まあ、似たようなもの見てきたしな

- 大丈夫だって、木乃香は、あいつは受け止めてくれるさ

- 教師の俺が逃げ腰じゃ格好つかないだろ？

思い出すのは彼の言葉。

所々に感じた不可解さに、ようやく空白のピースが埋まる。

自分の事で手いっぱい彼の顔を見れていなかった。

彼にここまでさせた事が悔しさが募る。

彼の心の内は、少なくとも私には理解できたであろうはずのものだったのに……

己の人ならざる耳を呪った。

響いたのは骨が砕けた音、砕けて膨張しまた砕ける。そんな不快音を拾ってしまうこの聴覚を。

捉えた視線の先の光景に感じたのは後悔の念。

興味とは違う。唯純粹な不安と心配がないまぜになって振り返ってしまった暗い闇に爛々と輝く紅い何か。

そしてここにいる皆が捕らえたであろう轟く苦悩の叫。

耳を塞ごうとも脳髓に響く嘆きと悲しみ、視線と聴覚が捕らえた情報がるでそこにある光景をマリアに許しを乞う罪人の様に連想させてしまふ。

その音に、いつの間にか伏せていた顔を上げると。

そこには

完全に変化を終えた一匹の龍が、その巨体を嘆くように天に向かって咆哮を上げていて。

例え他の誰もがその姿を見違えても、私にはそれが彼だという本能的な確信があった。

取立45回目　〜罪過の咆哮〜（後書き）

どうも、結局時間は過ぎてしまい申し訳ありません！

さて、今回で45話となりましたが……あまりに文章が長くなったので結局切って次回に回す事になりました（焦　ですので次回の過去編への語り始めに少々割り込む感じですかね？　ハイ。

なかなか予定通りにいきかないです。皆さまには申し訳ありませんが今しばらくお時間をくださいますようお願いします。

ではまた次回のお会いを、長々と失礼しました。

取立46回目　　死闘と意識の境界線

先程までの痛みが嘘の様にクリアになっていく。

だが代わりに身の内に流行るのは狂おしいまでに純粹な破壊衝動。

正直抑えるだけなら痛みの方がマシだったところだったからこそ言える。

開いた両目がまず初めに捉えたのはいつもより近く感じる星空。

次いで肌に感じる冷氣、だが大気が冷えたという訳ではなく自身の位置が変わった事により体感温度が変わっただけ、この身を除いて周囲は正常その物でしかない。

そう、目の前の異形と異形である己を除いてだ。

眼前まで掲げて握る掌は固く、喰いこんでいる筈の爪の感触は皮膚の下まで伝達の用をなさない。

いや、そもそも腕ソレに感覚などあるのだろうか？

現に血が出てても不思議ではない程にめり込んだ爪先に肌と同じ色が流れる事は無い。それどころか当たり前の痛覚かんかくすら無い。

おおよそ人の腕カタチを留めていない腕ソレに人様と同じ感覚があると考えるのは到底無為な事に思えた。

「な、なんなのよあれ……………」

少女の口から漏れた言葉に応える者はこの場にはいない。

そもそもここにいる皆が今日一日でどれだけ非日常的な出来事に
対面したとしてもその価値観はあくまで一般人の域、唯一この場で
その非日常に重心を置く少年が意識を保っていたとしてもこの目の
前の光景を見てつぶやかずにいられるかどうか。

鬼。

身の丈は山の上上げるが如く、威風堂々といった風を体で表して
いる大妖。

だがそれに驚愕の類は薄い。

というよりここ二・三日の彼女達の怪異との遭遇率が異常なのだ。
この巨軀の大妖も鬼というカテゴリーに分類されるだろうのだから
がその種は今回の事件において特に遭遇率が高く、彼女たちの環境
が東の地域に属していたこともあって馴染みが無い事も無かった
のも一因の一つだろう。

ならば驚嘆の声はここで漏れるはずもなく、打たれた杭の様に棒立
ちとなる事も無い筈だ。

それだけならば。

見上げた先には、突如現れた紅い巨大な異形。

神話や絵本に出てくる怪物の様だとか、トカゲがバカでかくなつた
ようだと多々言いようがあるのだろうが、日本的に、一般的にわか

りやすく言つと一つだ。

“龍”

蛇や鯉だの言われる東の龍に比べ、仁王に聳える姿は西洋のものに近いと言える。が、それを龍というには遜色はないだろう。

重要なのはその種類や名称ではなくそれが突然この場に現れた事。目の前の非日常の象徴ともいえる第二種が現れ、あまつさえ目の前でB級映画どころか子供向けの怪獣大戦のような一場面が繰り広げられればそれは思考の一つも止まるというもの。

彼らが踏み出すだけで大地は揺れ、振るうその腕は暴風を纏って周囲の遮蔽物を攫う。

激突すればその衝撃に大気が鳴き、その余波ですらこれだけ離れている彼女達の足を竦ませる。

規格云々というより条理の外のぶつかり合いはまったくもって理解の外。

まるでフィクションの様に現実的な要素など皆無だ。

この別々の災害と災害が同時に起こったような現象に、ただ彼女達は立ちつくしていた。

「ちっ！ 何を呆けて っ」

「えっ？」

周囲が開けた場所に差し掛かったその時、霞かけたその先に見えた彼女達を視界に捉えて肩を貸してくれていた相方が短い詫びとともに目の前を疾走した。

理解に遅れたのは一瞬。

だが、万全ではないとはいえ気配を辿り背後から迫る物体を認識できなほほど重症ではない。
放られた形となった体制のまま体を低く保ち、数秒もたたず頭上を通過するそれに備える。

「伏せろ！」

「え、あ」

「くっ」

龍宮の叫び声とともに押し倒される形となった彼女は何がないやらと呆けたまま。

間一髪、というほど危うげでもなかったがその見上げた態勢のまま、勢いよく飛来した大木の上半分が通過したことでようやく理解に至つたらしい。

「何を立ち止まっているっあれが見えないのか！」

「ご、ごめん……あ、えっと、ありがとう……」

「礼はいい、それよりも次はもっと注意してくれ」

彼女、クラスメートである龍宮 真名が起き上って周囲を確認しな

がら差し出してくれた手を取って立ち上がる。

通常時、強化時とは比べるべくもない速度だが平時よりはマシな速度を保ってようやく追いついた私も彼女らに倣って後ろを仰ぎ見る。

「……まるで台風の様だな」

誰もが言葉を飲んでいた現実離れしていた光景。その中で客観的に眺めることができた数少ない龍宮の言葉に淀んだ空気が換気される様に皆が口々に騒ぎ出す。

その中で誰かが思い出したように出た先生という単語。

決して忘れていたのではなく目の前のスケールの違う事象に思考が止まっていた頭が動き出した事でできた隙間に流れてきた、仲間を助けなくてはいけないという常人として一般的な、そうありたいという理性から出された言葉。

その一言に場の空気は一気にこの場にいない彼の安否に、救助という流れに飛躍する。

だが、その必要はないと私、私達は知っている。

「……いや、悪いがそれは許可できない」

なんでという皆の目に冷徹なまでの冷たさで見返した龍宮はそのまま事実だけを述べる。

彼の、依頼者の望みをかなえる為に。

「あれは いや、あれ等は存在するだけで魔力を喰らう。それもお前たちが想像できない量をあつという間にな。近づきすぎれば障

壁も張れない一般人なら巻き込まれる以前に枯死しかねない」

「なら僕がつ、僕が行きます。筭を使えばすぐに戻って」

「気持ちは立派だが、現段階で魔力を枯渇しかけている先生は特にこの場を離れる必要がある。彼の忠告を覚えているのなら君はあの場に救助に行くのではなく距離を置く事を考えるべきだ」

正論、組み立てて壁を造る龍宮に対して皆は感情的に反発する。

もちろんこうなることは予想できていたし、最悪引つ張つてでも下山はさせる。

だが、彼女達がそれでも納得しないと分かっていた以上に、私自身の中にできてしまったわだかまりを払う為に

「私が、残ります」

「ここらが妥協点なのだろう。」

「待つてくださいつ、刹那さんも怪我をしてフラフラだったじゃないですか！」

「そうよ！だったら私も」

「いえ、皆さんは先にこの場を離れてください。解毒もしましたし、これがあれば彼を抱えて戻るぐらい支障はありません」

皆が再度私の背中から出現した翼を見て押し黙る。

その目に気負いしたよう色が見られないのは救いだった。

もちろん止血も解毒もしたし嘘ではない。が、完全に抜けたわけで

はないし飛ぶ事なんてとてもしゃないが論外、塞がりかけた傷口が開くのが目に見える。

だが、この場では彼女達を納得させる上で提示するのには問題ない。

「……………」

その中で、唯一心配と不安とは異色の色を宿した目で龍宮は私に問うていた。

本当に分かっているのかと、あれを目の当たりにした自分達には何よりもこの場にとどまる事を彼が望まないだろうという事を。

「ワタシも残る力？」

「いや、気持ちだけで十分だ。それに、人を運んで飛んだことはなかったから一人で手一杯だ」

他の面々も皆残る旨を主張してきたがそれを何とか説き伏せる。

後ろに聞こえる雄叫びと地響きは確実に近づいている。もとより問答をしている暇などないのだから。

事が決まると順々に列を作るようにして撤退する。明日菜さんにはつらいが先生の容体を考えて魔力補助なしで走ってもらおう事にし、先生は龍宮が背負っていく事になった。

「よし、私たちも行くぞ。先生、しっかり掴まって　先生？」

「刹那さん、えっと、あの……………」

「？　どうしました？」

促そつとした龍宮に待ったをかけた彼はそのまま言葉を選ぶように俯きがちだ。

「……僕、音来さんに謝りたい事があるんです。あの時、一瞬でも脅えてしまった、拒絶してしまつた。多分ひどく傷つけてしまつたと思つんです。彼も、刹那さんの事も……僕の大切な生徒で、同僚で……大切な仲間です」

しかし、言葉のパズルを組み立てていくように、徐々に顔を上げた彼の表情はどこまでも真つ直ぐとしたもので

「ですから、必ず二人とも無事に戻ってきてください」

「……ええ、必ず」

綻んだ口元を引き締めて私もしつかりと答える。

今更悩む気持ちはない、けど彼の言葉には幾分か救われたことも確か。そしてその言葉は今彼にこそ必要なのだと思う。

「なるほど」

今度こそ立ち去る彼らを見送り溜息を吐きつつ一人ごちる。

だがそこに悲観的な物はなく、むしろ憑き物が落ちた様に晴れていたと思う。

私は勘違いをしていた。

彼が最後に見せた拒絶の表情、それにいつかの自分を重ねて思わず踏み止まっていた。

さつきまででさえそう。あれは間違いなく逃げだった。私も彼も、

お互いに似た境遇を持ちながら、解りながらも歩み寄ることはなく
そつばを向いて

「そうですね。私も、彼には言いたい事がありました」

だから、もう一度彼に会って話そう。

恐らくお互いに全てを打ち明けるにはあまりに根深い古傷。

衝突もあるだろう。

理解が及ばない事もあるだろう。

もしかしたら溝が深まるかもしれない。

けど、知ろうと話そうと踏み出す事をしなければ抜け出せない事を
私は知った。

お互いに今の状態で背を向けたままならその先にあるのは後味の悪
いものでしかない。そうならない為に、今度は受ける側としてその
場にいるのは自分なのだと自覚する。

結果は後からついてくる。

この気持ちにありがとと感謝を感じているのなら私はそれを伝える
べきだ。

少なくとも、

私は彼に今日あの時までの思いを感じて欲しくはないのだから。

再度見上げた激突。

加勢ができない我が身の不自由さを呪う気持ちは相も変わらず。だ
が心に決めた決意は決して揺るがぬ一度だけ見上げ、一步を踏み出
した。

つちだ。

絞りあげた両腕の筋細胞をフルに使い、両翼を利用して生み出した浮力で相手のバランスを奪って投げ飛ばす。

流石に同じ大きさといってもこのサイズは技に関係なくそうそう遠くに投げ飛ばせるものではないが

今は中距離こうちの方が都合がいい！

「　　ツ、（雷吭！！）」

耳に残る叫びと口に残る声に交わらない不協和音を身体に響かせ、大気中から練り上げた魔力と体内の魔力を衝突させ強大な力プレスとして一気に吐き出す。

吐き出された雷気を纏った暴風は鬼が吐き出すの光の奔流の様に木々を呑込み、砕き、焼き尽くして蹂躞する。

正に自然の厄災を業と化した暴力だ。

だが

（チツ、一本持って行っただけかつ）

晴れた土煙の向こうに表れたのは4つ腕の内の右の一本を失って尚立塞がる雄姿。

その姿は腕の一つを失った事実などまるで意に介していないかのよう。

一本とはいえ一撃で引きちぎるところか跡形もなく蒸発させた破壊力は申し分ない筈。

だが、本人から言わせてみれば今ので胴を薙ぎ払う、つまり終わらせるつもりで放ったのだ。承服できるはずもない。内心焦りが募る。

だが、それとは別に俺を焦らせる要因が現在進行形で背後に忍び寄っていた。

両者はその特性上、技を繰り出す際に魔力、あるいは気力を消費する。

これは普通の魔術師にも言える事だが、この二体に関しては質量の規模も違えば器ともなる体内エネルギーの総量も違う。となれば必然的に消費するエネルギーも常人とは比べるべくもない差が生じる。

たかが一薙ぎとて大なり小なり魔力を食うともなる燃費の悪さが付きまとうとなれば一合いとて油断はできず、元が人間にすぎない身としては生粋の鬼であるスクナとの間にある程度の差ができるのは先ほどの毒のハンデも相まって看過できない規模だ。

万全としても苦戦を強いられる相手に常に全力を求められては魔力を浪費するは大きい。

そもそも魔力とは体内に常に蓄積している物ではない。魔力とは自然界に満ちた大気、言わば空気そのものと言っつていいほど身近にあるエネルギー体だ。

魔法使いはそのエネルギーを代償に、自らの肉体を媒介にして精霊の力を借りて魔法としての形をなす。その際に大気から取り込める魔力は当然多ければ多いほど威力が増す。だが、蛇口から出た水をバケツに溜める様に水は溜めるよりもぶちまける方が遙かに速く簡単だ。それが魔力枯渇の原因。人間の魔力蓄積速度ではいずれ放出に吸収が追いつかず、酷使する精神が耐えきれず本能がストップを

後はどちらが有利なのか、考えるまでもない。

切れかかる意識。

まるで酸欠に陥ったかのように視界がぼやける。

魔力の枯渇時に見られる特徴だが俺の場合はそれだけで終われない。

ただどこで切れる訳にはいかない。

今は俺を止める奴が一人もないのだ。例えスクナを倒しても俺が暴走しては意味がない。

せめて、せめて増援が駆けつける夜明けまで、それまで持つてくれればまだ目がある。

だというのに、この鬼すら倒せずに倒れるなんて、意気地が無いにも程があるッ！

「Gu、Ruuuoooooooo!!!」

捨て身で突撃をかけたこちらに対し、当然相手は迎撃の構えを取る。低く構えたこちらに対応するために相手も身を低く、叩き落とせるように三つとなったその腕を大きく広げ、迎撃にもっとも適する遠距離攻撃しゅたんを選んで待ち構えている。

もちろんそれくらい織り込み済みだ。

戦いにおいて正面から打ち合うのは両者の間に明確な優劣があるか首を取りに行くつまり、勝負を決する時というのが常套。間違っても猛進などという愚を弄する場面ではない。敵のもっとも攻撃の繰り出しやすい正面に飛び出すのは自殺行為以外の何物でもないから

だ。

これが相手を疲弊させ、精神的に優位に立っているのなら話は別だが、どう見ても立場は逆。スクナも焦れてはいるだろうが劣勢というほどではない。

「　　っ！！」

敵の怪光線が打ち出されるその瞬間。光が砲手の視界を一瞬遮るその刹那に両肩の延長を大きく広げる。

下方を通り過ぎる光を無視して上方、前方鋭角に上昇しながら距離を詰める。

ゆったりしている暇はない。

スクナの口砲は連射の効かない単発式とはいえその放射時間は滞空する俺を捉えるのには十分すぎる。

通常、直線を描き続ける攻撃手段の回避方法というのは急激な左右回避である。それは槍と相対するように槍の矛先を避けるのに線で捉えるより点を避ける方が易いのと理屈は同じだ。違うのはその柄の部分にも殺傷能力があるという事、更に首という上下の可動条件下にあるあの口砲は左右より上下の方が可動域は狭く、その分反応速度が速くなるので左右によけるのが定石。だが、速度の差といっても避けるだけならという話、高速で接近を仕掛けていけば格好的になるのは目に見えている。故にほぼ360をカバーできる左右側面ではなく、人型ゆえの欠点、死角となる頭上を狙う。

もちろんその死角となる直上にたどり着ければの話だが。

翼の動きを考慮するなら速度は上昇の方が速い。

だが迫る光流も勝るとも劣らない高速の攻防。

死角を取るのが先か、撃ち落とされるのが先か。

その光景はもはやどちらが制しても不思議ではなく、目指す直上に

(っ!! 羽がっ……… だけど っ)

目標地点一歩手前で僅かに光の鎌首が翼を刈り取る。

打ち抜かれた翼はもう飛ぶ用をなさないだろう。

だが、これで十分。

この程度なら余力による勢いで十分許容範囲内だ。

既に失速の勢いで背面に落下するこちらと違い、スクナは一から砲門を向けなおさなくてはいけない。

両面ゆえその旋回速度は大したものがあるが、腸に煮えくり返っていた熱を吐き出すには十分な時間だ。

(これで !? なんてあいつらがここにっ!?)

こちらの口砲の直線状、スクナの右下後方に見えた姿は失念していた。

ただど心のどこかで引っかかっていた事。 よりにもよって決め手と

なるこのタイミングで不運が重なる。

(しま　　っ!?)

そう、一瞬とはいえそれは確かに十分な時間。

驚いて砲撃を躊躇した俺の目の前には先ほどと真逆にして巻き戻された結果が迫っていた。

立ち込める土煙。だが、視界を覆い隠すそれらは次の瞬間巻き起る突風によって瞬く間に晴れ渡る。

「う　　っ、大丈夫!？」

「オレはええ！　自分の心配しときッ!！」

突風に巻き込まれる形で吹き飛ばされてきた異物を目の前の少年が振り払いながら私の問いに答えてくれる。

「く　　っ!！」

再度襲い掛かる暴風、発生源は前方数十メートルは離れているだろ
う距離でもはつきりと分かる。

ぶつかり合う二体の怪物の余波だ。

余波といっても決着は明らか。

龍と思わしき一頭が目の前の鬼に撃ち落とされ、左前方に落下した事で激震は終幕を迎えた。

「……動かなくなった？」

「わからん。わからんが、はよーここから離れな」

確かに目の前の勝者となったと思わしき鬼は最後にビームのようなものを打ち出した体制から動かない。

だが安全というには無理がありすぎる。

突然始まった激震から木々の向こうに現れた怪物といっても遜色のない二体のぶつかり合いに立ち往生してしまったが、彼の言うとおりに呆けている場合ではない。早くここから離れて

「BURUUUUUUUUUU!!!」

「キヤッ!?!」

「つて、そんな簡単にいくわけあらへんか」

大気を揺るがす雄叫びは鼓膜を突き破らんばかりに鳴り響く。

そんな中頭に生えた獣耳を丸めた彼は不敵な笑みを浮かべたまま私の手を引いてこの場を離れようとする。

彼が臆病者というわけではない。戦いの知識が足りない私と違って彼は相手の力量差が分からない程の人じゃない。

お互いに怪我を負っている身だ。外見こそ健康そのものだが中身が
そうでないというのはここへ来る途中まででも十分身に染みている。
恐らく彼一人なら立ち向かいもしただろう。

彼は目の前の強敵ゴブリンから逃げない種の人だ。

だから彼がそうするのは恐らく自分の所為で、また私は足手まとい
になっている。

「心配すな。俺も狗族の血が流れとる。姉ちゃん逃がすくらいの時
間なら余裕で稼げるわ」

「小太郎君……」

「とは言うたけど、こらちいとばつかしきつついかもなっ」

互いの視線の先のそれは大きさにおいても妖という既知外にして条
理の外の存在だ。

何を食べればそんなに大きくなるのだとか、口が二つもあると食事
はどちらの口を使うのだとかそんな事はもちろん問題ですらなく、
蜜のように甘ったるいある種の嫌悪感を催す殺シ気がどこに向けられ
ているのかという事。

先ほどの籠にはもう興味もないのか、それとも動き回る私達を獲物
だと思っているのか。どちらにせよアレの狙いが誰なのかは明らか
で

「チイツ、カンベンな姉ちゃん。先謝つとくで!」

「え？」

地響きと共に目の前に突如直立した巨木。おおよそ人の形をとっているとはいえ規格において桁の違うそれはただの一步でさえ災害となる。

続いて迫るだろう片足、ないし腕の一撃を躲す為に抱えられているという事に気が付いたのは視界がぶれてようやく、強化といっても体外的な物でしかないレベルの私にとってはその速度に視界が追いつかず、文字通り風のように彼は駆け抜ける。

「チツ」

がしかし、その距離を持つてして一向に距離が開かないのは何故なのか？

振り返ってみればそう難しい事ではなかった。

速度、一步を踏み出すという事において後方の鬼が彼の足元にも及ばないのは私の目にも明らかだ。だとすれば当然距離は黙っていても開く。が、現状その間は一進一退、着かず離れず後退を許さない。

何故なら、鬼の一步は彼の一步の10倍以上にも及ぶからだ。

一步の定数が大きければ速度で劣ろうと総体的な距離では並びえる。要は今この距離、この速度がその乗数において平行線上の数値、追いつく事も突き放すこともできない平行線。

だが、スタミナの的な意味でどちらが先に力尽きるのかと言えば総歩

数の多いこちらなのは明白だ。

数値の上では平行線をたどろうと半永久的に働き続けられる機関は生物にも機会にも存在しえない。それに相当する消費が本体のキヤパを超えるからだ。

「小太郎君、もういいからっ、私はここにおいて先に」

「っ、良いから、黙って大人しゅうしいっ！！　つまらん事言うてるると舌噛むで！」

彼は言葉の先を吹き消すように被せて無理やり速度を上げる。だが後ろを振り向かない彼と違って視線が後方に向く私は気付いている。

縮まらなかったはずの距離が狭まっていることに。

いや、私が気付いているという事に彼が気付いていない道理はない。もしかしたら、きっと彼は気付いていても同じことを言っただがむしやらに走り続ける。

それが自分の矜持だともいうように。

でも

もう荷物になるのだけは嫌だから。

これは私の我儘だ。

彼は多分なんと言っても私を隣に立たせようとはしないだろう。

そもそも立って何ができるといふ訳じゃないけれど。何もしないで後悔するのはもう沢山だっ！

「ちょ、姉ちゃん何して

」

わずかに身動きしたそれが偶然によるものではなく、何かを意図したものだど気付いて彼は歩調を緩めないように私を嗜めようとする。だけどその時には私は態勢を整え

「 退け

」

「 え？ 」

整えようとして……次の瞬間先ほどまで思い描いていた光景と真逆の反応を反射的に行っていた。

「 なっ！？ 」

「くっ!？」

腕に抱えた彼の驚きの声、予想に反して呆気ないほどに倒れ伏した彼に覆いかぶさる形で私達は助かったのだと確信していた。

「っあ、なんや今の　　何やコレ……」

巨大な鬼は己の腕程の太さを持つ半透明の異様な塊に胸を貫かれて強制的に停止させられている。

私も正直驚いている。傍らにいる彼と驚愕の対象は違うが、アレはあんな状態になってもまだ生きているのだ。

「っぞ、でしょ……」

若干の混乱で今は状況がつかめていない彼と違って私はこの感覚に身に覚えがあった。

忘れもしない。忘れられない。

多分心の奥深くまで刻まれた程の負の感情。

生まれて二度目に瀕した死の恐怖を呼び起こす“冷氣”は彼女が得意としたものだったはずのものなのだから。

「ふ、存外に丈夫な形をしているじゃないか。少々不愉快ではあるが」

「　　っ、誰やッ!!　　出てこい!!」

頭上から訪れる鐘の音の様に澄んだ声。
不機嫌さと高揚感という相反するはずのそれに彩られた音色は滲み
のある

「……エヴァンジェリンさん」

「お前は……ああ、大河内か。随分らしくない顔をするようになったじゃないか。いや、その方が遥かに分かりやすいか」

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

クラスメイトであり、とある事件の首謀者である彼女のものだった。

「まあその事はどうでもいいな。私の目的は貴様と世間話をしに来たわけではない」

音もなく目の前に降り立った彼女はついぞと言わんばかり億劫そうな面持ちでこちらに歩み寄り、無遠慮に下からこちらを見下していた。

「……ふむ、だいぶまともな出来になったな。粗削りながら自己流でここまでよく来たものだ。そこは素直に賞賛してやろう。あいつがなんとというかは知らんがな」

「え？ あいつって」

「ん？ なんだ話してないのか？ ……チツ、往生際の悪い奴め」

噛み合わない会話に内心焦れてくる。

聞きたいはずの、踏み込みたいものであるはずの大切な主語が抜け

落ちている。彼女は意識的に、私は無意識に。

怖いから？

何が？

自問自答するがそれは堂々巡りに最初の問いに帰結する。

終わりのない無為な行為。でも問わずにはいられない。

“何故”と。

この修学旅行中溜め込んだ疑問は大きかった。目の前には答えがあるが彼女はその解を話すことはないだろう。だが、同時にその場を設けることのできるキーであるという確信が私の中にあつた。

答えは示さなくても彼女は容易くその解の手前まで導いてくれる。

とても単純な事なのに私にはその一言が踏はみ出せなかつた。

“何故”と。

「……まあいい、坊やはどこにいる。なにやら貧相なおまけならいるが」

「なんやと!」

「だ、ダメだよ小太郎君っ」

慌てて諫め様とする私の静止を振り切つて前に飛び出す彼はすでに先ほどの光景など蚊帳の外に追いやつたのか、目の前に現れた少女

に向かつて嫌もあらわに一步前に踏み出す。

が

「オイコラッ、お前かて似たようななりしとるくせにつ、いきなり冗談ぶちかましてくれたんは」

「黙れ駄犬」

「ブオッ!!!」

「小太郎君!」

地面を頭部で錐揉みしながら横滑りするという、絵的にいかなる角度を描きながら吹き飛ばされ方をした彼に慌てて駆け寄る。

そんな私達に対して、背後の彼女は尊大な態度のまま当初の重傷に加えて大幅に悪化しかねないダメージを受けて倒れている彼に悪びれもせず上から言葉の圧をかける。

「忠告はしたぞ駄犬め。死にたくなかったら退け、とな。それに、人様の話に割り込むなど礼儀すら知らぬ若造が、誰が貴様に意見を求めた、ん？ わきまえられぬというなら貴様から先に捻り潰すぞ」

その言葉は女王然としながらに暴君のそれだ。だが言葉に乗った気と魔力に遊びも冗談もないというのは私ですらわかる。

必死に彼女を睨見つけて飛びかかろうとする彼を押さえつけながら、先ほどと同じ質問をした彼女に私は答える。

「ここには、いない」

「何？」

何を目的として彼女がこの場にいるのかは解らないし、彼に会って何をするのかはわからない。しかし言ってるなんになるものでないし、判断材料にも私の札はあまりに貧弱で少ない。だから警戒しながらも事の顛末を手短に要点のみを伝えた。

「そうか……ならこんな所でゆったりしてる時間もない、か
しかし、お前はいつまで寝ているっ、いい加減起きぬか！
この木偶がっ」

「ええっ!?!？」

突然巨大な氷塊を出現させて落下させたエヴァンジェリン。
……その落下先は先ほど墜落した龍の頭上だったりする。

「ちっ！ この程度で伸びるとは情けないっ、これが終わったらみ
つちりと扱き直してやる」

「いや、明らかに今のが留めやったんや……」

「何か言ったか、犬？」

「い！ いえっ」

「フン、……まあシナリオとはだいぶ違うがこの場で愚痴っても詮
無い事が……茶々丸！」

「はい」

取立46回目　〜死闘と意識の境界線〜（後書き）

何と言いますか……申し訳ないの一言です。

謝罪を述べ上げるとそれだけであとがきが埋まりそうなので短いですが活動報告の方に続かせていただきます。

えー、何とか更新にこぎつけた46話目。ようやく次回から過去編に移れます。なんだかんだで年末ですね。皆さんいかがお過ごしでしょうか？

私ですか？　これといった予定も入れられずに卒論と就職の準備に忙殺されてましたorz

ああ、癒しが欲しいです最近。と思い、ストレス発散と銘打ってモンハンP3rdで狩りに行ったり狩られたり。それもある意味癒しで間違いないんですが、これは少々違うんじゃないかね？と思いついて現在観葉植物にハマっておりますトントンです。

隣で冬の日差しを浴びて日光浴、光合成はできませんが（笑）　ほけーっとしながら徐々に小説の内容を考えていたら筆を執った次第です。

今後もちろん続けていきますが、恐らく夏のような無茶はできないとだけ予め進言しておきます。出来る限り上げられるよう努力していきますので何卒よろしくお願いします。

取立47回目　く独白と懺悔く

夢を見ていた。

誰にでもあると思う。

ああ、これは夢だと突然実感するあの感覚。

それまで必死に物語を描いていた夢が突然色褪せて見える様な

いや、

そもそも、そんな感覚なんて無くてもちよっと考えれば夢だと判った筈。

都合のいい。本当に居心地の良すぎるご都合主義。

夢を現実だと思いたい。現^{いま}をIFとして、夢^{IF}を現実と信じたい。

表面を取り繕っても心の真ん中では否定を続ける。これは俺の弱さだ。

揺蕩う心地と理想に浸食された記憶。

抗いようも無い程に俺を締め付け、狂おしい程に心惹かれてしまう。

だからこそ縋りつきたくなる。

だからこそ突き放したくなる。

そんな矛盾した現実には夢以外の何物でもない。

そして、認識した瞬間から徐々に湧き上がる浮遊感と不快感。

夢と自覚してしまった俺はこの世界から弾き出されかけているのだろっ。

でも、

弱さと知っていても。

たとえ数瞬後に訪れる暇いとがが決められたものだとしても。

今だけは、この夢まぼろしに浸ひっていたいと思う事は罪つみなのだろうか？

夢を見ていたらしい。

魔法や怪奇を知らずに友人たちと普通に笑い合っている自分。

それは今も変わらないはずなのに、あれは私の願望なのだろうか？

戻った筈の日常。

でもそこに彼の姿はなくて、追いかけていたこと自体を忘れてしまった。違和感だらけの世界でもあった。

しかし、どうしたというのだろう。

もたれていた柱の硬さには左程居心地が悪いとは感じなかった。

むしろ日に当たる温かさと着物からほのかに薫る陽気は眠気を誘うには十分なもので、おかしい夢を見る要素なんて

「あ、アキラさん！ 何してるんですかつ、ダメですよ。あなたも安静にしていなくちゃいけないんですから」

「あ………すみません」

長い廊下の向こう、どこかパタパタという擬音が聞こえてきそうな、それでいて慌ただしさを感じさせない動作で女性が一人こつちに来る。

さて、目の前の白一色で統一された着物姿の女性は誰だったか。私も名前を覚えるのは苦手という程ではないが、こつちも同じ髪型、同じ装束をした人が大勢いるのでは記憶も曖昧になるのだろうか。初めて実感している。

「さ、お部屋へお戻りください。お部屋までお送りします」

「えっと……大丈夫ですよ。ちょっと日に当たっていただけですから、自分で部屋に戻れま」

「ダメです」

即答された。

どうやらこの人の中で私の行動というのはあまり信用ならぬらしい。

「部屋までしつかりと送らせていただきます。この間もそう言っただけで縁側に居られました。お願いですからお部屋で安静になさってくださいませ」

ついでにそれなりに面識があるらしい。が、申し訳なくも私の記憶の中では検索に引っかかってこない。どうせなら名札でもあれば助かるのだけど……それはそれで不格好な気もする。

「……近衛のお父さんに怒られるから？」

「長は関係ありません。ですが、申し訳なく思っただけで頂いたのでしたらそうしてくださいませ」

迷惑をかけるつもりはなかったんだけど、どうやらそうもいかないらしい。

前を進む形で巫女さん（仮）が、その後ろを私が続いて部屋まで戻っていく。

別に逃げるつもりはなかったけど、彼女の足運びを見てみると逃げようものなら問答無用で取り押さえられる気がする。

もちろんそんな乱暴な手段はとらないかもしれないけど、背中から伝わる殺気というかオーラというか、どうにも言葉に困るけど

そう、なんか凄みのようなものを感じた。

「では私はこれで、後程お薬をお持ちしますので、くれぐれもつ、お出にならずそのままお待ちください」

「あ、あはは……ハイ」

苦笑しながら襖を閉める巫女さんを見送る。最後まで覗かせていた冷たい目が微妙に脳裏に焼き付いている。

外出は……控えるべきなのだろう。うん。

「……でも、やっぱりちょっと、ね」

苦笑はそのまま、振り返って一人には広すぎる部屋に敷かれた布団に座り込んだ。

横になる気にはなれず。視線は自然と横に向かう。

敷居を跨いだその向こう。今は襖に遮られているそこには、ここ数日寝入ったまま起きることのない彼がいる。

「……………」

そう、あの決戦からもう2日が経っていた。

既に学生である皆は予定通り最終日を迎え、翌日から始まる学校に行く為に麻帆良に戻っている。

もちろんネギ先生を初めとする彼らも音来さんを心配して残ると言っていたが、3-Aの担任である彼を滞在させる訳にはいかない。事件に決着がついた今、他の皆も日常に戻るべきだと、そうして欲しいと礼と共に近衛のお父さんが頭を下げてきたのは記憶に新しい。

私かというと、救出当時の怪我が予想より悪化しており、事情を説明するにも“表”の病院などは論外であり、その道に精通した外へ紹介するよりもこうして助けてもらったお礼にと件の関西呪術協会総本山、近衛の実家で預られる事になったのだ。

そして、現在は彼と同室？ このこの部屋で療養中となっている。

事件後はここも事後処理でてんやわんやしていた。私達以外にも怪我をした人は大勢いたのだから部屋もそれなりに埋まっていたのだろう。

部屋を割り当てられた時にさっきの巫女さん（仮A）とは別の巫女さん（B）が

『知らない土地で一人というのも心苦しいでしょうから彼と同室にさせていただきますました。あ、もし不安なようでしたら別室にしますけど。そうですね。傷ついた男女が山奥の部屋に二人、仕切られていようとも所詮は襖、ただの紙切れ！ 戦いを終えた後に生き残った生存本能から刺激される情事！ 若さと教師生徒という背徳感

が羞恥心を刺激するスパイスとなり、いつしか二人は
で不安にならないという筈が (以下略) 『

『あ、あの………』

『 つと、すみません。本音が少々ただ漏れに……それで、い
かなされますか?』

普通それは少々とは言わないと思う。いや、それだと論点が大幅に
ずれている気がするけど……

『あ、いえ。私は別に………』

『そうですか? まあナニかお困りなようでしたらお呼びください。
すぐに参りますから』

何をだ何を……

そもそもそんな時に他人を呼ぶ筈がないし
出したら思考がおかしなことになっている。 いけない、思い

とにかく!

部屋を分けると手間をかけてしまうと彼が起きてから判断を仰ぐ事
にした。のだが、彼は2日経った今も目を覚まさない。

「……………」

正直に言おう。

気まずい。

もちろん、断じてやましい事に関してではない。

……彼を発見した当初の状態が、その時の出来事が強烈に心に残り、私は純粹に彼の心配ができずにいた。

そう、あの時。

エヴァンジェリンさんが駆けつけてくれたあと。

私は真実を知った。

「フハハハッ！ どうした、まるで届いていないぞ。貴様は八エでも狙っているのか？ 欠伸が出る、ぞ！！！」

「GuooooOOOO!!！」

手にした氷柱を無造作に投げつけて串刺す彼女はまるで幼子を手に取るように振舞う。

だが事実目の前で繰り広げられるそれは理不尽なまでのワンサイドゲーム。その巨腕で捌こうにもどういう仕組みか触れる傍から氷漬けにされ、二撃目には碎かれる。防ぐ手立てがなく、高速で目標を穿つ筈の口砲は夜風に棚引く彼女の髪に触れる事すらかなわない。

次元の違う領域の戦いに私、いや、私達はただ啞然とする事しかできなかつた。

「……あの女、何もんや」

「彼女、あの人は」

私が口にした彼女の通り名に横で息をのむ音が聞こえる。聞こえるというのはそちらに視線をやる余裕がないからだ。

目の前で展開する業と技の応酬、それらが作り出すのは生にとっての死地でしかない。例え結果が一方的な暴力であろうとその交差に交われば余人は悉く、容赦なく、容易く命を枯れ落とす。

故に目が離せず足も出ず、私達は棒立ちで眺める事しかできない。その凶刃がこちらに向く事はないと分かっているても、もしもの光景が私の脳裏から離れなかつた。それほどまでに濃密な死の気配。それは生物としての根源的な恐怖。

奇しくも、その場景を綺麗だと思った私は感性が壊れていたのかも
しれない

「ハッ！ さぞ高名な鬼神さまだったんだろうが、こうなれば達磨も同じだな。動けなくてはとうする事も出来まいっ！ フフフッフ
ハハハハハ」

「マスター、そろそろ“彼”が起きます。お急ぎを」

「ん？ そうか。こうして全力を出せる場というのは中々に貴重なのだが……まあ致し方ない。閉鎖空間ならいざ知らず、こんな拓けた場所では少々面倒だ」

そして、指揮者の様に腕を振る彼女に魔力が高まると同時に周囲の温度という温度を急激に奪われていく。

それはこれだけ離れているこの場でさえ吐息を凍らせる程。事実彼女は戦場このばを支配しており、その感じたままの言葉に何ら遜色のない、強者の所業が目の前に顕現していた。

「ま、こんなものか。中々楽しかったよ」

目の前には彼女を置き去りにして凍る氷上の世界。

鬼だけではなく草木も大地も、いる事さえ分からない動物たちですらも微動を許さない。

それは時までも凍りついたような異世界で、こうして吐き出している息の白さを確認するまで私も凍りついたと錯覚するほどに透徹された世界。

そして、一人時の止まったステージで高らかに、歌い踊るように呪を奏でる彼女は振り下ろした手を優雅にまるでタクトを振るう様な仕草で振り上げ

「せめてもの礼だ。苦痛をも凍る絶対零度の腕かいなに抱かれて眠るがい
い 『おわるせかい』」

静止した空間を動かす 否、それは文字通りの破壊だった。

万を優に超す断片は刻一刻と碎かれて塵芥と成り果てる。生の悉く

が否定されるその小さな世界の中で、彼は盛大に、そして呆気なく命を刈り落とされた。

「意外とあつけないものだな。……茶々丸奴は？」

「ハイ、氷結時のスキャン上では内外共に損傷が激しかったのですが、現在数値上ではもう安全域に入ります。これまでのデータから解放まで後2時間程と予測されますが回復までには十分な時間です。覚醒にはあと5分も必要ないかと」

「相変わらず回復だけは早いな。まあ起きようが早々破れる密度ではないが……まったく、なんで私がこんな面倒を」

そして彼女の言葉に気付く。

砕けた世界に氷塊は一片も存在せず、チリも残さず鬼を滅したこの場には徐々に温度が戻りつつある。

なのに、気を割けば一カ所だけ依然と刃物のような冷気を放ち続ける場所が一点存在していたことに。

そう。

彼女が行使していた大魔法。それは間違いなくあの大鬼を対象としたもの。

だが、彼女程の腕を持つてすれば空間を取捨選択する事など訳もなく、必要以上の破壊をするはずもない。

派手さを好む傾向があるが自然破壊者ではないのだ。

つまり、本当の狙いは別にあり、言い換えればこの空間周囲全てを抑え込む必要があったという事で

「これは、さっきの……」

振り返った先にあつた巨大な氷塊。

その中に、先ほど落下した龍が一体、落下した衝撃ごと封じ込まれるように凍てついていた。

「よし、坊やたちを追うぞ。その馬鹿はそのままではお前でも運べんだろうからな。手ごろなサイズにカットしろ」

「了解」

「あの、運ぶつてあの怪物を？」

「ん？ おまえ いや……あれの扱いは私に一任されていてな。必要な処置だ、お前はそのまま先に戻れ。道はわかるだろ」

「え、あ、うん」

「ん？ なんだ、怪我でもしてるのか？ そうだな、そのお前」

「お、俺か？」

「お前も動けるだろう？ ならお前が運んでやれ」

「なっ!？」

「なんだ？ 文句でもあるのか？ 助けてやっつたろう。貴様は受けた恩義も返さんほど狭量な男なのか？ それも女である私に」

彼女の言い方に納得はいかないようだが彼の性分なのだろう。不平だという顔のままだが了承という風で引き下がってくれた。

「ふむ。茶々丸、さっそく作業に取り掛かれ」

「了解、対象の掘削に入ります」

「ホラ、姉ちゃんもいくで」

私達には興味はないとばかりに作業を進める二人。その彼女等に一度視線を向けてた小太郎君は私の傷の具合を確認して手を差し出してくる。

運ぶなら背負った方が楽そうではあるが、彼と私とでは身長差がありすぎる。なので必然と腕を抱えられる形になるのだ。

「あ、うん」

私はそれに彼が受けやすいよう態勢を変えようとして

伸ばしかけた手を止めてしまった。

思えばここで素直に退いていればよかったんだ。

「？ どない あ、おい！」

止せばいいのに、何故か気になった私はそのまま彼女たちについて行ってしまった。

そしてそこで見てしまった。

龍の、正体を。

「あれは……夢じゃないんだよね」

力尽きた彼の体はエネルギーの消費によるものなのか“幼年体”の状態だった。

驚きに次の一歩が止まっていた私と違ってその場の誰もが既知のものとして受け止めているようだった。

隣にいる小太郎君でさえ。

思わず目の前、溶けた氷に濡れて横たわる彼に駆け寄りとしたが横から差し伸ばされた手によって阻まれる。

差し出された手が茶々丸さんのものだと分かると私は彼女の主であるエヴァンジェリンさんに詰め寄った。だが

『一段落したんだ。話は落ち着ける所で此奴にでも聞け。私にそこまで面倒を見てやる義理は無い』

そういつて茶々丸さんに彼を抱えさせて立ち去る。

私は慌てて彼女達を追おうとして膝をつき、小太郎君に抱えられる形でここに来た。

— 昨日の話だ。

「……………音来さん」

襖の前でかけようとして止まったままの手がひいてしまう。

この二、三日はあの時を思い出す度に同じ事を繰り返している。

彼のいる部屋とここを仕切る襖一つになかなか手が伸びない。

「いや、様子を見るだけだもんね」

気持ちを切り替え、私は襖をあけた。彼の様子を確認するために

「つ、……………え？」

居ない。

襖を小さく開いたそこは布団が敷かれているだけで肝心の彼がいな
い。

慌てて襖を開け放つがそんな事をしても彼が何処か隅に居る筈もない。

すれ違いに目を覚まして外に出たのかと私は慌てて外へ飛び出す。とちよつと薬を持ってきてくれたのだろう。先ほどの巫女（仮）が廊下の向こうにいた。彼女はまた私が部屋を抜け出そうとしたのかと思つたのかこちらに駆けつけてきた。

だが、私も冷静な方ではなかった。迫る彼女よりもなお早く、私は問うというより詰問するように彼女に迫っていた。

「あ、あのつ、音来さ　ここにいた彼はっ」

「え、ああ、彼でしたら　」

初めに気付いたのは体に纏わりつく冷たい空気。

続いて柔らかな温もりに包まれているような感覚から自分は寝かされてきているのだと気付く。

目を開こうとして、頬に触れるくすぐったさに顔をしかめながら開いた視界は、サラサラとした黒髪を捉えた。

「アキ……ラ？」

黒髪のロングと言われて真っ先に浮かんだのか彼女だった。

生徒、というより知り合いの中で印象に強く残っているというのもあって寝ぼけている頭は、目の前の女性が後ろに髪を一括りにしているというシルエットだけで判断してしまったのだらう。なんともアインが見たらどやされそうな話だ。

「あ、起きられましたか」

「すみません……協会の人でしたか」

徐々に焦点が結ばれた目でよく見れば、その容姿は昨日の晩に門から広間まで案内してくれた侍女のものと似通った風体だった。

頭を下げるこちらに柔和な笑みを返してくれた彼女は起き上がった俺に横になるよう促し、一通り様子を確認して手元の箱からいくつかの薬を手渡してくれた。

掻い摘んでに容体を説明してくれる彼女に礼を言い、受け取った薬を飲んで落ち着いた所で思考が回り始める。そんな中でこれまでの経緯が気になったのは自然な事だった。

「あの、今日は何日……いえ、あれからどうなりましたか？」

一般の家屋と比べても比べようがない程に長大で広大な屋敷と敷地に驚嘆半分呆れ半分の心地で長い廊下を歩く事数分、ようやく見えた部屋は他と一線を敷く豪華な扉を構え　　ではなく、そこらの部屋と変わらない障子で仕切られた一室。そこがここ、西の魔道の

総本山を収める近衛 詠春の執務室のようだ。

ここまで案内をしてくれた侍女がこちらを一度確認してから伺いを立てると中からあの芯の通った声が一言かえってくる。

「長、鳴守様が起きられました。長にお目通り願いたいと　その、伺いを立てようとしたのですが、ご本人様がこちらに出向いていまして……」

「お通ししてください」

障子を引いて傍らに待機する彼女に軽く会釈をして入室する。室内はどこかの長のように書類の山が築かれていたり、演出に凝っていたりするような事はなく、真逆に質素な感で統一されたそこは部屋の主の気質を表しているようであった。

どっかの誰かに爪の垢でも煎じて飲ませたいもので、親子だから普通逆だろう。　とおもったが、そういえば彼は婿養子だったと考えているとそうしている間に目にしていた書類に一区切りをつけたのだろう。手に持った用紙の束を脇に置き、席を立った彼はそのままこちらに出向いて来た。

「ああ、音来君。思ったより元気そうで何よりです。部屋で待っていてくれればこちらから伺いましたが」

「いえ、この通り十分療養させていただきましたから。こちらから伺うのは当然の事です」

とりとめのない会話、来る途中にも聞いた今回の事件の顛末、意識が途切れた俺がどうなったのか。

そして彼らは無事だったのか。気が付けば冷静に話していたつもりが、徐々に捲し立てる様に詰め寄ってしまったていたらしい。お茶でもと促す長にバツが悪くなって促されるままに席についてお茶をすすする。

「むっ……」

「どうしました？」

「あ、いえ」

いけない、目が覚めてから思考が精神年齢相応に戻りかけているようだ。

つい詠春の柔和な雰囲気に関心かけたそれをお茶を胃に流し込んで気を引き締める。うん、程よく渋めのお茶は緩んだ脳にもよく沁み

既に事後処理もほぼ終わっているという事で確認と言っても緊張を要するものではない。彼も変に溜めを作るような人柄ではないので気になる事は先に済ませてくれたという事もある。

「そうですか、詠春殿。此度は私の不出来によりこのような事態に」

「あはは、やめてください。不覚を取ったのはこちらも同じですから。それに、知らぬ仲ではないでしょうか？　どうか楽にしてください」

「それは　　そうですね。でも、だとしたらあなたも意外に意地が悪いですね……初めから知っていたんですか？」

「……ええ、覚えているのなら御存じだと思います。リヒトや彼等から君の事も聞き及んでいましたが、面と向かって話すのはこの間が初めてですね。さすがに、大人の姿で現れた時は気付くの遅れましたが」

学園長から中途採用で捻じ込んだ等断片的ではあるが話は聞いていたという。

まあ対面時は何かとごたごたとしていたしこんな話をしている場合ではなかったというのもあるだろう。

彼が話す当時の出来事に記憶の浅かった事は気になる事でもあり、自然と話が弾んでしまいそうになる。だが、昔話に花が咲くというのは心を刺激されるが、今回は別に目的がある。

「それで、ここに来たのは学園長に頼まれていた事以外にもう一つ別件　私用がありました……」

「ええ、大方見当がついています。……彼女の所ですね」

そう、ネギ達には悪いが俺の今回の目的は別にあつた。任務を受けた以上蔑ろにする気はなかったが、内心揺らいでいたのは事実だ。

「……はい」

でもそれは言い訳にもならない。

これは俺一人の問題で、俺個人の感情。

他人を巻き込んでいい筈がなく、結果として木乃香を取り戻せたか

ら良かったようなものの、もし下手を打てばを目も当てられない。

「わかりました。ではご案内しますから少々待って」

「いえ、自分一人で行きますから、場所だけ教えてください」

「わかりました。では」

巫女さん（仮）に途中まで案内をしてもらってたどり着いたのは館の裏方から雑木林を進んで十数分、道としては最低限の整備がされているのみで少々歩きにくい。

こんな所に本当にいるのだろうか？

そう思いつつもひたすらに進んだその先、視界が開けたそこは小高い丘になっていた。

そこに 居た。

ひっそりと建てられた石の前で、彼は手を合わせていた。

しゃがんだまま何かを喋っている彼はこちらに気付いた様子もない。

私はその姿に何か近づいてはいけないような、聞き入ってはいけないような気がして思わず足が半歩退く。

「さん、ごめんね。俺、度忘れしてて来るのがこんなに遅くなっちゃった」

だが、居てはいけないと思う一方で足は縫い付けられたように動かず、やがて耳が風の音に慣れたのか断片的に音を運んでくれた。

石の前で語りかける彼の言葉は優しく、悲しげで切なげで、彼が語る麻帆良での日々と私も知らない日々の独白は懺悔をするように、彼の声は泣いているように聞こえた。

「何の因果か日本に来てるけど……ついこの間なんだ、思い出したの。だから、ごめん忘れてて……色々考えたんだけど、俺

」

そしていつの間にか近づいていた距離に、音は完全に聞き取れるようになっていて

「ムンドゥス・マキクス向こうの世界に戻ろうかと思う」

予想しえない単語が耳に飛び込んできた。

「っ!? ってアキラか、聞いていたのか?」

「あ、いや、その……」

彼の言葉に後驚いた為か足元でパキリと枝でも砕くような音が響く。いくら彼が目の中のそれに集中していようと音を聞き漏らすなどという希望的且つ楽観的考えが通る程気を抜いているわけもなく、こうして目の前に重苦しい空気が訪れる。

そこで、最初に沈黙を破ったのは彼ではなく私だった。

「……さっきの話」

私自身驚いているが止まる事はなかった。

覗き見や聞き耳を立てていた罪悪感を感じているがそれよりも放っておけない事実、単語を耳が拾ってしまったのだから。

「……魔法世界に戻るっていうのは本当なの？」

嫌な予感はしていた。彼が何かを話そうとしているのは薄々気づいていた。その悉くが機会に恵まれていなかっただけで、本当は私自身分かっていて聞くのが怖かったのかもしれない。

いや、聞き返すのが怖かったのだ。彼がああいう、こつという表情をしている時は決まって自身を責めるような悔いるような悲しい目をする。その時の彼の言葉に嘘はないと知っているから。

続いて肯定の意を示す小さな首の動きが否定してほしいという私の願いを否定していた。

「ああ　いや、何も直ぐって訳じゃないよ。こつちにも用事が残ってるし、仕事も途中で投げ出すのはギルドの信用問題的に不味いから。場所が場所だから手続きはこつち来る前に学園長に頼んだ。予定では多分今学期が終って直ぐになる筈だよ」

何だそれは……つまりもう止めようも無いという事じゃないか。

彼の決意はもう決まっていて、これは相談ではなくただの事実報告だ。

とても事務的な、上司が部下に要項を傳達するように部分部分を省いたとても単純明快なもので、余地も何も無い、また彼は　　っ！

「　　っ、　　て　　」

「え？」

「また、そうやって黙っていなくなるのっ」

せき止められず溢れだした感情はそのまま彼に向かって押し流される。

意図的に、子が親に反発するようにそれは衝動的で止めようがなかった。

例え自分も目を逸らして耳を塞いできた事であろうとも、こうして久々に面と向かって話す事に喜ぶよりも湧き上がる悲しみと憤りは制御が効かず。同時に、目の前の彼により悲しそうな、困らせているという事が理解できるが故に自分の身勝手さにも嫌気がさす。

「……ごめん。でもさっき言った通り俺も帰ってこない訳じゃないし、早くて夏休み後半、遅くても来学期にはこっちに戻ってくる。やっぱりアキラ達の卒業は見届けたいし　　」

違う！

「そっじゃないー！」

私が言いたいのは私、私達には何にも相談が無いのかという事。恐らく彼の相方であるアインさんは知っていただろう。でも私も、多分刹那さんもこのことは知らない。

私たちはそんなにも他人だったのか？

たった数か月でも、苦しんで笑ってふざけてからかってからかわれて、少なくとも私はそうは思っていない。思っていなかった。なのにこれではあまりに一方的、あまりに私が馬鹿みたいじゃないか？

「　　なんで、なんで私達には何も言ってくれなかったの？」

「それは……俺は、俺がいわゆる　　」

「龍に変身できるから？」

「！？　……知ってたのか………」

驚愕に目を見開く彼だったが、すぐに落ち着いてそうかとだけ一言だけもらす。

この事を言うべきかは迷っていた。彼がそれまで頑なに使わなかった事であるし、あれが私たちに見せたくないものであるのは容易に想像がついたから。なのにその札を切ったのはこれ以上彼に遠回しな拒絶をされたくないが為、いつそ面と向かって拒絶された方がすつきりするというこれまた身勝手な考えからだった。

「あの姿は　　もともとそんな力があつたのかは俺も分からない。ただ、この力は小さい頃に突然使えるようになったもので……」

「？」

そこで彼は言葉を区切ると目をつぶって何かを自分の中で噛み砕い

ているかのように間をあける。

その姿と突然区切られた内容に首を傾げる気配を感じたのだろうか、彼は悲しい目をしたまま笑って私の頭上に手を置く。

「いや、師匠の言う通りなんだなって思ってな　　そういえば

アキラも怪我してたんだろ？　ここにいて大丈夫なのか？」

「私は　　っ」

また話を逸らすのかと手を振り払って食って掛かりそうになった私に彼は慌てて手を振って否定をする。

「ああ、勘違いすんな。何も帰れって言ってるわけじゃないよ……ちよつと話が長くなるから、ここでこのままでも平気かかって、な？」

「え？　ああ、うん。私は……平気だけど」

ハトが豆鉄砲を喰らったようなというのはまさに今の私のような状態なのだろう。

なんとなく彼が促した横に座る気にはなれず、私はそのまま彼の対面となる木にもたれかかったまま話を聞く事にした。

「……アキラには　　ていうか、こっちの人間には誰にも言っていなかったか。あ、いや、西（こっち）の長は知ってたか……俺には姉弟、義理のってやつだけど姉がいたんだ」

「それって……」

話は始まったばかりだが雰囲気でわかる。

彼がここに来た意味が

「ああ、義姉さんだ」

彼が視線で促す先の石、墓石が誰の為の物であるのかも。

「……どんな人だったの？」

ありきたりな言葉しか言えない自分を恥じた。

もっと気の利いた言葉は浮かばないのかとか、今の言葉はタブーだとか自分の中で自分を張り倒したい気分になった。

だがすでに出た言葉というのは消えようがない。私は目の前にいる彼の言葉を静かに待った。

そうして1分程時が流れたか、短いようで長い沈黙の長考を終えて、彼はポツリポツリと徐々に語りだした。

「そうだな……昔、といっても五年前で、俺も記憶を封印されていて、思い出したのはつい最近なんだ。……当時の俺は今より無口で人見知りしてたっていうか無愛想を絵にかいたような奴で。いろいろ困らせたり、怒られたこともいっぱいあったけど俺が泣きそうになると笑って手を差し伸べてくれる……俺にはもったいないくらいの自慢の義姉さんだった」

その表情は依然として悲しげだったが、同時に誇らしいように、懐かしいように相反する色を湛えたまま、彼は押し出すように語り続けた。

取立47回目　く独白と懺悔く（後書き）

年も明けて皆さんいかがお過ごしでしょうか？

どうも、遅ればせながら失礼します。豚×2です。

私は……そうですね。中々に暇が少ない正月というものを迎えていました。この時期はみんな経験しているものなんでしょうかね（苦笑

さてはて、私の身の上話なんぞはとりあえずうつちやり、今回の47話目です。今回は文字数が……その、2万字を超えるという相変わらずというか負の方向にレベルアップしたためいささか軽量化しました。穴あけです。エアーです。整理整頓とも言います。

そんなわけで何とか導入部的な感じで絞められました。いや、エヴァの戦闘シーンを削れば何という事も、でも作者的には気に入ってたり……んーこのあたりが私の私たる小説の無駄な部分なんですかね？ まあこの後の過去話は2話構成、おまけというかダークなものを混ぜれば3話分になりますがそちらは時間を空けて連続更新します。というあか本編よりそっちの方が先にできていたり（汗 まあ予定は未定！という偉い方のお言葉が……え、無い？

ま、まあそんな感じでこれからもお送りしていきます。更新は相も変わらずカメですが、どうか皆様今後ともよろしく願います。

取立48回目　〜遠き日常〜

身を磨り潰すような思いでその光景を脳裏に描く。

でも、辛いとか苦しいとかはこの際関係ない。目の前の彼女の目を見て話さなければならぬと思った。

これは自分の我儘の結果、嘘や誤魔化しで終わらせるのは間違っていると思うから。

思い出すのは五年前、季節は、こちらの世界でいうなら秋といったところだろうか。

空は雲も霞む程度でほぼ快晴、若干肌寒くなってきて夏が恋しくなってくる。この地域は降雨量が少なく、この時季になると昼間に動きやすいが、その分夜の冷え込みが半端ない為肌に堪えるといった具合であり好きではない。

だけど、天気というのはさして重要じゃないだろう。

ありていに言っただけ、それは最も摩耗しやすい記憶だ。

実際に忘れていた身で何をと言われそうだが、この日を忘れる事はありませんと断言できる。こうして封が切れた今、忘れたくても二度と忘れない。今でも、今だからこそより鮮明に思い出す。

なぜならこれは自分の日常が壊された切欠になった日の記憶。

そう、いつものように始っていつものように終わると思っていた日常。

だけど、そんなものは誰も約束していないって、そんな当たり前の事に気付かなかった。

これはそんな馬鹿なガキが過ごした最後の日常の話。

貴方は怖いと思う人、いや動物でもいい。そんな者あるいは物と直面した時、咄嗟にどう行動するだろうか？

いや、突然何を聞いているんだとか真つ当な疑問が浮かばれるかもしれないが、どうか軽く受け流して欲しい。所謂これは現実逃避の一種というやつで、今まさに僕が直面しているのが苦手というか“怖いおじさん”と相對していたりするのである。

だが、皆経験があると思うが、いくら怖かろうと前に進まなくちゃいけない時がある。僕は意を決し、手に握るクシャツという擦れる音をどこか遠く耳にしながら声を振り絞った。

「……ごめんください」

ふんぞり返って周囲に蔽ついサーチライトを利かせている大男を声をかける。その声は刺激しな為に掠れる様に弱々しかったと思う。

だが、決して僕が弱虫という訳ではない。こんなに筋肉隆々で、彫が深いどころか鬚りの先に見える目が時々光るような容姿をしたこの人が、客商売なんて畑違いもいいところな職についてあらせられるのが問題なんだ。

あ、もちろんヤのつくお家のオヤビンさんではないのであしからず。農を愛するれっきとしたベジタリアンなそうな。

「はい、いらつしや　　なんだ、アハトか……今日は一人か？」

横から聞こえた声が僕の声だと分かると顔に張り付けていた営業スマイル？　が霧散した。

ぞくりと総毛だつような彼の営業スマイルにもここ最近はいび

慣れてきた。初めはそりやもう山賊かなんかだと見間違えて思わず養父とんちんさんの背中に いや、今じゃこれでも顔馴染みの方である。いい加減慣れる僕。

家は養父が家事全般をめんどくさがるので基本的にその大部分が僕の仕事だ。こうして買い物に行くのも、特定の場合を除いて僕の役目なのだから。

そうして何度目になるか分からない内心の挙動を悟られないように努めて平静を装い、何とかコクリとだけ頷き返す。すると、俯き加減だったこちらの頭上に影が差し、ゆっくり顔を上げるとおじさんが節くれ立った手を差し出してきていた。

これまた何時もの 若干慌てていた気もする ように握りこぶしの中でクシャクシャになっていた買い出しメモを手渡す。

「ん……」

おじさんはメモを見ると一つ頷いて手近な籠に内容のものを入れていく。

アハト・ジーベンス、五才。初めてではないけど只今お使い中である。

目的の品を揃えると、いつもの様にこの体格では大変だろうとおじさんが籠を背負うのを手伝ってくれる。

初めは無言で差し出された籠にビクついたりもしたが、その顔もとい見た目……じゃない、寡黙な性格から勘違いされる事が多いけど、接してみると気配りのいい心優しい人だというのが解る……解っているはずである。

「あの、いつもありが」

「ホラ」

「？ あれ、コレ」

いつもの様にお礼を言おうと振り返る僕にそれまでと違った出来事。布製の袋が目の前に落される。

「ん、おまけだ。嬢ちゃんにもよろしくな……女房も寂しかったから、たまには顔を出すように言っといてくれ」

中身は家の人、特に僕と義姉さんが好きな実が入っていた。

話題には一言も拳がっていない　というより会話らしい会話なんて殆どなかった　のにメモから献立を予想でもしたのだろうか？

「あ、えつと。はい、伝えときます……あの、いつもありがとう、ございます」

夫婦でやっている小さな店だけと養父とっふちんさんと昔馴染みらしく、この町でも何かと顔を合わせる二人だ。と言っても小さな村では道行く人のほとんどが顔馴染みなんだけど。

そんな町であるから僕たち姉弟も知り合いが多い。当然僕より年上の義姉さんは町の人にも顔が広い。

こういった些細なやり取りが嬉しくもあり、養父さんに任せられた雑事ながらこの“買い物”という行為は一日の中で楽しみな部類だったりする。

……もつとも、市場のおじさんをいい例に僕があまり弁がたつ訳でなかったのは分かると思う。

意外と量のある袋に前方を遮られながらも黙々と帰路に行く。途中、道行く人に挨拶を返すのは忘れない。

ふと見上げた空はもう日がお山の先にかかりかけている。時間的

にはまだまだ夕ご飯には遠いがこの時期になると日が暮れるのが早くなるので急いで帰ろうと思ってた矢先にこれだ。

心持ち歩調を上げて小走り気味に駆ける。下げた籠が足に当たって歩きにくい文句なんて言っていられない。

だって今日は

「義姉^{ねえ}さん、もう帰ってきちゃったかな？」

久々に家族に会えるという事実には足が浮きそうになるのを堪え、麻袋からこぼれ落ちそうな卵を入れ直した。

その人と初めて会った頃の事は残念ながら記憶に薄い。当時は4歳にも満たなかったから仕方ないのかもしれないけど、あの人について表すなら一言で十分だ。

“損な性格”という一言。

気質というか、人が面倒に思う事でも率先する。困っている人は放っておけない放つとかないというなんというか、正義感溢れる人で良くも悪くも場の空気を読まずお節介焼きだった。

前に僕が町の苛めっ子と相対してボロボロになって帰ってきた時、説教と称した般若のような暴走っぷりは苦いような嬉しかったようなどで、非常に判断に窮するが……まあ、どこまでも真っ直ぐで“英雄”に憧れていた義姉さんは俺にとってある意味で苦手で、ある意味で誇らしい存在だ。

そんな義姉さんは出会った14の頃にはもう養父さんのギルドで働いており、16を過ぎた頃から外の団体に所属して、主に旧世界を拠点に各地を飛び回っていた。

この間帰ってきた時は仲間内に変な異名が付いている事を教えられ、それを僕に散々愚痴っていた。個人的にはカッコいいと思った

「ただけど、義姉さんにしてみれば気に食わないというか、恥ずかしいらしい。」

「もう一つの方も似たようなものだと思うけど　あ、作りすぎたかな……」

「考え事しながら別の事をしていると出来がお粗末になるとか言うけど、僕に関してはどうやらその“お粗末”のベクトルが違うらしい。」

「目の前に並んだ料理の数々。だが、ここはテーブルではなく三人暮らしには明らかに広すぎるキッチンで、そのキッチンを所狭しと並ぶお皿。もちろんお皿の上にももれなく料理が盛られている。」

「……後ろのテーブルにも料理は並んでいた筈なんだけど。」

「つまりあれだ。思考が中断したのは料理を盛るスペースがない為に手が止まったからだったらしい。」

「いや、その前に気付こうよ僕……」

「……しょうがないよね。いくつか包んで孤児院の方におすそ分け」

「ただいまー！」

「……しかし今日はどうやら間が悪いらしい。」

「トタトタとリズムよく廊下を一直線に向かってくるそれは久しぶりだけどどこか聞きなれたもの。」

「おかえ」

「ただいまアー君ー！！」

ドアを開けるなり飛びかかってくる義姉1号。もちろん2号などいな 似たようなものはいるが 現在進行形で既に目の前にドアップな義姉さん。

本能的に避けるか避けないか微妙だったが、経験則から理性がそのまま受け止める事を選ばせ 訂正、下敷きと相成っている。

「ん つ、この感じも久しぶりねえ〜アー君は寂しかったかなあ？」

「……別に寂しくは」

「寂しかったかなあ？」

「……だから別に」

「さ・び・し・か・つた・カナ？」

なんとというか、こんな少々残念 もとい強引な人である。

いや、一応これでも有名人で、義弟として弁護するなら普段は尊敬できる女性

「ん ほっぺがヤッコイわ〜！」

尊敬できる

「髪もサラツヤで あ！ すっごいご馳走！！ これみんなアー君が作ったの!？」

尊敬……

「ん ……！ おいしいっ！ アー君またお料理の腕上げたねっ、ホラ早く食べよ食べよ」

あー……うん、ちょっとマイペース過ぎるけど良い義姉さんナン
ダヨ……きつと。たぶん。

「あれ？ そういえば父さんは？」

「……ギルドの定例会に行くって、一度ギルドに寄るって言ったけど……会わなかった？」

うっん、と首を振りながらサラダからグリルにターゲットを変更して自分の皿に盛る義姉さん。

なんとというか、既に食べ始めているのに養父さんの事に気付くのが今更過ぎる。

「ん っ！！ この味付けも中々っ、やっぱりアー君また料理上手になったねー」

まあこの通り二人だけというには広すぎる部屋で夕食を食べている。が、いくら広いといっても目の前の人が騒がしいので寂しいだとか沈黙が痛いなどと感じる暇はない。

「……簡単なものだけだよ。下拵えされたのはいいけど、実際に魚を捌くのは苦手なままだし」

「ノンノン！ そんな苦手意識持ったままじゃ上達しないぞ！ お嫁の貰い手もなくなっちゃうんだからっ」

「……………僕、男なんだけど」

「あ、こっちもおいしい！」

こんな感じで人の話を聞かない　　もとい、食卓に言の華を提
供する義姉さん。少し咲き乱れすぎな気はするが務めて笑顔で対応
するようにする。時々文句を言いたくなるけどなんだかんだで嫌
いじゃないからだ。

……………まあ絶対、口が裂けても本人には言ってあげないけど。

「　　それでねえーそいつつたら私を見て化け猫〜！　なんて言
って逃げ出すのよッ！　全く、ちょ　　っと脅かしたからってあ
そこまで　　って、アー君聞ってる？」

「え？　ああ、もちろん聞ってるよ義姉さん。それでその盗賊さん
はどうしたの？」

「むう、まあいいわ。えつとね　　」

そしてその時の光景を身振り手振りで嬉々として話し出す義姉さ
ん。その内容は……………まあご本人達の為にも察してあげて欲しい。件
の盗賊さんにはご愁傷様と心の中で手を合わせておく。

もうじき18になる筈なんだけど、こういった行動派な所はどう
なんだろうと義理の弟ながらに心配になってしまったのは秘密だ。
だけど、そうは言っても生みの親……………というより拾いの親？　の
養父さんは出がちで実質義姉さんが育ての親だったからだろうが、
なかなかこの人には頭が上がらない。2年近くという長くも短いよ
うな付き合いだが、なかなか侮れないのだ。

今もいつの間にか僕の稽古の話に話題が転換されているのに何と

かっついていく。

僕の剣術の師匠は実は養父さんではなくこの目の前でニコニコとホンワカな雰囲気全開な人なのだ。いやほんと、人は見た目じゃないとここに進言しておく。

「今日は、レン兄に相手してもらったよ」

「そっかーまあ同い年のレベルはとっくに追い越しちゃったもんね。でも、レン相手はちょっと早かったんじゃない？」

「むっ」

その言葉にカチンと頭に血が上る。

ニヤリと挑戦的な目でこっちを見る義姉さんの顔はからかっている事は解ったがそれで止まるかと言ったら話は別だった。

「……これでもレン兄には負けなくらいにはなったし、新しい魔法だって覚えたんだ。これなら」

「ふーん……これなら、ね」

「あっ」

と乗り出してきた義姉さんが僕の左手を掴んで裏返す。

そこには今日のとある騒動で負った火傷の痕が残っていた。

「やっぱり」

努めて見えない様に隠していた筈のそれはあっという間に看破されてしまった。こっぴつとこころが頭が上がらない一因なんだけど、

義姉さんは僕の嘘や隠し事は殆ど看破してしまう。嘘が特技という性格ではないけど、こつも簡単にはれてしまつと　　そろそろ現実逃避をやめよう。上から降り注がれる無言の重圧に胸のあたりがキリキリしてきた。

「あ、えつと……これはつまり　　」

必死に言い訳を脳内で検索、高速で該当する単語を構築して

「　　そういえば今日、町の方で困つたお客さんが出たらしいわね」

「えつ」

「困つてる市場のお客店員さんを助けたのは何でも10歳にも満たない子供と20前後の青年の二人組だったとか」

「あ、それは、あのですね……」

「その他には村の裏にある森に無断で入り込んだ大小の二人組がいたりとか　　」

「!？」

「マズイ……」

「何が問題か？」

別に怪我をしたことがではない。もちろん心配をしてはいるだろうが別にその程度だったらこんなにビクつきはしない。

「　　別に、迷惑な人を懲らしめた事には姉さん悪い事とは言わ

ないよ。むしろ褒めてあげたいくらいね……。でも」

そう。義姉さんの性格を考えれば町に現れたちよつと困ったさんな人達を懲らしめた事くらい問題じゃない。

「森までの道には一般人が間違つて入り込まない様に森番が居る筈なんだけど……。当日何故か、その時間の前後だけ記憶がないんですって」

「へ、へえー森番さんも大変だね。疲れて寝ちゃつてたのかな？」

「ねえ、その森に入った二人組つて誰なのかな？」

そう、無断で入つてはならない場所に忍び込んだのが問題なのだ。相方が誰だったかはこの際おいておいて。

だけどそれは 兎に角、以前の事を考えるとお仕置は必須、それだけは何としても避けたい。

よし、嘘は得意ではないと言つたばかりだけど、ここはそうも言つてられる場合じゃない。これまでの経験を総動員し、手本に忠実且つ、臨機応変にこの窮地に活路を見出すべく、僕はここに嘘を貫き通そう。

「 言いなさい」

「ハイ」

情けなくもたつた一言で白状させられました。

沁み付いた上下関係というのは時に強固な決意すら簡単に瓦解させる。

まあ、人から見たらそんな大層なものではないかもしれないけど。

「っ
？」

竦んできつく閉じていた瞼をゆっくり開けて相手方をうかがう。

その表情は俯きがちな事もあつて僕の方からはよく見えなくて、辛うじて見えた口元は笑っているように見えた。

「お、怒らないの？」

恐る恐る首を上げて伺った顔は相変わらない。

義姉さんは笑ったまま手に持った器とフォークを下した。

「まさか、アー君ももう大人だもんね。無事ならそれでいいわ。お姉ちゃんも心配なんてしてないし」

「そ、そう……」

どうやら勘違いだったようだ。

心配性な所はどうかならないかと思っていたのに、いざ心配な
んてしていないと面と向かって言われると寂しいと感じるのだから
おかしな話だ。

そう、自分の中で首を傾げつつ手に持ったフォークを取り分けた
サラダに刺そうとして

「あ、そうだ。折角だからこれからアー君の練習の成果を見てあげ
よっか」

「え？」

何をいきなり言い出すんだこの人は。

思わず取り落としそうになったフォークを慌ててつかみ直して名案だといわんばかりに笑っている義姉さんに向き直る。

「何驚いてるの？ 帰ってきた後に稽古してあげるのはいつもの事だったじゃない」

「あ、まあ……うん」

確かに。

義姉さんが返ってきた日には練習の成果と称して稽古をするのが習慣になっていた。

でも、それはほとんどがどちらともなく離れの修練場に向かうか、僕から言い出すかのどちらかで、しかもこんな夕食時は翌日に回されるのが常だった。

依然夕食後をお願いしたら

『夜に運動したらおなかがすいちゃうからダメ』

とかなんとか言われて断られた。確か“だいえつとちゅう”とかなんとか言っていた気がする。

ともかく、こんな風に義姉さんから提案してくることは今までに一度もなく、殊更強調されていた笑顔の違和感の正体に、この時の僕は気付けずにいた。

「さ、早くいきましよう」

そう言っ僕の手を取る義姉さんに引張られながら僕は修練場へと連れて行かれた。

そして

この日、僕は生まれて初めて女性の笑顔が怖いと感じたのだった。

「んで、扱き下ろされてふて腐れたアハト君は俺の所にいると」

「……………」

「…………俺も暇じゃないんだけどねー」

目の前の切株の上で木剣を杖にダルそうにしているのはレン兄とレーバルト・スタンプ。

レン兄というのは義姉さんがレンと呼んでいた事から呼ぶようになった僕が使う愛称である。

そして切株に腰かけたレン兄と僕は何も世間話をしに来ているわけでもない。その手に持つ木剣で理解してもらいたいが、今さっきまで稽古と称した乱取りの真っ最中だったのだ。

レン兄は僕の剣術・魔術に関する師匠その2で義姉さんがいない時はだいたいこの人に見てもらおう。

ちなみに、現在の僕はというと彼の足元でグロッキーだと言わんばかりにのびている。

対して髪を後ろで一括りにして水筒をあおるレン兄。が、悔しいかな、その顔には汗一つない。

………… ホント、僕の周りの人は遠慮も容赦もない。

昨日は義姉さんの挑発に思わず「負けなくなった」と強気に出たが、逆を言えば勝てるわけでもない。寧ろこうしてへばってる事の方が多い。最近になって“簡単に”敗けることがなくなったのは事実だけだ。

「僕、強くなってる？」

僕はいまだに酸素を欲しがる肺を無理やり黙らせて起き上がる
として

「あ……」

「ん？ どした。ハンデはこれ以上付けられないぞ？」

「あ、いやそうじゃなくて」

というよりあれだけ容赦がないように見えて手加減はしっかりと
していてくれたらしい。

何故か胸がムカムカとしてくるが別におかしくはないし、レン兄
の性格を考えると当然だと自己完結する。

それよりも今朝、夜通し続いたお仕置が終わった後に修練場を後
にする義姉さんから預かったものがあつたのだ。

「伝言？」

「うん、えつと義姉さんが……」
『アー君にイロイロ教えてくれたお返しに近々お礼しに行くから大人しく待ってるように』
「だそうです」

「……………」

そのまま沈黙する事数秒、いきなり目にも留まらぬ速さで林を駆
け抜けて視界から消失したレン兄。

呆気にとられながらも僕が感じた事はその速さに本当に手加減し
ていたんだなという事だった。

そして翌日、街中で見かけた包帯だらけの人間を発見し、子供な

がらにお礼にもイロイロな意味があるんだなと学んだそんな日。僕は彼に声をかけることができませんでした。

取立48回目　〜遠き日常〜（後書き）

どうも初めまして豚×2と言います。ご無沙汰な人はごめんなさい。この度、就職後ようやく仕事にも慣れてきたので執筆を再開してみました。何の報告も無くお休みしていた事、申し訳なく思います。久々にログインして、半年もログインしていなかったからこんな小説忘れられているんだろうなと思っていたら、意外な数字に二重の意味で驚きました。例え少しでもお時間を割いて読んでくださる方がいると思うと久々の筆にも力が入りました。はい。ありがとうございます。そしてやっぱりごめんなさい。

更新は細々と続けていきますが、今回の様に長期に途切れる事がないようにやっていきますので、なにとぞ、よろしく願います。

では、久々に　　再見！

取立49回目　く禍殃の記憶く

その日、僕はどうしようもなく浮かれていた。

珍しくレン兄から稽古で一本を取れたから。養父さんが珍しく褒めてくれたから。そして義姉さんがある約束してくれたから。

いい事続きで、今思うとその時の自分をぶん殴りたくなるくらい僕は浮かれて、気が抜けていた。

「え？　旧世界に？」

「そ、アー君前からギルドの仕事したいって言ってたでしょ？」

それは前々からの約束。

10代からギルドの仕事をして現在も飛び回る義姉さんは憧れだった。だからいつか僕もと一緒に仕事に連れて行ってくれと頼んだことがあった。

もちろん今までに旧世界どころか町から遠出したことなんて一度もない。そもそも義姉さんに頼むのだって養父が出した条件だったからだ。

切欠はごく単純。時々都市を目指すキャラバンが町に寄る事があり、その時見た見慣れない品物の数々に心惹かれた事が始まりだった様に思う。

でも、見た事も無い世界。そういった未知のものに憧れていたのは確かだけど、幼いは幼いなりに不安感というものがある。

だから手近な範囲でギルドに憧れた。

彼等は依頼があれば旧・新世界関係なく、東西南北どこへでも飛んでいく。ギルドがあるのは隣町ではあるが一度養父さんに連れられた時に聞いた彼らの体験談は今でも覚えている。

だから日も変わらない内に頼み込んだ。初めはあの手この手でごまかされ、剣の鍛錬に魔法の習得。身を守る最低限の物を身に付けてからだと言われてからは毎日コツコツとこなしていた。

初めはすぐに飽きるのだろうなどと思っていたのかもしれないが、その時の僕は自分でも不思議なくらい真剣に取り組んでいた。何かを駆られるように必死に教えられる一から十を取りこぼさない様に必死に。

養父さんなんて『義姉さんに認められたら許可しよう』と言い出す始末、もちろん義姉さんが頑なに認めてくれなかったのはこれまでの現状からわかるかと思うが……。

そんな毎日の中でのある日突然の義姉さんの一言。まるで何気なく、今思い立ったかのように話す義姉さん。向こうの世界の話や仕事仲間の事。色々な事を話しているが半分も耳に入らなかった。

そもそも僕が仕事についていく事を一番反対していたのは義姉さんだ。剣や魔法の鍛錬を言い出したのも義姉さんだし、何かにつけて話題を逸らしてきたのも義姉さんだ。思わず別人だとか夢なのではと知らず頬をつねってしまう。

すると目の前から小さい噴き出すような笑い声が聞こえた。

「プツ、くくつ、ああ、ごめんごめん。まさかそんなにばかんとするとは思わなくて」

何がといまだに思考が止まっていた僕も徐々に頭が回りだして顔が熱くなるのが解る。

「まあ、期待しすぎは禁物かな？ 依頼の内容も護衛とか討伐系の

物じゃなくて手紙の運搬なんていう簡単なものだし」

確かに、たかが手紙かと気落ちしたのは事実だけど……でも、行けるのなら関係なかった。

「どうする？」

何より、必死に鍛錬してきた結果を認めてくれない様に、いつも首を横に振ってきた義姉さんが連れて行ってくれるという。なら、内容なんて二の次だ。

僕は首が折れんばかりの勢いで頷いていた。

「へー旧世界ねえー、でも危なくないのかい？」

「ううん。義姉さんも一緒に行ってくれるから。あと、向こうにできた知り合いに合わせたいんだって」

その日は自分でも驚くぐらい饒舌で、おじさんに代わっておばさんが店に出ていた市で話し込んでいた。話題はもちろん今日義姉さんが話してくれた旧世界行きの話。

珍しく聞き手に回っているおばさんは僕の話に飽きもせず頷いて返し、良かったねと頭に手を置いてくる。撫でるおばさんの手はむず痒く、恥ずかしくもあつたけど、不思議と払いのける気は湧かずにされるがままにしていた。

「それにしても急な話だねーあの人からこの間クウリちゃんが帰ってきたって聞いたばかりだったのに」

「うん、僕もびっくりした」

もちろん仕事をそのまま手伝わさせてくれるわけではないかもしれない。義姉さんも見せたいものがあると言っていたし、多分感覚的には旅行に行くようなものなんだろうか？

だけど、僕は同行できるだけでも嬉しかった。養父にこの町に連れてこられてから2年と少し、当時の事は覚えていない程小さかったから僕はこの町以外に景色というものを知らない。

それでいきなり旧世界に行くといわれれば正直不安もあるが、見た事無い街に行けるといのはそれだけでワクワクした。

何よりあれだけ反対していた義姉さんが連れて行ってくれるというのだからその気持ちも一押しだった。

「でもどんな所なんだろう？ 暖かい所かな？ 寒いのかな？」

「おや、行先は聞いてないのかい？」

「う、そういえば何か言ってたかもしれないけど……よく覚えてない」

あははと大口を開けて豪快に笑い声をあげるおばさんに畏縮する。気持ちばかり逸って落ち着けと怒られたのは今朝の事だ。いけない、こんなんじやまたレン兄にからかわれる。

「あ、じゃあそろそろ……」

「ん？ ああそうかもうそんな時間だね。今日はお姉ちゃんとかい？」

「うん、義姉さんには昨日コテンパンにされたから。今日はレン兄と作戦会議！」

布袋に入れた木剣と皮の水筒を背負い直してよしと意気込む。

義姉さんが返ってきて今日で5日。今回の滞在は珍しく長いけど4日後には旧世界に出発である。出来ればそれまでに一つビツクリさせたいとレン兄に無理を言っ て頼み込んだのだ。

一本、と言えれば恰好がつくかもしれないけど、そこまで夢見がちにはいられない。昨日は……………これでもかというくらい鼻を折られたのだから……………。

うん、せめてそれくらいしないと立ち直れない。

「そうかい。おばさんはよくわからないけど怪我しないようにね」

「うん。あ、でも怪我なんて怖がってちゃ上達はしないんだよ？」

「おや、そうかい？」

「義姉さんもレン兄も容赦ないから……………」

「あっははは、ならおばさんはアハトにはコレでもあげようかね。頑張るんだよ？」

「え、これ売り物」

掴まれた手の上にポストと握らされたのはちょうど僕の手にも収まるくらいの木の実が一つ。だけどそれは食べ物ではなく、外見中身

も薬効が高いこの土地では割とポピュラーな薬の材料。加工せずにそのまま傷薬としても使えるそれは原物のままでも少々高価な品物だったはずだ。

さすがに受け取れないと返そうとすると、首を横に振るおばさんに手を上から握りこまれて逆に戻される。

「おばさんも応援してるからしっかりね。アハトちゃんにはいつか町を守るくらい強くなってもらわなくちゃいけないからね」

「……ありがと！」

レン兄との待ち合わせに向かう途中、僕は顔がにやけているのを自覚しつつも止められずにいた。

だって夢にまで見た外の世界に行けるんだ。それに、義姉さんや養父さんに少しでも認められたのかもしれないと思うと自然と足取りも軽くなっていく。

「　　」と

そんな事だから道端の石ころになんて足を取られる。危なげだったけどバランスを取り直すことに成功。うん、誰も見てな

「おいボウズ」

「え　　」

かけられた声に反応して振り返ろうとして、僕の目の前は何故か暗転していた。

「ん……あ」

何か騒がしい音が頭の中と耳に響いて目に眩しい光が飛び込んでくる。

「え!？」

「お？ お姫様のお目覚めのようだぜえ」

「おいおい、ボウズは男だぜ」

下品な笑い声が耳に障るが僕はそれどころじゃなかった。

「あ　アー君、大丈夫？」

後ろで手を縛られているのか、不自然に蹲った状態で顔だけをこちらに向ける義姉さん。服の所々が裂け、顔には殴られたのか頬が赤く腫れている。

状況を理解するのに頭が霧にかかったように思考が一気にクリアになる。まだ痛みで朦朧とする部分があったけど、理解が追い付かなくても関係あるかと目の前の男たちに敵意をむき出しに猛る。

「お前らっ、義姉さんに何してるんだ!!!」

思考が追い付く前に体が飛び出そうとして、足も手も思い通りに動かない事に気付く。

どうして　　ッ!?

自分の体が動かない事に気付くと同時に、思い出したように体のあちらこちらから頭へと痛みが訴えかけられる。顔をしかめつつ顔をめぐらし、ようやく自分も縛られているのだという事が解った。

「チッ、うるせえな……オイ!　誰かガキを黙らせる!　このままじゃ気分が萎えて仕方ねえ」

「まあいいじゃねえか、弟の前でつてのもよお。よおボウズ、お前の姉ちゃんの声はいい目覚ましたか?」

「　　ッ」

またもや場に広がる下品な笑い声、喰らいつこうにも手足を縛る枷はそれを許さない。

「ア……君、お姉ちゃんは大丈夫だから。ちょっと待っててね」

ニコリとまるで言葉と状況が噛み合わない表情で僕に告げる義姉さん。その言葉は何かを耐える様にどこか震え美味で、言葉通りじゃないなんて僕にもわかる。

「おーおー、弟思いで泣けるねえーオジサン思わず手に力が入っちゃうなっ!」

「アゲツ」

「義姉さんっ！！」

後ろから義姉さんの髪を掴みあげる。見るからに人の違う容姿、周りにいる他の男たちと体格も風格も違うそいつは

「あ？ 何見てやがる。獣人がそんなに珍しいか？」

別に、魔法世界では珍しくも無い、獣の姿特徴を持つ“人”。亜人も分類されるが、その多くは世間から差別的扱いを受ける場合が多い。外見だけでなく膂力や特殊能力など、人に比べてアドバンテージの大きい亜人はそれだけで脅威だからだ。

それでも一つの種類というモノは“違う”という事に敏感だ。過去に魔法世界を大きく二分する戦争を起こしたそれも根は人対亜人とされている。終戦こそしたが、依然と完全な鎮静には至っていないのは事実、たかが外見かもしれないが目の前の男の反応を見る限りその禍根の深さが窺える。

だが

「それがどうしたっていうんだっ。僕も姉さんも、そんな小さな事に気にしたことない！ 知り合いにだってそういう生まれの人もある、僕が言いたいのは」

捲し立てる僕に、苛立ちを露わにしていた男はその険を幾分か霧散させ、まるで哀れだと言わんばかりの表情で溜息を一つ漏らした。

「お前……立場解ってる？ コレ、お前の所為なんだぜ？」

「え？」

「ウチの奴がガキにやられたなんて噂が広まったら他の奴らに舐められる……もちろん泣きついてきた情けない馬鹿どもにはきつちりと制裁を加えたが……ほら、よく言うだろ？ 喧嘩両成敗、落とし前つつうのは痛み分けが基本なのよ。だから、な？ オイタしたてめえの代わりにこうしてお前の姉ちゃんに償ってもらってるわけよ」

何それ……

どんな解釈をすればそんな奇妙奇天烈で妙ちくりんで、逆立ちしても見間違えそうもない阿呆な回答に行きつくっていうんだ。

いや、こんな馬鹿みたいに笑っている奴の思考なんて解りたくもない。

だけどこの事態がどうして起こっているのかはおぼろげに理解できた。いくら人数がいるといってもこんな奴らに義姉さんが言いなりにするはずがない。

僕の所為だ。

目の前のケダモノの言う通り、僕があの時ちっぽけな正義感に駆られたから。

あの時チンピラ達を倒してしまったから。

あの時不覚にも拉致されてしまったから。

義姉さんは無抵抗でこいつ等に嬲られている。

ギリギリと奥歯をかみしめて暴れようにも宙吊りに縛り上げている鎖は虚しく鳴るだけでビクともしない。

「オラ！ うっせぞガキッ！！」

「っ！！」

あまつさえどうという事も無い棒切れに弾かれて無様に揺すられる。

情けなくて、悔しくて涙が出そうになる。

そんな時義姉さんと視線が合い、あろう事が彼女は気丈にも笑いかけていた。

やめて

「おおっと、お姉さんは弟君の心配をしている場合じゃないんじゃないかなあ」

「あうっ」

悪いのは僕なんですよ？

「自分の心配をした方がいいよーキミにはちゃんとオレ達の相手をしてくれなきゃあ」

「くっ だからアハトには」

義姉さんは関係ないじゃないか

「いいぜ、さっきまでと同じように言う事きいてたらなあ？」

やめる

「おい、人数はこんないるんださっさとしろよ！」

「わあ〜ってるって、急かすなよ」

やめろ！

「義姉さん！」

「だから、ウゼえんだよ！！！」

「アハト！！！」

「あーおい！ 誰か女の口塞いどけ、煩くてかなわねえ」

枷を引き千切るつもりで魔力を振り絞って張り出した体は、どう
いう仕組か欠片も魔力を絞り出せず、近づいてきた男に蹴り飛ばさ
れた。皮肉にも枷に繋がった鎖が僕の体を引き留めたが、魔力によ
る強化も防護も施していない身体はその衝撃だけでも悲鳴を上げる。

「ん　　！！！」

どこか遠くに聞こえるくぐもった声が聞こえる。

それが誰のものなのかは少し考えればわかる事だ。分かる事だが、
今の僕にはそれに応える事は出来なかった。

「まったく、大人しくつ寝てれば、良かったんだよ！ ええっクソガ
キが！」

蹲る僕に踏み蹴り引つ張り上げえ、好き放題にいたぶる。

呼吸ができているかも自分でわからない程の痛みが熱を持って襲い掛かっていた。

腹を、胸を、顔を、それこそ赤くなっている面積の方が少なくなっても続けられた。

だけど、痛みも積りに積もれば麻痺してくる。

ああ、これはいよいよまずいのかと頭のどこかが認識する一方で、危つく聞き漏らしそうな、だけど聞き漏らせない小さな音が聞こえた。

開いている筈の目は瞼が邪魔をして視界が狭く、その輪郭はおぼろげだったが、そこで何が行われているのか、何が続けられているのか分かってしまった。

情けない。

情けない情けない情けない情けない情けない情けない情けない情けない情けない情けない情けない！！

なんで魔法じゃなくて剣を取ったのか？

単純だ。身近な人が剣を使っていたから、それが誰よりも強かったから。

なんで遊ぶ事よりもひたすらに修練に励んだのか？

少しでも早く強くなりたかったからだ。

一体どうして僕は強くなろうとした？

義姉さんや養父さんに、家族に認められたかったからだろ？

その義姉かぞくさんが今、見知らぬ男達に嬲なやられているというのに、僕の体はまるでいう事を聞いてくれない。

一方的に蹴られ殴られ、見た目通り痛みに耐える様に縮こまる姿は、こんな情けない姿をさらす為に僕はいままで努力を続けてきたのか。

違うだろ？

動けないなら叫べ、たとえ殴られようと蹴られようと、蹲すって流されるだけなら誰でもできる。

僕が目障りなんだろ？

僕の声が耳障りなんだろ？

僕がそもそもの原因で、義姉さんは関係ないだろ？

ほら、だったらいつまでもよそ見してるなよ。

「……………義姉さんに……………手を出すんじゃないやねえ、この糞野郎っ」

正直喉から声が出ただけでも驚きだが、それだけで男たちの動きが一瞬止まる。

言った。

言っつてやつった。

男達は痣だらけになっている僕が声高く叫んだ姿が滑稽だったの

か、その場の空気に伝染するように笑い出す。

状況はそれ以上変わらない。止まったといってもそれだけ。でも、僕のこの行為は無駄じゃない。

「おい小僧。あんま調子のもつてんじゃねえぞ？」

こうして気の短い男たちの数人が僕を取り囲むように集まったからだ。

「ん　ん　！！」

ああ、義姉さん。心配しなくても大丈夫だから。

そんな顔しないで、それにさつきから不思議と痛みを感じない、いくらやられても大丈夫だから。

それにね、気付いたんだ僕。

こいつ等を、ここから無事に出るにはどうすればいいか。

「馬鹿がつ、ガキが粹がつてもなあ、お前みてえなチビが大人に、かなう訳ねえだろ！」

「　　う」

「ああ？」

違う。

大人だとか子供だとか関係ない。こいつ等なんて大した事無い筈なんだ。

ちっぽけで群れているだけで粹がつている底辺の存在。

僕が、俺が負ける筈がない。

コンナ無様を晒していい筈がない。

「あ？ ンだよッ、ガキならガキらしく大人しくのびて」

「ああああAaaaaaa!!!!!!」

さつきまでビクともしなかった枷が鎖がまるでガラスの様に簡単に弾け飛ぶ。

ああいい気味だ。男達の啞然とした阿保面が滑稽で笑えてくる。膨らむ感覚に僅かに感じていた痛みも倦怠感も薄れていく感じが心地いい。

ああ、そうだね。

コンナ奴ら

踏み潰してヤレばいいんだ。

塗潰されていく黒い何かに、僕は戸惑う事なく身を任せていた。

浮き上がる感覚。

まるで水の中にいるような不自由さと相反する浮遊感。視界の白さが一瞬にして赤く染まった奇怪さに、抵抗する瞼を無理やり開こうとする。

僅かな抵抗と眼球に吹き付ける熱風。そこに映った光景は、貧困な僕の頭をもつてしても一目瞭然な、地獄が広がっていた。

倒壊した民家、なぎ倒された木々。所々から黒い煙と火を噴きあげ、それ等が町を大きく包み広がり死を蔓延させる。

荒れた街並み。知っている筈の景色はまるで別物で、どこか現実味のない映像を永遠と見せられる様は夢の続きなのかと勘違いしたくなる。

自身は動けずただそれを眺める。まるで質の悪い映画を見せられているようでつまらない。キャストもストーリーも無い。ただ焼かれ壊れていく町を眺めるだけ、そんなものはそもそも映像として終わっている。

この光景には人に訴えるモノがない。悲しみや苦しみ、歓喜や笑といったおおよそ人の関心に訴えるモノがあるからこそ映えるのが絵というモノなら、これは全くの駄作だろう。

だから、これは記憶ではなく、記録でもなく夢なのだと思った。所謂、悪夢というやつである。

- ああ、早く覚めて欲しい。

- 僕はこんなモノを見ている場合じゃない。

理由もわからずそんな気持ちに駆られていた。

何が何に対してそう心を急かすのか、思い出そうとしても頭は重く、思考の海に埋没しようとするれば肌を撫でる嫌な熱が邪魔をする。

そんな時だった。映像の中で、見覚えのなくなった絵の中に、突然二つの見知った姿が流れてきたのは。

え？

「まったく、何やってんだかウチのチビスケは……こりゃ、きつついお仕置きが必要かな」

「あら、怖かったら逃げてもいいのよ？」

やる気の無いようでその手に持つ二振りの剣を油断なく構えるのは長身細身で軽装な位出立ちの男。

もう一方は身の丈を優に超える細身の長刀を片手で軽々と構える赤髪の女。

「冗談……てか、助けに来たの俺だし？ お前の方が重傷だし。むしろ逃げるのはそつちだろ？」

「お心遣いどーも……でもこの程度なんて怪我の内に入ってないわよ」

その姿は二つとも煤を被ったかの様に薄汚れ、大なり小なり負傷していた事が見て取れた。だけど、見た目は直ぐに気にならなくなった。正確に言えばその二人がなんなのか理解できたからだ。

「叱るのも兄貴分の役目らしいからな。どっかの暴力女に頼まれた事だけだよ。不思議と気に入ってるんだわ、この関係」

「それはひどい人がいるモノね。まあそう思ってくれてるのは姉として嬉しいけど……でも、譲る気はないわよ。あの子の育ての親は私なんだから。それに、私もまだまだ言いたいことが山ほどあるしね」

「そういつことなら、さっさと済ませようぜ。後始末だけで日が暮れちまう。まあ、とりあえず」

「ええ、とりあえずは」

「おいたした子供（ガキ）にお灸をすえないとね（な）ッ」

崩れていく町の映像はどんどん進んでいく。

それまでいなかった登場人物を加えて。

今までのが悪夢？

とんでもない、目の前の光景に比べればそんなものは霞んで見える。

視界はスケールが何もかも狂っているが間違いなく僕の物。

そして目の前で起きているのは戦いだ。

それも生き死にかかるといったもの。

相手は僕にとって大切な人達。

そう、僕は僕の意味に反して大切な人達と殺し合いをしていた。

これが悪夢じゃなくてなんだというんだ？

鋭く振り下ろされるのは僕の……腕？

明らかに人のモノでないそれは義姉を、義兄に容赦なく襲いかかっている。

「おお、チビすけがいつちよ前にでかくなりやがって　ッ、これは、ちよっとシヤレになってないぜ」

耳に聞こえる彼ら以外の声。これが、この場にいる人たちが彼らだけならこの音源はどこから？

だけど

夢というのは思いがけず終わりが来るように、目覚めというモノが思い通りに来るものではないのだと、そんな単純な事を、この時の僕は失念していたんだ。

「　　つてえ逃げ切るよ!!」

男の大声と共に物陰を飛び出した赤と黒の影。

そこで見たものは僕の望みに反する光景で、疾走する黒とは別に何故か僕と相對しているのは赤い女だった。

「さーて……父さん達が来るまでには決着をつけたいけど……ちょつとキツイかな？」

動いたのはこちら。あちらの負傷を考えれば攻勢に出るとは思えない。つまりこれは時間稼ぎ、さっき駆け出した男が応援を求めて戻ってくるまでコレをここに引き留めるつもりなのだろう。

だけど、その動きはどう見ても最初の様な精彩さに欠け、徐々に追い詰められるのはあつという間だった。

「やばっ」

纏れた、とは言えないような本当に僅かな停止。コンマ一秒にも満たない筈のそれは、これまでの攻防を鑑みるに致命的だった。

こちらの背面を取る様に回っていた女を襲ったのは、蜥蜴のそれをただ大きくしたような尾。鞭の様にしなり、かつ質量にものを言わせたその一撃は彼女の体を大きく弾き飛ばす。

崩れていた家屋をさらに崩壊させながら吹き飛んだ彼女は立ち込める土煙の向こうへ姿を隠す。本来なら痛手ではあるが姿を隠すの

には好機であり、戦いとするならこちらの不手際。

だが、この時彼女はどこまでも運に見放されていたようで、大きな土煙が晴れたそこには姿を暗ましているだろう彼女はそのまま、先が赤黒く染まった杭をその白い肌に生やしていた。

誰がどう見ても詰んでいる。

これが闘争なら、いや、戦いというなら既に最初に吹き飛ばされた時点で終わっている。これは殺し合いで、恐らくどちらかが命を落とさないかぎり止まらないものだ。

だから

視界に伸びるこの腕は、気味の悪い悪夢を終わらせる最悪の幕引きのように思えた。

- やめる

だけど、そんな都合のいい舞台装置なんてここには存在しない。振り上げきった腕は一瞬の静止の後にその力を膨張させて走り出す。

そこに僕の意味は介入しえない。

- 頼む止まれっ

いくら望もつと。

- 止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれッ！！

これが夢なのだ信じ込もうとしても時が止まるはずもなく、この手と爪は彼女を掴みあげる。

- なんて

そして、必死に逸らそうとした自分の意思を裏切り、このセカイは明確な感覚を持って僕に現実を突きつけにかかった。

- なんて覚めないんだよッ！！

掌を伝う熱。

確かに息づく命の感触。

爪から腕に滴る熱く、冷たい雫。

「
」

杭から無理やり引き抜かれ、急速に熱を失っていく彼女を、僕の手は目の前まで、まるで僕自身に見せつける様に掲げられる。

僕は必死に彼女を下ろせと全力で体に命令を走らせる。が、身体はまるで意思が通じない。それどころか腕は彼女を掴んだ状態から握り潰す様に徐々に絞められていく。

嫌だ。

なんで僕の目の前で、僕自身が一番大切に思っている人を傷つけないくっちゃんいけないんだっ。

確かに力を欲した。

誰かを倒したいと思った。

でも、その為に得た力で戦い殺しあって傷つけて、どうして最も願った大事な人を助けたいという願いに裏切られなくちゃいけない

んだ！

もう、僕が消えてもいいから。

お願いだから誰かこの夢を終わらせて

っ。

「……こればかりは、使いたくなかったんだけど
ね、アー君」
ごめん

耳に届いたのは僕に対する謝罪。

謝っても謝りきれない、それは本来僕がするものだ。なのに何故と疑問に思った刹那、唐突に訪れた胸の痛みと共に、僕の意識は急速に沈んでいった。

ああ、やっと。これでこの悪夢がおわる。

目が覚めて初めて感じたのは人肌に抱かれているようなぬくもりだった。

とても懐かしい、でもどこか齒がゆいような気恥しい感じ。
なのに、どこか安心感を抱かせる、そんな暖かさだった。

寝ぼけ眼の不完全な意識で頭を撫でられていると気づいたのはどれだけ経ってからだったか。

夢見が悪かった所為もあって体は起き上がる事を拒む。だが、妙な肌寒さが自分の衣服が濡れていると脳が訴えかけるように胸のあたりをもやもやさせる。

しょうがないと思いながら、その不快感と向き合う為に、まだしばしばする目を擦ろうとして……

「った　　流石に中身まで元通りって訳にはいかない、か。血も流しすぎたし、これは流石に、ヤバい……かな」

頭上から聞こえてきた声に、ようやく自分が誰の腕の中にいるのかに思い至った。

「　　義姉、さん？」

見上げた先にいたのは見知っている筈の義姉だった。

しかしその姿はいつも笑いかけている彼女とはかけ離れた姿で、所々が傷だらけの泥だらけで、顔を歪めているその姿に思わず手が伸びてしまう。

「ん　　なんだ、起きちゃった？　　っ、ちょっと、そこは今痛いからノータツチね」

肩に触れた僕の掌に力なく手を添えてやんわりと下げさせる。服で見えないけど、他にもどこか怪我をしているらしい。痛みを顔でしかめたまま起きたばかりの僕に痛い所はないかと心配そうに訊ねてくる。

どこをどう見ても義姉さんの方が重傷なのにそんな事を聞いてくる義姉の言葉の意味が分からなくて首を傾げようとして、体がいつもより重い事に気付いた。

「そう　　よかった、思ったよりも大丈夫そうね」

妙にゆっくりとした仕草で僕の頭の上に手を乗せる義姉さん。

何時もなら気恥ずかしくて振り払うはずのその手を、僕はこの時何故か振り払えずにいた。

「ねえ、アハト」

「ん……なに？」

か細くて聞き逃しそうだった声に、自分の名前が呼ばれたことに遅れて気付いて返事を返す。

頭を撫でられて瞼が重くなってきたけど、乗せられた手の冷たさに眠気を振り払った。

この時の義姉さんが言おうとしている言葉にも、聞きたくない、だけど聞かなくちゃ後悔する。そんな相反する予感を秘めながら、僕は義姉さんの言葉を黙ったまま待った。

「私ね、初めてアハトに会った時は……正直、アハトの事苦手だったんだ」

「苦手……今も？」

それは、こうして面と言われるとショックだけど。少なくともおぼろげな当時の記憶を掘り起こせばどことなく解る気もした。

だって今より無口で無反応、初めはいきなりできた義弟と仲良くしようとしていた義姉さんが距離を測りかねていたのは知っていた。ただ、それはいつの間にか義姉さんの独特の空気に毒されて、氷解していったものだと思っていた。

だから、ショックだったけどこれは事実確認のようなものだった。

思ったけど、だからこそなんで今なんだろうと、解りかねない、掴みえない何かに焦燥感にかられる。

「うっん、今は……私の大切な家族だよ」

「……そうなんだ」

「うん、そうなんだよ。懐かしいな……お父さんがいきなり弟だつて連れてきて、そのくせ　っ、世話は全くしないで、私が代わりにご飯とか作ってたんだよね……」

そう、義姉さんが料理をしている姿を見て自分も台所に立ってみようと思えた。

「お友達ができるまで後ろにヒョコヒョコついてきて……あの頃は可愛かったな……」

「キール達と喧嘩したって言ったら剣もって文句言いに行こうとしたよね」

「あははっ、そうだったけ？」

「そうだよ」

そんな事があったから、義姉さんに心配かけない様に強くなろうと剣を取った。

僕の行動、今までの短すぎる人生はやっぱり周りの人の影響を受けて来たけど、やっぱり義姉さんの影響が強かった。

だから　。

「大好きだよ、アハト……」

この一言はどうしようもない不意打ちだった。

「な、いきなり何言って　　っ」

してやったり、といった意地の悪い小悪魔的な笑みを浮かべる義姉さんに文句の手が思わず伸びそうになる。

待て、いくら顔に血が上って熱くなってもこれは生理現象だ僕の性格だ落ち着けそうだ落ち着こう。ここで慌てだしたらそれこそ義姉さんの思うつぼだまたいつもの如くいやいつもの5割増しはからかいかかるかもしれない。まずは煩い心臓と熱っぽい顔を落ち着かせて何食わぬ顔でこの事態を華麗にスルー　　待て、確か義姉さんは怪我をしていた筈だった、ような……そうだ、怪我してるんならこんな事をしてる場合じゃ　　っ！！

「　　義姉さん？」

事に思い立ったと同時に、肩に乗せられた重さに思考と姿勢を崩される。

それは人肌より低いほんの僅かな熱を持っていて、確認するまでも無い。ここにいるのは僕と義姉さんだけの筈なんだから。

目の前で寝入る様に身体を預けてるのは

「寝ちゃったの？　義姉さん？」

気怠い体を無理やり動かして義姉さんを揺すってみるけど反応はない。

だけど、このままっていう訳にはいかない。何故か忘れかけていたけど、ここは崩れた街の中、見渡せば瓦礫の其処ら彼処から火の

手が上がっている。

その手は直ぐにこちらを飲み込むほど勢いがあるわけではないけど、この場所が安全じゃないのは間違いない。

「っ」

起こす事を諦めて移動を試みる。けど、自分自身が動くのも辛いのに義姉さんを運ぶなんて困難を越えて不可能だった。

義姉さんを抱えようとして足をとられ、二人して倒れ込む。

何とか義姉さんの下から這出たけど、体力は予想以上に持っていなかったようで、起き上がれずそのまま義姉さんを仰向けに起こす。

「……どうしよう」

っ!?!? ……雨?

これはいよいよどうするか、と考えていた時、頬に伝った冷たい感触。

ポツポツと徐々に強さを増すソレは同時に大気の熱を奪っていく。

「義姉さん、雨が降ってきたよ」

それだけの事があっても義姉さんは起きなかった。

「義姉さん? 義姉さん、起きないと風邪ひいちゃうよ?」

やはり義姉さんは起きず、怪我に加えてさらに強さを増す雨に打たれてはマズイと引きずるのは申し訳なかったけど、何度も倒れながら義姉さんを運び、雨宿りできそうな場所を探す。

「……寒い」

時間と体力を擦り減らし、ようやく雨をしのげそうな物陰に運び込んだ時にはもうくたくたで、座り込んだまま手を動かすのも億劫だった。けど、まだやる事があるから、義姉さんが持っていた携帯用の杖を拝借して呪文を唱える。

『火よ、灯れ』

多少濡れていたが、幸か不幸か火種になりそうな木材には事欠かない。半分炭化していたそれから上がる火がこっちの建物に飛び火しないことを確認して今度こそ倒れ込む。

隣にいる義姉さんは冷え切ってしまったようで相変わらず冷たく目を覚ますような仕草はなかった。

お互い具合も周りの状況もよくなつたわけじゃないけど、そこに義姉さんがいるだけで不安が消えていくから不思議だ。

レン兄にはよくからかわれるけど、見られてないから今くらいいいよね？

辛うじて冴えていた目も思い出したかのように重くなりだす。

必死に義姉さんが起きるまで寝ないと気を振り絞り、力の入らない手で握った杖の柄を足に刺して痛みで眠気を誤魔化したり試行錯誤を開始する。

でも、この日。

義姉さんが目を覚ます事は終ぞなかった。

取立49回目　く禍殃の記憶く（後書き）

ぬう、少々グロ……テンプレ？

シリアスを早く脱したいと思いつつも今後の予定もノー天気にはい
かない実状（苦笑）

ゆっくりと本編とも乖離していきますしね。オリジナルが混ざりつ
つ主張が強くなっていく感じです。魔法世界編がその最たるものか
と。そろそろ主人公を主人公らしくしないとなあつてのが前々から
のご指摘から来ている課題だと思いますので」（汗）

まあ、やってやれない事はない！　ない！　ないッ！！　……はず
だよな？

もう、冬真っ盛り……用法正しくないか（苦笑）
完璧寒くなってきましたが皆さんいかがお過ごしでしょうか？

私は東京を出て初めての雪国での冬です。春先の寒さでも違いに驚
いていたので日々、暖房グッツが手放せない毎日です。

皆様、今年最後の月を風邪などで潰されてしまわないようお気を付
けください。それでは、再見！

取立50回目　く記録と記憶の果てに

「　と、いう訳でな。義姉さんが死んだのは俺が原因で、俺がこの手で殺したんだ」

「でもそれはッ」

「意識がなかったにしろあつたにしろ、結果は変わらないんだよ」

その顔に浮かべる笑顔は比喻ではなく張り付けた様に力なくて、空気を換えようと思っても口からこぼれるのは戸惑いの欠片だけで、明確な否定の言葉が続かない。

「まあ、そう暗い顔すんな　って無理な話だよな」

心の何処かにその形はおぼろげにはあるのに、言葉にしようとする途端に霧散する。口数が少ない事をこれが自分なんだと納得もしていたし、諦めていたけど、今日ほどそれを悔やんだ事はなかった。

「　この墓な、義姉さんが好きだったこの国に埋めてやろうって養父さんの提案だったらしいんだ。俺一言も聞いてないし……アインから話を聞かされてさ。実際この国に来てからまだ一回も墓参りに来てなかったから……だから、今日はここに連れて嬉しかった」

だから、彼が続けた言葉を私はただ受け止めるしかなかった。それは近衛の実家に戻る道でも同じで、私達はその中を無言のまま進んだ。

私には彼に欠ける言葉がなかった。

「本当にもういいんですか？」

「ええ、義姉さんにも会えましたし。あまり長居する身でもないので」

山門の前、義姉さんの墓参りから戻った俺たちはそのまま身体検査を済ませた。

戻るまでにこれといって異常が出るといふ事も無く、俺が起きる前に検査を済ませていたアキラも同様だ。

結果も良好あるなら長居する理由がない。詠春さんはもういいのかと引き留めてくれたが、今回の事件で協会も不安定な立場に置かれている。例えば今回の事件解決に携わったとしても、魔法使い側の人間である俺達がこれ以上いる事はマイナスにしかならないだろうと丁重に断る事にした。

「詠春さん。義姉さんの事、今までありがとうございました」

「頭を上げてください。確かにあの件はリヒトからの急な頼みでしたが、彼女の事は以前から知っていました。むしろ、断る理由の方がありませんよ」

交わす言葉は当時、俺が知りえなかった時に交わされた事。

関西呪術協会から見れば余所者である義姉さんを引き受けてくれた事、その後の管理も含めてこの人には頭が上がらない。加えて、今回の事件も後始末は全て彼らに押し付けた形になってしまっている。駆けつけた身でこの体たらく、まったくもって情けない。これじゃあアインあたりになんて言われるか。

「向こうには、一度戻るつもりですか？」

「ええ、墓だけですけど魔法世界にも建てられているらしいので…
…一度養父^{じい}さんともじっくり話しておこうかと」

正直、今この場で聞きたいという気持ちはあるけど、これ以上お世話になるわけにはいかないし、何より聞くならもっと適任がいる話し合わなくちゃいけないくて、多分一番俺が謝らなくちゃいけない人が。

「……そういう事でしたら、渡すものがあります。ちょっと待っていてください」

？

こちらの返事を待たず、気持ち忙しく母屋の方へ駆けていく詠春さんを見送って待つこと数分。彼がその手に持ってきたのは八ガキ程の大きさの木箱。朽ちる事の無いようにだろう、一目で呪術的な処理が施されているそれを解き、一通り確認した後でそれを俺に差し出す。

「これは？」

餞別、というには仰々しく、また渡されるいわれのない品に戸惑う俺。

そんな俺に対し、詠春さんは優しい目をしたまま俺の手を取り、箱を手渡して握らせる。

「私が預かっていた、彼女に所縁の品です。墓を建てる時にリヒトから一緒に預ってくれと頼まれた物ですが、今は……貴方が持っていた方がいいでしょう」

「!? あの、だったら申し訳ありませんが、これは」

「リヒトに承諾を得て中の一部を拝見させていただきました……言い方を変えましょう。これは、貴方が見るべきものです」

慌てて押し返そうとする俺の手を力強く、だけど決して無理のない力で押し留める。

手に返された遺品……になるのだろうか？ なるんだろう。正直記憶が飛び過ぎて実感が湧かない。約5年も経った記憶をさかのぼってもこれが義姉の物だったか、覚えていたとしても細かい記憶は流石に風化しかけている。

この箱を手取るにも、開けるにも気が重いというのが正直な感想だ。

「私見ですが、無理に見る必要はないと思います。聞いた話ではまだ混乱もしているでしょう……もう少し気持ちに整理がついてから、或いは、リヒトとあって彼に返すというのも手かもしれません。貴方がこの地に訪れたのもまた廻りあわせと思って、どうか受け取ってください」

「……そういう事なら、預るという事で」

不承という態で受け取る俺に、詠春さんはどこまでも優しい目で俺を見ていた。正直むず痒いものがあったので、この時の俺はそそくさと受け取った箱を手荷物に容れて頭を下げる。これで都合何度になるのか解らないが、下げても下げ足りないというのが俺の心情だった。

最後にもう一度、山門をくぐる前に、見送りに表に立ったままの詠春さんに会釈を返し、とある方向を一度だけ視界に収める。

多分二度と訪れないだろうその場所を、万感の思いを込めて、俺は瞳を閉じて一礼した。

「ええ、お陰様で はい、それでは失礼します」

本日の予定……俺的願望込みの予定ではあるが、その予定である挨拶回りを終え、一息と近くにあった自動販売機で「コーヒー」もちろん微糖 を購入する。

そしてもう一つ、ついでと購入した紅茶を付き添ってくれた相方に投げ越す。

「ホラ、お前の分」

「ありがとうございます。ですが、私の分は別に 」

いらない。人でない自分には不要な物だという相棒、アインに良から飲んでおけと手を振って促す。

あれから麻帆良まで直行し、2時過ぎには学園に到着した俺とアキラはその足で報告も兼ねて学園長の下まで向かう運びとなってい

た。

アキラも括り的には一般人に近いとはいえ、魔法生徒の一人だ。状況も状況だし報告の責務は一応にある。が、あってないようなもの、であるが、本人の主張により同席したその場で、俺たちは普通の組織からすれば拍子抜けするほど簡単な事務事項の確認のみで解放された。どのくらいかと言うと、それまで緊張に身を固くしていたアキラが横で思わずコケル程だ。『あい分かった』の一言で済ませて孫の見合い話があるからまた今度とか、それでいいのか近右衛門……まあ、これまでこの学園が無事機能してるんだから、そこらへんは俺が心配する事じゃないのだろう。そこに歯車の一つとして職に就くものとして、不安を拭えるかは別問題だが。

ともかく、その帰りに寮の部屋の前まで送り届けた後、自室 学寮監督室 にてアインに拘束され、説教を聞かされること小一時間、やっと解放されたと思ったらこう、迷惑をかけた先生方への挨拶回りという訳だ。

正直、明日でもよくな？ と思うのだが 冗談です。冗談だからそんな武器転送する時みたいに魔力練りだすなよ頼むから！

「ふう……取あえず今日の所はこれくらいか」

「まだ、エヴァンジェリンさんの所に向かう予定ですが……まさか、忘れていたわけではありませんよね？」

「ははは 何を馬鹿な。お礼も兼ねて師匠に顔を見せに行くのは当然ジャナイカ」

……忘れていたわけではない。ただ忘れたかっただけだ。

あの場に師匠こと、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが来たという事は、俺が禁を破ったことがばれた訳で……加えて、勝つどころか苦戦、敗色濃厚だった日には 想像もしたくない。

「なあ、もう放課後で師匠にも予定があるだろうし、会いに行くのはまた今度という事で」
「ダメです」

即答である。

この従者、少しは主に対する思いやりというモノがないのだろうか？

「麻帆良に着いたらその日の内に連れてきて欲しいと言われてます。あと、怪我が治っていようとまいと、問答無用で引きずってこいよ」

「引きずってって……あのな、俺一応お前の主人なんだけど」

「……Masterの師に当たるとなれば、私にとっても上司のようなものですので……選択肢がありません。諦めてください」

しばらく会っていないうちに、こいつの俺に対する扱いがひどくなっていないだろうか？ いや、前からそんな感じはあったけど、なんか京都に向かうのでドタバタしていて記憶戻ってからあまり話せていなかったが……うん、やっぱり以前より輪を掛けてひどくなっているだろうこれは。

「あ！ おと っと、鳴守先生！」

などと、エヴァンジェリン もとい、師匠の下へ行こうと麻帆良の外れ、郊外の森の一角に建てられているログハウスを目指している、聞き覚えのある声に呼び止められる。この声は

「お、神楽坂達か久々だな。ん？　こういう場合はただいまなのか？」

世界樹広場、そこには明日菜と木乃香のいつもの二人、その中に刹那が加わっているのは良い関係が築けているのだろう。

そこには安心した。実際、戻ってくるまで気になっていた事の一つではあったわけだし。刹那の事だ、今回の失態の責任とかなんとか言って一悶着あったのだろう。

まあ、それはそれとして

「なんか、メンバーが増えてにぎやかになったな。いや、仲がいい事は良いんだが」

その他にもまき絵と古の二人、そしてその二人に介抱されているネギ先生。

基本的に仲のいい3-Aなのでこの面子でもなんら不思議はないのだが、賑やかになりだしたばかりのこの放課後の時間に私服姿のネギというのも珍しい。

しかも、その彼が何故か半ミイラ化しているというのだから、珍しいを通り越していつそ怪奇現象の域だ。当然コレを見て何と問わないのは困難を極める。ほぼ、というか間違はなく、面倒事の気配が漂っているが、こうして呼び止められた以上、見なかったことにするにはもう手遅れだった。

「ああ、ネギがくーちゃんに弟子入りしたいって言い出してね。私達はその見学」

「兼、応援隊つてとこや」

なるほど。

そういえば古菲は中国武術研究会の部長を務めていた筈だ。運動部、特に格闘系の部活の人間に強く慕われているとも聞いている。肉地面、接近戦に対する修練という意味で、型にあった武術を学ぶというのは確かに合理的だろう。加えて、この間の白髪の少年の扱っていた功夫を見るに、ネギにも思うところがあったのだろう。だが

「先生、音来さんは……今日戻られたのですか？」

「ああ、明日から復職だよ。しばらく他の先生たちにも迷惑をかけたいたからな、こつちに着いたのが午後だったから今は回れる範囲で挨拶に回ってたところなんだが……弟子入りは解るとして、なんでネギはあんなやつれているんだ？」

放課後の広場の一角を陣取ってピクニック……も無いだろう。確かにシートは敷かれているし、豪華な弁当が拡げられているが……それで何故ネギがヒョロヒョロのガリガリになっているのか皆目見当がつかない。というか、どうやったら人間はここまでやせ細れるんだらうかという人体の神秘？ 的な物に考えを置きそうになる。そもそもここまでいけば餓死寸前の重体者にも見えなくもい
かん、脱線してきた。

「あ　あはは、じ、実はねー……」

経緯説明中

「は？　し　じゃない、エヴァンジェリンに弟子入り？」

「そう、この間の件でもっと強くなりたいうって魔法面でエヴァちゃんに、あの白髪のがキが使ってたっていう拳法？　がくーちゃんが使ってるのと似てるっていうからお願ひしたらしいんだけど……」

当初、魔法使いとしての未熟を思い知ったネギは強さを求めてまず、エヴァンジェリンに弟子入りを志願したらしい。その申し出に性に合わんと一蹴した我が師匠であるが……明日菜の物理的なツツコミとネギの熱意に折れ、今度の土曜日にテストをするという妥協案を提示してくれたそう。

などと、ここまでなら何の問題も無かったのだが

「なるほどね。中国拳法の修練している所をエヴァンジェリン見られて一悶着と……そら、あの人ならムカツと来るかもなあ……てか、ヤキモチかよ」

普段は唯我独尊を地でいく彼女であるが、あれで結構可愛い所がいや、年齢に合わず子供っぽい、もとい少女然とした……違う、てか口を裂けてもそんな事言えるか！

何か別の……そう！　天邪鬼な所がある彼女は、自分に弟子入りを志願しておいて他の人間に師事を仰いでいるというのが気に入らなかつたらしい。

かくして弟子入りテストは内容を変更　元がどうだったか知らないが　弟子をとるかどうかといった軽いものから『茶々丸に一撃入れる』というモノに、日時も日曜の午前0時と変わる運びとなる。

うむ、子供だ。流石に大人げないだろうそれは、年齢500を超えている真祖の吸血鬼の威厳は何処に？

「だよね！　ネギがあんなに真剣に頼んでるっていうのに、ちょっと意地悪が過ぎると思うのよー！」

「ごめんね、ネギ君。私があの時余計な事を言ったから……」

「そんな、元々二人の人に師事してもらおうとした僕の不義が原因ですし、まき絵さんの所為じゃないです！」

まき絵の謝罪を力強く否定する我らがネギ先生。

どうやらその目撃されたという場面にまき絵も居合わせたらしく、ネギとエヴァンジェリン、と言うよりまき絵とエヴァンジェリンの口論の発展が今回のテスト内容変更の直接の引き金らしい。

「ねえ、あんま実感わかないんだけど……茶々丸さんってそんなに強いのか？」

「古菲達は兎も角……明日菜、お前は一度戦ったんだろう？ まあ、その時どこまで加減してたか知らないが はつきり言って修学旅行で出会った鬼たちじゃ話にならないだろうな」

俺の言葉に苦虫を嚙潰したような表情で唸る明日菜。

はつきり言って茶々丸は強い。俺も稽古をつけてもらう際に彼女とは幾度も手合わせをしたが、殺す気で、相手を斃す気で来ると言うのが本気であるというのなら、俺は彼女が全開で戦っているところを見たことがない。

ネギもテスト内容変更時にその一端を味わったらしいが、いくらか手加減されていたのは明白だろう。その事は分かっているし、だからこそこうして稽古により熱心に取り組んでいるのだ。まあ、それでこんなミイラの様になっていては先が思いやられるが……

「ま、俺もエヴァにはこれから礼に行くところだったからな。俺からも言ってみるよ……一応」

「一応って……あんた仮にも男なんだからそこは俺に任せろくらい言ったらどうなのよ」

「いや、俺だって命は惜しいし」

「……Master」

無茶言つな。あのエヴァンジェリンだぞ？

軽い気持ちで意見しようものなら氷漬えいえんのひょうがけが待っている……いや、

まあ努力はしてみる次第であります。はい。

「あの、音来さん……その節は」

「……っと、その話はまた後でな」

古菲は兎も角、まき絵もいる事だしな。

刹那の話を打ち切り、後日あの後の事もお互いに話しておきたいという事で約束を取り付け、アインに促されるようにしてその場を後にする。

ゴクリ

森の中、学園都市という規格外の面積を誇る敷地内で、これだけ広大な森というのは別世界に紛れ込んだような感覚に陥るが、ここはまごう事なき日本であり、俺が訪れた目的である吸血鬼の家があ

る場所でもある。

「……………」

「入らないのですか？ でしたら私がチャームを」

「って、ちょっとまって！ 間を置くという言葉を知らんのか！ てか察しようよ気付こうよ緊張してるんだよ怖いんだよ帰りたいんだよ！ てか依頼終えて帰ってきたっていうのに最後にお仕置が待ってるっていう俺に対して労おうとか気遣おうとか優しさに満ちた気持ちは微塵も無いのかお前はッ！！」

「……………水、飲みますか？」

「いらねえよ！」

なんでこんな冷静なんだよ！

あの真祖の吸血鬼だぞ？ 闇の福音だぞ？ 魔法世界じゃなまはげ的存在の象徴が象徴で終わらず実在して実際に仕置きされるんだぞ？

理不尽だ。

だが、ネギ達にかっこつけた手前このまま立ち去るといふのも

いや、手ではあるといつか、ここはなりふりなんかかまっちゃられないといつか……………痛い思いをすると分かっているのに自ら飛び込む馬鹿はいないだろう？

俺もそんなM的な性分じゃないし、何より明日から復帰すると学園側には伝えてある。何も治ったばかりの怪我を再発、どこるか悪化させる行為を自主的にする必要はないだろう。そう、避けられないというのならせめてそれ相応の準備をして臨むというのが賢い選

扱だと思わないか？

うむ、コレは間違っても現実逃避の類ではなく、仕事にこれ以上支障が出ないようにという言わば生存確率を上げる為の戦略的撤退だ。

「 そうだ。このままバツクレ 」

「 ほう、貴様……私の呼び出しに対して、いい度胸をしているな。それなりに骨身に沁みさせたつもりだったが……調教が足りなかつたかようだな？」

！？

首の骨が、油の切れたブリキのような音をたてた気がした。したというのはその行為を俺が全力で否定しているからだ。

振り返るな俺の身体と、まだ間に合うと、必死に目を耳を逸らそうとしているのに、鍛え上げられたこの体はその近づいてくる足音が誰のものを明確に伝えていた。

「フン……その小さな所は兎も角、こうして来たことに免じて少しは加減してやろうかと思えば そうだな。わざわざ日の終わりに来てくれたんだ、期待に応えるでしょう。今夜はフルコースだ」

此処に死刑宣告がなされた。

何をなどと聞かないでほしい。

どんななんて聞いてくれるな。

怒気を冷気に変えて、それを隠すどころか明確にこちらに向けて放ってくるのだ。……氷漬けくらいならまだ生易しいかもしれない……何せ固まっていればいつの間にか終わっているのだから。いや、下手したら死ぬけど、その生きるか死ぬかのラインを心得ているが

故の生地獄……過去のお仕置の数々が脳裏を過る。

「ま、ちょっと待ってくれ師匠！ 確かに言いつけは守れなかったが、宿讎スグナを留める奴が必要だったわけで、あの場合俺以外に」

「戯け。何のために私が手段を托したと思っっている」

そりゃそうだ。

ダイオラマ魔法球による長期修行、及び必要日数の延長。

魔法に極力頼らない戦闘技術習得・訓練。

リュウケンシユトウ

特に龍化を抑える魔法具“劉リュウケンシユトウ？手套”、アレはエヴァンジェリンのコレクションの中でもかなり高価なマテリアルを使用しているもので、高度なエンチャントも施されているらしい。

それほどの施しを与えられた上での今回のような結果。さらには本来弟子をとらない筈の闇の魔法使いが短期間とはいえ、その経験と知識の一端を施した事がより重くのしかかっている。要約すれば『仮にも私が仕込んでやったんだからさっさとぶち殺して来れんのかこの馬鹿弟子』とかそんな。まあ、俺の不甲斐無さに大層ご立腹なのは理解した。

だが、そこで大人しく頭を垂れたままでいられるのかと言えば話は別だ。何せこっちは説教時間ライフポイントがかかっている。文字通り命に直結しているのだ比喩なしに。

それはもう、ありとあらゆる手を使って弁解弁明をしたさ。あたりまえだろう？

「なあ音来……解りきった事を聞く事ほど無駄な事はないと思わないか？」

だというのに、彼女は見惚れるほど鋭利で滴り落ちる水も凍てつく、氷のように綺麗な笑みを浮かべながら断罪その手の剣を振り上げる。

あ、マジで加減してねえよコレ。

「せ、せめてグーで」

「問答 無用」

この日、麻帆良の郊外から学生達が寝食を過ごす宿舎まで、少年の叫び声が轟いたとかいないとか……

真実を知る者はいない。というか、いない方が幸せなのかもしれない。

取立50回目　〜記録と記憶の果てに〜（後書き）

ふう、やった。やってやった。

久々にギャグっぽい。これまでの雰囲気をいったんうつちやっただよ
うなお話。でもこの過去話はこの作品の根底なので今後も付きまとい
ます。うむ、悩め少年（笑）

そしてすみません。前々から言っていたおまけ回というか、過去編
の裏話を乗せるという話、土壇場でビビってしまったってお蔵入りして
います。内容は主人公の根底に関わるんですが、あまりにやりすぎ
た感があったので……もう少し、話が進んでから打ち明ける事にし
たいです。大丈夫かなこの　話？

さ、さて、ようやく麻帆良に戻って以前から書きたかった学園祭編
が見えてきたと思ったら……そうでした、あのおっさん悪魔の出版
があったんだった。執筆中小説の底の方で出版はまだかと唸ってい
ましたよ（訳：大まかに書いてほったらかし（爆笑））

てなわけです全力加筆中ー、オリキャラも出すかも？
気長に待っていてください。

それでは、いつもの様に、再見！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7036i/>

副担任は借金教師

2011年12月17日06時01分発行